東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 20

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院
基幹整備外構施設等地点

2024

東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 20

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院
基幹整備外構施設等地点

2024

東京大学埋蔵文化財調査室

調査区全景

厩遺構

SU219、SU229、SU280

SU201

SU108

SK173

SK173 土層堆積状況

ST24 上段甕棺検出状況

ST24 下段甕棺検出状況

ST154 火消壺棺検出状況

ST213 蔵骨器検出状況

ST174 蔵骨器検出状況

ST149 埋葬容器廃棄状況

墓壙出土人形・玩具類

墓壙出土火葬蔵骨器

例　　言

1. 本書は、東京大学医学部附属病院基幹整備外構施設等新営に伴う埋蔵文化財発掘報告書である。
2. 本地点の略称は「HWK-6」とする。
3. 調査地点は東京都文京区本郷７丁目３番１号、東京大学本郷構内に所在している。
4. 本地点は「文京区№47本郷台遺跡群（文京区本郷五丁目・本郷七丁目・弥生二丁目、時代：〔旧石器時代〕〔縄文時代〕〔弥生時代〕〔古墳時代〕〔平安時代〕〔近世〕、種別：包蔵地・集落・貝塚・その他の墓・社寺・屋敷・その他（町屋）」内に位置している。
5. 本地点の調査面積は200㎡である。
6. 調査期間は、平成12年（2000）９月11日～11月14日である。
7. 本地点の事前調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、成瀬晃司・追川吉生が担当した。
8. 本書の編集は担当者協議の上、成瀬が行った。
9. 執筆分担は以下の通りである。

   報告編

   第Ⅰ章　成瀬晃司

   第Ⅱ章　成瀬

   第Ⅲ章　成瀬・追川吉生

   第Ⅳ章　大貫浩子（人形・玩具類以外）、小林照子（人形・玩具類）

   小結　成瀬

   研究編

   宮崎勝美、近藤　修　他、成瀬、追川、小林、大貫
10. 宮崎勝美氏には文献調査を委託し、玉稿を頂戴した。記して感謝したい。
11. 出土人骨の分析は、東京大学大学院理学系研究科人類学教室　近藤　修氏に委託した。その成果は入院棟Ａ地点２区の講安寺寺域調査と合わせて『医学部附属病院入院棟Ａ地点　研究編』（2016年刊行）に掲載されているが、本書での再録をご快諾頂いた。記して感謝したい。なお調査時の記載ミスで、以下の遺構番号が誤っていることが確認された。記してお詫びしたい。「表1-2、表3-2、表3-4」、［誤］ST135→［正］ST125
12. 遺構写真は成瀬・追川が、巻頭図版遺物写真は青山正昭が撮影した。
13. 遺物の実測・採拓は、今井雅子、大貫浩子が、デジタルトレース・はめ込み写真撮影及び写真合成は株式会社パスコに委託し、図版作成は今井雅子が行った。遺構図のデジタルトレース及び図版作成は渡邊法彦が行った。
14. 発掘調査に伴う図面、写真、出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス（東京都目黒区駒場4-6-1）、東京大学柿岡教育研究施設（茨城県石岡市八郷町柿岡414）内にて保管、運用、管理している。
15. 本書（pdf形式）及び本調査に関わる遺構写真（jpeg形式）、遺構一覧表（xlsx形式）、遺物観察表（xlsx形式）は、東京大学埋蔵文化財調査室公式Webサイト内「オンライン刊行物」（https://www.aru.u-tokyo.ac.jp/publications.html/）で公開している。
16. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏、機関より御協力・御教示を賜った。記して敬意を表する。（敬称略、五十音順）

    株式会社大林組、加藤建設株式会社、株式会社パスコ、講安寺、興安寺、高島裕之、東京大学施設部、東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室、同理学系研究科人類学教室、等正寺

発掘調査支援

　加藤建設株式会社

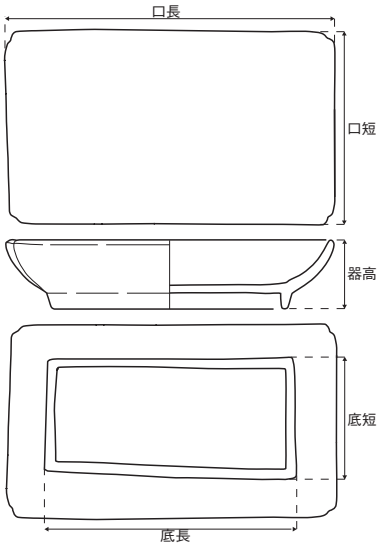
整理作業参加者

　青山正昭　安芸毬子　今井雅子　大貫浩子　香取祐一　北島くりか　小林照子　坂野貞子　杉浦あかね　田中美奈子　渡邊法彦（埋蔵文化財調査室）

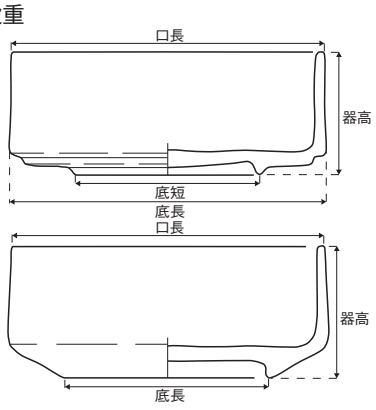
凡　　例

1. 本文中に記載した遺構の略号は以下の通りである。
   SB：建物跡　SD：溝　SK：土坑　SP：小穴　ST：墓壙　SU 地下室　SX：性格不明遺構
2. 遺構実測図の縮尺は、各々の図版に記した。
3. 遺物実測図は基本的に 1/3 であるが、それ以外は個別に示す。
4. 遺構断面図に記載された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、基標番号「郷（2）」本郷七丁目 3　東大赤門前（T.P.：23.4105 m）から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお「郷（2）」の値は、平成 12 年 7 月東京都土木技術センター（現：東京都土木技術支援・人材育成センター）刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。
5. 墓壙平面図に印した灰色矢印は、埋葬方向を示す。
6. 遺物図版に使用している記号は、以下のことを示している。
   ・▲は、高台、見込みなどの釉際を表している。
   ・＼――／は、口唇部の口銹を表している。
   ・遺物中心線上下の破線は、それぞれ推定口径、推定底径を表している。
   ・－　－は、断面を表している。
7. 本文中に記載した遺物分類のうち、陶磁器・土器類は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類」（いわゆる東大分類）の最新バージョン（Ver4.1）である『医学部附属病院入院棟 A 地点』で示した分類（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）に、人形・玩具類は「東京大学構内遺跡出土土人形・玩具の分類」（安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2012）に、瓦類は「御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」（加藤・金子 1990）に、常滑系陶器大甕については「東叡山寛永寺護国院墓地跡の調査と成果」（惟村 2004）に準拠している。
8. 本地点の調査で用いたグリッドは、医学部附属病院第 2 中央診療棟地点調査で設定したグリッドを延長させ、南北軸（X 軸）に算用数字、東西軸（Y 軸）にアルファベットをあて、北西角交点をグリッド名称とする 5m グリッドを設定した。そのため東西軸 A 以北は b から続く英小文字を北方向へ付した。第 2 中央診療棟地点南北軸は方眼北より 7 秒西偏し、A1 グリッド杭は、X = -32044.201、Y = -6202.147 に位置する。従って本調査区 d36 グリッド杭は、X = -32029.195m、Y = -6027.143 に位置する。
9. 遺構平面図に記載した方位記号は、平面直角座標系による方眼北を示し、真北より 2 分 20 秒西偏している。

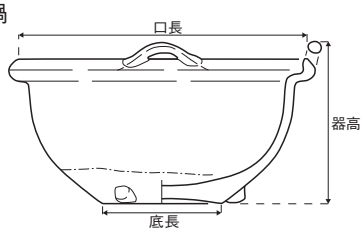
変形皿



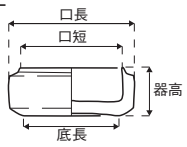
段重



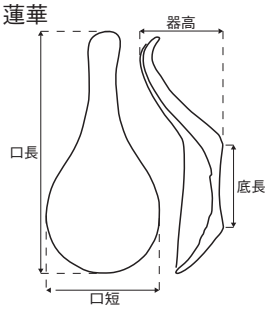
鍋



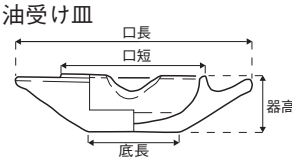
合子



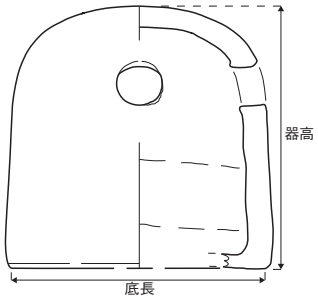
蓮華



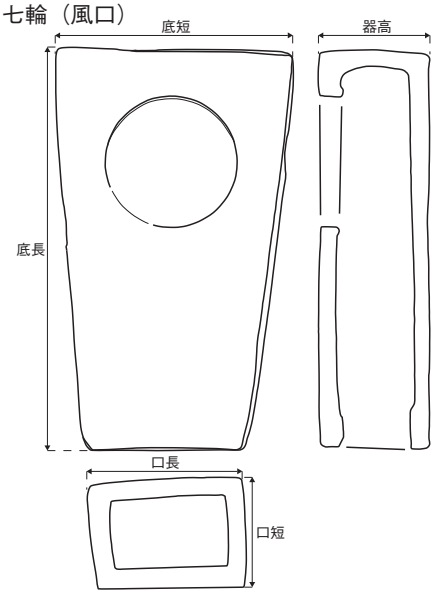
油受け皿



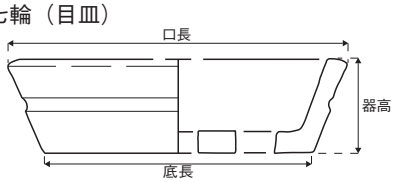
手焙り



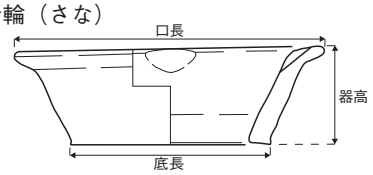
七輪（風口）



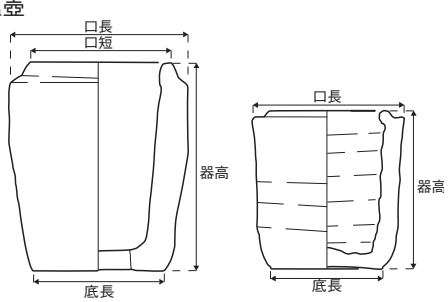
七輪（目皿）



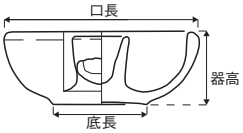
七輪（さな）



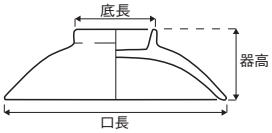
塩壺



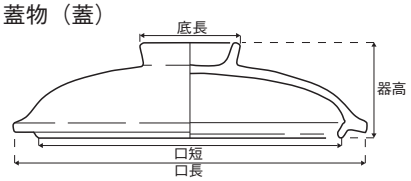
ひょうそく



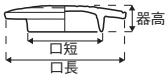
碗（蓋）



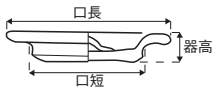
蓋物（蓋）



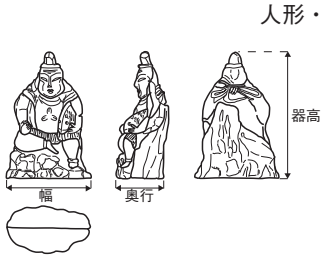
壺・甕（蓋）1

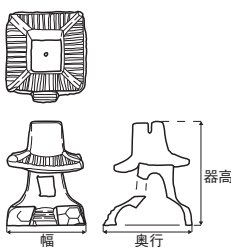


壺・甕（蓋）2

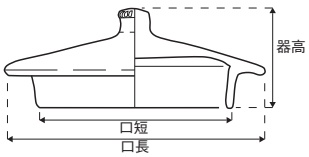


人形・玩具

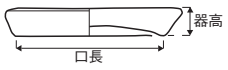




土瓶（蓋）

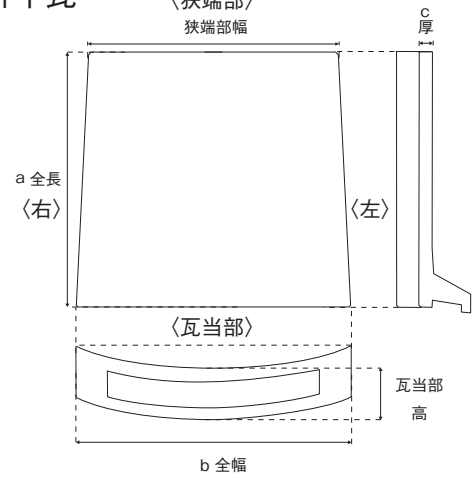


塩壺（蓋）

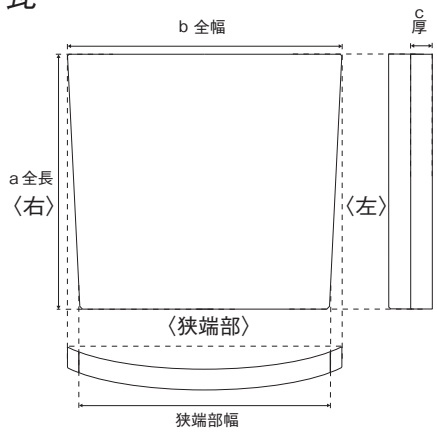


磁器・陶器・土器・人形・玩具　凡例

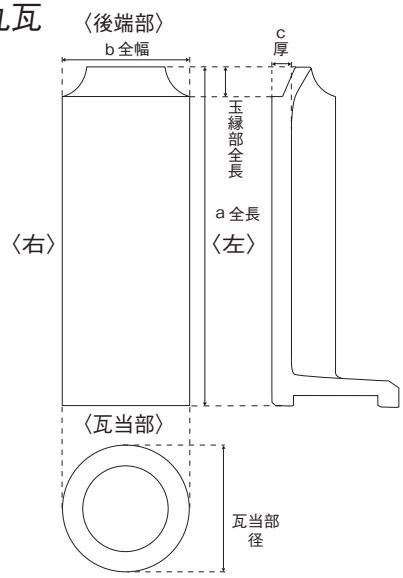
軒平瓦



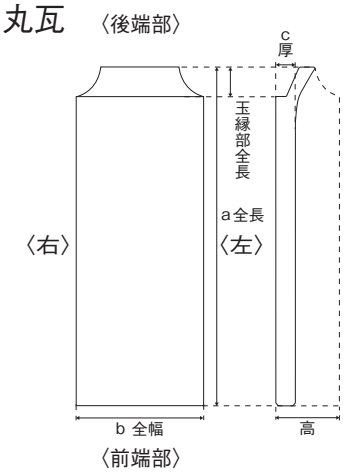
平瓦



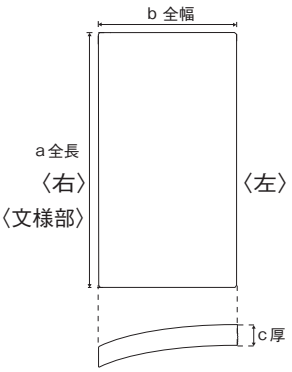
軒丸瓦



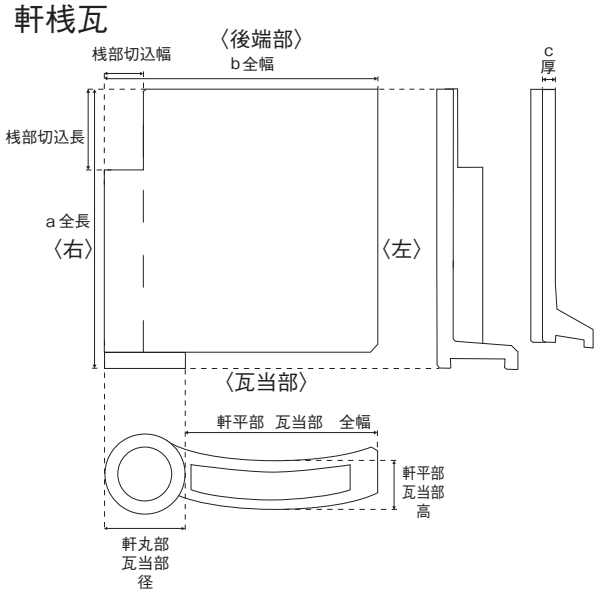
丸瓦



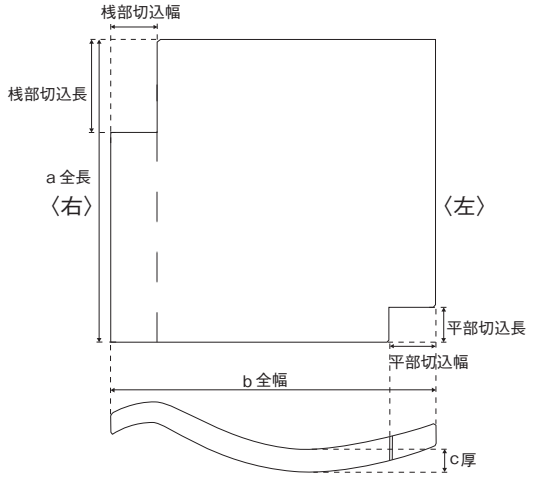
熨斗瓦



軒桟瓦

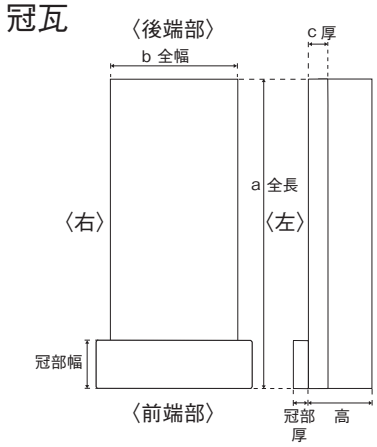


桟瓦

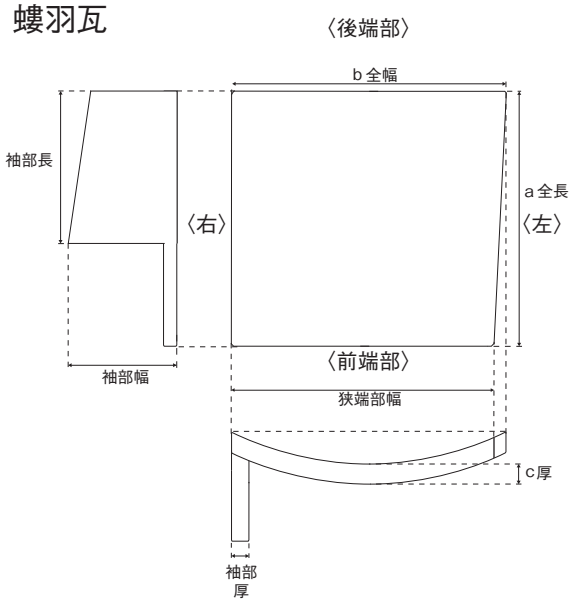


瓦凡例(1)　軒平瓦、平瓦、軒丸瓦、丸瓦、熨斗瓦、軒桟瓦、桟瓦

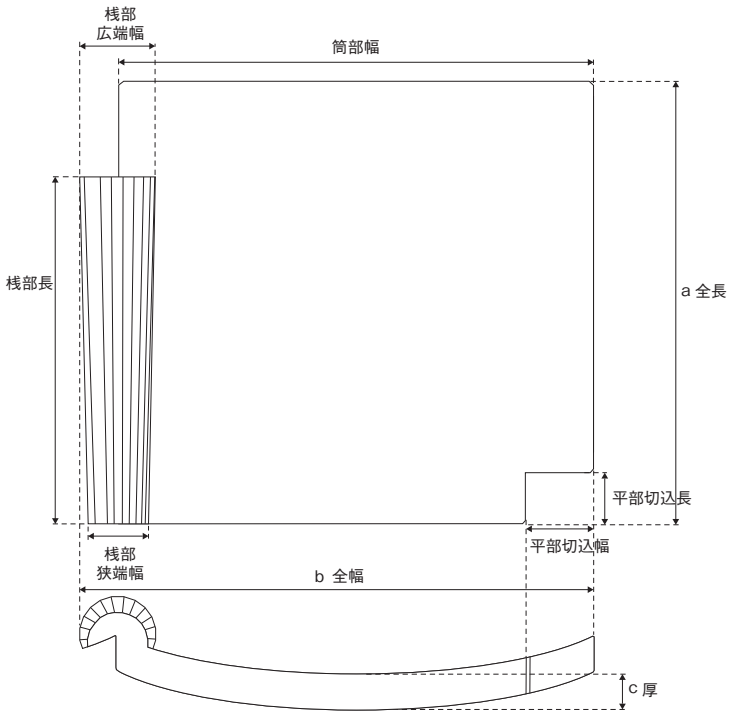
冠瓦



螻羽瓦



蝋燭桟瓦



瓦凡例(2)　冠瓦、螻羽(けらば)瓦、蝋燭桟瓦

東京大学本郷構内の遺跡
医学部附属病院基幹整備外構施設等地点発掘調査報告書

目　　次

巻頭図版
例　　言
凡　　例
目　　次
遺構一覧表

報 告 編

第Ⅰ章　調査地点の位置と環境

第１節　調査地点の位置と周辺遺跡 …… 3
第２節　地理的・歴史的環境 …… 4

第Ⅱ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯 …… 7
第２節　調査の方法と経過 …… 7
第３節　調査の概要 …… 7

第Ⅲ章　検出された遺構

第１節　Ⅰ期の遺構 …… 9
第２節　Ⅱ期の遺構 …… 24

第Ⅳ章　出土遺物 …… 93

補論　常滑焼大甕の刻印について …… 196
陶磁器・土器類組成表 …… 198

小結 …… 204

墓壙一覧表 …… 206
陶磁器・土器類、人形・玩具類分類コード …… 210
参考文献 …… 219

研究編

研究１　文献・絵図史料からみた湯島講安寺の土地利用　宮崎勝美 …… 223

研究２　東京大学構内遺跡講安寺墓域（2区／HWK-6）より出土した江戸時代人骨（再録）
近藤　修・佐宗亜依子・石井理子・佐々木智彦・荒牧友美 …… 243

研究３　富山藩邸における講安寺からの借地部分の空間利用
－医学部附属病院基幹整備外構施設等地点を中心に－　追川吉生 …… 261

研究４　墓壙属性からみた墓地空間の諸相　成瀬晃司 …… 269

研究５　医学部附属病院基幹整備外構施設等地点（HWK-6）の墓を蔵骨器を中心に考察する
大貫浩子 ……289

研究６　副葬品としての人形・玩具　小林照子 …… 299

報告書抄録

遺構一覧表（1）

種別	遺構番号	グリッド	帰属段階	遺構図版	遺物図版	新旧	備考
SK	1	c37・d37	Ⅱ期？	Ⅲ-22			
欠番	2						
SK	3	c37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SK	4	c37	Ⅱ期	Ⅲ-23	Ⅳ-1	＞42	
SK	5	c37・d37	Ⅱ期	Ⅲ-22		9＞、＞74	
欠番	6						
ST	7	c37	Ⅱ期	Ⅲ-37	Ⅳ-1	＞75	
ST	8	c37・d37	Ⅱ期	Ⅲ-39	Ⅳ-2	＞65	
ST	9	c37	Ⅱ期	Ⅲ-38	Ⅳ-2	5＞	
ST	10	c37	Ⅱ期	Ⅲ-40			
SK	11	c37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SK	12	c37	Ⅰ期	Ⅲ-1			
ST	13	b36・c36	Ⅱ期	Ⅲ-42	Ⅳ-2		
SP	14	b37・c37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SK	15	c36・c37・d36・d37	Ⅱ期	Ⅲ-22		16＞、＞17、50	
ST	16	c36・d36	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞15、17	
SP	17	c36・d36	Ⅱ期？	Ⅲ-22		16＞	
欠番	18						
欠番	19						
SK	20	d37	Ⅱ期？	Ⅲ-22		1＞	
ST	21	c38	Ⅱ期	Ⅲ-43		＞110	
ST	22	b38・c38	Ⅱ期	Ⅲ-41	Ⅳ-3		
ST	23	c38	Ⅱ期	Ⅲ-44			
ST	24	c38	Ⅱ期	Ⅲ-47	Ⅳ-4～7		
ST	25	b38	Ⅱ期	Ⅲ-45	Ⅳ-7		
ST	26	b38	Ⅱ期	Ⅲ-46	Ⅳ-8	＞96	
ST	27	A38	Ⅱ期	Ⅲ-48	Ⅳ-8		
SP	28	b38	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞29	
SK	29	b38	Ⅱ期	Ⅲ-49		28＞、＞30、105、106	
ST	30	b38	Ⅱ期	Ⅲ-49		29＞、＞31・32	
ST	31	b38	Ⅱ期	Ⅲ-49	Ⅳ-9	30＞、＞32	
ST	32	b38	Ⅱ期	Ⅲ-49		30、31＞	
SK	33	A38	Ⅱ期	Ⅲ-24			
ST	34	c37	Ⅱ期	Ⅲ-51	Ⅳ-9	＞110、147	
ST	35	A38	Ⅱ期	Ⅲ-50		＞36、117	
ST	36	A38	Ⅱ期	Ⅲ-50	Ⅳ-9	35＞	
ST	37	b38	Ⅱ期	Ⅲ-52			
SP	38	b38・A38	Ⅱ期	Ⅲ-36		＞88	
ST	39	A38	Ⅱ期	Ⅲ-53	Ⅳ-9	＞40	
ST	40	A38	Ⅱ期	Ⅲ-53	Ⅳ-10	39＞	
SK	41	b37・c37	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞42	
ST	42	c37	Ⅱ期	Ⅲ-54		4、41＞	
SP	43	A37	Ⅰ期	Ⅲ-2			建物跡1
ST	44	B37	Ⅱ期	Ⅲ-55			
SK	45	d37	Ⅰ期	Ⅲ-4		296新旧不明	
SK	46	c36	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞47	
SK	47	c36・c37	Ⅱ期	Ⅲ-22		46＞、＞48、49	
ST	48	c36	Ⅱ期	Ⅲ-56		47＞、＞49	
ST	49	c36・c37	Ⅱ期	Ⅲ-56	Ⅳ-10	47、48＞	
ST	50	c36	Ⅱ期	Ⅲ-57	Ⅳ-10	15＞	
ST	51	b37・A37	Ⅱ期	Ⅲ-59	Ⅳ-11	＞52	
ST	52	b37・A37	Ⅱ期	Ⅲ-59	Ⅳ-11	51＞	
SK	53	c37	Ⅱ期？	Ⅲ-22		＞247	
SK	54	d37	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞45	
SK	55	c36	Ⅰ期？	Ⅲ-1		56＞	
SK	56	c36	Ⅰ期？	Ⅲ-1		＞55	
欠番	57						
SK	58	A37	Ⅱ期	Ⅲ-22			
ST	59	B37・C37	Ⅱ期	Ⅲ-60		＞123、181	
SP	60	A36	Ⅰ期	Ⅲ-1			建物跡1
ST	61	b37	Ⅱ期	Ⅲ-58	Ⅳ-12		

遺構一覧表（2）

種別	遺構番号	グリッド	帰属段階	遺構図版	遺物図版	新旧	備考
SP	62	A36	Ⅰ期	Ⅲ-7		63＞	既遺構
SK	63	A36・B36	Ⅱ期	Ⅲ-25		＞62	
SP	64	b37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
ST	65	c37	Ⅱ期	Ⅲ-61		8＞、＞128、236	
SK	66	A36	Ⅰ期？	Ⅲ-1		＞67	
SK	67	A36	Ⅰ期？	Ⅲ-1		66＞	
ST	68	B36	Ⅱ期	Ⅲ-22			
ST	69	b37	Ⅱ期	Ⅲ-62			
SK	70	b37	Ⅱ期	Ⅲ-26	Ⅳ-12・13		
SK	71	b37	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞218	
ST	72	A36・A37	Ⅱ期	Ⅲ-63	Ⅳ-13		
SK	73	c37・d37	Ⅱ期	Ⅲ-27			
SK	74	c37	Ⅰ期？	Ⅲ-1		5＞	
SK	75	c37	Ⅰ期？	Ⅲ-1		7＞	
ST	76	B36	Ⅱ期	Ⅲ-64	Ⅳ-14		
SK	77	c37・c38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SK	78	c37	Ⅱ期？	Ⅲ-22		＞247	
SK	79	c37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SK	80	c36	Ⅱ期？	Ⅲ-22			
SP	81	A38	Ⅰ期	Ⅲ-2		39、40＞、＞82	建物跡1
SP	82	A38	Ⅰ期	Ⅲ-2		81＞	建物跡1
ST	83	b38	Ⅱ期	Ⅲ-65	Ⅳ-14	84、175＞	
ST	84	b38	Ⅱ期	Ⅲ-65		175＞、＞83	
ST	85	c38	Ⅱ期	Ⅲ-67	Ⅳ-14		
SK	86	A38	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞97	
ST	87	b38	Ⅱ期	Ⅲ-69	Ⅳ-14・15	＞179	
ST	88	b38・A38	Ⅱ期	Ⅲ-69	Ⅳ-16	38＞	
SK	89	A38	Ⅰ期？	Ⅲ-1		＞223	
ST	90	b38	Ⅱ期	Ⅲ-66	Ⅳ-16	＞96	
SP	91	A38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SK	92	b38	Ⅱ期	Ⅲ-28			
SP	93	A38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	94	b38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	95	A38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
ST	96	b38	Ⅱ期	Ⅲ-68		26、90＞	
ST	97	A38	Ⅱ期	Ⅲ-70	Ⅳ-17・18	86＞	
ST	98	b38	Ⅱ期	Ⅲ-71	Ⅳ-18	＞113	
SK	99	b38	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞100、102	
SK	100	b38・c38	Ⅱ期？	Ⅲ-22		99＞	
ST	101	b37・b38	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞102	
SK	102	b38	Ⅱ期	Ⅲ-22		99、101＞	
SK	103	b38	Ⅱ期	Ⅲ-22		111＞	
ST	104	c38	Ⅱ期	Ⅲ-72		＞110	
SK	105	b38	Ⅱ期	Ⅲ-29	Ⅳ-19	29＞、＞106、107、111、112	
ST	106	b38	Ⅱ期	Ⅲ-74	Ⅳ-20	29、105＞	
SK	107	b38	Ⅰ期？	Ⅲ-1		106＞	
SU	108	A37・A38	Ⅰ期	Ⅲ-13	Ⅳ-20	97＞	
SK	109	c38	Ⅰ期？	Ⅲ-1		23＞	
SK	110	c37・c38・d37・d38	Ⅱ期	Ⅲ-30	Ⅳ-21～25	21、34＞、＞114、115、116、117	
ST	111	b38	Ⅱ期	Ⅲ-75	Ⅳ-25	105、112＞、＞103	
ST	112	b38	Ⅱ期	Ⅲ-75		105＞、＞111	
ST	113	b38	Ⅱ期	Ⅲ-76	Ⅳ-25	98、172、174、178＞	
SK	114	c37・c38・d37・d38	Ⅰ期	Ⅲ-5	Ⅳ-22～25	21、110、115、116、117＞、＞221、227、235	
ST	115	c38	Ⅱ期	Ⅲ-77	Ⅳ-26	110＞	
ST	116	c38・d38	Ⅱ期	Ⅲ-78	Ⅳ-26	110＞	
ST	117	c38	Ⅱ期	Ⅲ-79		110＞	
SP	118	c38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
ST	119	A38	Ⅱ期	Ⅲ-80	Ⅳ-26・27	120＞	
ST	120	A38	Ⅱ期	Ⅲ-80		＞119	
ST	121	c37	Ⅱ期	Ⅲ-81		＞220	
SK	122	c37・d37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			

遺構一覧表（3）

種別	遺構番号	グリッド	帰属段階	遺構図版	遺物図版	新旧	備考
SK	123	B37・C37	Ⅱ期	Ⅲ-31	Ⅳ-27	59＞、＞125、195	
SK	124	A36・B36	Ⅰ期	Ⅲ-7			既遺構
ST	125	B37・C37	Ⅱ期	Ⅲ-82	Ⅳ-28	123＞、＞195	
ST	126	b37	Ⅱ期	Ⅲ-83			
欠番	127						
ST	128	c37	Ⅱ期	Ⅲ-73	Ⅳ-28	65＞	
ST	129	b36	Ⅱ期	Ⅲ-84	Ⅳ-28・29	＞156	
ST	130	b37	Ⅱ期	Ⅲ-85		＞139	
ST	131	c36・c37	Ⅱ期	Ⅲ-86	Ⅳ-29	148 新旧不明	
SK	132	B37	Ⅰ期	Ⅲ-7			既遺構
ST	133	B36・B37	Ⅱ期	Ⅲ-87	Ⅳ-29	＞134	
SK	134	B36	Ⅱ期？	Ⅲ-22		133＞	
SK	135	A36	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞137	
ST	136	c37	Ⅱ期	Ⅲ-88		＞147	
SK	137	A36	Ⅰ期？	Ⅲ-1		135＞	
SP	138	b37	Ⅰ期？	Ⅲ-1		＞219	
SK	139	b37	Ⅱ期？	Ⅲ-22		130＞	
ST	140	b37	Ⅱ期	Ⅲ-90	Ⅳ-30・31		
SK	141	B37	Ⅰ期	Ⅲ-6	Ⅳ-31	＞142	
SK	142	B37	Ⅰ期	Ⅲ-6	Ⅳ-31	141、143＞	
SK	143	B37	Ⅰ期	Ⅲ-6	Ⅳ-31	＞142	
ST	144	C37	Ⅱ期	Ⅲ-89			
ST	145	A37	Ⅱ期	Ⅲ-93	Ⅳ-32	＞268	
ST	146	c37	Ⅱ期	Ⅲ-94	Ⅳ-32	149 新旧不明	
ST	147	c37	Ⅱ期	Ⅲ-88	Ⅳ-33	136＞	
ST	148	c36・c37	Ⅱ期	Ⅲ-86		131 新旧不明	
ST	149	c37	Ⅱ期	Ⅲ-95	Ⅳ-33・34	146 新旧不明	
SP	150	A37	Ⅰ期	Ⅲ-2			建物跡 1
SU	151	A36・A37・B36・B37	Ⅰ期	Ⅲ-14	Ⅳ-34 ～ 37		
SP	152	b37	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞153	
ST	153	b37	Ⅱ期	Ⅲ-97	Ⅳ-37	154、152＞、＞155、199	
ST	154	b37	Ⅱ期	Ⅲ-97	Ⅳ-38	＞153、155	
ST	155	b37	Ⅱ期	Ⅲ-97	Ⅳ-38	154、153＞、＞199	
SU	156	b36・A36	Ⅰ期	Ⅲ-15	Ⅳ-39		
SB	157	B37・B38	Ⅰ期	Ⅲ-2		173＞	建物跡 2
欠番	158						
欠番	159						
ST	160	b36・b37・A36・A37	Ⅱ期	Ⅲ-96	Ⅳ-39		
SP	161	c38	Ⅱ期？	Ⅲ-22			
SP	162	B38	Ⅰ期	Ⅲ-2		＞163	建物跡 1
SX	163	A38・B38	Ⅰ期	Ⅲ-21	Ⅳ-39	162＞	
SP	164	B38	Ⅰ期	Ⅲ-7			既遺構
SX	165	B38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	166	B38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SK	167	A38	Ⅰ期	Ⅲ-8	Ⅳ-40	120、119、177＞、＞169	
SP	168	B38	Ⅰ期	Ⅲ-1			
SP	169	A38	Ⅰ期	Ⅲ-2		88、120、167＞	建物跡 1
SK	170	B38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SK	171	b38	Ⅱ期	Ⅲ-32	Ⅳ-40	＞29、176	
SK	172	b38	Ⅱ期	Ⅲ-22		98＞、＞113	
SK	173	B37・B38	Ⅱ期	Ⅲ-33	Ⅳ-41 ～ 49	＞157、237、248、249、250	
ST	174	b38	Ⅱ期	Ⅲ-98	Ⅳ-50	＞113、178	
ST	175	b38	Ⅱ期	Ⅲ-100	Ⅳ-50	171＞、＞83、84、176	
ST	176	b38	Ⅱ期	Ⅲ-100	Ⅳ-50	84、171、175＞	
ST	177	A38	Ⅱ期	Ⅲ-99	Ⅳ-50	35＞、＞230	
ST	178	b38	Ⅱ期	Ⅲ-91	Ⅳ-51	174＞、＞113	
SP	179	b38・A38	Ⅰ期	Ⅲ-1		87＞	
ST	180	b38	Ⅱ期	Ⅲ-101	Ⅳ-51		
ST	181	B37・C37	Ⅱ期	Ⅲ-60	Ⅳ-51	59＞	

遺構一覧表（4）

種別	遺構番号	グリッド	帰属段階	遺構図版	遺物図版	新旧	備考
欠番	182						
ST	183	A37	Ⅱ期	Ⅲ-92	Ⅳ-52		
ST	184	A36	Ⅱ期	Ⅲ-102			
欠番	185						
ST	186	b37	Ⅱ期	Ⅲ-103	Ⅳ-52・53		
ST	187	b36・b37・c36・c37	Ⅱ期	Ⅲ-105	Ⅳ-53	＞287	
SK	188	b37	Ⅰ期？	Ⅲ-1		＞280	
SK	189	b36・b37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	190	A37	Ⅰ期	Ⅲ-2			建物跡1
SP	191	A37	Ⅰ期	Ⅲ-1			
SK	192	A37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
欠番	193						
SP	194	A37	Ⅱ期？	Ⅲ-22		＞198	
ST	195	B37・B38・C37	Ⅱ期	Ⅲ-107	Ⅳ-53	123，125、196＞	
ST	196	B37・B38・C37・C38	Ⅱ期	Ⅲ-107	Ⅳ-54	＞195、281	
SK	197	C37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
ST	198	A37	Ⅱ期	Ⅲ-106		194＞	
ST	199	b37	Ⅱ期	Ⅲ-97	Ⅳ-54	153、155＞	
欠番	200						
SU	201	A36	Ⅰ期	Ⅲ-16	Ⅳ-54・55	203＞	
欠番	202						
SK	203	A36	Ⅱ期	Ⅲ-34		＞201	
欠番	204						
SP	205	b36・b37	Ⅰ期	Ⅲ-2			建物跡1
SK	206	b37	Ⅰ期	Ⅲ-1		199＞	
ST	207	A37	Ⅱ期	Ⅲ-108	Ⅳ-55		
SK	208	b37	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞209、216	
SK	209	b37	Ⅱ期	Ⅲ-22		208＞	
SK	210	c37	Ⅱ期？	Ⅲ-22		＞214、220	
SK	211	c36	Ⅱ期？	Ⅲ-22			
SK	212	A37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
ST	213	b37・A37	Ⅱ期	Ⅲ-104	Ⅳ-55・56		
SK	214	c37	Ⅱ期	Ⅲ-22		210＞	
SK	215	b37	Ⅱ期？	Ⅲ-22		＞219	
ST	216	b37	Ⅱ期	Ⅲ-109	Ⅳ-56	208＞	
SP	217	b37	Ⅰ期	Ⅲ-2		218、219＞	建物跡1
ST	218	b37	Ⅱ期	Ⅲ-111	Ⅳ-57	＞217、219	
SU	219	b37	Ⅰ期	Ⅲ-17	Ⅳ-58・59	218＞、＞217	
SK	220	c37	Ⅰ期？	Ⅲ-1		121、210＞	
SK	221	c38・d38	Ⅰ期	Ⅲ-1		114、115、116＞	
欠番	222						
SP	223	A38	Ⅰ期	Ⅲ-2	Ⅳ-60	89＞	建物跡1
ST	224	b38	Ⅱ期	Ⅲ-110	Ⅳ-60	＞225	
ST	225	b38	Ⅱ期	Ⅲ-110	Ⅳ-60	224＞	
SD	226	B37・B38	Ⅰ期	Ⅲ-3		173＞、＞既遺構	
SU	227	c37・c38・d37・d38	Ⅰ期	Ⅲ-18	Ⅳ-60	114、117＞	
SP	228	A38	Ⅰ期？	Ⅲ-1		＞233	
SU	229	b38・A38	Ⅰ期	Ⅲ-19	Ⅳ-61	＞280	
ST	230	A38	Ⅱ期	Ⅲ-99		177＞	
SK	231	b38	Ⅰ期	Ⅲ-1			
SK	232	A38	Ⅰ期	Ⅲ-9	Ⅳ-62	97＞	
SK	233	A38	Ⅰ期	Ⅲ-1		228＞	
SK	234	B38	Ⅰ期	Ⅲ-1		226＞、＞237	
SK	235	c37・c38	Ⅰ期	Ⅲ-10	Ⅳ-62	114＞	
SK	236	c37	Ⅱ期	Ⅲ-22		65、114＞	
SK	237	B37・B38	Ⅰ期	Ⅲ-7		157、173、226＞	既遺構
SP	238	A38	Ⅰ期	Ⅲ-1		97＞	
SK	239	A38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	240	A38・B38	Ⅰ期	Ⅲ-2			建物跡1
SP	241	A37	Ⅰ期	Ⅲ-2		207＞	建物跡1
欠番	242						
SK	243	b37・c37	Ⅰ期	Ⅲ-1		＞266	

遺構一覧表（5）

種別	遺構番号	グリッド	帰属段階	遺構図版	遺物図版	新旧	備考
SK	244	c37	Ⅱ期	Ⅲ-22		245＞	
ST	245	c37	Ⅱ期	Ⅲ-112	Ⅳ-63	＞244、264	
ST	246	c37	Ⅱ期	Ⅲ-113	Ⅳ-63・64	＞267	
ST	247	c36・c37	Ⅱ期	Ⅲ-115	Ⅳ-64	53、78＞	
ST	248	B38	Ⅱ期	Ⅲ-114	Ⅳ-65	＞173	
ST	249	B38	Ⅱ期	Ⅲ-114	Ⅳ-65	＞173	
ST	250	B38	Ⅱ期	Ⅲ-114		＞173	
SP	251	B38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	252	A37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	253	B38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	254	B38	Ⅰ期？	Ⅲ-1		＞255	
SP	255	B38	Ⅰ期	Ⅲ-7		254＞	既遺構
SK	256	A37	Ⅰ期	Ⅲ-1		＞274	
SP	257	A37	Ⅰ期	Ⅲ-2			建物跡1
ST	258	b37・b38	Ⅱ期	Ⅲ-116	Ⅳ-65・66	＞259、260	
ST	259	b37・b38	Ⅱ期	Ⅲ-116		258＞	
ST	260	b37・b38	Ⅱ期	Ⅲ-116	Ⅳ-66	258＞、＞290	
SK	261	c36・d36	Ⅱ期	Ⅲ-35	Ⅳ-67	302＞	
欠番	262						
ST	263	C37	Ⅱ期	Ⅲ-117	Ⅳ-67・68		
ST	264	c37	Ⅱ期	Ⅲ-120	Ⅳ-69	245、265＞、＞291	
ST	265	c37	Ⅱ期	Ⅲ-118	Ⅳ-68	＞264	
SU	266	c37	Ⅰ期	Ⅲ-20		＞300	
ST	267	c37	Ⅱ期	Ⅲ-121	Ⅳ-68	246＞	
ST	268	A37	Ⅱ期	Ⅲ-122	Ⅳ-68	145＞	
SK	269	b37	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞270	
ST	270	b37	Ⅱ期	Ⅲ-119	Ⅳ-70	269＞	
SK	271	c38	Ⅰ期	Ⅲ-11	Ⅳ-69・70	24＞	
SP	272	c38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	273	c38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SK	274	A37	Ⅰ期	Ⅲ-1		256＞	
SP	275	A37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	276	B38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	277	B38	Ⅰ期	Ⅲ-1		237＞	
SP	278	A37	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SX	279	B37・B38	Ⅰ期	Ⅲ-1		既遺構＞	
SU	280	b37・b38	Ⅰ期	Ⅲ-19	Ⅳ-71・72	219、229＞、 280b＞280a	
ST	281	B38・C38	Ⅱ期	Ⅲ-123	Ⅳ-72・73	196＞	
ST	282	B38・C38	Ⅱ期	Ⅲ-123	Ⅳ-74		
ST	283	B37・C37	Ⅱ期	Ⅲ-124	Ⅳ-73	284＞	
ST	284	C37	Ⅱ期	Ⅲ-124	Ⅳ-75	＞283	
ST	285	C37	Ⅱ期	Ⅲ-125			
ST	286	c36	Ⅱ期	Ⅲ-128	Ⅳ-76	295＞	
SK	287	c36	Ⅰ期	Ⅲ-12		13、48、187、288＞	
SK	288	b36・c36	Ⅰ期？	Ⅲ-1		＞287	
SP	289	B36	Ⅰ期	Ⅲ-2			建物跡2
ST	290	b38	Ⅱ期	Ⅲ-129		260＞	
ST	291	c37	Ⅱ期	Ⅲ-120	Ⅳ-77	264＞、＞298	
欠番	292						
SK	293	c36	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
SP	294	b37・b38	Ⅰ期？	Ⅲ-1			
ST	295	c36	Ⅱ期	Ⅲ-126	Ⅳ-78	＞286	
SK	296	d37	Ⅰ期？	Ⅲ-1		45新旧不明	
SP	297	b37・A37	Ⅰ期	Ⅲ-2		＞287	建物跡1
ST	298	c37	Ⅱ期	Ⅲ-120		291＞	
ST	299	B36	Ⅱ期	Ⅲ-127	Ⅳ-78		
SK	300	c37	Ⅰ期	Ⅲ-1		266＞	
ST	301	B36・B37・C36・ C37	Ⅱ期	Ⅲ-130	Ⅳ-78・79	283新旧不明	
SK	302	c36	Ⅰ期？	Ⅲ-1		＞261	
ST	303	c36	Ⅱ期	Ⅲ-22		＞302	

報　告　編

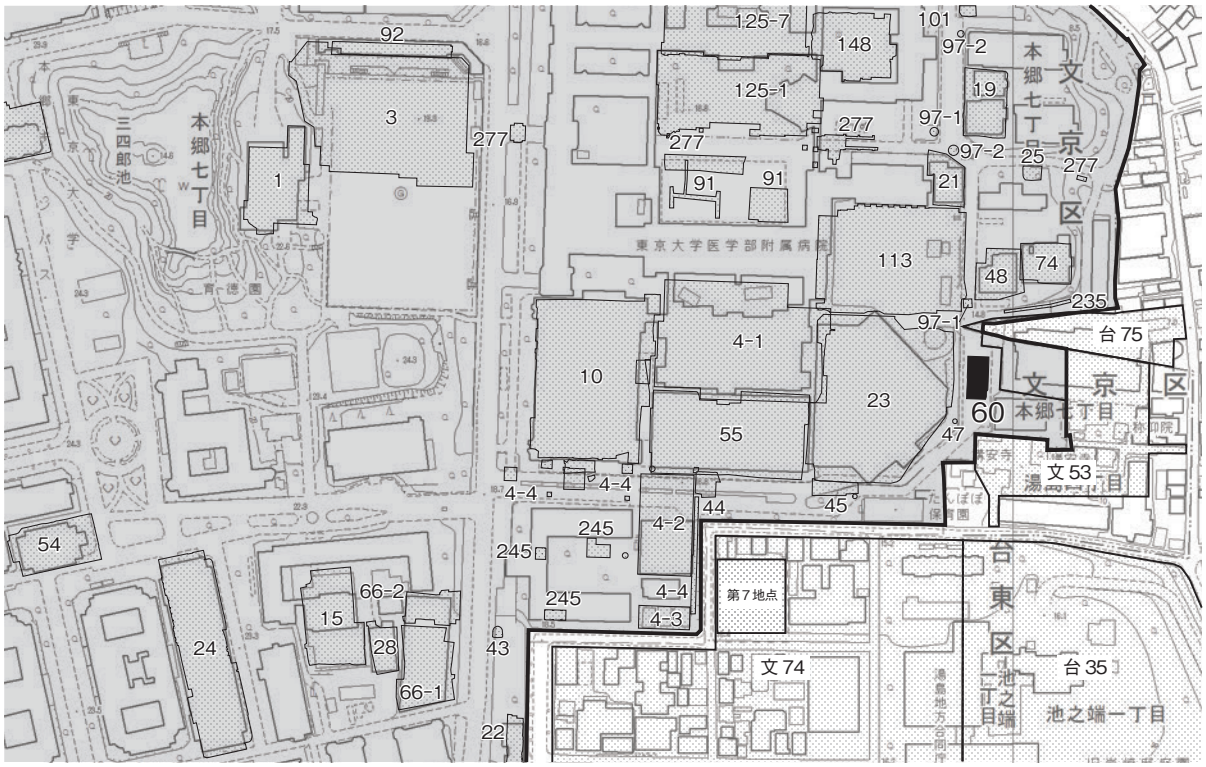
第Ⅰ章　調査地点の位置と環境

第１節　調査地点の位置と周辺遺跡

調査地点は、東京都文京区本郷七丁目３番１号、東京大学本郷キャンパスの東側に拡がる医学部附属病院地区の南東部に位置している。東京大学本郷構内は全域が「文京区 No.47 本郷台遺跡群」内に、浅野地区・弥生地区の一部が「文京区 No.28　弥生町遺跡群」に含まれ、周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている（Ⅰ -1 図）。

本地点が位置する医学部附属病院南東部周辺でこれまで埋蔵文化財調査室が実施した発掘調査は、本地点西側に位置する 23 入院棟 A 地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）、北側の 113 入院棟Ⅱ期地点（同 2015、2017）、48 看護職員等宿舎３号棟地点（同 2021a、2024）、74 看護職員等宿舎５号棟地点（同 2024）、235 看護職員等宿舎５号棟擁壁地点（同 2021c）などがある。本地点北側の調査地点はいずれも入院棟 A 地点で検出された埋積谷北側台地上に位置し、本地点とは小支谷を挟んだ位置関係にある。また大学敷地外では、本地点東側に「台東区 No.75 茅町二丁目遺跡」、「文京区 No.53 湯島両門町遺跡」が近接する（Ⅰ -1 図）。

西側の入院棟 A 地点のほぼ全域は、加賀藩下屋敷（～1682）及び大聖寺藩上屋敷（1683 ～）に該当するが、



世界測地系Ⅸ系
S=1/4000

本郷台遺跡群（文京区 No.47）　文 53 湯島両門町遺跡　文 74 龍岡町遺跡　台 35 茅町遺跡　台 75 茅町二丁目遺跡

東京大学本郷構内の遺跡（60 本調査地点　1 山上会館地点　3 御殿下記念館地点　4-1 中央診療棟地点　4-2 設備管理棟地点　4-3 給水設備棟地点　4-4 共同溝地点　10 外来診療棟地点　15 薬学部南館地点　19 看護職員等宿舎１号棟地点　21 臨床試験棟地点　22 山上会館龍岡門別館地点　23 入院棟 A 地点　24 医学部教育研究棟地点　25 看護師宿舎ゴミ置き場地点　28 薬学部資料館地点　43 HWK-1 地点　44 HWK-2 地点　45 HWK-3 地点　47 HWK-4 地点　48 看護職員等宿舎３号棟地点　54 経済学研究科棟地点　55 第２中央診療棟地点　66 薬学系総合研究棟地点　74 看護職員等宿舎５号棟地点　91 立体駐車場地点　92 学生支援センター地点　97 基幹整備（流域⑧排水）地点　101 ドナルドマクドナルドハウス東大地点　113 入院棟Ⅱ期地点　125 クリニカルリサーチセンター A 棟地点　148 国際科学イノベーション総括棟地点　235 看護職員等宿舎５号棟擁壁地点　245 クリニカルリサーチセンター B 棟地点　277 基幹整備共同溝地点

I-1図　調査地点の位置と周辺の遺跡

調査時に2区とした東端エリアからは多数の墓壙が検出され、大学に隣接する講安寺寺域内に位置することが確認された。埋積谷を挟んだ北側調査地点は江戸時代を通し富山藩上屋敷内に位置する。また台東区忍岡住宅建て替えに伴って調査された「茅町二丁目遺跡池之端一丁目5番地点（本郷台遺跡群・湯島両門町遺跡湯島四丁目12番地点）」（台東区文化財調査会 2005）では、講安寺及び称仰院（旧無縁寺）寺域の一部を調査し、埋積谷沢筋に構築された富山藩邸及び両寺院地境溝が検出され、入院棟A地点で検出された加賀藩邸・講安寺地境施設を合わせ、周辺地域の土地区画状況が明らかになってきている。

第2節　地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

本郷構内全域の地理的環境については鈴木正章（鈴木1989）、阪口豊（阪口 1990）などにおいて詳細に報告されているので、それらを参照されたい。

本調査地点周辺を含む附属病院地区は、武蔵野台地の東端、南北に延びる本郷台下位面東縁、東方の根津谷に向かう緩斜面上に位置する。

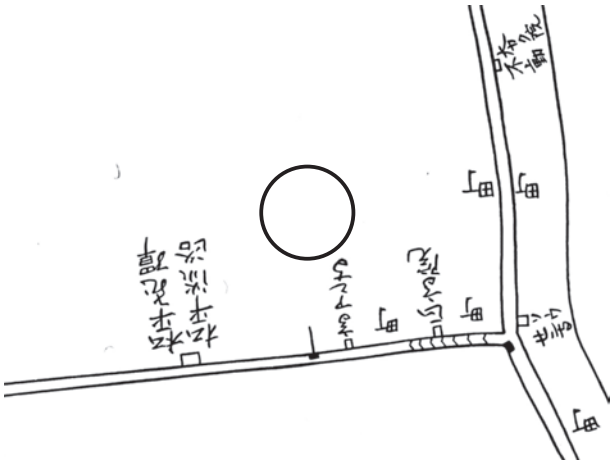
本台地東傾斜面には複数の開析谷が入り込んでおり、そのうちの一筋が本郷構内及び隣接地の発掘調査で明らかになってきている（Ⅰ-1図）。その谷は28薬学部資料館（東京大学埋蔵文化財調査室 2021b）付近を谷頭とし南東方向に進み、徐々に北方向に向けて弓形に曲がり、文74龍岡町遺跡第7地点（大成エンジニアリング2015）で大きく北方向に屈曲して55第2中央診療棟地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2004）を横断し、4-1中央診療棟地点（東京大学遺跡調査室 1990）から徐々に東方向へ向きを変え、23入院棟A地点北半、113入院棟Ⅱ期地点南東端を経て、台75茅町二丁目遺跡・文53湯島両門町遺跡（台東区文化財調査会 2005）を東南東方向に進み不忍池に注いでいたと推定される。各所の調査成果より本支谷は縄文時代晩期までにはほぼ埋積したことが確認された。しかし谷が東流に変化する入院棟A地点北半付近から台地が入り込むように浸食され、谷左岸上に位置する48看護職員等宿舎3号棟地点、74看護職員等宿舎5号棟地点と茅町二丁目遺跡には約3mの比高差が認められ、急崖が形成されていた。一方本地点が位置する南側（右岸）は南方の無縁坂付近までを範囲として緩斜面の拡がりを観ることができる。そのため江戸時代初期には切土、盛土を併用した造成によってひな壇状の平坦面が作り出された。遺構確認面は近代以降の造成によってローム層まで削平され標高約10.2mを測る。近接する23入院棟A地点2区で確認された墓域最終段階の旧地表面標高は約10.7mで本地点とは約50cmの差が認められるが、ローム面は約10.3mで確認されたことからほぼ墓域段階の造成土が削平された状況と推測される。また遺構確認面と周辺現地表面とは約3mの比高差があるが、現況の講安寺東側標高が約10mを示すこと、茅町二丁目遺跡北東端付近の最上段確認面標高が約9mを測ることから、墓域の平均標高は近似していることが確認され、大正元年の東京大学敷地取得時に構内レベルに合わせた造成結果と推測される。

(2) 歴史的環境

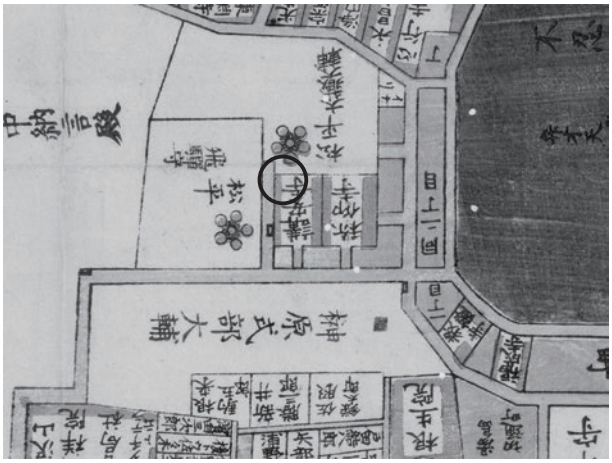
本地点は、江戸時代から明治時代にかけて関東ローム層まで削平されたことから、江戸時代以前の遺構・遺物は確認されていない。前項で触れた埋積谷形成層からは23入院棟A地点、55第2中央診療棟地点、茅町二丁目遺跡・湯島両門町遺跡で縄文時代晩期前半に帰属する土器などが出土している。小破片が比較的広範囲に拡がっていることから二次廃棄の可能性が指摘されているが、それに関連する遺構は検出されていない。埋積谷北側台地縁辺を中心に古墳時代初頭から中期の集落が確認され、現在までに54軒以上の竪穴建物が検出されている。またそれに伴うと考えられる墓域が集落西方に展開していることが確認された。125-1クリニカルリサーチセンターA棟Ⅰ期地点（東京大学埋蔵文化財調査室 2017）で検出された円形または隅丸方形を呈する溝状遺構が古墳周溝跡と考えられる。その後古墳時代後期以降、竪穴建物の検出事例は大幅に減少するが、8世紀頃までは確認されている。中世段階では23入院棟A地点、55第2中央診療地点などで道路状遺構が数条確認されているほか、茅町二丁目遺跡･湯島両門町遺跡、23入院棟A地点、113入院棟Ⅱ期地点では、板碑片が出土している。いずれも原位置を保っていないが、文京区内では大塚周辺とともに板碑出土事例が多い地域である。

江戸時代の本地点は、23入院棟A地点、茅町二丁目遺跡・湯島両門町遺跡の調査成果から、講安寺寺域内に位置することが確認される。講安寺に関する詳細は『医学部附属病院入院棟A地点　研究編』所収の宮崎論考で報告されているのでそれを参照されたい（宮崎2016）。以下、概歴を記す。講安寺は浄土宗寺院で山号を専修山という。正保2年（1645）までは法界寺と称していた。慶長11年(1606)8月25日湯島天神下に創建し、その後、元和2年（1616）8月22日に現地に移転した（Ⅰ-2図a）。同年、開山廻誉上人隠居所として境内に庵

a 明暦 3 年（1657）『明暦江戸大絵図』
（〔公財〕三井文庫所蔵、）

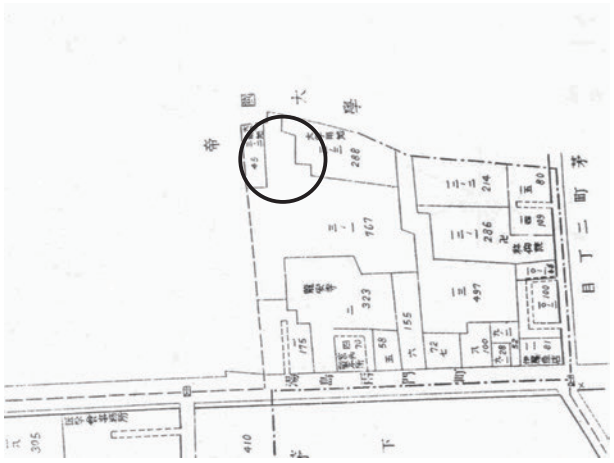


b 寛文 11 年（1671）『新板江戸外絵図』
（国会図書館所蔵）

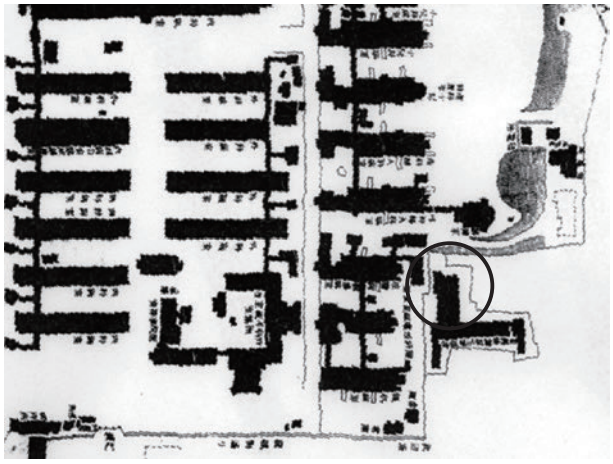


c 万延 2 年（1861）『小石川谷中本郷絵図』
（文京区立図書館文の京デジタル文庫）

d 明治 11 年（1878）『大日本東京全図本郷区』
（文京区立図書館文の京デジタル文庫）



e 明治 45 年（1912）『地籍台帳・地積地図〈東京〉第 6 巻』
（文京区立図書館文の京デジタル文庫）



f 大正 2 年（1913）「本郷構内建物変遷図」
（東京大学施設部）

Ⅰ-2 図　調査地点の変遷（江戸～大正、○印が調査地点）

が建てられ無縁寺と称した。正保2年（1645）に寺域を折半して常光山称仰院無縁寺として独立し、法界寺も講安寺と改称した（Ⅰ-2図b、c)。無縁寺はその後天和2年の大火で類焼した本郷の大安寺と合併し、常光山称仰院大安寺と称し現在に至る。

元禄3年に境内北西部　637.06坪を隣接する富山藩に貸し、10年後の借地証文書き換え時には600坪に縮小された。この貸し地契約の終了時期を知る資料は確認されていないが、小松愛子の研究によれば、天保年間に倹約を理由に長屋を取り払い、地面を返却したいと富山藩側から講安寺に申し入れがあったが、富山藩側担当者の過失一件のため見送られたそうである（小松 2015)。その後講安寺から富山藩に地面返却について再確認したところ、役人達が「勤番」になり不要になったので、講安寺の勝手次第にしていいと回答が得られた。この「勤番」時期について小松は天保14～15年（1843～1844）にかけての富山への引っ越しを対応させている。一方、講安寺側も弘化3年（1846）に11代住職が、墓地が手狭になった本郷元町の興安寺及び等正寺に墓地として貸し地する約束を取りつけていたので、天保15～弘化3年の間に更地にして返却したと推測される。そして弘化5年（1848）2月に富山藩と同条件で両寺に各100坪（東西6間1尺5寸、南北16間）を永代借地させた。

明治41年に隣接する東京大学病院拡張のため、興安寺・等正寺貸地区域を含む講安寺墓地北西部を譲渡する契約が成立し、明治43年3月30日に興安寺・等正寺墓地ともに豊島区西巣鴨への移転が完了した。大正元年（1912）に土地を取得した東京大学は、翌大正2年に看護法講習生寄宿舎（大正13年より看護婦寄宿舎に変更）を建設した（Ⅰ-2図f)。大学取得地周囲の擁壁は石積で築かれ、現在も講安寺側から観察すると一部に再利用された石製墓標を観ることができる。

第Ⅱ章　調査の経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

東京大学医学部附属病院では、1996 年より着工した入院棟 A を含む病院再開発に伴う基幹整備の一環として、入院棟 A 東側に貯水槽・オイルタンクの建設を計画した。建設予定地は、文京区 No.47 本郷台遺跡群範囲内に含まれ、入院棟 A 地点の調査成果から江戸時代には隣接する浄土宗講安寺の敷地内にあたることから、墓壙を含む講安寺関連の遺構・遺物が遺存していることが予想された。本地点を含む基幹工事は、入院棟 A 建設工事と合わせ入院棟新営その他工事 JV が受注していたため、大学施設部、JV、埋蔵文化財調査室で協議した結果、遺構・遺物の存在が確実視され、遺存状況も概ね推測されることができることから、周辺工事工程に合わせ、2000 年 9 月 11 日より本調査を実施することで合意した。

第２節　調査の方法と経過

本地点の遺構確認面は、講安寺寺域に該当する入院棟 A 地点 2 区の成果から、現表下約 3m と深く調査面積が 200㎡と狭いことから、工事仕様の H 鋼打設による山留め工事と併行して表土掘削を行い、壁面の山留め設置工完了を受けて調査を開始した。

座標は本地点調査前に実施した第 2 中央診療棟地点 1 期調査で設置した 5m グリッドを延長して使用した。そのため東西方向のグリッド名は 36 ～ 38 グリッドに対応し、南北方向のグリッドは第 2 中央診療棟地点の北端基準にした A ラインより本地点が北に位置することから A ラインの北側は b ラインとした。従って北西角は d36 グリッド、南東角は C38 グリッドになる。

H 鋼打設完了を受けて 9 月 11 日より重機掘削を開始する。12 日全域を約 200cm 掘り下げたところで矢板はめ込みを行う。14 日矢板設置完了を受けて、北側より遺構面まで掘削したところ、調査区全域で近代建物基礎が検出された。基礎構造は方形掘方内に破砕礫の栗石を入れ厚さ約 40cm の捨てコンクリートを打設して土台を構築し、その上に切石が 2 段積まれていた。上段の切石は一辺約 40cm を測る。土地履歴から大正 2 年に建設された看護法講習生寄宿舎の基礎と推定される。近代基礎を取り上げ、18 日より本格的な遺構確認に入ったところ、頭蓋骨など人骨が出土したため本富士署捜査課署員 3 名、JV 所長、施設部建築課職員立会のもと事件性がないことを確認する。20 日重機掘削完了。近代建築基礎撹乱、南西部撹乱を除き、ほぼ全域にわたって墓壙が密に分布していることを確認し、25 日より各遺構の調査を開始した。26 日には浄土宗講安寺住職に依頼し、JV 所長、施設部建築課、加藤建設、調査室担当者全員でお清めを行う。10 月 3 日に理学部人類学教室近藤先生が来跡し人骨出土状況を確認。11 月 10 日全景撮影を行う。撮影後未調査部の完掘、測量などを行い 14 日に全ての調査を完了した。

第３節　調査の概要

本調査地点は、基本的に江戸時代の講安寺寺域内に対比されるが、歴史的環境でも述べたように、元禄 3 年から弘化年間頃にかけて富山藩に貸し地された。絵図面との対比及び遺構配置より B ライン南 3m 付近北側が富山藩借地エリアに比定される。また用地返却後まもない弘化 5 年には北西角から各々南北 16 間、東西 6 間 1 尺 5 寸の 100 坪が興安寺（西側）、等正寺（東側）の墓地として再び貸し地された。墓壙列の主軸方向角と墓壙配置より B ライン付近以北がそれに該当し、さらに 38 ライン付近が興安寺墓地と等正寺墓地の境にあたると推定される。

本地点は大正元年に東京大学が取得し、看護法講習生寄宿舎（大正 13 年より看護婦寄宿舎に変更）が建設された。表土掘削を行ったところ、基礎工事のためほぼ全域にわたりローム面まで削平されていたことが確認され、寄宿舎基礎は根石を据えるためにローム層を掘り込んで掘方が構築されていた。そのため層位的に遺構面の変遷を捉えることはできなかったが、幸にも調査地点ほぼ全域が大名藩邸から墓地へと変遷していることから、大枠で墓壙及び近代遺物廃棄遺構とそれに切られる遺構を把握することで土地利用の段階設定を試みることができた。こうした操作を踏まえて富山藩邸借地段階を Ⅰ 期、墓域経営段階を Ⅱ 期とした。ただし富山藩借地域外の講安寺墓地に関しては、返却段階前後での空間利用に様相差は認められなかったので、全て Ⅱ 期段階の遺構配置に含めて対応した。

本地点検出遺構総数 287 基のうち Ⅰ 期に帰属すると推測される遺構は 87 基を数える（Ⅲ -1 図）。内訳は礎石跡 1 基、溝 1 基、土坑 46 基、地下室 10 基、小穴 26 基、

性格不明遺構3基である。既述した様にⅠ期段階ではBライン南3m付近を境に北側が元禄3年以降の富山藩借地区域に対比され、それ以南で検出された遺構がほぼ墓壙であることもそれを傍証する。本段階の主な遺構は地下室、建物跡、厩跡で構成される。厩跡はBライン付近を東西方向に延び、入院棟A地点2区で検出された厩遺構とはL字状に配置されたと考えられる。建物跡はA37～A38グリッドの1棟とB37～B38グリッドの1棟が復元できる。主軸方向角はほぼ厩と同一であるが、南側の1棟を構成するSB157は厩遺構便槽SK237-1、2と重複し、それより新しいことから厩から建物への変遷が考えられる。地下室はb～Aグリッドライン間に重複も含め5基が東西方向に集中し、この一群より南北各2～3mに2、3基が分布する。これらのうちSU151は厩跡、建物跡（SB157）と重なるが、竪坑覆土にそれらに伴う遺構痕跡が確認されなかったことからいずれよりも新しいと考えられる。従って厩→建物→地下室への変遷が想定される。

Ⅱ期に帰属すると推測される遺構は180基を数える（Ⅲ-22図）。内訳は土坑47基、墓壙127基、小穴6基で、墓壙は本段階総遺構数の7割強を占める。また墓壙は人骨、埋葬容器の存在から判断しているため、土坑とした遺構にも墓壙として構築された遺構が含まれている可能性は高い。墓壙は本地点全域から検出されたが、主軸方向角、配置方向、集中区域などのあり方から、Bライン付近以南が講安寺墓地、その以北では38ライン付近を境に西側が興安寺墓地、東側が等正寺墓地に比定される。

帰属段階不明遺構は36基を数える。内訳は土坑17基、小穴18基、性格不明遺構1基である。

出土遺物は分類、接合後の数量でコンテナ279箱を数える。主な出土遺物は甕棺、蔵骨器などの埋葬容器と人形・玩具類、銭貨などの副葬品で、原位置を維持する事例の他、改葬に伴う多量の廃棄資料が確認された。また遺構出土資料ではSU219、SU229など廃絶後の地下室に廃棄された事例や、SK110、SK173など墓域段階の不整形遺構への廃棄資料が特質される。

第Ⅲ章　検出された遺構

第１節　Ⅰ期の遺構

遺構形態、出土遺物年代から本段階に帰属すると推定される遺構は87基を数える（Ⅲ-1図）。内訳は礎石跡（SB）1基､溝（SD）1基､土坑（SK）46基､地下室（SU）10基､小穴（SP）26基､性格不明遺構（SX）3基である。以下、遺構種別順に各遺構の内容を記載する。

SB157、SP43、SP60、SP81、SP82、SP150、SP162、SP169、SP190、SP205、SP217、SP223、SP240、SP241、SP257、SP289、SP297（Ⅲ-2図）

b～B36～38グリッドに位置する柱穴群である。配置及び各柱穴平面形状より、南北2棟の建物跡が復元される。北側の一群を建物跡1、南側の一群を建物跡2とする。

建物跡1は、北側の東西列（SP205、SP217、SP297、SP169）、南側の東西列（SP60、SP190、SP257、SP240、SP162）と、それらに直交する西側の南北列（SP43、SP241、SP150）、東側の南北列（SP81、SP82、SP223）の15基で構成される。主軸方向角はE-7.4°-Sを示す。SP217、SP297、SP241、SP81はⅡ期遺構に切られ、SP169はⅠ期に帰属するSK167に切られている。北側東西列はSP205、SP217、SP297間が芯々で概ね1間、SP297－SP169間が2間を測る。南側東西列も同様に西側3基が約1間間隔、SP257－SP240間が約2間を測り、SP240－SP162間が再び1間を測る。東西列間は芯々で450～470cmを測り、南北列はその間に3基の柱穴を配している。個々の柱穴は平面形長方形～不整方形を呈し、坑底標高は9.7m前後と9.5～9.6mの一群に大別され、後者はSP60を除き東西列2間間隔と南北列北から2番目に認められる。柱痕はSP81、SP162に認められ、その痕跡から1辺もしくは直径12cm程度の材と推定される。またSP205、SP169、SP60、SP240に認められるテラス状形態と覆土堆積状況は抜き取り痕の可能性が考えられる。坑底からは硬化した痕跡は確認されず、簡易な建物基礎と推定される。

建物跡2は東西方向のSP289、SB157で構成される。SB157の東側3基はSK173と重複しそれより旧い。SP289は調査区西壁際にあり、土留め用H鋼掘方に破壊され遺存状況は悪い。主軸方向角は建物跡1同様E-7.4°-Sを示す。SB157のうち撹乱を受けていない西側南北2基は直径約40cmを測る平面形略円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底はほぼ平坦である。坑底標高は9.7mを測る。東西方向はSP289とSB157が芯々約2間、SB157各ピット間が約1間を測る。SB157西端南側の1基は芯々距離が1.4mを測り、東西列に対し直交していないことより、別遺構の可能性もある。遺物は出土していないが、SK173より旧いことから富山藩邸帰属遺構と推定される。

SD226（Ⅲ-3図）

B37・38グリッドに位置する溝状遺構である。重複する厩遺構SK237より新しく、SK173より旧い。東西方向の主軸方向角はE-9.1°-Sを示し、建物跡1、2よりやや南に傾く。検出範囲内での平面形は東端で南側に折れる鉤形を呈す。溝幅は東側で28cm、西側で45cmと西に向かって拡がっている。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、溝底は凹凸が著しい。覆土はレンズ状堆積を呈し、確認面からの深さ15cmと浅い。2層下部に焼土粒、炭化物が多量に含まれることから3層上面が使用面と推定され、溝幅は約25cmとほぼ平行に伸びていることが確認される。

遺物は17世紀後半の陶磁器類が少量出土している。

SK45（Ⅲ-4図）

d37グリッドに位置する土坑である。遺構の大部分は調査区外に続いているため形状・規模は不明。現状では東西230cm以上、南北20cm、確認面からの深さ50cm以上。東側で検出したSK296と切り合い関係にあるが、どちらの遺構も南北方向に半截して調査を進めたため、堆積から新旧関係を明らかにすることはできなかった。

17世紀後半から19世紀にかけての遺物が少量出土した。

SK114（Ⅲ-5図）

c・d37・38グリッドに位置する土坑で、重複するST21、ST115、ST116、ST117、SK110より旧く、SK221、SU227、SK235より新しい。平面形は不整形を呈し、南西側の不整隅丸長方形部に一段下がり北西側の不整方形部が接続する。その様相から複数回の土採りによる採土坑の最終形態と推定される。覆土は2層から形成され、下層に粘土ブロック・粘土粒を多量に含む暗褐色土、上層にローム粒・ロームブロックを含む暗黄褐色土がほぼ水平に堆積する。

遺物はコンテナ3箱が出土したが、直上のSK110と著しく重複していたため、半截時にコンテナ9箱の遺物を両遺構一括として取り上げた（Ⅳ-23～25図掲載遺物）。

SK124、SK132、SK237、SP62、SP164、SP255（Ⅲ-7図）

A36～B38グリッドに位置する方形ピット・円形土坑群である。SK237は重複するSB157、SK173、SD226より旧い。確認された方形ピットはSP62（A36グリッド）、SP255・SP164（B38グリッド）の3基で、SP62、SP255間は芯々で700cm、SP255、SP164間は180cmを測る。主軸方向角はE-8.6°-Sを示し、SD226とほぼ平行する。また入院棟A地点2区厩遺構主軸とは94°の開きを示す。各ピットは南北40cm、東西30～35cmを測る長方形を呈し、坑底標高は9.85～10.0mを測る。坑底はほぼ平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。そのうちSP164では幅15cmの柱痕が確認され、補強用と推測される切石が添えられていた。円形土坑はSK124（A・B36グリッド）、SK132、SK237-3（B37グリッド）、SK237-1、2、4（B38グリッド）の6基で、SK124、SK132間は芯々で340cm、SK132からSK237-4まではほぼ180cm間隔を測る。各土坑は直径約55cm、坑底標高は10.05m±0.5mを測る。壁は垂直に立ち上がり、坑底はやや凹凸が認められ、壁際がやや深く掘り込まれている。覆土の断面観察から桶枠痕跡が確認され、枠内には灰褐色から暗灰褐色を呈す粘質土が水平に堆積していた。その様相から便槽と考えられる。また1間間隔を復元できる方形ピット間のほぼ中央に位置し、かつ円形土坑列中心軸はピット列の南側約70cmに位置する遺構配置から厩遺構と考えられる。円形土坑が1間四方のピット区画やや北寄りに位置することから、南向きの厩が想定される。

遺物はSP255、SK237より17世紀代の陶磁器類が少量出土している。

SK141、SK142、SK143（Ⅲ-6図）

B37グリッドに位置する土坑である。調査区の西端で検出したため、形状や規模は詳らかでない。調査時は3基の土坑の切り合いとしたが、断面ではSK143からSK142にかけて深くなった坑底が、SK142からSK141にかけて浅くなり、SK141の北端で再度深くなっている。確認面からの深さはSK141の最も深い部分で35cmである。こうした形状から1つの植栽痕だった可能性がある。

遺物は19世紀代のものが少量出土しているが、それぞれの遺構で明確に分けることができなかった。こうした出土状況も、これらが本来一つの遺構であったことを示してよう。

SK167（Ⅲ-8図）

A38グリッドに位置する方形土坑である。北東部で重複するSP169即ち建物跡1より新しく、ST119、ST120、ST177より旧い。主軸方向角はほぼ東西方向を示す。平面形は方形を呈し、東西110cm、南北100cm、確認面からの深さ最大95cmを測る。坑底はほぼ平坦で、壁もほぼ直立する。覆土最下層には非常に粘性の強い暗灰褐色土がほぼ水平堆積し、その上はローム粗粒主体土で埋め戻されている。板材など内部施設の痕跡は確認されなかった。

遺物は18世紀前半の陶磁器類などコンテナ1/2箱が出土した。

SK232（Ⅲ-9図）

A38グリッドに位置する遺構である。南側はⅡ期遺構ST97に破壊されているため、北半のみ遺存する。西側にSU108が隣接するが、ともにST97に破壊されているため重複関係は不明である。遺存部の平面形は不整半円形状を呈し、最大長は102cmを測る。断面形は擂鉢状を呈し、確認面からの最大深度は36cmを測る。壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が著しい。覆土は3層に分けられ、2層には多量の焼土が含まれていた。

遺物は18世紀中葉の陶磁器類など、コンテナ1/2が出土した。

SK235（Ⅲ-10図）

c37・38グリッドに位置する遺構である。SK114と重複し、それより旧い。平面形は不整台形を呈し、東西145cm、南北130cm、確認面からの深さ72cmを測る。坑底、壁面共にほぼ平坦に整形され、壁はほぼ垂直に立ち上がる。また坑底南東部に浅い落ち込みを有す。覆土は3層に分けられ、北壁に向けて緩やかに傾斜している。1、3層にはローム粒、ロームブロックが多量に含まれる。

遺物は18世紀前半の陶磁器類などコンテナ2箱が出土した。

SK271（Ⅲ-11図）

c38グリッドに位置する遺構である。南東部がST24、北西部が撹乱により消失し、遺存状態は悪い。平面形は円形もしくは隅丸方形を呈すると推定される。残存範囲

での規模は東西 112cm、南北 122cm、確認面からの深さ 44cm を測る。坑底、壁面ともに凹凸が著しく、坑底中央に高まりが存在する。その形状から植栽痕の可能性がある。覆土は 4 層に分けられ、ほぼ水平に堆積する。また 3 層には人工遺物､動物遺体が多量に含まれていた。

遺物は肥前産染付広東碗を含む 18 世紀後葉の陶磁器類などコンテナ 1/2 箱が出土した。

SK287（Ⅲ -12 図）

c36 グリッドに位置する土坑である。北側を ST48 に壊され、南側を ST187、ST13、SK288 に壊されている。平面形は方形で、東西 136cm、南北 85cm。確認面からの深さ 32cm。坑底は平坦で、立ち上がりは北側をみるかぎりほぼ垂直である。

17 世紀代の遺物が少量出土した。

SU108（Ⅲ -13 図）

A37・38 グリッドに位置する地下室である。重複する ST97 より旧く、南東側約 1/4 が消失する。床面の平面形は長方形を呈し、東西 190cm、南北 175cm、確認面からの深さ 150cm を測る。東西軸方向角は E-6.4° -S を示す。床面、壁面共に丁寧に整形されている。天井部は崩落してほぼ残存していないが、南壁を除く壁面上部に天井崩落痕跡が認められることから、南壁周辺に開口部が存在したと考えられる。またその痕跡から壁際天井高は 105cm と確認される。床面はローム層を掘り抜き砂質粘土層上面に構築されている。覆土は 4 層に分けられ、全体的にしまりがあり、上層（1、2 層）には灰褐色粘土粒が多量に含まれている。また 4 層中の巨大ロームブロックは天井崩落土で、その上部周辺の覆土には焼土粒、炭化材が含まれている。

遺物は 18 世紀中葉の陶磁器類が出土している。

SU151（Ⅲ -14 図）

A・B36・37 グリッドに位置する地下室である。開口部の平面形は長方形と推定され、東西 140cm、南北 175cm。遺構の軸は E-6.7° -W。確認面からの深さは 200cm。坑底の形状は長方形である。10 層からなる覆土には天井部が崩落したものと考えられるロームブロックが含まれている。9 層は粘性の著しい青灰色粘土からなる土層である。

18 世紀後半の遺物がコンテナ 4 箱分出土した。

SU156（Ⅲ -15 図）

b・A36 グリッドに位置する地下室である。遺構の西半分が調査区外だが、本来の平面形状は円形だったと推測される。遺構北側は撹乱によって壊されている。現状で東西 120cm、南北 185cm、確認面からの深さ 190cm である。遺構の主軸は E-12° -N である。ロームブロックが多量に堆積している 7 層は、天井の崩落に起因したものかもしれない。それより下の 9 層～ 11 層は青灰色粘土を主体とし、8 層と 12 層も層中に青灰色粘土粒子が多く認められた。14 層には酸化鉄がブロック状に多く認められ、坑底には砂利を多く含む黒色土（15 層）が堆積している。

青灰色粘土層中から 18 世紀前半に帰属する遺物が少量出土している。

SU201（Ⅲ -16 図）

A36 グリッドに位置する地下室である。調査区西端で検出しており、遺構の西側は調査区外に続いている。東側は SK203 に壊されている。また北側も SU156 との間に別遺構が存在しており、それに壊されていた可能性もあるが、調査時に検証できなかった。確認面の形状は方形である。南北 178cm、確認面からの深さ 126cm。坑底は平坦に造られている。立ち上がりは南北で異なる形状で、南側は坑底から 50cm ほどの高さまで垂直に立ち上がるが、そこから上は急斜度に変化している。急斜度に拡がる部分が覆土の 1 ～ 3 層にあたっており、堆積状況から SU201 よりも新しい土坑の可能性がある。北側の立ち上がりは急斜度で、SU156 との間に存在した別遺構によって壊されている。北側には天井部が崩落したことによるロームブロックが堆積している。

18 世紀中葉の遺物がコンテナ 2 箱分出土した。

SU219（Ⅲ -17 図）

b37 グリッドに位置する地下室である。確認面の形状は方形で､東西 125cm､南北 100cm。ここを開口部とし、確認面から 130cm 程度で東西・南北ともに拡がり断面はフラスコ形をなす。確認面からの深さは 190cm。坑底の規模は東西 265cm、南北 210cm。開口部は SK208、ST218､ST270 によって壊されている。覆土は 6 ～ 8 層、11 層が北側へ傾斜しているが、総じて水平堆積である。

18 世紀後半代の遺物がコンテナ 8 箱分出土している。

SU227（Ⅲ -18 図）

c・d37・38 グリッドに位置する地下室である。重複する ST117、SK114 より旧い。遺構北半が調査区外に延びるため、全容は不明である。確認面での平面形は方形を呈すると考えられ、南壁中央の緩い張り出しは重複

するST117の影響である。東西長135cmを測る。床面はローム層を掘り抜き砂質粘土層上面に構築されている。その影響を受けてか床面には緩やかな凹凸があり、壁面への立ち上がりも丸味を帯びている。確認範囲内で壁は全てオーバーハングし、袋状に立ち上がる。覆土は7層に分けられ、7層は貼床の可能性がある。6層は天井崩落土で5層以上は灰褐色粘土を多量に含み東に向けて極めて緩やかに傾斜して堆積する。

遺物は18世紀中葉の陶磁器類が、コンテナ1/2箱出土した。

SU229（Ⅲ-19図）

b・A38グリッドに位置する地下室で、西側で重複するSU280より新しい。周辺遺構重複の影響もあり、天井部はほぼ崩落し開口部形状は不明である。床面は台形状を呈し、東西180cm、南北200cmを測る。主軸方向角はW-3°-Sを示す。床面はほぼ平坦に整形され、確認面からの深さは172cmを測る。壁面には工具痕による凹凸が残存し、北壁西部を除く壁面上部には天井崩落痕が認められることから、北西付近に開口部が存在したと推定される。SU229と重複する床面西壁際には壁補強のための杭痕と板材痕が認められた。覆土は13層に分けられ、西寄りにピークを有す凸レンズ状堆積を呈していることも、開口部が北西付近に存在した証左といえよう。

遺物は18世紀前葉から中葉の陶磁器類など、コンテナ5箱出土した。

SU266（Ⅲ-20図）

c37グリッドに位置する地下室である。西側でSK300を切っている。確認面の形状は方形で、東西168cm、南北135cm、確認面からの深さ108cm。坑底は東側に傾斜している。立ち上がりはほぼ垂直である。

遺物は少量出土しているが、廃絶年代は不明。

SU280（Ⅲ-19図）

b37・38グリッドに位置する地下室で、西側に重複するSU219及び東側に重複するSU229より旧い。また北壁でさらにもう1基地下室が重複することが確認され、床面上覆土の観察から北側地下室が新しいことを確認した。よって本遺構をSU280a、北側重複地下室をSU280bと区別する。

SU280aは周囲の重複する地下室構築による影響などの天井部崩落によって開口部は遺存していない。室部床面平面形は東側に開く台形状を呈し、東西235cm、東壁170cm、西壁115cm、確認面からの深さ186cmを測る。東西軸方向角はW-8°-Sを示す。床面は砂質粘土層まで掘り下げた上に厚さ約20cmの黒褐色土とローム土を敷き詰め、固く敲き占めている。また南壁際西半から西壁際にかけて敲き占め面上面レベルと近似したテラス状一段が認められる。この様相から床面の改修が行われた可能性も考えられる。西壁際には平面形方形を呈する杭痕が2基認められる。位置関係から入口昇降用梯子を固定した施設と推定される。断面観察a－a’ラインでは床面上覆土上層などに天井が崩落した巨大ロームブロックが認められ、本来は広く天井に覆われた形態だったと推定される。

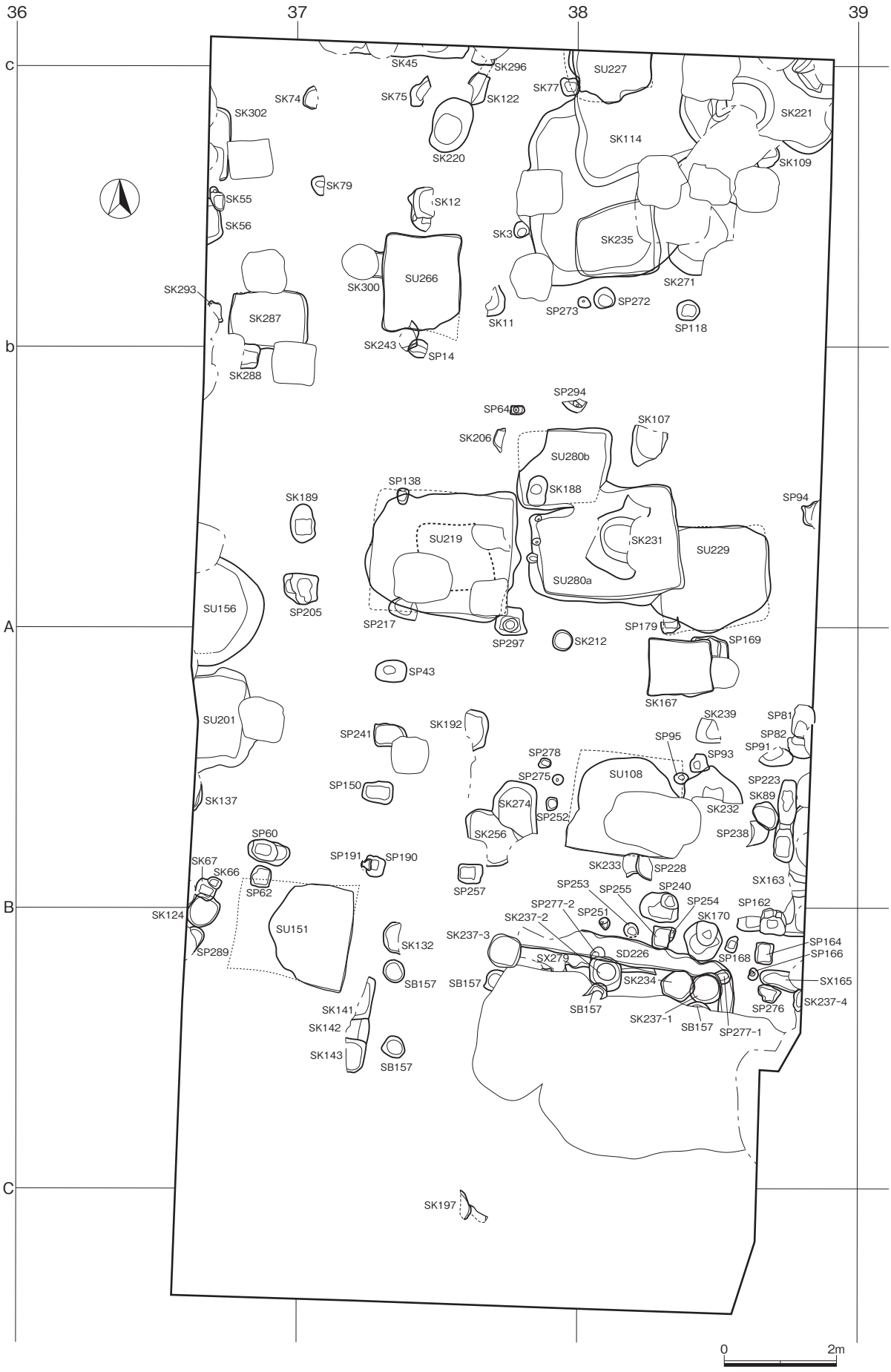
SU280bの床面は長方形を呈し、東西150cm、南北124cm、確認面からの深さ192cmを測る。東西軸方向角はほぼ東西を示す。北壁及び東壁が確認面まで垂直に立ち上がることから、開口部は東もしくは北東側に存在したと推測される。北壁にみる室部奥行は50cmを測り、西側奥壁には工具痕が残存する。

遺物は18世紀前半の陶磁器類などコンテナ3箱が出土した。

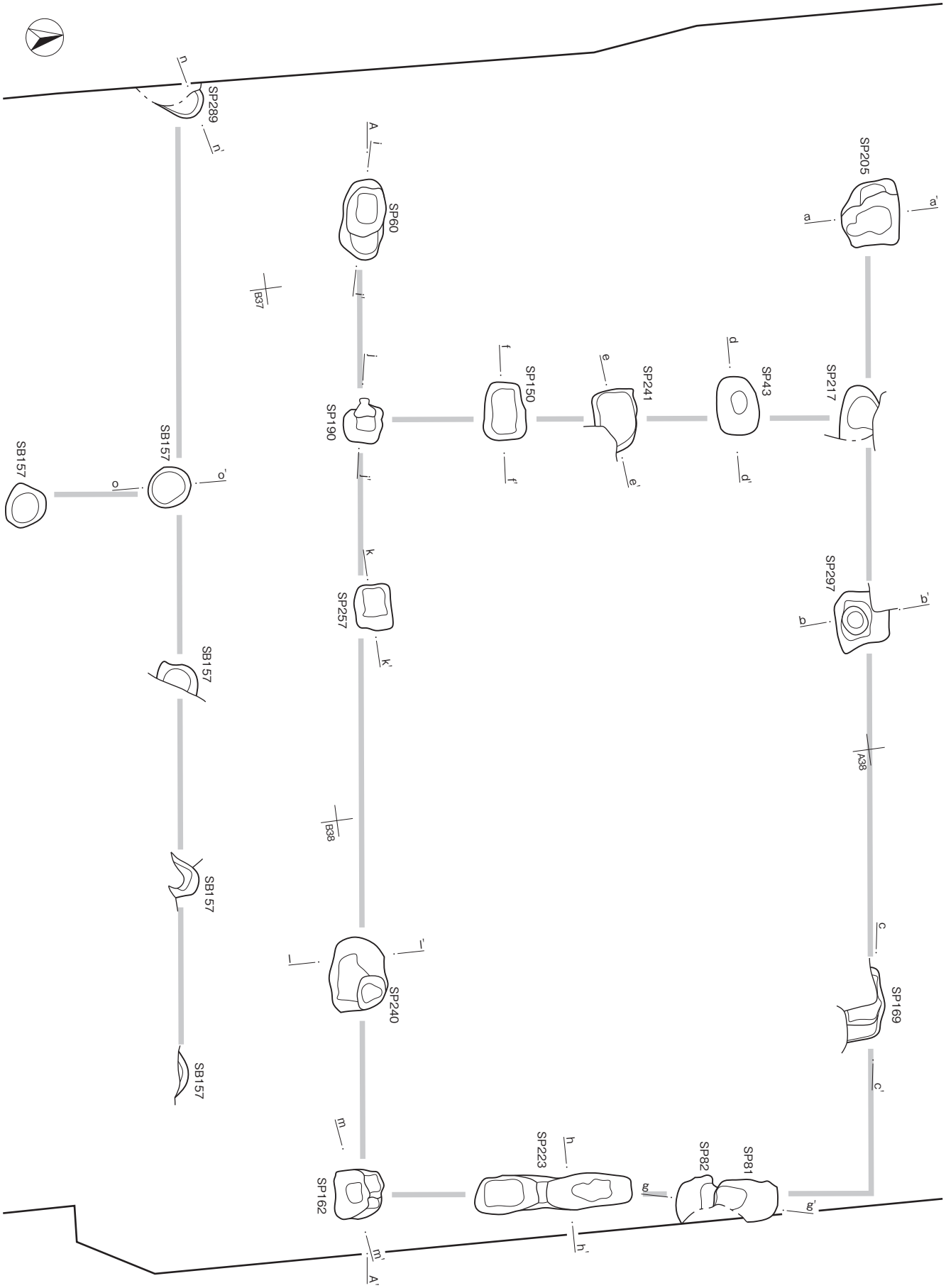
SX163（Ⅲ-21図）

A・B38グリッドに位置する遺構である。重複するSP162より旧い。北西部を撹乱によって大きく破壊され、東側は調査区外に延びるため平面形は不詳である。南壁付近の覆土は2層に分けられ、ローム粒を含む茶褐色土が主体を成す。

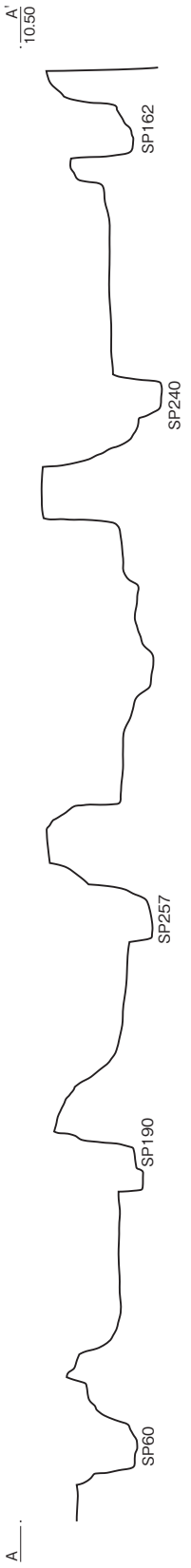
遺物は17世紀後半の陶磁器類などが少量出土した。

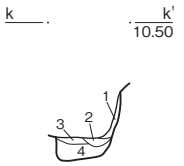

36
37
38
39
c
b
A
B
C
SK45
SK296
SU227
SK74
SK75
SK122
SK77
SK302
SK114
SK221
SK220
SK109
SK79
SK55
SK12
SK56
SK3
SK235
SK271
SK293
SU266
SK300
SP273
SP272
SK287
SK11
SP118
SK243
SP14
SK288
SP294
SP64
SK107
SK206
SU280b
SP138
SK188
SP94
SK189
SU219
SK231
SU229
SU280a
SU156
SP205
SP217
SP297
SK212
SP179
SP169
SP43
SK167
SU201
SK192
SK239
SP81
SP241
SP95
SP82
SP93
SP91
SP278
SP275
SU108
SP223
SP150
SK274
SP252
SK232
SK89
SK137
SK256
SP238
SP60
SP191
SP190
SK233
SP228
SK67
SK66
SP257
SX163
SP253
SP255
SP240
SP62
SP254
SP162
SK124
SU151
SP277-2
SP251
SK170
SK237-2
SK237-3
SP164
SP289
SK132
SD226
SP168
SP166
SX279
SB157
SK234
SX165
SB157
SP276
SK237-4
SK141
SK237-1
SB157
SP277-1
SK142
SK143
SB157
SK197
0
2m

Ⅲ-1図　Ⅰ期遺構配置図

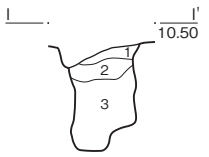


Ⅲ-2図　SB157、SP43、SP60、SP81、SP82、SP150、SP162、SP169、SP190、SP205、SP217、SP223、SP240、SP241、SP257、SP289、SP297（1）

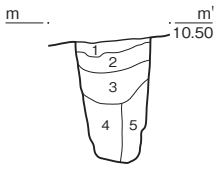




SP257
1　暗黄褐色土　（柱痕、ローム粗粒極多含、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（柱痕、ローム粒多含、粘性やや強、しまりやや弱）
3　褐色土　（ローム粒含、焼土粒少含）
4　暗黄褐色土　（ローム の埋土）

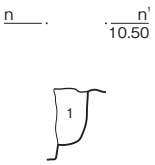


SP240
1　褐色土　（ロームブロック極多含、粘性やや強）
2　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒少含、粘性やや強）
3　暗黄褐色土　（ロームブロック・ローム粒主体、粘性やや強、しまりやや弱）

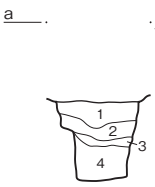


SP162
1　褐色土　（ロームブロック主体）
2　褐色土　（ローム粒多含、焼土粒・炭化物少含、しまりやや強）
3　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体）
4　暗褐色土　（柱痕、ローム粒極多含、しまり弱）
5　暗黄褐色土　（ローム粗粒主体）

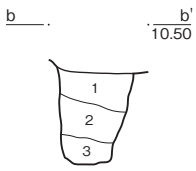
SP240



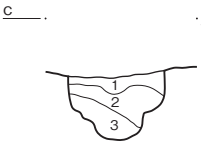
SP289
1　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、焼土ブロックやや少含、炭化物ブロック微含、粘性なし）



SP205
1　暗黄褐色土　（焼土粒多含、粘性なし）
2　黄褐色土　（ロームブロック主体、しまりなし）
3　黒色土　（粘性・しまりなし）
4　黄褐色土　（ロームブロック主体、しまりなし）

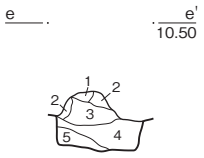


SP297
1　暗黄褐色土　（黒色土粒含、粘性なし）
2　暗黄褐色土　（ローム粒含、粘性なし）
3　暗黄褐色土　（黒色土粒含、粘性なし）

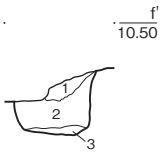


SP169
1　暗褐色土　（ローム粒極多含、しまりやや強）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性やや強、しまり強）
3　暗黄褐色土　（ローム粗粒主体）

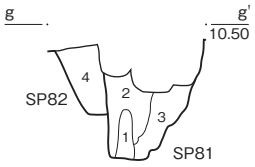
Ⅲ-2図　SB157、SP43、SP60、SP81、SP82、SP150、SP162、SP169、SP190、SP205、SP217、SP223、SP240、SP241、SP257、SP289、SP297（2）



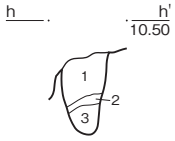
SP241
1 暗褐色土 （しまりなし）
2 ロームブロック
3 暗褐色土 （暗茶褐色土粒含、粘性・しまりなし）
4 暗茶褐色土 （ローム粒微含、粘性・しまりなし）
5 暗黄褐色土 （ロームブロック主体、粘性なし、しまりやや弱）



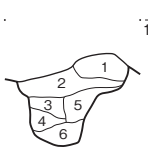
SP150
1 黄褐色土 （φ5～10mmのロームブロック多含、粘性なし、しまりやや弱）
2 暗黄褐色土 （暗褐色土粒多含、ローム粒少含、粘性・しまりなし）
3 暗黄褐色土 （ローム粒多含、粘性・しまりなし）



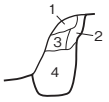
SP81
1 暗黄褐色土 （ローム粒極多含、粘性やや強、しまりやや弱、柱痕）
2 暗黄褐色土 （ローム土含、粘性・しまり強）
3 暗黄褐色土 （ローム粒主体、しまり弱）
SP82
4 暗黄褐色土 （ロームブロック・ローム粒極多含、粘性・しまり強）



SP223
1 褐色土 （ローム粗粒極多含、粘性やや強、しまりやや弱）
2 暗褐色土 （粘性やや強、しまり弱）
3 褐色土 （ローム粒極多含、粘性やや強、しまり弱）

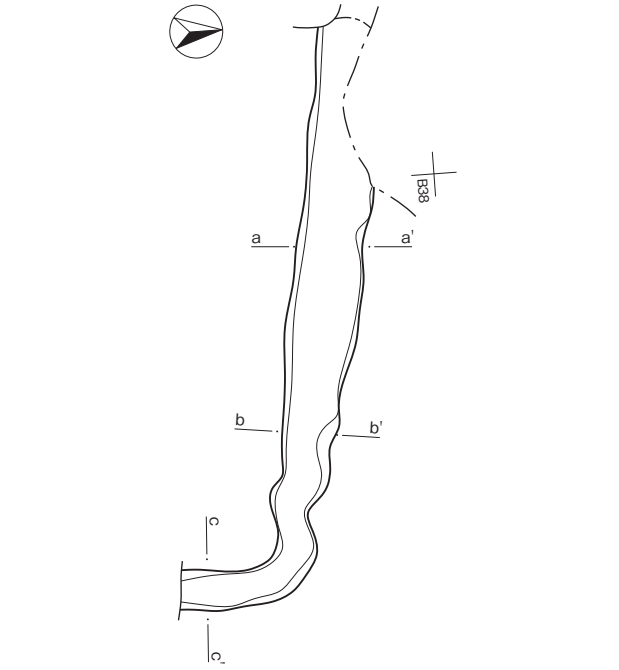


SP60
1 暗黄褐色土 （ローム粒多含、粘性なし、しまりやや弱）
2 暗黄褐色土 （ローム粒やや多含、1層より暗い、粘性・しまりなし）
3 暗褐色土 （ローム粒やや多含、粘性・しまりなし）
4 暗褐色土 （ローム粒やや多含、炭化物粒少含、粘性・しまりなし）
5 暗黄褐色土 （ローム粒多含、粘性・しまりなし）
6 暗黄褐色土 （炭化物粒やや多含、粘性やや弱、しまりなし）



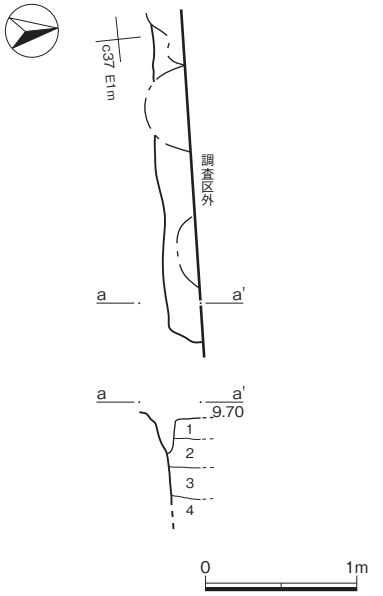
SP190
1 黄褐色土 （黒褐色土粒・焼土粒少含、粘性・しまりなし）
2 青灰色土 （ローム粒含、しまりなし）
3 黄褐色土 （炭化物粒含、粘性・しまりなし）
4 黄褐色土 （ロームブロック主体、粘性なし）

Ⅲ-2図 SB157、SP43、SP60、SP81、SP82、SP150、SP162、SP169、SP190、SP205、SP217、SP223、SP240、SP241、SP257、SP289、SP297（3）



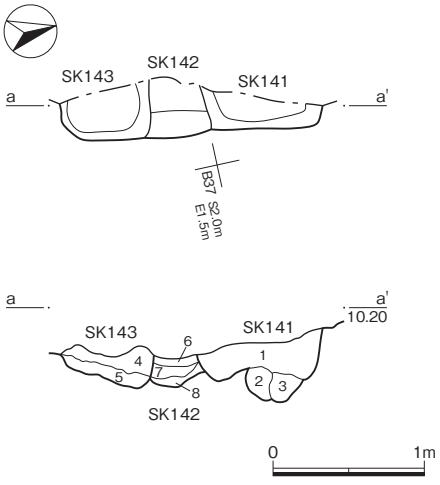
1　暗褐色土　（根痕、ローム粒含、粘性やや強、しまり弱）
2　暗赤褐色土　（焼土粒・炭化物極多含、しまり強）
3　褐色土　（ローム粒含）

Ⅲ-3図　SD226



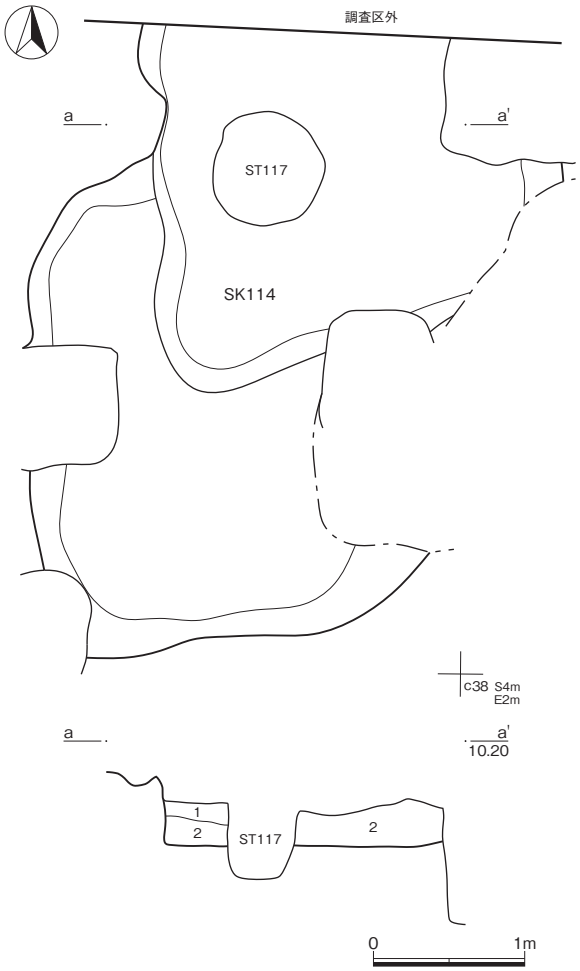
1　暗褐色土　（ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（ロームブロック多含、炭化物粒少含、粘性・しまりなし）
3　暗褐色土　（粘性・しまりなし）
4　青灰色砂層　（粘性・しまりなし）

Ⅲ-4図　SK45



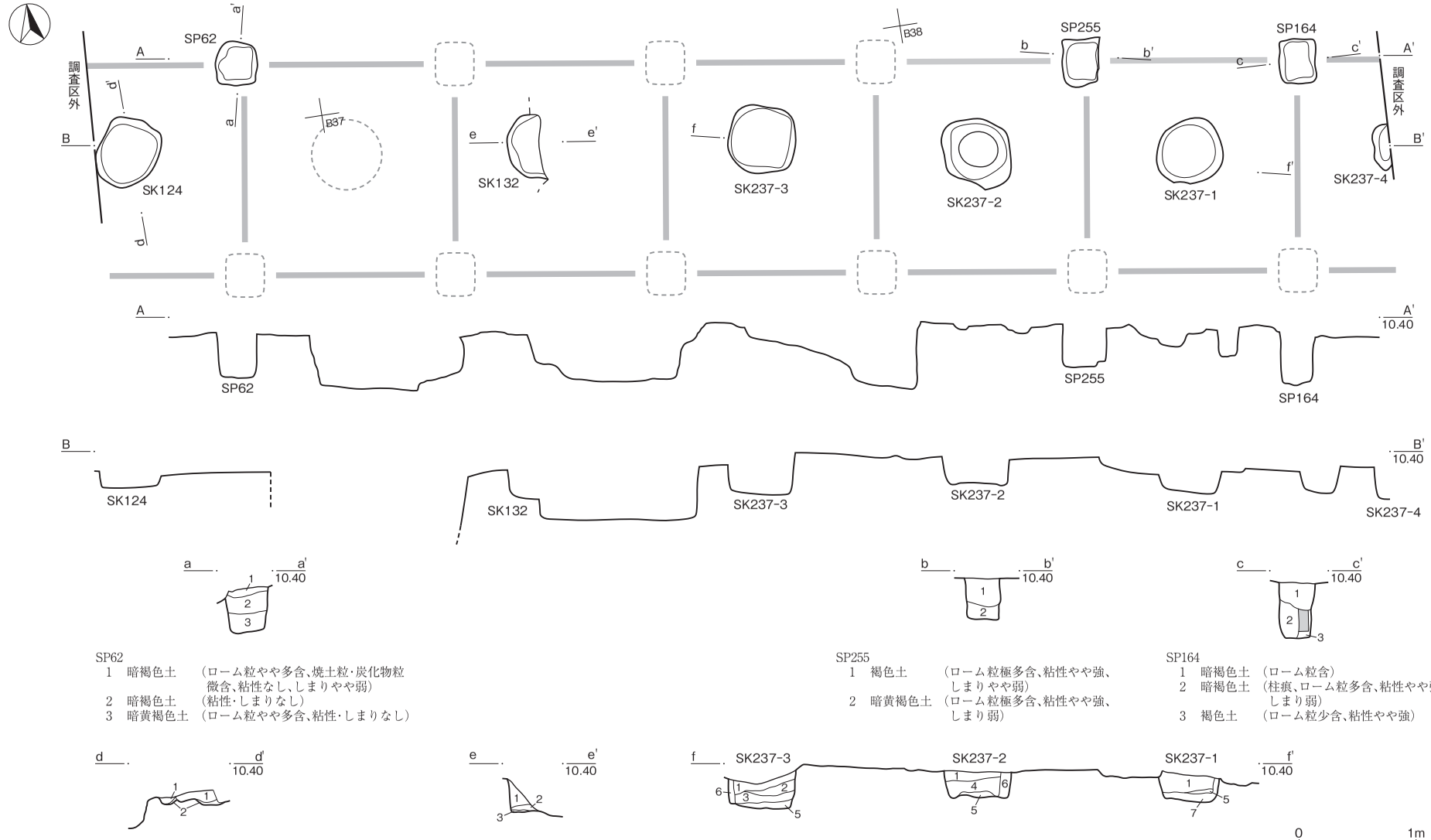
SK141
1　暗褐色土　（小礫・砂利・陶器片多含、ロームブロック少含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（ロームブロックやや少含、粘性・しまりなし）
3　ロームブロック
SK143
4　黄褐色土　（ローム粒・陶器片含、粘性・しまりなし）
5　暗褐色土　（ローム粒微含、粘性・しまりなし）
SK142
6　黄褐色土　（青灰色粘土粒少含、炭化物粒微含、粘性なし）
7　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
8　暗褐色土　（ローム粒微含、粘性・しまりなし）

Ⅲ-6図　SK141、SK142、SK143

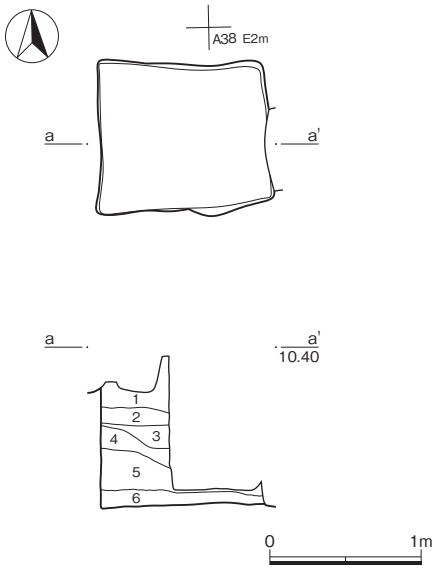


1　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック含、炭化物ブロック微含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（青灰色粘土粒・炭化物ブロックやや多含、ローム粒・瓦少含、粘性なし、しまりやや弱）

Ⅲ-5図　SK114

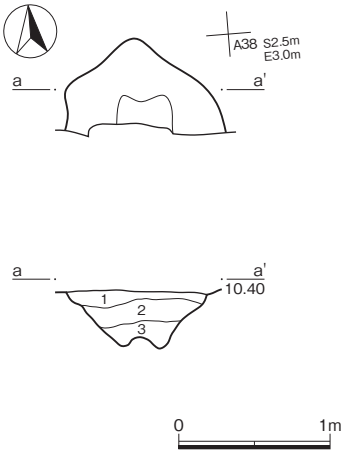


Ⅲ-7図　SK124、SK132、SK237、SP62、SP164、SP255



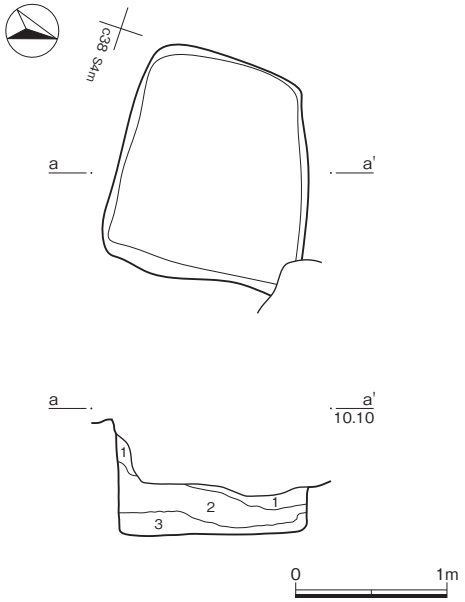
1　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒微含）
2　暗褐色土　（ローム粗粒極多含、玉砂利微含）
3　暗褐色土　（ローム粗粒多含、灰褐色粘土粒含、粘性やや強）
4　褐色土　（灰褐色粘土粗粒極多含、灰褐色粘土ブロック・ローム粒多含、粘性強）
5　暗黄褐色土　（ローム粗粒主体、粘性やや強、しまりやや弱）
6　暗灰褐色土　（灰褐色粘土粒多含、炭化物含、粘性強、しまりやや弱）

Ⅲ-8図　SK167



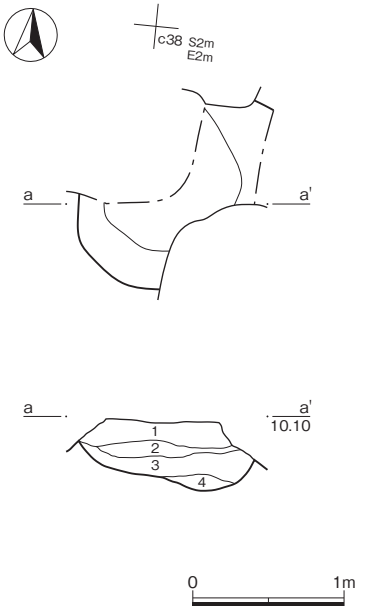
1　褐色土　（焼土粒少含、粘性・しまりやや強）
2　暗褐色土　（焼土粒極多含、灰褐色粘土ブロック含、粘性弱）
3　暗褐色土　（焼土粒微含、しまりやや強）

Ⅲ-9図　SK232



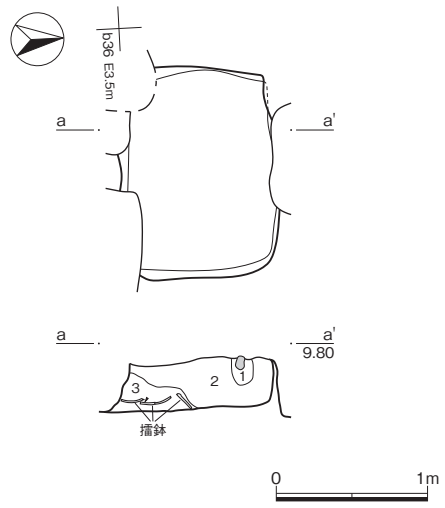
1　褐色土　（ローム粒極多含、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（ローム粗粒少含、粘性やや強）
3　暗黄褐色土　（ロームブロック・ローム粒主体、粘性やや強・しまりやや弱）

Ⅲ-10図　SK235



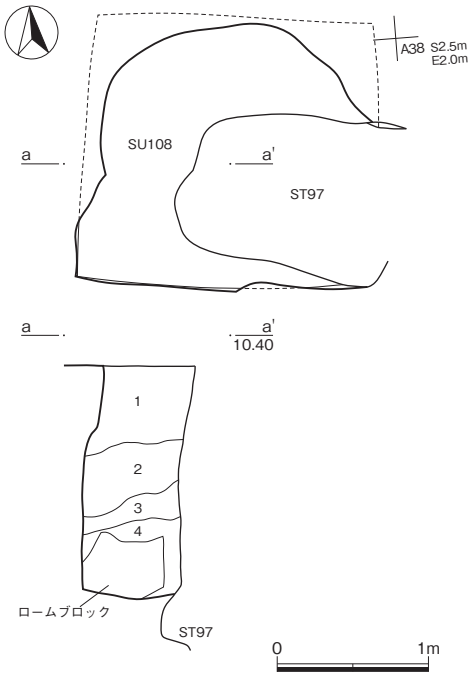
1　褐色土　（ローム粒多含）
2　暗褐色土　（ローム粒含、炭化物微含）
3　暗褐色土　（ローム粒含、貝殻類多含、しまりやや弱）
4　暗黄褐色土　（ロームの埋土、しまりやや強）

Ⅲ-11図　SK271



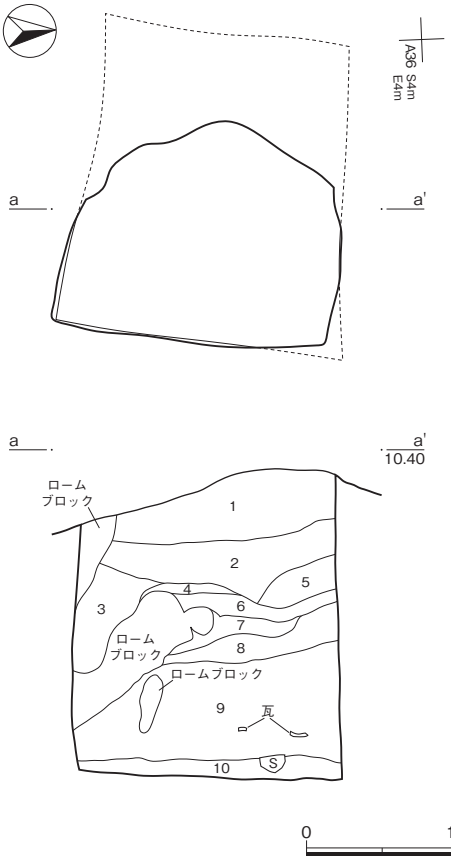
1　黒褐色土　（ローム粒含、粘性・しまりなし）
2　黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性なし）
3　黄褐色土　（ロームブロック多含、粘性なし）

Ⅲ-12図　SK287



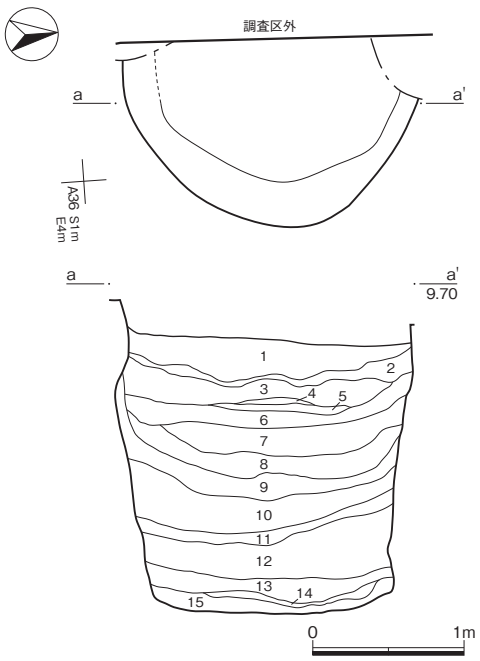
1　暗褐色土　（灰褐色粘土粗粒極多含、ローム粒含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（灰褐色粘土粒・ローム粒多含）
3　暗褐色土　（ローム微粒含、焼土粒微含）
4　褐色土　　（ローム粒極多含、炭化材多含、焼土粒含、粘性・しまり強）

Ⅲ-13図　SU108



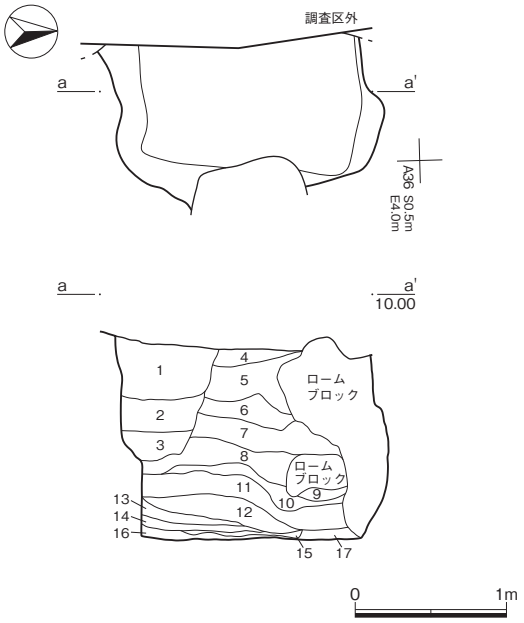
1　黄褐色土　　（明治以降の撹乱）
2　暗茶褐色土　（ローム粒・砂利含、粘性・しまりなし）
3　暗褐色土　　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
4　暗茶褐色土　（青灰色粘土粒・炭化物粒・焼土粒やや多含、粘性・しまりなし）
5　暗褐色土　　（ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
6　黄褐色土　　（ローム粒多含、青灰色粘土粒・炭化物粒・焼土粒少含、粘性・しまりなし）
7　黄褐色土　　（ロームブロック多含、焼土粒やや多含、炭化物粒含、粘性・しまりやや弱）
8　暗黄褐色土　（ローム粒やや多含、黒色土粒少含、粘性・しまりなし）
9　青灰色粘土　（ローム粒少含、炭化物ブロック微含、粘性極強・しまりなし）
10　暗茶褐色土　（粘性・しまりなし）

Ⅲ-14図　SU151



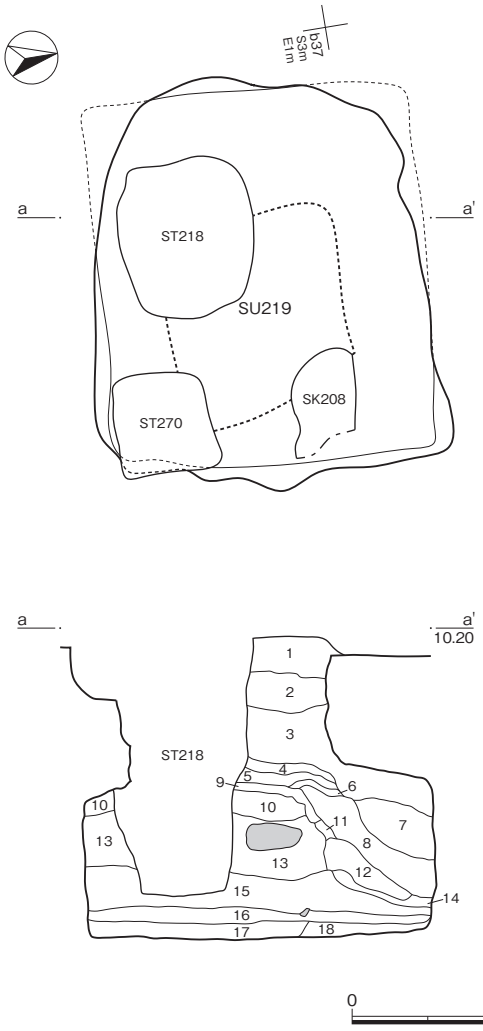
1　黒褐色土　　（焼土ブロック・炭化物ブロック多含、粘性・しまりなし）
2　黄褐色土　　（青灰色粘土粒・ローム粒多含、焼土粒やや多含、粘性なし）
3　青灰色粘土　（ローム粒・焼土粒・炭化物粒やや多含、しまりなし）
4　黒色土　　（炭化物粒多含、焼土粒・白色土粒微含、粘性なし）
5　ロームブロック
6　暗褐色土　（ローム粒含、炭化物ブロック少含、粘性・しまりなし）
7　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、炭化物ブロックやや少含、粘性なし）
8　暗褐色土　（青灰色粘土粒極多含、ローム粒・焼土粒多含、砂利やや多含、炭化物粒含、粘性・しまりなし）
9　青灰色粘土　（ローム粒少含、粘性やや弱、しまりなし）
10　青灰色粘土　（ローム粒微含、φ2 ～ 4mm の砂利やや少含、しまりなし）
11　青灰色粘土　（10 よりも濃い色調、ローム粒微含、しまりなし）
12　暗茶褐色土　（青灰色粘土粒極多含、ローム粒少含、粘性・しまりなし）
13　黒褐色土　（ローム粒やや多含、粘性極強、しまりなし）
14　赤褐色土　（酸化鉄ブロック主体、サラサラとした明黄褐色土粒やや多含、しまりなし）
15　黒色土　　（φ3 ～ 5mm の砂利多含、粘性・しまりなし）

Ⅲ-15図　SU156



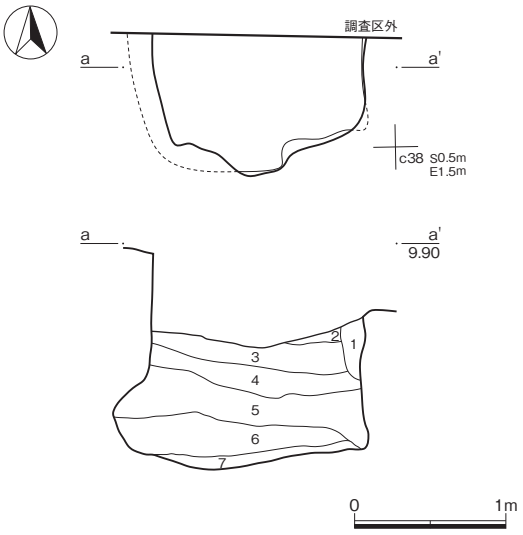
1　暗褐色土　（ロームブロック含、焼土ブロック・炭化物粒少含、しまりなし）
2　暗褐色土　（炭化物ブロック含、ロームブロック少含、しまりなし）
3　黒褐色土　（しまりなし）
4　青灰色粘土　（しまりなし）
5　黒褐色土　（青灰色粘土粒少含、しまりなし）
6　黒褐色土　（ローム粒微含、しまりなし）
7　黒色土　（炭化物ブロック含、しまりなし）
8　黒褐色土　（小石やや多含、しまりなし）
9　黒褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
10　黄褐色土　（ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
11　暗褐色土　（青灰色粘土ブロック・炭化物ブロック多含、ローム粒含、粘性・しまりなし）
12　黄褐色土　（ロームブロック多含、青灰色粘土ブロック・酸化鉄少含、粘性・しまりなし）
13　黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性・しまりなし）
14　青灰色粘土　（ロームブロック含、しまりなし）
15　黄褐色土　（炭化物ブロック極多含、酸化鉄ブロック少含、粘性・しまりなし）
16　黄褐色土　（青灰色粘土粒少含、粘性やや弱、しまりなし）
17　ローム　（炭化物粒微含、地山）

Ⅲ-16図　SU201



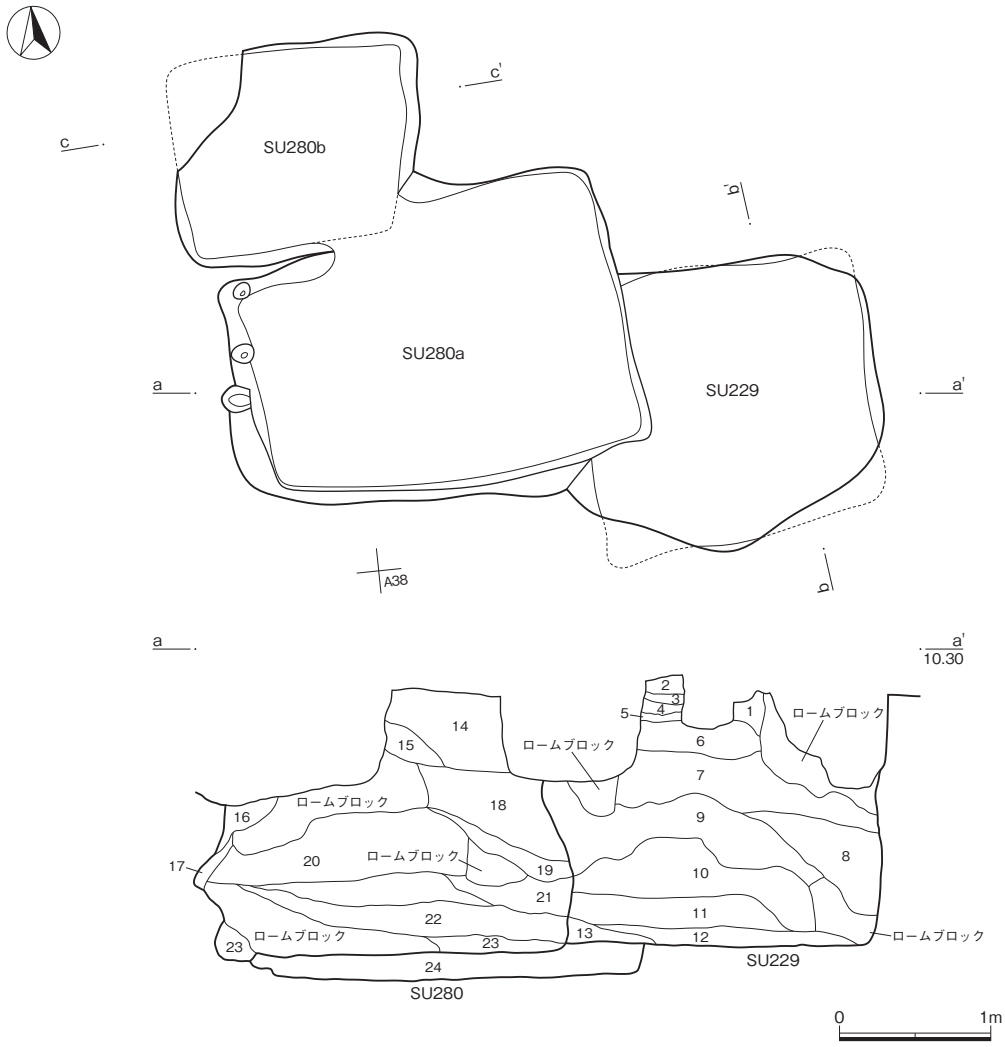
1　黒褐色土　（青灰色粘土含、粘性やや弱、しまりなし）
2　黒褐色土　（φ20 ～ 30mm の小石含、しまりなし）
3　黒褐色土　（ローム粒含、炭化物ブロック少含、粘性なし）
4　黒色混貝土　（粘性なし）
5　ロームブロック
6　灰褐色土　（炭化物ブロック含、しまりなし）
7　暗褐色土　（ロームブロック多含、しまりなし）
8　暗褐色土　（ローム粒多含、青灰色粘土粒少含、粘性なし）
9　ロームブロック
10　暗灰褐色土　（炭化物粒多含、しまりなし）
11　暗褐色土ブロック
12　ロームブロック
13　灰褐色土　（ローム粒・炭化物ブロック多含）
14　暗黄褐色土　（ローム粒含、しまりなし）
15　灰褐色土　（青灰色粘土粒多含、しまりなし）
16　暗灰褐色土　（青灰色粘土粒・炭化物ブロック多含、小石少含）
17　暗黄褐色土　（ローム粒多含、白色土粘土含、しまりなし）
18　暗茶褐色土　（ローム粒・青灰色粘土粒含、しまりなし）

Ⅲ-17図　SU219



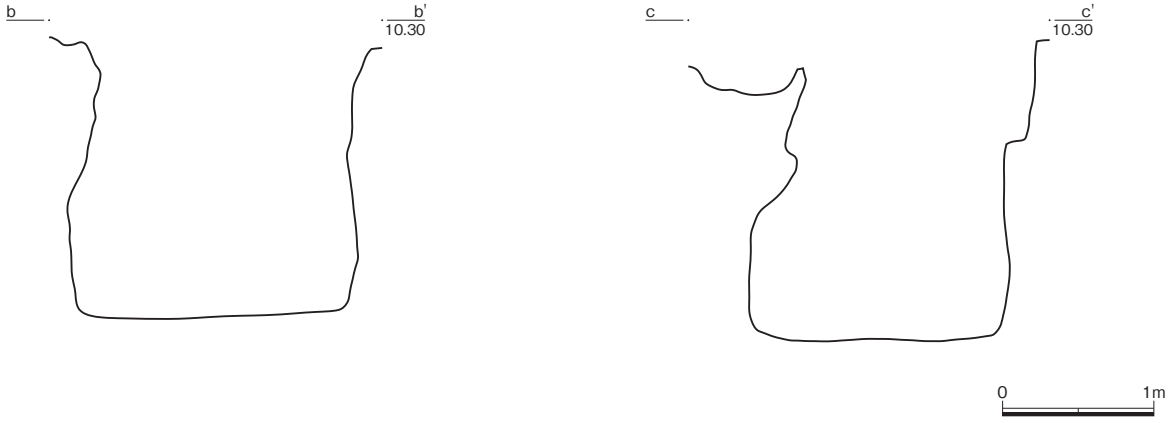
1　暗褐色土　（ローム粒多含、粘性やや強）
2　暗褐色土　（ローム粒極多含、灰色粘土粒含、粘性やや強）
3　灰褐色土　（灰褐色粘土粒多含、ローム粒少含、粘性やや強）
4　青灰褐色土　（ローム粒少含、炭化物微含、粘性・しまりやや強）
5　青灰褐色土　（ローム粗粒多含、粘性強、しまり極強）
6　暗黄褐色土　（天井の崩落土、ロームブロック主体、粘性強、しまりやや弱）
7　黒褐色土　（ローム粒多含、粘性強）

Ⅲ-18図　SU227

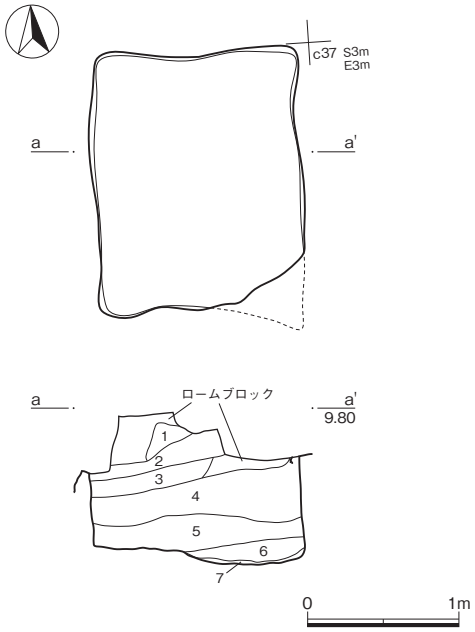


SU280
- 14 暗褐色土 （ローム粗粒・粘土粒少含）
- 15 褐色土 （ローム粗粒多含）
- 16 暗黄褐色土 （ローム粒極多含、粘性やや強）
- 17 褐色土 （ローム粒極多含、粘性やや強）
- 18 褐色土 （ロームブロック・ローム粗粒極多含、粘性・しまりやや強）
- 19 暗褐色土 （ローム粒含、粘性やや強、しまり強）
- 20 灰褐色土 （ロームブロック・灰色粘土ブロック含、下部に瓦集中）
- 21 褐色土 （ロームブロック極多含、粘性やや強、しまりやや弱）
- 22 暗灰褐色土 （ロームブロック・灰色粘土ブロック多含、粘性強、しまりやや強）
- 23 褐色土 （ローム粒含、粘性強、しまりやや弱）
- 24 淡褐色土 （ローム主体、砂粒含、粘性・しまり極強）※貼床

SU229
- 1 褐色土 （ローム粒極多含、しまりやや弱）
- 2 暗褐色土 （ローム粒・玉砂利・貝殻少含）
- 3 暗黄褐色土 （粘土ブロック多含、粘性やや強、しまり強）
- 4 褐色土 （灰褐色粘土ブロック多含、粘性極強、しまり強）
- 5 灰褐色土 （砂質粘土、しまり強）
- 6 暗褐色土 （玉砂利極多含、ローム粒多含）
- 7 暗褐色土 （灰色粘土粗粒・ローム粒多含、しまりやや強）
- 8 暗褐色土 （玉砂利多含、しまりやや弱）
- 9 褐色土 （ローム粗粒極多含、しまりやや弱）
- 10 褐色土 （ロームブロック・ローム粒極多含、しまりやや弱）
- 11 暗褐色土 （ロームブロック・炭化物少含、粘性強）
- 12 灰褐色土 （粘性極強、しまりやや強）
- 13 褐色土 （ロームブロック・ローム粒多含、粘性強、しまりやや弱）

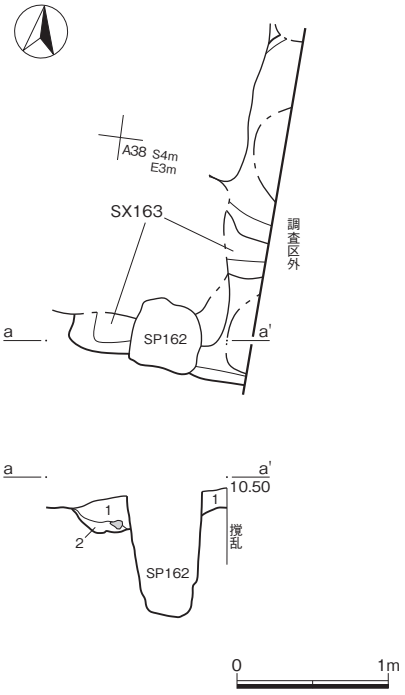


Ⅲ-19図 SU229、SU280



1　黒褐色土　（ローム粒含､粘性･しまりなし）
2　暗褐色土　（ローム粒多含､粘性･しまりなし）
3　暗茶褐色土（粘性･しまりなし）
4　灰褐色土　（青灰色粘土粒多含､ローム粒少含､しまりなし）
5　暗茶褐色土（炭化物ブロック少含､粘性･しまりなし）
6　青灰色粘土（炭化物ブロック多含､しまりなし）
7　黄褐色土　（白色砂粒多含､しまりなし）

Ⅲ-20図　SU266



1　茶褐色土　（ローム粒･焼土粒含､しまりやや強）
2　暗黄褐色土（ローム粒･ロームブロック主体､粘性やや強､しまりやや弱）

Ⅲ-21図　SX163

第2節　Ⅱ期の遺構

遺構形態、出土遺物年代から本段階に帰属すると推定される遺構は180基を数える（Ⅲ-22図）。内訳は土坑47基、墓壙127基、小穴6基で、墓壙は本段階総遺構数の7割強を占める。また墓壙は人骨、埋葬容器の存在から判断しているため、土坑とした遺構にも墓壙として構築された遺構が含まれている可能性は高い。以下、遺構種別順に各遺構の内容を記載する。

SK4（Ⅲ-23図）

c37グリッドに位置する土坑である。平面形は方形を呈しており、東西79cm、南北84cm、確認面からの深さ93cm。南側でSK42を切っている。坑底は円形で北側に傾斜している。立ち上がりはほぼ垂直である。

19世紀代の遺物がコンテナ3箱分出土している。特に3層からは火消壺2点（Ⅳ-1図2、3）と硬質瓦質蔵骨器（同図1）を出土していることから、改葬廃棄された墓壙の可能性がある。

SK29（Ⅲ-49図）

b38グリッドに位置する遺構である。重複するSP28より古く、ST30、ST106より新しい。平面形は不整円形を呈し、直径95～100cm、確認面からの深さ約50cmを測る。南側に奥行約20cmの三日月状のテラスを有し、テラス面、壁面ともに工具痕による凹凸が著しい。坑底は北壁寄りにあり、ほぼ平坦で直径約35～38cmを測る不整円形を呈す。覆土はローム粗粒を極多量含む褐色土の単層で、一気に埋め戻された様相を示す。これらの状況よりテラス部を含む南壁面は改葬時の掘削痕と考えられ、坑底規模から火消壺棺もしくは火葬蔵骨器が埋葬されていた可能性が高い。

遺物は19世紀代の陶磁器類などコンテナ1/2箱が出土した。

SK33（Ⅲ-24図）

A38グリッドに位置する遺構である。東側は調査区外は延びるため全容は不明である。調査区内での規模は南北長130cm、東西長75cmを測る。遺構中央に直径約55cmを測る坑底が位置する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底上約20cmで南北にテラス状の一段を有する。テラス部から確認面にかけては工具痕が認められ、改葬に伴う掘削痕と考えられる。坑底南東部はH鋼掘方の撹乱を受けているため断定はできないが、北壁が8の字状に開く様相が看取され、東西2基の重複と考えたい。但し西側を通るセクションライン4層、東側調査区壁面に観られる坑底上覆土はいずれもローム粒を極多量含む褐色土で、同時期に埋め戻された改装後の覆土と推定される。

遺物は破砕礫、土師質火消壺、硬質瓦質蔵骨器などの破片が覆土中位（2層）に集中廃棄されていた。遺構全体でコンテナ1箱が出土した。

SK63（Ⅲ-25図）

A・B36グリッドに位置する土坑である。重複するSP62より新しい。平面形は方形を呈しており、東西97cm、南北58cm、確認面からの深さ21cm。遺構の主軸方向角はE-1°-N。

近代の遺物が少量出土している。

SK70（Ⅲ-26図）

b37グリッドに位置する土坑である。平面形は方形を呈しており、東西104cm、南北74cm。遺構上部は削平されており、確認面からの深さは80cm。坑底から40～50cmでわずかに段が設けられており、坑底は東西40cm、南北25cmの方形となる。硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ-12、13図）が多数出土しており、改葬廃棄された墓壙の可能性がある。

19世紀代の遺物が出土している。

SK73（Ⅲ-27図）

c・d37グリッドに位置する土坑である。調査区の北端に位置しているが、SK45、SK54との切り合いは明らかでない。東西72cm、南北18cm、確認面からの深さ45cm。

SK92（Ⅲ-28図）

b38グリッドに位置する遺構である。東側はH鋼掘方の撹乱を受け、さらに調査区外に及んでいるため詳細は不明。規模は南北65cm以上、東西50cm以上、確認面からの深さ50cm以上を測る。坑底は平滑に整形されているが、壁は波打ちながら外傾して立ち上がり、中位より工具痕による凹凸が認められる。覆土は下位の2層にロームブロックを多量に含む褐色土、上位の1層に蔵骨器片を含む遺物が廃棄されていた。その様相から改葬後に蔵骨器類が廃棄された墓壙と考えられる。

遺物は硬質瓦質蔵骨器を含む19世紀代の陶磁器類などコンテナ1箱が出土した。

SK105（Ⅲ-29図）

b38 グリッドに位置する遺構である。西側は撹乱を受け、東側は SK29 によって消失している。北側に重複する ST106、ST107、南側に重複する ST111、ST112 より新しい。平面形は不整長方形を呈すると推測され、規模は東西 100cm 以上、南北 60cm、確認面からの深さ 25cm を測る。覆土は暗褐色土の単層で、硬質瓦質蔵骨器をはじめ多量の遺体埋納器片が廃棄されていた。特に東部より瀬戸・美濃産灰釉三耳壺（Ⅳ -19 図 1）が火葬骨を伴った状態で横位で出土した。その様相より明治 43 年墓地移転改葬時の廃棄土坑と考えられる。

SK110（Ⅲ -30 図）

c・d37・38 グリッドに位置する遺構である。北東部が調査区外に延び、南東部が撹乱を受けて遺存していないため、形態は不詳である。規模は東西 520cm 以上、南北 410cm 以上、確認面からの深さ最大 40cm を測る。重複する ST115、ST116、ST117 より新しく、ST21、ST34 より旧い。また本遺構下位にはⅠ期に帰属する SK114 が位置する。壁はやや開きながら立ち上がり、坑底には緩やかな凹凸が認められる。覆土は 3 層に分けられるが、ほぼ 1 層で埋められている。本遺構の上下で墓壙が確認されたことから、墓域経営期間のなかで土地利用に変化が有ったことが窺われる。

出土遺物には硬質瓦質蔵骨器、コバルト染付製品が含まれ、明治期に埋め戻された様相を示す。半截時に SK114 覆土まで掘り下げたため、SK114 と混在する遺物がコンテナ 9 箱、本遺構に帰属する遺物がコンテナ 5 箱出土した。

SK123（Ⅲ -31 図）

B・C37 グリッドに位置する土坑である。南側で ST125、東側で ST195 を切り、西側は ST59 に壊されているが、平面形は楕円形と考えられる。東西 66cm、南北 100cm、遺構の上部は削平されており、現状で深さは 26cm と浅い。

覆土中からは蔵骨器が少なくとも 3 点出土しており（Ⅳ -27 図）、改葬廃棄された墓壙の可能性がある。

その他 19 世紀代の遺物がコンテナ 2 箱分出土した。

SK171（Ⅲ -32 図）

b38 グリッドに位置する遺構である。東側に重複する ST176、北側に重複する SK29 より新しい。平面形は不整台形を呈し、長軸 65cm、短軸 62cm、確認面からの深さ最大 50cm を測る。坑底西側はローム上に構築されほぼ平坦だが、ST176 と重複する東側は一段下がり、覆土中にある。西側坑底上より傾いた状態で硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -40 図 2）が出土、その東に上半部を欠いた硬質瓦質蔵骨器（同図 1）が正位で出土した。それらの上層には同一個体破片及び蓋（同図 3）が廃棄されていた。いずれも容器内には火葬骨が入った状態で出土したが、欠損、廃棄されたことで覆土が混在した状態であった。また 1 の上部から寛永通宝 1 点（同図 4）が出土した。遺構規模と蔵骨器出土状態より、本遺構はこの 2 点を埋葬した火葬蔵骨器埋葬墓壙と考えられる。

遺物はほぼ完形の硬質瓦質蔵骨器 2 点を含むコンテナ 2 箱の陶磁器類が出土した。

SK173（Ⅲ -33 図）

B37・38 グリッドに位置する大形不整形遺構である。北壁で SB157（建物跡 2）、SK237（厩遺構便槽）と重複し、それより新しい。東に東西軸の不整隅丸長方形遺構と西に南北軸の不整楕円形遺構が密着した平面形を呈すが、東側が調査区域外に及ぶため全容は不明である。規模は東西 505cm 以上、南北最大 275cm、確認面からの深さ 150cm を測る。壁面坑底ともに工具痕による凹凸が著しい。セクション面に重複状況が認められないことと各々の形状から、採土坑として個々に掘削され同時期に埋め戻された可能性が高い。

遺物は覆土下～中層より多量の陶磁器、土器、瓦などコンテナ 26 箱が出土した。小碗、土瓶など喫茶具が多い。瀬戸･美濃産見込み木型打ち込みダミ掛け端反碗（Ⅳ -41 図 10、11、49 図 5）を含み、人工呉須が認められないことから 1860 ～ 70 年代の廃棄資料と推定される。

SK203（Ⅲ -34 図）

A36 グリッドに位置する土坑である。西側で SU201 を切っている。東西 85cm、南北 73cm。上部は削平されていて､坑底に堆積した暗褐色土層のみが残っていた。

遺物は少量出土しているが時期は不明。

SK261（Ⅲ -35 図）

c・d36 グリッドの調査区北西隅に位置する土坑である。そのため遺構の形状や規模は不明。確認面からの深さは 112cm。坑底は現状をみるかぎり平坦に造られている。遺構南側の立ち上がりは階段状になっている。ただし掘り込みの幅が一定でないことと、各段が平坦面をなしていないことから、遺構への昇降のためとは考えられない。1 層で硬質瓦質火消壺が（Ⅳ -67 図 4、5）、2 層で硬質瓦質蔵骨器蓋（同図 6）が出土しているが、遺構の形状・規模が不明なため、本遺構が本来墓壙であった

かは不明である。

SP38（Ⅲ-36 図）

b・A38 グリッドに位置する遺構である。北西側の ST88 と重複し、それより新しい。平面形は不整隅丸方形を呈し、一辺 40cm、確認面からの深さ 15cm を測る。坑底は工具痕による凹凸が著しく、壁はハの字状に立ち上がる。周辺に関連遺構はなく性格は不明。

遺物は陶磁器類が十数点出土している。

ST7（Ⅲ-37 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は楕円形を呈しており、東西 26cm、南北 30cm、確認面からの深さ 17cm。墓壙の南寄りに蔵骨器に転用された瀬戸・美濃系灰釉三耳壺が出土した（Ⅳ-1 図 1、2）。蔵骨器は肩の部分から上が露出していたので、墓壙の上部が削平されたことが窺えるが、底部は墓壙坑底の 2 層直上に位置しているので、原位置を保っていると考えられる。

三耳壺蔵骨器と同蓋以外に遺物は出土していない。

ST8（Ⅲ-39 図）

c・d37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は円形で、直径 70cm、確認面からの深さ 105cm。坑底には 6 基の小規模な掘り込みが認められる。円形木棺墓である。被葬者は成人男性の可能性がある。埋葬方向は北向きである。2 層から正面に「川越屋」と彫られている破損した石製墓標（中台）が出土した（Ⅳ-2 図 1）。改葬時に廃棄されたものと考えられる。「川越屋」は明治 40 年墓地検査願添付の墓碑銘録との検討から、北ノ部弐号 1360 号の等正寺総塔に記載された「川越氏」との関連が窺われる。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST9（Ⅲ-38 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は不整方形を呈している。東西 26cm、南北 26cm、確認面からの深さ 35cm。坑底は平坦で、ほぼ垂直に立ち上がる。墓壙の中央から鉄釉甕蔵骨器が出土した（Ⅳ-2 図 2）。覆土は 4 層からなり、埋葬器は 4 層、3 層で埋められた後、2 層でパックされている。2 層と 1 層の堆積状況から、原位置を保っていると考えられる。

蔵骨器のほか 19 世紀代の遺物が少量出土している。

ST10（Ⅲ-40 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は長方形と推定され、東側は撹乱によって壊されている。残存部分は東西 30cm、南北 65cm。確認面からの深さは南側の立ち上がりが 12cm、北側が 20cm で、坑底は南から北に段状に下がっている。最も深い部分は確認面から 25cm を測り、坑底標高は 10.4m。埋葬器として使用された火消壺は、墓壙の中央やや北よりの 2 層中から出土しており、改葬されていることが窺える。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST13（Ⅲ-42 図）

b・c36 グリッドに位置する墓壙である。調査区の西端で検出したため、墓壙・埋葬器ともに西側が壊されている。墓壙は現状で東西 50cm、南北 70cm、深さ 73cm。坑底標高は 9.4m。坑底は平坦に造られており、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は甕棺である。10 層上にやや西に傾いた状態で出土した。被葬者は未成人で、性別は不明である。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST21（Ⅲ-43 図）

c38 グリッドに位置する墓壙である。重複する SK110 より新しい。東側の ST104、ST23、ST85 と同軸上に位置し群を形成する。主軸方向角は E-4.1° -S を示す。平面形は隅丸長方形を呈し、南北 95cm、東西 78cm、確認面からの深さ 142cm（坑底標高 8.65m）を測る。坑底は一辺約 65cm を測る隅丸方形を呈し、中央に直径 45cm、深さ 5cm を測る円形の浅い落ち込みが存在する。壁はほぼ垂直に立ち上がり比較的丁寧平滑に整形されている。覆土は 5 層に分けられ、1 ～ 3 層は、4 ～ 5 層を掘り込んでいることから改葬時の掘方と推定される。

本遺構より 2 体の人骨が出土した。そのうち 1 体は坑底直上に位置し、西向きの座葬で埋葬された成人男性である。これを人骨 a とする。埋葬方向角は W-15° -S を示し、ほぼ西側を向いて埋葬されていた。周囲には円形の木枠痕が認められ、円形木棺に埋葬されていたことが確認される。もう 1 体は坑底上約 30cm、3 層中より出土した成人人骨で大腿骨が頭蓋骨より上方に位置すること、助骨、骨盤、手骨が存在しないことより、改葬時などに廃棄された可能性が高い。

遺物は 19 世紀代の陶磁器類などがコンテナ 1/2 箱出土した。

ST22（Ⅲ-41 図）

b・c38 グリッドに位置する墓壙である。南壁確認面から中位にかけて撹乱を受け、遺存していない。平面

形は不整方形を呈し、一辺約 45cm、確認面からの深さ 72cm（坑底標高 9.45m）を測る。坑底上 10cm にやや傾いた状態で火消壺が埋納されていた（Ⅳ -3 図 4）。蓋は破損し火消壺内に散乱し、身に掛かる部分のみが原位置を止めていた（Ⅳ -3 図 5）。また壺内はほぼ空洞で埋納後の土圧により破損したと推測される。壺内底部より直径約 20cm を測るかわらけが 2 枚正位に重なった状態で出土した（Ⅳ -3 図 2、3）。他に共伴遺物はなく性格は不明である。火消壺周囲及び上位は掘削土と考えられるローム土を主体とした黄褐色土で埋め戻されている。

出土遺物は既述したかわらけ、火消壺のほか 19 世紀代の陶磁器類が出土している。

ST23（Ⅲ -44 図）

c38 グリッドに位置する墓壙である。ST85、ST104 に挟まれて位置し、ST21 を含む一群と捉えられる。主軸方向角は E-4.1° -S を示す。南北方向の壁が撹乱を受け確認面から中位にかけて遺存していない。平面形は隅丸方形を呈し、一辺 80cm、確認面からの深さ 100cm（坑底標高 9.00m）を測る。坑底は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。全体的に比較的丁寧に整形されている。坑底上より屈葬人骨が 1 体出土した。埋葬方向角は N-47° -W を指し、墓壙列より約 45° 西向きに埋葬されていた。埋葬人骨は成人男性で、椎骨、助骨、骨盤、手指骨の一部が消失しているほかは比較的良好な状態で遺存していた。坑底上より東西セクションにて西壁から約 15cm の位置に木棺痕の立ち上がりが確認され、掘方形状と人骨出土状況から円形木棺と推定される。

遺物は 3 層を中心に礫、瓦を含むコンテナ 1/2 が出土した。その層位より木棺の腐朽によって陥没した可能性がある。

ST24（Ⅲ -47 図）

c38 グリッドに位置する大形墓壙である。北壁上部が撹乱で消失している以外は良好な状態で遺存していた。平面形は南壁東部に張り出しを有する不整長方形を呈し、東西 200cm、南北 120 ～ 140cm、確認面からの深さ最大 258cm（坑底標高 7.45m）を測り、坑底は砂質粘土層に達している。西壁には昇降用の足掛けと考えられる掘り込みが 3 箇所確認される。本遺構からは上下 2 段 5 基の甕棺が検出された。全て蓋石が外され改葬された状態だった。上段西側を甕棺 a（Ⅳ -4 図 1）、東側を甕棺 b（同図 2）、下段東側を甕棺 c（Ⅳ -5 図 3）、中央を甕棺 d（Ⅳ -6 図 5）、西側を甕棺 e（Ⅳ -5 図 4）とする。

掘方坑底平面形は不整長方形を呈し、下段に埋葬された 3 基の甕棺は口縁部レベルをほぼ揃えて埋葬され、各々の器高に応じて甕棺 c、e に対応する円形の掘り込みが設けられている。また北壁西部には坑底上約 60cm から確認面にかけて甕棺 a に対応する弧状の張り出しが、東部には坑底上約 70cm から確認面にかけて甕棺 b に対応する長方形の張り出しが作出されている。その結果、甕棺 b は甕棺 c の北東に、甕棺 a は甕棺 e の北西に各々約 1/2 ずれた状態を呈していた。

次に改葬状況について記載する。上段の甕棺 a 北壁側口縁部上に切石がやや南に傾いた状態で、さらに東側から甕棺 a 内に向けて 2 枚の切石がほぼ重なり合った状態で検出された。後者によって甕棺 a 口縁部は破損していた。甕棺 b は口縁部から胴部上半部までが全て欠損した状態で検出されたが、遺構内出土資料と接合しほぼ完形に復元できたことから、改葬時の破損廃棄と推測される。また上段甕棺 a、b 南側では 3 点の切石が下段甕棺口縁部にかかるように斜方向に投棄されていた。下段では甕棺 c 東側に切石が 2 枚南北方向に並んで、甕棺 e 北側に東西方向の 1 枚とその南西に 1 枚密着した状態で検出された。口縁部に密着し壁面と平行していることから、この 4 枚は埋葬時の原位置を保っていると考えられる。甕棺 a は甕棺 e 北側の切石上に、甕棺 b は甕棺 c 東側の切石上に位置し、下段甕棺も甕棺 d 全域と甕棺 e 南側、甕棺 c 西側の切石が取り外されて開口した状態を示していることから、南壁東部の張り出し部から掘削され、必要最低限の蓋石を取り外し全甕棺被葬者が改葬されたと推測される。

確認された覆土のうち 4 層は下段甕棺埋葬時の覆土、1 ～ 3 層が改葬時の埋め戻し土と考えられるが、掘削土をそのまま埋め戻したことで、上段甕棺周囲に明瞭な掘方プランを観察できなかった。しかし覆土中からほぼ完形の硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -6 図 7 ～ 10）が出土していることから、周辺一帯の改葬が同時に行われたことを窺わせている。

ST25（Ⅲ -45 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。掘方北側約 1/2 は撹乱によって消失している。そのため掘方の形態・規模は不明である。坑底東側にテラス状の一段があり、蔵骨器はそこに埋葬されていた。テラス部の坑底標高は 10.08m を測る。使用された蔵骨器は瀬戸・美濃産の灰釉二耳壺で同じく瀬戸・美濃産油受け皿を逆位に覆い被せ蓋として転用されていた。内部には多量の火葬骨と藁と思われる植物繊維の灰が充填されていた。

人形・玩具類が数点出土した。

ST26（Ⅲ-46 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。北西部は撹乱を受け遺存していない。南東部で重複する ST96 より新しい。掘方は直径約 50cm を測る不整円形を呈し、確認面からの深さ 24cm（坑底標高 9.98m）を測る。坑底、壁面ともに凹凸を有す。坑底西側より火消壺棺が検出されたが、蓋は破損し内底部付近に散乱していた。内底部より土葬人骨片が検出されたが、遺存状態は悪く、性別、年齢は不詳である。内底部から内体部下半にかけてスス状の黒色物質の付着が認められた。炭化した布の可能性もある。また崩落土上 1 層からも火消壺蓋片が出土したことから、改葬墓の可能性も考えられる。

ST27（Ⅲ-48 図）

A38 グリッドに位置する墓壙である。南側が大きく撹乱を受け、遺存状態は約 1/4 と悪い。西側の ST35、ST36、ST119、ST120 とほぼ同一軸線上に並び、主軸方向角はほぼ東西を示す。掘方平面形は円形と推定され、残存値で東西 45cm、南北 30cm、確認面からの深さ 30cm（坑底標高 9.95m）を測る。掘方は坑底、壁面共に工具痕による凹凸が認められる。坑底は直径 26cm を測り、丸味を持って壁面へ移行し垂直に立ち上がる。坑底直上にローム粒主体の暗黄褐色土を敷きその上に火消壺棺を埋設している。蓋は破損し内底部直上に V 字状に割れて落下した状態で検出された。

人骨は改葬されたためか検出されなかったが、火消壺棺内底部より、熊乗り金太郎（Ⅳ-8 図 3）が 1 点出土した。

ST30（Ⅲ-49 図）

b38 グリッドに位置する遺構である。重複する SK29 より古く、ST31、ST32 より新しい。本遺構は ST30、ST31、ST32 改葬時の掘削遺構と考えられ、壁面は各遺構と共有する。従って平面形は ST30 から ST32 までを含む不整長方形を呈し、東西 150cm、南北 90cm、確認面からの深さ 85cm（坑底標高 9.26m）を測る。覆土はローム土主体土で形成され、ST30、ST31、ST32 全て覆うように堆積している。この状況から本遺構は ST31、ST32 改葬時の掘方の可能性もある。

覆土中からは硬質瓦質蔵骨器 2 個体、火消壺片、瀬戸・美濃産灰釉壺片などの埋葬器関連遺物をはじめ、19 世紀中葉の陶磁器類などがコンテナ 1 箱出土している。その様相からも改葬後の埋め立てに伴って廃棄された資料と考えられる。

ST31、ST32（Ⅲ-49 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。両遺構とも ST30 の下部から検出され、覆土観察から ST31 が ST32 より新しいと判断される。

ST31 は直径約 85cm を測る不整円形を呈し、確認面からの深さ 110cm（坑底標高 9.00m）を測る。坑底はほぼ平坦に整形され、壁は若干ハの字状に開いて立ち上がる。一方 ST31 は ST32 の西側に位置し、ST31 によって大きく削平されている。残存部から平面形は隅丸方形と推測されるが、詳細は不明。坑底は ST31 より約 15cm 高い（坑底標高 9.15m）。6、7 層中より最少個体数 3 個体の人骨が検出された。頭蓋骨が南壁寄りの坑底ほぼ直上に、大腿骨が北壁際に集積されたように頭蓋骨上約 30cm から検出された。風化が著しく他部位の識別は困難で、目視では骨盤、椎骨は確認されなかった。人骨出土状況写真からも窺い知ることができるが、ST32 範囲内の人骨は ST31 範囲内人骨に比べて検出レベルが高く、各々の木棺墓に埋葬された人骨が改葬時に整理された可能性がある。また ST31 北東部壁際から瀬戸・美濃産灰釉壺の火葬蔵骨器（Ⅳ-8 図 1）が坑底直上に直立した状態で検出された。容器内には火葬骨が充填されているが、その横から蓋と思われる見込み輪禿灰釉皿（同図 2）が出土し、その状態からやはり他所から持ち込まれ廃棄された蔵骨器と考えられる。

ST34（Ⅲ-51 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。重複する SK110、ST147 より新しいと判断したが、人骨の検出状況から少なくとも 1 体は墓域改葬時に伴う廃棄行為によるあり方を示しており、構築年代は SK110 より旧いと考えられる。平面形は不整長方形を呈し、南北 90cm、東西 80cm、確認面からの深さ 70cm（坑底標高 9.38m）を測る。坑底中央には直径 50cm、深さ 15cm を測る不整円形の掘り込みが認められる。出土人骨頭蓋骨が北東部で掘り込み外に及んでいることから、埋葬器を想定した掘り込みとは断定できない。覆土は 5 層に分けられ、人骨は 4 層から 3 層下部にかけて位置していることから、1 ～ 3 層は改葬時の埋め戻し土と推定される。人骨はほぼ完全体の成人女性人骨と、その右上肢骨付近に頭蓋骨、歯牙、足指骨付近西壁際に上肢骨のみが確認された男性と推定される成人骨の 2 体が重なるように検出された。その様相から成人女性人骨が原位置を保つ本遺構の埋葬遺体で木棺に納められたと考えられる。成人女性人骨の埋葬方向角は W-18° -S を示す。

遺物は寛永通宝四文銭 11 波（Ⅳ-9 図 1）、19 世紀代

の陶磁器類などコンテナ 1 箱が出土した。また覆土中より鉄釘が出土したが、本遺構埋葬器に伴う資料か判断できない。

ST35（Ⅲ -50 図）

A38 グリッドに位置する墓壙である。東側に重複する ST36、北側に重複する ST177 より新しい。また南側 1/2 以上及び上部が撹乱を受け遺存状態は悪い。そのため平面形は不詳で、東西 50cm 以上、南北 36cm 以上、確認面からの深さ 26cm（坑底標高 10.10m）を測る。坑底から壁にかけて甕棺体部形状に沿うように丸味を持って立ち上がる。埋葬された甕棺は常滑焼大甕で、4 層上面に埋設され、底部から胴下半部にかけて 1/2 程度遺存していた。1 層には同一個体と考えられる胴部片が、2 層には骨片が含まれ、共に改葬時の埋め戻し土と考えられる。

遺物は甕棺をはじめ 19 世紀代の陶磁器類などが、コンテナ 1 箱出土した。

ST36（Ⅲ -50 図）

A38 グリッドに位置する墓壙である。西側に重複する ST35 より旧い。南壁は撹乱を受け一部遺存していない。平面形は直径約 33cm を測る不整円形を呈し、埋葬器サイズに合わせて掘削されている。確認面からの深さ 27cm（坑底標高 10.10m）を測る。坑底直上より火消壺棺が検出された（Ⅳ -9 図 1、2）。蓋は破損して内底部直上に落下した状態で確認され、人骨は認められなかった。覆土は 3 層に分けられ、7 層が掘方埋土、5、6 層が蓋陥没に伴うもしくは陥没後の埋土である。

遺物は埋葬器以外は少量である。

ST37（Ⅲ -52 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形を呈し、東西 52cm、南北 44cm、確認面からの深さ 35cm（坑底標高 9.82m）を測る。坑底、壁面共に工具痕による凹凸が認められる。覆土は 2 層に分けられるが、ローム粒を含む暗褐色土を基調とする。2 層中より数本の歯牙が検出された。

遺物は改葬時の混入と考えられる 19 世紀代の陶磁器類などが少量出土している。

ST39（Ⅲ -53 図）

A38 グリッドに位置する墓壙である。調査区際で検出され、掘方壁面はほぼ撹乱を受け遺存していない。重複する ST40 より新しい。平面形は不詳で、確認面からの深さ 31cm（坑底標高 10.10m）を測る。本遺構には硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -9 図 1、2）が埋葬されていた。蓋は破損し容器内に落下し、その上からは蔵骨器と考えられる瀬戸・美濃産灰釉壺などが重なって出土した。落下した蓋下部から火葬骨が充填された状態で検出され、本容器は埋葬時の状態を維持していると判断される。

ST40（Ⅲ -53 図）

A38 グリッドに位置する墓壙である。調査区際で検出され、掘方壁面は撹乱を受け遺存していない。重複する ST39 より旧い。平面形は不詳で、確認面からの深さ 26cm（坑底標高 10.05m）を測る。本遺構には硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -10 図 1、2）が埋葬されていた。蓋は破損し、上部に土砂が混入していたが、ほぼ火葬骨と炭化材で充填されていた。炭化材は火葬骨下位に埋納された傾向が看取される。その様相から埋葬時の状態を維持していると判断される。

ST42（Ⅲ -54 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で上部は削平され、北側を SK4 に、南側を SK41 に壊されている。残存部分は東西 53cm、南北 50cm、深さ 62cm。坑底標高は 10.2m。坑底はやや凹んでおり、立ち上がり部分には直径 10cm、深さ 20cm 程度の柱穴状の掘り込みが 4 基認められる。埋葬器は墓壙の形状から方形木棺と考えられる。被葬者は成人女性で、埋葬方向は西向きである。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST44（Ⅲ -55 図）

B37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は円形で、東西 54cm、南北 62cm。上部が削平されており深さは 22cm。坑底標高は 10.5m。坑底西側に埋葬器の痕跡と考えられる材の一部が認められることから埋葬器は円形木棺と考えられる。坑底ほぼ直上から大腿骨と推定される人骨片が出土したが詳細は不明。

19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST48、ST49（Ⅲ -56 図）

東西に隣り合う墓壙で、ST48 は c36 グリッド、ST49 は c36・37 グリッドに位置する。両者は SK47 より旧く、遺構確認面では切り合い関係は認められないが、土層断面をみると ST48 が ST49 よりも新しいことが窺える。

ST48 は平面形が方形を呈して、東西 76cm、南北 70cm、確認面からの深さ 91cm。坑底標高は 10.0m。坑

底は平坦に造られ、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は方形木棺と考えられる。被葬者は成人で女性の可能性がある。埋葬方向は南南西向きである。

ST49 は平面形が方形を呈して、東西 80cm、南北 72cm、確認面からの深さ 92cm。坑底標高は 10.0m。坑底は平坦に造られており、東側の立ち上がりは急斜度、西側の立ち上がりはほぼ垂直で、坑底から約 30cm の高さで段を造っている。あるいは ST48 と ST49 の間に、さらにもう 1 基別の墓壙が存在した可能性もあるが、調査時には検証できなかった。墓壙の形状から埋葬器は方形木棺であると考えられる。被葬者は成人女性で、埋葬方向は南向きである。その他踵骨が出土している。

遺物は灰釉二耳壺、碁石状土製品、寛永通宝、釘など（Ⅳ -10 図）、19 世紀代に帰属するものがコンテナ 2 箱分出土している。

ST50（Ⅲ -57 図）

c36 グリッドに位置する墓壙である。北側と西側が撹乱によって壊されているため、平面形は不明。現状で東西 25cm、南北 18cm、深さ 32cm。坑底標高は 10.4m。坑底は平坦に造られている。埋葬器として硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -10 図 1、2）が出土した。蔵骨器は墓壙坑底に水平に据えられている。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST51、ST52（Ⅲ -59 図）

ST51・ST52 は切り合った墓壙で、b・A37 グリッドに位置している。

ST51 の平面形は隅丸方形で、東西 67cm、南北 70cm、確認面からの深さ 80cm。東側の ST52 を切っている。坑底標高は 9.9m である。坑底は中央がやや凹んでおり、ロームブロックを主体とする 8 層が堆積していた。その上に埋葬器である甕棺（Ⅳ -11 図 2）が据えられており、周囲は暗褐色土（6 層・7 層）、暗黄褐色土（9 層）で埋められていた。甕棺は上部が削平されており、特に西側が著しい。被葬者は成人女性で、頭位方向は南西向きである。甕棺の内底部から肥前産の合子（Ⅳ -11 図 1）が出土した。

その他 19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST52 の平面は隅丸長方形を呈している。西側は ST51 に、東側は撹乱によって壊されているが、現状で東西 27cm、南北 46cm、深さ 26cm。坑底標高は 9.5m である。埋葬器は残っていないが、墓壙の形状から方形木棺であると推測される。覆土中から硬質瓦質蔵骨器の蓋（Ⅳ -11 図 1）や寛永通宝（同図 2 ～ 6）とともに、人骨片が出土した。瓦質蔵骨器は改葬時に廃棄されたものだろう。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST59、ST181（Ⅲ -60 図）

ST59、ST181 は南北に切り合う墓壙で、B・C37 グリッドに位置する。遺構断面図 1 ～ 3 層は改葬時の堆積層で、ST59 は 4 ～ 6 層、ST181 は 7 層を覆土とする。

ST59 は東西 84cm、南北 92cm である。坑底中央付近が凹んでおり、確認面からの深さは 93cm、坑底標高は 10.1m である。埋葬器は方形木棺であると考えられる。改葬されており、遺骨の一部が出土したが詳細は不明。

19 世紀代の遺物がコンテナ 3 箱分出土した。

ST181 は北側を ST59 に壊されているが、平面は不整円形を呈する。東西 78cm、南北 84cm、確認面からの深さは 84cm、坑底標高は 10.2m である。埋葬器は円形木棺と考えられる。

改葬されており、遺構内からは改葬時に廃棄されたと推定される人骨と坑底直上から寛永通宝（Ⅳ -51 図 1 ～ 6）を含む 19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST61（Ⅲ -58 図）

b37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は不整円形だが、北側が壊されている。現状で東西 50cm、南北 55cm、深さ 42cm。坑底標高は 10.5m。坑底は東にやや傾いていて、立ち上がりは緩斜度である。埋葬器は甕棺（Ⅳ -12 図）で、坑底に直に据えられていた。甕棺は遺構確認面で口縁部が露出した状態だった。人骨の遺存状況は悪く、詳細は不明である。

19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST65（Ⅲ -61 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。西側は SK8 に壊され、東側は SK236 を壊している。平面形は不整円形で東西 54cm、南北 70cm、確認面からの深さ 52cm。坑底標高は 10.1m。坑底は平坦に造られ、立ち上がりは急斜度である。また坑底の北西寄りに杭穴が認められる。埋葬器は木棺である。改葬廃棄されており、坑底と覆土中から人骨片が一部出土した。被葬者は未成人で、性別は不明。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST69（Ⅲ -62 図）

b37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は東側に開く不整方形で、東西 20cm、南北 24cm、確認面から

の深さ 18cm。坑底標高 10.6m。坑底は平坦で、暗黄褐色土（4 層）の上に埋葬器である硬質瓦質蔵骨器を据えている。遺構の上部が削平されているため、硬質瓦質蔵骨器は底部のみが残る状態だった。内底部上には炭化物が認められるが、人骨は残っていない。

ST72（Ⅲ -63 図）

A36・37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形を呈しており、東西 70cm、南北 78cm、確認面からの深さ 72cm。坑底標高は 9.8m である。坑底は平坦に造られており、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は甕棺（Ⅳ -13 図 1）で、坑底直上にやや東に傾いた状態で出土した。甕棺は改葬されており、上部は破壊されている。欠損した甕棺の一部は甕棺内の覆土に認められる。人骨は出土していない。寛永通宝（Ⅳ -13 図 2、3）が出土している。

19 世紀代の遺物がコンテナ 3 箱分出土した。

ST76（Ⅲ -64 図）

B36 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 80cm、南北 78cm、確認面からの深さ 53cm。坑底標高は 9.9m。坑底は平坦に造られており、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は方形木棺と考えられる。被葬者は成人男性で、埋葬方向は北東向きである。

数珠玉が 2 点出土している（Ⅳ -14 図）。そのほかコンテナ 1 箱分の遺物が出土しているが、時期は不明。

ST83（Ⅲ -65 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。西側に重複する ST84、南側に重複する ST175 より旧い。平面形は楕円形を呈すると推定されるが、重複遺構によって南から西壁が消失しているため、詳細は不明である。規模は東西 30cm 以上、南北 18cm 以上、確認面からの深さ 21cm（坑底標高 9.95m）を測る。遺構東寄りに瀬戸・美濃産灰釉壺（Ⅳ -14 図）を利用した火葬蔵骨器が埋設され、容器内には火葬骨が充填されていた。

出土遺物は、火葬蔵骨器のみである。

ST84（Ⅲ -65 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。東側に重複する ST83 より新しく、南側に重複する ST175 より旧い。平面形は不整楕円形を呈すると推定されるが、重複遺構によって南側が消失しているため、詳細は不明である。規模は東西 22cm 以上、南北 23cm 以上、確認面からの深さ 19cm（坑底標高 9.99m）を測る。遺構内には瀬戸・美濃産灰釉壺を利用した火葬蔵骨器が埋設され、容器内には火葬骨が充填されていたが、上半部は撹乱の影響を受け、遺存していない。

遺物は火葬蔵骨器のほか上部より陶磁器細片が出土したのみである。

ST85（Ⅲ -67 図）

c38 グリッドに位置する墓壙である。本遺構西側の ST21、ST104、ST23 とほぼ直線状に等間隔で位置し、ブロックを形成すると考えられる。西側上部が撹乱によって消失し遺存状態は悪い。平面形は隅丸方形を呈し、南北 73cm、東西 75cm、確認面からの深さ 70cm（坑底標高 9.20m）を測る。坑底は平坦で円形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。セクションライン 1 層中より火葬蔵骨器と考えられる瀬戸・美濃産灰釉壺（Ⅳ -14 図 1）が出土したが、火葬骨は確認されなかった。改葬時に廃棄された資料と推定される。坑底上約 40cm、遺構西側より 5 歳未満と推定される幼児骨が一体検出された。頭蓋骨北側に四肢骨、南側に椎骨、助骨がやや丸まった状態で確認された。周辺を精査したが、明確な掘方は検出されなかった。坑底直上に男性成人骨一体が、北向きで屈葬された状態で検出された。既述した本ブロック形成墓壙埋葬人骨は全て北方向に向いている。比較的良好な状態で検出されたにも関わらず、脳頭蓋、顔面頭蓋は一部しか確認されなかった。埋葬状態と掘方形態から円形木棺に埋葬されたと考えられる。また腰椎付近、左橈骨上端関節上からリング状銅製品（Ⅳ -14 図 3）が出土した。

ST87（Ⅲ -69 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。ST180、ST224、ST225、ST25、ST26、ST88、ST37、ST90、ST96 とブロックを形成すると考えられ、その南西に位置する。平面形は不整方形を呈し、南北 80cm、東西 68cm、確認面からの深さ 86cm（坑底標高 9.30m）を測る。坑底上約 30cm に奥行 5 ～ 10cm のテラスが巡っている。坑底、壁面共に緩やかな凹凸が認められる。覆土は 2 層に分けられるが、1 層中からは多量の硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -14 図 2、15 図 3 ～ 9）や切石片が出土し、墓地移転時に伴う廃棄層と考えられる。1 層下部テラスレベルから人骨が確認されたが、上肢骨など部分的な様相で、その直下から埋葬器と考えられる火消壺片が出土したことから、改葬時の廃棄の可能性が高い。

ST88（Ⅲ -69 図）

b・A38 グリッドに位置する墓壙である。ST180、

ST224、ST225、ST25、ST26、ST87、ST37、ST90、ST96 とブロックを形成すると考えられ、ST87、ST37 間に位置する。平面形は方形を呈し、南北 85cm、東西 80cm、確認面からの深さ 80cm（坑底標高 9.30m）を測る。坑底はほぼ平坦で、壁面は垂直に立ち上がり、工具痕による緩やかな凹凸が認められる。覆土は 3 層に分けられ、4 層中に頭蓋骨片が、5 層中に常滑焼大甕片が混在していた。坑底直上より、南向きに埋葬された成人女性人骨が 1 体検出された。両膝を立て手首を腰中央付近で組んだ座葬で、ほぼ完全な状態で遺存していた。常滑焼大甕片は出土人骨周辺に混在していたことから、甕棺改葬後に木棺を埋葬し、さらに上部に改葬廃棄した可能性がある。

遺物は、左足パーツを欠如したぶら人形（Ⅳ -16 図 1 ～ 4）、寛永通宝 4 枚（同図 5 ～ 8）を含むコンテナ 2 箱が出土した。

ST90（Ⅲ -66 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。ST180、ST224、ST225、ST25、ST26、ST87、ST88、ST37、ST96 とブロックを形成すると考えられ、東側の ST96 と重複し、それより新しい。掘方平面形は不整長方形を呈し、東西 34cm、南北 26cm を測る。坑底は掘方西側に位置し、平面形は不整方形を呈す。その東側には坑底上約 10cm に半月状のテラスが認められる。本遺構からは硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -16 図 1）が検出された。底部はテラス部よりやや低い位置にあり（底部標高 10.10m）、掘方内に埋土した上で埋葬されていた。また口縁部は確認面上約 5cm で確認されたことから、本遺構周辺はそれ以上の削平を受けていたことが窺われる。蔵骨器には蓋はなく、容器内は火葬骨片と土砂で充たされていた。

ST96（Ⅲ -68 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。ST180、ST224、ST225、ST25、ST26、ST87、ST88、ST37、ST90 とブロックを形成すると考えられ、西側の ST26、ST90 と重複し、それらより旧い。また東側は調査区域外に延び全容は不明である。平面形は不整円形を呈すると推定され、南北 75cm、確認面からの深さ 55cm（坑底標高 9.70m）を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。覆土は 3 層に分けられ、1、2 層と 3 層の境界が木棺痕跡で、円形木棺が埋葬されていたことが確認される。坑底直上より成人男性人骨が 1 体検出された。南向きの座葬で足首は交差し膝は V 字状に開き右膝状に頭蓋骨が乗った状態だった。ただし東側が調査区外に及び、かつ北側が H 鋼打設時の掘方撹乱により、頭蓋骨前面など一部は確認されなかった。

ST97（Ⅲ -70 図）

A38 グリッドに位置する墓壙である。東側の方形、西側の不整円形を呈する部分が接続した平面形態で、東西 175cm、南北 105cm を測る。さらに個別に観察すると東側方形部は坑底中央に一辺約 70cm、深さ 20cm を測る隅丸方形状の掘り込みを有し、西側不整円形部は坑底上約 80cm の壁面を掘り込み三日月状にオーバーハングさせた棚状施設を有す。また方形部の東側には東西 120cm、南北 80 ～ 90cm を測る不整長方形の掘り込みが接続する。調査当初は独立的平面形態より別遺構の可能性も考えられたが、覆土断面から東から西に向けて流入している様相が観察され、これらが最終的には同時期に埋め戻されたことが確認された。また不整長方形部には東西 2 段の階段状の坑底が形成されていることから、本墓壙改葬時に昇降目的のための掘削箇所と考えられる。従って本来の埋葬施設は、甕棺が伴う方形部及び不整円形部を示す。

確認面下約 180cm より複数枚の切石が確認された。不整円形部では長さ 90cm、幅 25cm を測る 2 枚の切石が北西－南東方向に並べられていた。切石の端部は既述したオーバーハング棚状施設に掛かっており、切石設置のために掘り込まれたと考えられる。切石直下には甕棺が埋葬され北東側約 1/2 が切石から外れている。方形部では甕棺の西半直上にほぼ南北方向に長さ 90cm、幅 30cm を測る 1 枚が据えられていた。またその周囲には 2 点に折り割られた切石が 4 点確認された。この様相より遺体（人骨）取りだしに必要な最低枚数の蓋切石を外して作業が行われたこと、地表面下 2m 以上の深く狭い空間で作業を行うため、取り外した蓋切石を邪魔にならないように折り割って仮置きし、作業終了後に一部が甕棺内に投棄され、埋め戻されたことが考えられる。

検出された甕棺のうち、西側不整円形掘方に伴う甕棺を a（Ⅳ -17 図 3）、東側方形掘方に伴う甕棺を b（同図 4）とした。甕棺口縁部レベルの壁面はローム層から粘土層に移行するレベルだった。a に伴う蓋切石は、既述した掘方の棚状オーバーハング部に組み込まれており、甕口唇部より約 10cm 浮いた状態で設置されていた。a 内から成人人骨と推定される足指骨が出土した。一方 b の蓋切石はほぼ密着した状態で検出された。b 内の覆土を掘り下げた所、覆土下層より有機質繊維主体の暗茶褐色土の堆積が確認され、用途不明の木材片数点、動物骨数点が出土した。また内底部付近より石製の歯と木製の

歯茎で製作された義歯（Ⅳ-17 図 5）が出土した。甕棺 b 被葬者の所持品と推定される。

遺物は改葬時の廃棄資料と考えられる硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ-18 図 6 ～ 10）をはじめ銅板転写染付碗（Ⅳ-17 図 1）などコンテナ 3 箱が出土した。1 層より「嘉永七寅年」「釋教信童女」「五月十三日」墓碑銘の石製墓標が出土したが、興安寺過去帳には記載なく、墓壙位置からも等正寺墓域埋葬者と推定される。

ST98（Ⅲ-71 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。ST106、SK28、ST30、ST32、ST31、ST112、ST111、ST176、ST84、ST83、ST175、ST113、ST174、ST178 とブロックを形成すると考えられ、重複する ST113 より新しい。平面形は不整楕円形を呈し、長軸 46cm、短軸 28cm、確認面からの深さ 30cm（坑底標高 9.85m）を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。坑底より若干浮いた状態で、瀬戸・美濃産灰釉三耳壺が検出され、周囲はローム主体土で埋め戻されていた。容器内は火葬骨と土砂で充たされていた。遺構確認段階で口縁部が露出していたこともあり、蓋は遺存していなかった。

ST104（Ⅲ-72 図）

c38 グリッドに位置する墓壙である。北東部及び南西部が撹乱を受けて消失している。重複する SK110 より新しい。東西方向に同一軸線上に位置する ST21、ST23、ST85 とブロックを形成し、全体の主軸方向角は E-4.2° -S を示す。平面形は長方形を呈し、長軸 98cm、短軸 70cm、確認面からの深さ 65cm（坑底標高 9.32m）を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。本遺構からは 3 体の人骨が重なって検出された。最上位の人骨 a は成人女性人骨で、上肢骨、下肢骨、骨盤のみ検出された。肢骨は放射状に重なって確認され、改葬時の廃棄の可能性も考えられる。中位の人骨 b は若年成人骨で、頭蓋骨、上肢骨、下肢骨、骨盤が検出された。骨盤は西壁付近にあり北西方向を向いている。下肢骨は V 字状に強く屈曲し足首が揃うような状態であった。上肢骨はほぼ下肢骨直下でやはり V 字状に強く屈曲し手首が揃うような状態であった。下顎骨は比較的良好な状態で遺存していたが、顔面頭蓋の遺存状態は悪く、脳頭蓋は確認されなかった。最下位の人骨 c は成人男性人骨で、ほぼ坑底直上に位置する。骨盤は北壁西寄りにあり、北西方向を向いて埋葬されていた。遺存状態は 3 体のうち最も良好で、部分的な残存状況も含め全ての部位が確認された。覆土の観察からは埋葬器の痕跡は確認されなかったが、人骨 b、c の各部位は比較的原位置を保っていることから、人骨 c が白骨化し、上部に空洞もしくは陥没したところに、人骨 b を追葬したと推定される。

副葬品はなく、遺物は覆土中より 19 世紀代の陶磁器類が少量出土したにすぎない。

ST106（Ⅲ-74 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。南側で墓地移転時の廃棄遺構と推定される SK105 と、北側で同様の SK29 と重複し、それより旧い。その影響を受けて遺存状態は悪く、平面形態、規模の詳細は不詳である。残存値で長軸 45cm、短軸 35cm、確認面からの深さ 24cm（坑底標高 9.9m）を測る。坑底は凹凸が著しく、壁面は北壁から西壁にかけて一部が遺存しているに過ぎない。坑底東寄り直上より蓋付き土師質蔵骨器が検出された（Ⅳ-20 図 1、2）。その形状より蔵骨器専用器と考えられる。蓋は土圧で破損していたが、ほぼ原位置を維持し、容器内は火葬骨で充たされていた。

ST111（Ⅲ-75 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。南側に重複する SK103 より新しく、西側に重複する ST112、北側に重複する SK105 より旧い。平面形は不整形を呈し、南北 76cm、東西 70cm 以上、確認面からの深さ 70cm（坑底標高 9.38m）を測る。3 層には埋葬器類が廃棄され、4 ～ 6 層からは北壁際に下肢骨が揃えられたように検出され、その南側に下顎骨、椎骨などがまとまった状態で検出された（Ⅲ-75 図「ST112 人骨 b・ST111 人骨出土状態（南から）」写真右上）。個体識別はできなかったが、最低成人人骨 3 体、5 歳未満の未成人人骨 2 体が確認された。人骨出土レベルは南側テラス直上に位置すること、テラス下の 8 層がローム土主体土であることから、テラス部を含む 8 層上面レベルより上部は改葬時もしくは人骨廃棄時の掘削範囲と推測される。

遺物は人形・玩具類（Ⅳ-25 図）を含むコンテナ 1 箱が出土した。

ST112（Ⅲ-75 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。北側に重複する SK105 より旧く、東側に重複する ST111 より新しい。上部は撹乱の影響を受け残存していない。平面形は直径約 70cm を測る不整円形を呈し、確認面からの深さ 60cm（坑底標高 9.52m）を測る。坑底、壁面共に工具痕による凹凸が認められる。上部に散乱していた人骨 a を取り上げたところ、坑底ほぼ直上より成人男性と推定

される人骨 b が検出された。骨盤は南西を向き、下肢骨は膝を強く曲げた状態でその下に「く」の字に折れた上肢骨が位置する。頭蓋骨はほぼ骨盤上で確認されたが、椎骨、助骨は確認されなかった。

遺物は陶磁器類が少量出土したにすぎない。

ST113（Ⅲ -76 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。改葬時の廃棄遺構と考えられる SK172、ST178 及び火葬墓 ST98、ST174 と重複し、いずれよりも旧い。そのため遺存状態は悪い。平面形は不整長方形と考えられ、長軸 70cm 以上、短軸 55cm 以上、確認面からの深さ 42cm（坑底標高 9.75m）を測る。2 層直上より、ほぼ南南西向きの幼児人骨（3 ～ 4 歳児）1 体がほぼ完全な状態で検出された。上肢骨はくの字状、下肢骨は V 字状に折れ曲がり、頭蓋骨はほぼ直立状態を呈していた。右肩甲骨付近から副葬品と考えられる寛永通宝 1 点、花魁人形 1 体（Ⅳ -25 図 1）が出土した。埋葬施設は木棺と推定されるが、痕跡は確認されなかった。

ST115（Ⅲ -77 図）

c38 グリッドに位置する墓壙である。SK100 より旧い。平面形は一辺 50cm を測る方形を呈し、確認面からの深さ 40cm（坑底標高 9.38m）を測る。坑底は平坦で壁は垂直に立ち上がる。坑底直上より南向きの未成人（5 歳以下）人骨がほぼ完全な状態で検出された（近藤 2016、人骨 a）。下肢骨は膝を強く折り開脚した状態で検出され、屈葬による埋葬と判断できるが、木棺の痕跡は確認されなかった。また本人骨上部の 1 ～ 2 層にかけて別個体の未成人人骨と土師質火消壺片が出土し、上位に火消壺棺による未成人土葬墓が存在した可能性が高い。

覆土中より人形・玩具類（Ⅳ -26 図）、土師質火消壺を含むコンテナ 2 箱が出土したが、人骨 a に伴う副葬品はない。

ST116（Ⅲ -78 図）

c・d38 グリッド調査区北端に位置する墓壙である。北側は調査区外へ延び、SK110 より旧い。極一部ではあるが、坑底付近で北東角が確認されたことより、平面形は方形を呈すると判断される。坑底は平坦で西壁、南壁はほぼ垂直に立ち上がる。東壁では坑底上約 10cm に奥行約 15cm のテラスが確認された。規模は南北 80cm 以上、東西 105cm、確認面からの深さ 88cm（坑底標高 8.95m）を測る。覆土は 4 層に分けられるが、土葬観察の結果 1、2 層と 3 層との境界が急角度で立ち上がること、2 層には火葬骨、土師質蔵骨器が多量に含まれることから、本遺構埋没後に廃棄目的で掘削された別遺構の可能性が高い。4 層からは 3 体の人骨が検出された。1 体は未成人骨（6 歳以上）でテラスレベル付近から検出された（人骨 a）。南壁寄りに頭蓋骨、その北側に上下肢骨、椎骨、骨盤などが散乱した状態で検出された。さらに坑底直上付近より、2 体の成人女性人骨が検出された。2 体分の頭蓋骨が北東角付近にその周囲に椎骨、助骨を除くほぼ全身骨が、上位の人骨同様、散乱した状態で検出された。人骨下には土師質蔵骨器片も認められ、3 体共に白骨化後に廃棄されたことを窺わせる。遺構形状から本来方形木棺が埋葬された墓壙と推定される。

遺物は図示したかわらけ、ひょうそく、寛永通宝、砥石（Ⅳ -26 図）をはじめコンテナ 2 箱が出土した。

ST117（Ⅲ -79 図）

c38 グリッドに位置する墓壙である。SK110 より旧い。平面形は直径約 75cm を測る不整円形を呈し、確認面からの深さ 25cm（坑底標高 9.25m）を測る。坑底はほぼ平坦で壁は垂直に立ち上がる。その形状から円形木棺を埋葬した遺構と考えられる。坑底直上より東向きに屈葬された成人男性人骨が検出された。足はかかと付近で交差し指先は外側に開いている。腕はくの字状に折れ、椎骨上で手指が合わさるような状態を呈していた。遺存状態は非常に良好である。覆土は 3 層に分けられるが、人骨は 3 層中にあり、ローム粒を多量に含む 1、2 層は木棺腐朽後の陥没土層と考えられる。断面観察では木棺痕は確認されなかった。

遺物は覆土中より少量出土したのみで、副葬品は認められなかった。

ST119（Ⅲ -80 図）

A38 グリッドに位置する墓壙である。東側で ST120 と重複する。平面形は隅丸長方形を呈し、南北 83cm、東西 60cm 以上、確認面からの深さ 90cm（坑底標高 9.45m）を測る。2 層中北壁寄りから蔵骨器を逆さにして内容物を取り出したような饅頭様にまとまった胎児と推定される未成人人骨が、南壁寄りには、それよりやや低い位置から破損した火消壺棺と 18 ヶ月未満と推定される未成人人骨が検出された。後者の胸部付近から白磁紅皿（Ⅳ -26 図 1）や人形・玩具類（同図 3、4、Ⅳ -27 図 5、6）が出土した。さらにこの人骨下 3 層中より埋葬人骨ごと投棄されて押し潰れた状態の火消壺棺が検出された。共伴する未成人人骨は 18 ヶ月未満と推定される。さらに 4 層中坑底ほぼ直上から、やや開脚気味に膝

を折り、上半身はうつ伏せ状態の成人男性人骨がほぼ完全な状態で検出された（Ⅲ -80 図写真）。その様相から円形木棺に埋葬されたと判断できる。こうした状況より 1 ～ 3 層は、本遺構掘方範囲と近似しているが後世に掘削された改葬廃棄遺構と考えられ、本来の ST119 は壁面の立ち上がり状況等から ST120 より旧いと判断される。

遺物は改葬廃棄墓の副葬品と考えられる人形･玩具類、火消壺棺をはじめコンテナ 1 箱が出土した。

ST120（Ⅲ -80 図）

A38 グリッドに位置する墓壙である。西側で ST119 と重複する。平面形は一辺約 55cm を測る不整隅丸方形を呈し、確認面からの深さ 90cm（坑底標高 9.35m）を測る。坑底平面形も隅丸方形を呈し、一辺約 40cm を測る。西壁寄り 6 層上面付近より饅頭状に固まった胎児もしくは新生児と推定される未成人人骨が検出された。7 層上面付近から北北東向きに屈葬された 6 歳以上の未成人人骨がほぼ完全体で検出された（Ⅲ -80 図人骨 a）。検出状況から円形木棺に埋葬されたことが窺われる。さらに坑底直上より 5 歳以下の未成人人骨の頭蓋骨､上肢骨、下肢骨の一部が火消壺棺と共に検出された。こうした状況から本遺構掘削時もしくは改葬後に改葬人骨が廃棄され、その直上に円形木棺に納められた幼児遺体が埋葬され、さらに胎児もしくは新生児遺体が埋葬または改葬されたと推測される。最上層の 5 層には火消壺片などが含まれることから、最終的には改葬時の廃棄遺構に転用された可能性がある。

ST121（Ⅲ -81 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。南側は SK220 を壊している。平面形は方形で、東西 84cm、南北 72cm、確認面からの深さ 43cm。坑底標高は 9.9m。坑底にはやや凹凸があり、立ち上がりはほぼ垂直である。西壁は坑底から 20cm の高さで段を有している。段の部分からは瓦片が出土した。埋葬器は墓壙の形状から方形木棺と考えられる。被葬者は成人女性で、埋葬方向は北西向きである。

遺物は少量出土しているが時期は不明。

ST125（Ⅲ -82 図）

B・C37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は南北に長い楕円形だが、坑底は方形を呈している。東西 70cm、南北 90cm、確認面からの深さ 100cm。坑底標高は 10.1m。坑底は平坦に造られており、立ち上がりは急斜度である。埋葬器は墓壙の形状から円形木棺と考えられる。10 ～ 15 層は埋葬器と墓壙南側に生じた隙間を充填した堆積と考えられるので、埋葬器は墓壙の北寄りに据えられたものと考えられる。出土人骨は最低 3 個体が重層的に検出された。Ⅳ -82 図掲載写真は上から上位の未成人骨（左下頭蓋骨は中位人骨）、中位の成人女性人骨（埋葬方向は南向き）､下位性別不明成人人骨である。

覆土中位から寛永通宝（Ⅳ -28 図 2 ～ 6）などが出土した。

ST126（Ⅲ -83 図）

b37 グリッドに位置する墓壙である。撹乱によって西側が大きく破壊されているが、平面形は方形を呈していたと考えられる。東西 24cm、南北 48cm、確認面からの深さ 32cm。埋葬器は木棺と考えられる。人骨の一部が出土しているが、遺存状態が悪く詳細は不明。

遺物はコンテナ 1 箱分が出土しているが時期は不明。

ST128（Ⅲ -73 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。南側を ST65 に壊されているが、平面は不整円形を呈している。東西 34cm、南北 34cm、確認面からの深さ 24cm。坑底標高は 10.4m。坑底は北側が平坦に造られているが、南側には掘り込みがある。埋葬器は火消壺棺（Ⅳ -28 図）で、坑底の凹んでいる部分に黄褐色土を埋めて（6 層）平坦にした上に据えている。埋葬器は蓋を伴っていたが、破壊されており内部には暗褐色土（4 層）が堆積していた。

19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST129（Ⅲ -84 図）

b36 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形を呈しており、東西 74cm、南北 74cm、確認面からの深さ 88cm。坑底標高は 9.3m である。南側が削平されており、埋葬器である甕棺（Ⅳ -28 図 2）は確認面で露出した状態で検出した。坑底は南側が凹んでおり、立ち上がりはほぼ垂直である。甕棺は墓壙の南西寄り坑底直上に据えられており、西壁と南壁に接している。北壁と甕棺との間に堆積していた土層状況は不明である。改葬されており、人骨は一部しか残されていないが、被葬者は性別不明の成人である。甕棺内底部の植物質の堆積物は樒など埋葬時に添えられた植物の可能性がある。毛髪の一部と副葬された陶磁器類が出土している。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST130（Ⅲ -85 図）

b37 グリッドに位置する墓壙である。南側の ST139 を壊している。平面形は円形を呈しており、東西 80cm、南北 100cm、確認面からの深さ 44cm。坑底標高は 10.4m。坑底は北側にやや傾斜している。立ち上がりは南壁が急斜度であるのに対して、北壁は段状に成形されている。埋葬器は甕棺で、墓壙の西寄りから底部のみが出土した。

19 世紀代の遺物がコンテナ 2 箱分出土した。

ST131、ST148（Ⅲ -86 図）

ST131、ST148 は南北に切り合う墓壙で、c36･37 グリッドに位置する。

ST131 の平面形は方形を呈しており、北西側で ST148 と切り合っている。両者の新旧関係は覆土の堆積から明らかにすることはできなかった。ST131 は東西 69cm、南北 122cm。坑底は南側が平坦に造られているが、北側には一段の掘り込みが認められる。本遺構の土層断面は遺構の東寄りで記録しているので、この部分は東側に隣接する ST267 の一部である可能性が高い。また ST131 の南側の形状をみると、ST131 の埋葬器は方形木棺であると考えられる。その場合、ST131 と ST148 との間にはもう一基別の墓壙が存在した可能性もある。ST131 からは成人女性のほか、性別不明の高齢者と未成人の 3 体分の人骨が出土した。

遺物は硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -29 図）を含む 19 世紀代のものがコンテナ 1 箱分出土した。

ST148 は円形を呈している。規模は東西 34cm、南北 64cm。被葬者は男性の可能性のある成人で、埋葬方向は北向きである。幼児骨が混入している。こちらも ST131 と同様に改葬後の廃棄と考えられる。

ST133（Ⅲ -87 図）

B36・37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 60cm、南北 70cm。上部が削平されており確認面からの深さ 60cm。底部標高 9.6m。坑底は平坦に造られ、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は甕棺（Ⅳ -29 図）で、墓壙のやや西寄りに据えられていた。甕棺は坑底直上の一部に認められる灰褐色土（4 層）上に据えられていることから、4 層は甕棺を据えるために盛った土であると考えられる。甕棺は西側にやや傾いた状態で出土しており、墓壙とともに上部は削平されている。

ST136、ST147（Ⅲ -88 図）

ST136、ST147 は南北に切り合う墓壙で、c37 グリッドに位置する。

ST136 の平面形は方形を呈している。東西 52cm、南北 60cm、確認面からの深さ 28cm。坑底標高は 10.7m。墓壙の形状から埋葬器は方形木棺と考えられる。改葬されており、坑底上から頭骨のみが出土した。また墓壙の北側で甕棺の破片が出土したが、これは改葬時に別の墓から混入したものである。被葬者は性別不明の未成人である。

19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST147 は北側を ST136 に壊されている。平面形は円形を呈しており、残存部で東西 30cm、南北 20cm、深さ 44cm。坑底標高は 10.3m。埋葬器は火消壺棺（Ⅳ -33 図）である。人形が出土した（Ⅳ -33 図 2 ～ 6）。

19 世紀代の遺物がコンテナ 2 箱分出土した。

ST140（Ⅲ -90 図）

b37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は不整方形を呈しており、東西 96cm、南北 104cm、確認面からの深さ 255cm。坑底標高は 8.2m。坑底は平坦に造られており、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は甕棺（Ⅳ -30 図）で、墓壙のやや北寄りに据えられている。堆積状況から 10 層を掘り込んで据えたことが推測される。甕棺は上部が欠損していることから、本来はこの甕棺の上に複数の埋葬器が埋葬されていたと考えられる。覆土からは 4 点の硬質瓦質蔵骨器が出土した（Ⅳ -30 図 2 ～ 5、31 図 6 ～ 8）。改葬後に廃棄されたものである。

19 世紀代の遺物がコンテナ 2 箱分出土した。

ST144（Ⅲ -89 図）

C37 グリッドに位置する墓壙である。大部分が破壊されており、現状で東西 70cm、南北 62cm、深さ 16cm。坑底標高 9.95m。埋葬器は木棺である。覆土は暗黄褐色土を主体とした 1 層のみである。

遺物は少量出土しているが時期は不明。

ST145（Ⅲ -93 図）

A37 グリッドに位置する墓壙である。上部は削平されており、遺構確認面で埋葬器である甕棺（Ⅳ -32 図）の口縁部が露出していた。墓壙の規模は東西 64cm、南北 74cm、確認面からの深さ 78cm。坑底標高は 10.1m。坑底の中央が凹んでおり、甕棺はこの凹みを埋めたロームブロック（10 層）上に据えられていた。被葬者は成人男性である。骨盤の方向から埋葬方向は南東向きであったことが推測される。改葬後の廃棄である。

遺物はコンテナ 1 箱分が出土しているが時期は不明。

ST146（Ⅲ-94 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 100cm、南北 80cm、確認面からの深さ 100cm。坑底は南側から北側に傾斜している。覆土については不明。埋葬器は方形木棺と考えられる。改葬後の廃棄で、坑底上から人骨片が数点出土しているが詳細は不明。

蔵骨器と考えられる瀬戸・美濃系鉄釉壺（Ⅳ-32 図）など 19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST149（Ⅲ-95 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 80cm、南北 76cm。掘方の上部は削平されており、確認面からの深さ 82cm。坑底標高は 9.6m。坑底は平坦に造られており、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は甕棺（Ⅳ-33 図）で、ロームブロック主体の暗黄褐色土（9 層）上に据えられている。甕棺の位置は墓壙のほぼ中央である。被葬者は成人男性である。埋葬方向は骨盤の位置から北東である。

出土遺物には上部の改葬後に廃棄されたと考えられる硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ-34 図 3 ～ 6）などの 19 世紀代の陶磁器・土器、煙管（同図 8、9）、寛永通宝（同図 7）などがコンテナ 2 箱分出土した。

ST153、ST154、ST155、ST199（Ⅲ-97 図）

ST153、ST154、ST155、ST199 は墓壙で、b37 グリッドに位置する。

ST153 の埋葬器は方形木棺である。南側の一部が SP152 によって、北側の一部が ST154 によって壊されている。また北側の ST155 を壊している。平面形は方形で東西 57cm、南北 68cm、確認面からの深さ 33cm。坑底標高は 10.4m。覆土は土層断面図の 2 層と 3 層が該当する。このうち 3 層から人骨と遺物が出土した。坑底直上には頭部を南に向けた人骨が存在し、その上から火消壺棺（Ⅳ-37 図 4）の破片と人骨片とが出土した。この状況から ST153 の上部には、別の火消壺棺を有す墓壙が存在したことが推測される。2 層が 3 層よりも北側に拡がっている堆積状況もこれを反映したものだろう。

遺物はコンテナ 1 箱分が出土しているが時期は不明。

ST154 は 2 層を掘り込んで構築された平面形が楕円形を呈した墓壙である。東西 37cm、南北 40cm、確認面からの深さ 12cm。

火消壺棺（Ⅳ-38 図 1、2）が出土している。

ST155 は平面形が方形を呈した墓壙である。覆土は 4 層が該当する。東西 27cm、南側は ST153 で壊されており、現状で 38cm。確認面からの深さ 35cm。坑底は北側へ傾斜しており、埋葬器である火消壺棺（Ⅳ-38 図）は坑底直上に、南側へ傾いた状態で検出された。

19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST199 は平面形が方形で東西 53cm、南北 49cm。坑底標高は 10.5m である。大部分を ST155 に壊されているが、墓壙の形状から埋葬器は方形木棺と考えられる。被葬者は 4 歳程度の未成人（性別は不明）である。

玩具類（Ⅳ-54 図）など 19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST160（Ⅲ-96 図）

b・A36・37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東側が壊されている。現状で東西 34cm、南北 40cm。確認面からの深さ 37cm。坑底標高は 10.5m である。墓壙の形状から埋葬器は方形木棺と考えられる。改葬後の廃棄で、人骨は坑底に一部残存しているのみである。被葬者は性別不明の未成人である。

遺物は少量出土しているが時期は不明。

ST174（Ⅲ-98 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。北側に重複する ST178、西側に重複する ST113 より新しい。重複する ST113 を先行して調査したため西壁を確認することができなかったが、平面形は楕円形を呈すると考えられ、長軸 43cm、短軸推定 25cm、確認面からの深さ 35cm（坑底標高 9.83m）を測る。坑底北壁寄りに釦状摘まみを持つ瀬戸・美濃産鉄釉蓋（Ⅳ-50 図 4）が逆位で乗せられた瀬戸・美濃産灰釉三耳壺（同図 3）を使用した火葬蔵骨器が確認された。蓋を外したところ瀬戸・美濃産灰釉合子（同図 1、2）が納められ、合子内には火葬歯牙と非火葬歯牙が数本納められていた。

ST175（Ⅲ-100 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。重複する SK171 より旧く、ST83、ST84、ST176 より新しい。平面形は不整形を呈し、長軸 68cm 以上、短軸 65cm、確認面からの深さ 40cm（坑底標高 9.75m）を測る。坑底直上から瀬戸･美濃産灰釉三耳壺（Ⅳ-50 図 1）、硬質瓦質蔵骨器、火消壺棺（同図 2）の 3 基の蔵骨器が確認された。いずれも撹乱によって上部は破損していた。そのうち灰釉三耳壺、硬質瓦質蔵骨器には火葬骨が納められていた。火消壺棺は蓋破片が内底部に落ち込んだ状態で人骨は確認されなかった。

ST176（Ⅲ-100 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。重複する SK171、ST84、ST175 より旧い。平面形は円形を呈し、直径 73cm、確認面からの深さ 103cm（坑底標高 9.17m）を測る。坑底上からほぼ完全な成人女性人骨が検出された。膝は開脚気味に折り曲げ、手首は胸付近で併せられていた。また股間付近から副葬品と考えられる瀬戸・美濃系灰釉五合瓶（Ⅳ -50 図）が出土した。掘方形態、埋葬状態から円形木棺と考えられる。

ST177（Ⅲ -99 図）

A38 グリッドに位置する墓壙である。南側に重複する ST35 より旧く、ST230 より新しい。平面形は直径約 70cm を測る不整円形を呈し、確認面からの深さ 48cm（坑底標高 9.68m）を測る。覆土はロームブロックを多量に含む褐色土で木棺腐朽陥没時の埋め戻しもしくは改葬時の埋め戻し土と推定される。坑底ほぼ直上より北向きに埋葬された 6 歳以上未成人女性人骨が検出された。ほぼ完全な状態で遺存し、下肢骨は膝を開脚気味に折り曲げ足首で交差し、手首は腰付近で合わさっていた。

遺物は副葬品と考えられる天神と金属製品や（Ⅳ -50 図）、改葬時の廃棄と推定される陶磁器類がコンテナ 1 箱出土した。

ST178（Ⅲ -91 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。北側が H 鋼掘方で大きく撹乱されている。西側に重複する ST113 より新しく、南側に重複する ST174 より旧い。平面形は不整形を呈すると推測されるが、撹乱などの影響で詳細は不明である。残存長で南北 60cm、東西 40cm、確認面からの深さ 55cm（坑底標高 9.55m）を測る。覆土は 4 層に分かれるが、そのうち 4 層は被災資料を含む瓦片が大量に廃棄され、焼土粒、炭化物も多量に含まれている。その様相から火災後の廃棄層と考えられ、蔵骨器を伴う本遺構が入れ子状に構築されたと推測される。従って土層堆積状況から蔵骨器埋葬に直接伴う覆土は 1 層のみの可能性が高い。4 層直上より見込みドーナツ状無釉灰釉皿で蓋された瀬戸・美濃産鉄釉壺が検出された（Ⅳ -51 図）。H 鋼撹乱の影響で胴部約 1/3 を欠損し、壺内は焼土粒を含む暗褐色土で充たされていた。

ST180（Ⅲ -101 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。上部を撹乱によって大きく削平され、坑底及び南壁の一部が遺存しているのみである。そのため平面形、規模ともに不詳である。坑底標高は 9.4m を測る。坑底直上より未成人人骨 1 体が検出された。遺存状況は悪く、歯牙、上肢骨、下肢骨、椎骨、助骨の一部が確認された。下肢骨、椎骨の位置関係から東向きに埋葬されたと判断される。腹部付近に副葬品と推測される京・信楽産と考えられる三彩燗徳利が出土した（Ⅳ -51 図）。

ST183（Ⅲ -92 図）

A37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 68cm、南北 76cm、確認面からの深さ 43cm。坑底標高 9.9m。上部が削平されているが、特に西側が著しい。坑底は平坦に造られている。墓壙の形状から埋葬器は方形木棺と考えられるが、3 層中からは硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -52 図）が出土している。改葬後の廃棄である。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST184（Ⅲ -102 図）

A36 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 69cm、南北 64cm。上部は削平されている。特に北側が著しく、南側の深さが 37.4cm なのに対して、北側は 12.5cm である。坑底標高は 10.2m。坑底はほぼ平坦に造られており、立ち上がりは垂直である。墓壙の形状から埋葬器は方形木棺であると考えられる。改葬後の廃棄のため人骨は一部が残るのみだったが、被葬者は成人男性である。埋葬方向は北向きである。

時期不明の遺物が少量出土した。

ST186（Ⅲ -103 図）

b37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 90cm、南北 83cm、確認面からの深さ 112cm。坑底標高は 9.1m。坑底は平坦に造られており、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は方形木棺で、墓壙のやや西寄りの坑底直上から出土した。木棺の東側はロームブロック主体の 13 層で墓壙との間が充填されている。木棺は下部のみが残存しており、内部には覆土（11、12 層）が堆積していた。人骨は認められないことから、改葬後の廃棄である。10 層上から甕棺の蓋石が出土した。それより上層から、陶器製および硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -52 図 2 ～ 5、53 図 6）や、煙管（53 図 8、9）、寛永通宝（同図 7）などの遺物が出土している。上部の墓の改葬に伴うものであろう。

19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST187（Ⅲ -105 図）

b・c36・37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 75cm、南北 70cm。確認面からの深さ

は169cm。坑底標高は9.05m。坑底は東側がやや高くなっている。埋葬器は甕棺（Ⅳ-53図）で、墓壙のやや東寄りに、8層上に据えられていた。甕棺内からは改葬後に残された人骨が出土した。被葬者は成人男性で、骨盤から北北東を向いていたことが確認される。

甕棺上部にも人骨が出土している。甕棺の上に追葬されたもので、埋葬器は方形木棺と考えられる。被葬者は成人男性で、骨盤から北西を向いていたと考えられる。

19世紀代の遺物が少量出土した。

ST195、ST196（Ⅲ-107図）

ST195、ST196は墓壙で、B・C37・38グリッドに位置する。

ST195は東側をST196に、西側をST123、ST125によって壊されている。現状で東西22cm、南北69cm、深さ59cm。平面形は方形を呈していた可能性が高い。坑底上で人骨片が出土したが、詳細は不明。寛永通宝（Ⅳ-53図1～3）が出土した。

19世紀代の遺物が少量出土した。

ST196は平面方形で、規模は東西114cm、南北77cmである。確認面からの深さは東側が152cm、西側が101cmと異なることから、上下2段に埋葬された墓壙であると考えられる。東側（下段）の坑底は円形を呈しているので、埋葬器は円形木棺だったことが推測される。坑底上に人骨片が出土しているが被葬者については詳らかでない。西側（上段）は埋葬器・人骨とも未検出である。6層は黒褐色土層で、人骨と炭化した板材を含んでいる。煙管（Ⅳ-54図1）が出土した。改葬後の廃棄である。

19世紀代の遺物が少量出土した。

ST198（Ⅲ-106図）

A37グリッドに位置する墓壙である。北側に小さな掘り込みがあるが、断面からは新旧関係を捉えることができなかったため、これもST198の一部とした。平面形は方形で、東西、南北とも58cm、確認面からの深さ108cm。坑底標高は9.8mである。坑底は平坦で、立ち上がりは垂直である。墓壙の形状から埋葬器は円形木棺と考えられる。坑底上からは人骨が出土した。被葬者は成人男性である。骨盤の位置から埋葬方向は西向きだったことが窺える。

遺物は少量出土したが、時期は不明。

ST207（Ⅲ-108図）

A37グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西64cm、南北62cm。上部は削平されており、深さは現状で22cm。坑底は平坦に造られており、立ち上がりは急斜度である。埋葬器は木棺。覆土は2層からなり、1層は南側にわずかに残るのみである。2層は暗黄褐色土でほぼ水平堆積である。坑底から人骨がわずかに出土している。被葬者は性別不明の未成人である。

ミニチュアの碗や徳利などの玩具（Ⅳ-55図）を含む19世紀代に帰属する遺物が少量出土した。

ST213（Ⅲ-104図）

b37・A37グリッドに位置する墓壙である。確認面での平面形は方形を呈し、東西73cm、南北82cm。この下に東西74cm、南北70cm、深さ45cmの円形を呈した掘り込みが存在する。堆積土は断面図上の1層が方形部、2層～6層が円形部に該当する。坑底標高は9.6mである。埋葬器は2基検出されたが、いずれも円形墓壙内からである。甕棺（Ⅳ-56図4）は円形墓壙の坑底上に堆積しているロームブロックを主体とした6層上に据えられている。甕棺の口縁部は、方形部坑底とほぼ同レベルの位置で壊されているので、方形部は改葬時の掘方と推測される。甕棺の口縁部の一部は2層中で認められる。もう一つの埋葬器は鉄釉壺蔵骨器（Ⅳ-55図3）で、甕棺の内底部から入子状に出土した。その上には磁器皿2個体（同図1、2）によって蓋がなされていた。甕棺内の遺骨が改葬されたものかもしれない。

19世紀代の遺物がコンテナ2箱分出土した。

ST216（Ⅲ-109図）

b37グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、南側をSK208によって壊されている。東西72cm、南北67cm。確認面からの深さ146cm、坑底標高9.2m。坑底は平坦に造られており、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は甕棺（Ⅳ-56図1）で墓壙北東寄りに据えられていた。堆積状況をみると、墓壙にはロームブロックを主体とする11層と暗褐色土からなる10層で甕棺が埋められたことが窺える。

甕棺の上部には北西―南東の向きで蓋石が1枚置かれていた。甕棺内には人骨の一部が遺存しており、被葬者は成人女性である。

19世紀代の遺物が少量出土した。

ST218（Ⅲ-111図）

b37グリッドに位置する土坑である。平面形は方形で、東西100cm、南北84cm。確認面からの深さは162cmで、坑底標高は9.1m。坑底は平坦に造られている。坑底直

上から埋葬器として甕棺（Ⅳ-57図）が出土し、甕棺の上から埋葬器を伴わない人骨が検出された。甕棺は墓壙の坑底に、やや北寄りに据えられている。墓壙の立ち上がりは甕棺が据えられた高さまでと、それよりも上とで異なっている。甕棺の高さまでは、北側はほぼ垂直で甕棺との隙間に暗褐色土が充填されている（9層）。南側は北側に比べて傾斜が緩く10～12層が堆積している。甕棺内には暗褐色土（7層）、暗茶褐色土（8層）が堆積しており、人骨は残っていない。甕棺から上の墓壙の立ち上がりは、南側が狭くなって垂直に近くなり、北側はやや拡がっている。甕棺の直上で性別不明の成人人骨が検出された。骨盤の位置から埋葬方向は北東向きと考えられる。埋葬器は墓壙の形状から方形木棺と考えられる。改葬後の廃棄である。

19世紀代の遺物がコンテナ1箱分出土した。

ST224（Ⅲ-110図）

b38グリッドに位置する墓壙である。東側でST225と重複しそれより新しい。Ⅰ期に帰属するSU229覆土内に位置したため、南側プランを押さえきれなかった。平面形は隅丸方形を呈していると推測され、東西40cm、南北43cm以上、確認面からの深さ36cm（坑底標高9.78m）を測る。坑底直上より北向きに埋葬された新生児と推定される5歳未満未成人人骨1体が検出された。部分的な残存状況ではあるが、ほぼ全身骨が遺存していた。足下付近より副葬品と考えられるぶら人形1体が出土した（Ⅳ-60図）。埋葬施設は不詳。

ST225（Ⅲ-110図）

b38グリッドに位置する墓壙である。西側でST224と重複しそれより旧い。ST224同様遺存状況は悪く、平面形、規模の詳細は不詳である。坑底直上より瀬戸・美濃産鉄釉壺を使用した火葬蔵骨器が検出された（Ⅳ-60図）。上半部には欠損、亀裂が認められるが、ほぼ完全な状態で確認され、容器内は火葬骨で充たされていた。また火葬骨上位から本蔵骨器の蓋と考えられる瀬戸・美濃産見込み蛇ノ目無釉灰釉皿が検出された。見込み無釉部分には「大和田」の墨書が確認される。

ST230（Ⅲ-99図）

A38グリッドに位置する墓壙である。北側に重複するST177より旧い。本遺構はST177南壁面で三日月形テラス状に確認され、平面形、規模の詳細は不詳である。坑底付近より胎児ないし新生児と分析される5歳未満の未成人人骨の、頭蓋骨、上肢骨、椎骨、助骨の一部が横臥状態で遺存していた。出土状況からST177に埋葬された未成人女性人骨と親族の可能性もある。

ST245（Ⅲ-112図）

c37グリッドに位置する墓壙である。平面形は円形で、西側が撹乱によって壊されている。東西40cm、南北54cm、確認面からの深さ39cm、坑底標高は10.3mである。坑底は残存部をみるかぎり平坦には造られておらず、ロームブロックを主体とする7層上に埋葬器を水平に据えている。

埋葬器は火消壺棺（Ⅳ-63図1）と土師質蔵骨器（同図2）の2点が出土しており、7層の上に据えられていたのは火消壺棺である。土師質蔵骨器はこの内部に堆積した6層中から、やや傾斜した状態で出土した。改葬後の廃棄で人骨は出土していない。土製の碁石（同図3）が出土した。

19世紀代の遺物がコンテナ2箱分出土した。

ST246（Ⅲ-113図）

c37グリッドに位置する墓壙である。平面形は楕円形で、東西84cm、南北86cmを測る。上部を削平されており、現状で深さ46cm。坑底標高は9.7m。ST267を壊して構築しており、坑底は平坦に造られている。南北の立ち上がりはほぼ垂直である。覆土は2層からなり、いずれも水平堆積である。1層中から4点の蔵骨器（鉄釉壺1点〔Ⅳ-63図1〕、硬質瓦質蔵骨器3点〔同図2、64図3、4〕）と硬質瓦質蔵骨器の蓋2点（同図5、6）が出土した。また覆土中から出土した人骨片は全て火葬骨だった。改葬後に廃棄されたものである。

19世紀代の遺物がコンテナ2箱分出土した。

ST247（Ⅲ-115図）

c36・37グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西82cm、南北80cm。遺構上部は西側の大部分が削平を受けており、北東部はSK53に、南東部はSK78によって壊されている。そのため調査時には埋葬器である甕棺（Ⅳ-64図1）が露出した状況であった。確認面には石が残っていたが、これとST247との関係は不明である。石直下の6、7層が残っているのは東側の一部のみである。確認面からの深さは87cm。坑底標高は9.7m。坑底は平坦に造られており、立ち上がりは急斜度である。甕棺は坑底ほぼ中央に直接据えられていた。甕棺内には人骨の一部が残っており、被葬者は成人女性である。埋葬方向は南向き。陶器瓶（同図2）、土人形（同図3）などが出土した。

19 世紀代の遺物がコンテナ 2 箱分出土した。

ST248、ST249、ST250（Ⅲ -114 図）

ST248、ST249、ST250 は墓壙で、B38 グリッドに位置する。SK173 によって大きく削平され平面形は不明。

ST248、ST249 は個別遺構として調査をしたが、切り合い関係が明確ではなく、あるいは 1 つの墓壙だった可能性もある。両遺構の最低坑底標高は 10.3m。遺物は ST248 とした墓壙の覆土中から出土しており、硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ -65 図 1、2）や寛永通宝（同図 3 ～ 8）が認められる。ST248 の 1 層中からは頭骨も出土した。被葬者は性別不明の未成人である。改葬後の廃棄である。

19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST250 は ST249 の西側で検出しているが、両者の切り合いは検証できない。西側を大きく削平されており、遺構本来の規模は不明。坑底標高は 9.65m。ローム ブロックを主体とする暗黄褐色土（1 層）のみが残っていた。

ST258（Ⅲ -116 図）

b37・38 グリッドに位置する墓壙である。ST259、ST260 と重複し、いずれよりも新しい。平面形は不整円形を呈し、南北 84cm、東西 80cm、確認面からの深さ 60cm（坑底標高 9.48m）を測る。坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。坑底直上より西向きに座葬されたほぼ完全な状態の成人男性人骨 1 体が検出された。覆土は単一層として認識したが、人骨上位より火葬蔵骨器の廃棄と考えられる瀬戸･美濃産灰釉壺や多数の人形･玩具類が出土したことより（Ⅳ -65、66 図）、木棺腐朽、陥没後の凹地へ廃棄された資料と推定される。

ST259（Ⅲ -116 図）

b37・38 グリッドに位置する墓壙である。南側で重複する ST258 より旧い。平面形は不整方形を呈すると考えられ、東西 46cm、南北 30cm 以上、確認面からの深さ 20cm（坑底標高 9.77m）を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がるが全体的に凹凸が認められる。覆土中位より頭蓋骨、四肢骨の一部が検出されたが、遺存状態は非常に悪い。遺構形状より方形木棺の可能性が考えられる。

ST260（Ⅲ -116 図）

b37・38 グリッドに位置する墓壙である。北側に重複する ST258 より旧く、南側に重複する ST290 より新しい。平面形は不整楕円形を呈し、長軸 62cm 以上、短軸 47cm 以上、確認面からの深さ 26cm（坑底標高 9.80m）を測る。坑底はやや丸味を有し、壁は緩やかに開きながら立ち上がる。覆土中位より北東向きに座葬されたほぼ完全体の幼児人骨（18 ヶ月）1 体が検出された。検出状態より円形木棺に埋葬されたと推定される。胸付近から副葬品と考えられる人形･玩具類が出土した（Ⅳ -66 図）。

ST263（Ⅲ -117 図）

C37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 80cm、南北 80cm。確認面からの深さ 72cm、坑底標高は 9.7m を測る。埋葬器は不明。坑底は平坦に造られており、黒色土（3 層）が薄く堆積している。2 層とした暗褐色土の南側の一部を掘り返した結果、1 層とした暗褐色土層が堆積したと考えられる。1 層からは埋葬器である甕棺（Ⅳ -67 図 1）、火消壺棺（68 図 2）などの破片が多く出土している。いずれも改葬後の廃棄であり、墓壙との関係は不明。

ST264、ST291、ST298（Ⅲ -120 図）

ST264、ST291、ST298 は東西に並ぶ墓壙で、c37 グリッドに位置する。

ST264 は南西を ST265 に、北西側を ST245 に壊されている。また東側と南側は攪乱によって壊されているため、墓壙の形状や規模は不明。坑底標高は 9.7m である。4 層（暗褐色土層）から火消壺棺（Ⅳ -69 図 1、2）が検出された。しかし墓壙の形状・規模が不明なため、これが ST264 に伴うかは不明である。このほか、六道銭として埋葬されたと考えられる寛永通宝が 3 点出土した（同図 3 ～ 5）。

19 世紀代の遺物がコンテナ 2 箱分出土した。

ST291 は平面形が方形を呈している。東西 76cm、南北 72cm、確認面からの深さ 41cm。坑底標高は 9.4m である。ST298 を壊して掘り込まれていて、坑底はほぼ平坦に造られている。東西の立ち上がりは急斜度である。埋葬器は墓壙の形状から方形木棺と考えられる。坑底上から別個体の頭蓋骨と四肢骨が出土したほか、鉄釉陶器の蓋（Ⅳ -77 図 1）と文久永宝 6 点を含む寛永通宝 14 点（同図 2 ～ 15）が出土している。改葬後の廃棄である。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST298 は ST291 に 13 層まで壊されているが、円形を呈したものと考えられる。東西 64cm、南北 65cm、坑底標高 9.2m である。坑底は西側が一段低く造られており、西側は急斜度に立ち上がり、中程で屈曲する。東側の立ち上がりは ST291 のため不明である。埋納器は円形木棺である。坑底直上に黒色を呈した繊維が広範囲に認められ、人骨はこの直上から出土している。黒色を呈

した繊維の性格は不明だが、調査時の所見では葉が変色したような状況は認められなかった。遺体に敷いた、もしくは覆ったものかもしれない。改葬後の廃棄である。

遺物が少量出土したが、時期は不明。

ST265（Ⅲ-118 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形を呈する。西側が削平されているため東西長は不明、南北 48cm。坑底は平坦に造られているが、大部分は削平によって壊されている。坑底標高は 9.8m。埋葬器は木棺と考えられる。坑底ほぼ直上から、ぶら人形が出土した（Ⅳ-68 図）。坑底直上から人骨片が出土しているが詳細は不明。改葬後の廃棄である。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST267（Ⅲ-121 図）

c37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、東西 84cm、南北 88cm、確認面からの深さ 135cm。坑底標高は 8.8m である。坑底には中央やや南寄りに東西 38cm、南北 40cm、深さ 12cm の掘り込みが認められる。埋葬器は甕棺か。

坑底の掘り込みから人骨片と蔵骨器と考えられる灰釉三耳壺（Ⅳ-68 図）など 19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST268（Ⅲ-122 図）

A37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形で、西側は ST145 によって壊されている。南北 49cm、深さ 41cm、坑底標高 9.6m。坑底は平坦に造られており、立ち上がりはほぼ垂直である。埋葬器は方形木棺である。被葬者は成人女性で、埋葬方向は南東向き。

時期不明の遺物が少量出土した。

ST270（Ⅲ-119 図）

b37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形を呈する。東西 68cm、南北 64cm、確認面からの深さ 131cm。坑底標高 8.9m。坑底は中央部がやや凹んでいる。南側の立ち上がりがほぼ垂直であるのに対して、北側の立ち上がりは坑底から 80cm あたりから拡がっている。埋葬器は甕棺（Ⅳ-70 図 1）で、坑底の凹んでいる部分に置かれているが、調査時には北側に傾いた状態で検出された。2 層から甕棺の蓋石の一部が出土したことから、改葬後の廃棄である。北側の立ち上がりにみられる拡がりは、改葬時の掘削によるものだった可能性がある。性別不明の成人人骨の一部が検出された。

19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土した。

ST281、ST282（Ⅲ-123 図）

ST281、ST282 は東西に並んでいる墓壙で、B・C38 グリッドに位置する。確認面では両者の掘方が接しているが切り合い関係にはなく、遺構の断面でも切り合い関係は認められない。

ST281 は西側が ST196 に壊されている。平面形は方形を呈していて、東西 100cm、南北 116cm、確認面からの深さ 225cm。坑底標高は 7.9m である。埋葬器は甕棺で、2 段に重なった状態で検出された（上下の甕棺をそれぞれ甕棺 1, 甕棺 2 とする。Ⅳ-72 図遺物番号対応）。坑底は平坦に造られており、西側の立ち上がりはほぼ垂直、東側は急斜度で、それぞれの甕棺に伴う蓋石の部分が東側に掘り込まれており、結果的に立ち上がりのラインが屈曲したものとしている。甕棺 2 は坑底の北西隅に直接据えられており、墓壙西側壁面に体部の一部が接している。被葬者は性別不明の成人で、埋葬方向は詳らかでない。甕棺 1 は、甕棺 2 の 2 枚の蓋石上に直接載せられていて、甕棺 2 と同様に墓壙の北西隅に据えられている。蓋石は 2 枚である。被葬者は成人男性で、骨盤の位置から埋葬方向は南向きである。

甕棺のほかに、擂鉢（Ⅳ-73 図 3）や煙管（同図 4、5）などを含む 19 世紀代の遺物が出土した。

ST282 は調査区の東端で検出しているため、遺構の規模は不明。確認面から 160cm の深さで、2 つに分割された 2 枚の蓋石が出土した。その上から火消壺棺（Ⅳ-74 図 1、2）が出土した。火消壺棺は上半分が削平されており、内部に人骨は認められない。水平な状態で出土しているが、覆土中からの出土である。蓋石下は安全上の理由から調査を断念した。

甕棺を含む 19 世紀代の遺物がコンテナ 2 箱分出土した。

ST283、ST284（Ⅲ-124 図）

ST283、ST284 は南北に切り合う墓壙で、ST283 は B・C37 グリッドに、ST284 は C37 グリッドに位置する。

ST283 は平面形が長方形を呈しており、南側が ST284 に壊されている。東西 86cm、南北 166cm。墓壙の上部は削平されていて現状での深さは 31cm、坑底標高は 9.0 mである。ほぼ中央部から埋葬器である甕棺が検出されたが、底部周辺部のみであり、人骨は残存していない。

19 世紀代の遺物が少量出土した。

ST284 は平面が円形を呈する墓壙で、東西 94cm、南北 100cm、確認面からの深さ 119cm。坑底標高は 8.0 m である。ST283 の南側を壊して構築されている。埋葬

器は甕棺（Ⅳ-75 図 2）である。坑底は平坦で、壁は急斜度で立ち上がってからほぼ垂直になる。甕棺は中央部やや北よりに据えられている。覆土は 2 層からなる。甕棺の口縁部よりも上方に堆積しているのが 1 層、甕棺の体部と墓壙の壁面との間に堆積している覆土が 2 層である。甕棺内部の覆土については不明である。人骨は認められない。

甕棺を含む 19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土している。

ST285（Ⅲ-125 図）

C37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は不整円形で東西 56cm、南北 56cm、確認面からの深さ 55cm。坑底標高は 9.7m である。坑底は平坦に造られているが、埋葬器、覆土は不明。

時期不明の遺物が少量出土した。

ST286（Ⅲ-128 図）

c36 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形を呈しており、東西 100cm、南北 66cm。確認面からの深さ 104cm、坑底標高は 9.1 mである。埋葬器は甕棺（Ⅳ-76 図 2）で、覆土は甕棺内の堆積土（1 ～ 4 層）と、甕棺と墓壙との間の堆積土（5・6 層）である。坑底は平坦に造られており、立ち上がりはほぼ垂直である。被葬者は成人女性で、埋葬方向は南向き。被葬者右脇から出土した瀬戸・美濃系灰釉徳利（同図 1）は副葬品と考えられる。

甕棺を含む数珠（同図 5）など 19 世紀代の遺物がコンテナ 1 箱分出土している。

ST290（Ⅲ-129 図）

b38 グリッドに位置する墓壙である。北側に重複する ST260 より旧い。本遺構は SU280 覆土中に構築されたため、南側のプランが不明瞭で全体を認識することができなかった。平面形は直径約 70cm の不整円形を呈すると考えられ、確認面からの深さ 53cm（坑底標高 9.50m）を測る。坑底はほぼ平坦で、壁は若干内傾気味に立ち上がる。坑底付近より東向きに埋葬されたほぼ完全体の成人男性人骨 1 体が検出された。人骨検出状態及び遺構形態より円形木棺と考えられる。

ST295（Ⅲ-126 図）

c36 グリッドに位置する墓壙である。ST286 の甕棺に接するように構築され、それより新しい。南北 77cm、坑底標高は 9.8m である。埋葬器は硬質瓦質蔵骨器（Ⅳ-78 図）で、墓壙上部は削平されており蓋も失われていたが、底部に火葬骨の一部が残っていた。坑底は南側が深く、北側がやや浅いため傾斜している。立ち上がりの形状は南北で異なっており、北側は ST286 の壁面と重なりほぼ垂直である。一方南側は傾斜が緩い。

埋葬器のほかに遺物は出土していない。

ST299（Ⅲ-127 図）

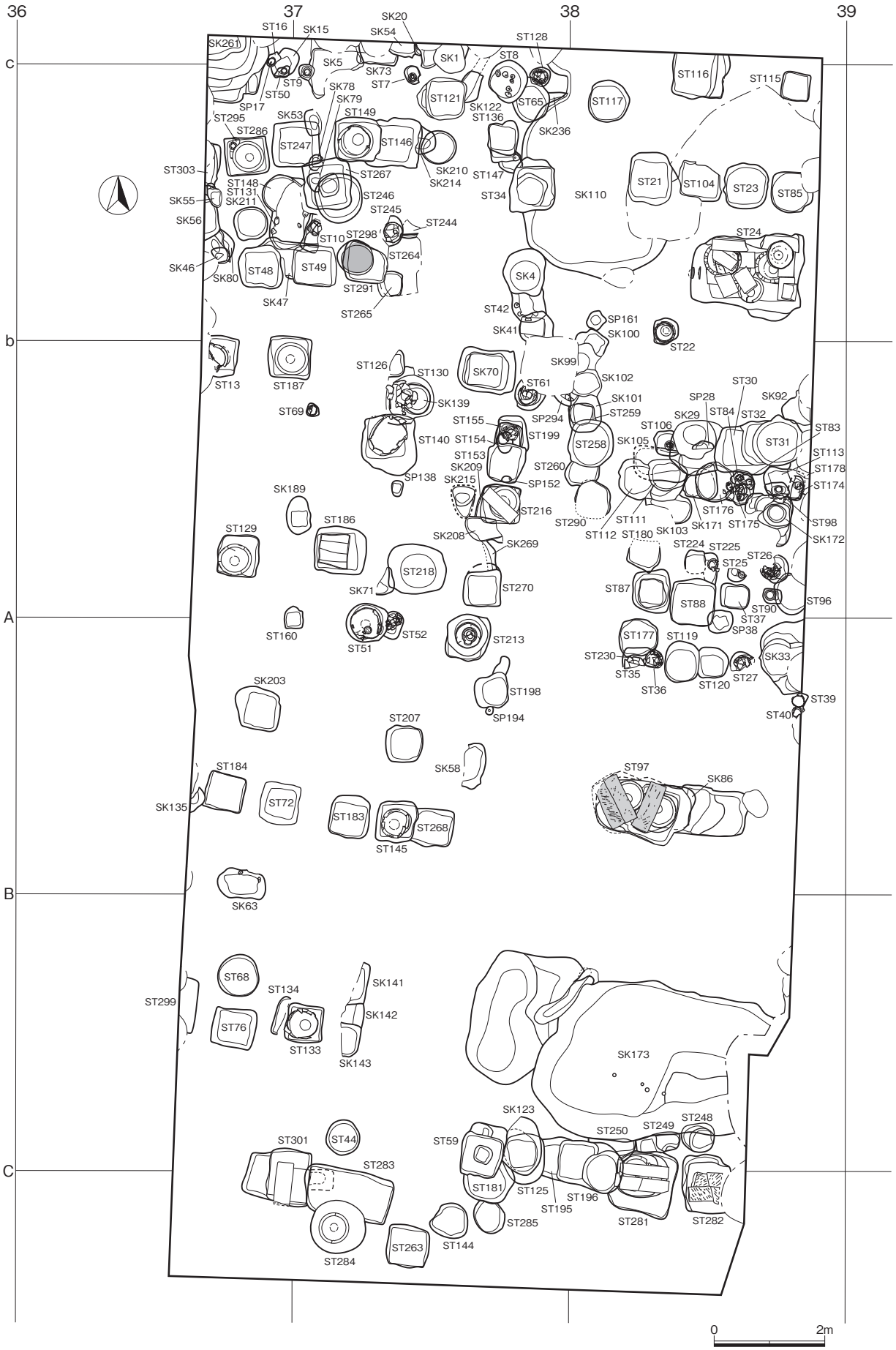
B36 グリッドに位置する墓壙である。調査区の西端で、遺構の大部分は調査区外に続くため規模は不明。掘削可能な範囲が限られているため、完掘はできなかった。墓壙の南側に蓋石がまとまって出土していることから、埋葬器は甕棺であると考えられる。

コンテナ 1 箱分の遺物が出土したが、時期は不明。

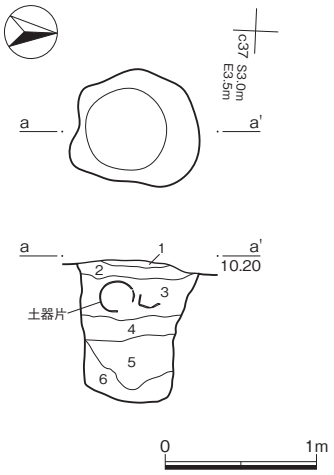
ST301（Ⅲ-130 図）

B・C36・37 グリッドに位置する墓壙である。平面形は方形を呈しており、西側に 1 つの段を有している。段の部分も含め東西 120cm、南北 102cm、確認面からの深さ 119cm。坑底標高は 8.0m である。段の部分は東西 44cm、南北 100cm である。あるいは 1 基の土坑を、本遺構の構築に際して壊したことによって、この部分が段状に残された可能性もあるが、堆積状況から検証することはできなかった。なお確認面の標高が段のある西側が高く東側が低いが、これは本遺構周辺部が撹乱の影響を大きく受けていたことによるものである。坑底は平坦に造られ、立ち上がりはほぼ垂直である。4 層からなる覆土は、上部が削平されている 1 層を除くといずれも南側から北側へと傾斜した堆積であり、改葬時に南側から埋めたことが窺える。4 層と 2 層の境から蓋石が 2 枚出土した。蓋石の一部は 2 層からも出土している。埋葬器は残っていないが、こうした状況から甕棺だったと考えられる。覆土中より成人男性 1、成人女性 1 の部分人骨が出土しており、改葬後に再葬されたものと考えられる。東壁には、坑底から 12cm の高さの部分に、奥行き 48cm、幅 36cm、高さ 30cm の掘り込みが設けられている。掘り込みの入口付近には火消壺棺（Ⅳ-78 図）が置かれていた。

古寛永通宝 3 点を含む銭貨 4 点（Ⅳ-78 図 3 ～ 6）のほか、鉄釘が 10 点以上出土している（Ⅳ-79 図 7 ～ 16）。方形木棺に伴うものであるかもしれない。前述したように蓋石も出土しており、異なる種類の埋葬器が用いられ、最終的に 1 遺構に廃棄されたことが窺える。火消壺棺を含め 19 世紀代の遺物がコンテナ 2 箱分出土している。

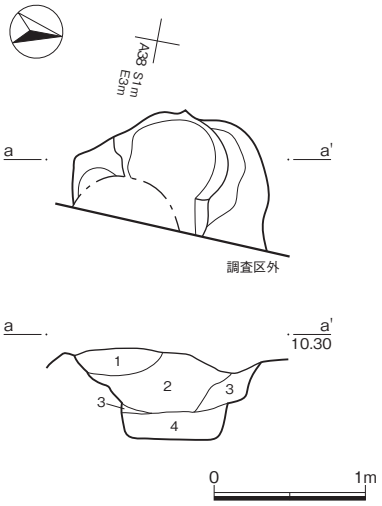


Ⅲ-22図　Ⅱ期遺構配置図



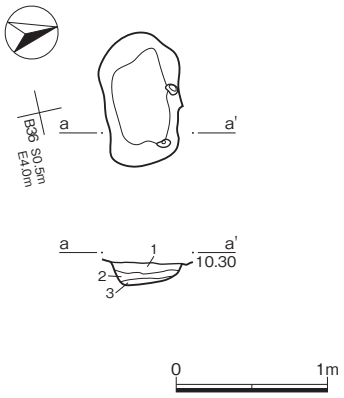
1　黒褐色土　（ローム粒含、炭化物粒微含、粘性・しまりなし）
2　黄褐色土　（ロームブロック主体、炭化物粒微含、粘性やや弱）
3　暗茶褐色土（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
4　暗黄褐色土（ローム粒含、粘性・しまりなし）
5　暗黄褐色土（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
6　暗褐色土　（粘性・しまりなし）

Ⅲ-23図　SK4



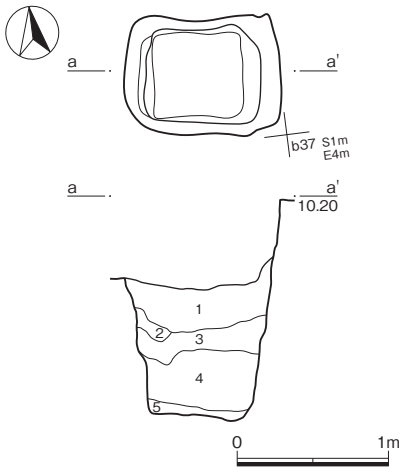
1　褐色土　（山砂・玉砂利多含、粘性やや弱、しまり極強）
2　褐色土　（ローム粗粒極多含、破枠礫・埋葬器片（土器）含）
3　暗褐色土（ローム粒少含、しまりやや強）
4　褐色土　（ローム粒極多含、焼土粒・炭化物微含、粘性やや強）

Ⅲ-24図　SK33



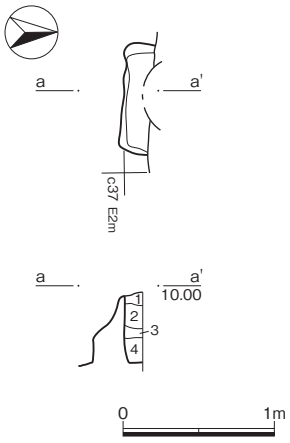
1　暗褐色土（ローム粒、青灰色粘土粒少含、粘性・しまりなし）
2　黄褐色土（ロームブロック多含、しまりなし）
3　暗黄褐色土

Ⅲ-25図　SK63



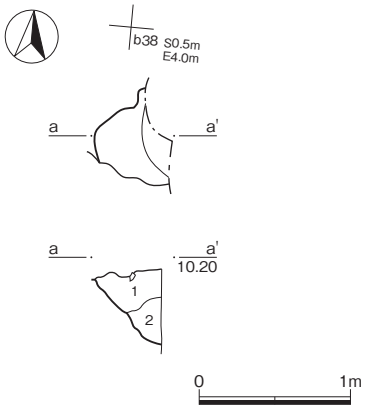
1　暗褐色土　（黒色土粒含、粘性・しまりなし）
2　灰褐色土　（黄褐色土粒・炭化物粒少含、粘性・しまりなし）
3　暗黄褐色土（ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
4　暗褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
5　褐色土　　（木材片少含、ローム粒微含）

Ⅲ-26図　SK70



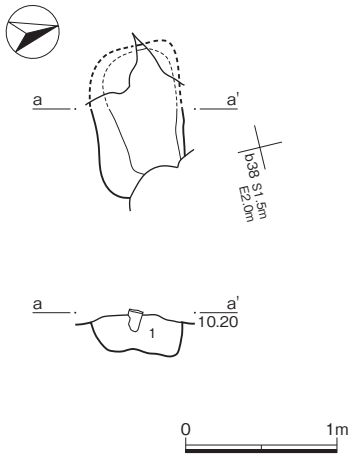
1　暗黄褐色土（焼土粒少含、粘性なし）
2　暗褐色土　（ロームブロック少含、粘性なし）
3　暗褐色土　（ローム粒含、粘性なし）
4　暗黄褐色土（ローム粒やや多含、炭化物粒少含、粘性なし）

Ⅲ-27図　SK73



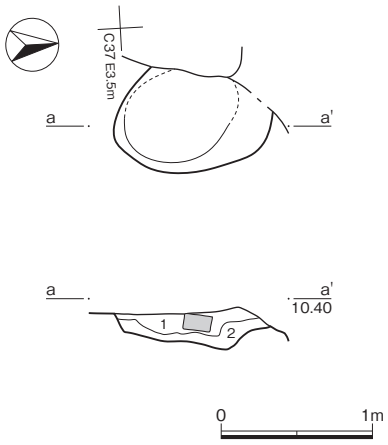
1　暗褐色土（ローム粒多含、粘性やや強）
2　褐色土　（ロームブロック多含、粘性やや強）

Ⅲ-28図　SK92



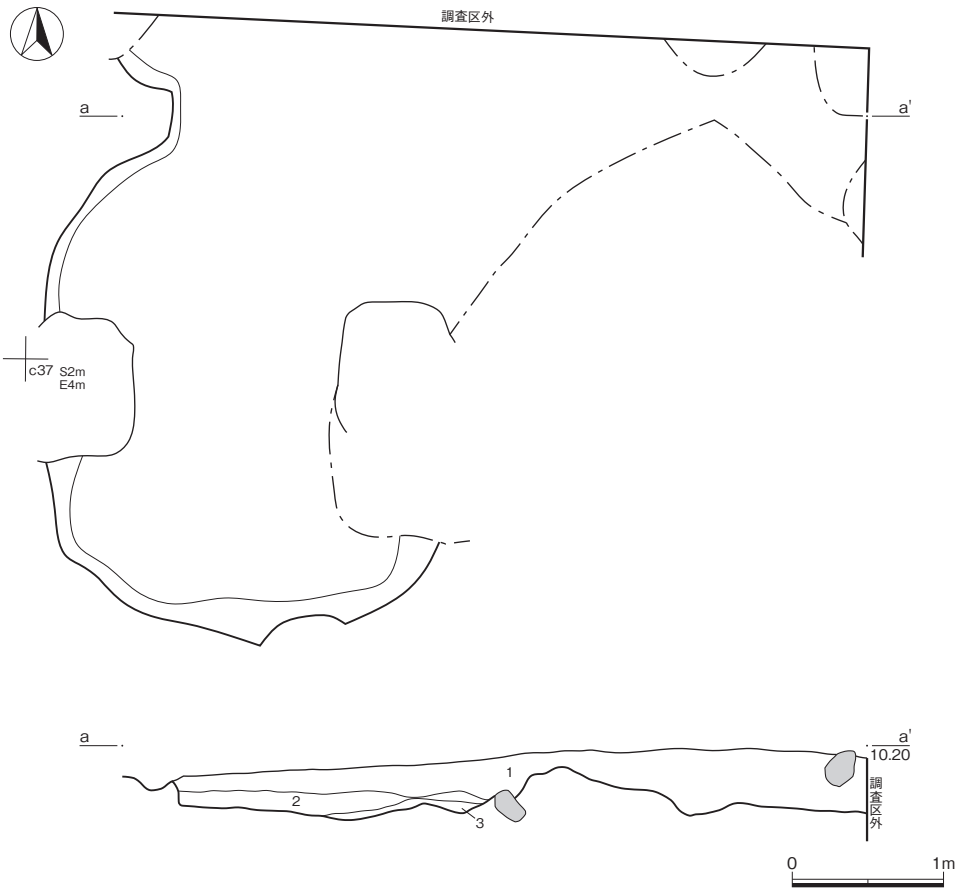
1　暗褐色土　（ローム粒･瓦質蔵骨器多含､しまり弱）

Ⅲ-29図　SK105



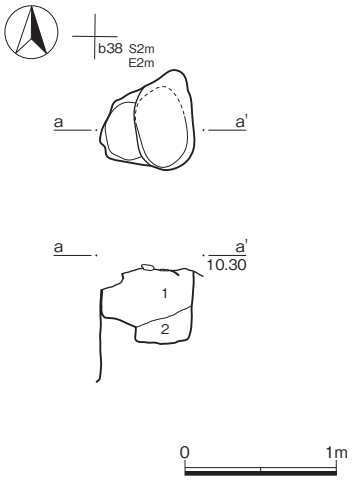
1　暗褐色土　（ロームブロックやや多含､礫･陶器片含､粘性･しまりなし）
2　暗褐色土　（ローム粒やや多含､炭化物粒含､粘性･しまりなし）

Ⅲ-31図　SK123



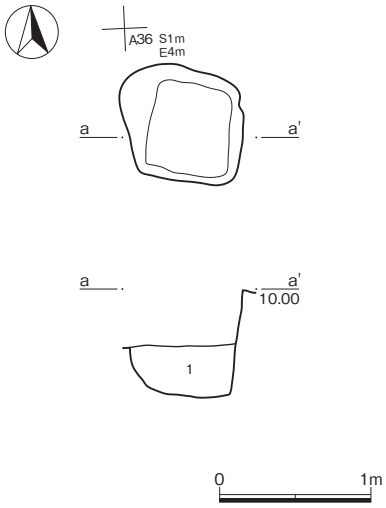
1　暗褐色土　（ローム粒･砂利多含､焼土粒･炭化物粒少含､粘性なし）
2　暗褐色土　（炭化物ブロックやや多含､ローム粒･青灰色粘土粒少含､粘性なし）
3　暗褐色土　（ロームブロック極多含､青灰色粘土粒少含､粘性なし､しまり極強）

Ⅲ-30図　SK110



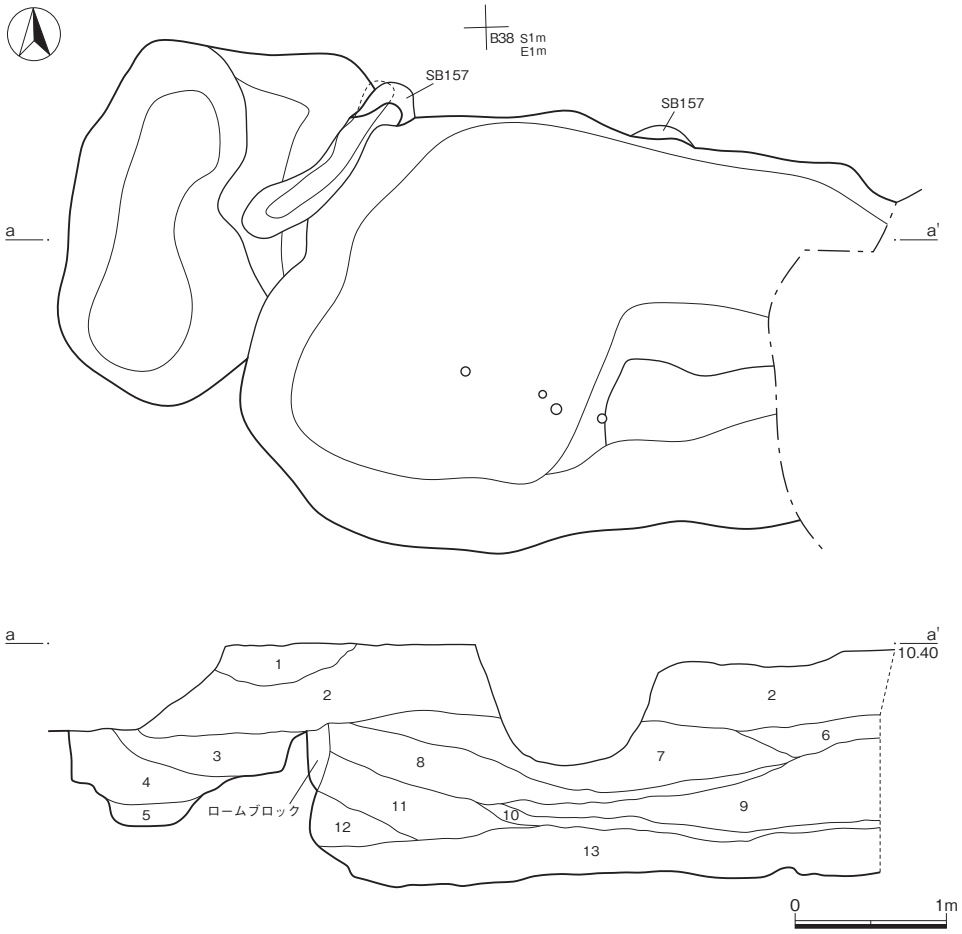
1　暗褐色土　（瓦質埋葬器多量廃棄、ローム粗粒多含、炭化物・玉砂利少含、粘性強、しまり弱）
2　褐色土　（ローム粒多含、ロームブロック少含、しまり弱）

Ⅲ-32図　SK171



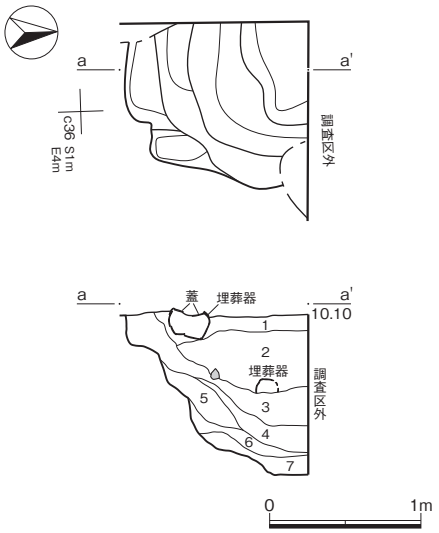
1　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒・炭化物粒少含、粘性なし）

Ⅲ-34図　SK203



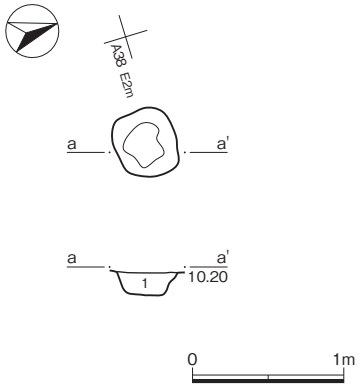
1　暗灰褐色土　（炭化物多含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（ローム粒少含、玉砂利・炭化物微含、粘性やや強、しまりやや弱）
3　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒・炭化物粒微含、粘性やや強）
4　暗褐色土　（玉砂利少含、ローム粒微含、粘性強）
5　暗黄褐色土　（ロームの埋土、粘性やや強、しまりやや弱）
6　暗褐色土　（ローム粒多含、粘性強、しまりやや弱）
7　暗灰褐色土　（玉砂利・炭化物多含、漆喰片少含、粘性強、遺物多量出土）
8　褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりやや強）
9　暗褐色土　（ローム粒・漆喰片多含、粘性強）
10　褐色土　（ローム粒多含、粘性やや強）
11　褐色土　（瓦片・漆喰片多含、粘性強）
12　褐色土　（ローム粒極多含、粘性強）
13　暗灰褐色土　（瓦片・漆喰片・炭化物・ローム粒多含、粘性強、しまりやや弱）

Ⅲ-33図　SK173



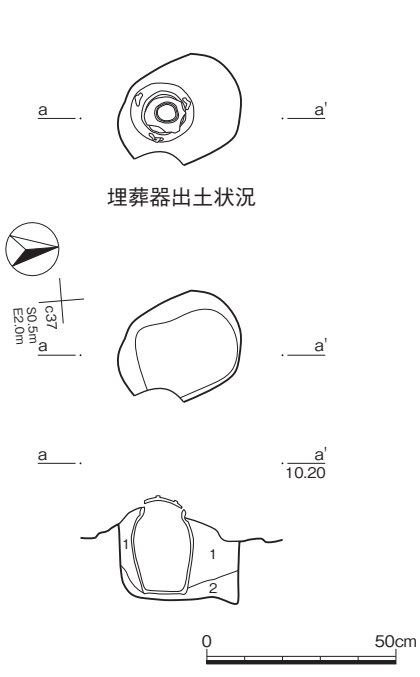
1　暗褐色土　（ロームブロック･ローム粒多含､粘性･しまりなし）
2　暗褐色土　（ロームブロック含､粘性･しまりなし）
3　黒褐色土　（ロームブロック多含､粘性･しまりなし）
4　暗茶褐色土（青灰色粘土粒少含､しまりなし）
5　暗褐色土　（ローム粒･焼土含､粘性なし）
6　暗褐色土　（ローム粒少含､粘性なし）
7　灰褐色土　（砂利含､粘性やや弱､しまりなし）

Ⅲ-35図　SK261



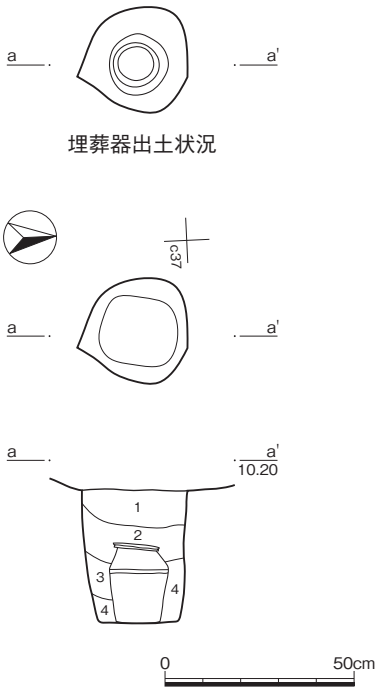
1　暗黄褐色土　（黒色土粒多含､ローム粒やや多含､粘性･しまりなし）

Ⅲ-36図　SP38



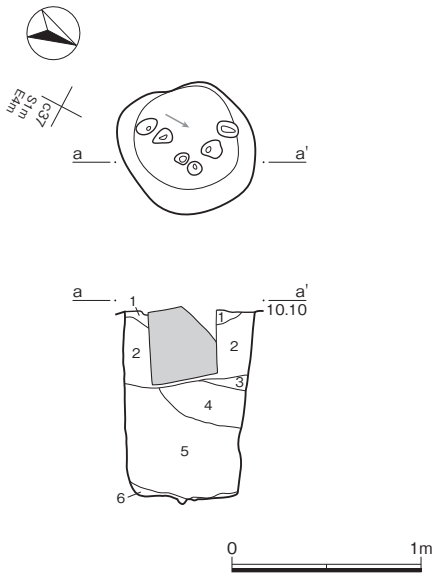
1　黄褐色土　（ローム粒･青灰色粘土粒･ブロック多含､粘性･しまりなし）
2　暗黄褐色土（ローム粒含､粘性･しまりなし）

Ⅲ-37図　ST７



1　暗黄褐色土（ロームブロック多含､しまりなし）
2　暗褐色土　（ロームブロックやや多含､粘性やや弱､しまりなし）
3　ロームブロック
4　暗褐色土　（ロームブロック少含､粘性やや弱､しまりなし）

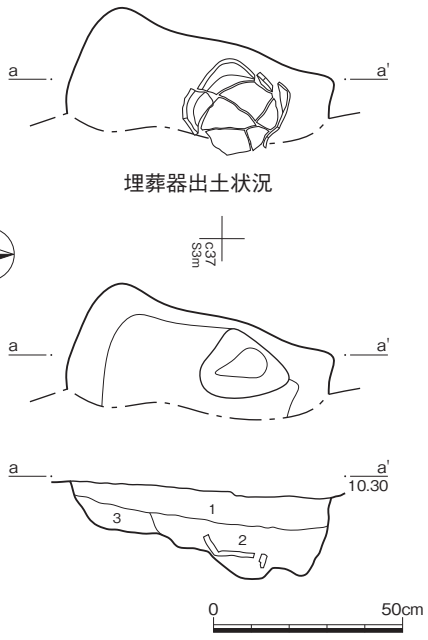
Ⅲ-38図　ST９



人骨出土状況(西から)

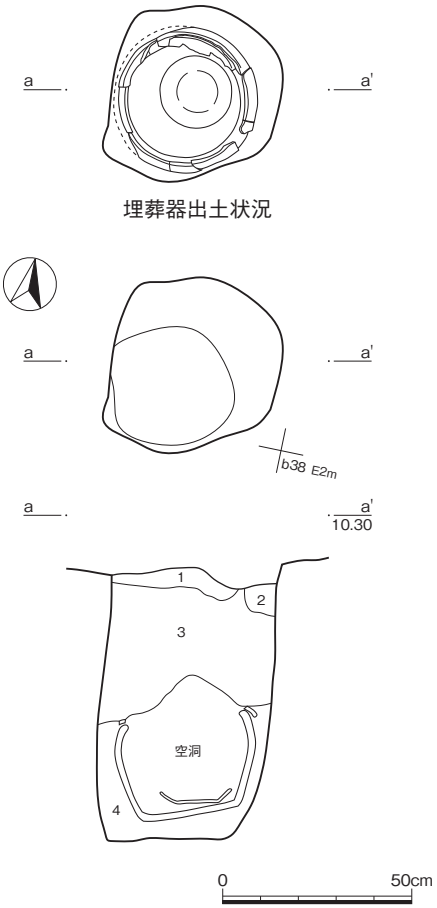
1　黄褐色土　(ローム粒主体､粘性･しまりなし)
2　暗黄褐色土　(φ30mm ロームブロック多含､炭化物粒含､粘性･しまりなし)
3　暗褐色土　(ローム粒含､粘性･しまりなし)
4　黄褐色土　(ローム粒含､粘性やや弱､しまりなし)
5　暗褐色土　(ローム粒多含､粘性･しまりなし)
6　暗黄褐色土　(粘性･しまりなし)

Ⅲ-39図　ST８



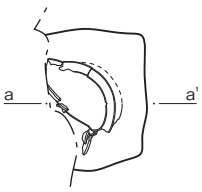
1　暗黄褐色土　(ローム粒やや多含､粘性･しまりなし)
2　暗黄褐色土　(ローム粒少含､粘性･しまりなし)
3　黄褐色土　(粘性･しまりなし)

Ⅲ-40図　ST10

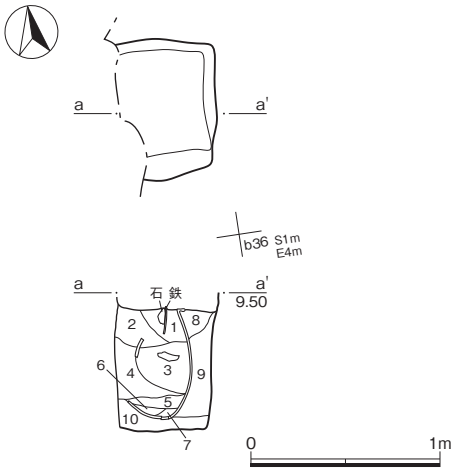


1　黄褐色土　(ロームブロック多含､粘性なし､しまりやや弱)
2　暗褐色土　(粘性･しまりなし)
3　暗黄褐色土　(ローム粒多含､粘性･しまりなし)
4　黄褐色土　(しまりなし)

Ⅲ-41図　ST22



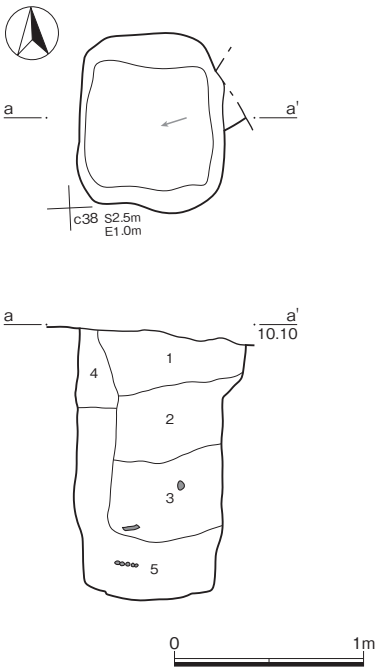
甕棺出土状況



人骨出土状況（南から）

1　黄褐色土　（粘性･しまりなし）
2　黄褐色土　（ローム粒主体､しまりなし）
3　黄褐色土　（ロームブロック多含､粘性･しまりなし）
4　黄褐色土　（ロームブロック多含､粘性極強､しまりなし）
5　黒褐色土　（人骨を含む）
6　灰褐色土　（ロームブロック少含､炭化物粒少含､しまりなし）
7　黒色土　（炭化物極多含､粘性･しまりなし）
8　暗黄褐色土　（ローム粒やや多含､炭化物粒少含､粘性･しまりなし）
9　暗黄褐色土　（粘性･しまりなし）
10　暗黄褐色粘土　（炭化物粒微含､粘性極強､しまりなし）

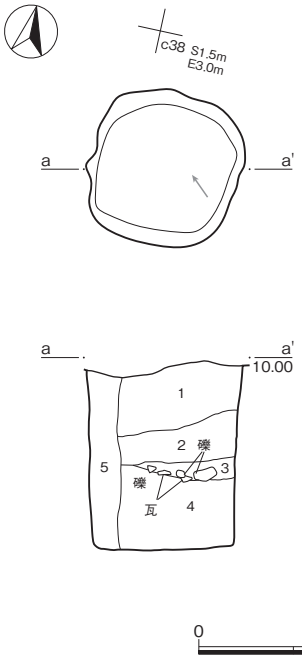
Ⅲ-42図　ST13

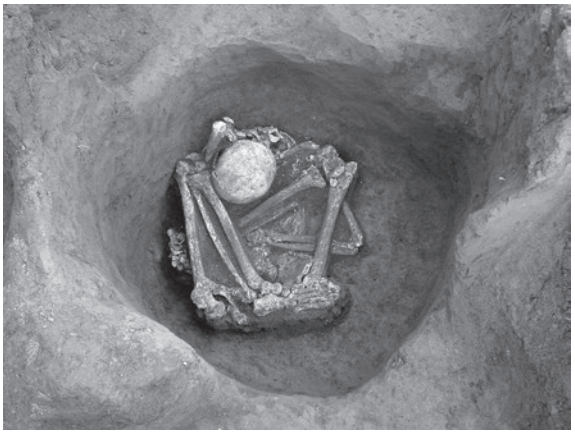


人骨出土状況（西から）

1　褐色土　（ローム粒極多含､ロームブロック少含､しまりやや弱）
2　暗褐色土　（ローム粒極多含､しまり弱）
3　暗褐色土　（2層より暗い､ローム粒多含､しまり弱）
4　暗黄褐色土　（ローム粒極多含､ロームブロック多含､粘性･しまりやや強）
5　暗黄褐色土　（ローム粒主体､粘性やや強･しまり弱）

Ⅲ-43図　ST21

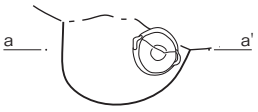




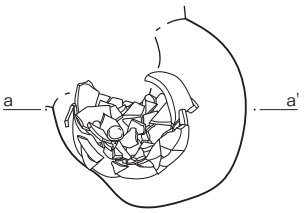
人骨出土状況(北から)

1　暗褐色土　(ロームブロック多含、粘性・しまりなし)
2　暗褐色土　(ロームブロック少含、炭化物粒微含、粘性・しまりなし)
3　暗褐色土　(礫多含、粘性・しまりなし)
4　黄褐色土　(ロームブロック主体、しまりなし)
5　黄褐色土　(ロームブロック主体、黒色土少含、粘性・しまりなし)

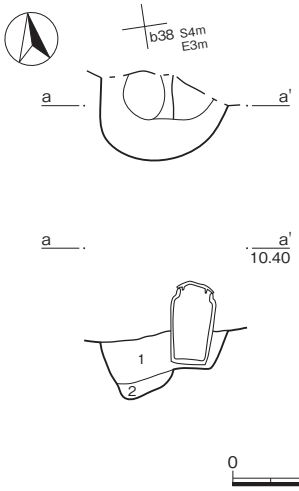
Ⅲ-44図　ST23

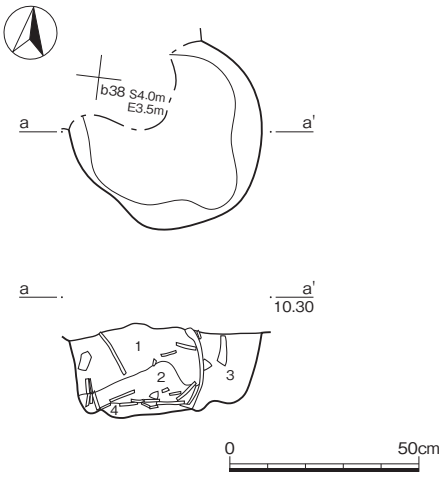


埋葬器出土状況



埋葬器出土状況



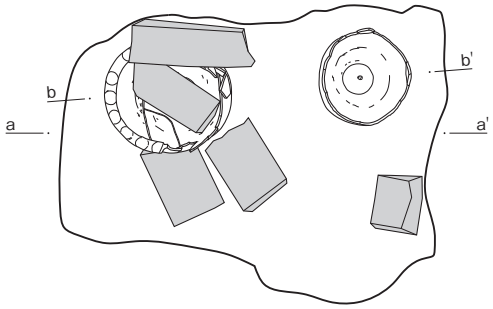


1　暗黄褐色土　(ローム粒多含、焼土粒少含、φ3～8mm 石やや少含、粘性・しまりなし)
2　黄褐色土　(ロームブロック主体、粘性・しまりなし)

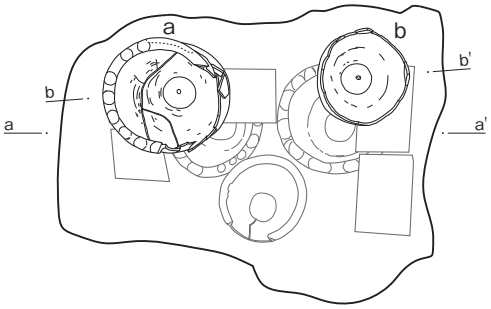
Ⅲ-45図　ST25

1　暗褐色土　(ローム粒極多含、焼土粒・炭化物粒微含、しまりやや強)
2　暗褐色土　(ローム粒・焼土粒少含、しまりやや強)
3　暗褐色土　(ローム粗粒極多含、粘性・しまりやや強)
4　暗黄褐色土　(ローム粒主体、粘性やや強、しまりやや弱)

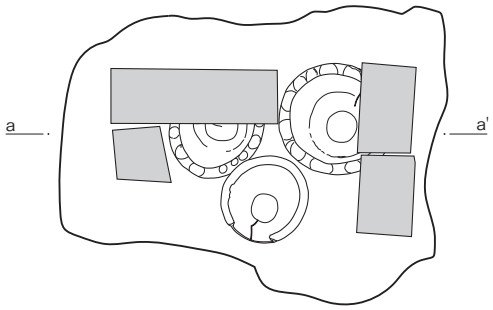
Ⅲ-46図　ST26



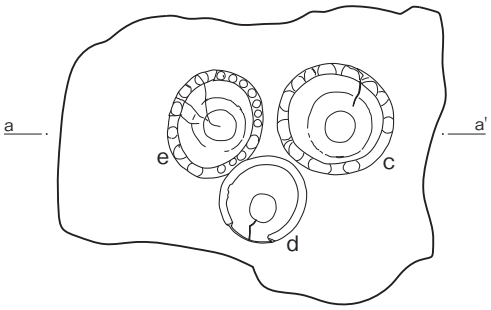
甕棺・蓋石出土状況（上段）



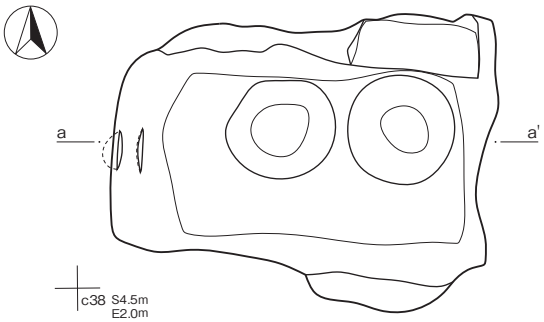
甕棺出土状況（上段）

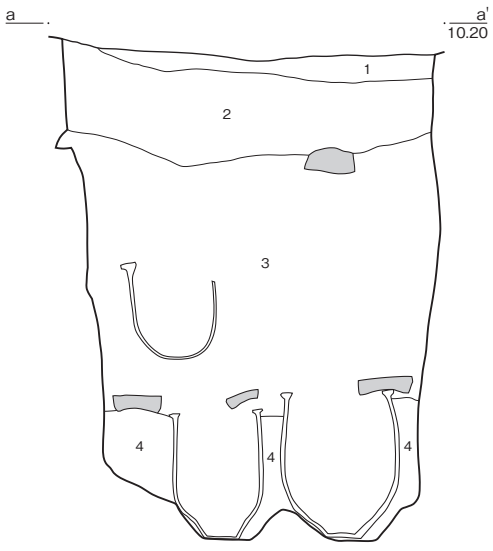


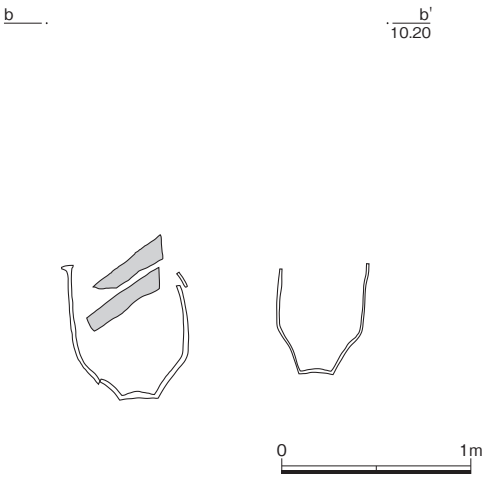
甕棺・蓋石出土状況（下段）



甕棺出土状況（下段）



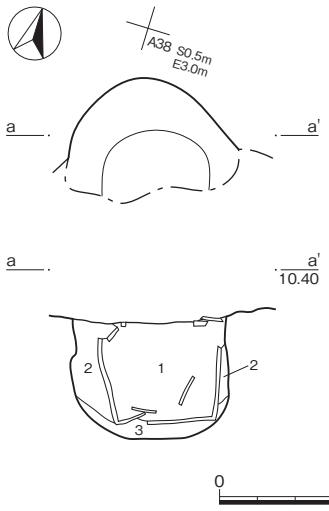




1　暗褐色土　（ローム粒多含）
2　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粒極多含）
3　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粒主体、粘性やや強）
4　暗褐色土　（砂質粘土層、粘性極強、しまり弱）

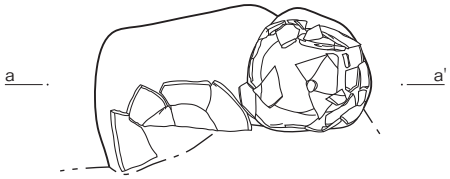
Ⅲ-47図　ST24

埋葬器出土状況

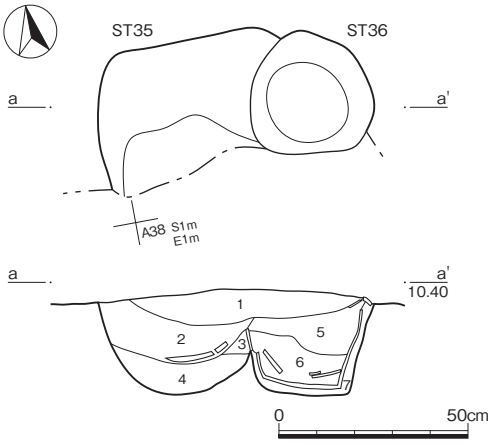


1　暗褐色土　（ローム粒、焼土粒少含、粘性・しまり弱）
2　暗褐色土　（ローム粒含、しまりやや弱）
3　暗黄褐色土（ローム粒主体、しまりやや弱）

Ⅲ-48図　ST27

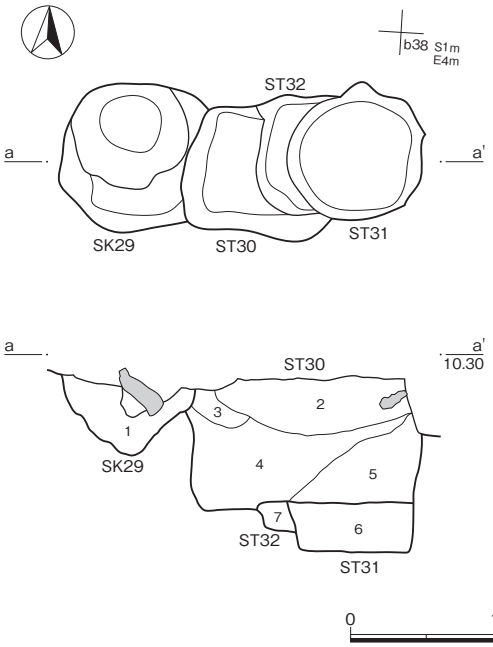


埋葬器出土状況



ST35
1　暗褐色土　（ローム粒・焼土粒少含、粘性・しまり弱）
2　暗褐色土　（ローム粒多含、玉砂利少含）
3　暗褐色土　（ローム粒少含、しまりやや弱）
4　褐色土　　（ローム粒極多含、砂利含、しまりやや弱）
ST36
5　暗褐色土　（ローム粒少含、焼土粒微含、しまりやや強）
6　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒微含、しまりやや弱）
7　褐色土　　（ローム粒多含、炭化物粒微含、しまりやや弱）

Ⅲ-50図　ST35、ST36

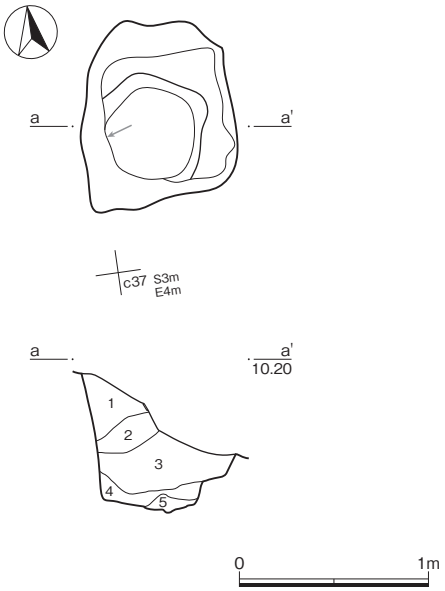


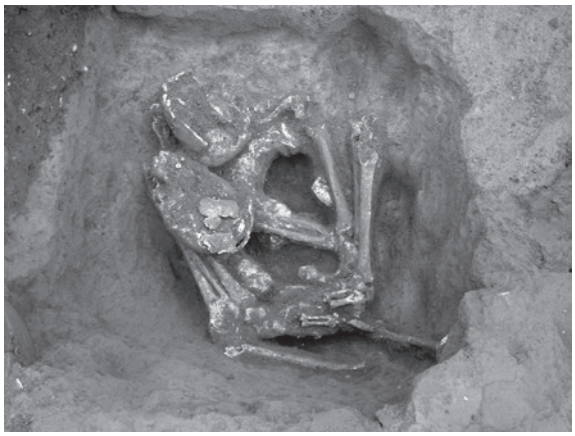
SK29
1　褐色土　　（ローム粗粒極多含）
ST30
2　褐色土　　（ローム粒極多含、ロームブロック多含）
3　暗褐色土　（ロームブロック多含）
4　褐色土　　（ローム粗粒極多含、しまりやや弱）
5　褐色土　　（ロームブロック多含、粘性強）
ST31
6　褐色土　　（ローム粒多含、粘性強、しまり弱）
ST32
7　褐色土　　（6層より暗い、ローム粒多含、粘性極強、しまり弱）

ST31、ST32　人骨出土状況（南から）

ST31　埋葬器出土状況（南から）

Ⅲ-49図　SK29、ST30、ST31、ST32

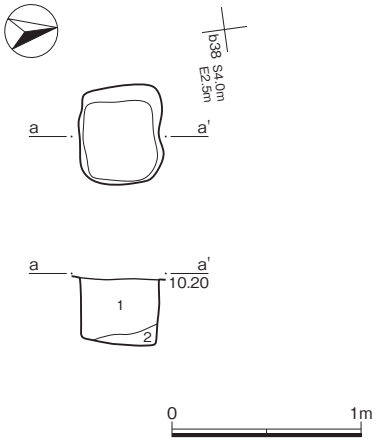




人骨出土状況（西から）

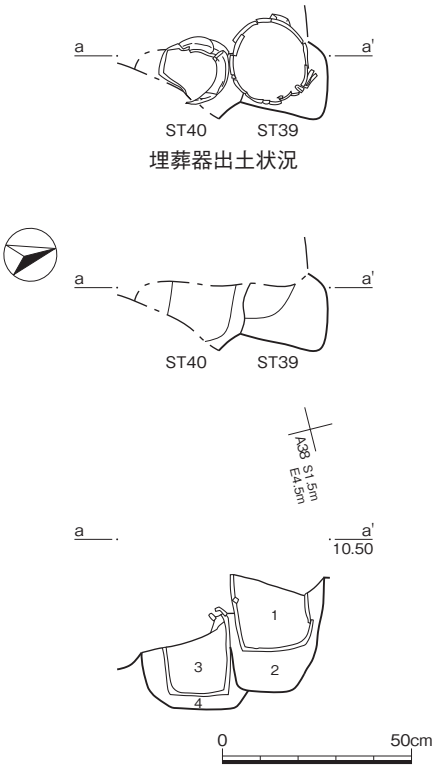
1　暗褐色土　（ローム粒多含、しまり弱）
2　暗褐色土　（ローム粗粒多含、しまりやや弱）
3　暗褐色土　（ローム粒極多含、ロームブロック少含、しまりやや強）
4　暗黄褐色土（ロームの埋土、粘性・しまり強）
5　暗褐色土　（ローム粒少含、炭化物粒微含、しまり弱）

Ⅲ-51図　ST34



1　暗褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（ローム粒多含、骨含、粘性・しまりなし）

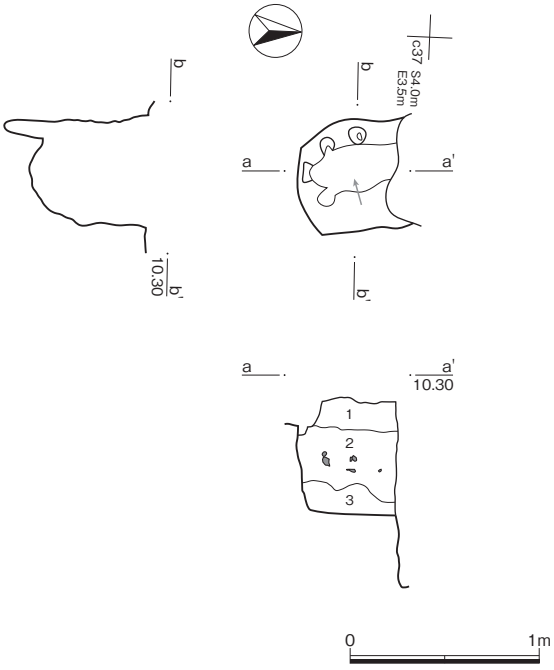
Ⅲ-52図　ST37



埋葬器出土状況

ST39
1　火葬骨
2　褐色土　（ローム粒含）
ST40
3　火葬骨・炭化材
4　褐色土　（ローム粒多含、粘性やや強）

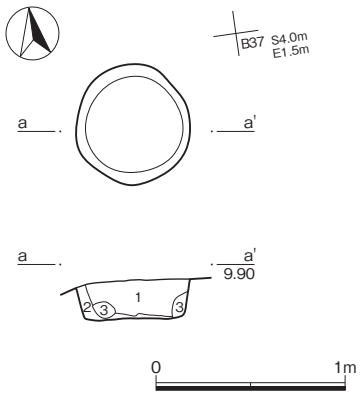
Ⅲ-53図　ST39、ST40



人骨出土状況(西から)

1　暗黄褐色土　(ロームブロック･黒色土ブロック含､粘性･しまりなし)
2　暗褐色土　(粘性･しまりなし)
3　暗黄褐色土　(ロームブロック多含､粘性･しまりなし)

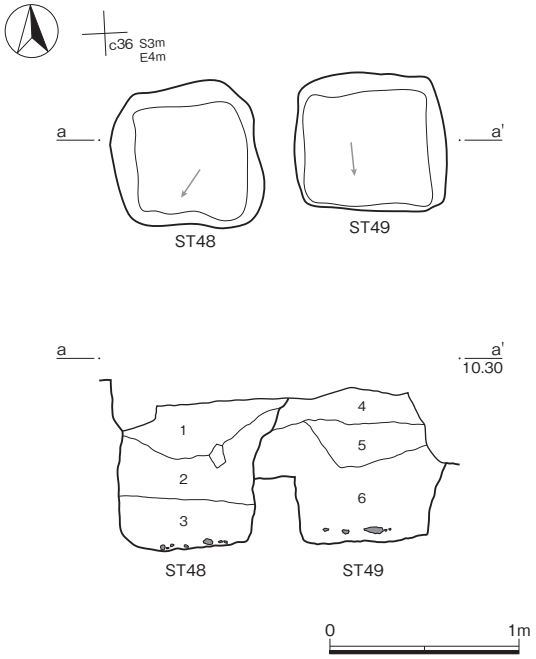
Ⅲ-54図　ST42



人骨出土状況(南から)

1　暗褐色土　(ローム粒･青灰色粘土粒やや多含､焼土粒少含､粘性･しまりやや弱)
2　暗黄褐色土　(ロームブロック多含､焼土粒少含､しまりやや弱)
3　人骨とロームブロック

Ⅲ-55図　ST44



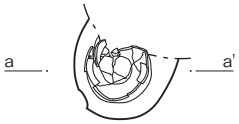
ST48人骨出土状況（南から）

ST49人骨出土状況（東から）

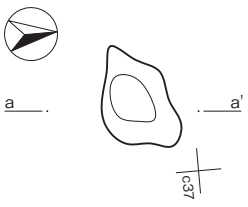
ST48
1　黄褐色土　（黒色土粒やや多含、粘性なし、しまりやや弱）
2　黄褐色土　（黒色土粒多含、粘性なし、しまりやや弱）
3　黄褐色土　（ロームブロック多含、粘性・しまり強）
ST49
4　暗褐色土　（瓦質蔵骨器・ロームブロック少含、粘性なし）
5　暗黄褐色土（ローム粒多含、粘性なし）
6　暗褐色土　（人骨片含、ローム粒少含、炭化物ブロック微含、粘性・しまりなし）

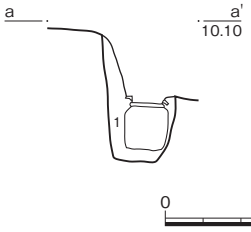
Ⅲ-56図　ST48、ST49

埋葬器出土状況



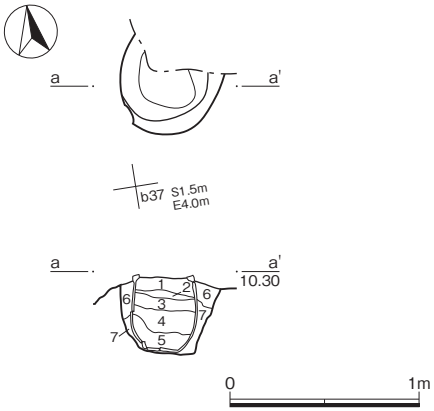
甕棺出土状況





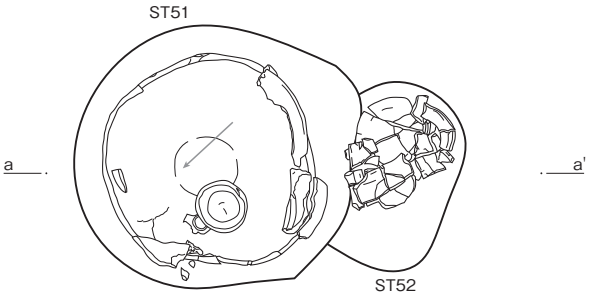
1　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）

Ⅲ-57図　ST50



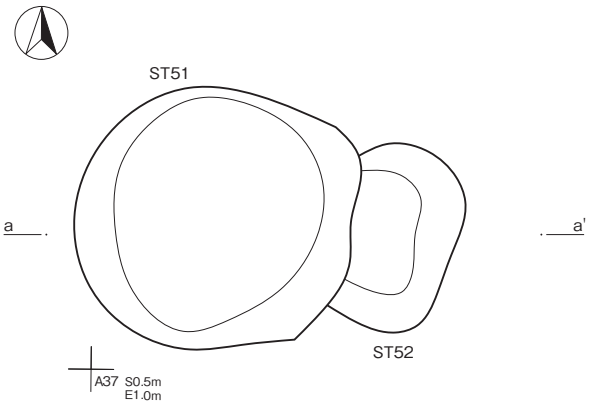
1　暗黄褐色土　（ロームブロックやや多含、焼土ブロック・炭化物ブロック少含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（炭化物ブロック多含、粘性・しまりなし）
3　暗黄褐色土（ローム粒含、粘性・しまりなし）
4　暗黄褐色土（ローム粒多含、ロームブロック含、粘性・しまりなし）
5　暗褐色土　（ローム粒少含、炭化物粒微含、粘性なし）
6　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
7　暗黄褐色土（ローム粒多含、ロームブロックやや多含、粘性・しまりなし）

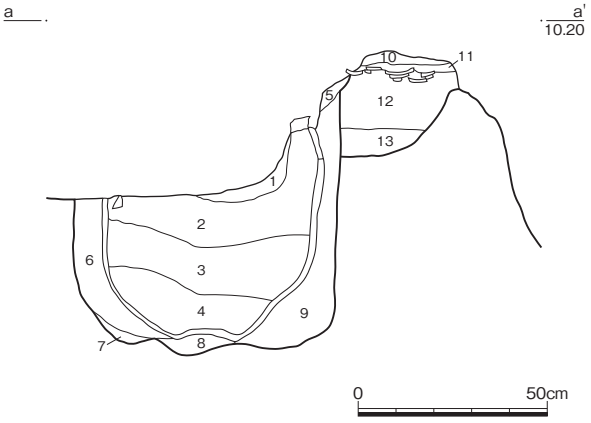
Ⅲ-58図　ST61



ST51甕棺、ST52埋葬器出土状況

ST51人骨出土状況（西から）

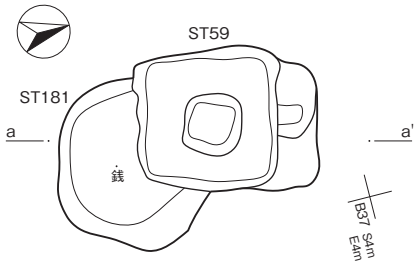


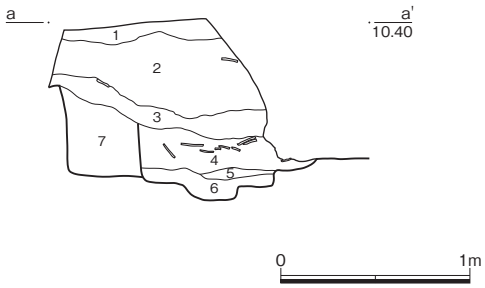


ST52人骨出土状況（南から）

ST51
1 暗褐色土 （ローム粒少含、粘性・しまりなし）
2 暗黄褐色土 （ローム粒多含、粘性なし）
3 暗黄褐色土 （ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
4 白灰色土 （骨出土、青灰色粘土粒少含、炭化物粒微含、粘性・しまりなし）
5 黄褐色土 （ロームブロック主体、粘性・しまりなし）
6 暗褐色土 （ローム粒多含、粘性・しまりなし）
7 暗褐色土 （粘性・しまりなし）
8 黄褐色土 （ロームブロック主体）
9 暗黄褐色土 （ローム粒・焼土粒微含、粘性・しまりなし）
ST52
10 黒褐色土 （ローム粒含、粘性・しまりなし）
11 暗褐色土 （青灰色粘土ブロック少含、粘性・しまりなし）
12 黒褐色土 （ロームブロック含、しまりなし）
13 黄褐色土 （ロームブロック主体、粘性やや弱、しまりなし）

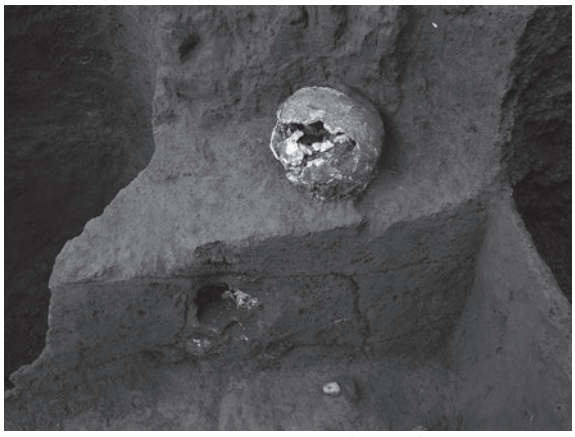
Ⅲ-59図 ST51、ST52

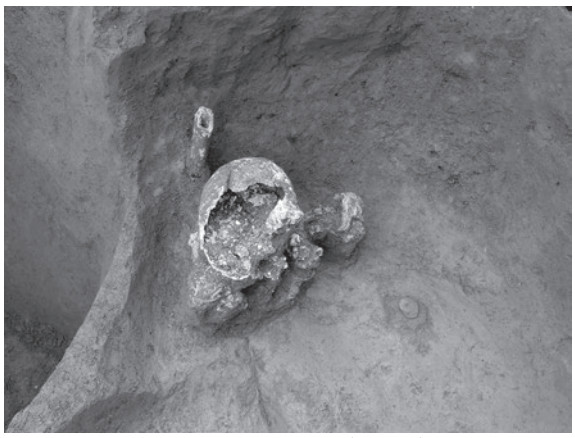




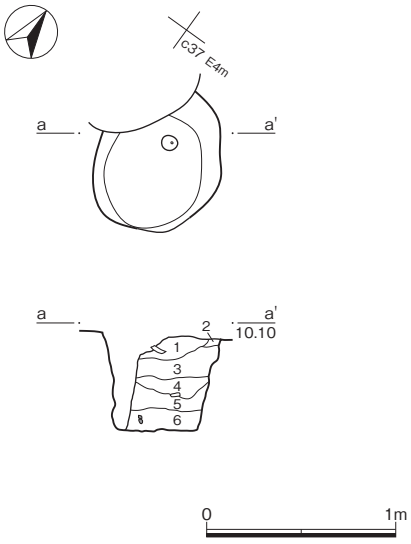
改葬時埋積土
1　暗褐色土　（焼土粒少含、粘性・しまりなし）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック・焼土粒多含、粘性やや弱、しまりなし）
3　暗黄褐色土　（ローム粒・焼土粒多含、炭化物粒やや多含、粘性なし、しまりやや弱）
ST59
4　黄褐色土　（焼土粒多含、炭化物粒やや多含、骨・甕片含、粘性・しまりなし）
5　黄褐色土　（暗褐色土粒多含、粘性極強、しまりなし）
6　暗黄褐色土　（青灰色粘土ブロック少含、しまりなし）
ST181
7　暗黄褐色土　（ロームブロックやや多含、焼土粒少含、粘性なし）

ST59人骨出土状況（東から）


ST181人骨出土状況（西から）


ST181人骨出土状況（西から）

Ⅲ-60図　ST59、ST181



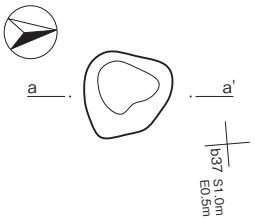
1　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
2　ロームブロック
3　暗褐色土　（ローム粒やや多含、粘性なし、しまりやや弱）
4　暗褐色土　（しまりなし）
5　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
6　暗黄褐色土（ローム粒多含、炭化物粒少含、粘性なし、しまりやや弱）

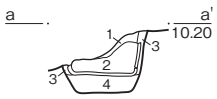
人骨出土状況（東から）

人骨出土状況（南から）

Ⅲ-61図　ST65

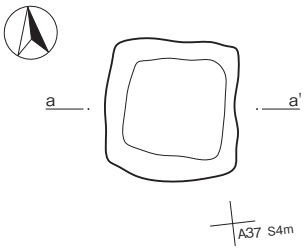
埋葬器出土状況

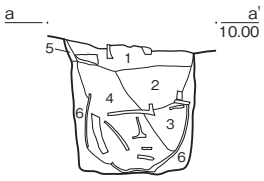




1　黄褐色土　（粘性・しまりなし）
2　炭化物・骨片（粘性・しまりなし）
3　暗黄褐色土（粘性なし）
4　暗黄褐色土（ローム粒含、粘性・しまりなし）

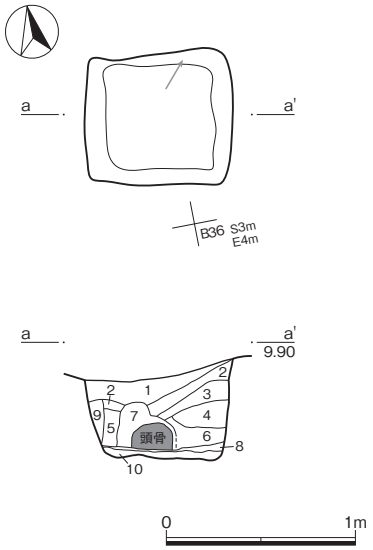
Ⅲ-62図　ST69





1　黄褐色土　（ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
2　暗黄褐色土（ローム粒極多含、粘性・しまりなし）
3　黒褐色土　（ロームブロックやや多含、粘性・しまりなし）
4　暗黄褐色土（ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
5　暗黄褐色土（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
6　暗褐色土　（ロームブロック少含、粘性・しまりなし）

Ⅲ-63図　ST72

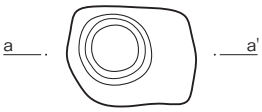


人骨出土状況（南から）

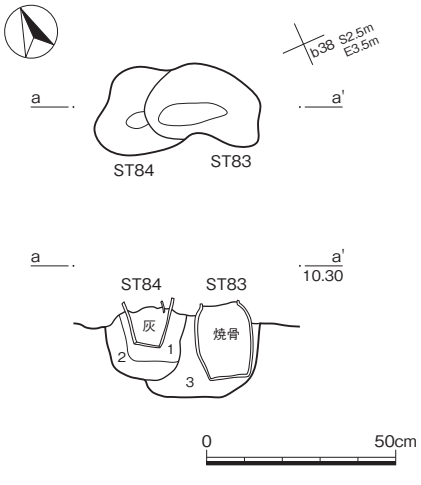
1　黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、焼土ブロック微含、粘性なし）
2　暗褐色土　（ローム粒微含、粘性・しまりなし）
3　黄褐色土　（暗褐色土粒やや多含、粘性・しまりなし）
4　暗褐色土　（粘性・しまりなし）
5　暗黄褐色土（ローム粒主体、粘性・しまりなし）
6　ロームブロック
7　暗褐色土　（ローム粒やや少含、粘性・しまりなし）
8　暗褐色土　（骨片・炭化物粒やや多含、粘性・しまりなし）
9　暗褐色土　（ローム粒やや多含、焼土粒・炭化物粒微含、粘性・しまりなし）
10　暗黄褐色土（ロームブロック主体、炭化物粒微含、しまりなし）

Ⅲ-64図　ST76

埋葬器出土状況

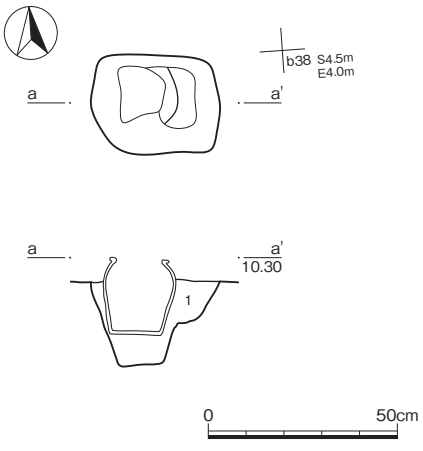


埋葬器出土状況



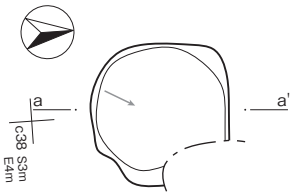
ST84
　1　暗黄褐色土　（ローム粒主体、粘性・しまりやや強）
　2　暗黄褐色土　（ロームの埋土、粘性・しまり強）
ST83
　3　褐色土　　（ローム粒極多含）

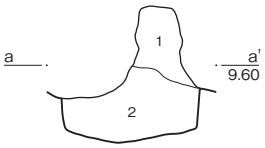
Ⅲ-65図　ST83、ST84



1　暗黄褐色土　（ロームの埋土）

Ⅲ-66図　ST90



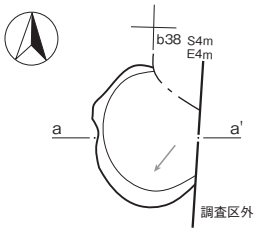


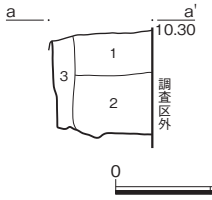
1　褐色土　（ローム粒多含、しまりやや強）
2　褐色土　（ローム粒極多含、ロームブロック多含、しまりやや弱）

人骨a出土状況（西から）

人骨b出土状況（北から）

Ⅲ-67図　ST85

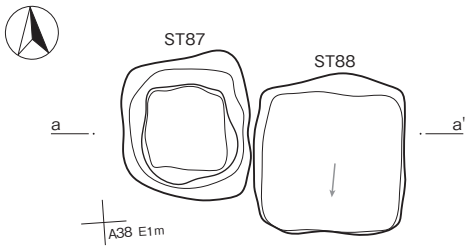


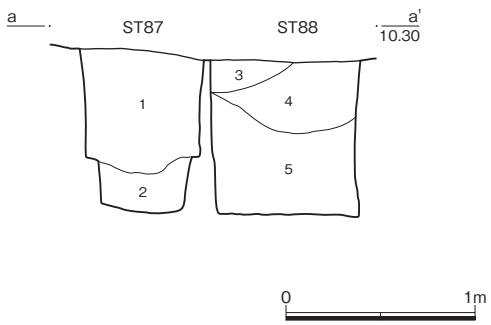


1　暗褐色土　（ローム粒多含、しまりやや弱）
2　褐色土　（ローム粒極多含、ロームブロック多含、しまりやや弱）
3　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック主体、粘性やや強、しまり弱）

人骨出土状況（南西から）

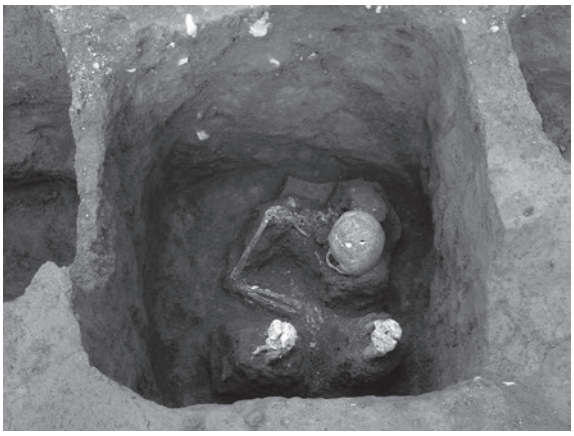
Ⅲ-68図　ST96





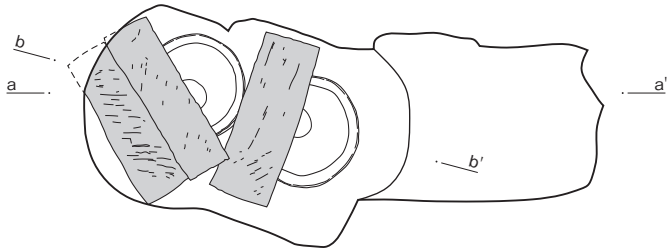
ST87
　1　暗褐色土　（ローム粒･ロームブロック多含、粘性強、しまり弱）
　2　暗褐色土　（ローム粗粒･灰色粘土粒多含、粘性やや強、しまり弱）
ST88
　3　褐色土　　（ローム粒多含、ロームブロック含、しまりやや強）
　4　褐色土　　（ローム粗粒極多含、しまりやや弱）
　5　褐色土　　（ローム粗粒･ロームブロック極多含、粘性やや強、しまり弱）

ST87人骨出土状況（西から）

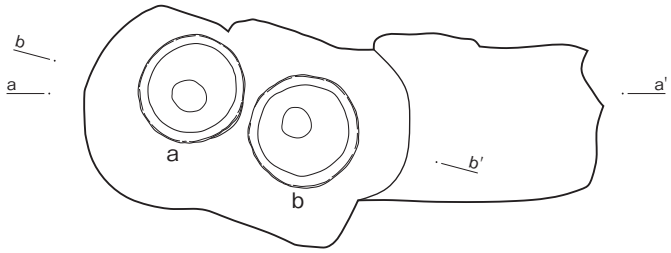

ST88人骨出土状況1（南から）

ST88人骨出土状況2（南から）

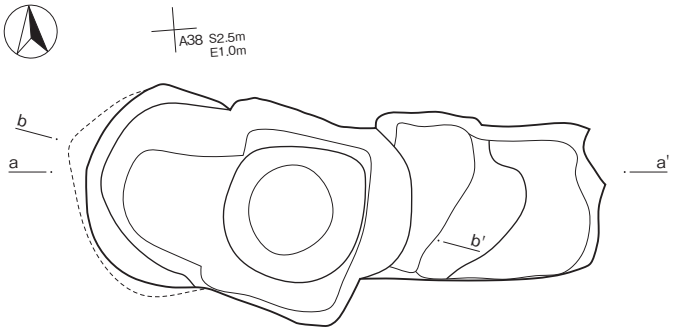
Ⅲ-69図　ST87、ST88



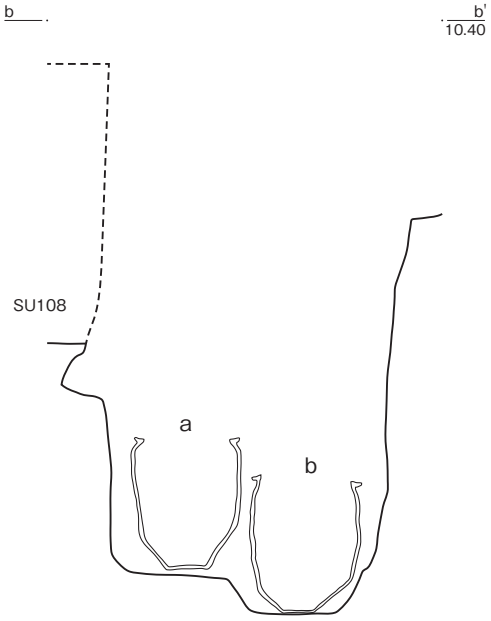
蓋石出土状況

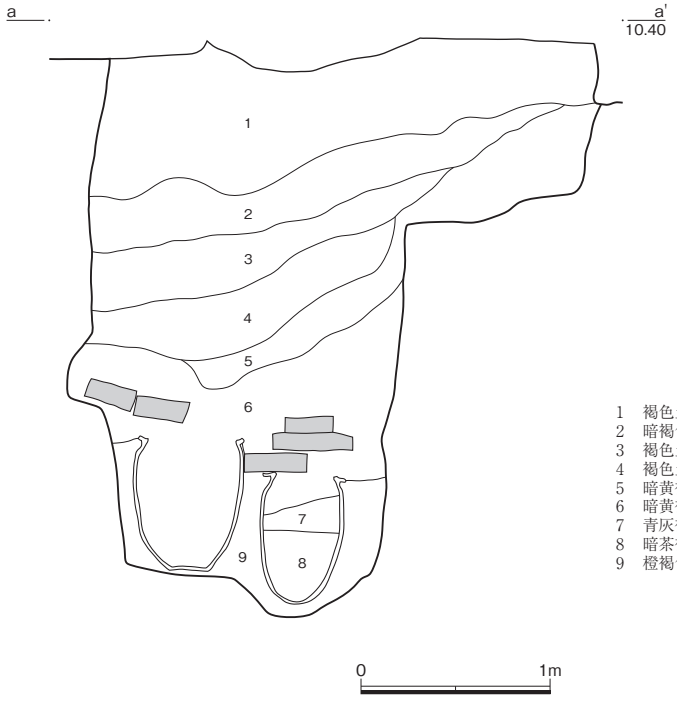


甕棺出土状況



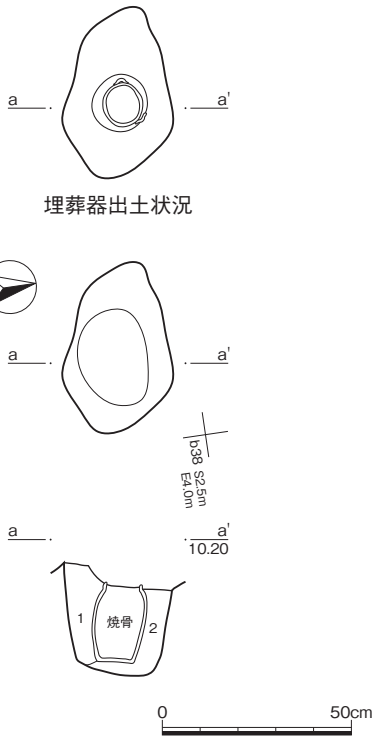
掘方





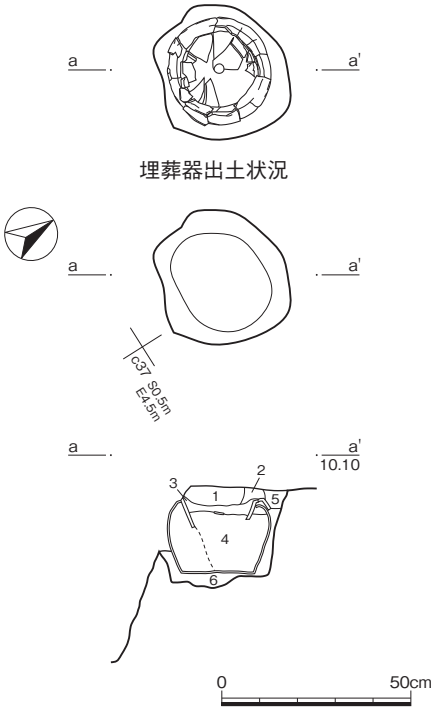
1 褐色土 （ローム粗粒極多含、山砂粒多含、玉砂利含、粘性・しまりやや強）
2 暗褐色土 （ローム粒極多含、山砂粒多含、炭化物粒・焼土粒少含、粘性・しまりやや強）
3 褐色土 （ローム粒多含、ロームブロック・山砂粒・玉砂利少含）
4 褐色土 （ローム粗粒極多含、山砂粒・玉砂利少含、炭化物粒微含、粘性強）
5 暗黄褐色土 （ローム粗粒極多含、ロームブロック・炭化物粒・焼土粒少含、粘性極強）
6 暗黄褐色土 （ロームブロック・ローム粗粒極多含、山砂粒多含、粘性・しまりやや強）
7 青灰褐色土 （粘土質土・山砂粒含、粘性極強、しまり弱）
8 暗茶褐色土 （有機質繊維主体、粘性強、しまり弱）
9 橙褐色土 （山砂粒主体、粘性弱、しまりやや強）

Ⅲ-70図 ST97



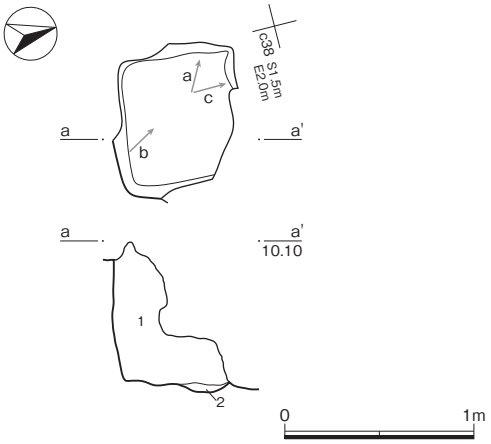
1　暗黄褐色土　（ロームの埋土、粘性・しまり強）
2　暗褐色土　　（ローム粒・焼土粒微含、しまりやや弱）

Ⅲ-71図　ST98



1　暗黄褐色土　（粘性なし）
2　ロームブロック
3　暗黄褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
4　暗褐色土　　（粘性・しまりなし）
5　暗褐色土　　（粘性なし）
6　黄褐色土　　（粘性なし）

Ⅲ-73図　ST128



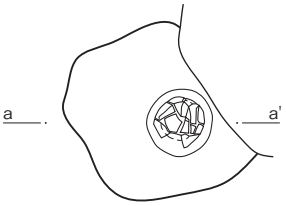
1　褐色土　　（ローム粒極多含）
2　暗黄褐色土　（ローム主体、粘性・しまり強）

人骨a出土状況（北から）

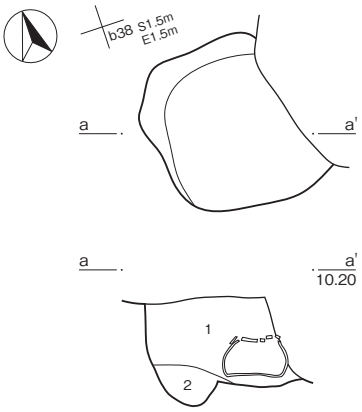
人骨b出土状況（北から）

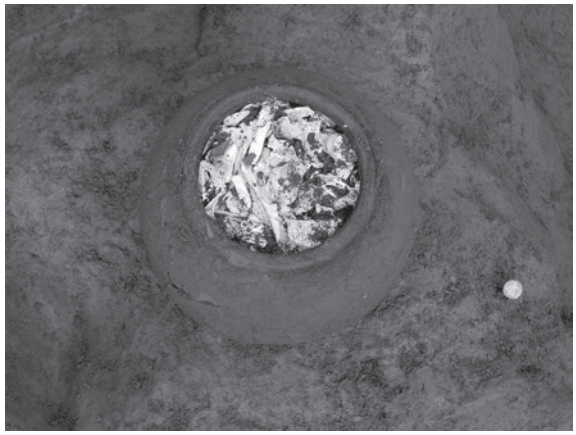
人骨c出土状況（北から）

Ⅲ-72図　ST104



埋葬器出土状況

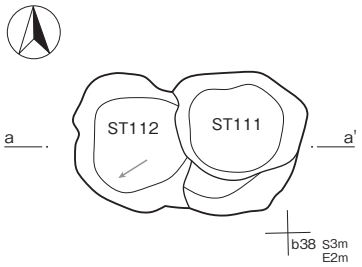


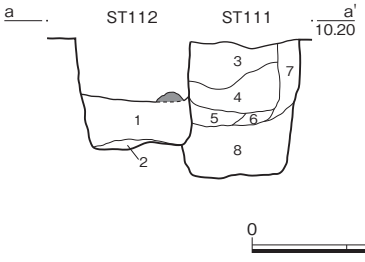


埋葬器出土状況(南から)

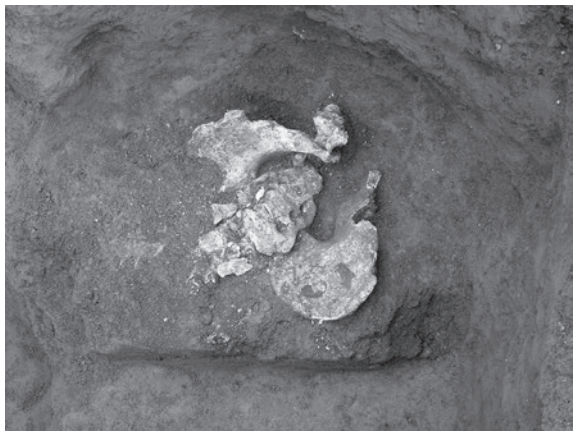
1　暗褐色土　　(ローム粒含)
2　暗黄褐色土　(ローム粒主体、粘性やや強、しまりやや弱)

Ⅲ-74図　ST106





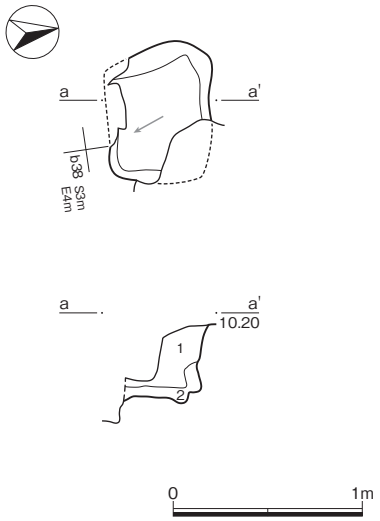
ST112人骨b・ST111人骨出土状況(南から)



ST112人骨b骨盤出土状況(北から)

ST112
1　褐色土　　(ローム粒極多含、しまりやや弱)
2　暗黄褐色土　(ローム粒の埋土、粘性・しまりやや強)
ST111
3　暗褐色土　　(ローム粗粒・土師質火消壺など遺物多含、粘性やや強、しまりやや弱)
4　暗褐色土　　(ローム粗粒少含、人骨含、粘性やや強、しまりやや弱)
5　暗褐色土　　(ローム粒多含、しまりやや弱)
6　暗灰褐色土　(ローム粒少含、粘性・しまりやや強)
7　褐色土　　(ローム粒含、しまりやや弱)
8　暗黄褐色土　(ローム主体、粘性やや強)

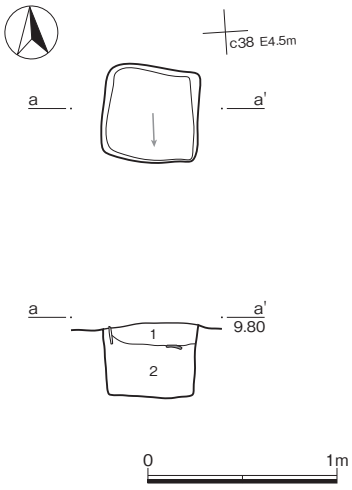
Ⅲ-75図　ST111、ST112



人骨出土状況（南から）

1　暗褐色土　（ローム粗粒多含、しまりやや弱）
2　暗黄褐色土　（ロームの埋土、褐色山砂粒多含、粘性やや強）

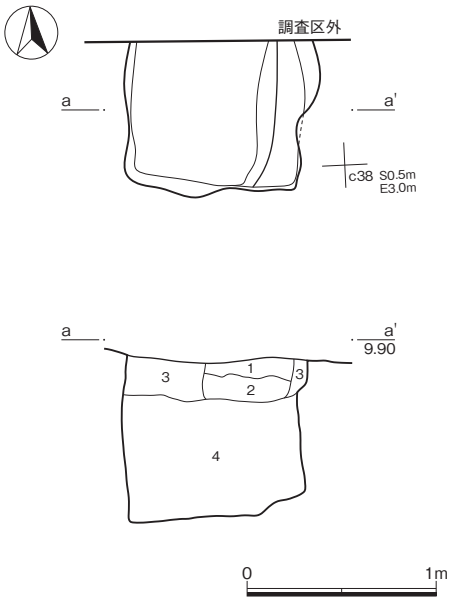
Ⅲ-76図　ST113



人骨出土状況（南から）

1　暗褐色土　（ローム粒少含）
2　暗褐色土　（ローム粒多含、しまりやや弱）

Ⅲ-77図　ST115

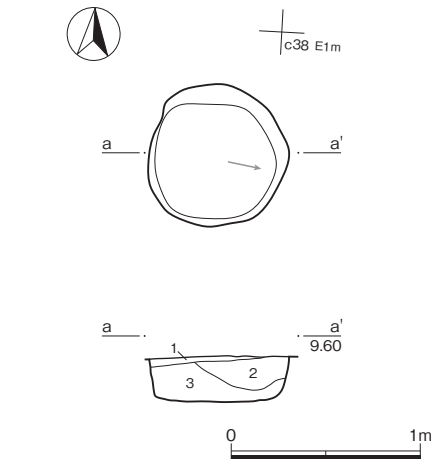


1　暗褐色土　（ローム粒多含、しまりやや強）
2　暗褐色土　（焼骨・土師質蔵骨器片多含、しまりやや弱）
3　暗褐色土　（ローム粒極多含、しまりやや弱）
4　黒褐色土　（ローム粒多含、炭化物微含）

人骨a出土状況（南から）

人骨c、d出土状況（南から）

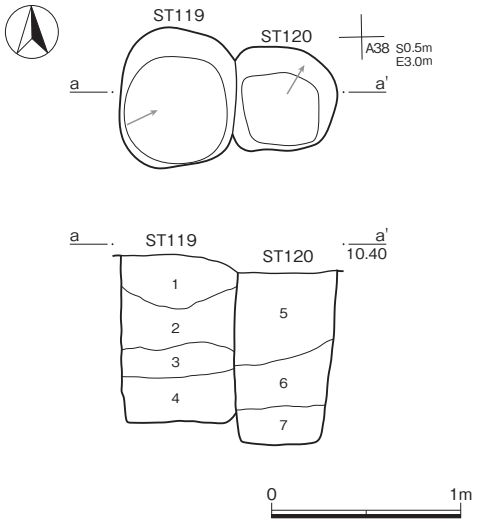
Ⅲ-78図　ST116



1　暗褐色土　（ローム粒多含、焼土粒・炭化物少含、しまりやや弱）
2　黒褐色土　（ローム粗粒・ロームブロック極多含、しまり弱）
3　暗褐色土　（ローム粒・人骨含、しまり弱）

人骨出土状況（東から）

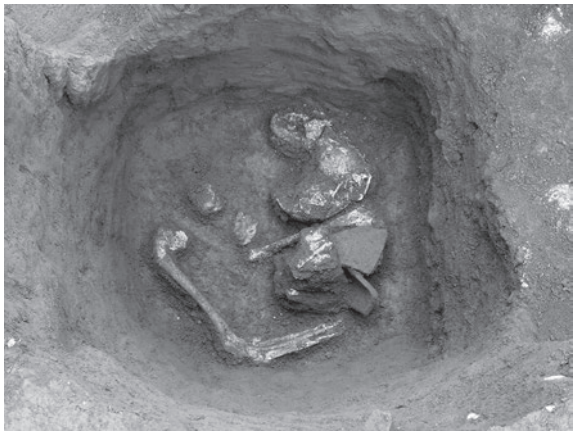
Ⅲ-79図　ST117



ST119人骨出土状況（西から）

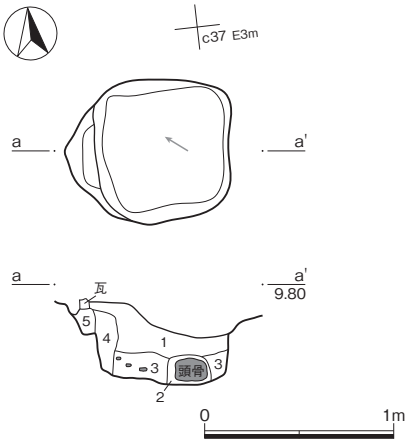
ST119
1　暗褐色土　（ローム粒・砂礫・玉砂利・骨片少含、炭化物微含）
2　暗褐色土　（1層より明るい、ローム粒少含、玉砂利微含、しまりやや強）
3　暗褐色土　（ローム粒多含、しまり強）
4　暗褐色土　（ローム粒・灰褐色粘土粒少含、しまりやや弱）
ST120
5　暗褐色土　（ローム粒多含、ローム粗粒・玉砂利少含、しまりやや強）
6　褐色土　　（ローム粒多含、粘性やや強）
7　暗褐色土　（ローム粒微含、しまり弱）

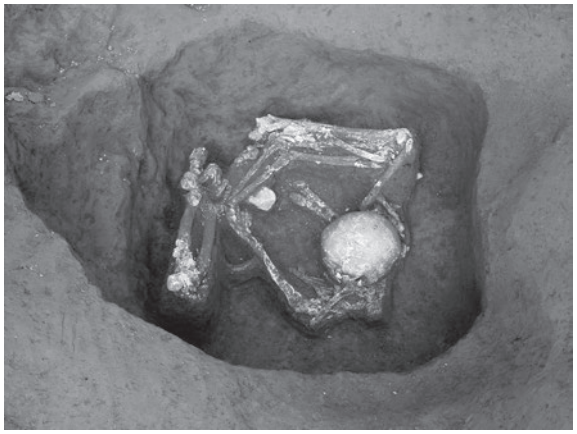
ST120人骨a出土状況（北から）



ST120人骨b出土状況（北から）

Ⅲ-80図　ST119、ST120

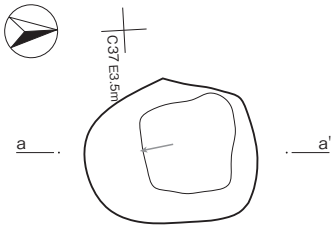


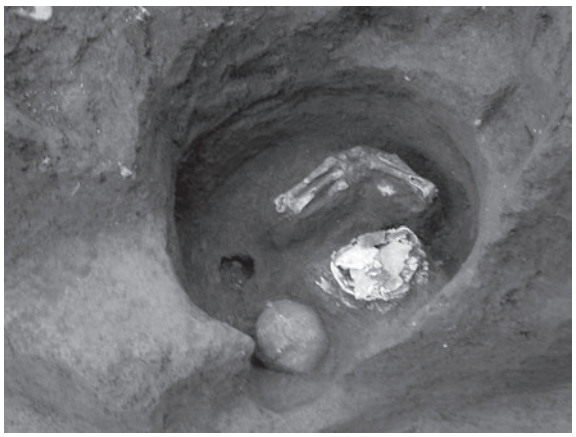


人骨出土状況（南から）

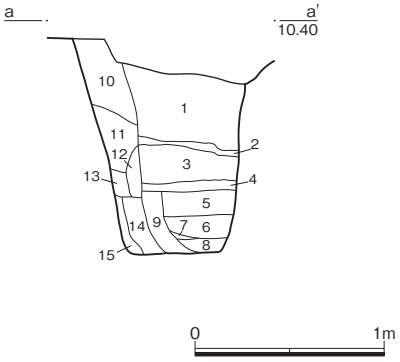
1　暗黄褐色土　（ローム粒多含、炭化物少含、粘性やや弱、しまりなし）
2　黄褐色土　　（頭骨の周囲堆積、ローム粒極多含、粘性・しまりやや弱）
3　暗黄褐色土　（ローム粒やや多含、焼土粒微含、しまりなし）
4　暗褐色土　　（粘性・しまりなし）
5　ロームブロック

Ⅲ-81図　ST121





人骨出土状況(西から)

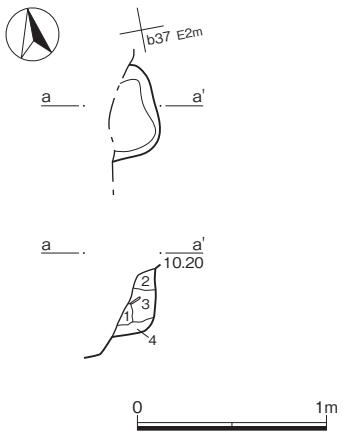


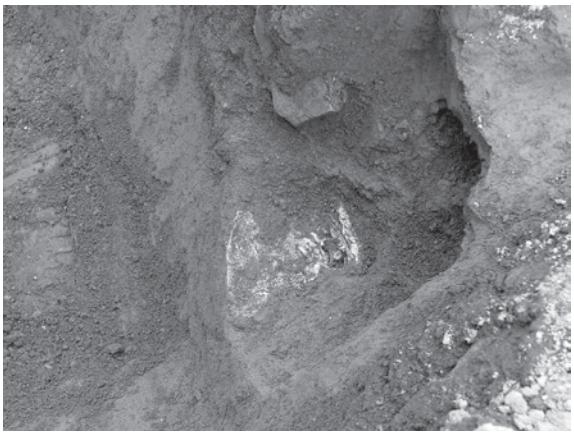
人骨出土状況(東から)

1 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、粘性なし)
2 暗褐色土 (炭化物粒極多含、粘性・しまりなし)
3 暗黄褐色土 (ロームブロック・炭化物粒少含、粘性・しまりなし)
4 暗褐色土 (骨片含、粘性・しまりなし)
5 暗黄褐色土 (骨片含、ローム粒少含、粘性・しまりなし)
6 暗黄褐色土 (ローム粒主体、粘性なし、しまりやや弱)
7 暗褐色土 (骨片多含、しまりなし)
8 暗黄褐色土 (しまりなし)
9 黄褐色土 (ローム粒主体、しまりなし)
10 暗黄褐色土 (焼土粒少含、粘性なし、しまりやや弱)
11 暗黄褐色土 (ロームブロック多含、炭化物粒少含、粘性・しまりなし)
12 暗黄褐色土 (ローム粒主体、しまりやや弱)
13 暗黄褐色土 (12層よりも赤茶色がかるパサパサとした堆積、粘性・しまりなし)
14 暗黄褐色土 (ローム粒多含、炭化物粒微含、しまりなし)
15 暗黄褐色土 (パサパサとした堆積、13層に類似、粘性・しまりなし)

人骨出土状況(西から)

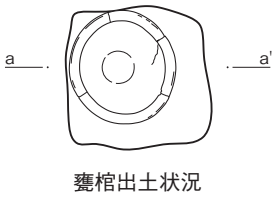
Ⅲ-82図 ST125



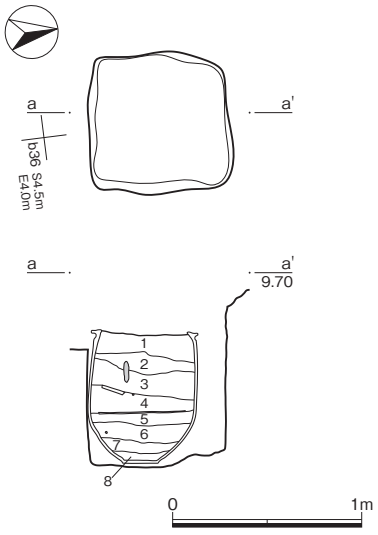

人骨出土状況（南から）

1　暗褐色土　（粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（ローム粒やや多含、粘性・しまりなし）
3　暗黄褐色土（ローム粒多含、粘性なし、しまりやや弱）
4　黄褐色土　（ロームブロック主体、しまりなし）

Ⅲ-83図　ST126



甕棺出土状況

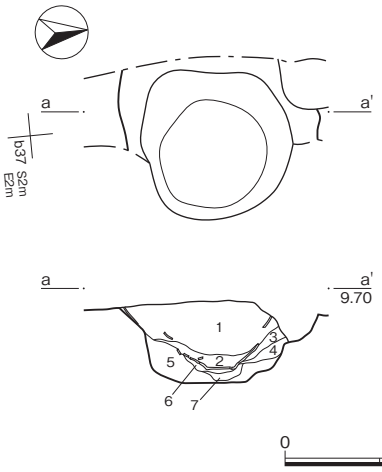


人骨出土状況（南から）

1　黄褐色土　（ローム粒・黒色土粒多含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（青灰色粘土粒やや多含、ローム粒少含、粘性やや弱、しまりなし）
3　暗黄褐色土（ローム粒やや多含、粘性・しまりなし）
4　暗褐色土　（赤褐色ブロック状酸化鉄・ローム粒やや多含、粘性・しまりなし）
5　暗褐色土　（赤褐色土ブロック多含、しまりなし）
6　暗褐色粘土（しまりなし）
7　人骨
8　黒色を呈する植物質の堆積

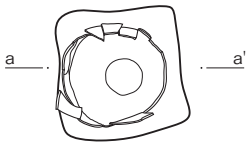
Ⅲ-84図　ST129

甕棺出土状況

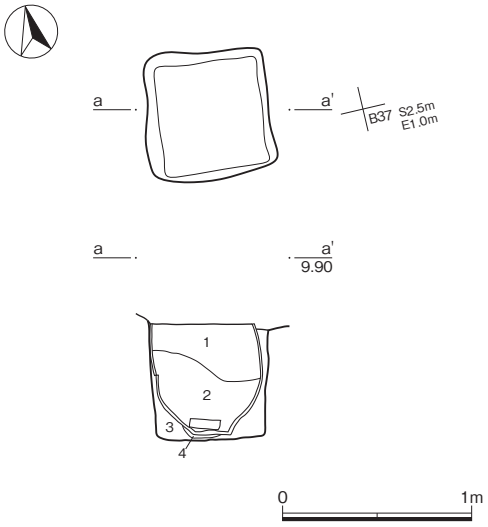


1　暗褐色土　（小石やや多含、炭化物粒少含、ローム粒微含、粘性・しまりなし）
2　黒色土　（炭化物ブロック・炭化物粒主体、粘性・しまりなし）
3　暗黄褐色土　（ローム粒やや多含、粘性・しまりなし）
4　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
5　暗黄褐色土　（ローム粒極多含、しまりなし）
6　暗黄褐色土　（ロームブロックやや多含、粘性・しまりなし）
7　暗褐色土　（炭化物粒多含、粘性やや弱、しまりなし）

Ⅲ-85図　ST130

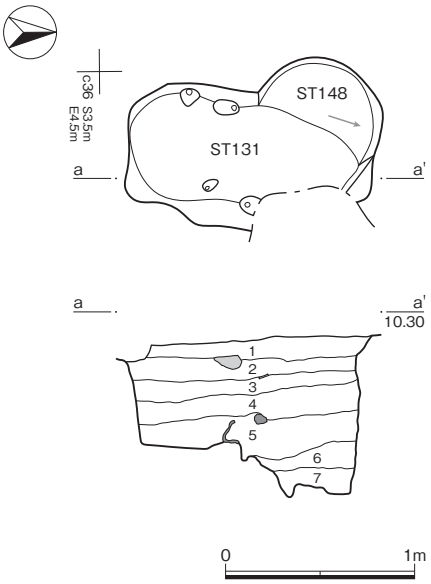


甕棺出土状況



1　暗黄褐色土　（ローム粒・ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
2　暗黄褐色土　（ローム粒極多含、粘性・しまりなし）
3　暗黄褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
4　灰褐色土　（ローム粒微含、粘性やや弱、しまりなし）

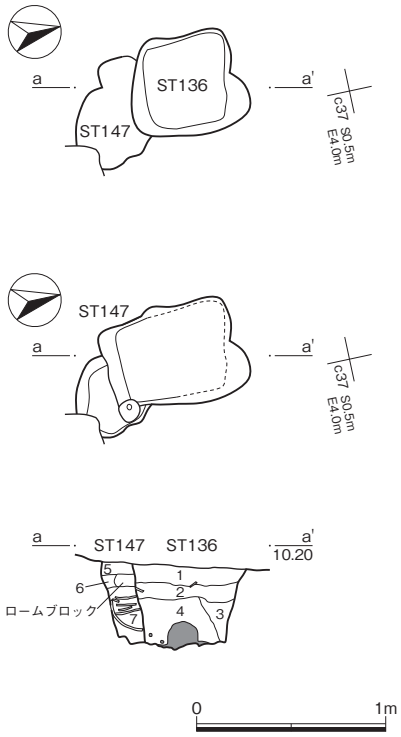
Ⅲ-87図　ST133



1　暗褐色土　（φ2～5mm ロームブロック・ローム粒多含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
3　暗褐色土　（粘性・しまりなし）
4　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
5　暗黄褐色土　（ローム粒・人骨含、粘性やや弱、しまりなし）
6　暗黄褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
7　暗黄褐色土　（ローム粒・炭化物粒多含、粘性やや弱、しまりなし）

人骨出土状況（北から）

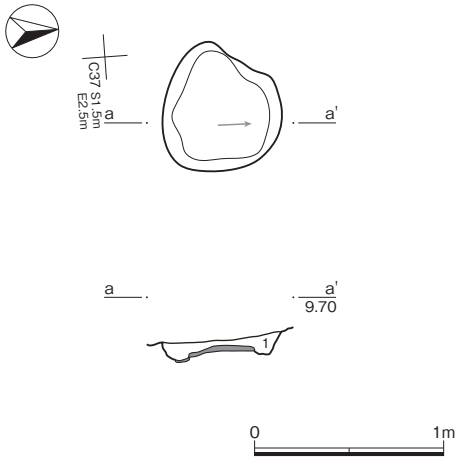
Ⅲ-86図　ST131、ST148



ST136人骨出土状況（西から）

ST136
1　黄褐色土　（小礫含、粘性なし）
2　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
3　暗灰褐色土　（粘性・しまりなし）
4　暗黄褐色土　（ローム粒多含、人骨含、粘性・しまりなし）
ST147
5　暗黄褐色土　（黒色土ブロック少含、粘性・しまりなし）
6　暗褐色土　（ロームブロック含、粘性なし）
7　暗黄褐色土　（ローム粒・土師質土器片含、粘性・しまりなし）

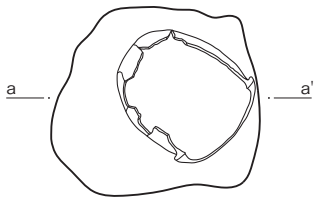
Ⅲ-88図　ST136、ST147



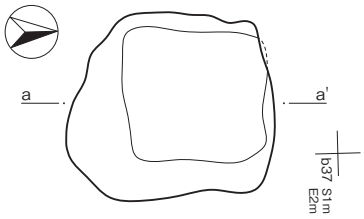
1　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、しまりなし）

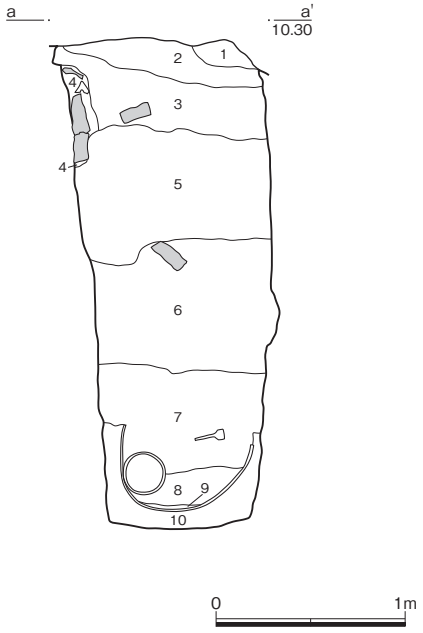
人骨出土状況（西から）

Ⅲ-89図　ST144



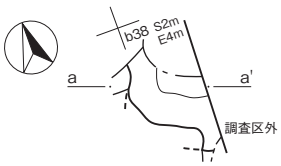
甕棺出土状況

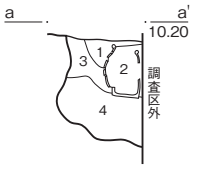




1　ロームブロック
2　暗褐色土　（砂利やや多含、ロームブロック少含、粘性・しまりなし）
3　黄褐色土　（ロームブロック含、粘性・しまりなし）
4　ロームブロック、墓石含
5　黄褐色土　（ローム粒・白色粘土粒多含、しまりなし）
6　黄褐色土　（5層よりも白色粘土粒多含、しまりなし）
7　暗褐色土　（砂利多含、炭化物粒含、粘性極強、しまりなし）
8　暗黄褐色土　（ローム粒多含、しまりなし）
9　黒色土　（粘性極強、しまりなし）
10　黄褐色土　（ローム粒主体、粘性極強）

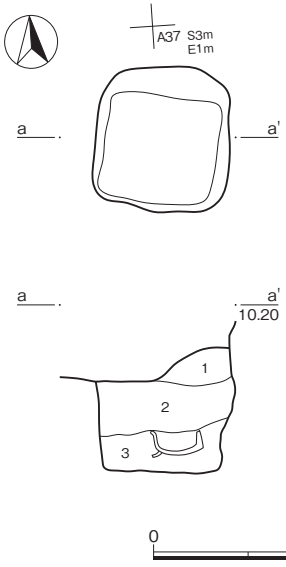
Ⅲ-90図　ST140





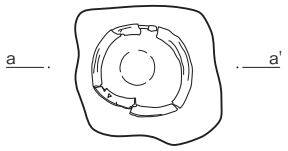
1　褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりやや強）
2　暗褐色土　（焼土粒含、粘性・しまりやや強）
3　褐色土　（ローム粒極多含）
4　暗褐色土　（瓦片極多含、焼土粒・炭化物粒多含、粘性やや強、しまり極強）

Ⅲ-91図　ST178

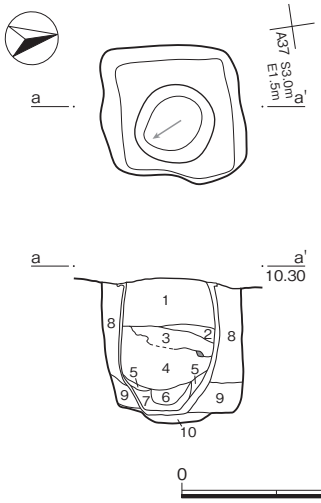


1　暗褐色土　（ロームブロック含、焼土粒少含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（ローム粒含、粘性・しまりなし）
3　暗黄褐色土　（ローム粒やや多含、瓦質埋葬器含、粘性・しまりなし）

Ⅲ-92図　ST183



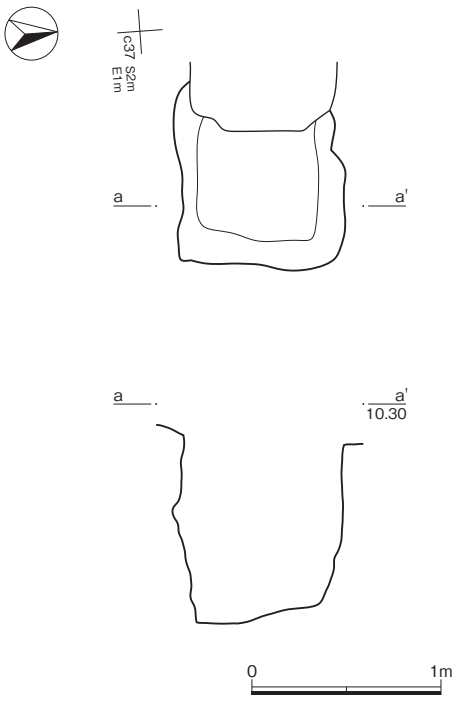
甕棺出土状況



人骨出土状況（東から）

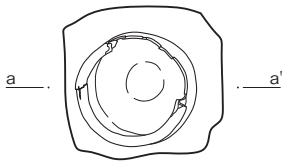
1　暗黄褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
2　暗黄褐色砂　（粘性・しまりなし）
3　暗褐色土　　（ローム粒少含、炭化物粒微含、粘性・しまりなし）
4　暗褐色土　　（人骨含、しまりなし）
5　暗黄褐色土　（ローム粒やや少含、粘性・しまりなし）
6　黒色土　　（粘性やや弱、しまりなし）
7　黒褐色土　　（ローム粒微含、粘性・しまりなし）
8　暗黄褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
9　暗黄褐色土　（8層より暗い色調、ローム粒含、粘性・しまりなし）
10　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性なし）

Ⅲ-93図　ST145

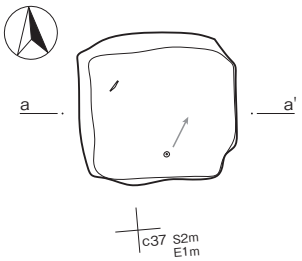


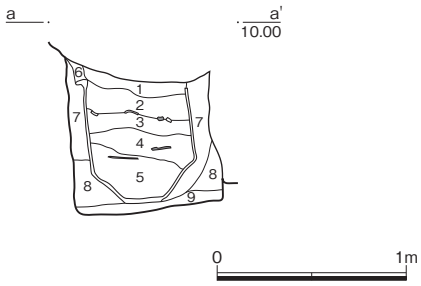
人骨出土状況（東から）

Ⅲ-94図　ST146



甕棺出土状況

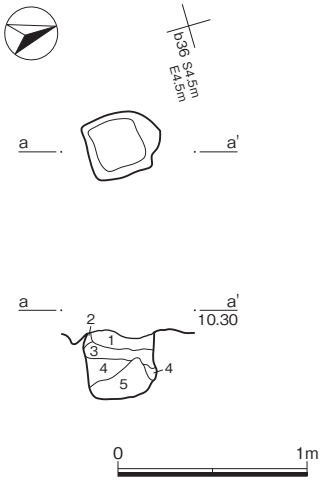




人骨出土状況(北から)

1　暗黄褐色土　(ロームブロック多含、青灰色粘土粒含、粘性なし、しまりやや弱)
2　暗黄褐色土　(ロームブロック多含、粘性やや弱、しまりなし)
3　灰褐色土　(しまりなし)
4　暗褐色土　(ローム粒含、しまりなし)
5　暗褐色土　(人骨含、粘性・しまりなし)
6　黄褐色土　(ロームブロック多含、粘性・しまりなし)
7　黄褐色土　(ローム粒主体、粘性・しまりなし)
8　暗黄褐色土　(ローム粒多含、炭化物粒微含、粘性やや弱、しまりなし)
9　暗黄褐色土　(ロームブロック主体)

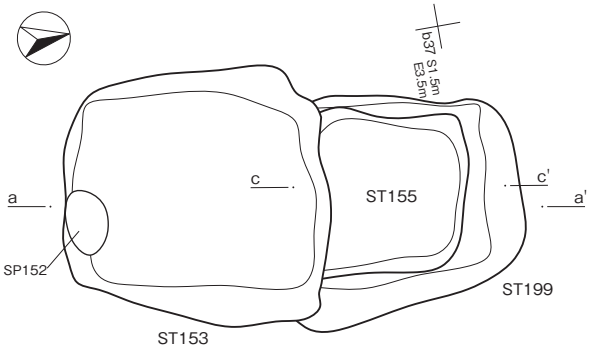
Ⅲ-95図　ST149



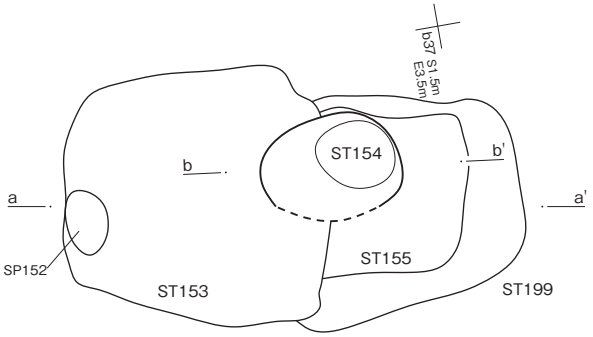
人骨出土状況(西から)

1　黄褐色土　(ローム粒含、粘性なし)
2　ロームブロック
3　暗褐色土　(ロームブロック少含、粘性なし)
4　暗黄褐色土　(黒色土粒少含、粘性なし、しまりやや弱)
5　黄褐色土　(青灰色粘土粒多含、粘性・しまりなし)

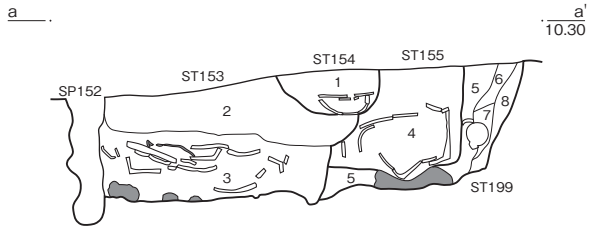
Ⅲ-96図　ST160



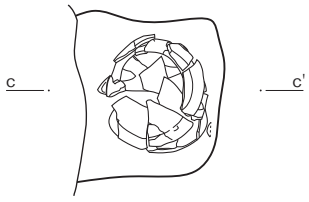
ST153人骨出土状況（東から）



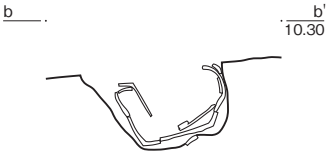
ST199人骨出土状況（東から）

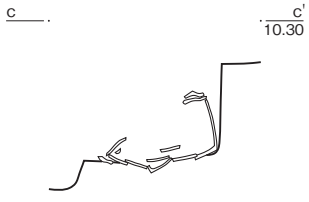


ST154
　1　黄褐色土　（ローム粒多含、粘性なし）
ST153
　2　暗黄褐色土（ローム粒多含、粘性なし）
　3　暗褐色土　（粘性やや弱、しまりなし）
ST155
　4　黄褐色土　（ローム粒多含、粘性なし）
ST199
　5　暗褐色土　（炭化物粒やや多含、ローム粒含、しまりなし）
　6　暗黄褐色土（黒色土粒含、粘性なし）
　7　黒色土　　（ローム粒含、粘性・しまりなし）
　8　暗黄褐色土（炭化物粒少含、粘性なし）

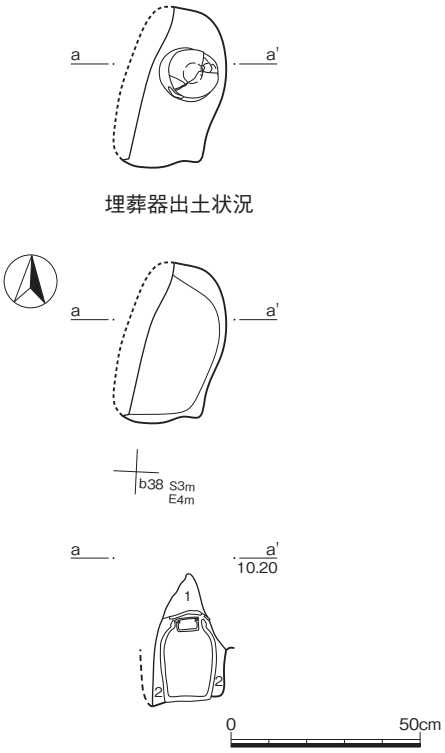


ST155埋葬器出土状況





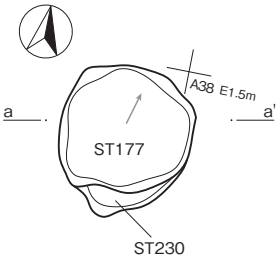
Ⅲ-97図　ST153、ST154、ST155、ST199



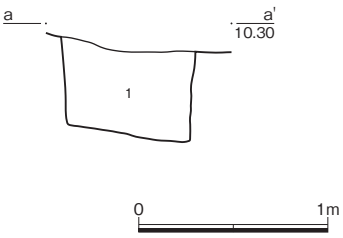
人骨出土状況(南から)

1　暗褐色土　(ローム粒含､焼土粒少含､しまり強)
2　暗褐色土　(ローム粒極多含､しまりやや弱)

Ⅲ-98図　ST174



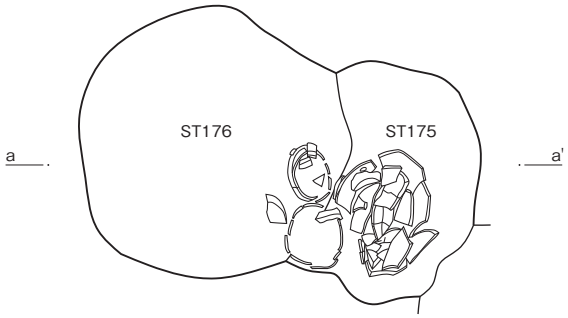
ST177人骨出土状況(北から)



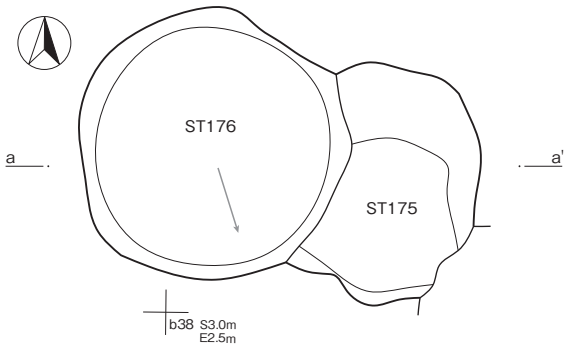
ST230人骨出土状況(北から)

1　褐色土　(ロームブロック極多含､しまり弱)

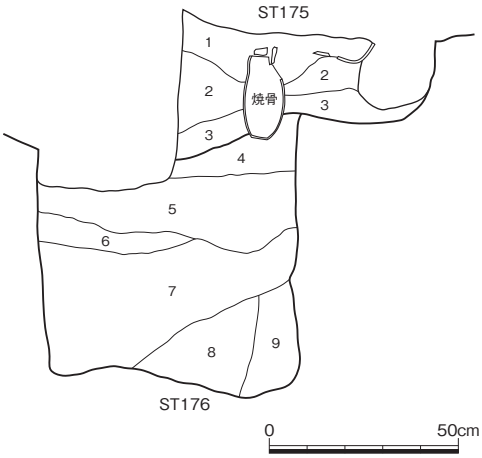
Ⅲ-99図　ST177､ST230



埋葬器出土状況

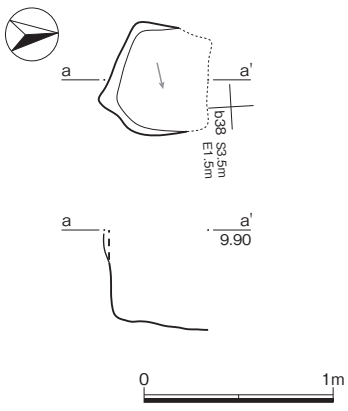


ST176人骨出土状況（南から）



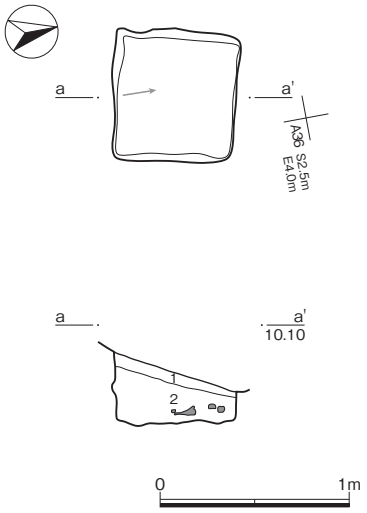
ST175
1　暗褐色土　（ローム粒含、しまりやや弱）
2　暗褐色土　（ローム粗粒多含）
3　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性やや強、しまり強）
ST176
4　暗褐色土　（ローム粗粒含、しまり弱）
5　褐色土　（ローム粗粒極多含、しまりやや弱）
6　暗褐色土　（ローム粒含、粘性やや強、しまりやや弱）
7　暗黄褐色土　（ローム粗粒極多含、ロームブロック少含、粘性やや強、しまり弱）
8　褐色土　（ローム粒含、粘性やや強、しまりやや弱）
9　暗黄褐色土　（ローム粗粒主体、粘性やや強、しまり弱）

Ⅲ-100図　ST175、ST176



人骨出土状況（北から）

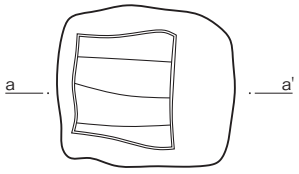
Ⅲ-101図　ST180



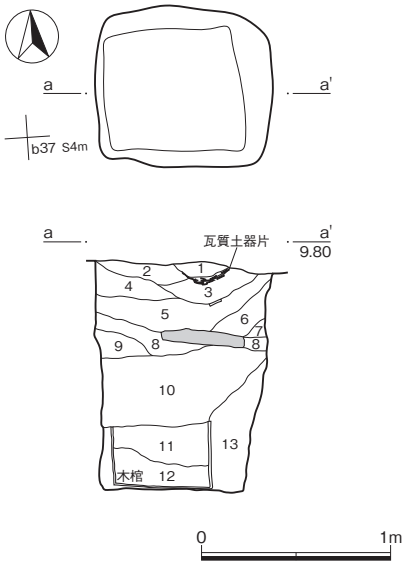
人骨出土状況(北から)

1　暗褐色土　(焼土粒･炭化物粒多含､砂利含､粘性なし)
2　暗褐色土　(ローム粒少含､人骨含､しまりなし)

Ⅲ-102図　ST184

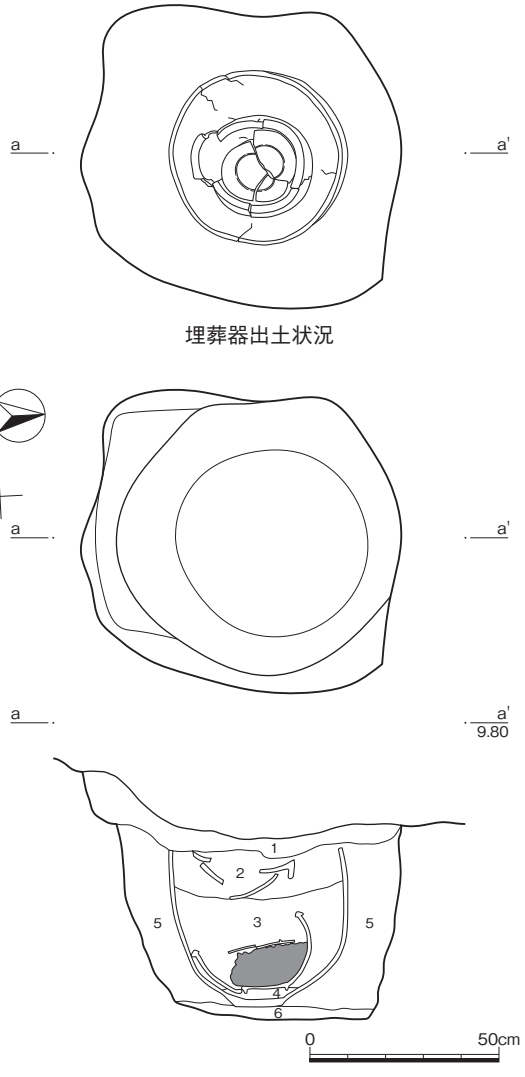


木棺出土状況



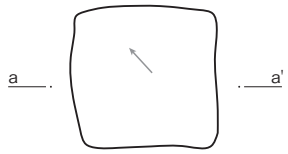
1　黄褐色土　(ロームブロック主体､炭化物微含､粘性なし)
2　黄褐色土　(ローム粒主体､青灰色粘土粒少含､粘性なし)
3　暗黄褐色土　(ロームブロックやや多含､粘性･しまりなし)
4　暗褐色土　(青灰色粘土粒含､炭化物粒微含､粘性やや弱､しまりなし)
5　暗褐色土　(ローム粒少含､粘性･しまりなし)
6　暗褐色土　(ローム粒微含､粘性･しまりなし)
7　暗褐色土　(粘性･しまりなし)
8　青灰色土　(ローム粒微含､粘性･しまりなし)
9　黒褐色土　(ローム粒･黒色土粒少含､粘性･しまりなし)
10　暗褐色土　(ローム粒やや多含､炭化物粒少含､粘性･しまりなし)
11　黒褐色土　(小石･方形木棺の材含､しまりなし)
12　黄褐色粘土　(φ1mm 砂利多含､粘性極強､しまりなし)
13　黄褐色土　(ロームブロック主体､炭化物粒少含､粘性･しまりなし)

Ⅲ-103図　ST186

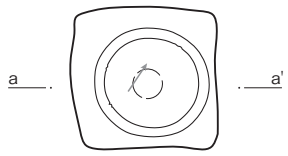


1　暗黄褐色土　(ローム粒･砂利多含､焼土粒少含)
2　暗黄褐色土　(ローム粒多含､土師質埋葬器含､粘性･しまりなし)
3　暗黄褐色土　(ローム粒多含､瓦質埋葬器含､粘性･しまりなし)
4　暗褐色土　(人骨片･炭化物片少含､粘性なし､しまりやや弱)
5　暗褐色土　(パサパサとした堆積､粘性･しまりなし)
6　暗黄褐色土　(ロームブロック主体)

Ⅲ-104図　ST213



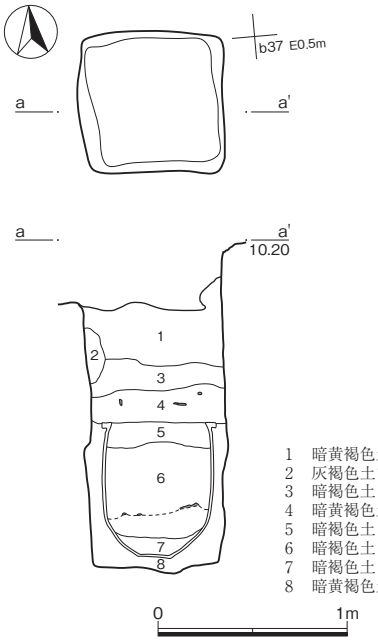
甕棺上人骨埋葬方向



甕棺出土状況

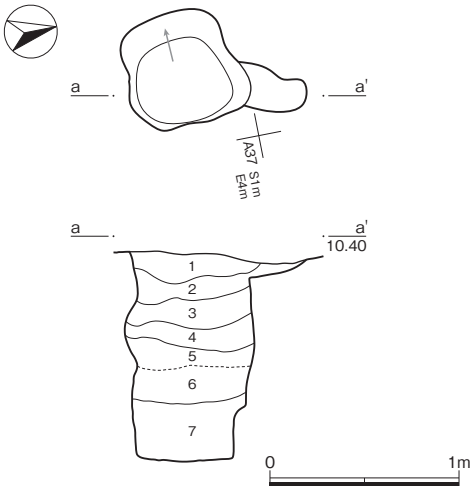
甕棺上人骨出土状況（北から）

甕棺内人骨出土状況（南から）



1　暗黄褐色土　（ロームブロック・ローム粒主体、青灰色土粒少含、粘性なし）
2　灰褐色土ブロック
3　暗褐色土　　（ロームブロック多含、粘性なし）
4　暗黄褐色土　（ローム粒含、粘性・しまりなし）
5　暗褐色土　　（ロームブロック多含、黒色土粒含、粘性・しまりなし）
6　暗褐色土　　（ロームブロック主体、粘性なし）
7　暗褐色土　　（ローム粒含、しまりなし）
8　暗黄褐色土

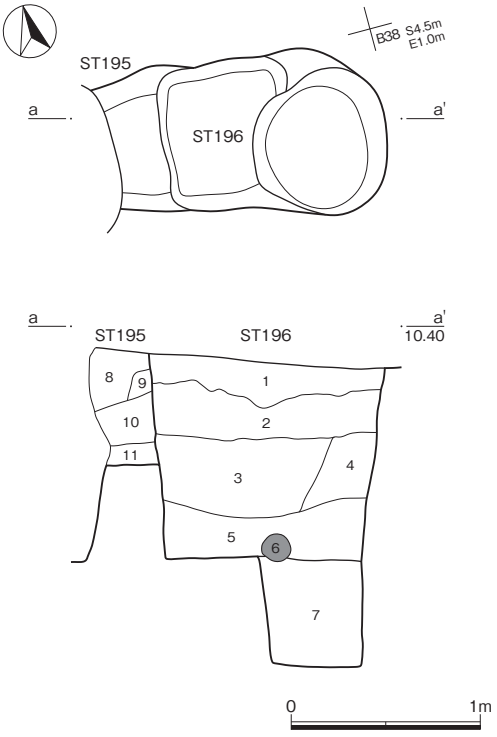
Ⅲ-105図　ST187



1　暗黄褐色土　（ローム粒主体、粘性・しまりなし）
2　暗黄褐色土　（パサパサとする堆積、黒色土粒含、粘性・しまりなし）
3　暗黄褐色土　（2よりも黒色土粒多含、粘性・しまりなし）
4　暗黄褐色土　（黒色土粒多含、粘性・しまりなし）
5　暗黄褐色土　（人骨含、粘性・しまりなし）
6　人骨埋葬層
7　暗黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性・しまりなし）

人骨出土状況（東から）

Ⅲ-106図　ST198

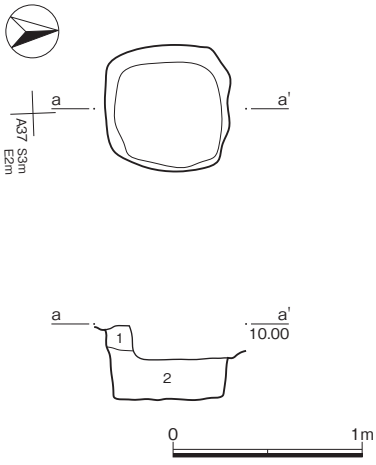


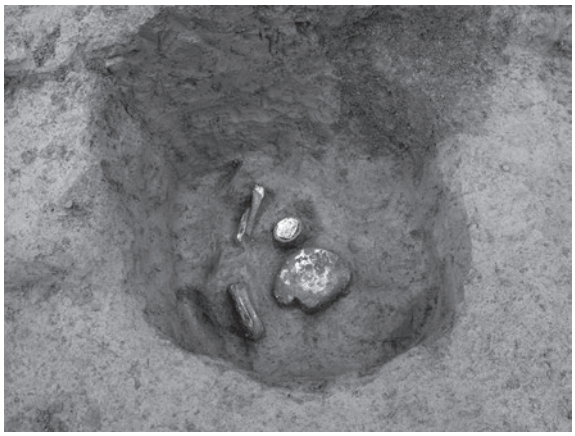
ST195人骨出土状況(南から)

ST196人骨出土状況(南から)

ST196
1 暗黄褐色土 (ロームブロックまばらに含、粘性・しまりなし)
2 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、パサパサとした堆積、粘性・しまりなし)
3 暗褐色土 (ロームブロック・φ10mm の小石含、粘性・しまりなし)
4 暗褐色土 (ローム粒少含、粘性なし、やや弱)
5 暗褐色土 (ロームブロック多含、粘性・しまりなし)
6 黒褐色土 (人骨を含む層、炭化板材含、粘性・しまりなし)
7 暗黄褐色土 (ローム粒多含、粘性・しまりなし)
ST195
8 暗黄褐色土 (ロームブロック多含、焼土粒少含、粘性なし)
9 黄褐色土 (パサパサとした堆積、粘性・しまりなし)
10 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、焼土粒含、粘性なし)
11 暗黄褐色土 (粘性なし)

Ⅲ-107図 ST195、ST196

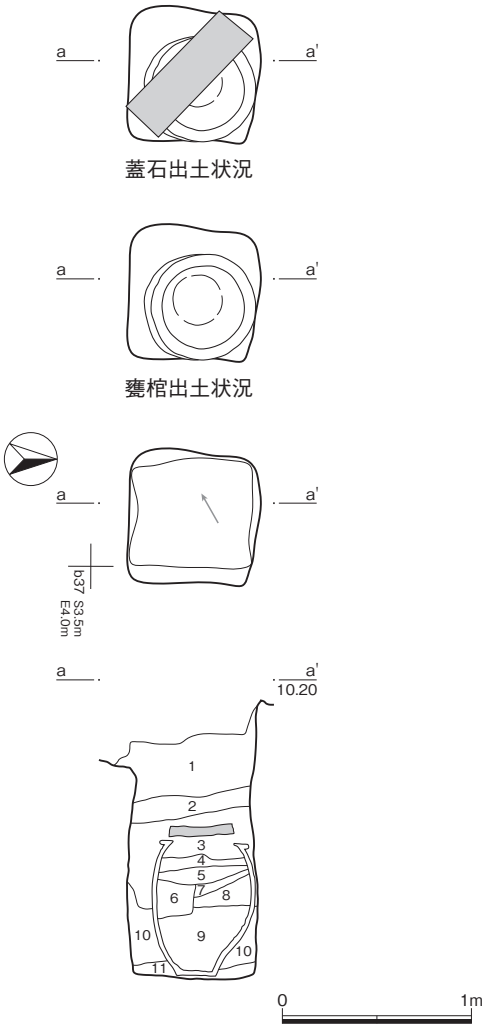




ST207人骨出土状況(東から)

1 暗褐色土 (砂利やや多含、粘性・しまりなし)
2 暗黄褐色土 (ローム粒含、粘性・しまりなし)

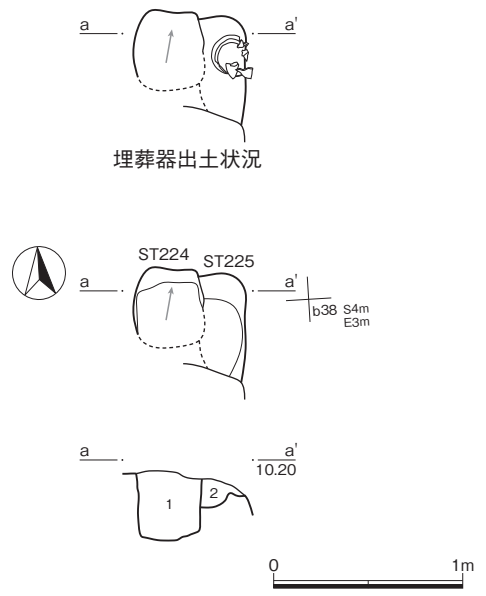
Ⅲ-108図 ST207



ST216人骨出土状況（西から）

ST216
1　暗褐色土　（ロームブロック含、粘性なし）
2　暗褐色土　（1よりも暗い色調、ロームブロックやや多含、粘性なし）
3　暗茶褐色土（ロームブロック・ローム粒多含、粘性なし、しまりやや弱）
4　暗褐色土　（ロームブロックやや多含、粘性・しまりなし）
5　黄褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
6　暗褐色土　（粘性なし、しまりやや弱）
7　暗黄褐色土（粘性やや弱、しまりなし）
8　暗黄褐色土（ローム粒多含、粘性なし、しまりやや弱）
9　黄褐色土　（ロームブロック含、粘性なし）
10　暗褐色土　（ローム粒・青灰色粘土粒含、粘性・しまりなし）
11　暗黄褐色土（ロームブロック多含、粘性・しまりなし）

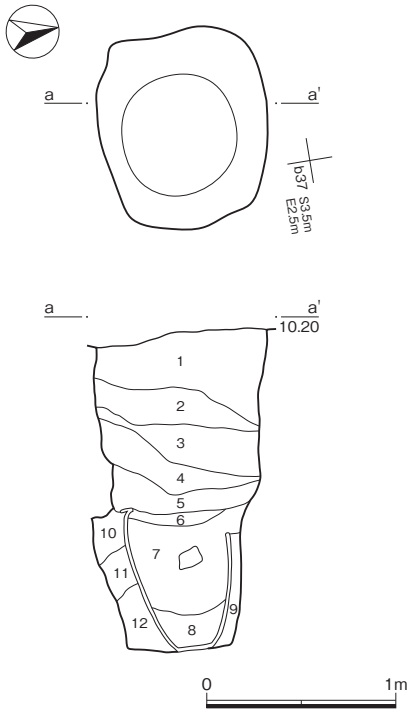
Ⅲ-109図　ST216



ST224人骨出土状況（南から）

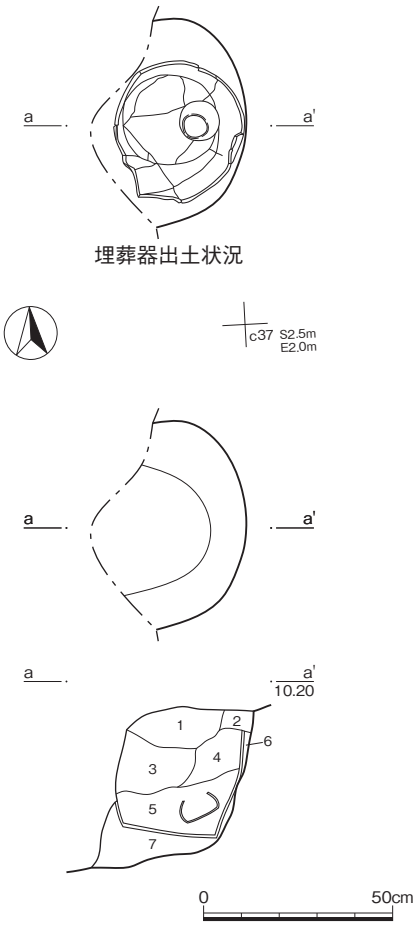
ST224
1　暗灰褐色土（ローム粒含、粘性やや強、しまり強）
ST225
2　暗褐色土　（灰褐色粘土粒含、しまりやや弱）

Ⅲ-110図　ST224、ST225



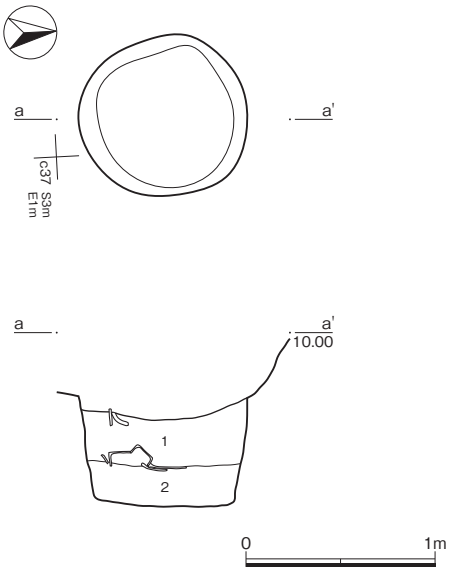
1　暗褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
2　黒褐色土　（ローム粒少含、しまりなし）
3　暗黄褐色土
4　黄褐色土　（ロームブロック主体、しまりなし）
5　黄褐色土　（ロームブロック多含、青灰色粘土ブロック少含、しまりやや弱）
6　黄褐色土　（ロームブロック主体、しまりなし）
7　暗褐色土　（ローム粒・青灰色粘土粒含、粘性・しまりなし）
8　暗茶褐色土（小石多含、しまりなし）
9　暗黄褐色土（粘性・しまりなし）
10　暗褐色土　（青灰色粘土含、粘性やや弱、しまりなし）
11　ロームブロック
12　暗褐色土　（砂利多含、青灰色粘土含、しまりなし）

Ⅲ-111図　ST218



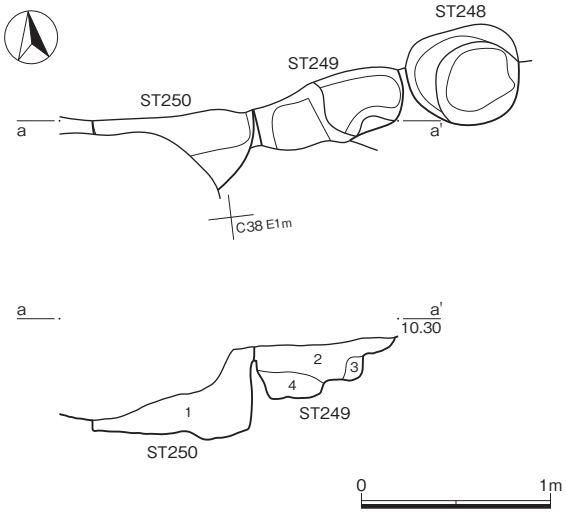
1　暗褐色土　（青灰色粘土粒含、粘性・しまりなし）
2　黄褐色土　（ロームブロック含、粘性・しまりなし）
3　暗褐色土　（粘性・しまりなし）
4　暗黄褐色土（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
5　黄褐色土　（しまりなし）
6　黄褐色土　（ローム粒主体、粘性・しまりなし）
7　黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性・しまりなし）

Ⅲ-112図　ST245



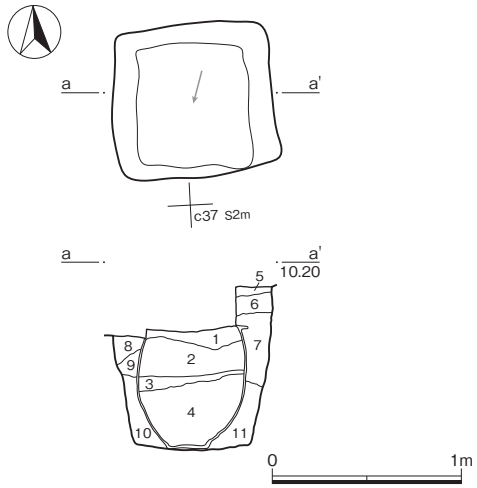
1　暗褐色土（ローム粒含、埋葬器片多含、改葬後の廃棄、粘性なし）
2　暗褐色土（1層よりも黄色の強い色調、ロームブロック多含、炭化物粒少含、粘性・しまりなし）

Ⅲ-113図　ST246



ST250
　1　暗黄褐色土（ロームブロック・ローム粒主体、粘性強、しまりやや弱）
ST249
　2　暗褐色土　（ローム粒含、焼土粒・炭化物少含、しまりやや弱）
　3　暗黄褐色土（ロームの埋土、粘性やや強、しまりやや弱）
　4　暗褐色土　（ローム粒多含、埋葬器片含、焼土粒少含、しまり弱）

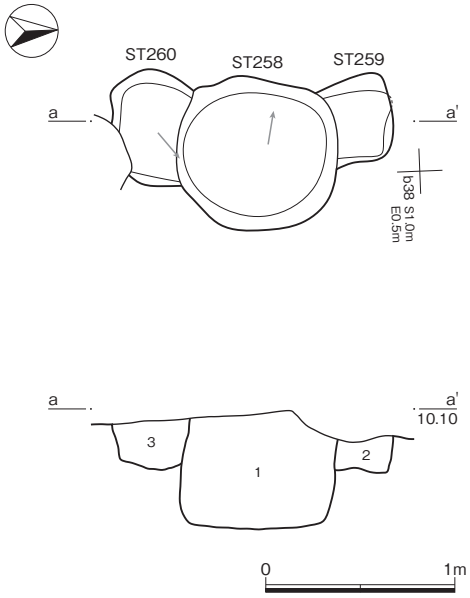
Ⅲ-114図　ST248、ST249、ST250



人骨出土状況（西から）

1　黒褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
2　暗黄褐色土（ローム粒含、粘性・しまりなし）
3　黒褐色土　（粘性・しまりなし）
4　暗黄褐色土（ローム粒やや多含、人骨含、粘性・しまりなし）
5　黄褐色土　（ロームブロック主体、粘性・しまりなし）
6　暗褐色土　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
7　黄褐色土　（ローム粒多含、しまりやや弱）
8　暗黄褐色土（ロームブロック含、粘性・しまりなし）
9　暗茶褐色土（粘性・しまりなし）
10　暗茶褐色土（9層よりも暗い色調、粘性・しまりなし）
11　暗褐色土　（黒色土粒含、粘性・しまりなし）

Ⅲ-115図　ST247

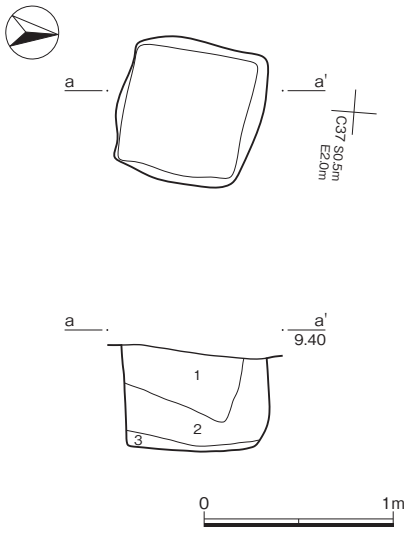


ST258人骨出土状況（西から）

ST260人骨出土状況（東から）

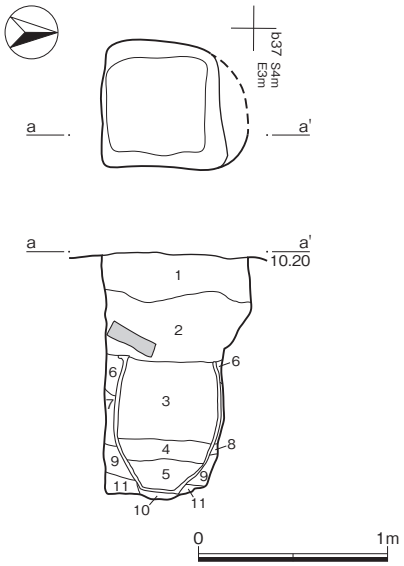
ST258
1　暗褐色土　（ローム粗粒含、しまり弱）
ST259
2　褐色土　（ローム粒含、粘性やや強、しまりやや弱）
ST260
3　暗褐色土　（しまりやや弱）

Ⅲ-116図　ST258、ST259、ST260



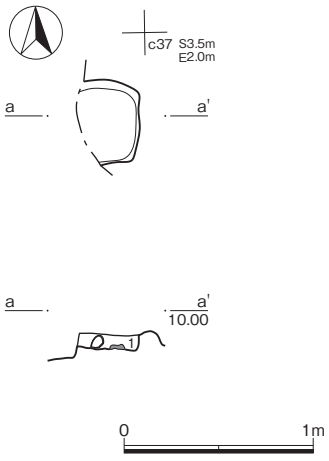
1　暗褐色土　（埋葬器片多含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（粘性やや弱、しまりなし）
3　黒色土　　（しまりなし）

Ⅲ-117図　ST263



1　黒褐色土　　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
3　暗褐色土　　（ローム粒含、粘性・しまりなし）
4　黒色土　　（ローム粒少含、粘性・しまりなし）
5　暗茶褐色土　（φ3 ～ 5mm の砂利多含、粘性・しまりなし）
6　黄褐色土　　（ロームブロック主体、粘性・しまりなし）
7　暗褐色土　　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
8　暗褐色土　　（青灰色粘土粒含、粘性・しまりなし）
9　黄褐色土　　（ロームブロック多含、粘性・しまりなし）
10　暗黄褐色土　（ローム粒多含、粘性なし）
11　灰褐色土　　（小石含、粘性・しまりなし）

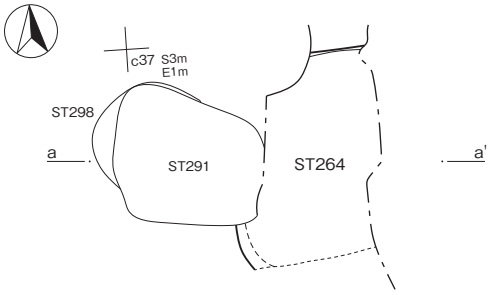
Ⅲ-119図　ST270

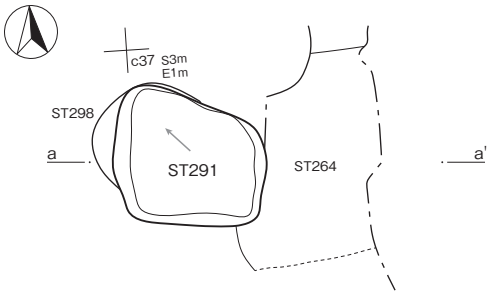


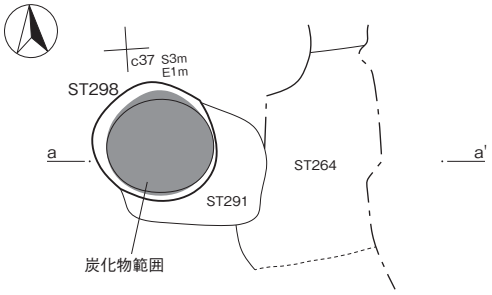
1　暗褐色土　（ローム粒・青灰色粘土粒少含、骨片微含、粘性・しまりなし）

Ⅲ-118図　ST265

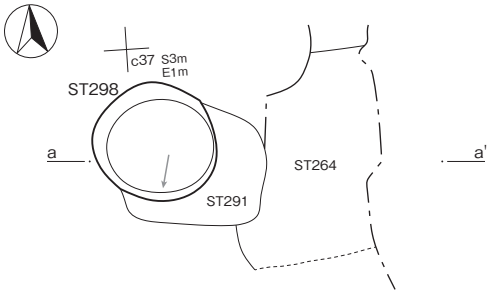
人骨出土状況（南から）

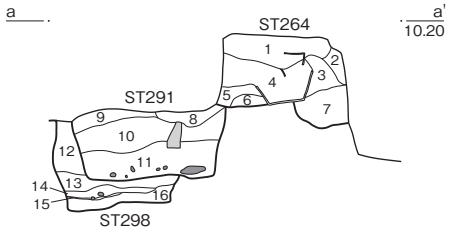






炭化物出土状況





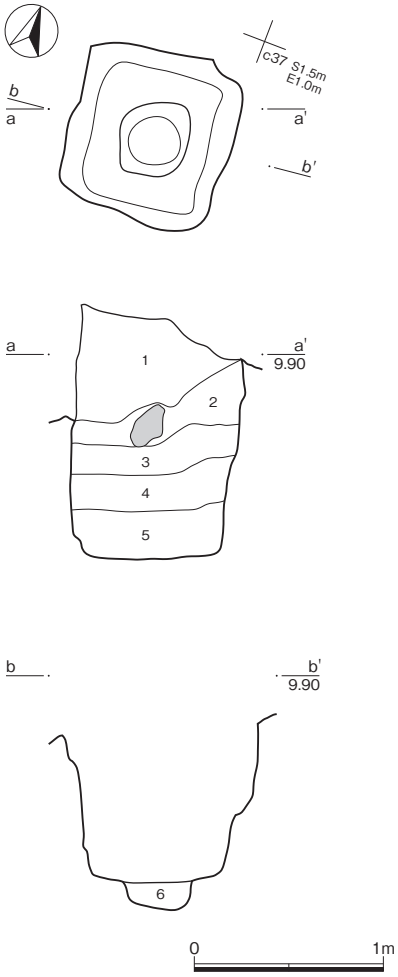
ST291人骨出土状況（南から）

ST298人骨出土状況（南から）

ST264
1　暗褐色土　（ローム粒含、粘性・しまりなし）
2　暗褐色土　（1層より暗い、粘性・しまりなし）
3　暗褐色土　（ローム粒含、炭化物ブロック少含、粘性・しまりなし）
4　暗褐色土　（粘性・しまりなし）
5　ロームブロック
6　灰褐色土　（青灰色粘土ブロック多含、ローム粒含、しまりなし）
7　暗褐色土　（ロームブロック・ローム粒やや多含、粘性・しまりなし）
ST291
8　暗褐色土　（ローム粒・黒色土ブロック含、粘性なし）
9　暗褐色土　（ローム粒含、粘性なし）
10　暗黄褐色土　（ロームブロック含、粘性・しまりなし）
11　暗黄褐色土　（ロームブロック少含、粘性・しまりなし）
ST298
12　暗黄褐色土　（黒色土粒少含、粘性なし）
13　黄褐色土　（ローム粒多含、粘性なし）
14　黄褐色土　（青灰色粘土・人骨含、粘性やや弱、しまりなし）
15　黄褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
16　黒色土　（繊維物質が層状に混入、しまりなし）

0　1m

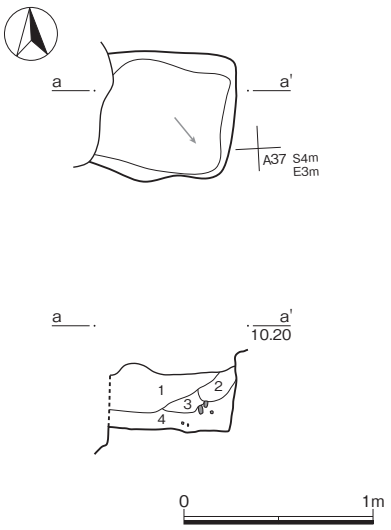
Ⅲ-120図　ST264、ST291、ST298



人骨出土状況(南から)

1　暗褐色土　(黒色土粒･ローム粒多含､粘性なし)
2　黄褐色土　(ローム粒含､粘性･しまりなし)
3　黄褐色土　(ロームブロック含､粘性･しまりなし)
4　暗黄褐色土　(黒色土粒含､粘性･しまりなし)
5　黄褐色土　(ローム粒含､粘性･しまりなし)
6　黄褐色土　(暗褐色土粒やや少含､人骨含､しまりなし)

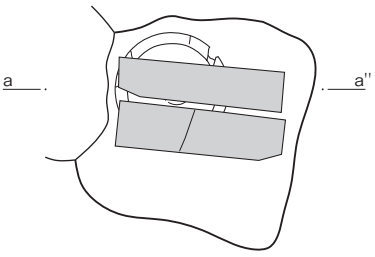
Ⅲ-121図　ST267



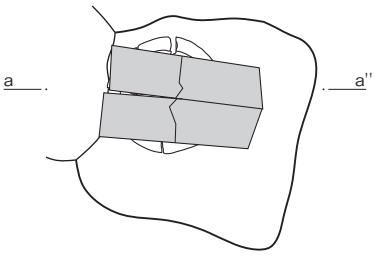
人骨出土状況(南から)

1　暗褐色土　(黒色土ブロック含､粘性･しまりなし)
2　暗黄褐色土　(粘性･しまりなし)
3　黄褐色土　(ロームブロック主体､粘性･しまりなし)
4　暗黄褐色土　(ローム粒多含､粘性なし､しまりやや弱)

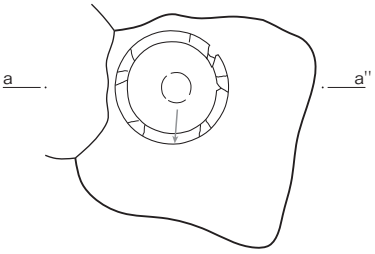
Ⅲ-122図　ST268



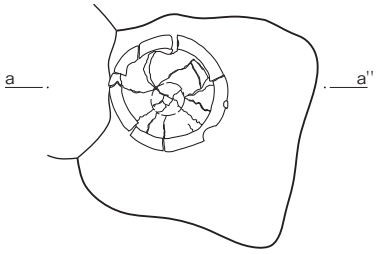
(1)上部蓋石出土状況



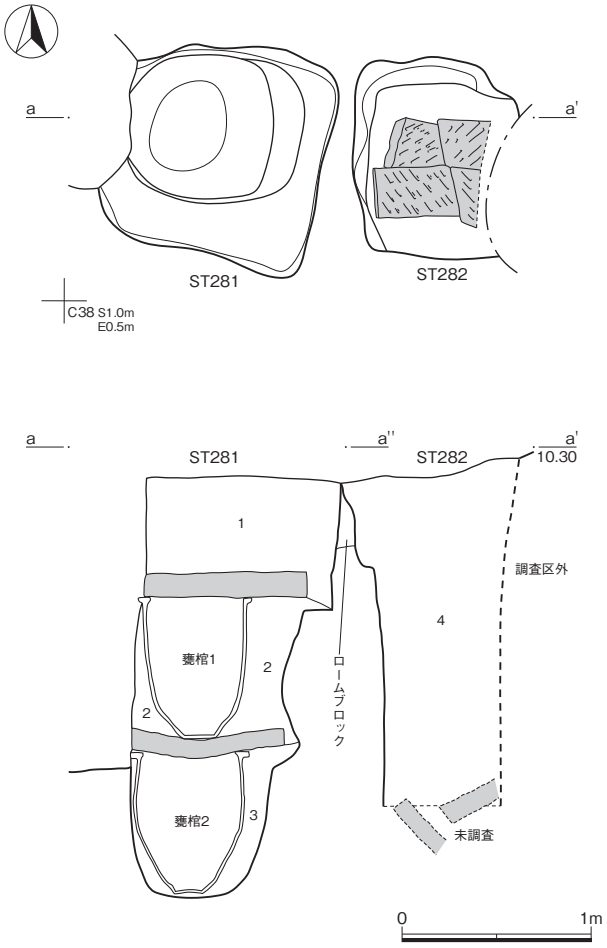
(3)下部蓋石出土状況



(2)甕棺1出土状況



(4)甕棺2出土状況

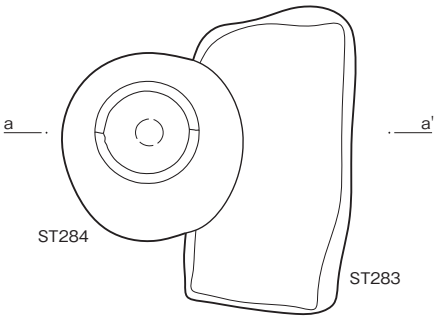


ST281
1　暗黄褐色土　(ロームブロック･焼土ブロック含､粘性なし､しまり極強)
2　褐色土　(粘土質土･砂粒含､粘性強､しまりやや弱)
3　褐色土　(砂質粘土含､粘性極強､しまりやや弱)
ST282
4　暗黄褐色土　(ローム粒少含､粘性･しまりなし)

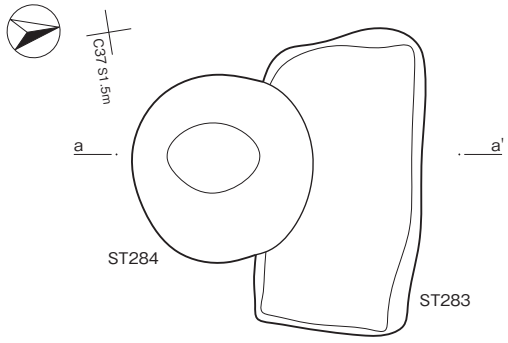
ST281甕棺1人骨出土状況(南から)

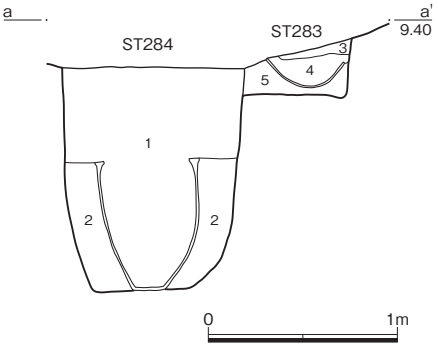
ST281甕棺2人骨出土状況(南から)

Ⅲ-123図　ST281､ST282



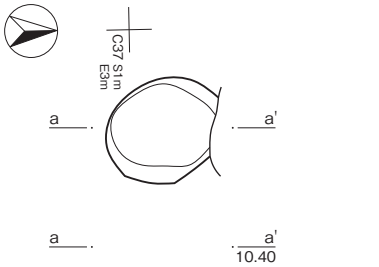
甕棺出土状況

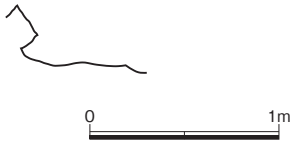




ST284
1　黄褐色土　（ロームブロック主体､粘性･しまりなし）
2　褐色土　（ロームブロック主体､粘性強）
ST283
3　暗黄褐色土　（ローム粒含､焼土粒少含､粘性･しまりなし）
4　暗黄褐色土　（ローム粒･炭化物粒含､粘性･しまりなし）
5　褐色土

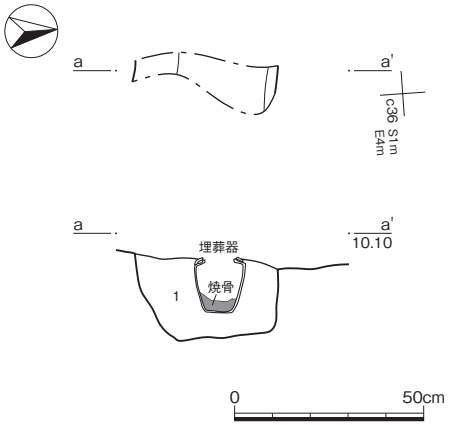
Ⅲ-124図　ST283､ST284





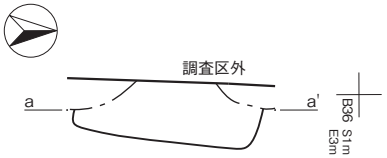
Ⅲ-125図　ST285

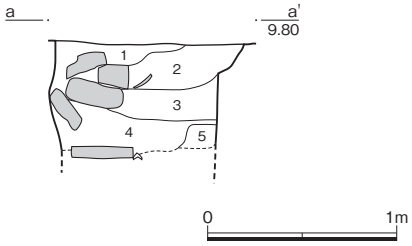
埋葬器出土状況



1　暗黄褐色土　（ローム粒含､粘性･しまりなし）

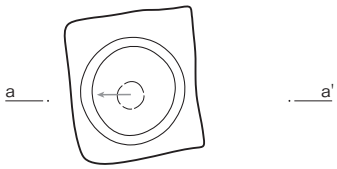
Ⅲ-126図　ST295



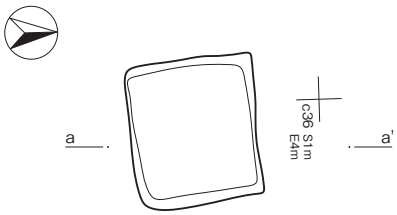


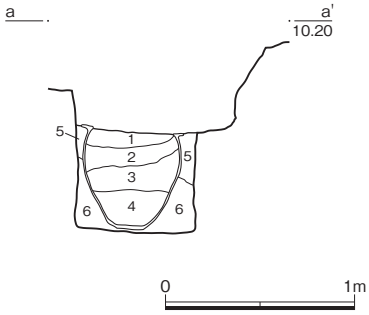
1　ロームブロック
2　暗黄褐色土　（焼土ブロック含､粘性なし）
3　暗黄褐色土　（粘性やや弱､しまりなし）
4　黄褐色土　（ローム粒主体､しまりなし）
5　暗黄褐色土　（ロームブロック主体､粘性･しまりなし）

Ⅲ-127図　ST299



甕棺出土状況

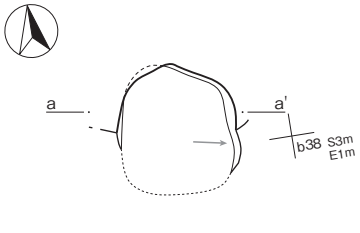


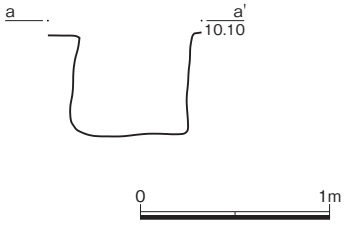


人骨出土状況（東から）

1　暗茶褐色土　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
2　暗黄褐色土　（ローム粒含、黒色土粒少含、粘性・しまりなし）
3　黄褐色土　　（ローム粒多含、粘性・しまりなし）
4　人骨を含む層
5　暗褐色土　　（粘性・しまりなし）
6　暗黄褐色土　（ローム粒含、粘性・しまりなし）

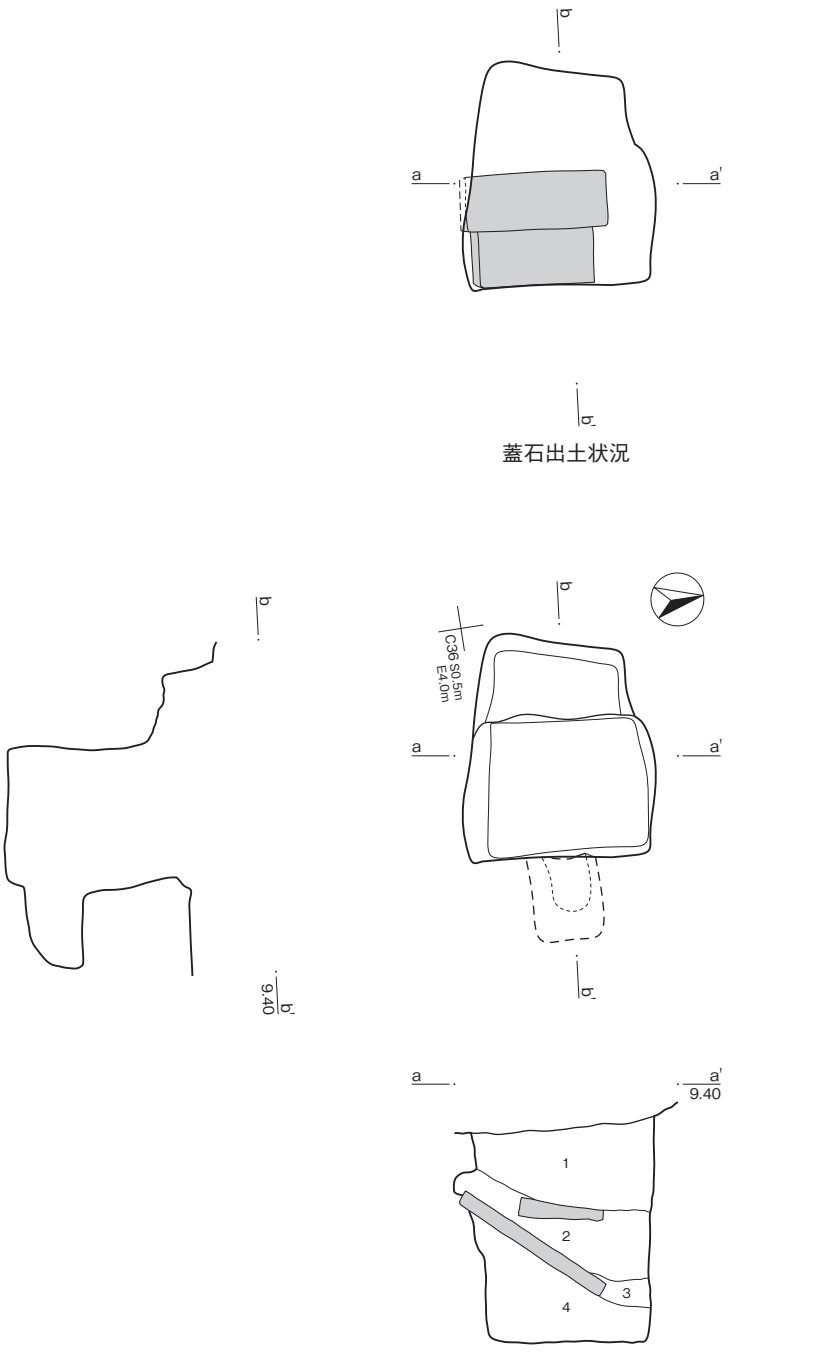
Ⅲ-128図　ST286





人骨出土状況（西から）

Ⅲ-129図　ST290



1　暗黄褐色土　（赤褐色･白色砂状ブロックやや多含、しまりなし）
2　暗黄褐色土　（ロームブロック多含、しまりなし）
3　暗黄褐色土　（ローム粒多含、しまりなし）
4　暗褐色土　　（ロームブロック･砂利少含、しまりなし）

Ⅲ-130図　ST301

第Ⅳ章　出土遺物

出土遺物の概要

本地点からはコンテナ総数約 275 箱（磁器・陶器・土器・その他）と常滑系陶器大甕 26 点が出土している。

本章で示す陶磁器・土器類の分類基準は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」Ver.4.1（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）に、人形・玩具の分類基準は「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」（安芸・小林・堀内 2012）に、常滑系陶器大甕については「東叡山寛永寺護国院墓地跡の調査と成果」（惟村 2004）、瓦類は「御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」（加藤・金子 1990）に準拠している。

出土遺物の数量分析は様々な文化・時代の様相を浮かび上がらせる手段である。本調査室では便宜的に推定個体数 100 個体以上の遺構について検討を加えている。推定個体数 100 個体以上出土している遺構は SK173 である。

本地点は浄土宗講安寺境内に位置するが、元禄 3 年（1690）に講安寺境内の北側が富山藩に貸し出され、絵図などの対比から両区域にかかることが確認された。さらに天保 14 年（1843）から弘化 3 年（1846）の間に富山藩から返却された後、講安寺は弘化 5 年（1848）に富山藩貸地の一部を本郷元町興安寺・等正寺に貸し出し、講安寺境内の北部には 3 寺の墓域が設けられた。この墓域は、明治 41 年（1908）に東京市に移譲され、明治 43 年（1910）に改葬が終了する。

本地点は遺構軸、絵図との対比から 3 寺の墓域にまたがる位置にあることが確認された。即ち本地点検出遺構及び出土遺物は 18 世紀初頭から 19 世紀第 2 四半期までは富山藩邸借地及び講安寺に帰属、弘化 5 年から明治 43 年までは講安寺、興安寺、等正寺墓域に帰属する資料と位置づけられる。第Ⅲ章では前者をⅠ期、後者をⅡ期とした。Ⅱ期帰属資料のうち埋葬関連資料の多くは改葬時に遺棄、廃棄、放置されたものである。調査区ほぼ全域が寺域であった時期はおおよそ 60 年間で、幕末から明治にかけての良好な資料と評価できる。甕棺として使用された常滑系大甕はほとんどが頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦に整形されたＦ類である。19 世紀前半に比定されており、本地点の遺構状況と合致している。

本地点出土人骨に関する分析は医学部附属病院入院棟 A 地点報告書に成果が掲載されているが（近藤他 2016）、分析が行われた人骨以外にも、蔵骨器に納められた火葬骨が多く出土している。専用器と考えられる硬質瓦質蓋付き壺（DZ-15-a）95 点（図化資料 44 点）、出土状況から火葬蔵骨器と推定される瀬戸・美濃系陶器べた底壺（TC-15-e）・壺（TC-15）39 点（図化資料 21 点）、火葬蔵骨器に転用されたと思われる壺・甕を含め合計約 140 点の蔵骨器が出土している。

SK4（Ⅳ -1 図）

1 ～ 3 は土器である。1 は硬質瓦質蓋付壺で DZ-15-a に分類される。肩が張り、寸胴で平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが 1 周巡っている。蔵骨器として使用されたと考えられる。外面には頸部から胴部にかけて十字に鉄錆がこびりついており、針金で蓋が固定されていたと考えられる。2、3 は器高が低く口径との差が少ない小形の火消壺で DZ-31-i に分類される。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。胴部から底部にかけて緩やかな S 字状を描いている。口唇部ナデ調整。2 は底部脇ケズリ。底部チヂレ目。3 は底部スダレ状圧痕。2、3 共に火消壺の器形と類似しているが脚はなく平底である。乳幼児の棺としてもかなり小振りで 1 の蔵骨器とあまり容量は変わらず、蔵骨器として使用された可能性もあるが、痕跡は確認できなかった。2 は口径 17.7cm、高さ 16.0cm。3 は口径 19.0cm、高さ 17.3cm。

ST7（Ⅳ -1 図）

1、2 は瀬戸・美濃系陶器である。1 は皿で TC-2 に分類される。口縁部と見込み中央に灰釉が施されている。胎土は淡黄色。2 は平底、長胴の壺で TC-15 に分類される。口縁は折返口縁で耳が 3 箇所に付けられている。底部および底部際胴部露胎。底部は調整により糸切り痕を消している。胎土は淡黄色。焼骨埋納。蔵骨器として使用されており、1 の皿が口縁を下にし、蓋として被せられた状態で出土している。

ST8（Ⅳ -2 図）

1 は墓標の台。花生・水鉢が付く。正面「川越屋」。

ST9（Ⅳ -2 図）

1、2 は瀬戸・美濃系陶器である。1 は皿で TC-2 に分類される。口縁部と見込み中央に灰釉が施されている。

胎土は淡黄色。外面に墨書で「骨」と書かれている。2は鉄釉の長胴壺でTC-15に分類される。底部に掛けてわずかに窄まっている。口縁部は緩やかに折り返されている。胴部から直接高台に繋がる。底部および胴部下露胎。釉はつけ掛け。露胎部に垂れている。内面全釉。畳付けには目跡が4箇所に付く。底部中央が内側に窪んでいる。焼骨埋納。蔵骨器として使用されており、1の皿が蓋として上に乗せられていた状態で出土している。墨書は内側で外からは見えない状況であった。

ST13（Ⅳ-2図）

1は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。口縁部上端は外側がやや下がっている。胴部下半には積み重ねによる凹みが残る。口縁部上端には重ね焼きされた円形の目跡が巡る。胎土は橙褐色で白色粒子を含む。甕棺。

ST22（Ⅳ-3図）

1は瀬戸・美濃系磁器染付丸形坏である。JC-6-aに分類される。口縁部内面には圏線が2本、高台脇と胴部と高台の境に2本圏線が施されている。丸文。高台は「ハ」の字に広がっている。

2～5は土器である。2、3は大形のかわらけで底部には右回転離れ糸切り痕がある。DZ-2-bに分類される。外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、見込み立ち上がり際に高まりを持つ。見込みは中心部に向かってやや下がっている。胎土は橙色。4は器高が低く口径との差が少ない火消壺で5は蓋である。4はDZ-31-iに分類される。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。口唇部ナデ調整。底部脇ケズリ。底部チヂレ目。5は釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。中央部が下がっている。乳幼児の棺と考えられ、蓋は閉められた状態であった。外面には十字に鉄錆がこびりついており針金で蓋が固定されていたと考えられる。口径28.6cm、高さ26.7cm。大形。4、5の底に2と3が上向きに重ねられた状態で納められていた。

ST24（Ⅳ-4～7図）

1～5は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。1～4は大甕。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。口縁部上端には重ね焼きによる円形の目跡が巡る。目跡の大きさは様々で、大きいものでは径8.5cm、小さいものでは径4cmである。胴部下半には重ね積みによる陶片や凹みが観られる。胎土は橙褐色で白色粒子を含む。1は口縁部平坦面に漆喰が付着している。埋葬時のものであろう。口縁部上端の目痕と目痕の間に全面に自然釉が観られる。2は外面に鉄泥が施されている。折り返されている口縁が薄い。3は胴部下半に墨書「◎」。胴部上半に陶片の溶着痕がある。口縁部上端の目痕には剝がした溶着痕が残り、目痕と目痕の間には厚く自然釉が観られる。4は外面に鉄泥が施されている。胴部上半と下半の2箇所に陶片の溶着痕がみられる。口縁部平坦面の1/3に灰降りが観られる。5は器高の低い小振りの大甕である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。口縁部上端に1/3ほど灰が掛かっている。1～5は遺構図版Ⅲ-47図に対応しておりa～eのアルファベットが付されている。1は甕棺a。2は甕棺b。3は甕棺c。4は甕棺e。5は甕棺d。

6は裸形の幼児を象ったいわゆるぶら人形でDQ-1128-Hfに分類される。高さ3.3cmと非常に小形である。手びねり成形で中実、体部はヘラ状工具で簡易な整形を施している。胎土は赤褐色で比較的精緻である。頭部両側面と、脚の付け根の間に径2mmの孔が穿たれている。頭部側面の孔は別素材で毛髪を作り差込むためのもの、体部の孔は彩色の際に手に持つ竹ひごなどをさした痕跡である。5の甕棺dの覆土より出土している。

7～10は硬質瓦質蓋付壺でDZ-15-aに分類される。7、9は肩が張り寸胴で平底の壺である。表面に横方向と縦方向のミガキが掛けられている。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが1周巡っている。9は底部に掛けてわずかに窄まっている。8、10はそれぞれの蓋である。かぶせ蓋。中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。8は中央部が窪んでいる。蔵骨器として使用されたと考えられる。

11は石製品の硯である。背面には人の顔が線刻されている。

12は銭である。新寛永通宝。

13は墓標。上部は隅の切れるかまぼこ形で断面長方形。正面・右面・左面に文字が刻まれている。文字はほとんど判別ができない様にノミ状工具で削られている。正面上部に家紋。右列下方に「[　　]院釋[　　]大姉」。左列に「[　　]院釋[　　]大姉」。右面下方「天保八□酉年二月十八日卒／浄　広田□□妻」。左面「嘉永[　　]／智[　　]妻」。と刻まれている。「[　　]院」は院号。「釋

（尼）[　　]」浄土真宗の法名。「大姉」は位号。天保 8 年は西暦 1837 年。改葬に伴う廃棄。

宮崎氏から、この墓標名は明治 40 年作成墓碑銘録のうち「北ノ部弐号（等正寺借地）1335 番広田家の墓碑銘のうち「浄華院釈妙香大姉」（天保八年二月十八日歿）、「智海院徳誉貞弘大姉」（嘉永五年十月七日歿）の２人と部分一致すること。広田家の法名は童子・童女を含む全員に院号が付いており、等正寺の檀家の中でも最上級に属する家と考えられると、ご教示を受けた。

ST25（Ⅳ -7 図）

1、2 は瀬戸・美濃系陶器である。1 は油受け皿で TC-40-c に分類される。無脚で、錆釉が施されている。受け部が皿の口縁よりも低い。外面には重ね焼きの痕が観られる。2 は平底、長胴の壺で TC-15 に分類される。口縁は折返口縁で二耳。底部および底部際胴部露胎。底部は調整により糸切り痕を消している。胎土は淡黄色。焼骨埋納。蔵骨器として使用されており、1 の油受け皿が口縁を下にし蓋として被せられた状態で出土している。

3 ～ 8 は人形・玩具である。3 は手を膝に置き正座をしている男性像で DQ-1100-M2e に分類される。モチーフは庄屋である。前後 2 枚の型合わせ成形で中空、胎土は橙褐色で白色粒子を含む。前面と頭部を白色で塗った上、襟を茶で彩色し、上から透明釉をかけている。4、5 はミニチュアの皿で DD-2002-M に分類される。型成形で付高台、四隅を二段角に象っている。内部は 1/2 に白泥、反対側は麻葉文様の浮文を施し、上から梅枝文を描いている。胎土は淡黄色で全体に透明釉を施す。19 世紀前半以降の遺構からよく出土する資料で、工学部 14 号館地点 SK2（82）、SK392（129）、SK396（60）に同様の資料がみられる（東京大学埋蔵文化財調査室 2006）。6 はミニチュアの急須で DQ-2008-W に分類される。ろくろ成形で注口と把手を貼り付けている。胎土は橙褐色で白色粒子を含む。7 はミニチュアの羽釜で DQ-2011-M に分類される。型成形、胎土は赤褐色である。8 は笛で DD-4003-M に分類される。左右 2 枚の型合わせ成形で脚は貼付、内部に共鳴室の空間、吹口は尾、音孔は背である。胎土は明るい淡黄色で緻密、首に朱色の彩色がみられる。モチーフは雉か。

ST26（Ⅳ -8 図）

1、2 は土器である。1 は器高が低く口径との差が少ない火消壺で、2 は蓋である。DZ-31-i に分類される。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。口唇部ナデ調整。底部脇ケズリ。底部縮れ目。3 脚。2 は釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。中央部が下がっている。1 の内面下半に黒色粒子が付着。口径 22.3cm、高さ 23.1cm。幼児の棺。蓋は中に落ち込んでいる状態で出土している。

ST27（Ⅳ -8 図）

1、2 は土器である。1 は器高が低く口径との差が少ない火消壺で、2 は蓋である。DZ-31-i に分類される。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。口唇部ナデ調整。胴部立ち上がり際角は整形され緩やかに立ち上がる。2 は釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。中央部が下がっている。乳幼児の棺と考えられ、蓋は閉められた状態であった。口径 24.0cm、高さ 28.0cm。大形。

3 は熊にまたがる金太郎で DQ-1134-M に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で、底部中央に穿孔がある。全面施釉のため胎土は不明。全体を白色に塗り、金太郎の上部は緑色、頭部は茶色、熊には茶色で斑点をつけている。

ST31（Ⅳ -9 図）

1、2 は瀬戸・美濃系陶器である。1 は平底、長胴の壺で TC-15 に分類される。灰釉。口縁は折返口縁で三耳。底部および底部際胴部露胎。底部は調整により糸切り痕を消しているが中心部には残っている。胎土は淡黄色。焼骨埋納。2 は蓋である。胎土は淡黄色。

ST34（Ⅳ -9 図）

1 は銭である。新寛永通宝波銭。

成人男性（？）が埋葬されていた。

ST36（Ⅳ -9 図）

1、2 は土器である。1 は器高が低く口径との差が少ない火消壺で 2 は蓋である。DZ-31-i に分類される。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。3 脚。口唇部ナデ調整。胴部立ち上がり際は整形され緩やかに立ち上がる。2 は釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。中央部が下がっている。乳幼児の棺と考えられ、蓋は閉められた状態であった。1 の口縁と 2 の側面に印のような墨書がある。前方の位置を示すものか。口径 22.2cm、高さ 23.6cm。

ST39（Ⅳ-9図）

1、2は土器である。硬質瓦質蓋付壺と蓋でDZ-15-aに分類される。1は肩が張り寸胴で平底の壺である。全面に回転押捺による縮れ文の地模様が入る。その上から横方向と縦方向にミガキが掛けられている。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが1周巡っている。底部に掛けてわずかに窄まっている。平底。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。胎土はサンドイッチ状になっており外側は鈍い黄橙。赤褐色粒子多量混入。2は蓋である。かぶせ蓋。回転押捺による縮れ文の地模様が入る。中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。焼骨が納められて蓋をした状態で出土しており、蔵骨器として使用されている。

ST40（Ⅳ-10図）

1、2は土器である。硬質瓦質蓋付壺と蓋でDZ-15-aに分類される。1は壺で口径は広く肩が張り、体部は底部に向かって真直で寸胴。平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。全面に回転押捺文が施された後で横方向と縦方向にミガキが掛けられている。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが1周巡っている。胎土はサンドイッチ状になっており外側は灰黄色。2は蓋である。かぶせ蓋。中央から渦を巻くように回転押捺文が施されている。部分的に表面の炭素吸着が妨げられ白色化している。胎土は灰黄色。焼骨が納められて蓋をした状態で出土しており、蔵骨器として使用されている。

ST49（Ⅳ-10図）

1～3は陶器である。1は京都・信楽系油皿で見込みに目跡がありTD-2-bに分類される。2、3は瀬戸・美濃系壺・甕である。2は高台あり、二耳壺。TC-15-fに分類される。灰釉。底部露胎。胎土は、淡黄褐色。3は壺・甕の蓋である。胎土は灰黄色。裏面糸切り痕。

4は碁石状製品でDQ-4004-Hに分類される。手びねり成形、胎土は橙褐色である。表面にはわずかに黒色の彩色が残っている。

5は銭である。寛永通宝。

成人女性が埋葬されていた。焼骨混入。

ST50（Ⅳ-10図）

1、2は土器である。硬質瓦質蓋付壺と蓋でDZ-15-aに分類される。1は壺で口径は広く肩が張り、体部は底部に向かって真直で寸胴。平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。底部脇には1周強くナデたような調整痕が観られ胴部立ち上がり際には工具によるケズリが1周巡っている。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。胴部には部分的に表面の炭素吸着が妨げられ白色化した箇所がある。焼成は良く硬質である。2は蓋である。かぶせ蓋。中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。焼成はあまり良好ではない。1と2の作りは異なるようであるが焼骨が納められて蓋をした状態で出土しており、蔵骨器として使用されている。硬質瓦質蓋付壺には大小2種類あり小振りのものである。乳幼児骨が納められていたか、または、分骨器などが考えられる。

ST51（Ⅳ-11図）

1は肥前系磁器染付段重である。JB-13-cに分類される。底部にも釉が掛けられている。2は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。胎土は明赤褐色。白色粒子混入。胴部下半や口縁部上端に重ね積みのための痕は観られない。口縁部上端は外に向かって上がっている。幅6.0cm。甕棺。若い成人女性が埋葬されていた。1は2の甕棺の中から出土しており副葬品と思われる。化粧道具などであろうか。

ST52（Ⅳ-11図）

1は土器である。硬質瓦質蓋付壺の蓋である。被せ蓋。中央から渦を巻くようにミガキが掛けられている。胎土は灰黄色。部分的に表面の炭素吸着が妨げられ白色化している。本遺構からは蓋のみの出土である。

2～6は銭である。2、3は古寛永通宝。4～6は新寛永通宝。

ST61（Ⅳ-12図）

1は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。口縁部内側に張り出しを持ち口縁部縁帯上にはリンズが施される。G類である。口縁部直下にはヘラ彫り文様が巡る。胴部から口縁部上端まで、ほぼ垂直に立ち上がる。外面には鉄泥が施されている。底部には墨書が施されている。

SK70（Ⅳ-12、13図）

1～3は瀬戸・美濃系陶器である。1、2は皿でTC-2に分類される。口縁部と見込み中央に灰釉が施されている。本地点では蓋として使用されている例が多い。3は甕の蓋である。表面に釉は観られない。重ね積みの痕が残る。表面中央にはやや高まりが観られ丸く指で押さえ

た痕が残る。裏面には右回転糸切り痕あり。

4 ～ 9 は硬質瓦質蓋付壺で DZ-15-a に分類される。口径は広く平底である。胴部には横方向と縦方向にミガキが掛けられている。5、6 には胴部立ち上がり際に工具によるケズリが 1 周巡っている。4 は明瞭ではなく部分的に確認できる。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。4、5、8 の体部は底部に向かって真直で寸胴。6 は肩の張りが小さく口縁部の立ち上がりが緩やかである。7 は底部に向かってやや窄まり気味で、口縁部の立ち上がりが観られない。本地点では 7 の器形は少ない。表面に朱色で名前が入れられている。「高須□□衛」。興安寺過去帳に明治 11 年（1878）8 月 21 日に土葬された「土　誠勝童女　同月廿一日　本郷元町一丁目　高須久兵衛　水子」の記載があるが、埋葬方法欄に借地墓地を示す無縁坂などの表記がなく、可能性に止めたい。8 は上方以外は表面の炭素吸着が妨げられ白色化している。内面立ち上がり際に指で押さえた痕が残る。9 は蓋である。ドーム形。表面中央部分に長方形枠内「市川熊治郎」の名が刻印されている。裏面には「や」と彫られている。本地点からは 85 点の硬質瓦質蓋付壺が出土しているが刻印が確認されたのはこの 1 点のみである。

ST72（Ⅳ -13 図）

1 は常滑系陶器甕で TG-15 に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっているＦ類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。胎土は明赤褐色。白色粒子混入。胴部下半や口縁部上端に重ね積みのための痕は観られない。口縁部平坦面には、わずかに灰降りの痕が観られる。窯詰めの際に一番下に置かれたものであろうか。口縁部上端はほぼ水平。

2、3 は銭である。2 は古寛永通宝。3 は新寛永通宝。文銭。初鋳年は寛文 8 年（1668）、江戸本所亀戸村で鋳造開始とされる。

ST76（Ⅳ -14 図）

1、2 は T 字状に穿孔されているガラス玉。透明ガラスで表面は一部銀化している。数珠の主玉から房に繋げる為に T 字状に穿孔された親玉と呼ばれる玉ではないかと想定される。

成人男性が埋葬されていた。

ST83（Ⅳ -14 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器である。平底、長胴の壺で TC-15 に分類される。底部は調整により糸切り痕を消しているが中心部には残っている。灰釉。口縁は折返口縁で三耳。底部および底部際胴部露胎。焼骨埋納。蔵骨器として使用されている。

ST85（Ⅳ -14 図）

1、2 は瀬戸・美濃系陶器である。1 は平底、長胴の壺で TC-15 に分類される。灰釉。口縁は折返口縁で二耳。底部脇面取り。底部および底部際胴部露胎。蔵骨器として使用されている。2 は蓋である。無釉。裏面糸切り痕あり。

3 は金属製品、環である。地金の色調は銀色。

ST87（Ⅳ -14、15 図）

1 は土器。大形のかわらけで DZ-2 に分類される。底部に離れ糸切り痕あり。見込み立ち上がり際に高まりを持ち、外面立ち上がりはくっきりと角を残す。2 ～ 9 は硬質瓦質蓋付壺で DZ-15-a に分類される。口径は広く平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。2 ～ 6 の体部は底部に向かってやや窄まっている。6 は肩の張りが小さく口縁部の立ち上がりがない。2、4、6 には底部脇を 1 周強くナデたような調整痕が観られる。回転押捺による地文様が入り、2、4 は縮れ文、6 は細かい格子目。幅は約 6mm。3、5 は胴部立ち上がり際に工具によるケズリが 1 周巡っている。5、6 には胴部に鉄錆がこびりついており針金で蓋を固定していた痕であろう。7 ～ 9 は蓋である。ドーム形。地文様は 8 は縮れ文、9 は細かい格子目。中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。

10 はミニチュアの器物で DQ-2000-M に分類される。型押し成形で表面に白色の彩色が残る。碗形だが内部はくりぬかれていない。鍋などの蓋か。

ST88（Ⅳ -16 図）

1 ～ 4 はぶら人形で DQ-1128-M2e に分類される。1 は体部で髪のない頭部と膨らんだ下腹部、四肢は付根のみで手足は別作り。前後 2 枚の型合わせ成形で中空、左足付根先端に穿孔がある。2、3 はぶら人形の手である。手びねりで棒状に成形し、先端を指で篦状に潰している。指の表現は観られない。4 はぶら人形の足である。手と同様に棒状に成形し先端を指で篦状に潰しているが、長さは手の 2 倍である。1 ～ 4 の胎土は橙褐色で黒色粒子を含んでいる。

5 ～ 8 は銭。新寛永通宝。

成人女性が埋葬されていた。

ST90（Ⅳ-16 図）

1 は土器である。硬質瓦質壺で DZ-15 に分類される。平底。口縁部は「く」の字に折り返している。口縁部上端には重ね積みの為の目跡が 4 箇所巡る。底部脇面取り。胎土は灰色で焼締められている。底部に焼成前の亀裂を指で修正した痕が残るが、亀裂のまま出荷されたようである。焼骨が埋葬された状態で出土している。蔵骨器として使用されている。水分を入れることのできない亀裂のまま出荷されたことは、元々用途がある程度限定されていたのだろう。

ST97（Ⅳ-17、18 図）

1 は瀬戸・美濃系磁器である。体部が高台から直線的に開く碗で JC-1-f に分類される。銅版転写。口唇部錆釉。

2 は瀬戸・美濃系陶器である。見込みに鉄で摺絵が施された皿で TC-2-e に分類される。御深井。3、4 は常滑系陶器甕で TG-15 に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっている F 類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。3 は口縁部上端には長方形（約 4cm × 1.5cm）の目跡が約 12cm 間隔で 13 箇所巡る。胴部には重ね積みのために挟み込んだ陶片がそのまま溶着している。口縁部上端の長方形（約 4cm × 1.5cm）の目跡を持つものは本地点では 28 点中 1 点のみであった。年代差なのか地域差なのかは不明である。胎土は暗茶褐色で練り込み状になっている部分がある。他の製品と比べ異なる点が多い。4 は内面に白泥が掛けられている。口縁部上端には重ね焼された円形の目跡が巡る。胴部下半に凹みが 3 箇所に残る。凹みは等間隔ではなく片側に偏って観られる。遺構図版Ⅲ-70 図に対応して a・b のアルファベットが付されている。3 は甕棺 a で性別不明の成人が納められていた。4 は甕棺 b で、5 の義歯はこの中から出土している。

5 は義歯である。本体は木製で木床義歯である。歯茎に合わせてきれいに削られている。薄く割った切歯などが 8 本はめ込まれ、両脇は白色の石で作られたものがはめ込まれている。前歯以外のかみ合わせの部分には硬いものが噛めるように金属製の鋲が左右計 12 本打たれている。奥歯は残っていたのか、両端は隣の歯にはめ込むように凹状に加工されて、装着するための溝が左右に切られている。三味線の弦などを使い残っている歯に結びつけていたと考えられる。4 の内底部近くで出土。はめたまま埋葬されたのか。

6 ～ 10 は硬質瓦質蓋付壺で DZ-15-a に分類される。口径は広く肩が張り平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが 1 周巡っている。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。6 の体部は底部に向かってやや窄まっている。7、8 は小振りで乳幼児骨が埋葬されていたか、分骨なども考えられる。9、10 は蓋である。かぶせ蓋。中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。10 はドーム状。7、10 には胴部に鉄錆がこびりついており針金で蓋を固定していた痕であろう。10 は 7 の蓋であった可能性が高い。

11 は墓標。上部は隅の切れるかまぼこ形で断面長方形。「嘉永七寅年」「釋教信童女」「五月十三日」と刻まれている。「釋＋ 2 文字」で浄土真宗の法名。「童女」は戒名・法名の下に付ける女児の尊称。嘉永七寅年は西暦 1854 年。改葬に伴う廃棄。宮崎氏から、この墓標名は明治 40 年作成墓碑銘録のうち「北ノ部弐号（等正寺借地）1387 番の「釈教信童女」（嘉永七年五月十三日歿）と一致する。1387 番は単独の墓標で施主の記載が無く、調査時には既に無縁化していたため改葬されず残置された可能性があるとご教示を受けた。

ST98（Ⅳ-18 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器である。平底、長胴の壺で TC-15 に分類される。灰釉。口縁は折返口縁で三耳。底部および底部際胴部露胎。底部は調整により糸切り痕を消しているが全体に残る。胎土は淡黄色。焼骨埋納。蔵骨器として使用されている。

SK105（Ⅳ-19 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器である。平底、長胴の壺で TC-15 に分類される。灰釉。口縁は折返口縁で三耳。底部および底部際胴部露胎。底部は調整により糸切り痕を消している。胎土は淡黄色。蔵骨器として使用されている。

2 ～ 4 は土器である。硬質瓦質蓋付壺で DZ-15-a に分類される。口径は広く平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。2 には回転押捺による地文様が入る。縮れ文。底部脇を 1 周強くナデたような調整痕が観られる。体部は底部に向かってやや窄まっている。3 は横方向と縦方向にミガキが掛けられている。肩から上の立ち上がりがほとんど観られない。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが 1 周巡っている。4 は小振りで乳幼児骨が納められていたか、または分骨器と考えられる。肩部、胴部、底部に鉄錆がこびりついており

針金で蓋を固定していた痕であろう。5は火消壺の蓋。胎土は橙褐色で金雲母粒子を含む。釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。

6は桃持ち童子でDQ-1135-M2eに分類される。片膝を立て右側に桃を抱えている。前後2枚の型合わせ成形で、中空。左右のばりは篦で削っているが底部は未処理である。底部中央に1箇所穿孔が認められる。胎土は橙褐色で白色、黒色粒子を含む。桃は不老長寿の象徴で、長寿を願う縁起人形である。

ST106（Ⅳ-20図）

1、2は土器である。蓋付きの壺で胴下半部に最大径がくる。DZ-15に分類される。底部には左回転の糸切り痕が残る。底部脇には強くナデたような調整痕が観られる。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。2は蓋である。内面は緩やかに立ち上がり外面角は明瞭な稜を持つ。上面には左回転の糸切り痕が残る。焼骨が納められ蓋が上に載せられた状態で出土している。蔵骨器として使用されている。

SU108（Ⅳ-20図）

1、2は肥前系磁器である。1は碗でJB-1に分類される。丸碗形で高台が高い。2は蓋物の蓋である。コンニャク印判。摘み部欠損。

3～6は瀬戸・美濃系陶器である。3は半筒形の碗でいわゆる「せんじ碗」。TC-1-lに分類される。灰釉。白土鉄絵。4は半筒。灰釉、鉄釉の掛け分けで長石釉が散らされている。TC-1-vに分類される。高台脇面取り。5は内面から口縁部に掛けて灰釉、外面は錆釉の掛け分けで体部に凹みあり。TC-1-acに分類される。畳付けは幅広で刻印が押されている。6は丸碗形の片口鉢でTC-23-bに分類される。片口部欠損。

7～9は土器である。7は皿でDZ-2-bに分類される。見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。内面立ち上がり際の押さえは顕著に観られるが外面立ち上がり際の腰折れ状痕ははっきりしない。胎土は橙色。縁にススが付着しており油皿として使われたものであろう。8は丸底ほうろくでDZ-47-aに分類される。在地系で立ち上がりはやや湾曲し高い。型ロクロで作られ底部には砂による縮れ目が観られる。把手は不明。9は塩壺。板作り。内面布目。隅丸長方形の一重枠の中に「泉川麻玉」の刻印を持つ。DZ-51-mに分類される。表面が摩滅しており「麻」の字は細かく観察できなかった。

10～12は金属製品。10、11はキセルである。地金の色調は金色。10は雁首。脂返の湾曲は緩やかで、継ぎ目の蝋付けは左側である。11は吸い口。継ぎ目の蝋付けは左側である。12は釣り針状金具。

13は石製品。碁石。粘板岩。径2.1cm。厚さ0.4cm。

SK110（Ⅳ-21、22図）

1は肥前系磁器染付猪口。底部が輪高台でJB-7-bに分類される。底部中央は垂れ下がっており、体部高台際には釉が掛かっていない。

2～11は陶器である。2、3は瀬戸・美濃系碗。2は口縁部瑠璃釉と体部灰釉の掛け分けでTC-1-aeに分類される。腰が張り口縁部はやや反っている。全面に貫入が入っている。3は「ハ」の字状に開く灰釉碗で鉄絵の柳文部分が欠損していると思われる。TC-1-gに分類される。高台脇面取り。4は京都・信楽系灰釉丸碗。高台径の小さい半球碗でTD-1-bに分類される。5は瀬戸・美濃系鉄釉の壺でTC-15に分類される。折り返し口縁。底部に掛けて窄まっている。胴部から直接高台に繋がる。底部および胴部下半は釉拭き取り。畳付けには目跡が4箇所残る。底部中央が内側に窪んでいる。内面全釉。胎土は明黄褐色。蔵骨器として使用か。6は壺・甕でTZ-15に分類される。口径は広く肩が張り平底である。蓋をして焼かれたと思われ、頸部を除く胴部には鉄泥が施されている。上部にはゴマ状の灰降りが観られる。外面にはロクロ目が残り、ざらついている。胎土は内側と外側の二層に分かれる。赤褐色で白色粒子を含む。薄手、硬質。ST123-1と同一産地と思われ、SK110・114-11は蓋になると思われる。常滑系か。7は堺系擂鉢である。TL-29に分類される。擂目は1単位8条から成る。口縁外帯3本。8は瀬戸・美濃系油受け皿でTC-40に分類される。受けは低く、四角く切り込みが入れられている。外面には重ね焼きの痕が観られる。9は志戸呂系油受け皿でTF-40に分類される。受けは高く、外面無釉。切り込みなし。10は白土染付の土瓶の蓋である。釦状の摘みが付く。11は瀬戸・美濃系壺・甕の蓋である。

12、13は土器である。12は硬質瓦質蓋付壺でDZ-15-aに分類される。口径は広く平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。底部脇を1周強くナデたような調整痕が観られる。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。13は硬質瓦質の器高の低い火消壺である。DZ-31-iに分類される。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。回転押捺による細かい格子目の地文様が入る。横方向にミガキが掛けられている。

14は軒丸瓦丁子梅鉢文。花弁部はドーム形。富山藩家紋。小振り。瓦当部は半分残存。筒部の大半を欠損している。

15 は石製品。硯。粘板岩。朱墨が残る。背面線刻。「本青石」「春和」等。

SK114（Ⅳ -22、23 図）

1 ～ 3 は肥前系染付磁器である。1 は高台断面がシャープな「U」字形で小振りな碗。JB-1-e に分類される。仙芝祝寿文。見込み文様あり。2 は見込み蛇ノ目釉剝ぎで高台径が大きい皿。JB-2-m に分類される。見込みコンニャク印判五弁花。3 は体部が丸形を呈す坏で JB-6-a に分類される。

4 ～ 8 は陶器である。4 は瀬戸・美濃系灰釉丸碗で TC-1-c に分類される。口縁部はやや内湾している。大振り。5 は瀬戸・美濃系で外面上半に灰釉、下半に錆釉の碗。TC-1-u に分類される。6、7 は京都・信楽系。6 は杉形で、外面に鉄、呉須で若杉文が描かれた碗。TD-1-d に分類される。根の部分まで描き込みがされている。高台径が大きい。7 は口縁部が外反している碗で TD-1 に分類される。内面口縁部近くは藁灰釉。高台内は渦巻き状に削り込まれている。右回転。高台脇体部より高台内の抉りが深くなっている。高台脇面取り。8 は堺系擂鉢で TL-29 に分類される。擂目は 1 単位 9 条から成る。口縁外帯 3 本。

9 ～ 11 は土器である。9 は皿で DZ-2-b に分類される。底部に左回転糸切り痕がある。外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられる。胎土は橙色。墨書は見込み「西田町」「済」その他。底部は「中」。10 は無釉、無脚のひょうそくで DZ-44-c に分類される。11 はロクロ成形の塩壺で DZ-51-w に分類される。口縁は平。

12 は金属製品でキセルの雁首。火皿は大きい碗形であるが、脂返の湾曲はほぼない。継ぎ目の蝋付けは上側で特徴的である。地金の色調は金色。

SK110・SK114（Ⅳ -23 ～ 25 図）

1 ～ 5 は磁器である。1、2、4 は肥前系磁器。1 は高台径の小さい半球形の碗。JB-1-f に分類される。外面青磁、内面染付の青磁染付。見込み手描き五弁花文。高台内二重角枠内渦福。部分的に内面釉白濁。内面に青磁釉が垂れている。2 は高台径が小さい腰の張る碗で、いわゆる小丸碗。JB-1-j に分類される。見込み二重圏線内手描き五弁花文。体部が真っ直ぐに立ち上がる小丸碗の中では古いタイプ。3 は瀬戸・美濃系で体部が丸形を呈す碗。JC-1-a に分類される。体部中央に鉄釉による帯文。口唇部口銹。高台内施釉。4 は体部が丸形を呈する蓋物。JB-13-a に分類される。口縁部内側釉剝ぎ。5 は肥前系磁器染付筒形合子で JB-18-b に分類される。内面施釉。底部無釉。

6 ～ 11 は陶器。6 は京都・信楽系。杉形で、外面に鉄、呉須で若杉文が描かれた碗。TD-1-d に分 類される。根の部分まで描き込みがされている。高台径が大きい。高台脇面取りがなされている。7 ～ 10 は瀬戸・美濃系陶器。7 は灰釉五合徳利で TC-10-d に分類される。胴部下半に最大径がある。肩部より上欠損。8 は平底、長胴の壺で TC-15 に分類される。底部は糸切り痕を指でなでるように消している為、平底ではあるが指跡が残る。灰釉。口縁は折返口縁で三耳。底部および底部際胴部露胎。蔵骨器として使用されている。9、10 は長胴の壺で TC-15 に分類される。灰釉。口縁は折返口縁で三耳。底部および底部際胴部露胎。蔵骨器として使用されたものであろう。底部は中央部がわずかに削られて高台のようになっている。11 は壺・甕の蓋で TZ-15 に分類される。外面には鉄泥が施され、上面全面にはゴマ振り状の灰が被っている。胎土は鈍い赤褐色。白色粒子混入。硬質。SK110-6 や SK123-1 と同一産地と思われ SK110-6 の蓋になる可能性が高い。常滑系か。

12 ～ 14 は硬質瓦質蓋付壺と蓋で DZ-15-a に分類される。12、13 は壺で平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。回転押捺による縮れ文の地文様が入る。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。底部脇には 1 周強くナデたような調整痕が観られる。12 は口径は広く、体部は底部に向かって真直で寸胴。13 は口縁部の立ち上がりが小さく、胴部上半に最大径がくる。14 は蓋で、被せ蓋。中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。15 は土師質丸火鉢で DZ-31-a に分類される。3 脚。口唇部敲打痕。16 は硬質瓦質丸火鉢で DZ-31-d に分類される。脚が 1 脚残存、小振りである。17 は土師質の風炉で DZ-31-h に分類される。窓が付く。3 脚。18 は硬質瓦質火消壺の蓋。釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。回転押捺による格子目の地文様が入り、中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。

19 ～ 21 は瓦である。19 は軒丸瓦で連珠三つ巴文 A である。蓮珠の数は 16。20 は軒丸瓦丁子梅鉢文。花弁部はドーム形。富山藩家紋。小振り。筒部の大半を欠損している。21 は軒桟瓦丁子梅鉢文。富山藩家紋。瓦当軒丸部のみ残存。

22 は金属製品。キセルの吸い口。中に羅宇が残る。つなぎ目あり。地金の色調は金色。

23 は石製品。砥石。流紋岩。先端欠損。4 面使用。持ち砥にしたのか横方向に使用されている。

24 はガラス製品。おはじき（豆けり）。旗の文様が型

押しされている。日露戦争（1904 年）以降と思われる。

ST111（Ⅳ -25 図）

1 はミニチュアの角皿で DQ-2002-M に分類される。型押し成形で胎土は橙褐色。内面に花の浮文があり、口縁と花は白色で彩色され、全体に透明釉を施した上から葉と花弁に緑釉を施している。2 は瓢箪形の瓶で DQ-2005-M に分類される。左右 2 枚の型合わせ成形で、胎土は淡黄色である。胴部 1/3 より下を除いた外面を緑色で彩色し透明釉を施している。胴部の前後に一重六角枠に「亀」の陽刻がある。3 は鍋で DQ-2010-W に分類される。体部はろくろ成形で把手は貼付、胎土は橙褐色である。胴部 1/3 より下をのぞき、透明釉を施している。

4 は石製品。火打ち石の破片か。

最低成人 3 体、5 歳以下の乳幼児 2 体が埋葬されていた。

ST113（Ⅳ -25 図）

1 は花魁がお多福の面を被る立お福で DQ-1122-M2e に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で、中空。胎土は橙褐色で白色粒子、黒色粒子を含んでいる。頭部は黒色、胴部の一部に白色の彩色が残る。伏見人形にあるモチーフで、福来たれとする開運招福人形である。

性別不明。3 ～ 4 歳の幼児が埋葬されていた。

ST115（Ⅳ -26 図）

1 は羽織を着た女性立像で DQ-1100-M2e に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で中空。胎土は橙褐色である。2 は狆抱きで DD-1130-M2e に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で、中空、底部中央に 1 箇所穿孔がある。手指は 5 本箆で刻み、左右のばりはきれいに撫でており丁寧なつくりである。胎土は淡黄色で緻密である。背面に一重六角枠に「亀」の陽刻がある。目、頭を黒色で描き、童子の着物には朱の彩色が残り、犬には黒色の斑点が認められる。3 はカレイで DQ-1200-M1f に分類される。1 枚型で中実、裏面は無文である。胎土は橙褐色で白色粒子を含んでいる。

性別不明。5 歳以下の乳幼児複数体が埋葬されていた。

ST116（Ⅳ -26 図）

1、2 は土器である。1 は大形のかわらけで底部には右回転離れ糸切り痕がある。DZ-2-b に分類される。見込み立ち上がり際に高まりを持ち、外面立ち上がりはくっきりと角を残す。胎土は橙色。2 は鉛釉が施釉された、そろばん玉形を呈すひょうそくの口。DZ-44-e に分類される。本体とは、はめ込み式になっている。表面は火を受けた痕が残る。また、蝋燭状ひょうそくにも同様の口が付く可能性があるが、本地点では確認していない。

3 は石製品。砥石である。中砥。置砥。1 面のみ使用している。右手前から左奥にかけて反っている。先端欠損。中央部分が大きく擦り減っている。流紋岩。

4、5 は銭。新寛永通宝。5 は文銭。初鋳年は寛文 8 年（1668）、江戸本所亀戸村で鋳造開始とされる。

成人女性 2 体。性別不明、5 歳以下の乳幼児が埋葬されていた。

ST119（Ⅳ -26、27 図）

1 は肥前系磁器。型作りのいわゆる紅皿。JB-6-e に分類される。白磁で陽刻蛸唐草文。肥前系では 19 世紀中頃から確認される。

2 は土器。大形のかわらけで底部には右回転離れ糸切り痕がある。DZ-2-b に分類される。見込み立ち上がり際に高まりを持ち、外面立ち上がりはくっきりと角を残す。胎土は橙色。

3 はミニチュアの瓶で DQ-2005-W に分類される。ろくろ成形で口縁部は折返し。胎土は橙褐色で、白色で梅花を描き、全体に透明釉、花心に緑釉を施している。4、6 は鳩笛で DQ-4003-M に分類される。上下 2 枚の型合わせ成形で胎土は橙褐色。内部に空洞の共鳴室、吹口は尾、音孔は腹である。3 と同文様である。5 は獅子舞で DQ-1136-M2e に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で中空、頭部に穿孔がある。胎土は橙褐色である。獅子頭を戴き腹部に太鼓をつけて舞う一人立の獅子舞である。7 は器種不明。手びねり成形で中実、胎土は橙褐色で全体的に粗雑な成形である。線状に刺突文を施し、上面には櫛状工具でつけた接着面が認められる。カエルか。

成人男性 1 体、性別不明の胎児 1 体、18 週の幼児 2 体、5 歳以下の乳幼児 2 体が埋葬されていた。

SK123（Ⅳ -27 図）

1、2 は陶器である。1 は壺・甕で TZ-15 に分類される。口縁には浅い沈線が 1 本巡る。蓋をして焼かれたと思われ、頸部を除く胴部には鉄泥が施されている。上部にはゴマ状の灰降りが観られる。胎土は灰褐色で部分的ににぶい赤色を呈す。白色粒子を含む。薄手、硬質。SK110-6 と同一産地と思われる。常滑系か。2 は壺・甕で TZ-15 に分類される。口縁は「コ」の字状に屈曲している。胎土はにぶい黄橙色。柿釉に灰釉流し掛けが櫛目状に付いている。底部露胎。底部中央が一段削り込まれ、蛇ノ目高台のようになっている。底部畳付け脇が削

り込まれており、重ね焼きの痕が残る。内側にも目跡が五つ残る。胎土や灰釉の掛け方などから益子・笠間焼系の可能性が高い。

3は土器である。硬質瓦質の器高の低い火消壺である。DZ-31-i に分類される。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。回転押捺による細かい格子目の地文様が入る。横方向にミガキが掛けられている。

ST125（Ⅳ-28 図）

1は男性座像で DQ-1100-M2e に分類される。モチーフは庄屋。前後2枚の型合わせ成形で中空、底部に一箇所穿孔が観られる。胎土は橙褐色である。頭部に黒色の彩色が残る。頭巾、裃、袴で正座をし、両手を膝に置いている。江戸時代後期に流行した狐拳を象った人形か。

2～6は銭である。2は古寛永通宝。3～6は新寛永通宝。3、4は文銭。初鋳年は寛文8年（1668）、江戸本所亀戸村で鋳造開始とされる。5は高津背元銭。初鋳年は寛保元年（1741）。大坂高津新地の銅座が請け負う。

ST128（Ⅳ-28 図）

1、2は土器である。1は器高が低く口径との差が小さい火消壺で、DZ-31-i に分類される。2は蓋である。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。口唇部ナデ調整。底部脇ケズリ。底部縮れ目。2は釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。中央部が下がっている。

5歳以下の乳幼児が埋葬されていた。蓋は閉められた状態であった。口径 22.0cm、高さ 24.2cm。

ST129（Ⅳ-28、29 図）

1は磁器である。瀬戸・美濃系坏で JC-6-a に分類される。胎土はガラス質で、粒子は一般的に瀬戸・美濃系といわれているものより細かい。関西系と称される一群である。高台内には「道八」の銘がある。高台には鋸歯文が巡っている。坏として分類したがおそらく3、4の急須と共に煎茶碗として使われたものであろう。

2～4は陶器である。2は常滑系陶器甕で TG-15 に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。胴部下半には重ね積みによる陶片の痕や凹みが観られる。口縁部上端には重ね焼きの痕が無く、わずかに灰降りが観られる。甕棺。性別不明の成人が納められていた。3､4は急須の身と蓋で TZ-16 に分類される。煎茶に用いられる小振りの急須。白泥。茶漉し穴3箇所。常滑系のいわゆる「藻掛け」の急須と思われる。藻を器に巻き付けて焼き、海水が釉の替わりとなって赤く発色している。

ST131（Ⅳ-29 図）

1、2は硬質瓦質蓋付壺と蓋で DZ-15-a に分類される。1は壺で平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。回転押捺による縮れ文の地文様が入る。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。底部脇には1周強くナデたような調整痕が観られる。口径は広く、胴部上半に最大径がある。2は蓋で被せ蓋である。回転押捺による縮れ文の地文様が入る。中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。

3は石製墓標。上部は隅の切れるかまぼこ形で断面長方形。上部のみ。正面「顕〇」「釈　〇〇」「妙〇」右面「妙〇」と刻まれている。「釋（釈）＋2文字」で浄土真宗の法名。改葬に伴う廃棄。

ST133（Ⅳ-29 図）

1は常滑系陶器甕で TG-15 に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ､口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。胴部下半には重ね積みによる凹みが観られる。体部にはにぶい黄橙色の自然釉がゴマ状に掛かる。口縁部欠損。

2は銭である。古寛永通宝。

ST140（Ⅳ-30・31 図）

1は常滑系陶器甕で TG-15 に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ､口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。外面には鉄泥が施されている。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。胴部下半には重ね積みに使用された陶片痕の凹みが3箇所に観られる。口縁部上端には重ね積みの目跡が 12 箇所観られる。目跡と目跡の間が焼成を強く受けて変色している。底部近くにも外面の変色が観られ、下に据えられていた甕の中にも異なる製品が入っていた可能性がある。

2～8は硬質瓦質蓋付壺と蓋で DZ-15-a に分類される。2～4、6は壺で口径は広く平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。2、3は回転押捺による縮れ文の地文様が入る。底部脇には1周強くナデたような調整痕が観られる。胴部上半に最大径がくる。4は回転押捺による網目文の地文様が入る。胴部立ち上がり際には

工具によるケズリが1周巡っている。寸胴である。6は胴部立ち上がり際に工具によるケズリが1周巡っている。肩に最大径がくる。5、7、8は蓋で被せ蓋である。中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。7は網目文、8は縮れ文の地文様が入る。

SK141（Ⅳ-31図）

1、2は肥前系磁器である。1は型作りのいわゆる紅皿でJB-6-eに分類される。陽刻蛸唐草文。肥前系型作り陽刻蛸唐草文紅皿としてはかなり早い時期と考えられる。2は染付筒形碗でJB-1-lに分類される。焼成不良。

3はミニチュアの皿でDQ-2002-Mに分類される。縁を欠いて円盤状にしている。見込みは浮文で梅を描き全体に白で彩色している。4～10は泥面子でDQ-4006-Mに分類される。いずれも粘土板を金属等の筒で抜いた型抜成形で、胎土は橙褐色である。5は「大小」、6は「ゑ」、7は軍配、8は「を」、9，10は無文である。

11、12は銭である。11は寛永通宝波銭。12は鉄銭。

SK141・SK142・SK143（Ⅳ-31図）

1は肥前系磁器。体部が丸形を呈す蓋物でJB-13-aに分類される。焼継。文様に墨弾きの技法が使われている。高台内に朱色の焼継マーク。

2は瀬戸・美濃系陶器。口縁部外反の折枝梅花文碗でTC-1-zに分類される。内面は白化粧、外面は白土・鉄で絵付け。

3はミニチュアの急須でDQ-4006-Mに分類される。上下別々に型成形し、中央で貼り合わせ、底部には三足の足を貼付けている。胎土は橙褐色で全体を白色で塗り、茶と赤で文様を描き、全体に透明釉をかけている。4～6は泥面子でDQ-4006-Mで分類される。型抜成形。胎土は練り込みが甘く、橙褐色の濃淡がマーブル状を呈している。4、5は「丸」に「二」、6は無文。

ST145（Ⅳ-32図）

1は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。口縁部上端は水平で幅5.2cm。重ね焼きの目跡が14箇所と刻印がみられる。「△一」の中に横向きの「二」。全面ににぶい黄橙色の自然釉がゴマ状に掛かる。胴部下半には無釉部分が観られず、底部には白色の砂痕が残る。底部に「∧」「二」の墨書あり。

ST146（Ⅳ-32図）

1、2は瀬戸・美濃系陶器である。平底、長胴の壺でTC-15-eに分類される。鉄釉。四耳。三耳残存。底部および底部際胴部露胎。つけ掛け。底部糸切り痕あり、底部外周にケズリが1周巡る。胎土はにぶい黄橙。底部、口唇部に重ね焼きの痕が残る。1は口唇部釉拭き取り。

3は金属製品。キセル、吸い口。肩がある。羅宇が残る。地金の色調は金色。

ST147（Ⅳ-33図）

1は土器である。器高が低く口径との差が少ない火消壺である。DZ-31-iに分類される。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。口唇部ナデ調整。高台脇ケズリ。底部スダレ状圧痕。乳幼児の棺と考えられる。口径24.6cm、高さ23.6cm。

2は鯛抱き童子でDQ-1137-M2eに分類される。前後2枚の型合わせ成形で中空、胎土は橙褐色で白色粒子が混じる。3～6はぶら人形でDQ-1128-M2eに分類される。3は体部で髪のない頭部と付根のみの四肢をもつ。前後2枚の型合わせ成形で中空、左足付根部に穿孔がある。腹部の上下に線を描き膨らみを強調している。男児。4はぶら人形の手である。手びねりで棒状に成形し、先端を指で篦状に潰している。指の表現は観られない。5、6はぶら人形の足である。手と同様に棒状に成形し先端を指で篦状に潰している。3～6の胎土は橙褐色で白色粒子を含んでいる。

ST149（Ⅳ-33、34図）

1は瀬戸・美濃系磁器。体部が筒形を呈する碗でJC-1-eに分類される。エナメル質の上絵付け。紺。「天野」。

2は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。胴部下半には重ね積みに使用された陶片痕の凹みが観られる。口縁部上端は水平で幅6.0cm。重ね積みの目跡は観られないが、平坦面全体に灰降りと同様の自然釉が観られる。口縁部から体部上半に掛けてにぶい黄橙色の自然釉がゴマ状に掛かる。内面には白泥が掛けられ下方に向かって流れている。

3～6は硬質瓦質蓋付壺と蓋でDZ-15-aに分類される。3、5は壺で口径は広く平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。胴部立ち上がり際には工具による

ケズリが1周巡っている。3は下に向かってやや窄まっている。5は寸胴である。4、6は被せ蓋で中心から外に向かってミガキが掛けられている。3、4はセットで、3は肩部、胴部、底部に、4は上面に鉄錆がこびりついており針金で蓋を固定していた痕であろう。5は小振りで乳幼児骨が納められていたのか、または分骨器であろう。6は丸みを帯びている。

7は銭である。新寛永通宝。四文銭。波銭11波。

8、9は金属製品である。布に包まれていた。8はキセルの雁首である。肩あり。火皿は小さい碗形、脂返の湾曲はない。火皿との接合部は太い。継ぎ目の蝋付けは左側である。羅宇が残る。地金の色調は金色。9はキセルの吸い口である。肩あり。羅宇が残る。地金の色調は金色。

SU151（Ⅳ-34～37図）

1～4は肥前系染付磁器である。1は高台断面がシャープな「U」字状を呈す鉢でJB-5-bに分類される。底部に「大明年製」の銘有り。2、3は体部が扁平な球形を呈する合子でJB-18-aに分類される。2は身、3は蓋。型による陽刻。4は蓋物の蓋。摘み内手描き五弁花。

5～12は陶器である。5は肥前系陶器。白土象嵌の施された平鉢でTB-2-hに分類される。いわゆる三島手。胎土は赤褐色。白色粒子、黒色粒子少量混入。高台断面は逆台形。口縁部は外反し鍔縁状を呈す。陰刻の連続文に白泥を充填。外部下半には鉄奨が掛けられている。見込みに砂目痕あり。畳付けには胎土目痕が観られる。6～12は瀬戸・美濃系陶器。6～9は灰釉五合徳利でTC-10-dに分類される。釘書きあり。6は「∧加」。7、9は「いりやま」に「半」。8は「久上□」。いずれも頸部より上が打ち欠かれ、二次利用されている。内面に使用痕跡は確認できなかった。10は高台のある二耳壺でTC-15-fに分類される。灰釉。11は口縁部が朝顔形を呈する花生でTC-22-bに分類される。体部上半は灰釉、下半は鉄釉に掛け分けられている。底部にはススが付着している。12は鉄釉擂鉢でTC-29に分類される。胎土は淡黄色。黒色粒子少量混入。底部回転糸切り痕。擂り目は1単位12条。

13は土器。磨きかわらけで底部に渦巻き状の沈線がある。DZ-2-cに分類される。14は鍔付き角火鉢でDZ-31-cに分類される。掘り炬燵として使われたものであろう。15は土師質丸火鉢でDZ-31-aに分類される。最大径は口縁部にあり器高が低い。3脚。底部に墨書あり。「松岐三」。16はロクロ成形。無印の塩壺でDZ-51-wに分類される。このタイプでは、大形である。

17、18は銭である。17は新寛永通宝四文銭。波銭11波。18は新寛永通宝。

ST153（Ⅳ-37図）

1～3は磁器である。肥前系磁器。1、2は型皿。1は染付。裏から見ると茄子のモチーフが解る。ヘタの部分が陽刻の点で表され、葉も陽刻で表現されている。高台あり。2は白磁で亀のモチーフである。脚が4脚付き、シノギが入る。3は型作りされたシノギの坏で口唇部が平ら。いわゆる紅皿である。JB-6-eに分類される。

4は土器である。器高が低く口径との差が少ない火消壺である。DZ-31-iに分類される。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。口唇部ナデ調整。高台脇ケズリ。底部スダレ状圧痕。体部上方に墨書で「前」の文字が書かれている。こちらを前方に据えて埋葬したと考えられる。ST153内において火消壺は壊れた状況で出土し、周辺覆土からは複数体の人骨が出土している。性別不明の7～8歳の幼児。性別不明の3歳くらいの幼児。性別不明の2歳くらいの幼児。性別不明の胎児～新生児。口径24.0cm、高さ23.3cm。

5はミニチュアの鉢でDQ-2003-Wに分類される。ろくろ成形で口縁部を指でくぼませ輪花にしている。胎土は橙褐色で、内面を白色で塗り、枝は茶、花を緑釉で描く。全体に透明釉をかけている。

ST154（Ⅳ-38図）

1、2は土器である。1は器高が低く口径との差が少ない火消壺でDZ-31-iに分類される。、2は蓋である。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。1は底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。口唇部ナデ調整。底部スダレ状圧痕。内面底に墨書あり。「〇」に「六」ともう一文字が書かれている。口径22.2cm、高さ18.7cm。胎児が埋葬されていた。2は釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。

ST155（Ⅳ-38図）

1、2は土器である。1は器高が低く口径との差が少ない火消壺で、2は蓋である。DZ-31-iに分類される。土師質。1は底径より口径が広く、胴部上半に最大径がある。口唇部ナデ調整。底部脇ケズリ。底部スダレ状圧痕。口径21.1cm、高さ19.3cm。乳幼児が埋葬されていたと考えられる。2は釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。中央部が下がっている。蓋は閉められた状態であった。

3はミニチュアのレンゲでDQ-2000-H。手びねり成形、胎土は橙褐色で全体に透明釉をかけている。長さ2.4cmと非常に小形である。

SU156（Ⅳ-39図）

1～3は肥前系磁器である。1は高台断面がシャープな「U」字状を呈し高台高が高い碗でJB-1-dに分類される。染付。高台内銘有り「大明年製」。2は高台断面がシャープな「U」字状を呈し高台高が高い小振りの碗でJB-1-uに分類される。染付。コンニャク印判。口唇部口錆。高台内銘有り。3は脚部の畳付け部が浅く削り込まれ、外周が面取りされている仏飯器でJB-8-aに分類される。白磁。

4～6は陶器である。4は瀬戸・美濃系灰釉丸碗でTC-1-cに分類される。腰張りは小さく大振りである。底部無釉。5は肥前系陶器。体部に渦巻き状の刷毛目が施された丸碗でTB-1-dに分類される。高台内施釉。胎土は鈍い黄橙色。白色粒子微量混入。6は瀬戸・美濃系壺・甕の蓋。TC-15に分類される。裏面には糸切り痕が観られる。全面に二次焼成を受け部分的に釉が溶け、ススが付着している。

7、8は土器である。かわらけでDZ-2-bに分類される。体部はやや丸みを持って立ち上がる。外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。胎土はにぶい黄橙色。いわゆる「江戸式」と思われる。底部糸切り左回転。

9は笛でDD-4003-Hに分類される。手びねり成形で胎土は淡黄色である。紡錘形の吹口のみで基部は欠損している。紡錘形の先端が吹口、吹口から約2cm下部に音孔を持つ。胎土は黄白色で緻密、全体に透明釉をかけ基部には緑釉を流しかけている。

10、11は銭である。寛永通宝。残存状況が非常に悪い。

12、13は石製品。12は温石。上部欠損。13は硯。粘板岩。角は面取りされている。背面に名前と思われる、線刻あり。「□□町」「市十郎ヵ」

ST160（Ⅳ-39図）

1はぶら人形の手でDQ-1128。手びねりで棒状に成形し、先端部を篦状に潰している。胎土は橙褐色である。

SX163（Ⅳ-39図）

1は肥前系磁器である。見込みが蛇ノ目釉剝ぎされ底部無釉の皿でJB-2-kに分類される。高台断面の形状は逆台形で高台高は高い。見込み釉剝ぎされた周囲に染付で梅文が施されている。

SK167（Ⅳ-40図）

1、2は肥前系磁器である。1はJB-1に分類される。白磁の丸碗で高台高が高い。2は高台断面がシャープな「U」字状を呈す皿でJB-2-eに分類される。見込みコンニャク印判五弁花。焼成不良。

3は瀬戸・美濃系陶器灰釉五合徳利でTC-10-dに分類される。底部のみ。

4～6は土器である。4、5はかわらけで器壁はやや内湾しており、底部に左回転糸切り痕がある。DZ-2-bに分類される。外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。胎土は橙色。いわゆる「江戸式」と思われる。6はドーム形の塩壺の蓋。DZ-00-aに分類される。稜を持つ。内面布目あり。

SK171（Ⅳ-40図）

1～3は土器。1、2は硬質瓦質蓋付壺でDZ-15-aに分類される。口径は広く平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。回転押捺による縮れ文の地文様が入る。その後で横方向と縦方向にミガキが掛けられている。1は寸胴で、底部脇には1周強くナデたような調整痕が観られる。2は肩に最大径があるが、頸部はあまり明瞭ではない。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが1周巡っている。3は硬質瓦質蓋付壺の蓋である。被せ蓋。中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。

4は銭である。古寛永通宝。

SK173（Ⅳ-41～48図）

1～28は磁器である。1～4は肥前系磁器染付碗である。1は高台断面が「U」字状で高台高が低い碗。JB-1-fに分類される。見込み松竹梅文。2は高台がハの字に開き、腰が張っている。JB-1-nに分類される。見込み松竹梅文。3は高台断面の形状がシャープな「U」字状を呈し、高台高が高い小振りの碗でJB-1に分類される。4は3に伴う蓋と思われる。焼継されている。5～18は瀬戸・美濃系染付碗である。5は体部が丸形を呈する碗でJC-1-aに分類される。繊細な模様が描かれており、見込みの文様が外面の模様と対になっている。焼継されている。6～11は端反形碗でJC-1-dに分類される。6は毛彫りされた後ダミが施されている。口縁部内面圏線。7、8は釉が青みがかっている。8は内外面共に二段の連続文。口唇部口錆。9は毛彫りされた後ダミが施されている。10、11は見込みに木型打ち込みの後ダミが施されている。口唇部口錆。10は見込み団龍文。外

面毛彫り。高台はやや幅広。11 は見込み鳳凰文。12 は腰の張る湯呑碗で JC-1-e に分類される。いわゆる江戸絵付けと金の上絵。外面に「源氏繪巻桐壺之圖」。高台はやや幅広。13 は JC-1 に分類される。クロム青磁。内面染付、外面赤で上絵が描かれている。高台内銘。「篁居園製」。瀬戸の篁居園であろう。14 ～ 18 は丸碗形坏で JC-6-a に分類される。小振り。16 は高台内銘。二重角枠内「篁ヵ」。17 は幅広高台。18 の外面葵文は木型打ち込みの後ダミが施されている。19、20 は高台断面が「U」字状で口縁部が輪花に形成され、見込みに一枚絵が施された皿。JB-2-q に分類される。手塩皿。19 は楼閣山水文。20 は墨弾き。焼継されており、高台内に朱色で焼継マークあり。21 は瀬戸・美濃系染付輪高台皿で JC-2-b に分類される。口縁部はやや外反している。22 は瀬戸・美濃系燗徳利。JC-4 に分類される。富士と龍。焼成不良。口縁部欠損。23 は肥前系染付仏飯器で JB-8-c に分類される。脚部の畳付け部分が浅く彫り込まれ､その外面は面取りされている。焼成不良。24 は瀬戸･美濃系染付仏飯器で JC-8 に分類される。脚部が長く畳付け部分を残し深く抉り込まれている。畳付けに墨書あり。25 は肥前系染付蓋物で JB-13 に分類される。高台が高く、鉄と染付で文様が描かれている。焼継されており、高台内に赤色で「ハ」の焼継印あり。26 は肥前系大形長頸瓶で JB-15-a に分類される。白磁。口縁部は比厚している。胴部中央に最大径をもつ。27 は蓋物の蓋。橋状の摘みが付く。28 は瀬戸･美濃系端反碗の蓋である。毛彫りされた後ダミが施されている。釉は青みがかっている。

29 ～ 84 は陶器。29 ～ 43 は瀬戸・美濃系碗。29 ～ 33 は刷毛目の施された端反碗で TC-1-s に分類される。内面白化粧。33 は口縁部を打ち欠いて二次加工し灯火具として使用している。34 は内面および外面上半に灰釉、外面下半に錆釉の碗。TC-1-u に分類される。いわゆる腰錆碗。35 ～ 38 は杉形を呈し外面に鉄で若杉文が描かれた碗。TC-1-w に分類される。典型的な杉形が崩れ器高が低く小振りになっている。若杉文もかなり崩れている。畳付けが丸みを帯びている。39 は器形が杉形ではなく丸碗形になっているが外面には鉄で崩れた若杉文が描かれている。TC-1 に分類される。内面に茶褐色状のものが付着している。40 は口縁部が外反。外面には白土と鉄で折枝梅花文が絵付けされる。内面白化粧。TC-1-z に分類される。畳付けに 3 箇所の目跡あり、目跡以外は赤褐色に変化。41 は口縁部に瑠璃釉、体部に灰釉の掛かる掛分けの碗で、TC-1-ae に分類される。42、43 は腰の張る小丸碗形灰釉碗で鉄で絵が描かれている。TC-1 に分類される。44 ～ 50 は京都・信楽系である。44、45 は杉形の碗で TD-1-d に分類される。典型的な杉形が崩れ器高が低く小振りになっている。胎土は淡黄色でやや粗い。若杉文は描かれなくなっている。46 ～ 49 は口縁部が外反する、小振りの灰釉碗。高台無釉。TD-1-g に分類される。48 は灰釉がやや青みがかっており、釉際に赤褐色の発色が観られる。49 は焼成不良。50 は丸碗形の灰釉碗。高台内施釉。TD-1 に分類される。胎土は淡黄色できめが細かい。51 ～ 55 は萩系である。51、52 は藁灰釉が施釉され、口縁部が大きく開口する碗で TH-1-a に分類される。高台内は渦巻き状に削り込まれる。長門市深川窯で焼かれた。大法量のものから次第に小法量になる。51、52 は小法量に分類される。53 ～ 55 はピラ掛けが施された碗で TH-1-b に分類される。高台内は渦巻き状に削り込まれる。大法量のものから次第に小法量になる。53 ～ 55 は小法量に分類される。56 は大堀・相馬系で TJ-1 に分類される。外面は高台まで指または工具による凹凸が付けられ、内面にまで及んでいる。見込みに型で付けられたと思われる陽刻の上に馬の絵が描かれている。高台内は中央部のみ渦巻き状に削り込まれる。高台内刻印、隅丸方形枠内「相馬」。57 ～ 59 は瀬戸・美濃系皿である。57 は内面に鉄で扁平な渦巻き文が施文された皿で TC-2-g に分類される。いわゆる馬目皿。見込みに目跡が 4 箇所観られる。高台は幅広高台。58 は輪禿皿に近いが釉剝ぎをせず、口縁部のみに釉を掛け、見込み中央に径 1cm ほどの点が打たれている。鍔皿。TC-2 に分類される。59 は高台のある灰釉皿で TC-2 に分類される。腰が張る。見込み鉄絵。竹管のような中央に穴の空いた径 6mm ほどの工具で施文している。60 は瀬戸・美濃系こね鉢。見込みに団子状の目跡が 5 箇所ある。器高が低く寸胴である。61 は京都・信楽系香炉・火入れで TD-9 に分類される。口唇部に、敲打痕あり。呉須と鉄で絵が描かれている。62、63 は瀬戸・美濃系壺・甕。62 は高台あり、二耳、TC-15-f に分類される。高台内墨書。63 は TC-15 に分類される。鉄釉。高台あり。胎土は黄灰色。黒色粒子、白色粒子混入。高台脇底部釉拭き取り。高台内目跡 3 箇所あり。64、65 は急須の身と蓋。TZ-16 に分類される。煎茶に用いられる小振りの急須。器壁は大変薄い。糸目。白泥。常滑系のいわゆる「藻掛け」の急須と思われる。藻を器に巻き付けて焼く。海水が釉の替わりとなって赤く発色している。茶漉し穴 6 箇。碁笥底。65 は粘土をねじったままのような摘みが付けられている。66 は瀬戸・美濃系植木鉢。灰釉が施され高台にスリットが入る。TC-21 に分類される。67 ～ 69 は口縁が朝顔形の

花生で TC-22-b に分類される。67 は底部に「尾州」の文字が焼成前に陰刻されている。胴部の膨らみが大きい。69 は底部に印が付けられている。70 は三彩が施された丸形の土瓶で TZ-34-c に分類される。71、75、76 は土瓶で TZ-34 に分類される。茶漉し穴 3 箇。71 は胴上半には条線文が施されている。胎土は灰黄褐色で白色粒子を含む。硬く焼締まっており、胴部の厚みは 2mm である。見込みには印が付けられている。75、76 は蓋や肩に灰降りが観られ、胴部に灰色や黄褐色の窯変が観られる。胎土は灰褐色。白色粒子少量混入。碁笥底。見込みにはロクロ目が強く残る。72 はうのふ釉が施された土瓶で TZ-34-k に分類される。茶漉し穴 3 箇。碁笥底。脚付き。おそらく 3 脚であろう。73、74 は白土灰釉の土瓶。TZ-34 に分類される。胎土は浅黄色。73 は注口の根本部分に「道八」の銘あり。内面灰釉。74 の摘みは犬のような動物が付けられている。碁笥底。77、78 は土瓶。TZ-34 に分類される。表面は窯変により部分的に自然釉が残る。碁笥底。茶漉し穴 3 箇。77 の胎土は褐灰色。78 の胎土は橙色。77､78 は同一産地と思われる。79 は京都・信楽系。脚付きで灰釉が施釉された油受け皿。TD-40-a に分類される。80 は蒸し器で TZ-53 に分類される。軟質施釉陶。外面鉄釉。内面鉛釉。胎土は橙色。底部の孔は中心部に方形状に 9 箇並び周辺に 8 箇で、計 17 箇開けられている。孔の径は 4mm。81 は三彩が施された土瓶の蓋である。釦状の摘みが付く。82 はうのふ釉が施された土瓶の蓋である。釦状の摘みが付き、摘みの周囲には刻みが施されている。83 は鉄釉土瓶の蓋である。落とし蓋。釦状の摘みが付く。84 は瀬戸・美濃系の蓋である。灰釉。橋状の摘み。

85 ～ 109 は土器である。85 ～ 87 はかわらけで DZ-2-b に分類される。外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。胎土は橙色。見込みに墨書が書かれている。85「国覚」。86「国□」。87「河路」。88 ～ 91 は底部が穿孔されたかわらけで DZ-2-i に分類される。92、93 は無釉、無脚のひょうそくで DZ-52-b に分類される。二次加工で中央の突起を外し底部中央に穿孔したものと思われる。燭台などに使用されたのではないか。94、95 は扁平で器厚の薄い燭台。DZ-52-b に分類される。96 は菊灯台台座で内外面に赤褐色の彩色が観られる。この台座に支柱を立てて台を載せその上に灯火具を載せた。97 ～ 101 は香炉・火入れで DZ-9 に分類される。ロクロ成形。口縁部に 1 本沈線が巡りその沈線から口唇部に掛けては横方向にミガキが掛けられている。97 ～ 100 は胴部に縦方向のミガキが掛けられている。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが 1 周巡っている。98 ～ 101 には回転押捺による地文様が入る。99 ～ 101 は底部中央が穿孔されており、植木鉢として二次利用されたのであろう。102 ～ 104 は底部穿孔の植木鉢である。平底で糸切り痕が残る。102 は土師質で DZ-21-a に分類される。103、104 は瓦質で DZ-21-b に分類される。105 は硬質瓦質の火鉢で DZ-31-d に分類される。口縁部に 1 本沈線が巡りその沈線から口唇部に掛けて横方向にミガキが掛けられている。胴部には回転押捺による地文様が入る。脚は 3 脚貼り付けられている。脚の周囲には 1 周ヘラで押さえた痕が残る。106 は底部が丸形を呈するほうろくで DZ-47-a に分類される。江戸在地系とされている。立ち上がりはかなり低く、口縁部のみが被厚している。内耳は持たない。107 はロクロ成形、筒形、無印の塩壺で DZ-51-w に分類される。108 はロクロ成形、筒形、無印の塩壺の蓋で DZ-00-d に分類される。109 は鉢形塩壺の蓋で DZ-00-k に分類される。裏面には指頭圧痕がそのまま残る。

110 はミニチュアの燗徳利で TZ-2005-W に分類される。胎土は淡黄色で底部を除く体部全体に青緑釉がかけられている。産地は不明。111 は花生のミニチュアで TZ-2000。全体に白泥をかけ呉須で山水文様を描いている。産地は不明。112 は狆抱き童子で DD-1130-M2e に分類される。前後 2 枚の合わせ型成形で、胎土は淡黄色で緻密、全体に透明釉をかけ、緑釉、褐釉を前面の一部に流しかけている。背中に刻印があるが判読できない。ねぶり人形とよばれ､子供のおしゃぶりにしたとされる。113 は茶釜のミニチュアで DQ-2011-M に分類される。型成形で口縁部下に 2 箇所花の陽刻がみられる。胎土は赤褐色である。114 は蓋のミニチュアで DQ-2013-M。型成形で裏面は平らで指痕がくぼむ。胎土は赤褐色で全体を白色で塗り、緑釉を流しかけている。115、116 は泥面子で DQ-4006-M に分類される。型抜成形。胎土は橙褐色である。115 は「田」、116 は渦巻。

117 は備前系陶器の細工物で TE に分類される。青備前の鴛鴦である。背の銀杏羽の羽間には空隙がある。頭部は欠損しているが、首を後ろにねじり、脚は後ろに伸ばし泳いでいる姿勢を表現している。非常に精緻な造りで、香炉もしくは置物と思われる。

118 ～ 122 は銭である。118 ～ 120 は新寛永通宝。121、122 は四文銭。波銭 11 波。

123 ～ 128 は金属製品である。123 はキセルの吸い口で、一六菊が陰刻されている。吸い口としては長く 10.9cm。地金の色調は赤銅色。124 は耳掻き。軸部はねじっている。先端は尖っており鍵状に曲げてある。地

金の色調は赤銅色。125 は表面が魚々子（ななこ）状になっている。「魚々子」とは、切先が小さな円状のノミで打ち込んだ地文様である。表面は鍍金され、金色になっている。器種不明。126 は表面には毛彫りで唐草文が彫り込まれている。地金の色調は赤銅色。127 は筒状になっており表面には縦方向の毛彫りが多く入る。地金の色調は赤銅色。器種不明。128 は楕円形の部品。地金の色調は赤銅色。器種不明。129 は円形の部品。銀色。130 は環状製品。129 以外は赤銅色を呈しており銅合金と思われる。

131 ～ 135 は瓦である。131 は軒平。中心文様のほとんどは「江戸式」であるが中心飾りの中央の周辺に「大坂式」が観られる。唐草 K。子葉 h。瓦当上部左右に大きな面取り。「江戸式」と「大坂式」の折衷形。19 世紀初頭に観られる。132、133、135 は軒桟瓦。132 は平部は「江戸式」分類Ⅰ Kj に分類される。丸部は三つ巴紋 c に分類される。133 は平部は「江戸式」分類Ⅲ Hh に分類される。丸瓦部は欠損。135 は軒丸部に「西」。134 は平瓦片で、小口に刻印。四菱。

SK173　3～5層（Ⅳ-48、49 図）

1 ～ 11 は磁器である。1 は肥前系端反形染付碗で JB-1-n に分類される。見込み松竹梅文。文様は線描きで充填されている。2 ～ 8 は瀬戸・美濃系。2 は丸形を呈する碗で JC-1-a に分類される。クロム青磁。黒、緑、白、ピンク。3 ～ 6 は口縁部が外反する碗で JC-1-d に分類される。3 はわずかに外反している大振りの碗。4 は仙芝祝寿文。5 は木型打込。見込み団鳳凰文にダミ。口唇部口錆。6 は見込みに屋号か。「∧」ヵ、「川」。7 は腰が張り体部が直立する碗で JC-1-e に分類される。いわゆる湯呑碗。丸文。8 は器壁が極めて薄い坏で JC-6-d に分類される。高台内銘。見込み上絵。赤で「濱町」。高台鋸歯文。9 は高台状の露胎部のある肥前系白磁香炉で JB-9-c に分類される。内面無釉。10 は頸部が鶴首状を呈する肥前系御神酒徳利で JB-11-b に分類される。染付。文様は単純化されている。上半は蛸唐草文。11 は瀬戸・美濃系急須で JC-16 に分類される。茶漉し穴は 10 箇。

12 ～ 16 は陶器。12、13 は京都・信楽系。12 は高台径が小さい半球碗で TD-1-b に分類される。錆絵染付。口縁部はかなり内湾している。13 は口縁部が外反し器面に細かい貫入が観られる小振りの灰釉碗。TD-1-g に分類される。14 は瀬戸・美濃系壺・甕で TC-15 に分類される。鉄釉。薄手。底部糸切り痕、外側には 1 周指で押さえたような痕が残る。15 は壺・甕の蓋である。鉄泥が施され上面にはゴマ状の灰降りが観られる。胎土は赤灰色。白色粒子混入。硬質。16 はうのふ釉の土瓶の蓋である。釦状の摘みが付く。

17 は土器である。硬質瓦質の香炉・火入れで DZ-9 に分類される。口縁には沈線が巡り、ミガキが掛けられている。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが 1 周巡っている。回転押捺による地文様が 4 本巡る。

18 はミニチュアの平形銚子で DQ-2004-M に分類される。六角形で上下 2 枚の型合わせ成形。上半分にはアラレ文を陽刻し、透明釉と緑釉を流し掛けしている。19 はミニチュアの瓶で DS-2005-M に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で、胎土は黄白色。底部を除き緑釉を施している。胴部に瓢箪の蔓と馬の陰刻があり「瓢箪から駒」を描いたもの。

20、21 は 銭である。新寛永通宝である。20 は高津背元銭。初鋳年は寛保元年（1741）。大坂高津新地の銅座が請け負う。

22 ～ 24 は金属である。22、23 はキセルである。22 は雁首。脂返の湾曲がある。継ぎ目の蝋付けは左側である。地金の色調は金色。23 は吸い口。羅宇側欠損。地金の色調は金色。24 は蝶番。同様の形態の物が閉じた状態で 2 枚合わさっている。地金の色調は赤銅色。

ST174（Ⅳ-50 図）

1、2 は京都・信楽系灰釉筒形合子で TD-18-b に分類される。中に歯が収納されていた。3 は瀬戸・美濃系壺で平底、TC-15 に分類される。口縁は折返口縁で三耳。底部および底部際胴部露胎。焼骨埋納。蔵骨器として使用されている。底部に穴が空いてしまったのか粘土紐を内底部に入れて補強した痕が観られ、底部外側にも手の跡が大きく付く。4 は蓋。ロクロ成形で鉄が全面に掛けられている。蔵骨器（3）の中で焼骨に乗せられるように合子（1、2）が納められ蓋は逆位の状態で被せられていた。

ST175（Ⅳ-50 図）

1 は瀬戸・美濃系壺で平底、TC-15 に分類される。口縁は折返口縁で三耳。底部および底部際胴部露胎。底部は調整により糸切り痕を消そうとしているが全体に残る。胴部下半が窄まっている。焼骨埋納。蔵骨器として使用。

2 は土器である。器高が低く口径との差が少ない火消壺である。DZ-31-i に分類される。土師質。底径と口径の差はあまりなく、胴部上半に最大径がある。口唇部ナデ調整。高台脇ケズリ。底部縮れ目。乳幼児の棺と考え

られる。口径 22.6cm、高さ 21.6cm。脚部欠損。

ST176（Ⅳ -50 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器灰釉五合徳利で TC-10-d に分類される。つけ掛け。列点状釘書き。「∧」「叶」。

被葬者が徳利を抱えるように埋葬されていた。

ST177（Ⅳ -50 図）

1 は天神で DQ-1101-M2e に分類される。前後 2 枚の型合わせ成形で内部は中実、厚みが薄い。胎土は橙褐色で黒色粒子が混入している。

2 は金属製品。キセル。吸い口。肩あり。折れた部品が吸い口側からはめこまれている。地金の色調は金色。

成人女性と 5 歳以下の乳幼児が埋葬されていた。

ST178（Ⅳ -51 図）

1、2 は瀬戸・美濃系陶器。1 は鉄釉の壺で TC-15 に分類される。折り返し口縁。底部に掛けて窄まっている。胴部から直接高台に繋がる。底部および胴部下半は釉拭き取り。畳付けには目跡が 4 箇所残る。底部中央が内側に窪んでいる。内面全釉。蔵骨器として使用。2 は皿で TC-2 に分類される。口縁部と見込み中央に灰釉が施されている。見込み墨書。人名か。1 の蓋として使用されている。

ST180（Ⅳ -51 図）

1 は京都・信楽系陶器燗徳利で TD-4 に分類される。底部脇面取り。白土。鉄。緑。

未成人が埋葬されていた。

ST181（Ⅳ -51 図）

1 ～ 6 は銭である。1 は古寛永通宝。2 ～ 6 は新寛永通宝。六道銭か。

ST183（Ⅳ -52 図）

1、2 は硬質瓦質蓋付壺で DZ-15-a に分類される。口径は広く平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。体部には横方向と縦方向にミガキが掛けられている。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが 1 周巡っている。2 は蓋である。被せ蓋。中心から外に向けて渦巻き状にミガキが掛けられている。

ST186（Ⅳ -52・53 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器柿釉灰釉流し壺で TC-15-b に分類される。高台あり。

2 ～ 6 は硬質瓦質蓋付壺と蓋で DZ-15-a に分類される。2、4、6 は壺で口径は広く平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。体部は底部に向かってやや窄まっている。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが 1 周巡っている。2 は回転押捺による縮れ文の地文様が入る。胴部立ち上がり際には工具によるケズリも半分ほどみられる。6 は肩の張りが小さく口縁部の立ち上がりが低い。小形。3、5 は蓋である。ドーム形。細かい格子目の地文様が入る。中心から外に向けて渦巻き状にミガキが掛けられている。

7 は銭である。新寛永通宝。

8、9 は金属製品。キセル。8 は雁首、火皿は小さい碗形で器高は低い。火皿との接合部は太い。継ぎ目の蝋付けは右側である。肩あり。地金の色調は金色。9 は吸い口である。肩あり。吸い口部分が窄まらずに広がっている。地金の色調は金色。8、9 両方に羅宇が残っており、組み立てられたまま副葬された物であろう。10、11 は箸である。骨角製の柄に木製の先端が付く。柄は表面が磨かれ切れ込みが入る。差し込まれた木部は釘で留められている。上から銅合金と思われる金属で接合部を覆っている。骨角製の柄は牛馬骨四肢骨骨幹部分と思われる。

ST187（Ⅳ -53 図）

1 は常滑系陶器甕で TG-15 に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっている F 類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。胴部下半に凹みが 3 箇所認められる。凹みは等間隔ではなく片側に偏って観られる。口縁部上端は水平で幅 6.0cm。重ね積みの跡が 14 箇所観られる。胎土は暗茶褐色で白色粒子を含む。甕棺。成人男性が納められていた。

2 は碁石状製品で DQ-4004-H に分類される。てびねり成形で胎土は橙褐色。

ST195（Ⅳ -53 図）

1 ～ 3 は銭である。1 は古寛永通宝。2、3 は新寛永通宝。2 は文銭。初鋳年は寛文 8 年（1668）、江戸本所亀戸村で鋳造開始とされる。

ST196（Ⅳ -54 図）

1 は雁首、火皿は小さい碗形で器高は低い、火皿との接合部は太い。継ぎ目の蝋付けは右側である。肩なし。

ST199（Ⅳ -54 図）

1、2はミニチュアの角皿でDD-2002-Mに分類される。型成形で付高台、四隅を輪花にかたどっている。胎土は淡黄色で全体に透明釉を施す。1は見込みに草花の浮文を施し黄色で彩色し、全体に透明釉をかけている。2は見込み1/2に白泥、反対側は麻葉文様の浮文を施し、上から梅枝文を描いている。3はミニチュアの片手鍋でDQ-2010-Wに分類される。ろくろ成形で注口、把手は貼付け、胎土は淡黄色で全体に透明釉を施している。4、5は土瓶とその蓋でDQ-2009に分類される。土瓶はろくろ成形で釣手と注口、三足は貼付け。底部を除き白色で塗り、こげ茶で草花を描いている。底部を除き透明釉を施している。蓋は型成形である。6は七輪でDQ-2014-Wに分類される。ろくろ成形で胎土は橙褐色で無釉。鍋受は貼付けである。7はミニチュアのれんげでDQ-2000-Hに分類される。てびねり成形で皿部は透明釉をかけている。8は碁石状製品でDQ-4004-Hに分類される。てびねり成形で胎土は橙褐色。

SU201（Ⅳ-54、55図）

1～3は陶器。1は京都・信楽系薄手半球碗でTD-1-bに分類される。上絵。色絵赤、緑、白。高台脇面取り。胎土は灰白色。2は瀬戸・美濃系片口鉢。丸碗形でTC-23-bに分類される。灰釉。底部無釉。見込み目痕3箇所。胎土はやや灰色を帯びた黄白色。3は志戸呂系油受け皿でTF-40に分類される。受け部には半円形の窓が開く。胎土は暗灰色で白色粒子を含む。硬質。

4～6は土器である。4、5はかわらけで器壁はやや内湾している。DZ-2に分類される。外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。胎土は橙色。4は底部離れ糸切り。5は右回転糸切りである。6は油受け皿でDZ-40-dに分類される。灯芯痕が付く。

7は擂り粉木を持った猿で、DQ-1203-Hfに分類される。手びねり成形で中実、底部に一箇所穿孔がみられる。背に毛の表現があり、尾は短い。胎土は明橙色で赤色粒子、白色粒子が目立つ。

8は石製品。硯である。四隅が丸く削り込まれている。五寸×二寸五分。大振り。硯背に文字が刻まれている。「伊藤」。9は砥石。置砥。1面のみ使用している。先端欠損。角は面取りしている。

10、11は銭。10は新寛永通宝。11は古寛永通宝。

ST207（Ⅳ-55図）

1は肥前系磁器染付御神酒徳利でJB-11-bに分類される。小形で、笹、梅花が染付されている。2はミニチュアの鉢でDQ-2003-Wに分類される。ろくろ成形で、口縁部は4箇所を指でくぼませ輪花にしている。胎土は橙褐色。内面を白色で塗り、枝は褐釉、花を緑釉で描く。全体に透明釉をかけている。3、4はミニチュアの器台DQ-2017-Mと碗DQ-2001-W。胎土は橙褐色で緻密。内部に白で花弁を描き、全体に透明釉をかけている。

5歳以下の乳幼児が埋葬されていた。

ST213（Ⅳ-55、56図）

1、2は肥前系磁器染付皿でJB-2に分類される。揃いの鍔皿。細かい線で空間が充填されている。高台内にも裏文様と同様の文様が描かれている。高台断面三角形。全面二次焼成を受け表面の釉が溶けている。

3、4は陶器。3は瀬戸・美濃系壺・甕でTC-15-cに分類される。柿釉灰釉流し。底部露胎。見込みには団子状目痕が4箇所観られる。全面二次焼成を受け表面の釉が溶け発泡している。4の内底部より出土。4は常滑系甕でTG-15に分類される。胴部上半に横走するヘラによる装飾が施される。G類である。口縁部内端がやや上方へ突出し、外端はわずかに突出する。口縁部の内面が丸みを持っている。器高は48.5cmと小振りで幼児棺として使用されたものであろうか。本遺跡では類例はあまり多くない。

ST216（Ⅳ-56図）

1は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。口縁部上端は水平で幅6.4cm。胎土は暗茶褐色で白色粒子を含む。口縁部直下に同じ刻印が二箇所押されている。「△」「一」「子」。胴部には重ね積みによる陶片痕の凹みや口縁部の目跡がない。口縁部平坦面全体に灰降りが観られる。底部には白色の砂痕が残る。窯詰めの際に上向きに置かれたものと思われる。そのため、刻印は灰降りにより見えなくなることを考えて口縁部上端ではなく胴部に押したのではないか。甕棺。妊娠痕のある成人女性が納められていた。

2は泥面子でDQ-4006-Mに分類される。筒形容器で抜いており、胎土は橙褐色で文様「嵐」。

3はガラス製品。笄。

ST218（Ⅳ-57図）

1は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面に

は輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。胴部下半には重ね積みによる色調の変化が観られる。口縁部上端は水平で幅6.0cm。重ね積みの跡と思われる円形の目跡が12箇所巡る。その間にはわずかにゴマ降りが観られる。同じ刻印が2箇所押されている。「△」「一」逆「丁」。胎土は暗茶褐色で白色粒子を含む。底部に白砂付着。墨書あり。かなり斜めになっている。甕棺。成人が納められていた。

2、3は布に包まれた金属製品のキセル。2は雁首。3は吸い口。両方に羅宇が残っており、組み立てられたまま副葬されたものであろう。

SU219（Ⅳ-58・59図）

1～6は肥前系染付磁器。1は薄手半球碗でJB-1-fに分類される。2は高台断面の形状がシャープな「U」字状でJB-1-eに分類される。小振り。厚手。焼成不良。3は高台高が高いいわゆる小広東碗でJB-1-iに分類される。4はいわゆる広東碗でJB-1-mに分類される。底部のみ。5は蛇ノ目凹形高台を有し高台高の低い皿でJB-2-jに分類される。見込み手描き五弁花。口縁は輪花に成形されている。釉は青みがかっている。6は底部が輪高台状の猪口でJB-7-bに分類される。見込み銘。「大明年製」。

7～19は陶器である。7～13は碗である。7は肥前系で内面に主文様が描かれたいわゆる京焼風陶器平碗。TB-1-cに分類される。口縁部が部分的に欠損しており周辺が黒変している。灯火皿として二次利用されたのかもしれない。8、9は瀬戸・美濃系である。8は灰釉が薄く施された丸碗でTC-1-cに分類される。胎土は灰色。白色粒子混入。9は外面に渦状刷毛目が施された碗でTC-1-sに分類される。内面は打刷毛目。一般的な丸碗形に比べ口縁部が立ち上がるやや器高の高い器形である。高台脇の削り込みは観られない。胎土は鈍い黄橙色。黒色粒子混入。10～12は京都・信楽系である。10は高台径が小さい半球碗でTD-1-bに分類される。器壁は薄く、外面には錆絵染付が施される。高台脇面取り。11は口縁が外反し器面に細かい貫入が観られる。TD-1-gに分類される。高台脇面取り。12は半筒形の碗でTD-1-iに分類される。白、鉄絵。高台脇面取り。見込み目痕あり。13は萩系藁灰釉碗でTH-1-aに分類される。口縁部が大きく開口する。渦巻き高台。長門市深川窯で焼かれた。小法量。大法量のものから次第に小法量になる。14は志戸呂系皿でTF-2に分類される。15、16は瀬戸・美濃系丸碗形灰釉片口鉢でTC-23-bに分類される。15は胴部下半無釉。見込み目痕4箇所。16は注口部欠損。17は志戸呂系の油受け皿でTF-40に分類される。外側から工具で半月状の窓が開けられている。18は京都・信楽系の合子の蓋である。19は鉄釉土瓶の蓋。花状摘み。

20～24は土器である。20はかわらけでDZ-2-bに分類される。外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。胎土は橙色。いわゆる「江戸式」と思われる。底部墨書。底部糸切りは左回転。21は角火鉢でDZ-31-eに分類される。4脚。脚の周囲には1周ナデ調整が施されている。口縁部平坦面にはススが付着している。22は火消壺でDZ-31-iに分類される。胴部上方左右に横5cm、縦2.4cmの楕円形突起が貼り付けられている。周囲はナデ調整されている。古い突起の付くタイプは本地点では、数が少ない。内外面にススが付着している。器高の高いタイプ。3脚。2脚残存。脚の周囲には1周ナデ調整が施されている。23、24は塩壺の蓋でDZ-00-cに分類される。凹形、無印。内面布目。

25は狐の台座DQ-1206-Mに分類される。前後2枚の型合わせ成形で台座と狐脚部は一体。胎土は橙褐色である。26は狛犬で、DD-1201-M2fに分類される。前後2枚の型合わせ成形で中実。右向きで頭に角を持つ。体部には渦巻き文様を陽刻し、全体に透明釉と緑釉を流しかけている。

27、28は金属製品。キセルの吸い口。27は肩あり。肩のみ八角形。肩手前に2本の沈線が巡る。地金の色調は金色。28は羅宇残存。地金の色調は金色。

29は石製品。砥石。粘板岩。角は面取りが施されている。2面使用。先端欠損。再利用しようとして割れた方を整形し、切断しようとしている痕がある。

SP223（Ⅳ-60図）

1は肥前系陶器。青緑釉で蛇ノ目状に釉剝ぎされた皿。TB-2-aに分類される。内野山窯製品を指標とする。

ST224（Ⅳ-60図）

1はぶら人形でDQ-1128-Mに分類される。前後2枚の型合わせ成形で中空、右足付根部に穿孔がある。腹部の上下に線を描き、腹部の膨らみを強調している。男児。胎土は橙褐色で緻密。薄手である。

新生児が埋葬されていた。

ST225（Ⅳ-60図）

1、2は瀬戸・美濃系陶器。1は皿でTC-2に分類される。鍔皿状になっている。口縁部と見込み中央に灰釉が施さ

れている。見込み墨書。「大和田」。2 の蓋として使われている。2 は柿釉に灰釉が流し掛けられている壺・甕で TC-15-b に分類される。口縁部は「コ」の字状に外反。肩部から頸部に掛けてかなり窄まっている。胴部から直接高台に繋がる。底部露胎。見込みには目跡が 5 箇所残る。内面全釉。焼骨が納められており蔵骨器として使用されている。

SU227（Ⅳ -60 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器灰釉碗で TC-1 に分類される。小振りである。胎土は淡黄色。

2 は石製品。砥石である。表裏の 2 面を使用している。面は大きく反っている。

3 ～ 6 は銭である。新寛永通宝である。3 は文銭。初鋳年は寛文 8 年（1668）、江戸本所亀戸村で鋳造開始とされる。

7 は金属製品。キセルの雁首。脂返の湾曲は大きくはない。火皿は大きい碗形。継ぎ目の蝋付けは左側である。地金の色調は金色。

SU229（Ⅳ -61 図）

1 ～ 3 は肥前系磁器である。1、2 は碗である。1 は高台径の小さい半球形の薄手碗で JB-1-f に分類される。2 は絵付けや作りが下手な碗で JB-1-g に分類される。3 は器高が低く腰が張る皿で JB-2-o に分類される。口縁はわずかに輪花に成形されている。高台内銘。

4 ～ 8 は陶器である。4 は瀬戸・美濃系。腰が張り段を有する灰釉碗で TC-1-f に分類される。高台は渦巻き高台。内面鉄釉流し掛け。5 は京都・信楽系半筒形碗で TD-1-i に分類される。鉄絵。高台内に目痕が 3 箇所観られる。6 は志戸呂系皿で TF-2 に分類される。全面スス付着。灯火皿。7 は瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利で底部釉拭き取り。TC-10-a に分類される。口縁部欠損。肩は張らずなだらかである。線刻による釘書き「た」。8 は瀬戸・美濃系。高台のある二耳壺で TC-15-f に分類される。灰釉。片側半分は釉の表面が劣化しざらついている。

9、10 は土器である。9 は無釉、無脚の油受け皿で DZ-40-d に分類される。受け部は口縁よりもかなり高い。口縁部の切り欠きは幅広の「U」字形である。10 は板作り成形で「泉湊伊織」の刻印がある塩壺で DZ-51-g に分類される。受け部の断面が方形を呈しており古い様相を示す。

11 は銭である。新寛永通宝である。

12 は金属製品。キセルの雁首。脂返の湾曲は途中で欠損しているが大振り。火皿欠損。継ぎ目の蝋付けは左側である。地金の色調は金色。

13、14 は砥石である。13 は仕上げ砥。1 面のみ使用し、均一に摩耗している。約 1/2 欠損。14 は表裏の 2 面と脇の 1 面を使用している。面は大きく反っている。約 1/2 欠損。

SK232（Ⅳ -62 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器灰釉二合半徳利で底部釉拭き取り。TC-10-a に分類される。肩は張らずなだらかである。

2 は銭である。新寛永通宝である。

3 は金属製品。キセルの雁首。肩付き。脂返の湾曲は大きい。火皿欠損。継ぎ目の蝋付けは左側である。地金の色調は金色。

SK235（Ⅳ -62 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器灰釉碗で TC-1 に分類される。高台は高い。内面には鉄分が付着しており、鉄漿碗として使われた可能性もある。2 は鉄釉擂鉢で TC-29 に分類される。胎土は淡黄色。黒色粒子少量混入。底部回転糸切り痕。擂り目は 1 単位 16 条。

3 ～ 5 は土器。3、4 はかわらけ。3 は DZ-2-a に分類される。外面底部からの立ち上がりはなだらか、内面も見込みからなだらかに立ち上がる。底部糸切りは右回転。4 は底部に左回転糸切り痕がある。DZ-2-b に分類される。外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられ、見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。胎土は橙色。5 は丸底ほうろくで底部に縮れ目が付く。DZ-47-a に分類される。見込みに刻印「〇」の中に「一」。本地点では一番多いほうろくの刻印である。やや厚手。体部立ち上がりは高く外面ナデ調整。内耳はない。土師質。

ST245（Ⅳ -63 図）

1、2 は土器である。1 は器高が低く口径との差が少ない火消壺である。DZ-31-i に分類される。土師質。底径と口径の差はあまりなく、胴部上半に最大径がある。乳幼児の棺と考えられる。口径 29.2cm、高さ 29.2cm。大形である。2 は広口壺で、DZ-15 に分類される。1 の中から出土。埋納されていたものであろう。碁石状製品が出土しており副葬品としての碁笥の可能性もある。

3 は碁石状製品で DQ-4004-H に分類される。手びねり成形で、胎土は橙褐色。

ST246（Ⅳ -63、64 図）

1 は瀬戸・美濃系陶器。鉄釉の壺で TC-15 に分類される。折り返し口縁。底部に掛けて窄まっている。胴部

から直接高台に繋がる。底部および胴部下半は釉拭き取り。口唇部には目跡が5箇所、畳付けには目跡が2箇所残る。内面全釉。胎土は明黄褐色。蔵骨器として使用か。

2～6は硬質瓦質蓋付壺でDZ-15-aに分類される。2～4は壺で平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが1周巡っている。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。2は、ケズリの上部に1周強くナデたような調整痕が観られる。体部は底部に向かって真直で寸胴。3は口唇部やや比厚。4は小形。胴部上半に最大径がくる。5､6は蓋。5はでドーム形。中心から外に向かってミガキが掛けられている。6は顕著ではないが、上面外周から下方に向かってミガキが掛けられている。小形の4、5はセットと思われる。4の胴部、肩部、底部、5の口縁部には鉄錆がこびりついており十字に針金で蓋を固定していたことが分かる。

ST247（Ⅳ-64図）

1、2は陶器である。1は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっているF類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。白泥は掛けられていない。胴部下半には重ね積みによる陶片痕の凹みと環状痕が観られる。口縁部上端には重ね積みの目跡が4箇所観られる。甕棺。成人女性が納められていた。2は鉄釉の瓶でTZ-10に分類される。折り返し口縁。肩部から上には条線が巡り、胴部には寿老人の浮文が貼り付けられている。肩部には灰降りが観られる。

3は狆抱き童子でDD-1130-M2eに分類される。前後2枚の型合わせ成形で中空、内部に粘土塊が入っている。胎土は淡黄色、全体に透明釉をかけている。

ST248・249（Ⅳ-65図）

1は硬質瓦質蓋付壺でDZ-15-aに分類される。1は壺で平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。底部脇には1周強くナデたような調整痕が観られ胴部立ち上がり際には工具によるケズリが1周巡っている。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。2は蓋で中心から外に向けて渦巻き状にミガキが掛けられている。1の胴部、肩部、底部、2の口縁部、上面には鉄錆がこびりついており十字に針金で蓋を固定していたことが分かる。

3～8は銭である。錆で固着した状態で出土しており、3、8には表面を覆っていたと思われる平織りの布が付着している。5は古寛永通宝。縁が削り取られている。5以外は新寛永通宝である。5ほど顕著ではないが、いずれも縁を加工したような痕が見受けられる。6枚まとまって出土しており、六道銭であろう。

ST258（Ⅳ-65・66図）

1は瀬戸・美濃系壺で平底、TC-15に分類される。口縁は折返口縁で三耳。胴部下半が窄まっている。底部および底部際胴部露胎。底部は調整により糸切り痕を消している。蔵骨器として使用されている。

2は鯛抱き童子でDQ-1137-M2eに分類される。前後2枚の型合わせ成形で中空、内部に粘土塊が入っている。3はミニチュアの鉢DQ-2003-Wに分類される。ろくろ成形で、底部は小さく幅広の口縁部を持つ。4は釜蓋でDQ-2013-M。型成形。5は石臼の上臼部分でDQ-2015-Mに分類される。型成形。6は竈でDQ-2016-Bに分類される。台座付2連複房タイプで、釜を置く部分は黒で彩色している。7～9は笛でDQ-4003-Mに分類される。7は福良雀、8は鳩、9は蝉である。いずれも吹口は尾で音孔は腹である。7，8は前面に透明釉を施している。2～9の胎土は全て橙褐色である。

10は金属製品。キセルの吸い口である。地金の色調は金色。

人骨と蔵骨器が出土しており、副葬品と思われる。2～10はどちらに属するか不明。

ST260（Ⅳ-66図）

1は天神でDQ-1101-M2eに分類される。前後2枚の型合わせ成形で中空。体部に赤色の彩色が残る。右に笏を持つが、手と浅沓の表現はない。2は三味線弾きでDQ-1124-M2eに分類される。前後2枚の型合わせ成形で内部に粘土塊を持つ。着物は朱、三味線は黒で彩色。背部に一重六角枠＋□の刻印が陽刻されている。同様の刻印は江戸在地系の飾り馬、三味線弾きにみられる。

性別不明の1歳半ぐらいの幼児が埋葬されていた。

SK261（Ⅳ-67図）

1～3は陶器。1は京都・信楽系の杉形を呈する碗でTD-1-dに分類される。鉄で若杉文が描かれている。2は瀬戸・美濃系底部釉つけ掛けの二合半徳利でTC-10-cに分類される。釘書き「○」「万」？。底部墨書「万」。3は瀬戸・美濃系五合徳利でTC-10-dに分類される。釘書きあり。肩はあまり張っていない。

4～6は土器である。4、5は硬質瓦質の火消壺と蓋である。DZ-31-iに分類される。4は器高が低く底径よ

り口径が広い。胴部上半に最大径がある。回転押捺による細かい格子目の地文様が入る。横方向に丁寧にミガキが掛けられている。5は蓋である。摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。回転押捺による格子目の地文様が入り、中心から外に向けて渦巻き状にミガキが掛けられている。蓋が閉じた状態で出土している。乳幼児の棺と考えられる。6は硬質瓦質蓋付壺の蓋である。回転押捺による縮れ文の地文様が入る。中心から外に向けて渦巻き状にミガキが掛けられている。

ST263（Ⅳ-67、68図）

1は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっている。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。白泥は掛けられていない。胴部下半には重ね積みによる陶片痕の凹みが観られる。口縁部上端は水平で重ね積みの痕は観られないが、半分ほどゴマ降り痕が観られる。器高の低い小振りの甕。

2は土器である。器高が低く口径との差が少ない火消壺である。DZ-31-iに分類される。土師質。底径と口径に余り差はなく、胴部上半に最大径がある。乳幼児の棺と考えられる。口径24.4cm、高さ22.7cm。

ST264（Ⅳ-69図）

1、2は土器である。1は器高が低く口径との差が少ない火消壺である。DZ-31-iに分類される。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が大きく、胴部上半に最大径がある。底部スダレ状圧痕。墨書で「○」の中に「前ヵ」。乳幼児の棺と考えられる。口径30.0cm、高さ25.3cm。2は釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。中央部が下がっている。蓋にも目印と思われる墨書が書かれている。

3～5は銭である。3、4は新寛永通宝である。

ST265（Ⅳ-68図）

1～4はぶら人形でDQ-1128-M2eに分類される。1は体部で髪のない頭部と付根のみの四肢をもつ。前後2枚の型合わせ成形で中空、左足付根部に穿孔がある。腹部の上下に線を描き膨らみを強調している。男児。2はぶら人形の手である。手びねりで棒状に成形し、先端を指で篦状に潰している。指の表現は観られない。3、4はぶら人形の足である。手と同様に棒状に成形し先端を指で篦状に潰している。1～4の胎土は橙褐色で白色粒子を含んでいる。

5は金属製品。環である。地金の色調は赤銅色。

性別不明の5歳以下の乳幼児が埋葬されていた。

ST267（Ⅳ-68図）

1は瀬戸・美濃系壺で平底。TC-15に分類される。口縁は折返口縁で二耳。底部および底部際胴部露胎。底部は調整により糸切り痕を消している。胴部下半が窄まっている。蔵骨器として使用されている。

ST268（Ⅳ-68図）

1は金属製品。環である。地金の色調は銀色。

女性成人が埋葬されていた。

ST270（Ⅳ-70図）

1は常滑系陶器甕でTG-15に分類される。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。白泥が塗られ底部に向かって流れている。胴部下半には重ね積みの痕は観られない。口縁部上端は水平で幅6.0cm。目跡が6箇所観られ、「△」「一」「文」を組み合わせた同じ刻印が2箇所押されている。口縁部上端に自然釉は付着していない。底部には白砂が付着している。胎土は暗茶褐色で白色粒子を含む。底部墨書「∧」「文」。甕棺。

SK271（Ⅳ-69、70図）

1～3は肥前系染付磁器である。1はいわゆる広東碗でJB-1-mに分類される。中国的な文様を踏襲している。高台内銘あり。2は筒形碗でJB-1-lに分類される。見込みはかなり崩れた手描き五弁花。二重圏線。口縁部四方襷文。3は作りが粗雑な皿でJB-2-gに分類される。見込みコンニャク印判五弁花。高台内銘あり。

4～6は瀬戸・美濃系陶器である。4は柿釉の施された油皿でTC-2-oに分類される。見込みには重ね焼きの痕が観られる。5は高台のある二耳壺でTC-15-fに分類される。底部露体。内面や高台部分に鉄分が付着しており、鉄漿壺として使われたものであろう。6は油受け皿でTC-40-cに分類される。受け部は「コ」の字状に切られている。

SU280（Ⅳ-71、72図）

1～5は肥前系染付磁器である。1は高台径の小さい薄手半球碗でJB-1-fに分類される。体部高台際に文様が入る。2は高台断面がシャープな「U」字状で高台高の高い小振りの碗。JB-1-uに分類される。コンニャク印判雨降り文。3は高台断面がシャープな「U」字状で高台高が高い碗。JB-1-dに分類される。全面にコンニャク印

判で文様が付けられている。4 は口縁部が外反する坏で JB-6-b に分類される。3 箇所にコンニャク印判で紅葉の文様が付けられている。畳付けには砂粒が付着している。5 は底部が輪高台状の猪口で JB-7-b に分類される。高台内銘有り。

6 ～ 12 は陶器である。6 ～ 11 は瀬戸･美濃系である。6 は灰釉丸碗で TC-1-c に分類される。大振り。体部は口縁に向かってやや窄まっている。高台内側は斜めにケズリ出されている。胎土は灰白色。7 は外面に簡略な呉須絵が描かれる灰釉碗で TC-1-d に分類される。いわゆる御室碗。胎土は黄白色。8 は上半灰釉、下半錆釉が施釉された碗で TC-1-u に分類される。いわゆる腰錆碗。見込み中央の釉が溶け、貫入が入っている。9 は口縁部に灰釉の掛けられた錆釉碗で TC-1-ac に分類される。本品は長石釉ではなく灰釉が散らされている。胎土は黄白色。10 は灰釉鉄絵の香炉で TC-9-c に分類される。胎土は黄白色。11 は口縁部が朝顔形を呈する花生で TC-22-b に分類される。鉄釉。うのふ釉流し掛け。口径や胴部の膨らみも大きい。胎土は灰白色。12 は堺系擂鉢で TL-29 に分類される。擂り目は 1 単位 11 条からなる。注口部欠損。

13、14 は土器である。13 はかわらけで、底部に左回転糸切り痕がある。DZ-2-b に分類される。見込み立ち上がり際には指で押さえた凹みがあり外面立ち上がり際に腰折れ状痕がみられる。見込みは中心部を除きややふくらみを持つ。胎土は橙色。14 は DZ-51-i に分類される。板作り成形。大枠に「泉州麻生」の刻印。表面は部分的に剝がれてしまっている。

15 ～ 19 は銭である。15 は古寛永通宝。16 ～ 19 は新寛永通宝。

20 ～ 22 は金属製品である。20、21 は火箸。上端は丸く曲げられて環状になっている。地金の色調は赤銅色。22 は刀装具、切羽。縁には細かい刻みが巡っている。地金の色調は赤銅色。

ST281（Ⅳ -72、73 図）

1 ～ 3 は陶器である。1、2 は常滑系甕で TG-15 に分類される。頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっている F 類である。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。口縁部上端は幅 6cm。胴部には重ね積みによる陶片痕の凹みや口縁部の目跡がない。胎土は暗茶褐色で白色粒子を含む。1 の口縁部平坦面は灰降りなども観られない。2 は 1/3 に灰降りが観られる。甕棺。遺構図版Ⅲ -123 図に対し、1 は甕棺 1、2 は甕棺 2 に対応している。1 には成人男性が、2 には性別不明の成人が埋葬されていた。3 は瀬戸・美濃系鉄釉擂鉢で TC-29 に分類される。胎土は淡黄色。黒色粒子少量混入。底部回転糸切り痕。擂り目は 1 単位 12 条。

4、5 は金属製品。キセル。8 は雁首、火皿は小さい碗形で器高は低い、火皿との接合部は太い。継ぎ目の蝋付けは左側である。肩あり。地金の色調は金色。9 は吸い口である。肩あり。地金の色調は金色。吸い口部分が窄まらずに広がっている。両方に羅宇が残っており、組み立てられたまま副葬されたものであろう。

ST282（Ⅳ -74 図）

1、2 は土器である。器高が低く口径との差が少ない火消壺である。DZ-31-i に分類される。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。胴部上半に最大径がある。1 は底径より口径が大きく、脚が小さい。底部スダレ状圧痕。口径 23.8cm、高さ 22.3cm。2 は口径と底径の差が小さい。底部脇ケズリ。口径 20.6cm、高さ 19.7cm。乳幼児の棺と考えられる。

3 は泥面子で DQ-4006-M に分類される。筒形容器で抜いている。胎土は橙褐色で文様「松」。

4 ～ 8 は銭である。4 は古寛永通宝。5 ～ 8 は新寛永通宝である。

ST283（Ⅳ -73 図）

1 は笛で DD-4003-M に分類される。左右 2 枚の型合わせ成形で脚は貼付け。吹口は尾で音孔は背である。胎土は黄白色で緻密。全体に透明釉、頭部と羽に緑釉を流しかけている。モチーフは雉か。

2 は金属製品。キセル。 吸い口である。地金の色調は金色。

ST284（Ⅳ -75 図）

1 は磁器である。瀬戸・美濃系磁器。型作りされた紅皿である。JC-6-g に分類される。口径 2.3cm の小振りのものである。白磁に外面陽刻で花が 1 箇所と 2 箇所のものが対で配置され、全面に鎬が入る。

2 は常滑系陶器甕で TG-15 に分類される。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。白泥は掛けられていない。口縁部上端はほぼ水平で幅 8cm。胎土は暗茶褐色で白色粒子を含む。内外面とも鉄泥は塗られていない。胴部中央には重ね積みによる凹みが観られるが、口縁部には目跡が観られない。甕棺。

ST286（Ⅳ-76 図）

1、2 は陶器である。1 は瀬戸・美濃系灰釉二合半徳利つけ掛けで TC-10-c に分類される。肩が張る。釘書き「加」他。2 は常滑系陶器甕で TG-15 に分類される。粘土紐を巻き上げて造られる紐造り技法である。内面には輪積み痕と指頭圧痕が顕著に残る。白泥は掛けられていない。口縁部上端はほぼ水平で幅 7.2cm。重ね積みによる目痕は観られず、灰降りもない。胎土は暗茶褐色で白色粒子を含む。内外面とも薄く鉄泥が塗られている。胴部には重ね積みによる凹みが観られる。胴部下半に墨書で「×」。器高の低い小振りの甕。甕棺。成人女性が埋葬されていた。また、1 は 2 の中から出土している。副葬品である。

3、4 は土器である。3 は硬質瓦質蓋付壺で DZ-15-a に分類される。平底である。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが 1 周巡っている。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。4 は硬質瓦質蓋付壺に伴う小形の蓋で中心から外に向かって渦巻き状にミガキが掛けられている。

5 は骨角製品。T 字状に穿孔されている玉。数珠の主玉から房に繋げる為に T 字状に穿孔された親玉と呼ばれる玉ではないかと想定される。

ST291（Ⅳ-77 図）

1 は陶器である。瀬戸・美濃系壺の蓋である。全面に鉄が掛けられている。

2 ～ 15 は銭。2 ～ 9 は寛永通宝。そのうち 2 ～ 6 は寛永通宝波銭 11 波。7 ～ 9 は新寛永通宝。10 ～ 15 は文久永宝波銭 11 波。

16、17 はガラス製品。ボタン。

ST295（Ⅳ-78 図）

1 は土器。硬質瓦質蓋付壺で DZ-15-a に分類される。回転押捺による縮れ文の地文様が入る。底部脇には 1 周強くナデたような調整痕が観られる。横方向と縦方向にミガキが掛けられている。底部には針金状工具による切り離し痕が観られる。焼骨埋納。蔵骨器として使用。

ST299（Ⅳ-78 図）

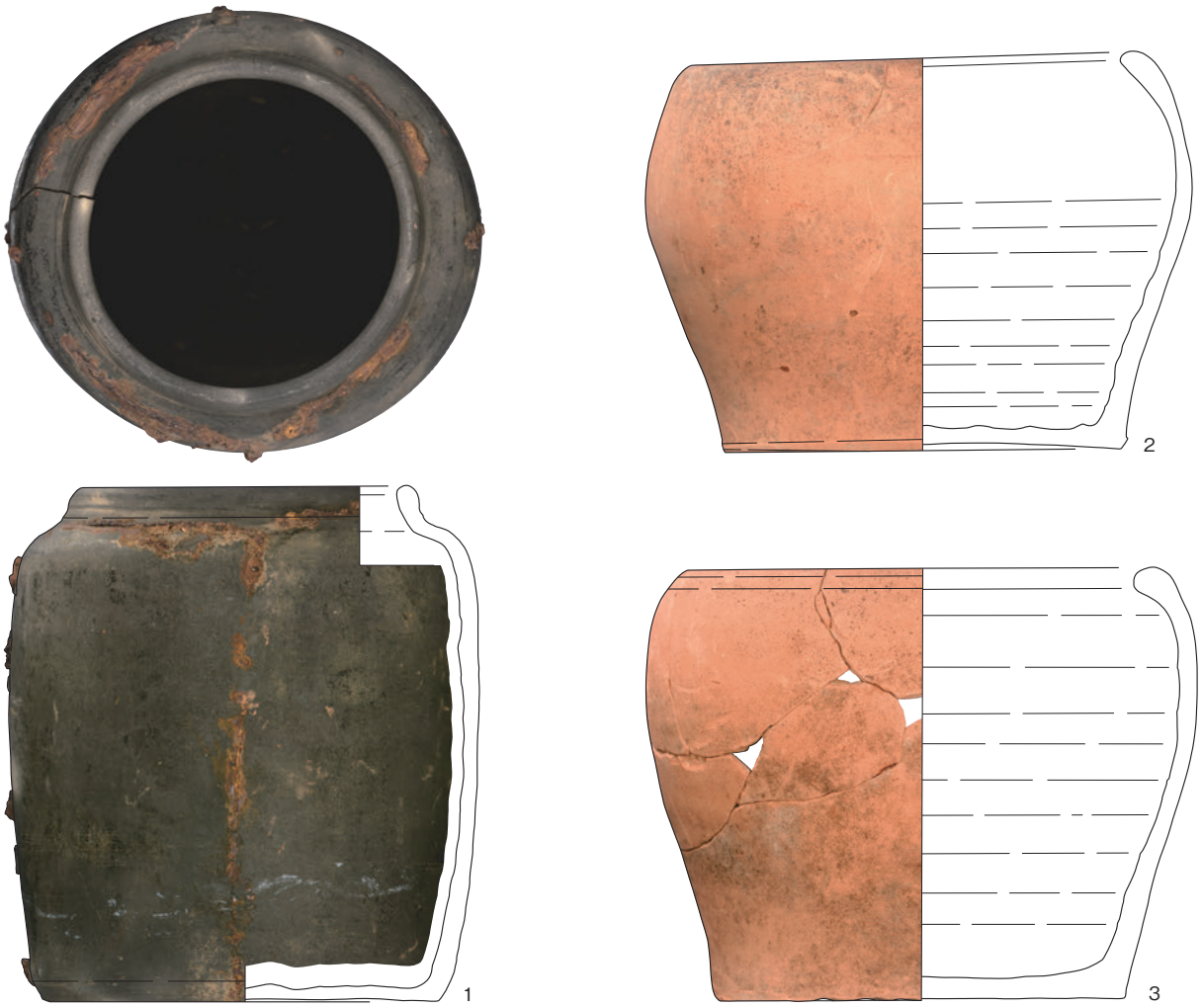
1 は瓶で TD-2005-W に分類される。ろくろ成形、胎土は淡黄色、底部を除き灰釉が施されている。

ST301（Ⅳ-78、79 図）

1、2 は土器である。1 は器高が低く口径との差が少ない火消壺である。DZ-31-i に分類される。土師質。胎土は橙色で微量に金雲母粒子を含む。底径より口径が大きく、胴部上半に最大径がある。胴部立ち上がり際には工具によるケズリが 1 周巡っている。底部スダレ状圧痕。口径 30.0cm、高さ 25.3cm。2 は火消壺の蓋で釦状の摘みが付き周囲はナデ調整が施されている。乳幼児用の棺と考えられる。

3 ～ 6 は銭である。3 ～ 5 は古寛永通宝である。

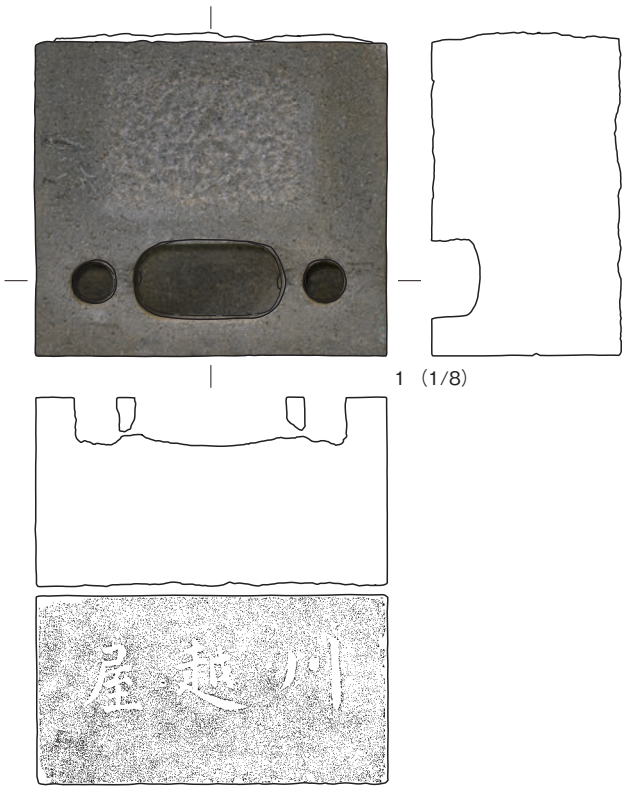
7 ～ 18 は金属、鉄製品である。7 ～ 13 は長さ 7.2cm ～ 7.8cm で 2 寸 5 分の巻頭釘。14 は長さ 8.8cm で 3 寸の巻頭釘。15、16 は長さ 4.1cm で 1 寸 4 分の巻頭釘。17 は長さ 10cm で 3 寸 5 分の合釘。7 ～ 17 の錆部分には木部の付着が観られる。18 は引き手である。



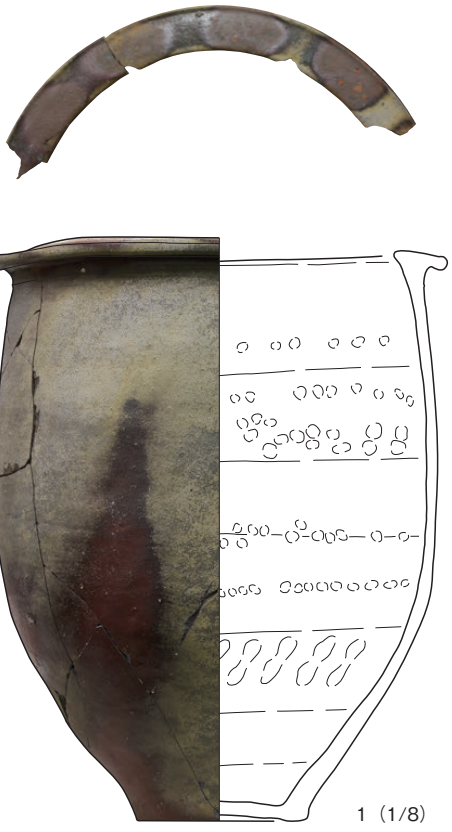
SK4

ST7

Ⅳ-1図　SK4、ST7 出土遺物



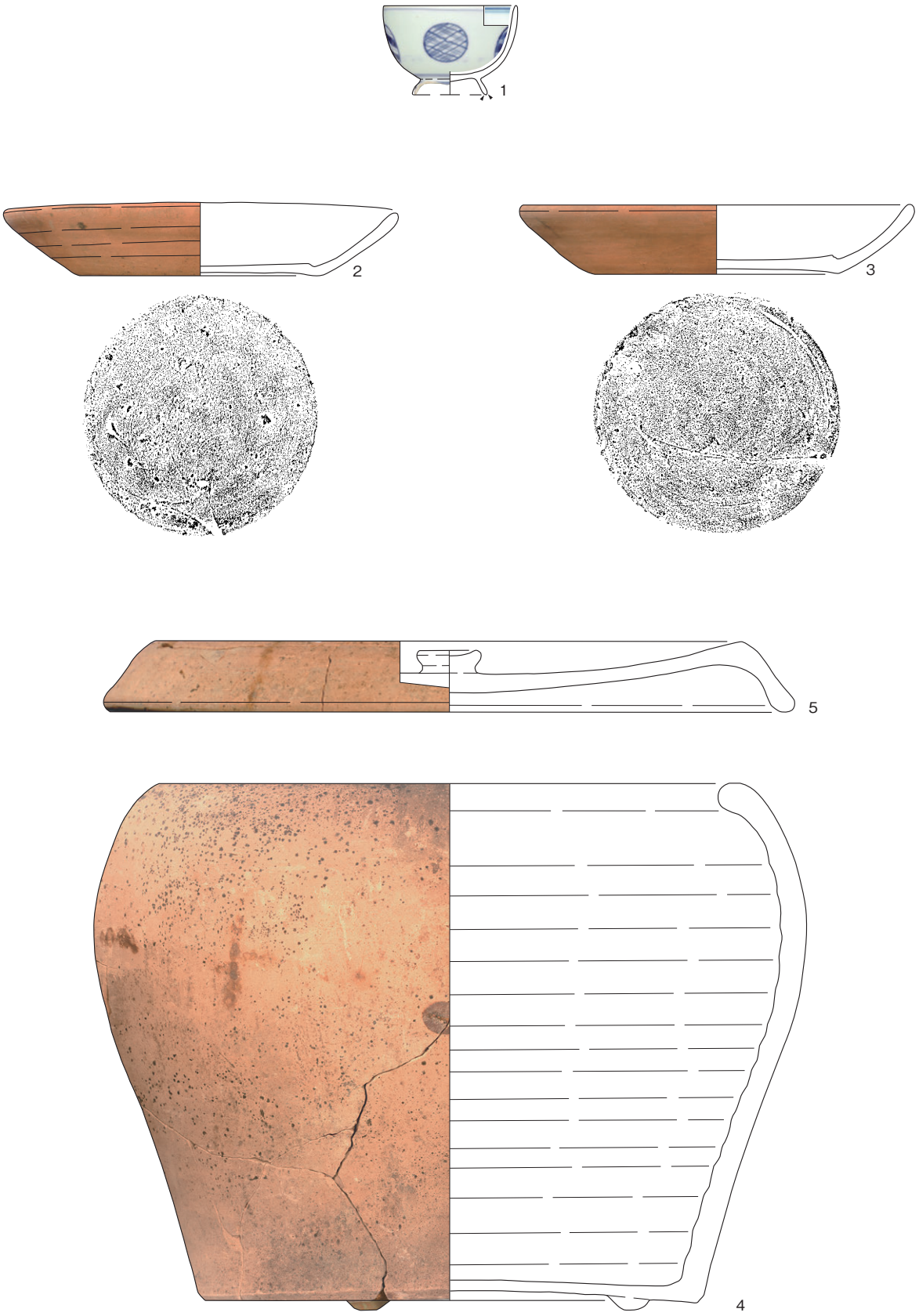
ST8



ST13

ST9

Ⅳ-２図　ST8、ST9、ST13 出土遺物



Ⅳ-３図　ST22 出土遺物

1（1/8）

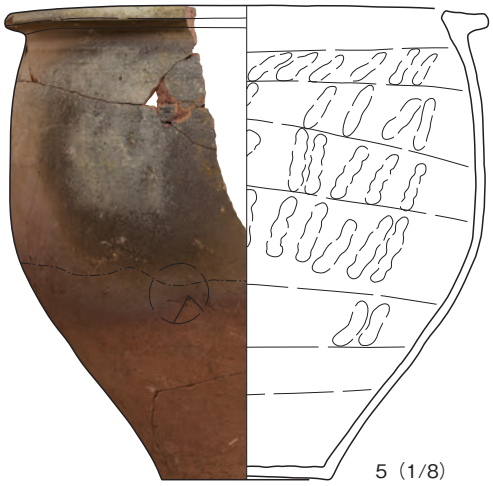
甕棺a

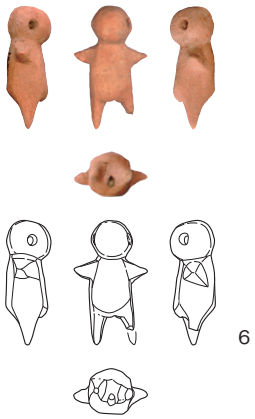
2（1/8）

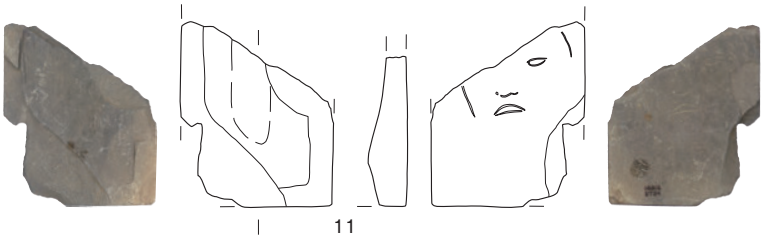
甕棺b

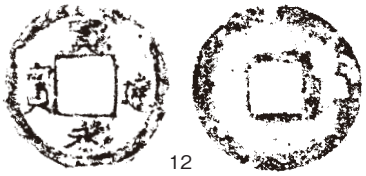
Ⅳ-４図　ST24（1）出土遺物

Ⅳ-５図　ST24（2）出土遺物

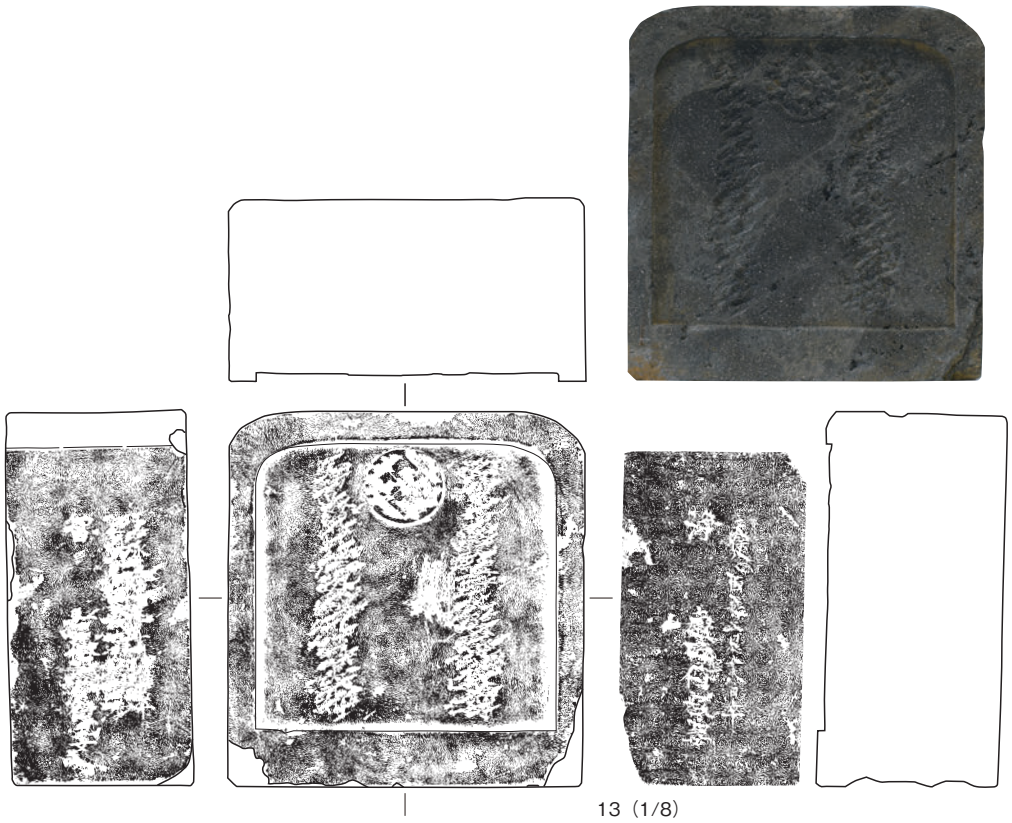




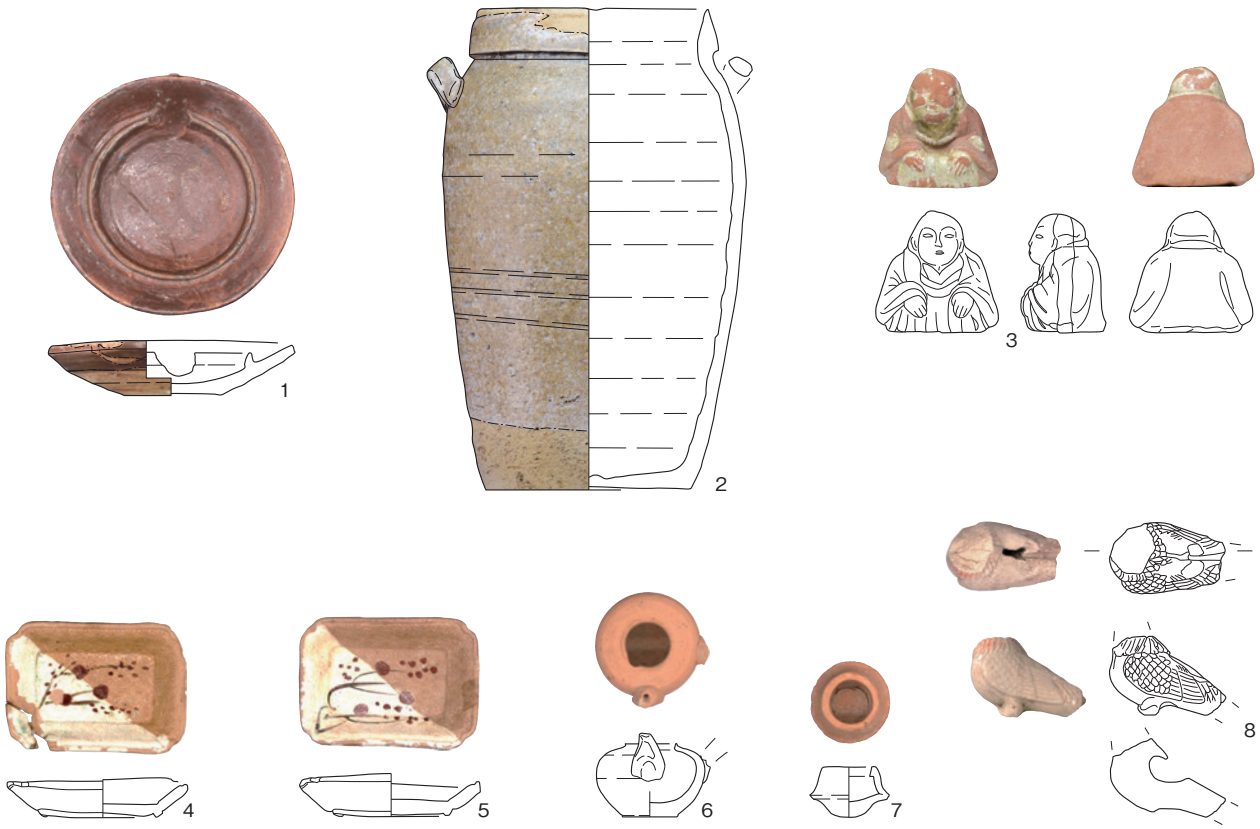




Ⅳ-６図　ST24（3）出土遺物

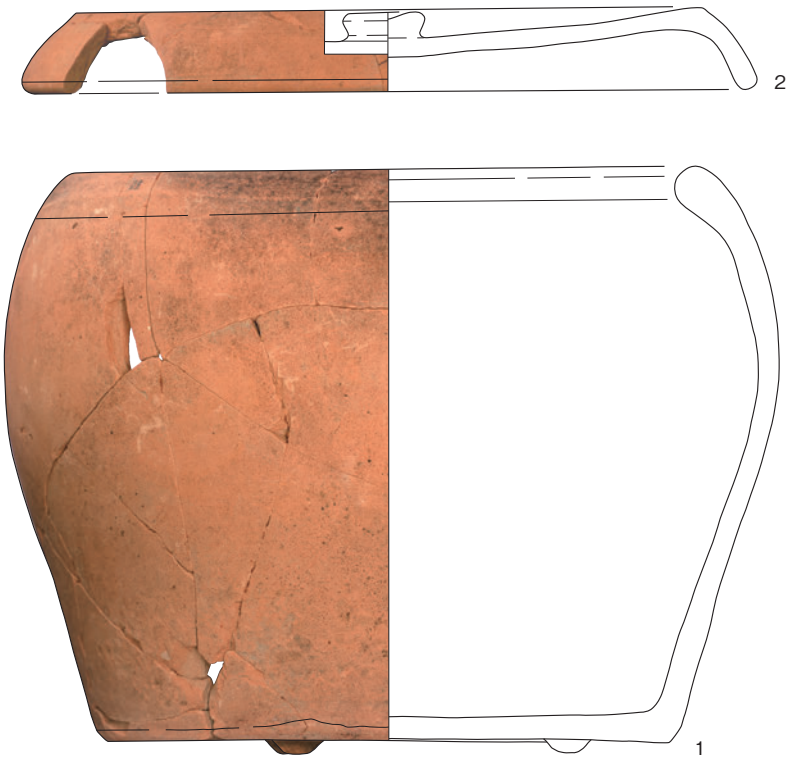


ST24（4）

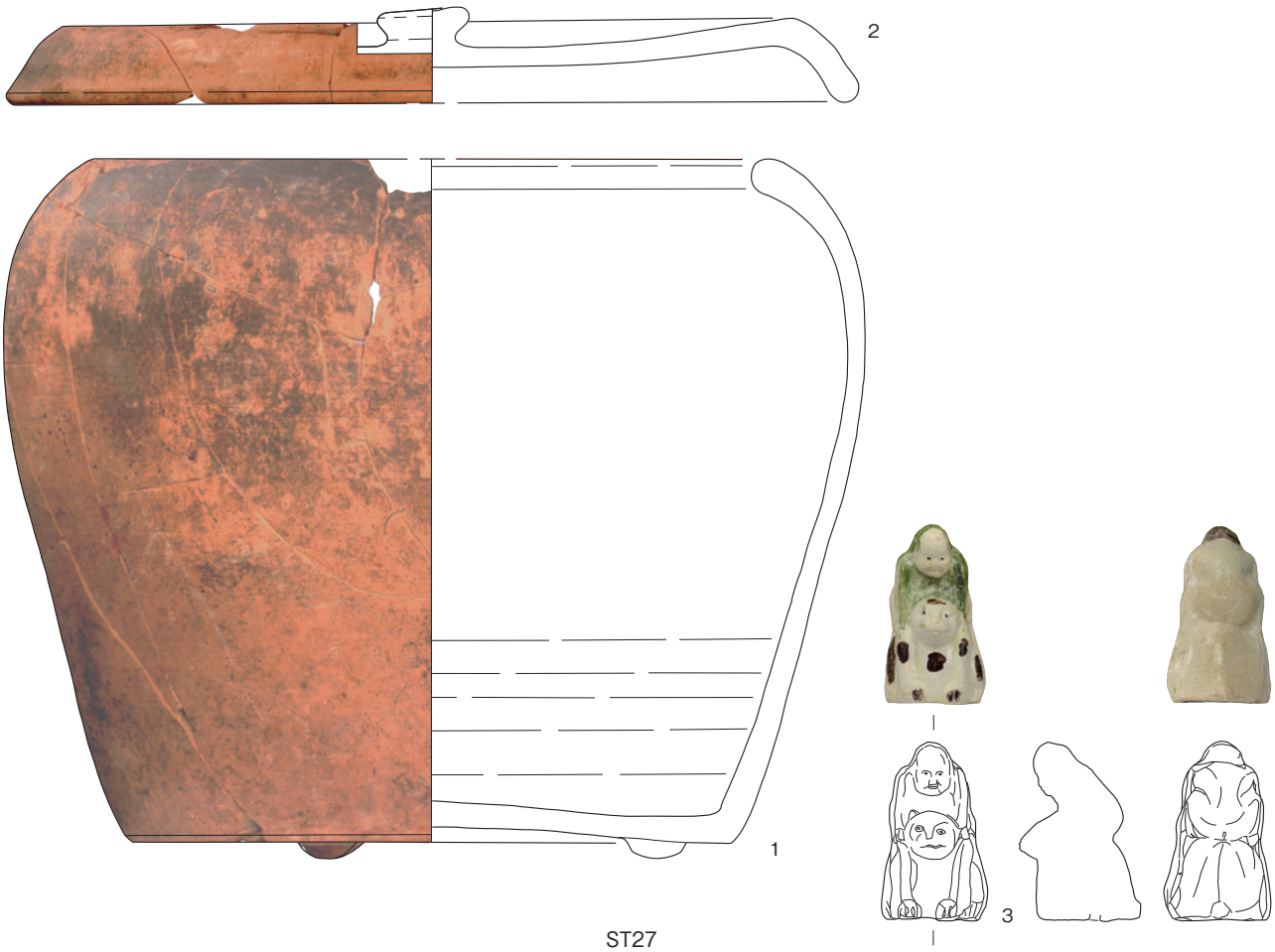


ST25

Ⅳ-7図　ST24（4）、ST25 出土遺物

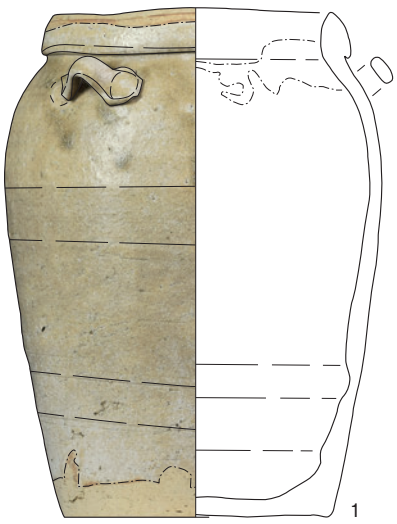


ST26



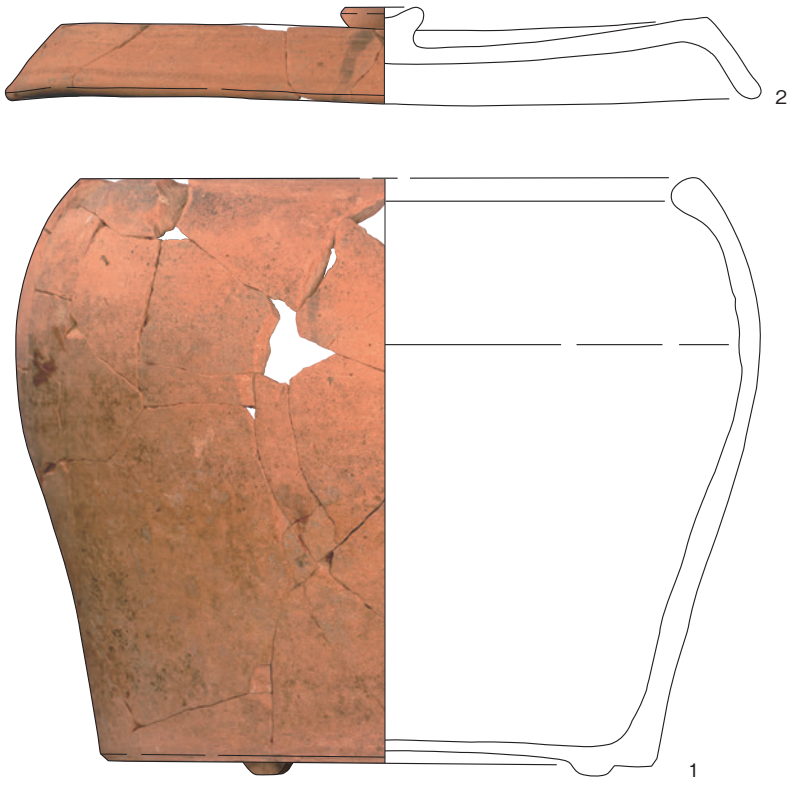
ST27

Ⅳ-８図　ST26、ST27 出土遺物



ST31

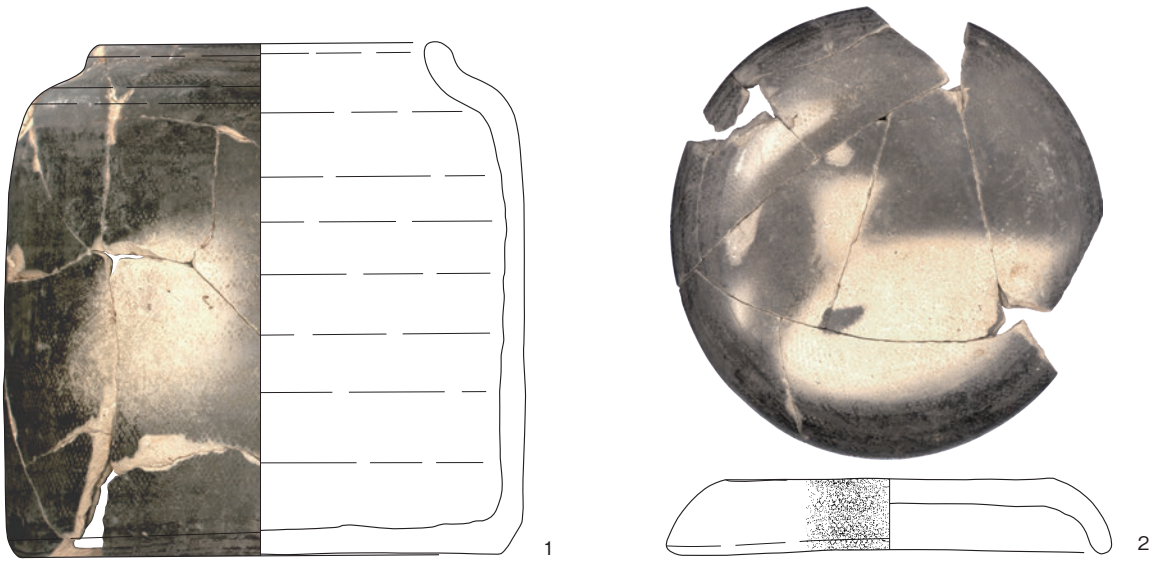
ST34



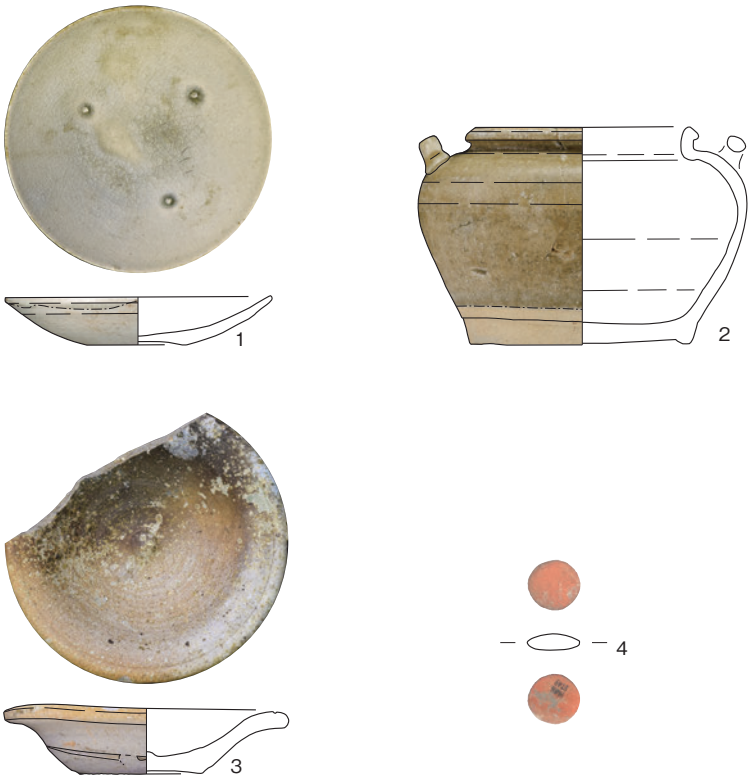
ST36

ST39

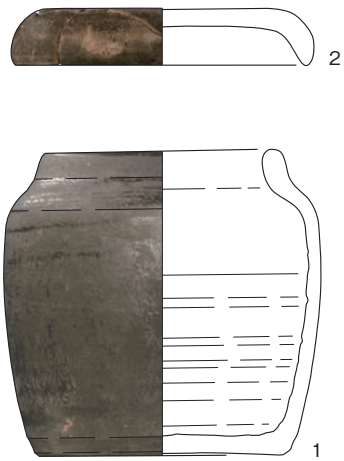
Ⅳ-９図　ST31、ST34、ST36、ST39 出土遺物



ST40

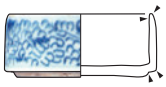


ST49

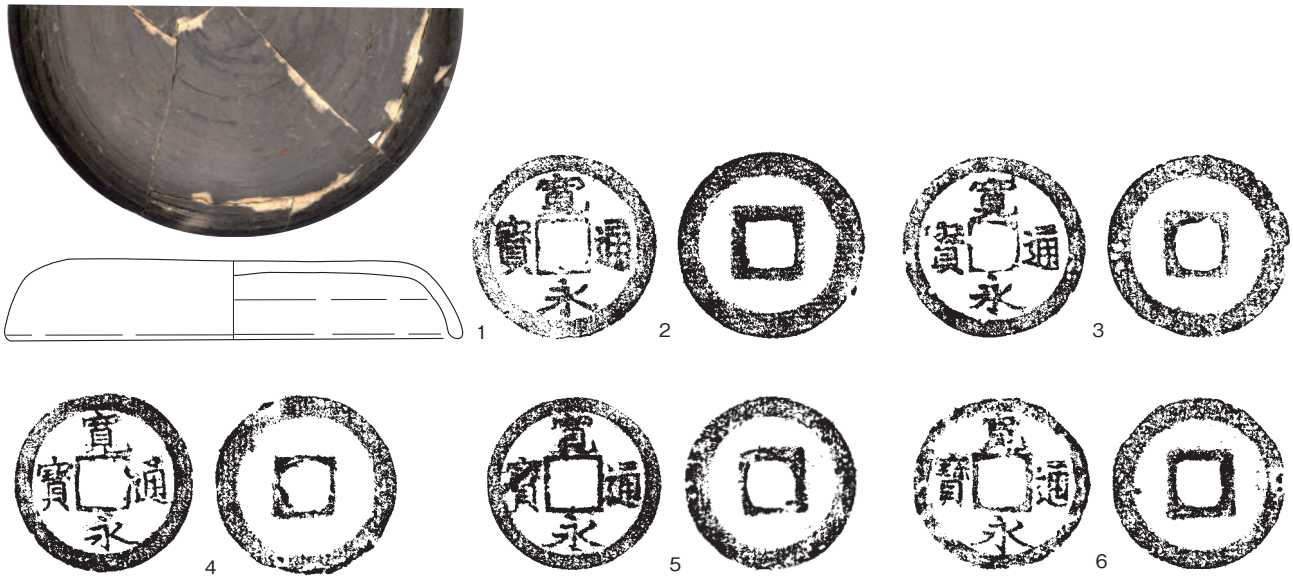


ST50

Ⅳ-10 図　ST40、ST49、ST50 出土遺物



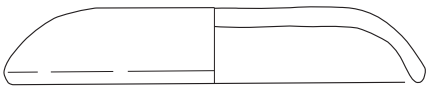
ST51



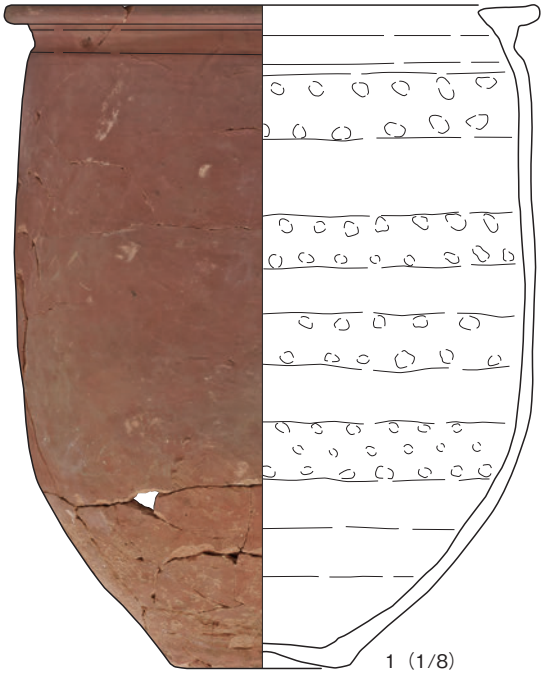
ST52

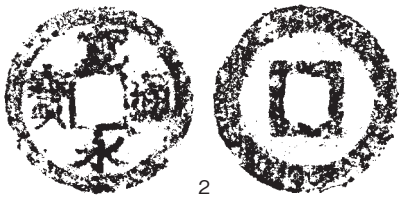
Ⅳ-11 図　ST51、ST52 出土遺物

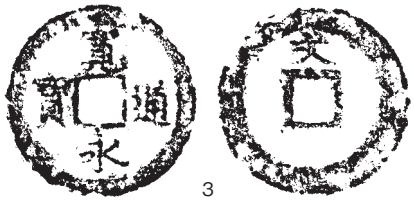
Ⅳ-12 図　ST61、SK70（1）出土遺物



SK70（2）

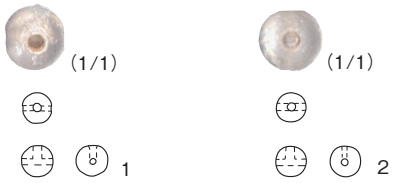




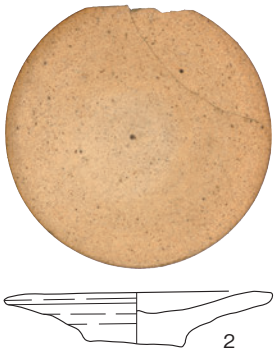


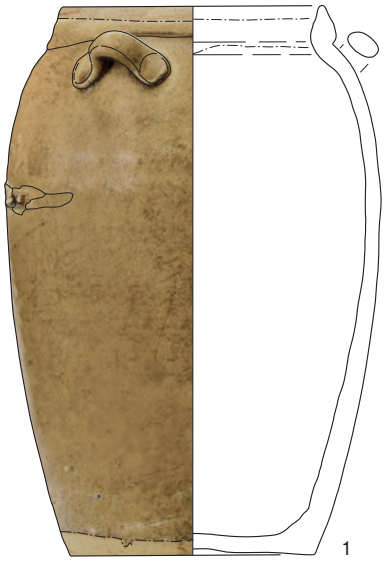
ST72

Ⅳ-13 図　SK70（2）、ST72 出土遺物

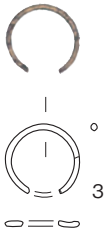


ST76

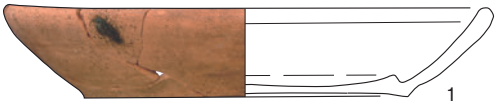




ST83

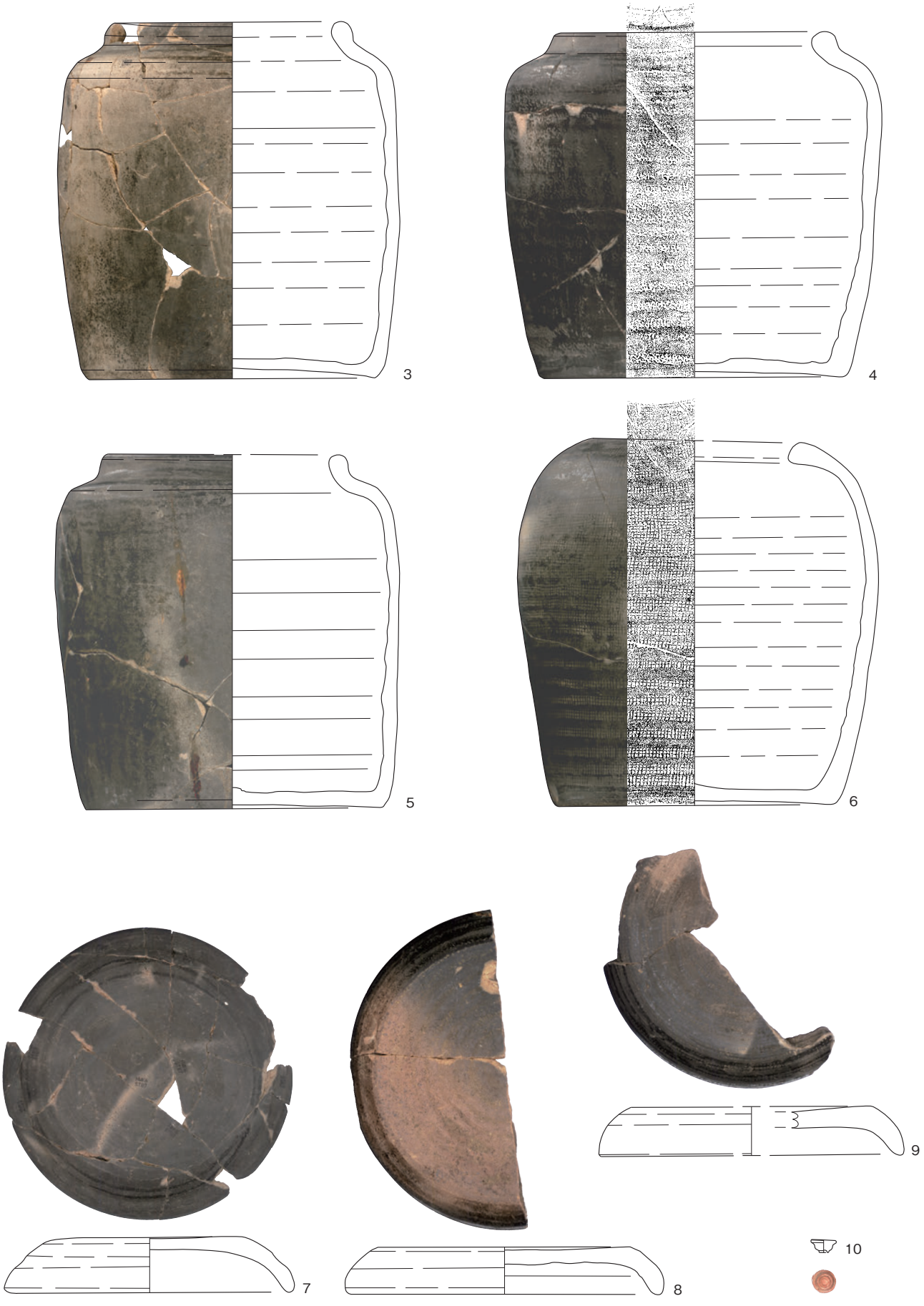


ST85

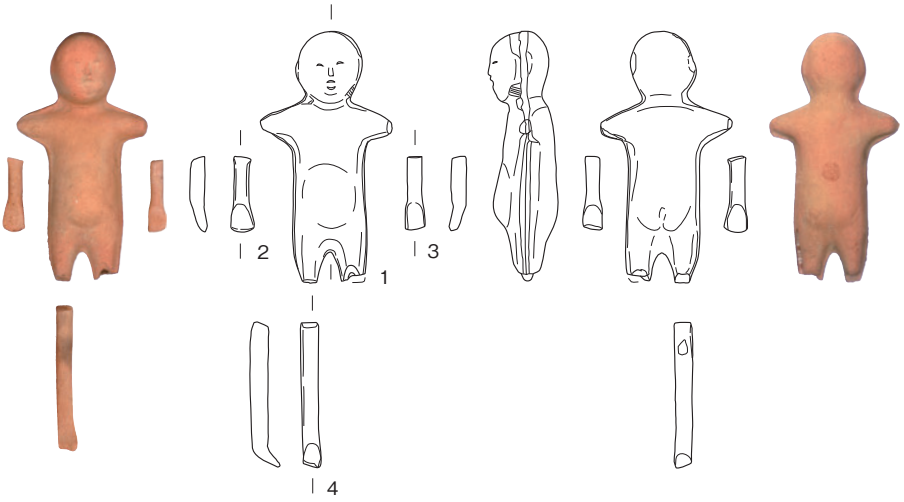


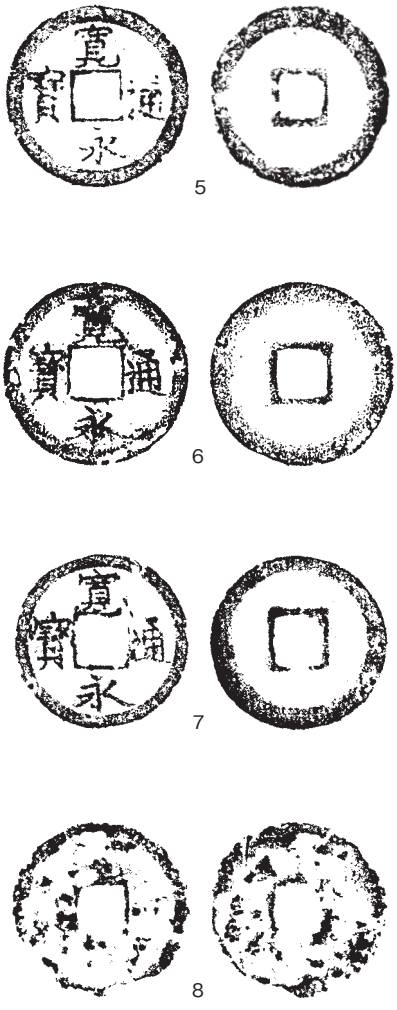
ST87（1）

Ⅳ-14 図　ST76、ST83、ST85、ST87（1）出土遺物



Ⅳ-15 図　ST87（2）出土遺物



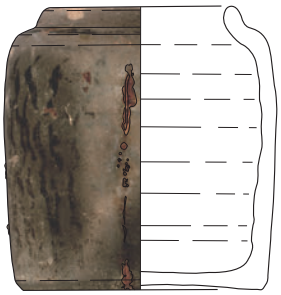


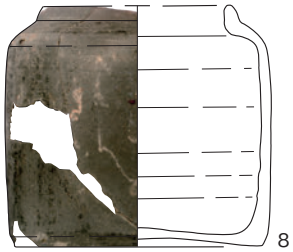
ST88

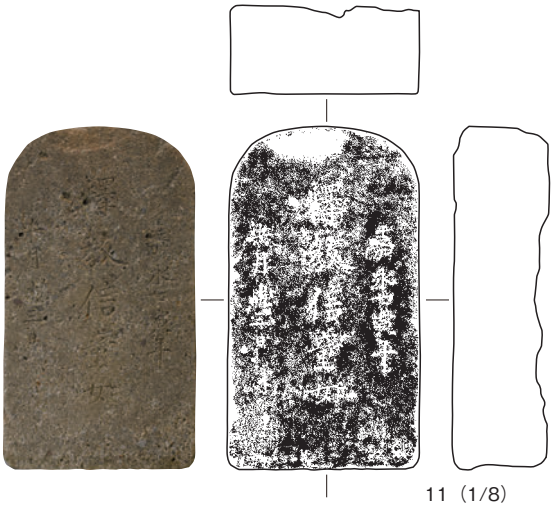
ST90

Ⅳ-16 図　ST88、ST90 出土遺物

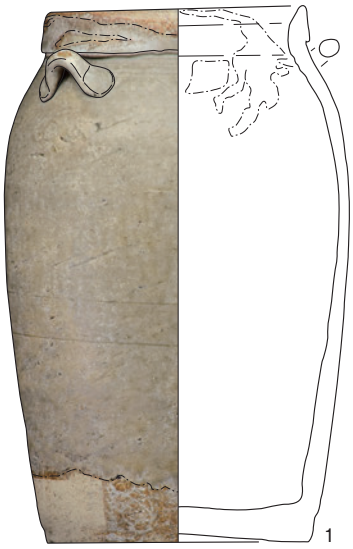
Ⅳ-17 図　ST97（1）出土遺物





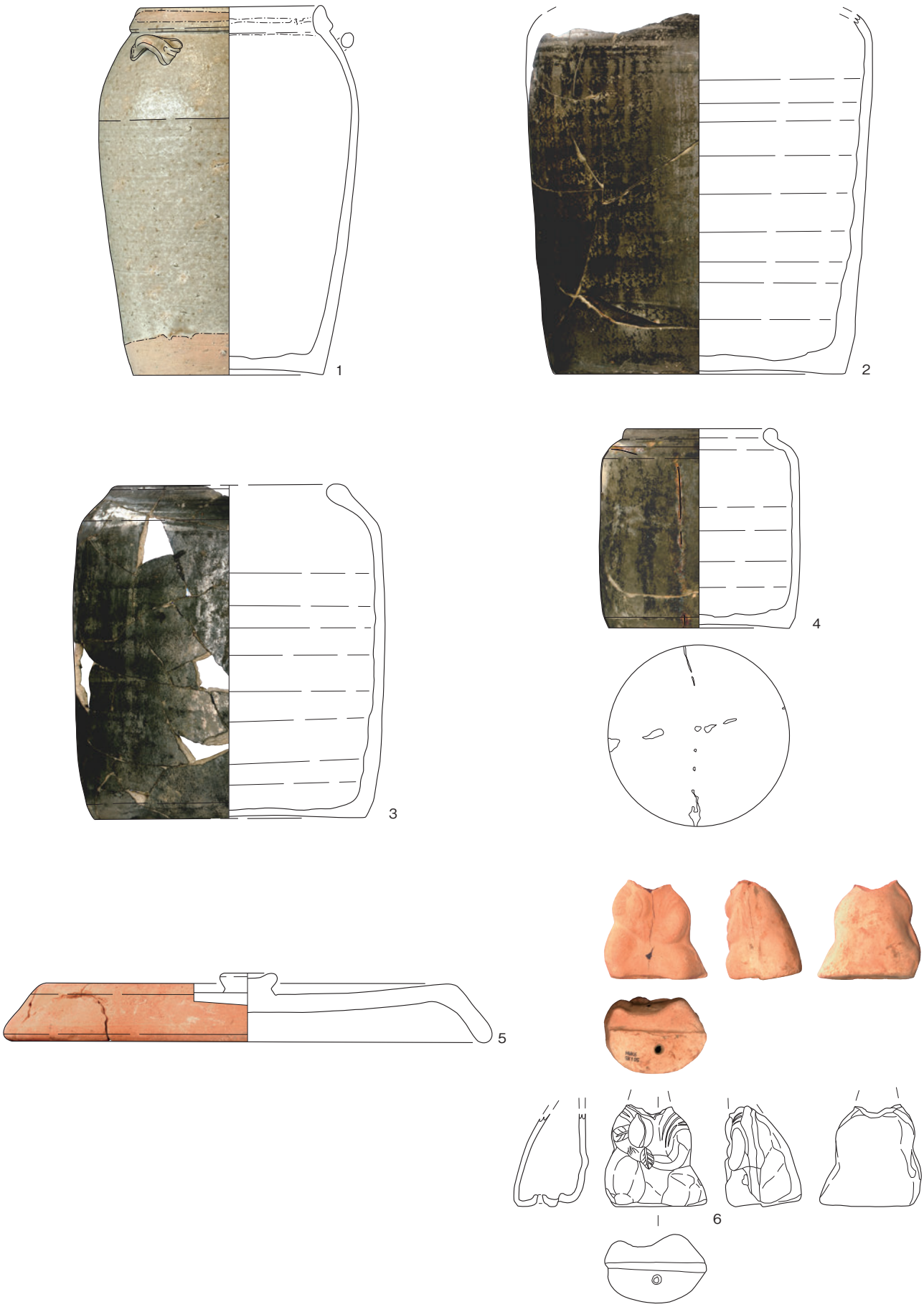


ST97（2）

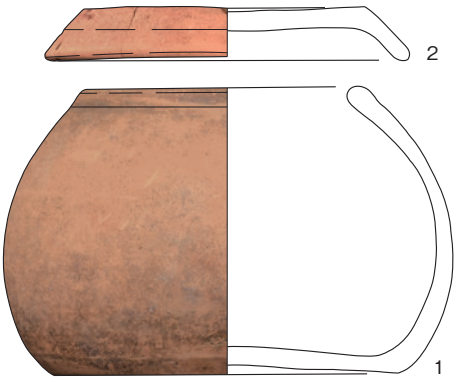


ST98

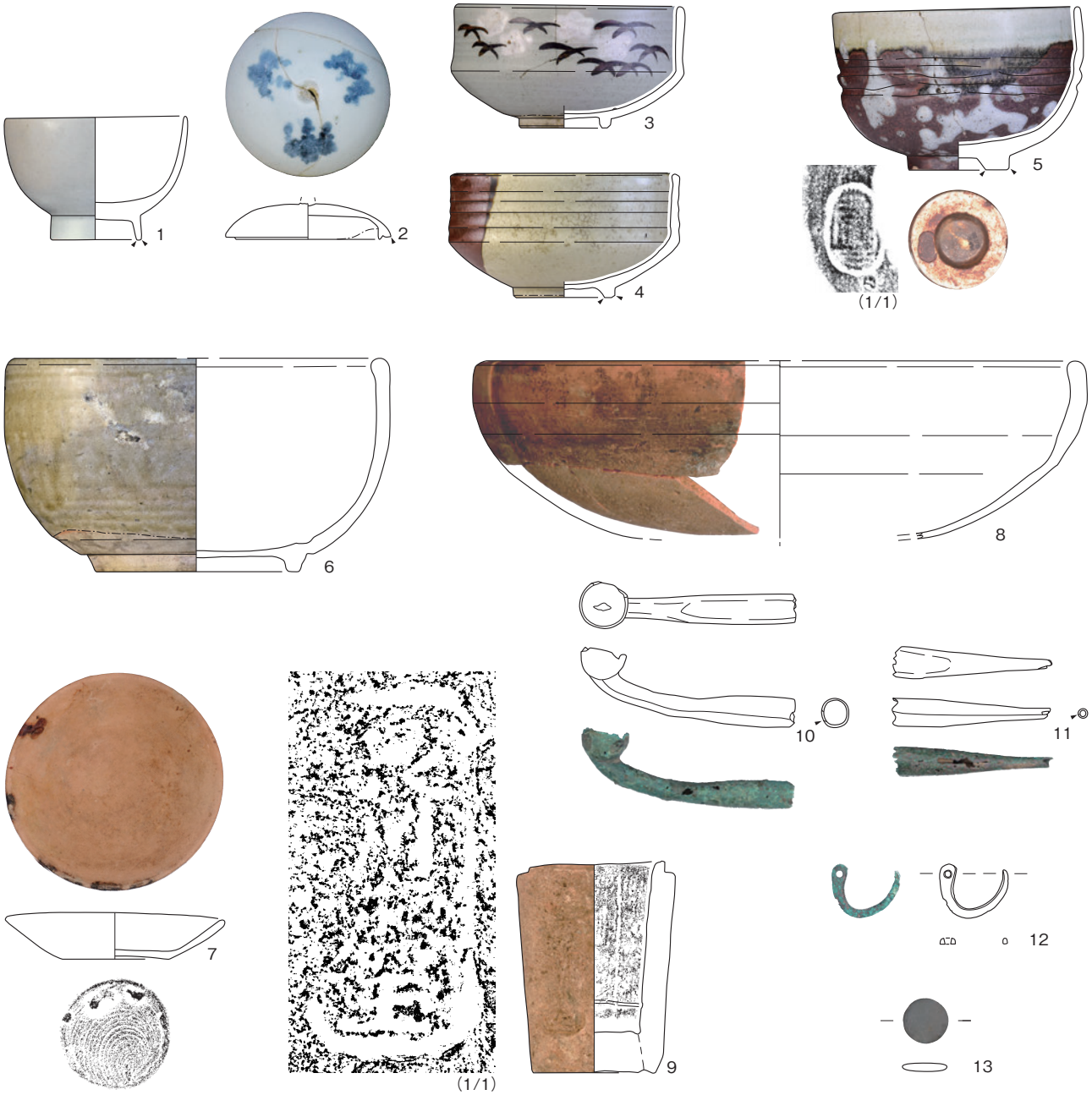
Ⅳ-18 図　ST97（2）、ST98 出土遺物



Ⅳ-19 図　SK105 出土遺物



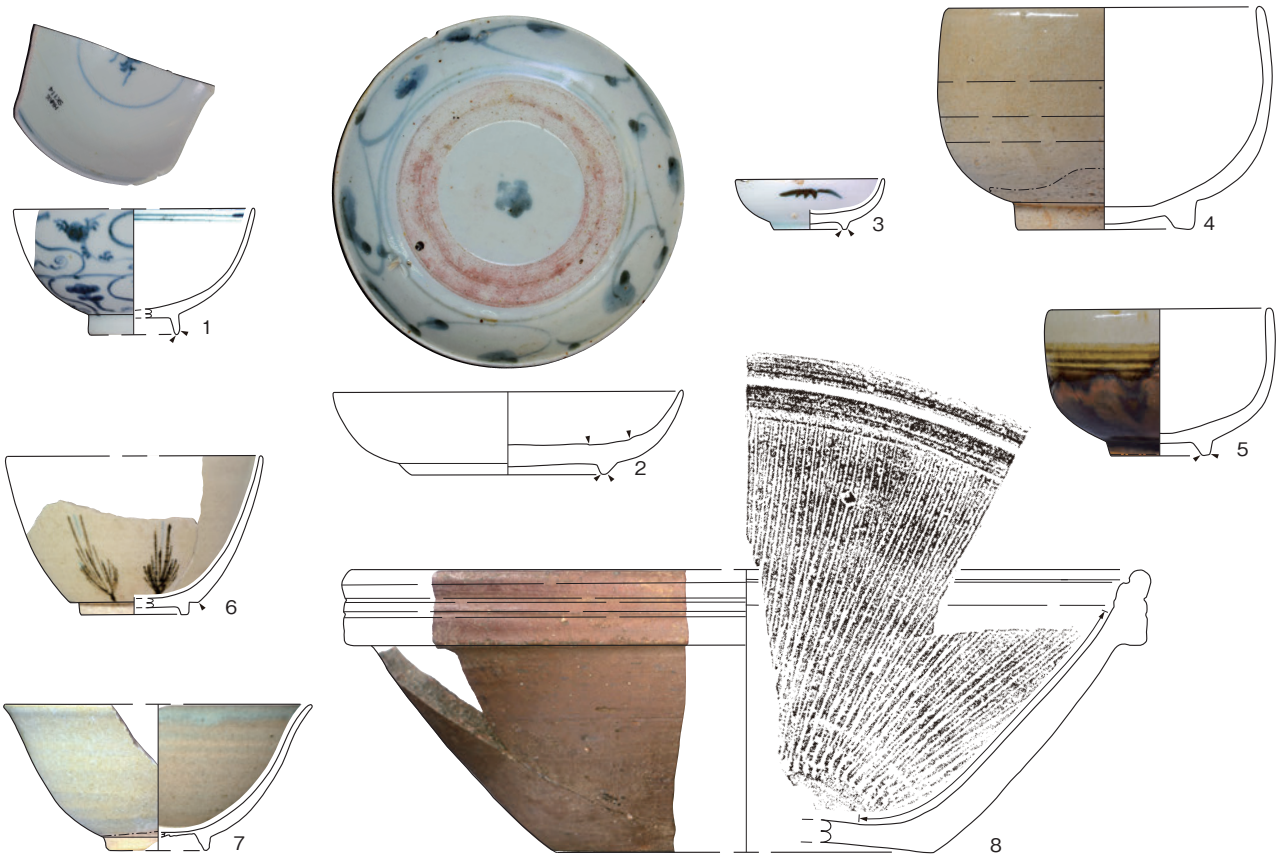
ST106



Ⅳ-20 図　ST106、SU108 出土遺物

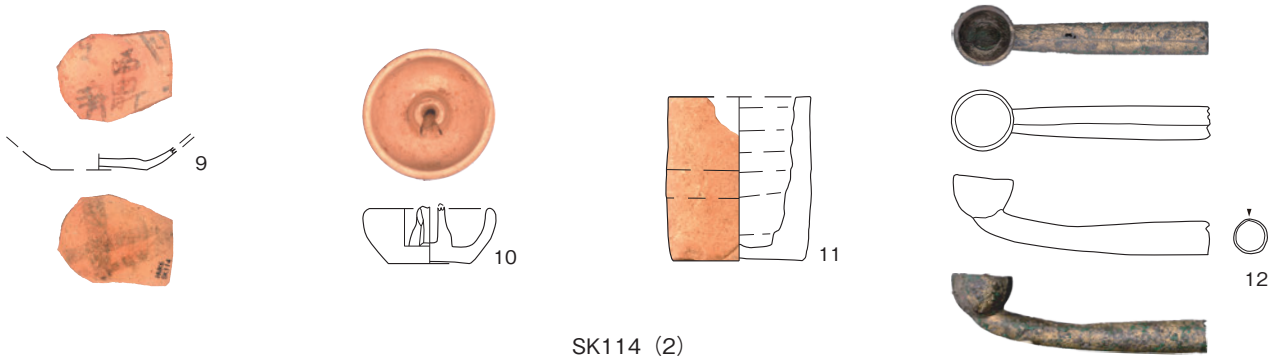
Ⅳ-21 図　SK110（1）出土遺物

SK110（2）

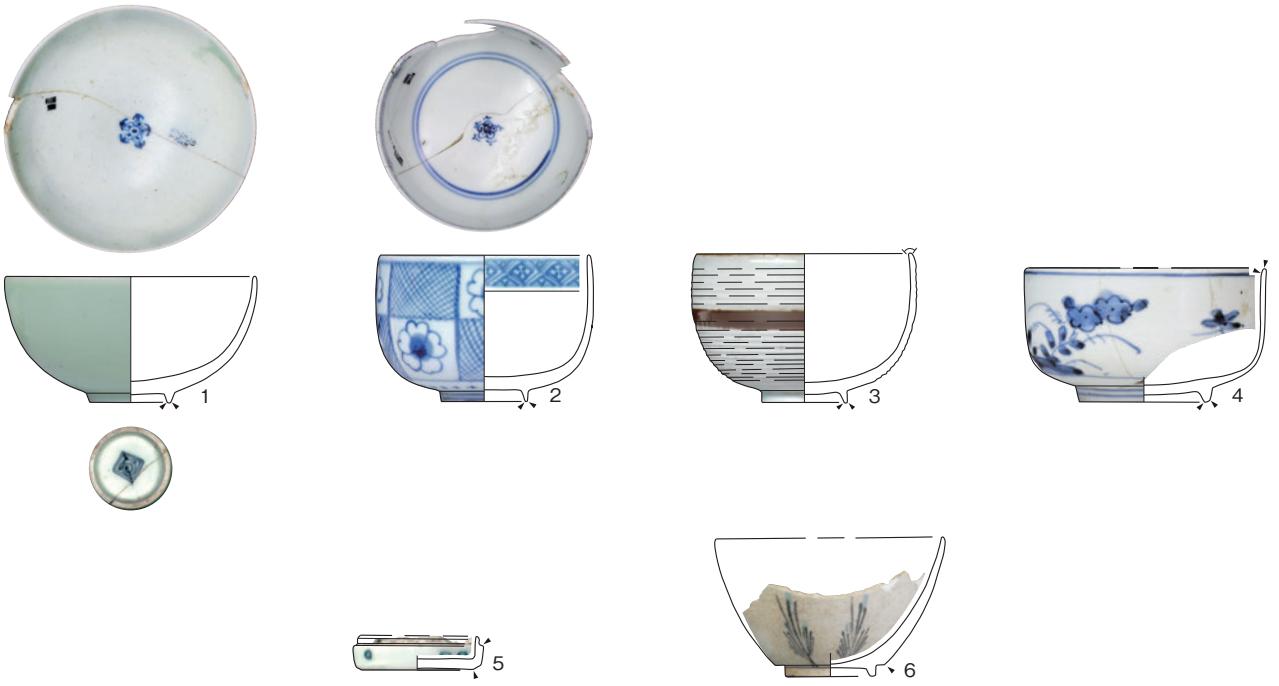


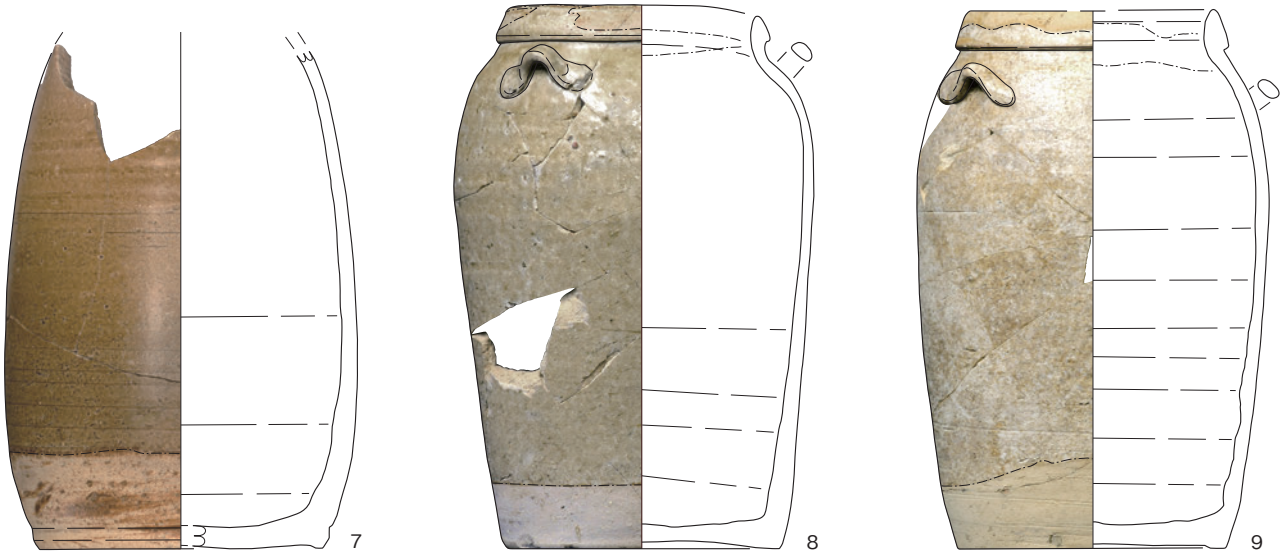
SK114（1）

Ⅳ-22 図　SK110（2）、SK114（1）出土遺物



SK114（2）





SK110・SK114（1）

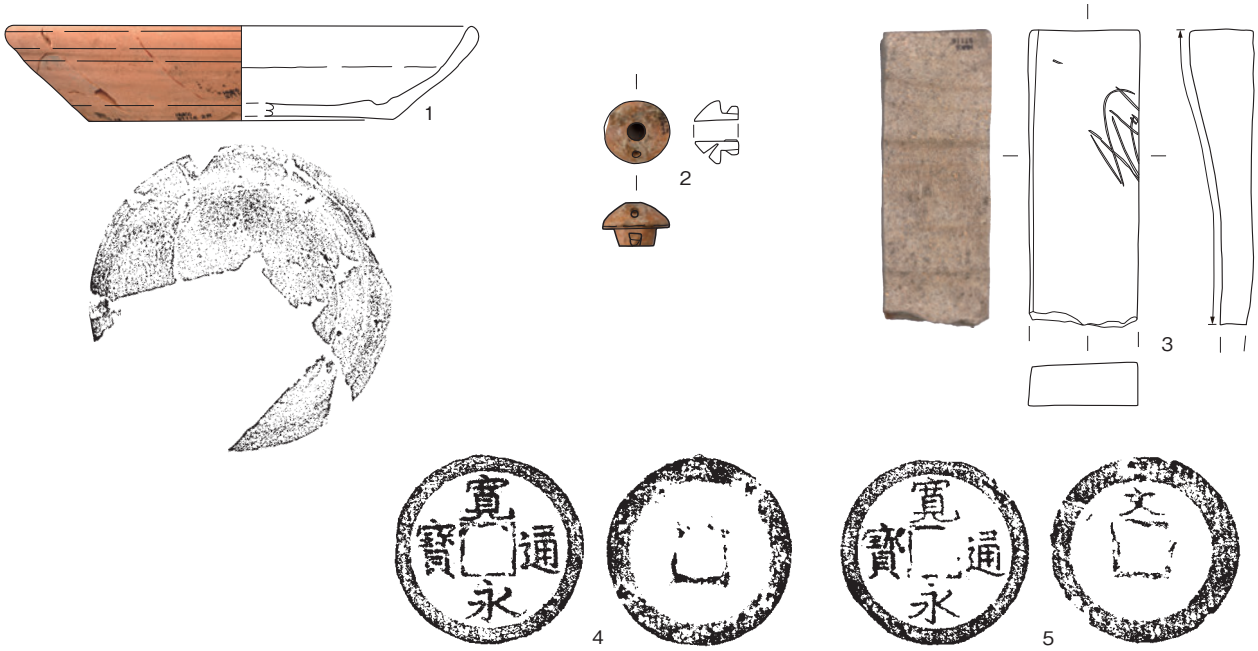
Ⅳ-23図　SK114（2）、SK110・SK114（1）出土遺物

Ⅳ-24 図　SK110・SK114（2）出土遺物

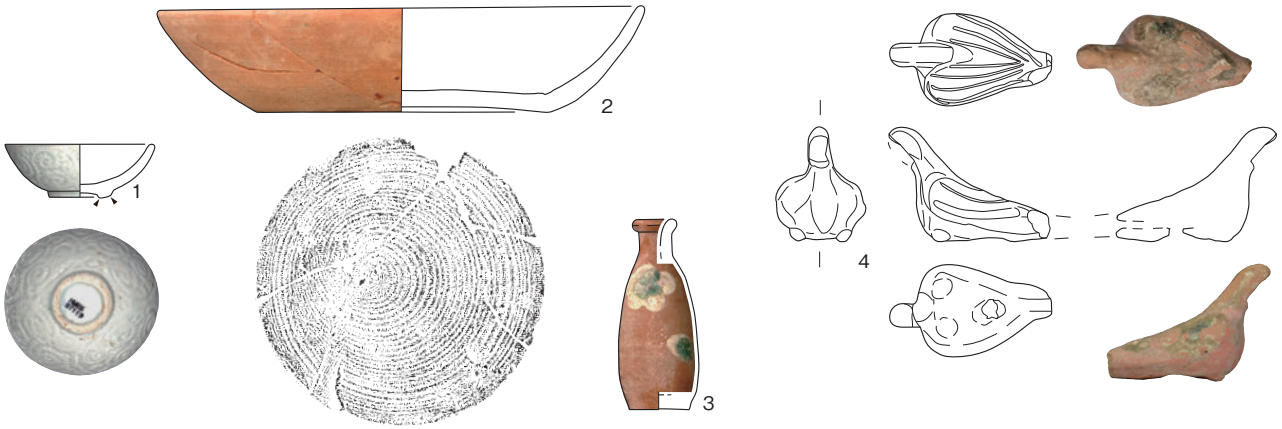
SK110・SK114（3）

Ⅳ-25 図　SK110・SK114（3）、ST111、ST113 出土遺物

ST115

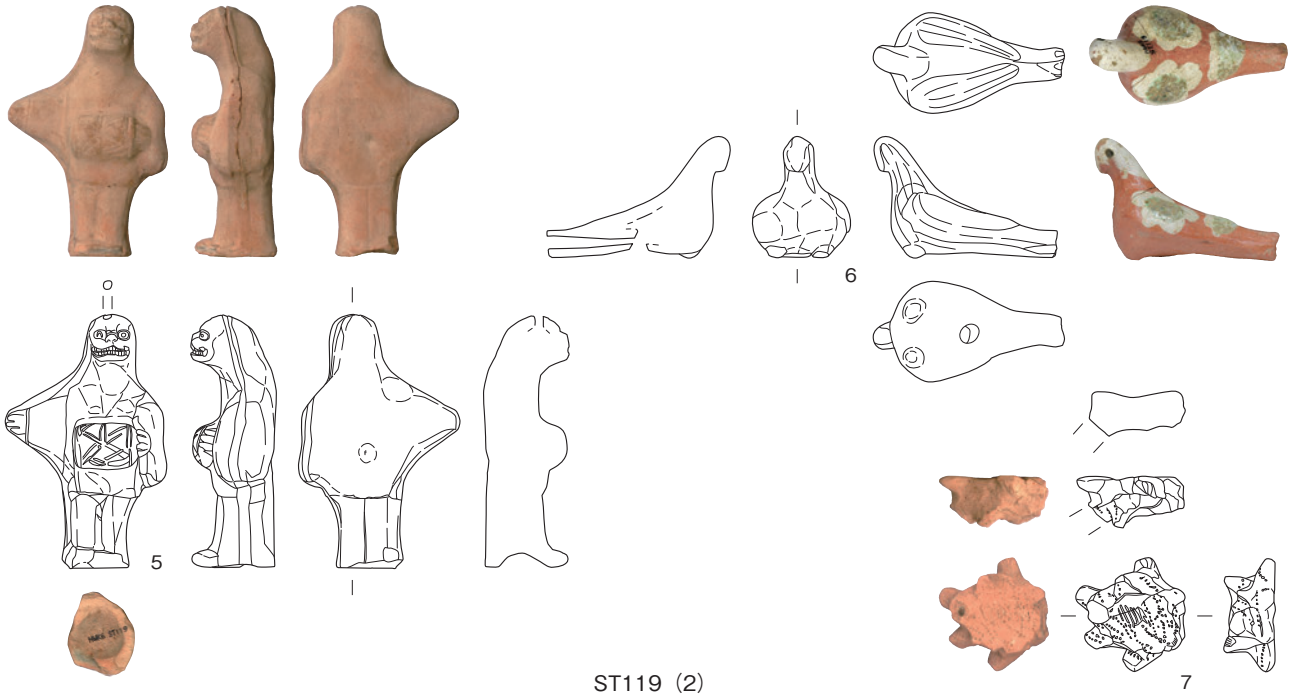


ST116

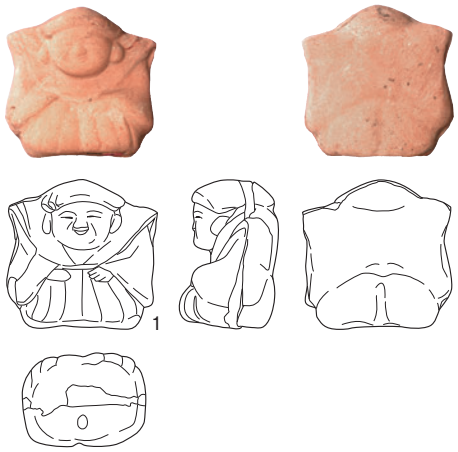


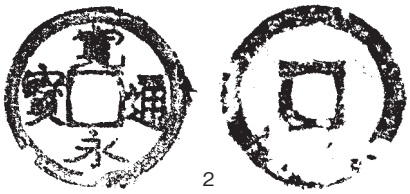
ST119（1）

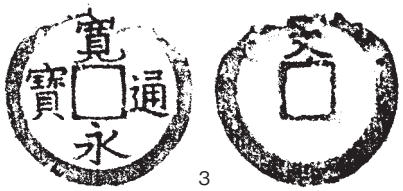
Ⅳ-26図　ST115、ST116、ST119（1）出土遺物

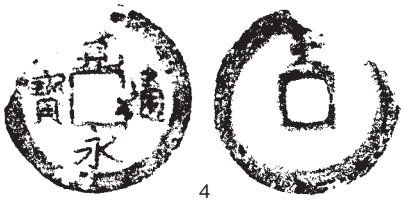


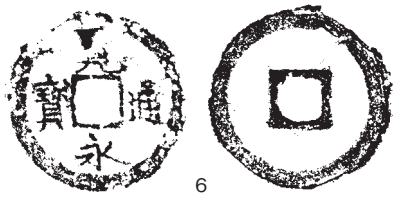
Ⅳ-27 図　ST119（2）、SK123 出土遺物



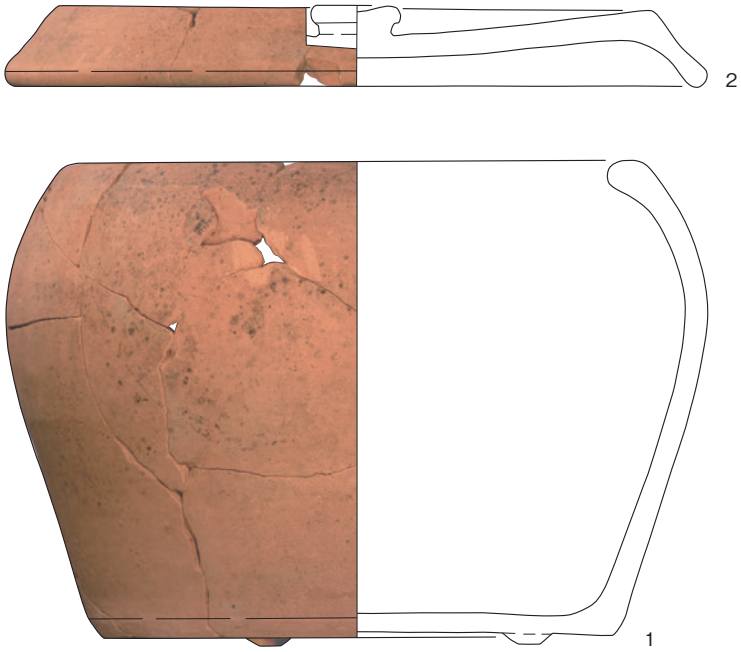




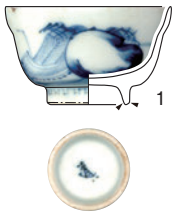




ST125



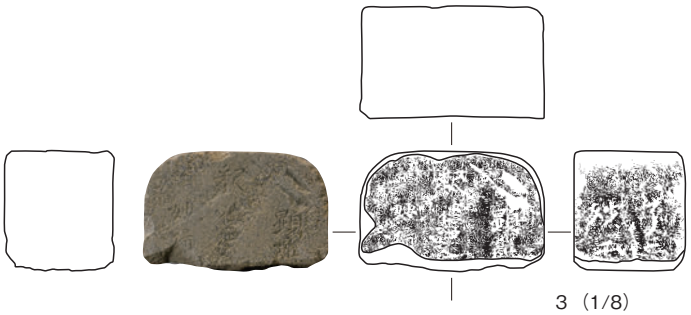
ST128

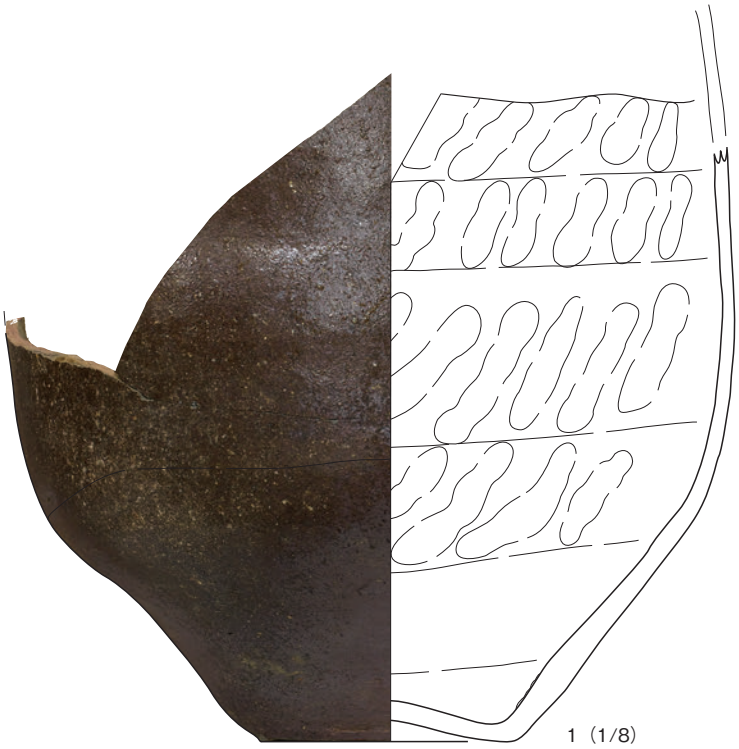


ST129（1）

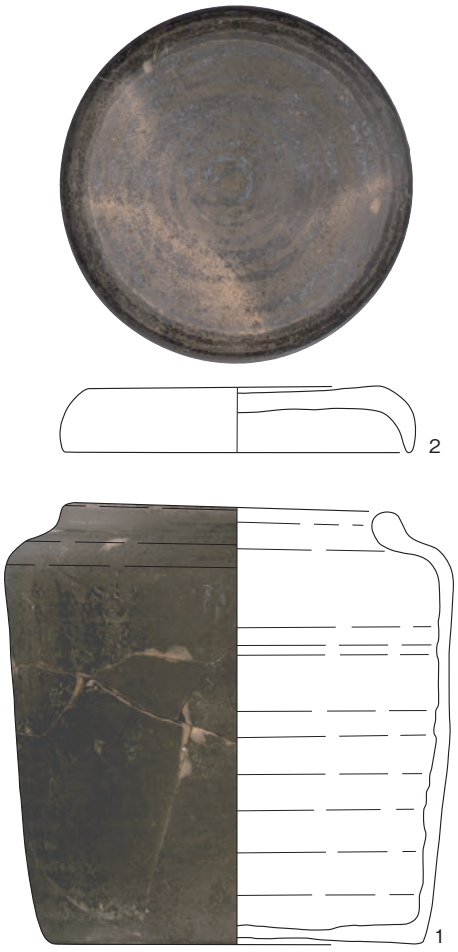
Ⅳ-28 図　ST125、ST128、ST129（1）出土遺物

ST129（2）





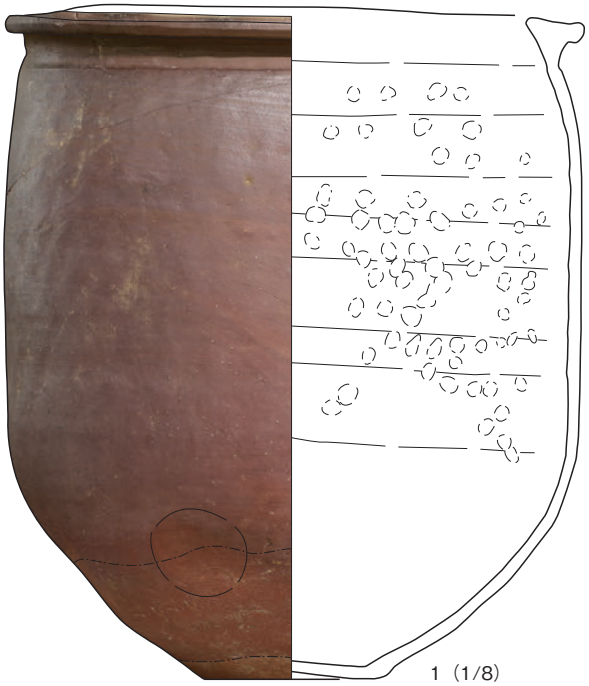
ST133



ST131

Ⅳ-29 図　ST129（2）、ST131、ST133 出土遺物

2



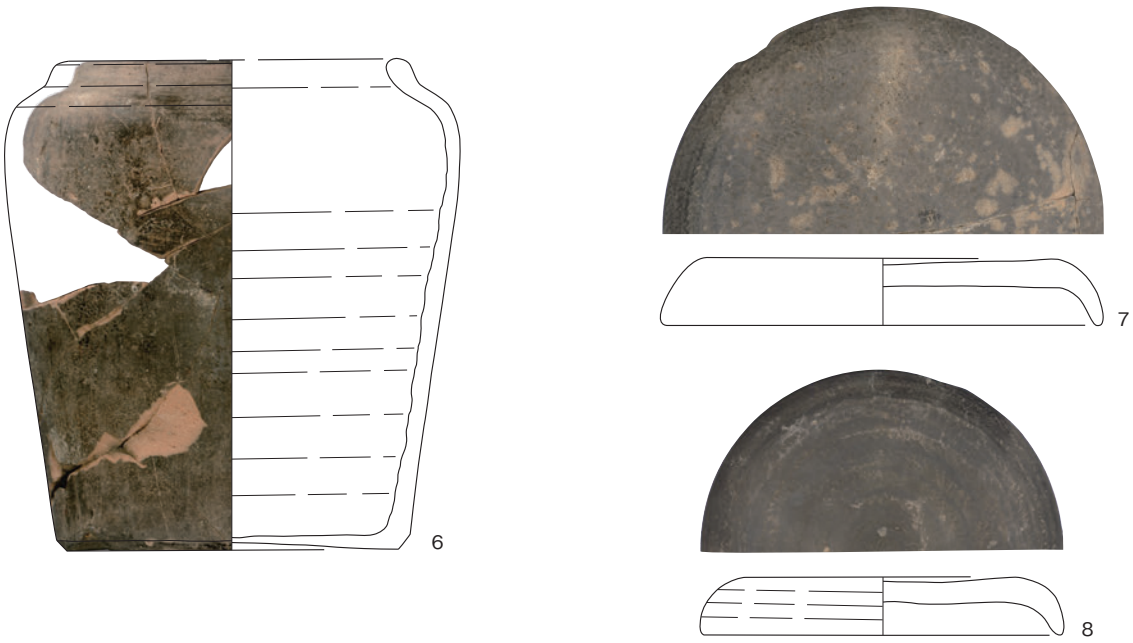
1（1/8）

3

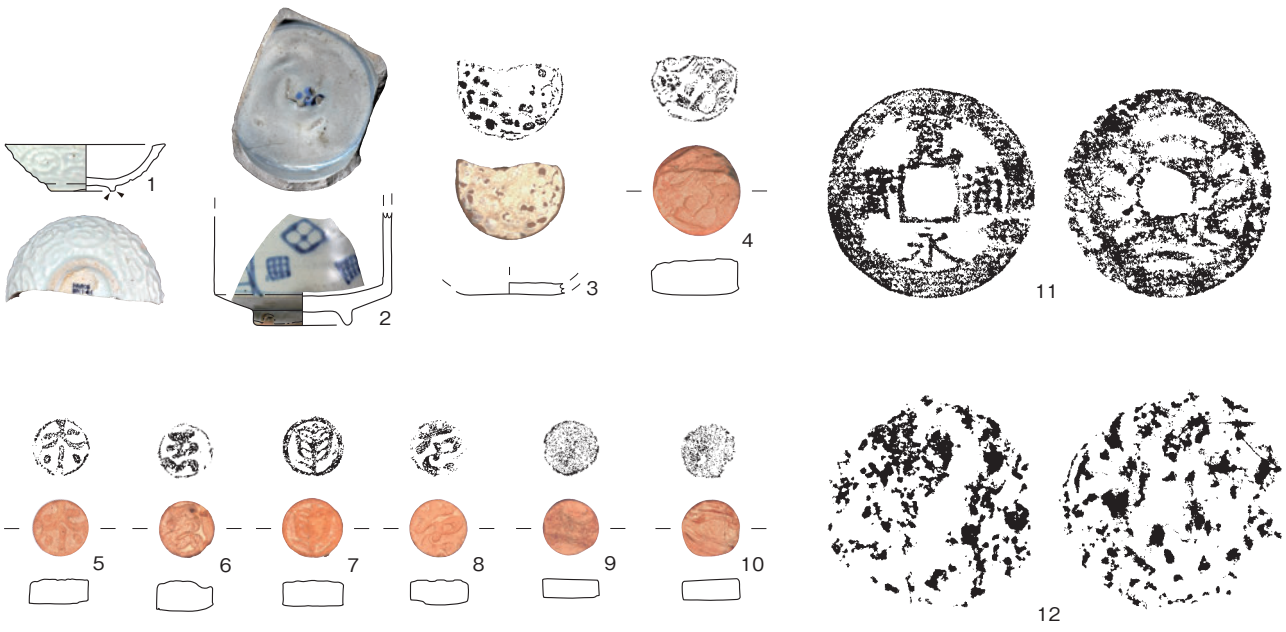
5

4

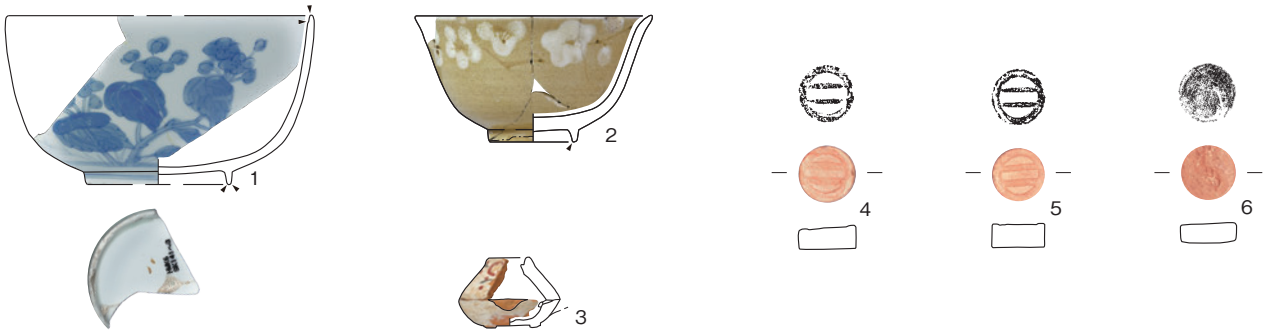
Ⅳ-30 図　ST140（1）出土遺物



ST140（2）



SK141



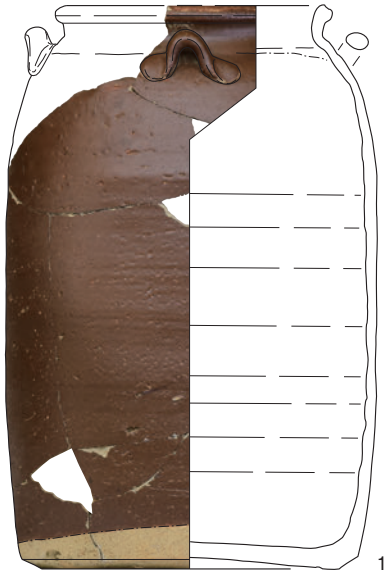
SK141・SK142・SK143

Ⅳ-31 図　ST140（2）、SK141、SK141・SK142・SK143 出土遺物

(1/1)

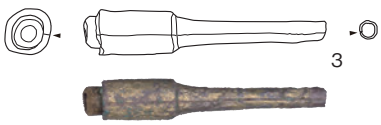
1 (1/8)

ST145



1

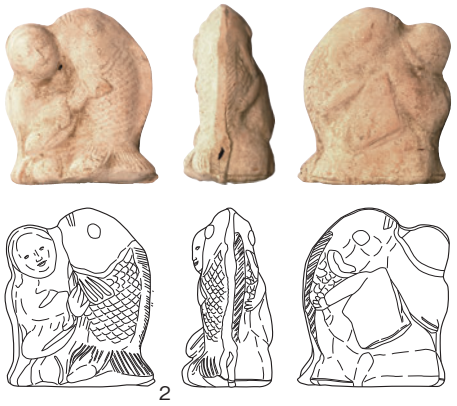
2

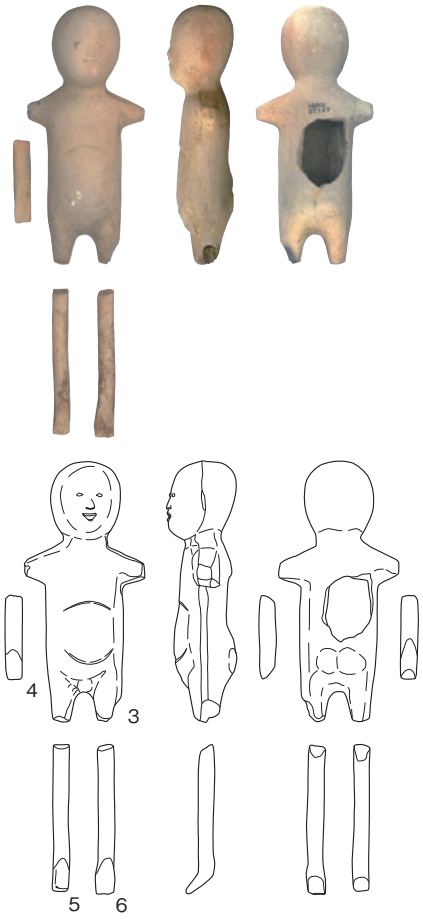


3

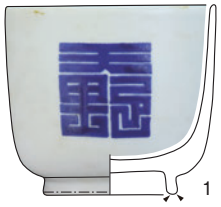
ST146

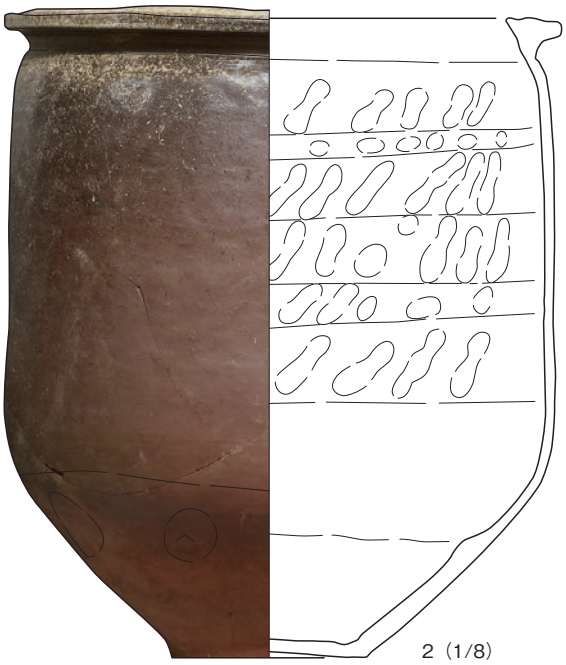
Ⅳ-32 図　ST145、ST146 出土遺物





ST147

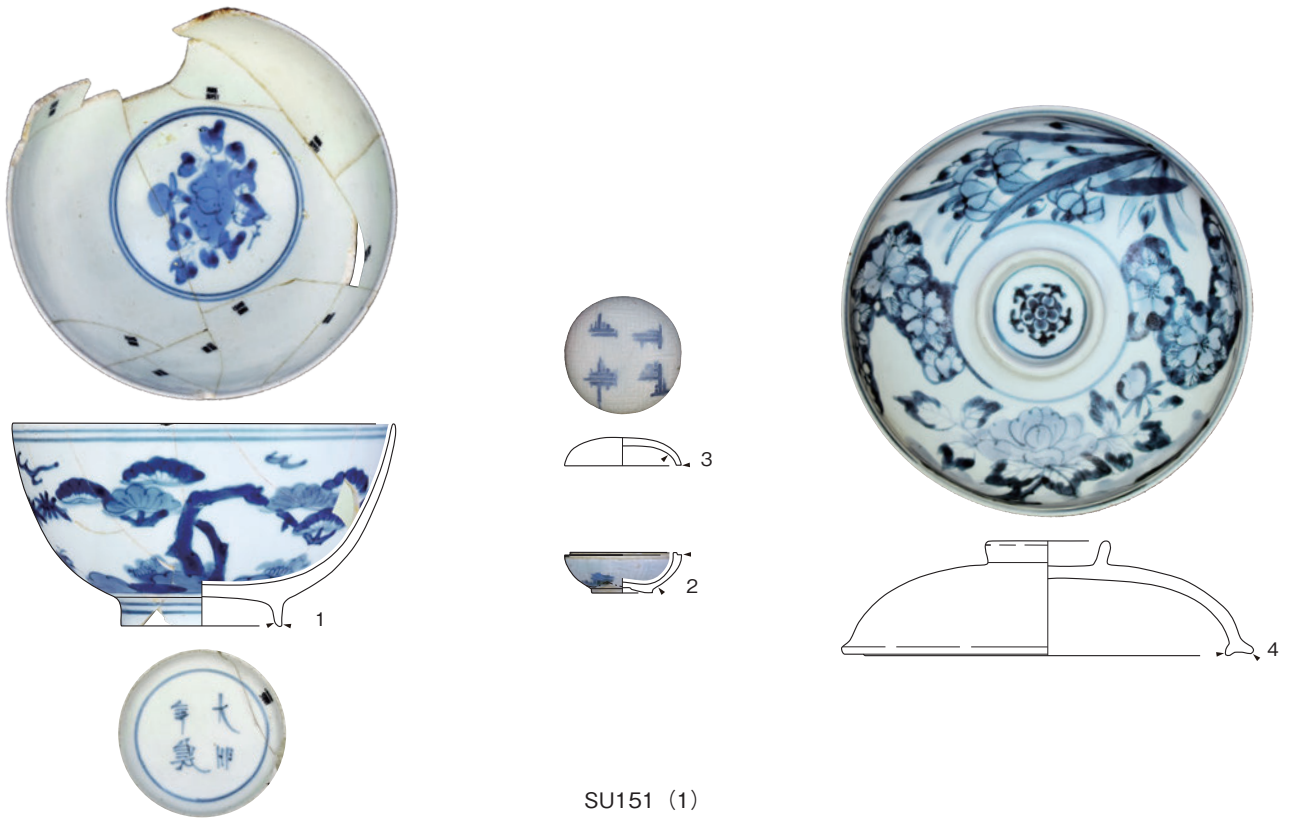




ST149（1）

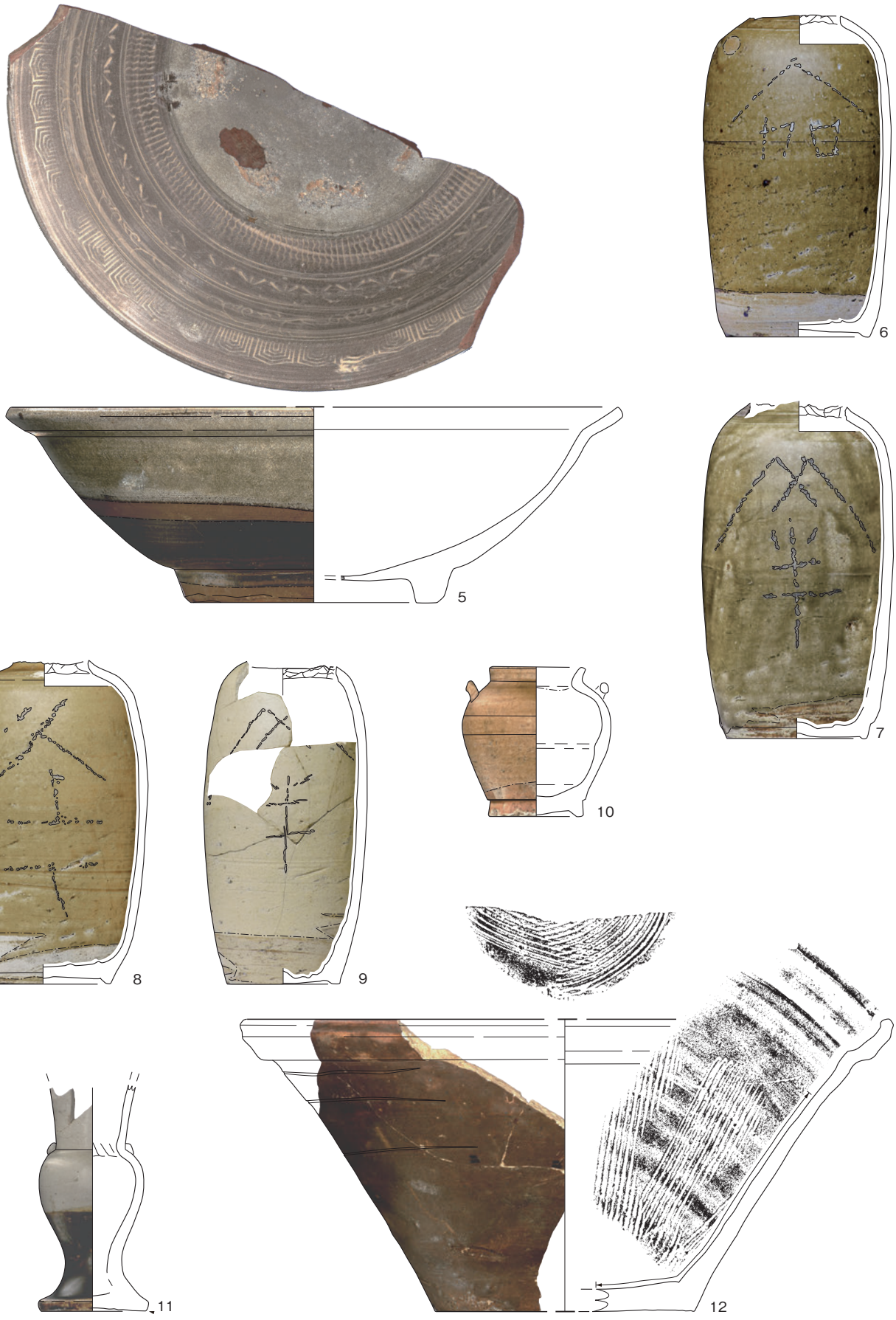
Ⅳ-33図　ST147、ST149（1）出土遺物

ST149（2）



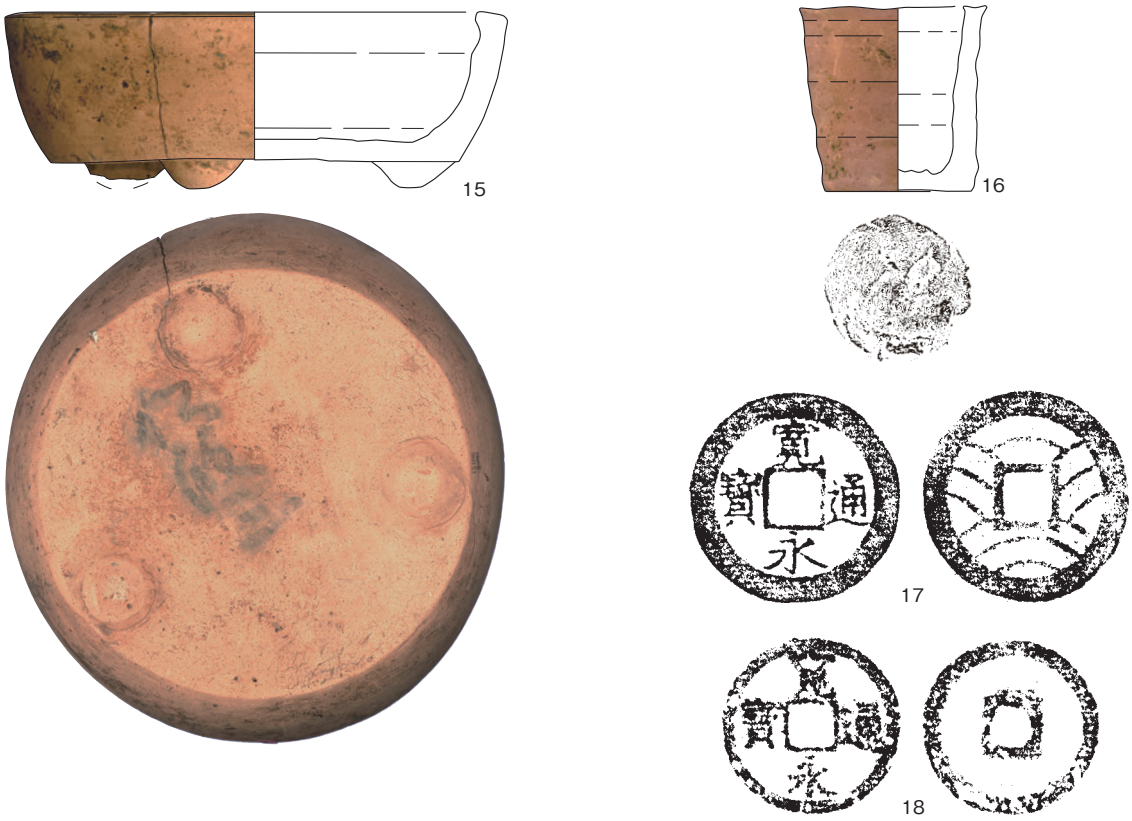
SU151（1）

Ⅳ-34 図　ST149（2）、SU151（1）出土遺物



Ⅳ-35 図　SU151（2）出土遺物

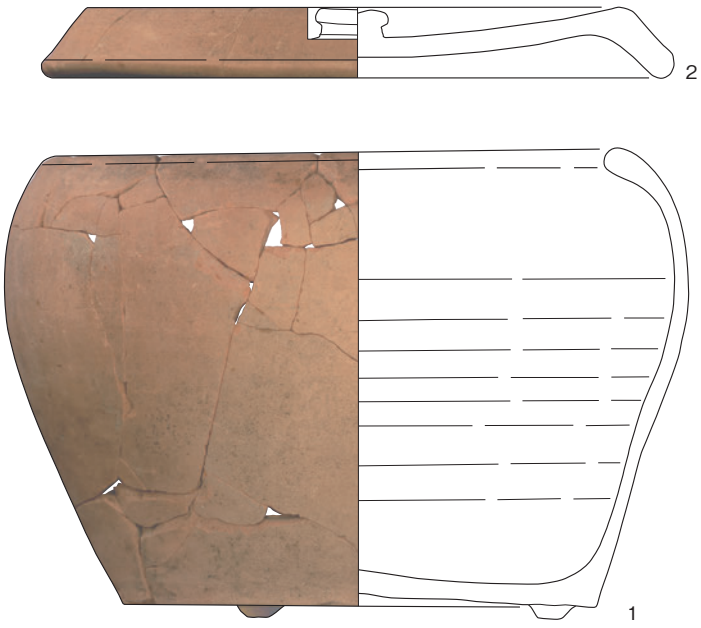
Ⅳ-36 図　SU151（3）出土遺物



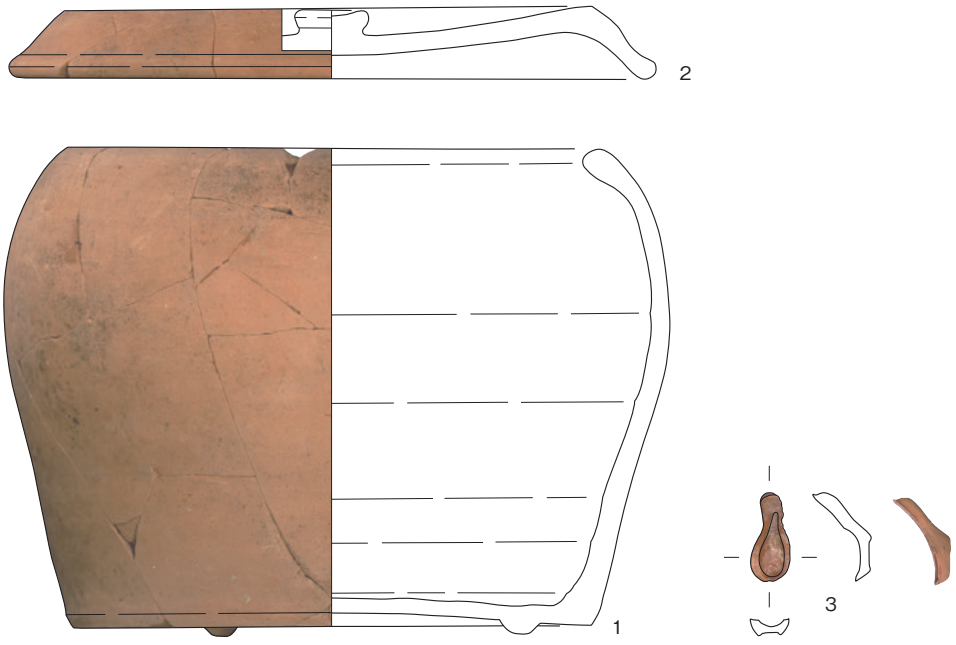
SU151（4）

ST153

Ⅳ-37 図　SU151（4）、ST153 出土遺物

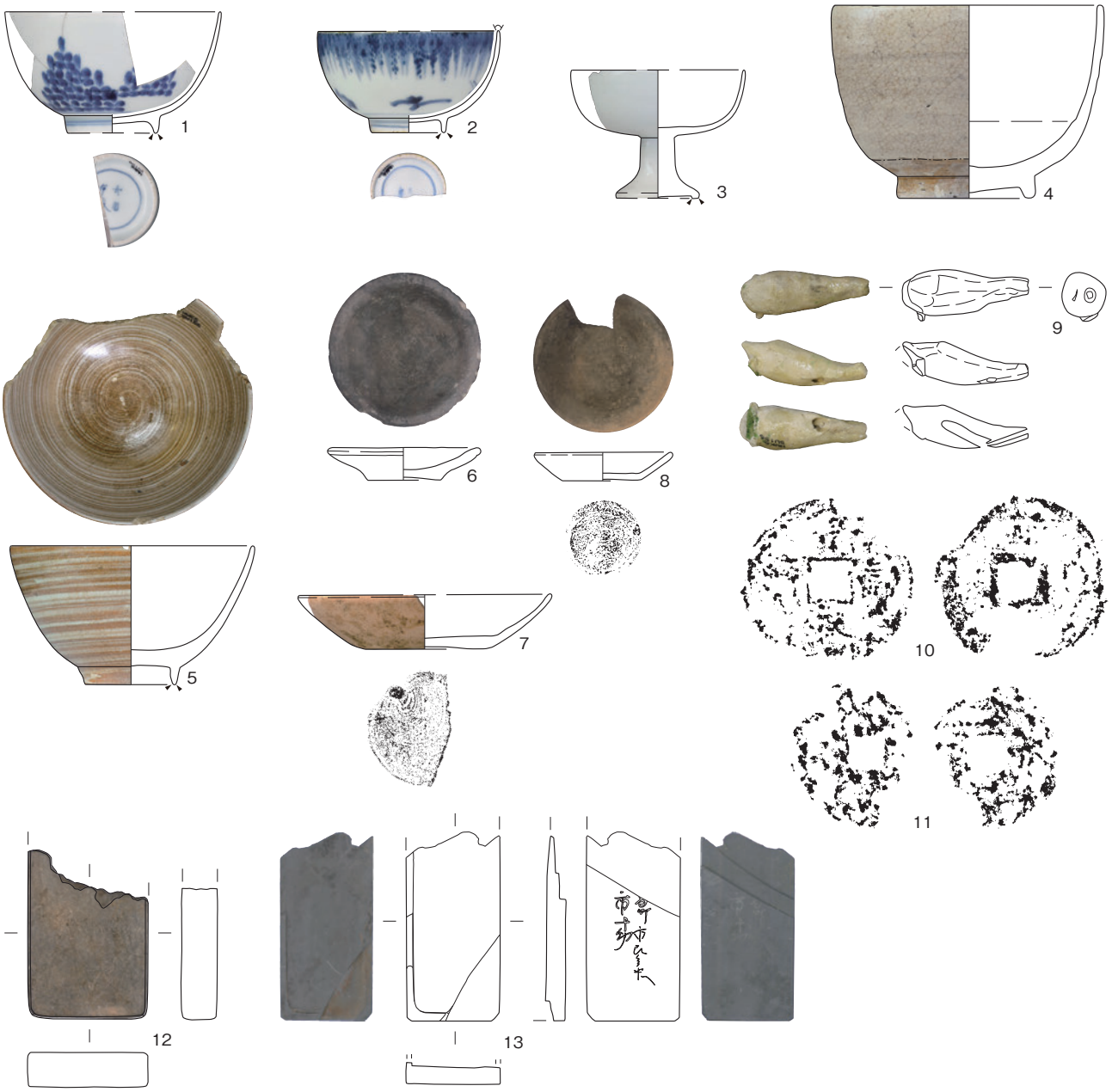


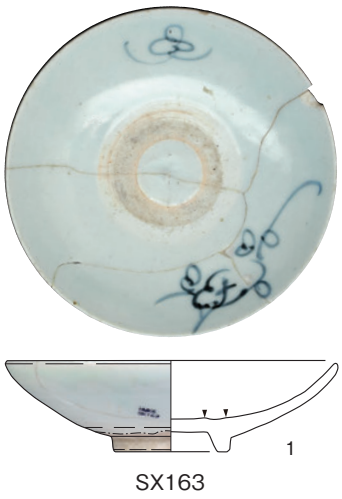
ST154



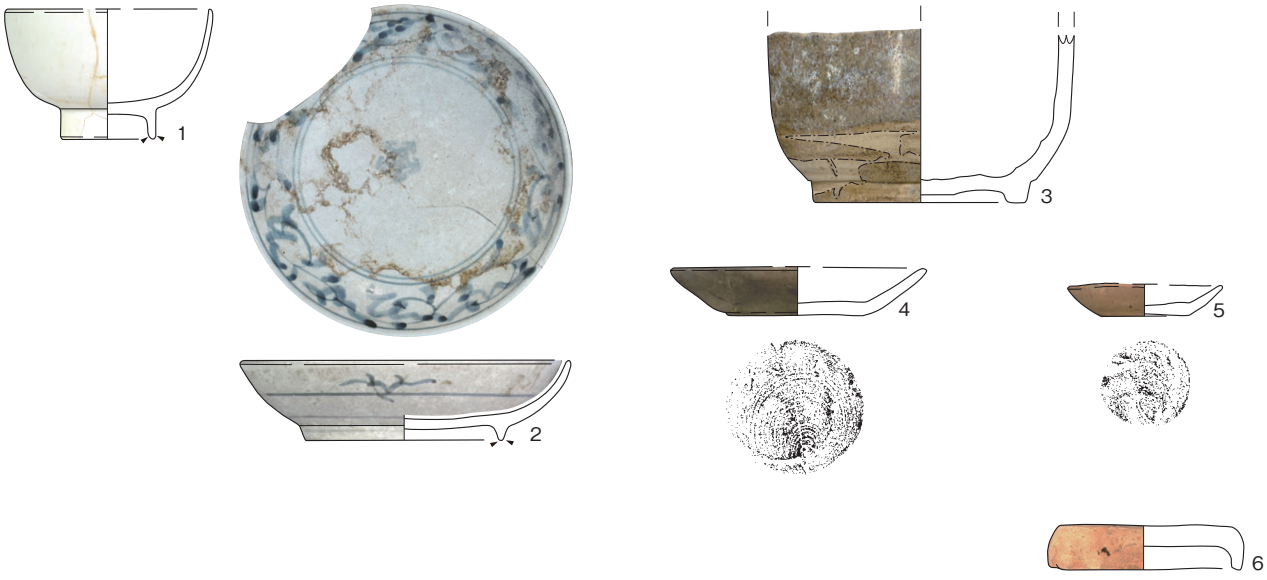
ST155

Ⅳ-38 図　ST154、ST155 出土遺物

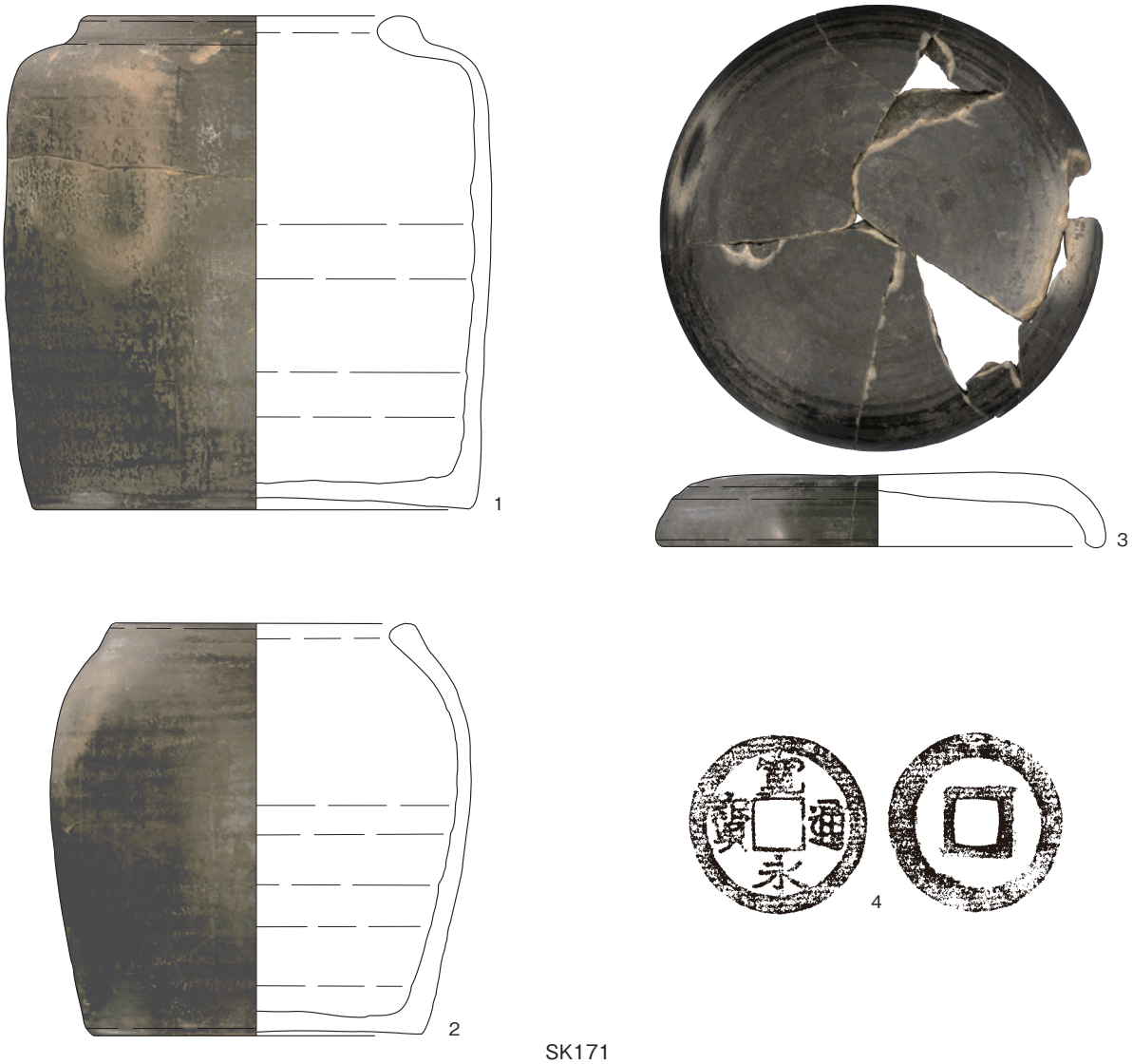




Ⅳ-39 図　SU156、ST160、SX163 出土遺物



SK167



SK171

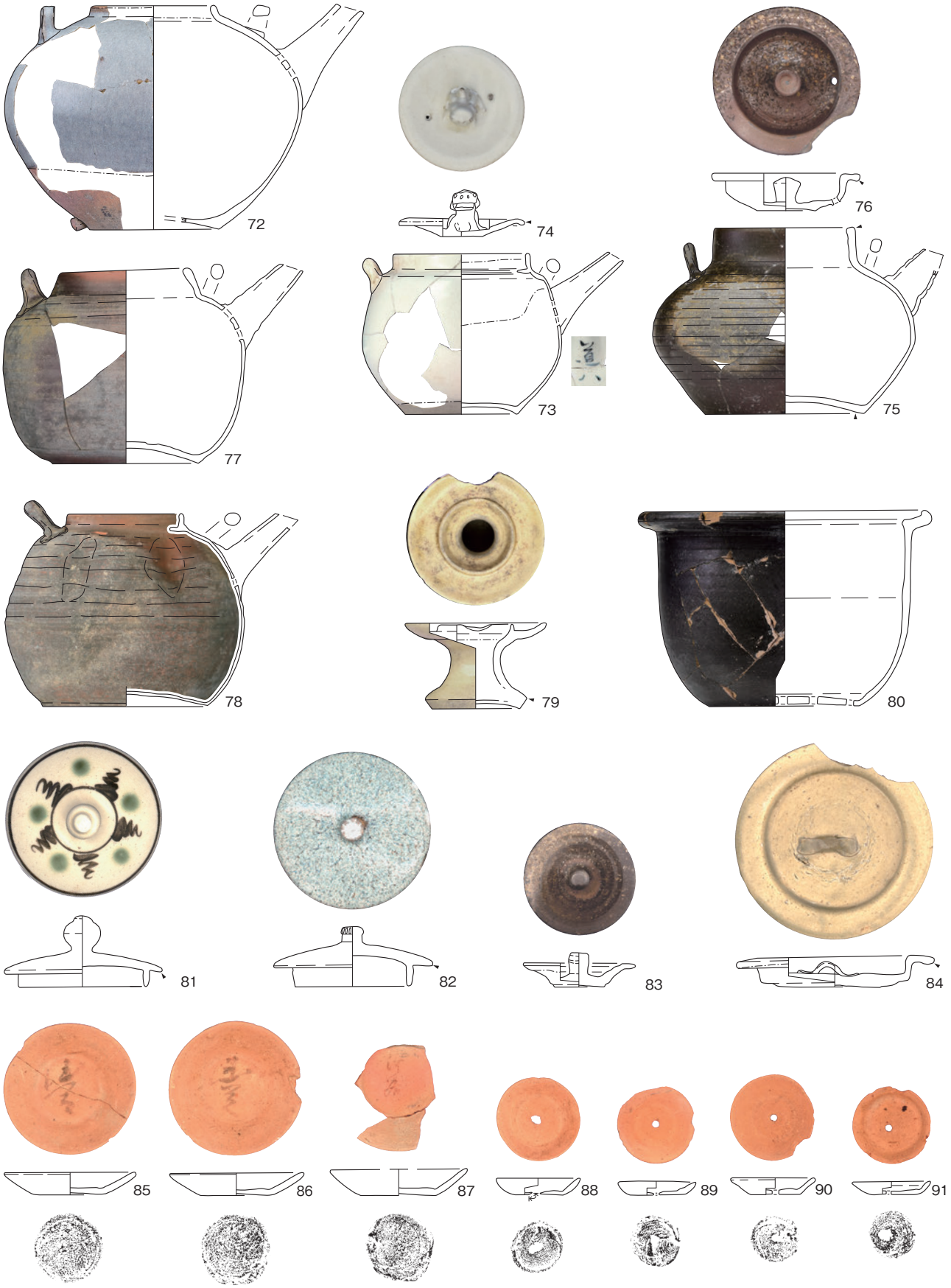
Ⅳ-40 図　SK167、SK171 出土遺物

Ⅳ-41 図　SK173（1）出土遺物

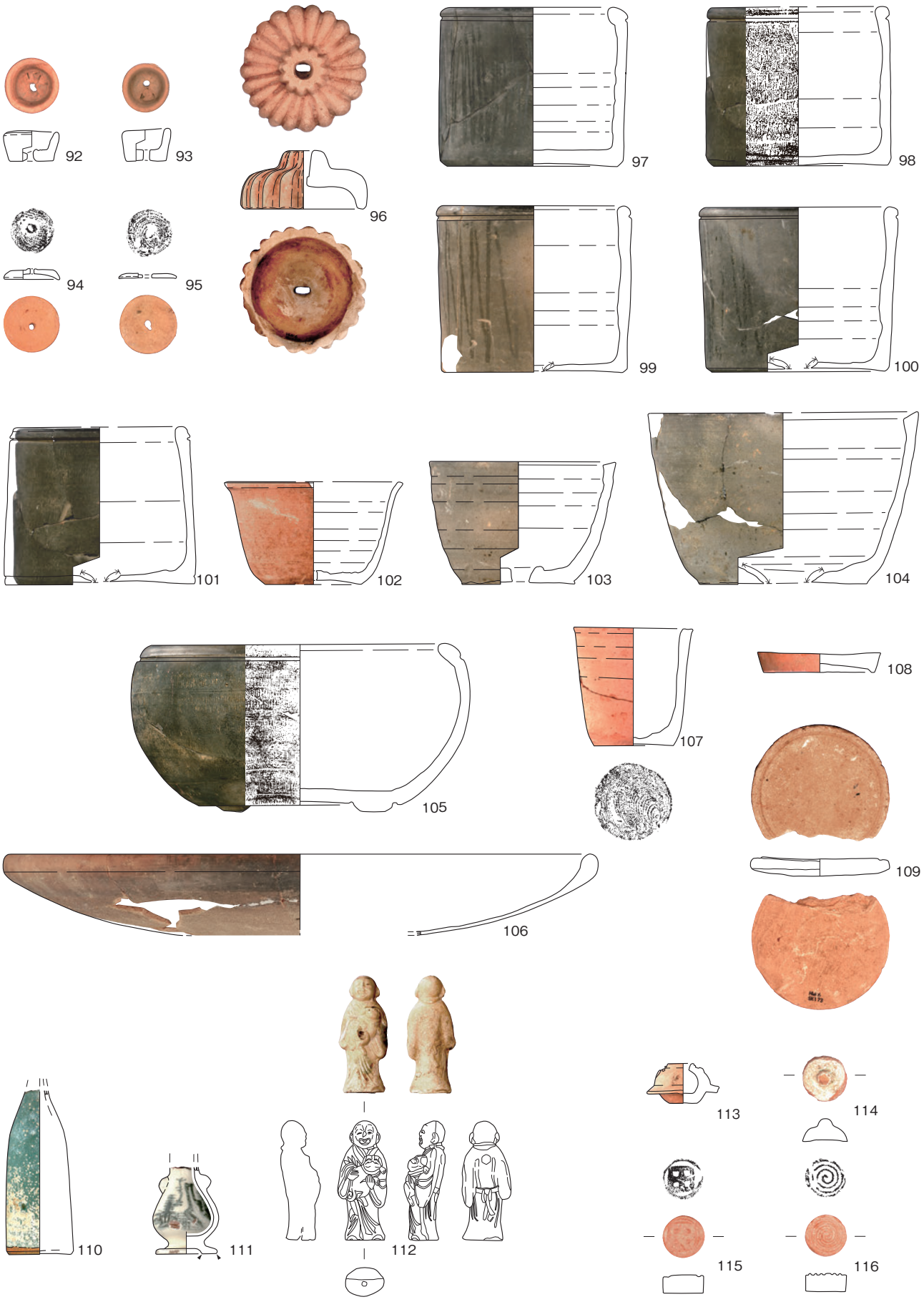
Ⅳ-42 図　SK173（2）出土遺物

Ⅳ-43図　SK173（3）出土遺物

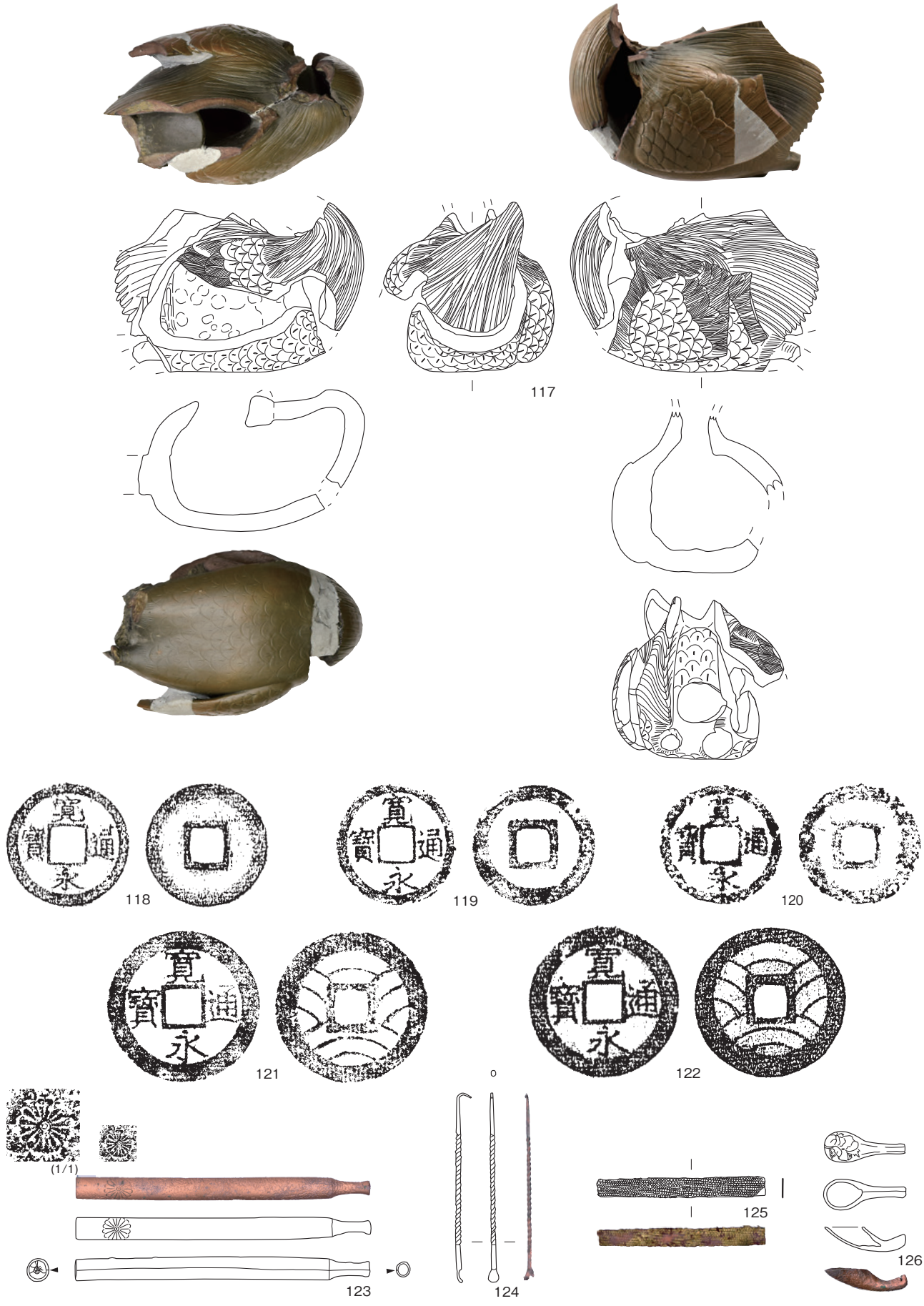
Ⅳ-44 図　SK173（4）出土遺物



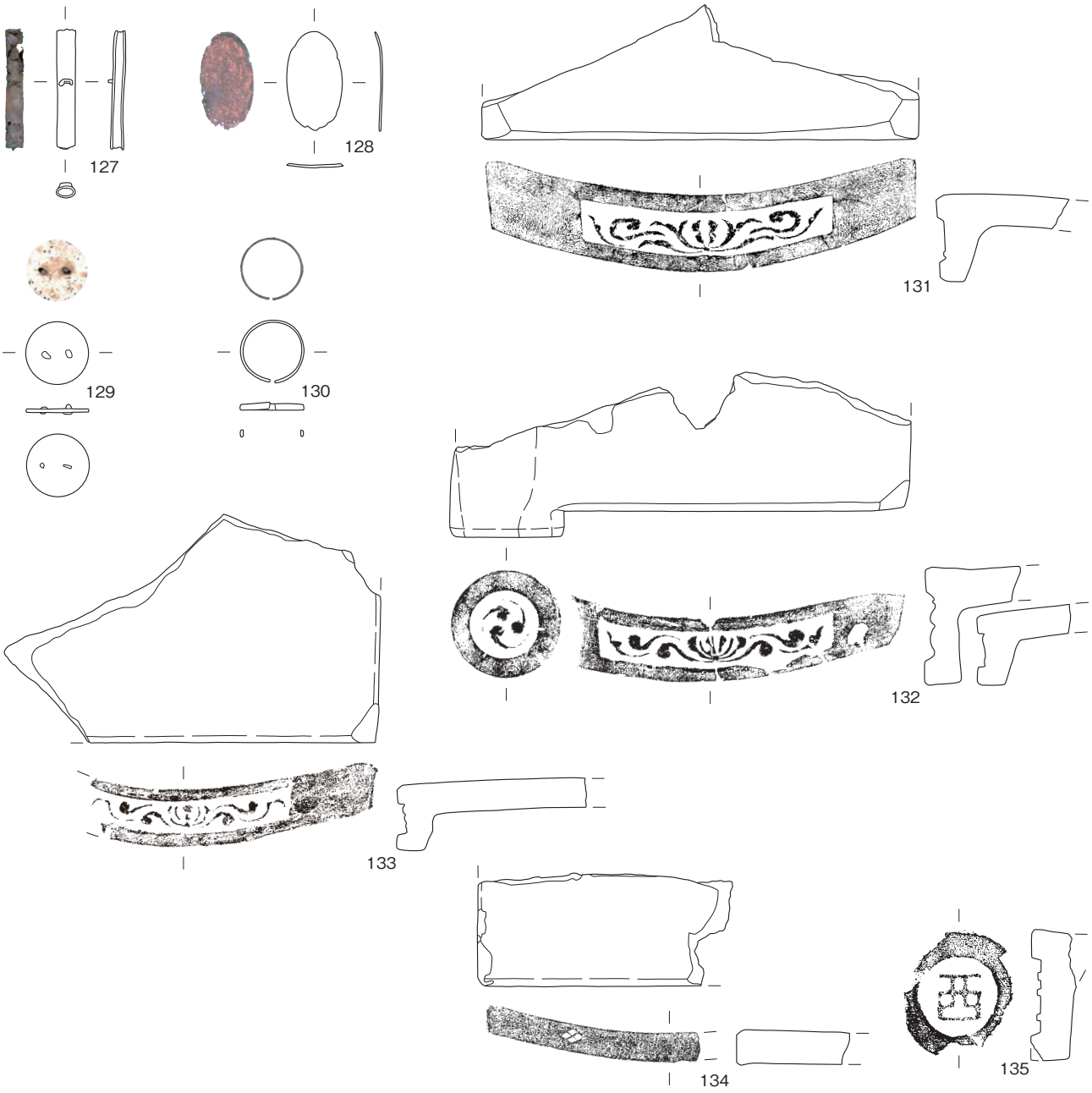
Ⅳ-45 図　SK173（5）出土遺物



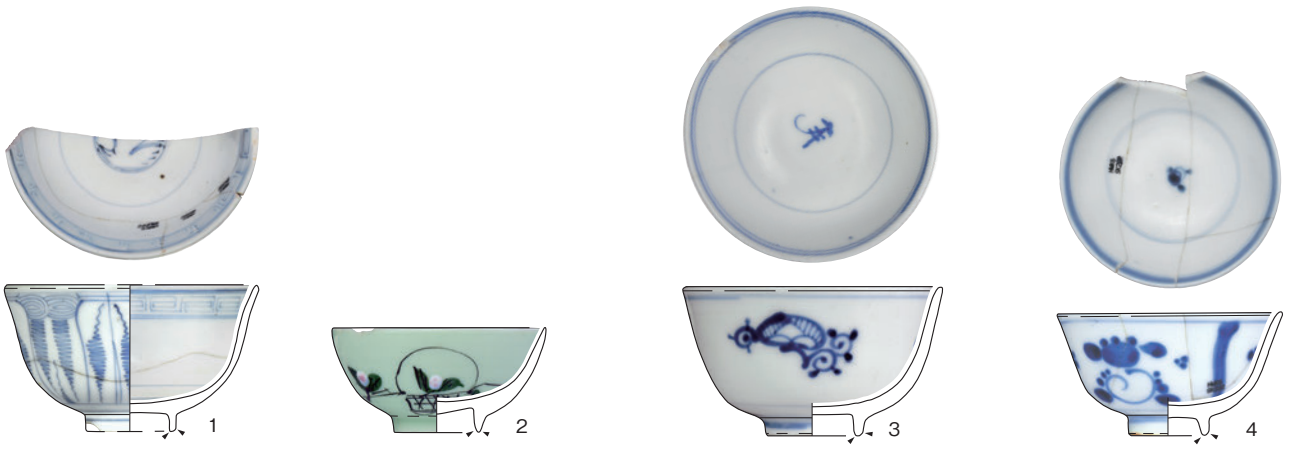
Ⅳ-46 図　SK173（6）出土遺物



Ⅳ-47 図　SK173（7）出土遺物

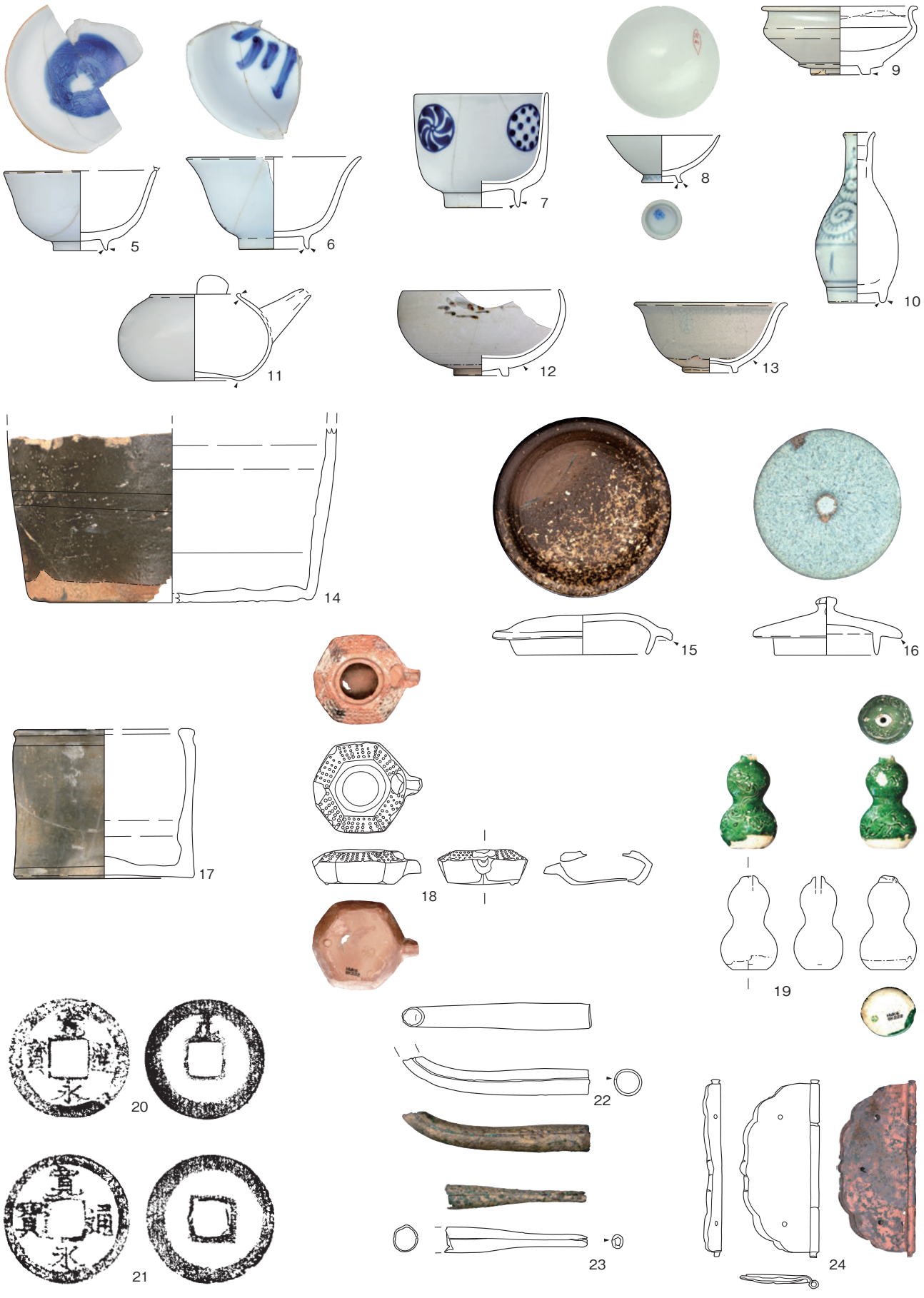


SK173（8）



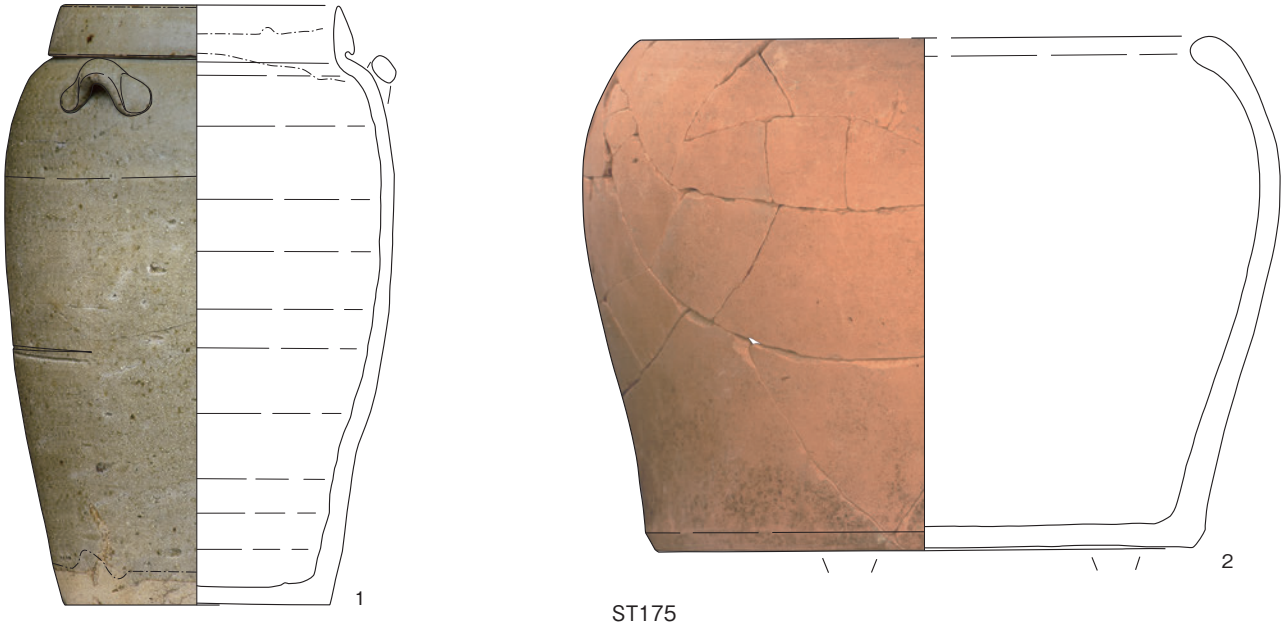
SK173　3～5層（1）

Ⅳ-48図　SK173（8）、SK173　3～5層（1）出土遺物

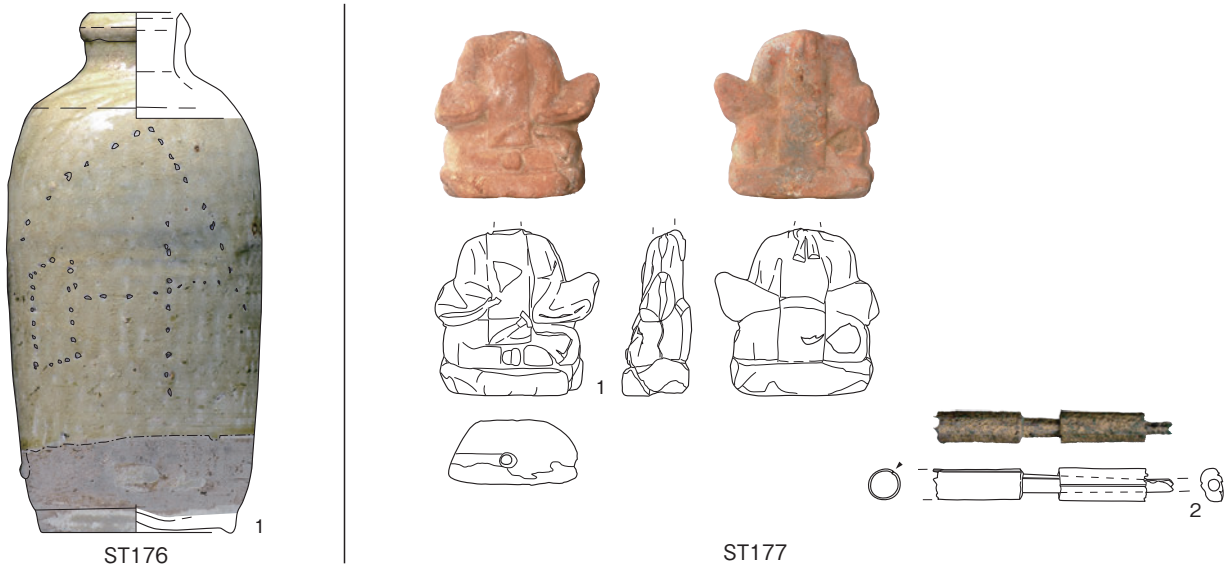


Ⅳ-49図　SK173　3～5層（2）出土遺物

ST174



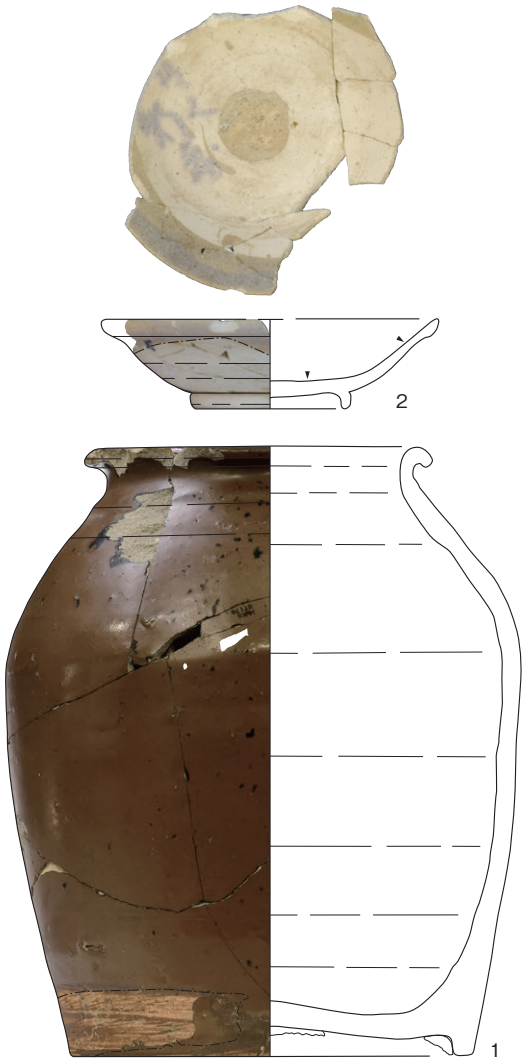
ST175



ST176

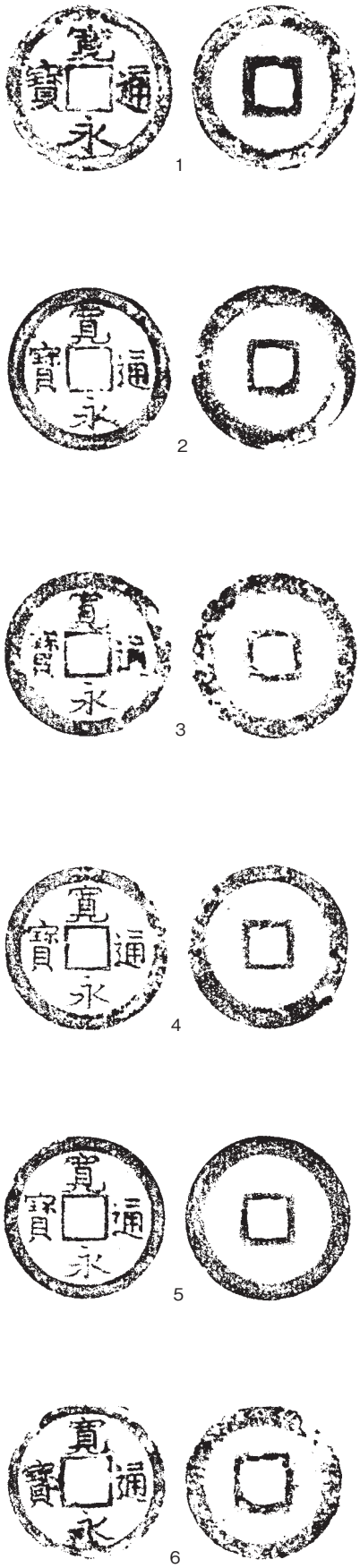
ST177

Ⅳ-50 図　ST174、ST175、ST176、ST177 出土遺物



ST178

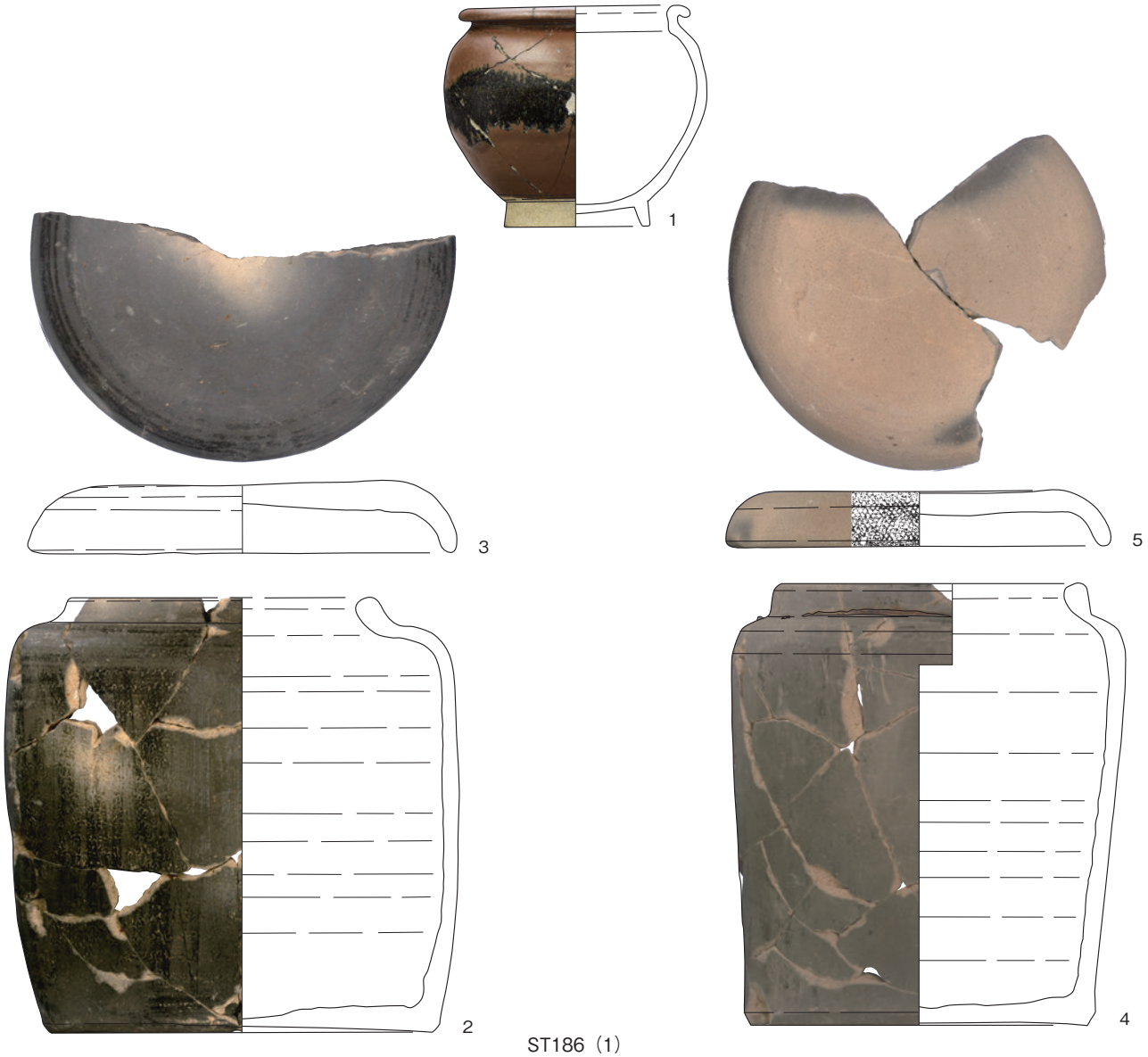
ST180



ST181

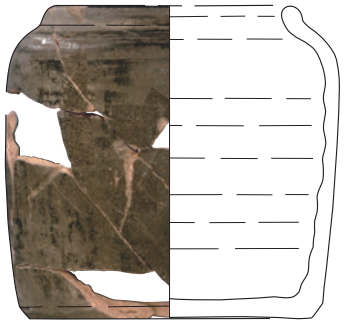
Ⅳ-51 図　ST178、ST180、ST181 出土遺物

ST183

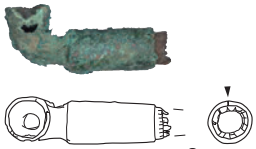


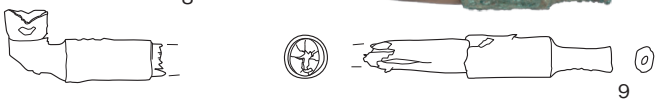
ST186（1）

Ⅳ-52 図　ST183、ST186（1）出土遺物


6

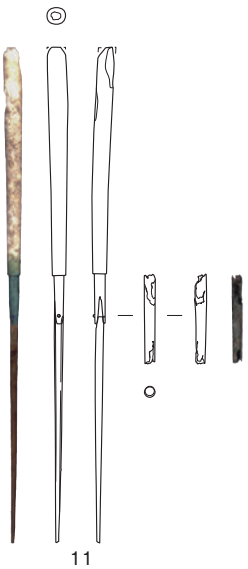
7


8


9

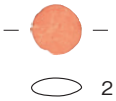
10

(1/1)

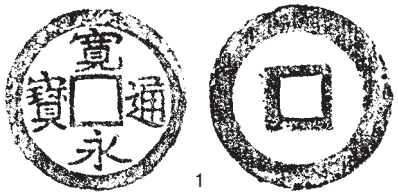

11

ST186（2）

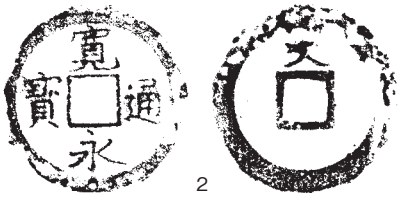
1（1/8）


2

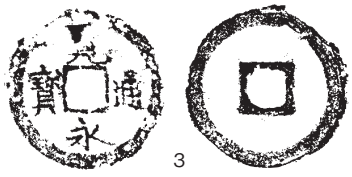
ST187



1



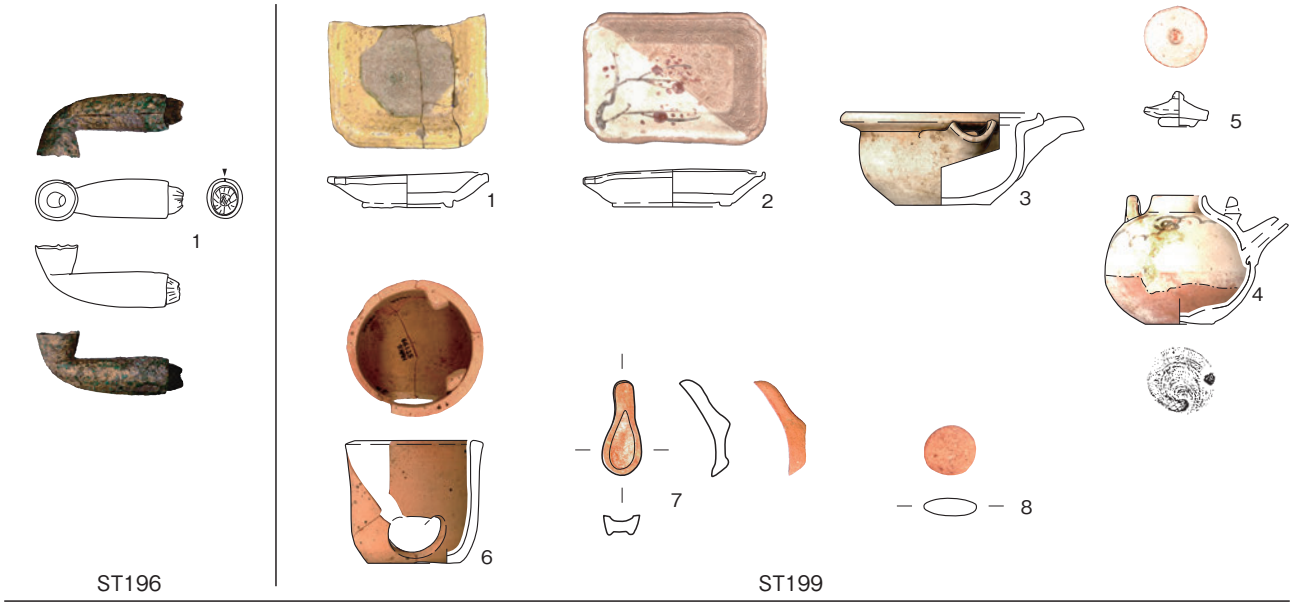
2



3

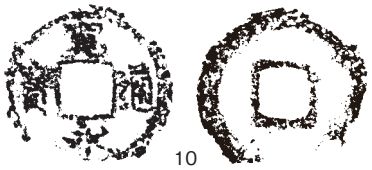
ST195

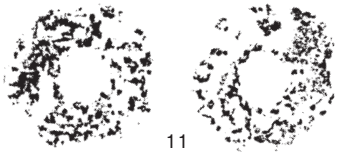
Ⅳ-53図　ST186（2）、ST187、ST195出土遺物



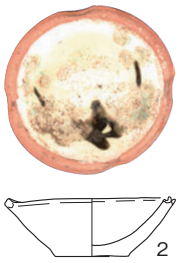
SU201（1）

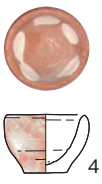
Ⅳ-54 図　ST196、ST199、SU201（1）出土遺物





SU201（2）



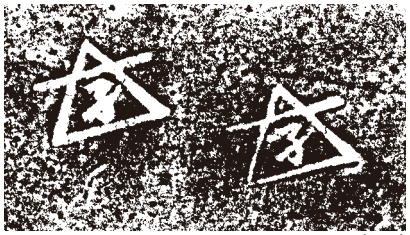


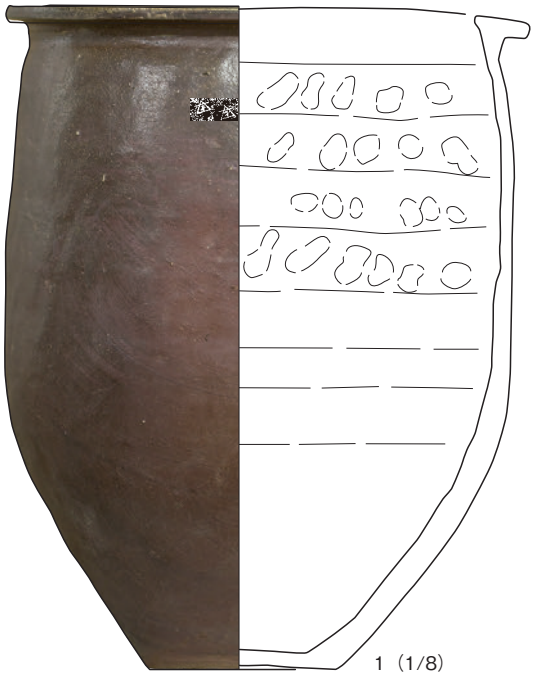
ST207

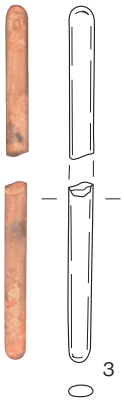
ST213（1）

Ⅳ-55図　SU201（2）、ST207、ST213（1）出土遺物

ST213（2）

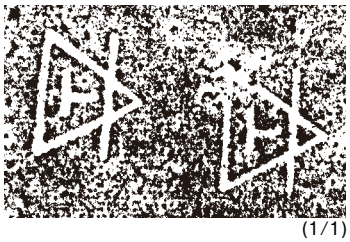






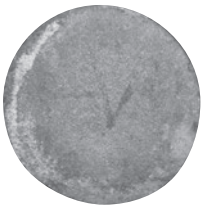
ST216

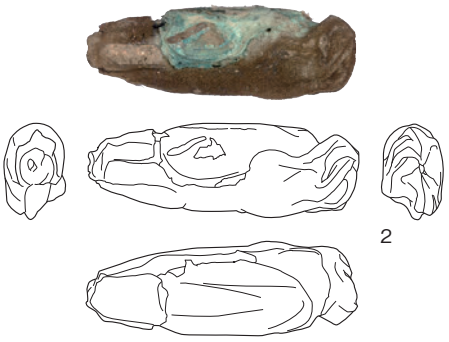
Ⅳ-56 図　ST213（2）、ST216 出土遺物



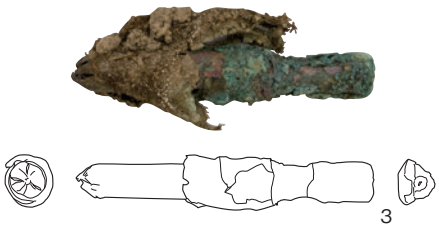
(1/1)

1（1/8）



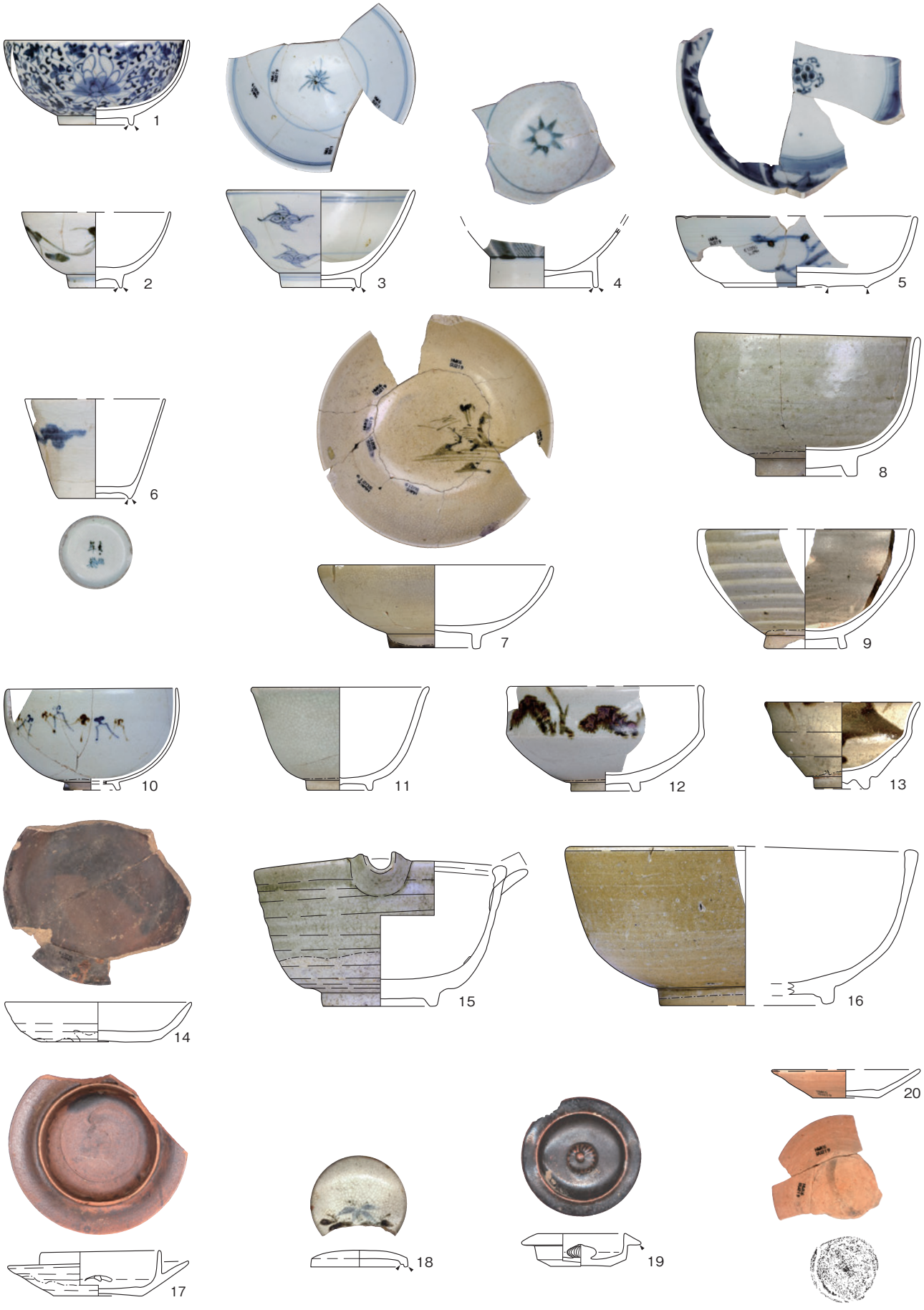


2

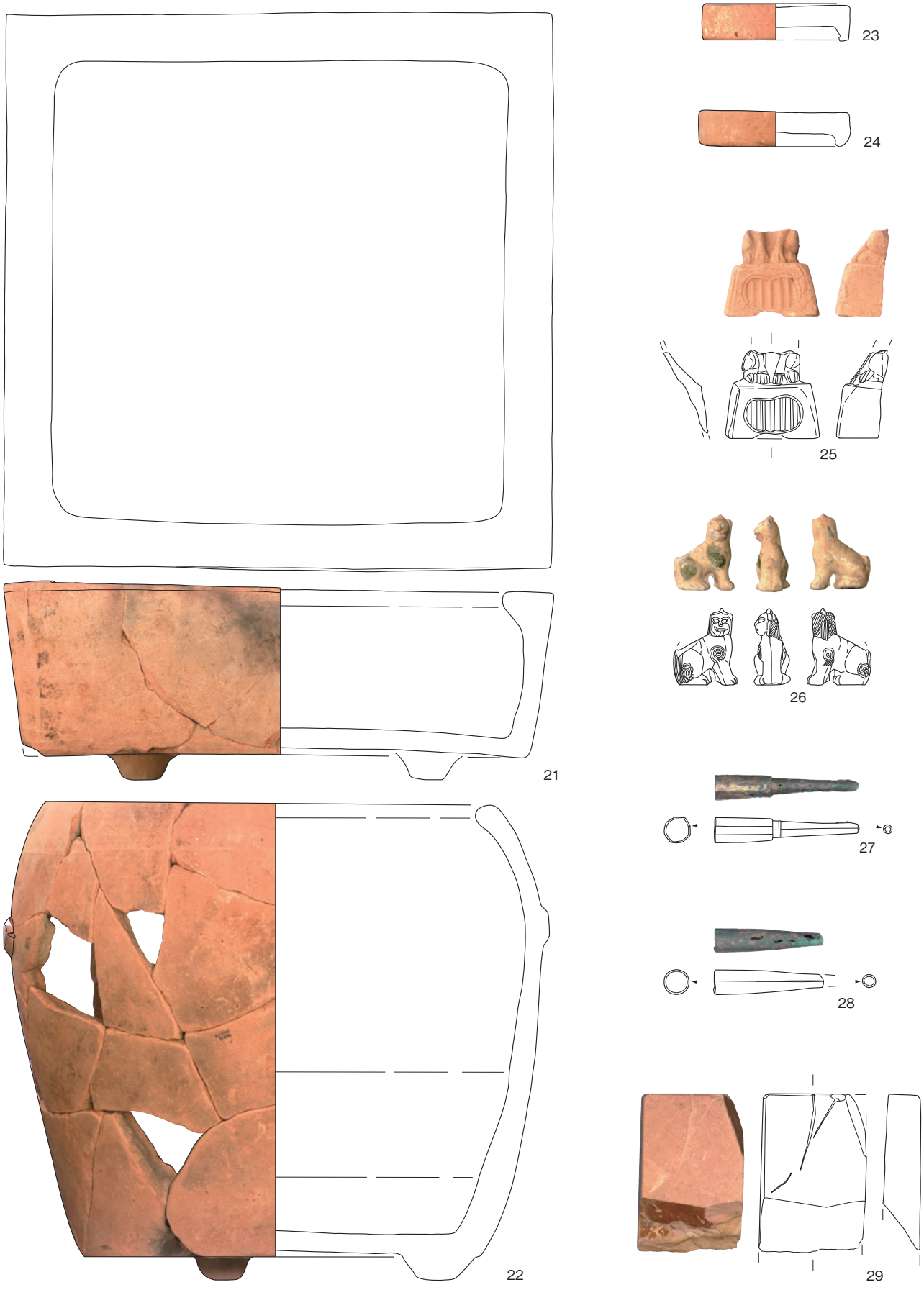


3

Ⅳ-57 図　ST218 出土遺物

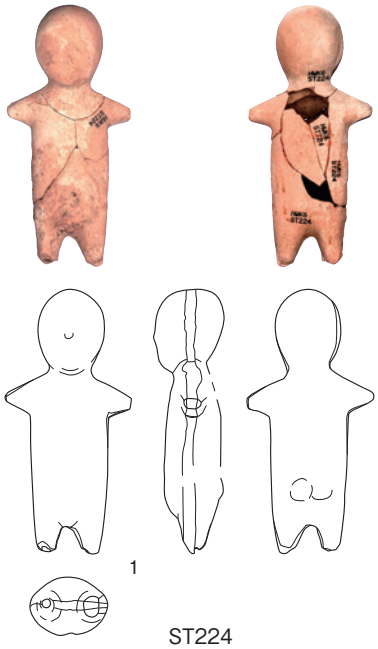


Ⅳ-58図　SU219（1）出土遺物



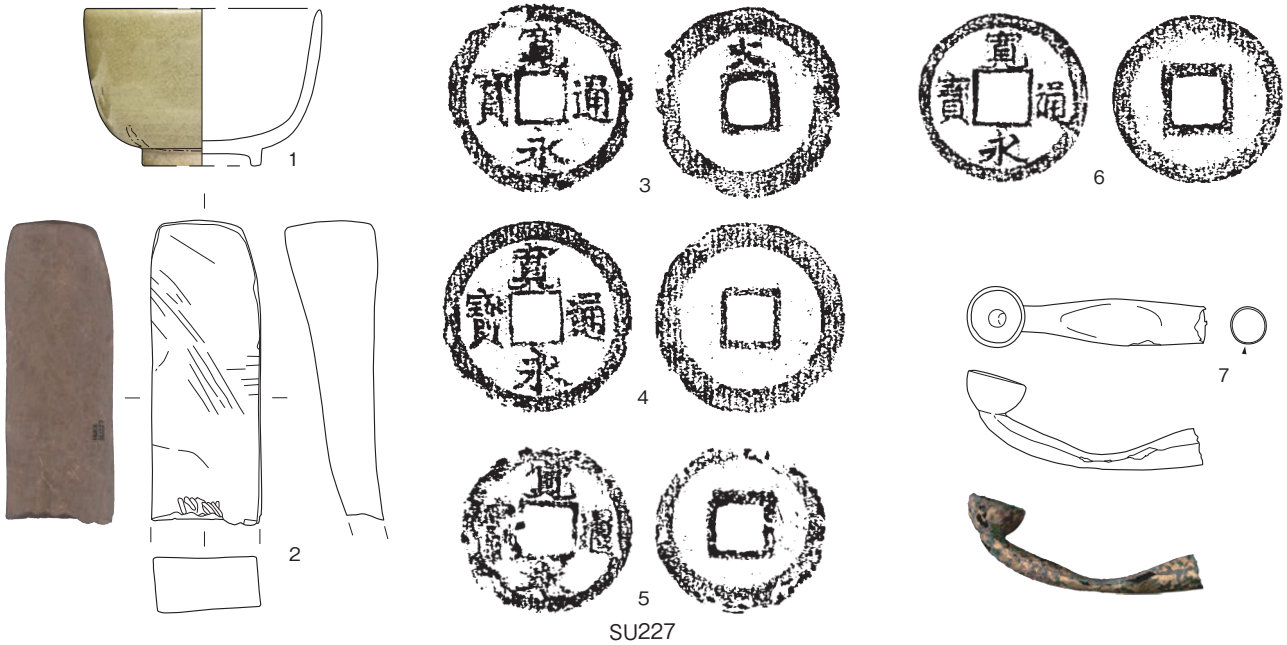
Ⅳ-59 図　　SU219（2）出土遺物

SP223



ST224

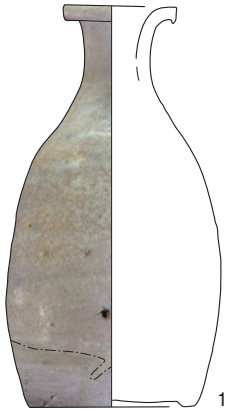
ST225

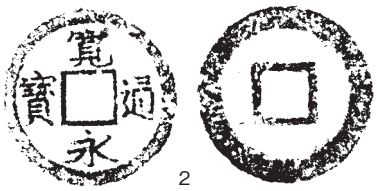


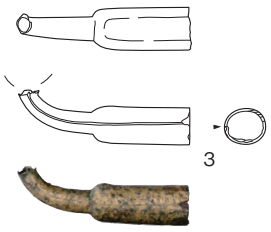
SU227

Ⅳ-60 図　SP223、ST224、ST225、SU227 出土遺物

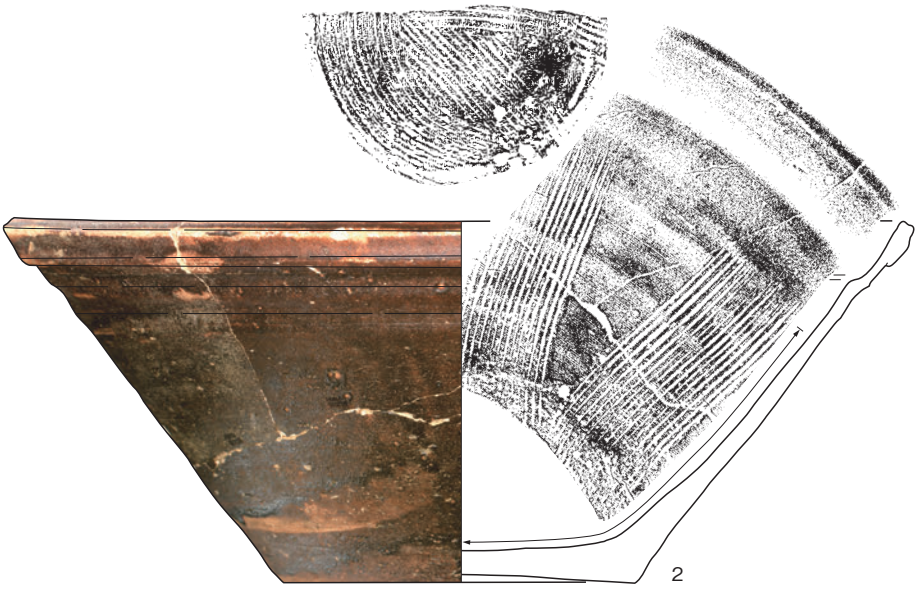
Ⅳ-61 図　SU229 出土遺物

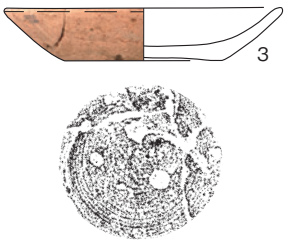


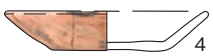


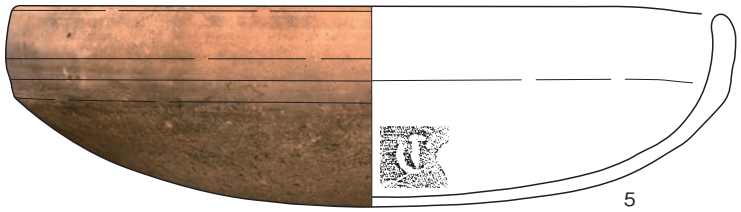


SK232









(1/1)

SK235

Ⅳ-62 図　SK232、SK235 出土遺物

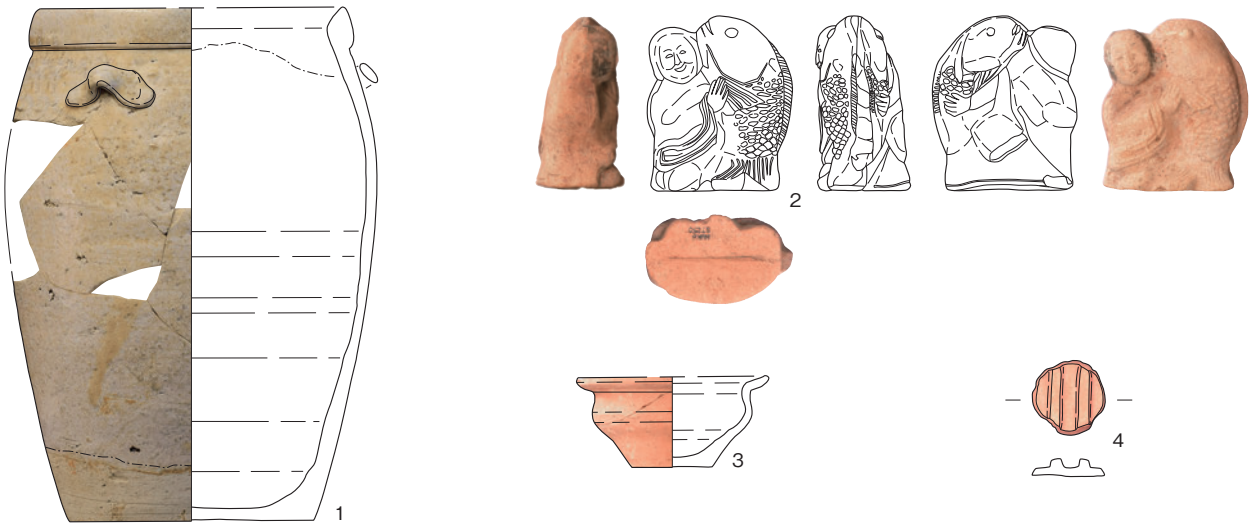
ST245

ST246（1）

Ⅳ-63 図　ST245、ST246（1）出土遺物

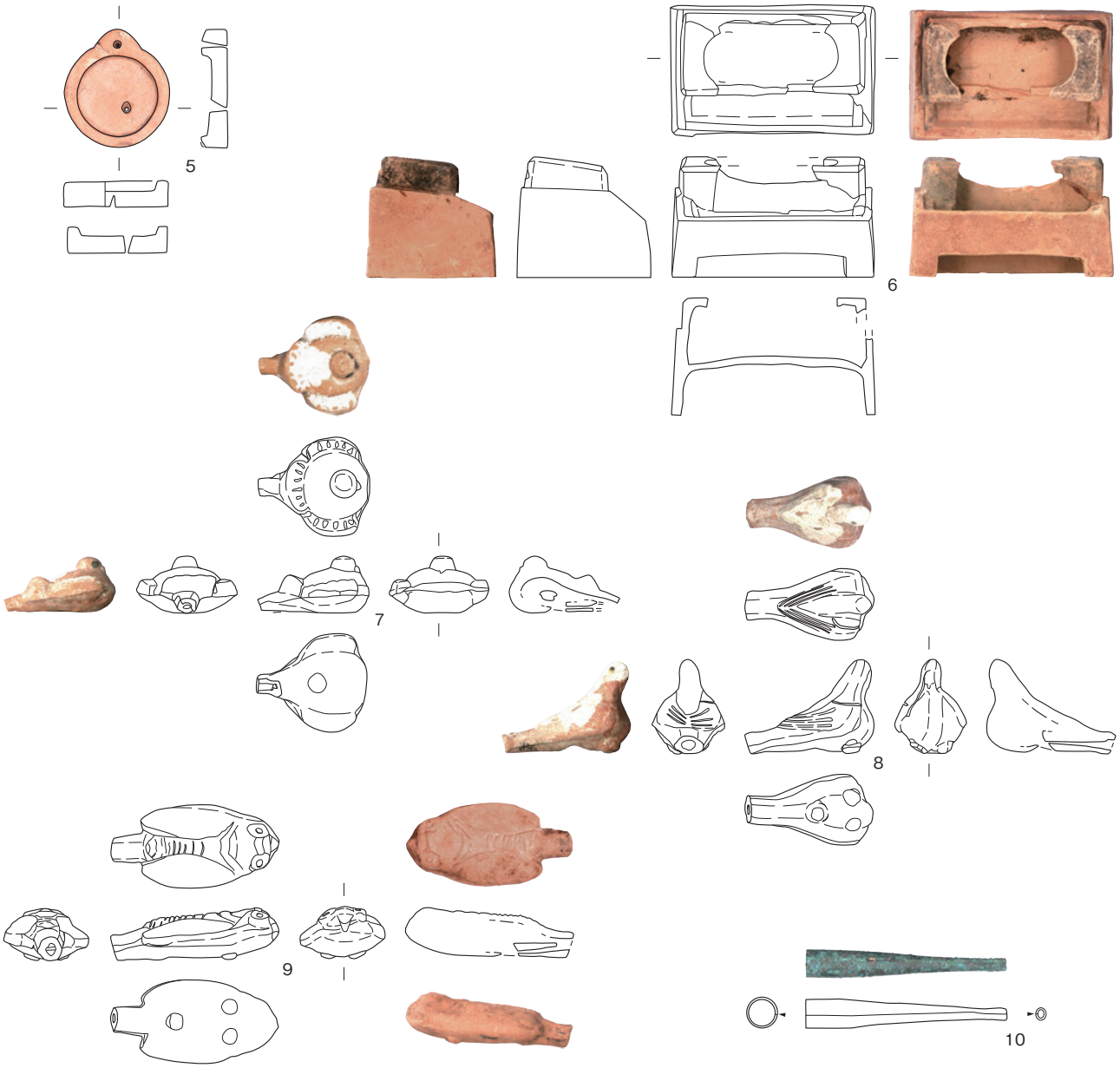
Ⅳ-64 図　ST246（2）、ST247 出土遺物

ST248・ST249

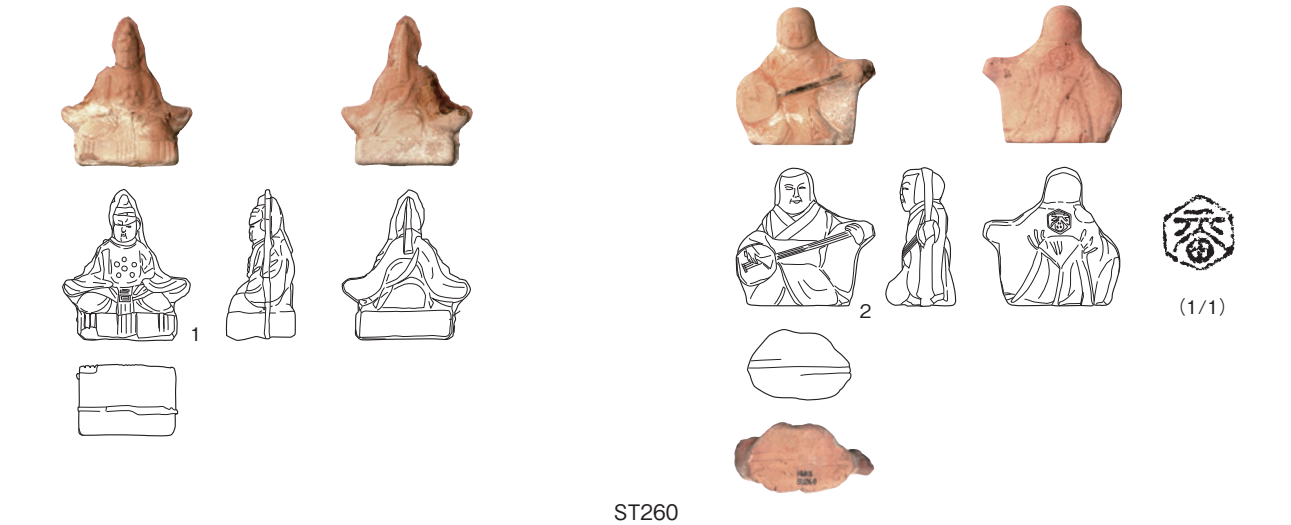


ST258（1）

Ⅳ-65 図　ST248・ST249、ST258（1）出土遺物



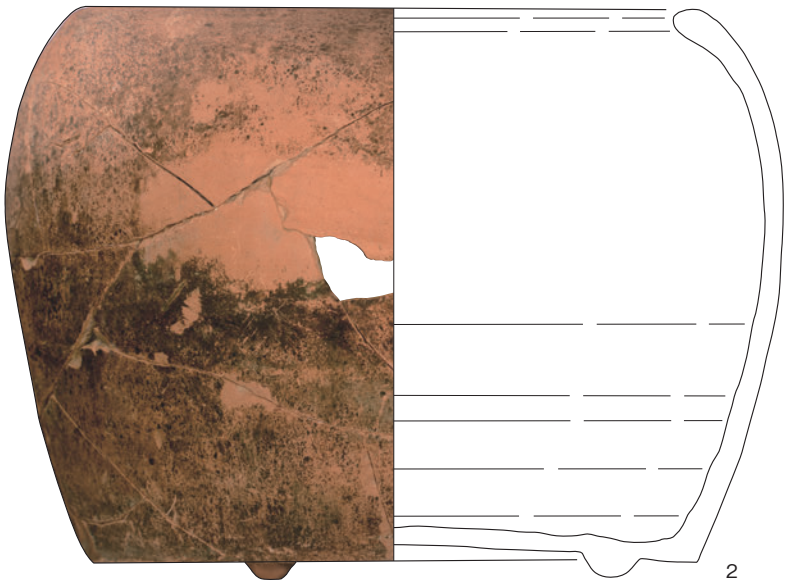
ST258（2）



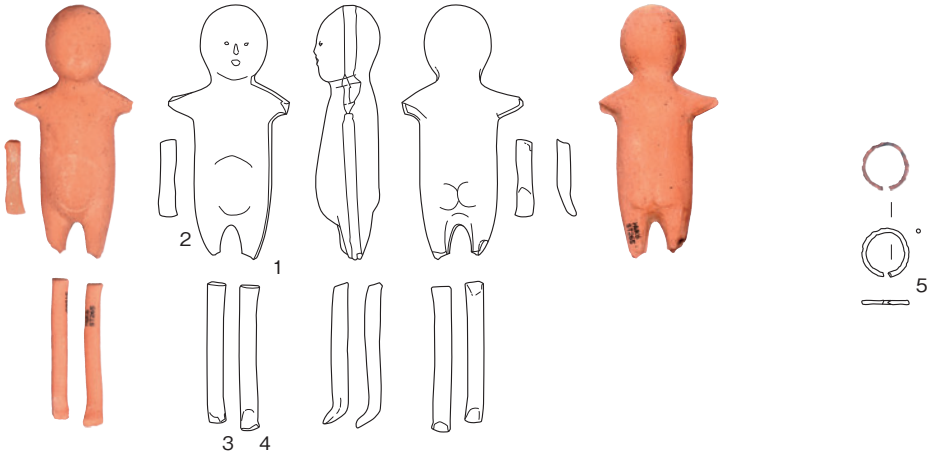
ST260

Ⅳ-66 図　ST258（2）、ST260 出土遺物

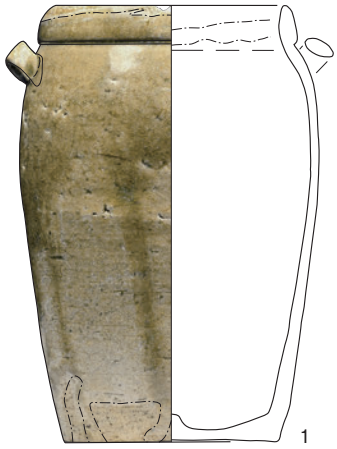
Ⅳ-67 図　SK261、ST263（1）出土遺物



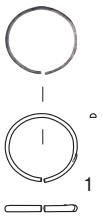
ST263（2）



ST265

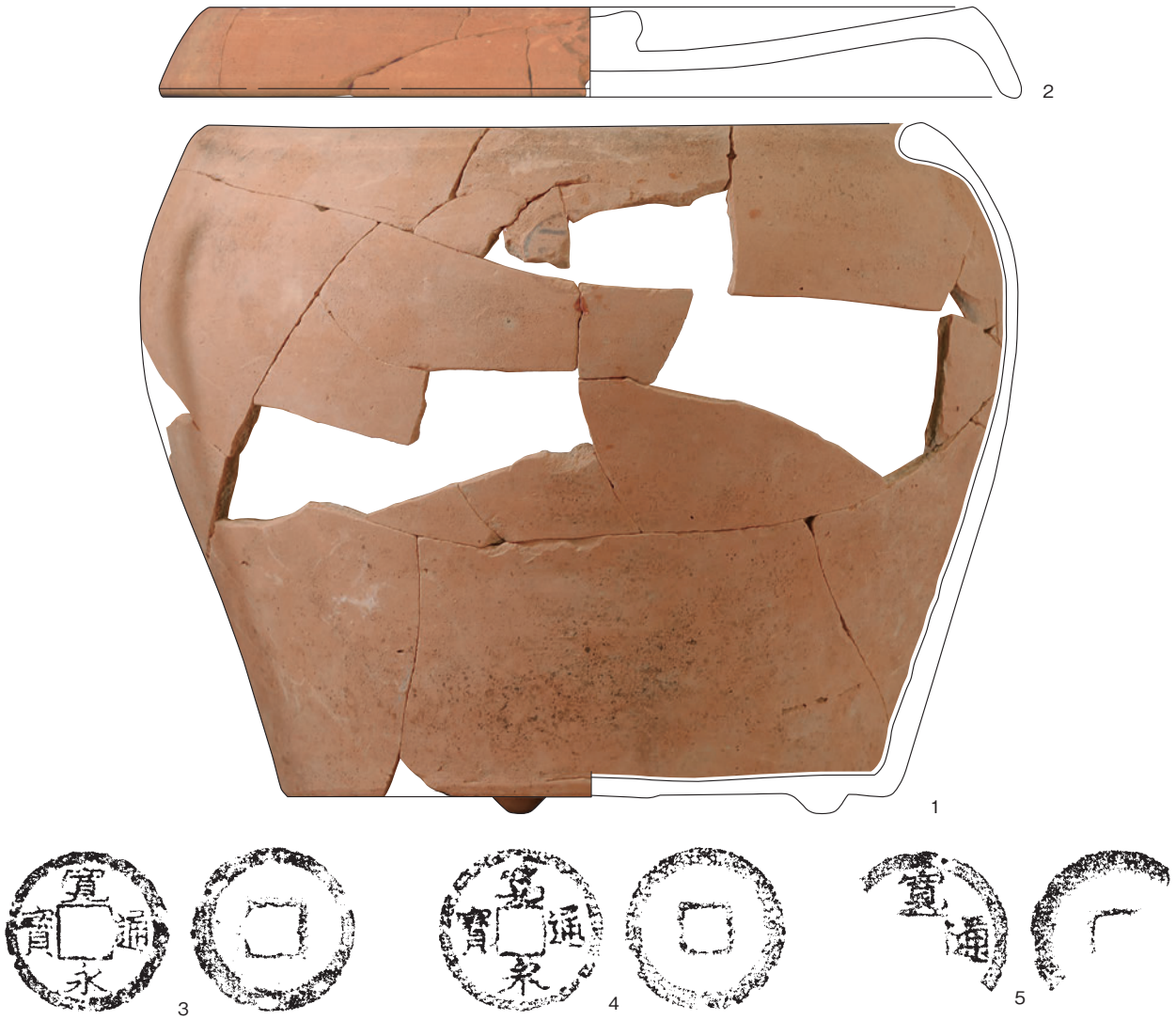


ST267



ST268

Ⅳ-68 図　ST263（2）、ST265、ST267、ST268 出土遺物



ST264

SK271（1）

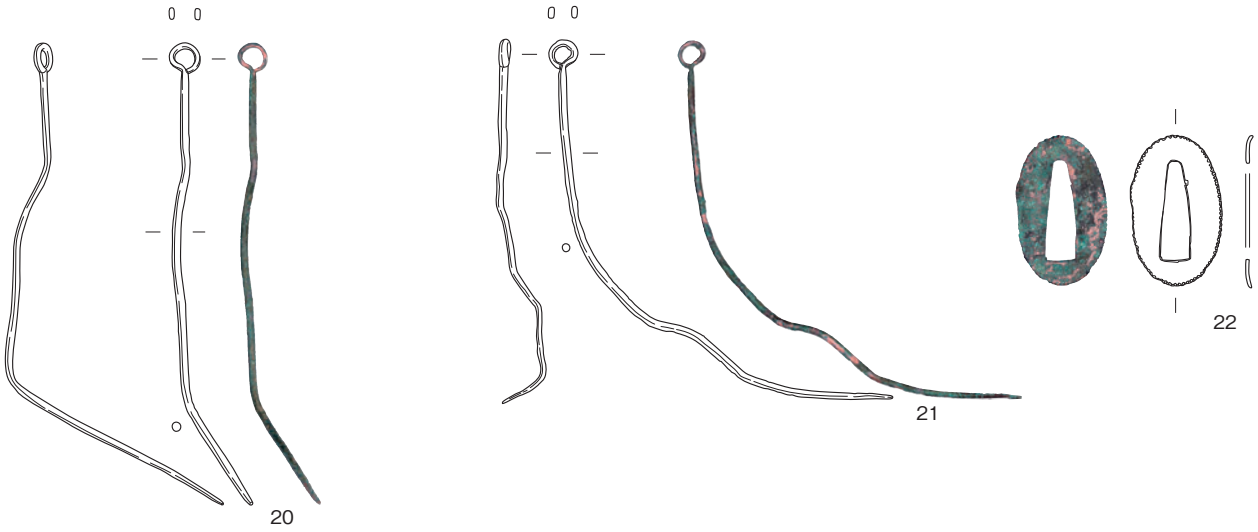
Ⅳ-69 図　ST264、SK271（1）出土遺物

SK271（2）

ST270

Ⅳ-70 図　SK271（2）、ST270 出土遺物

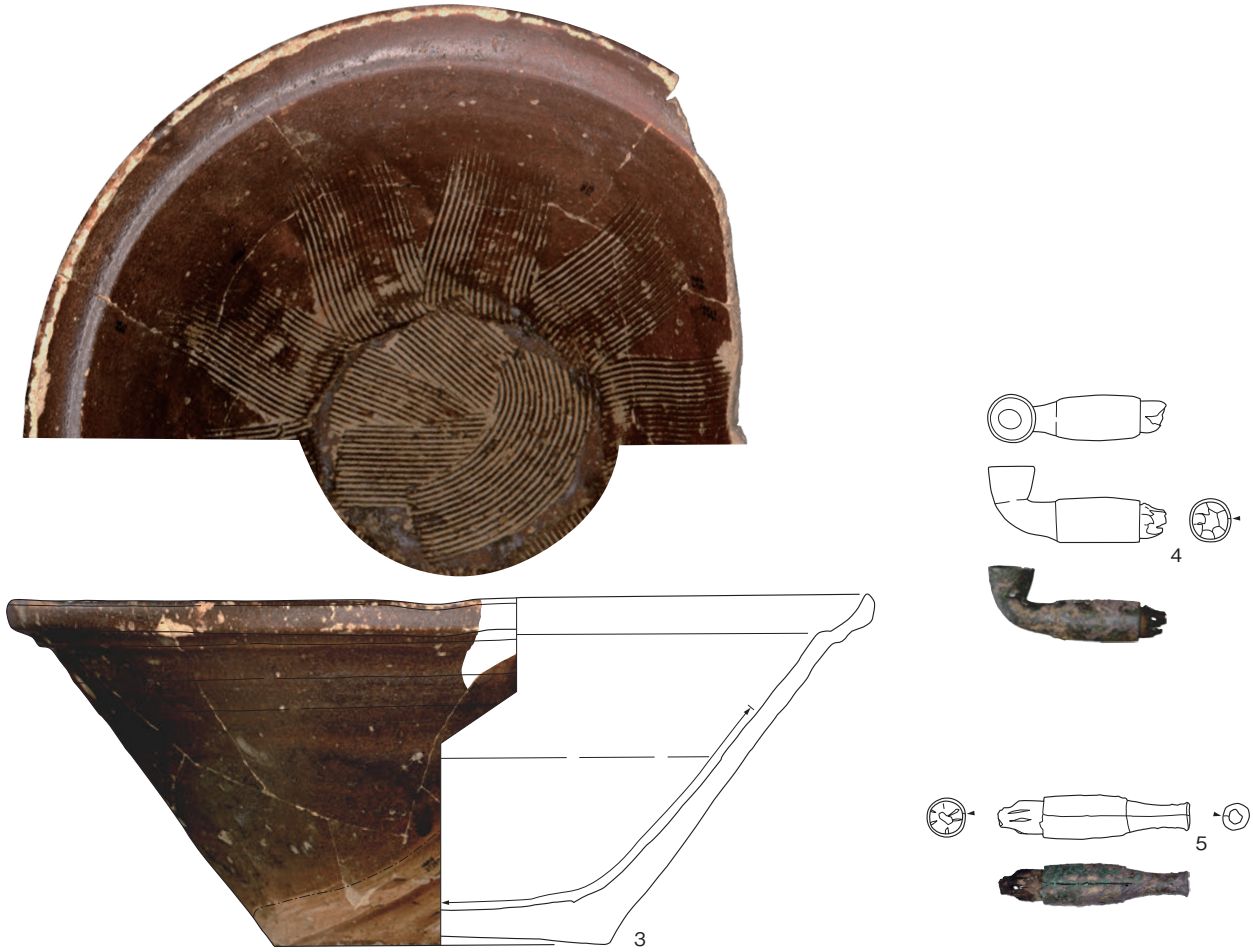
Ⅳ-71 図　SU280（1）　出土遺物



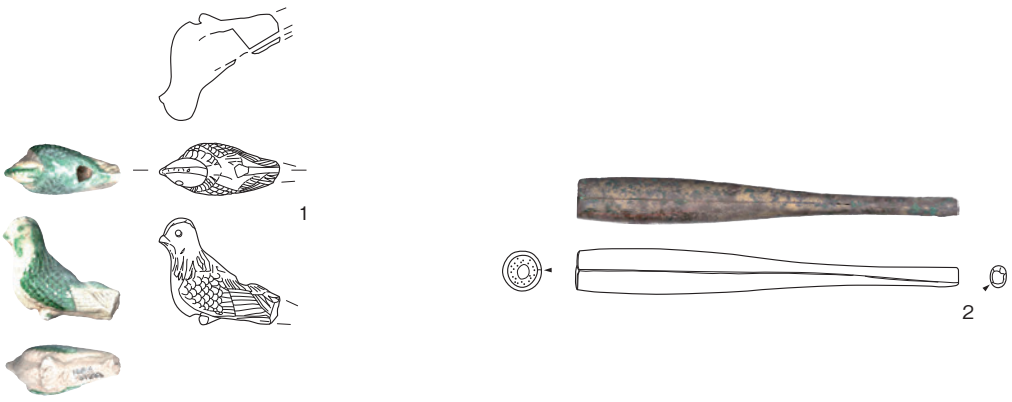
SU280（2）

ST281（1）

Ⅳ-72 図　SU280（2）、ST281（1）出土遺物

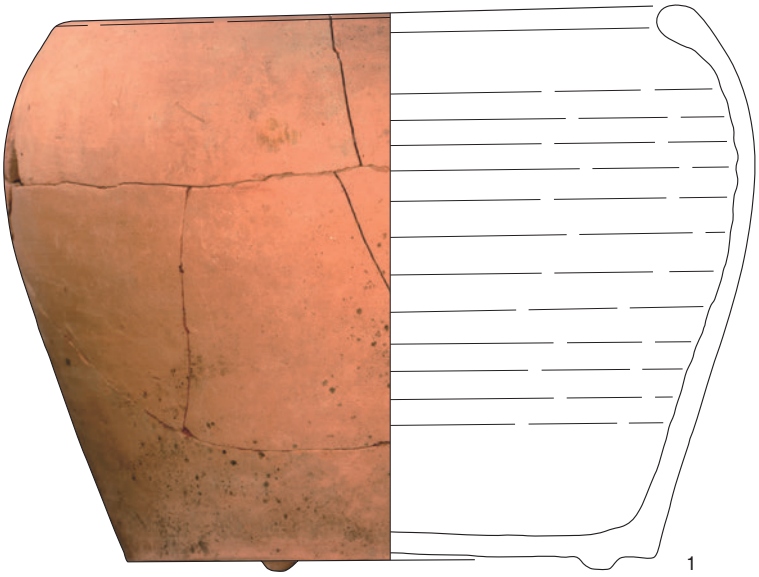


ST281（2）

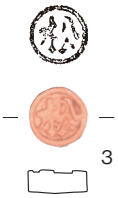


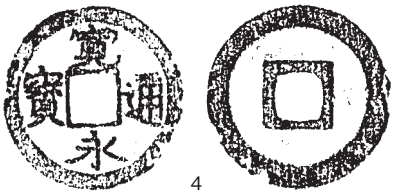
ST283

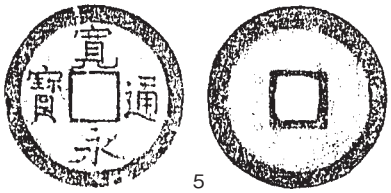
Ⅳ-73 図　ST281（2）、ST283 出土遺物

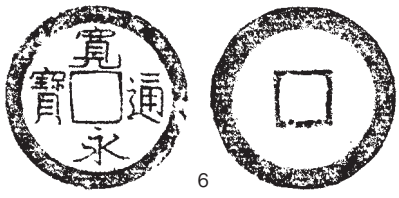

1

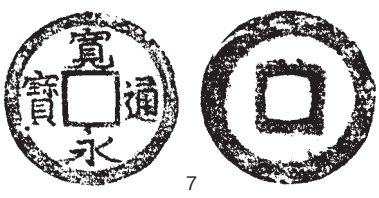
2

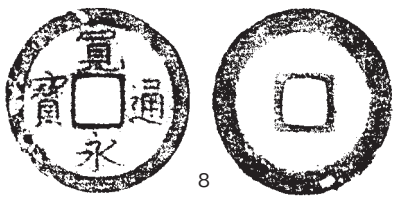

3


4

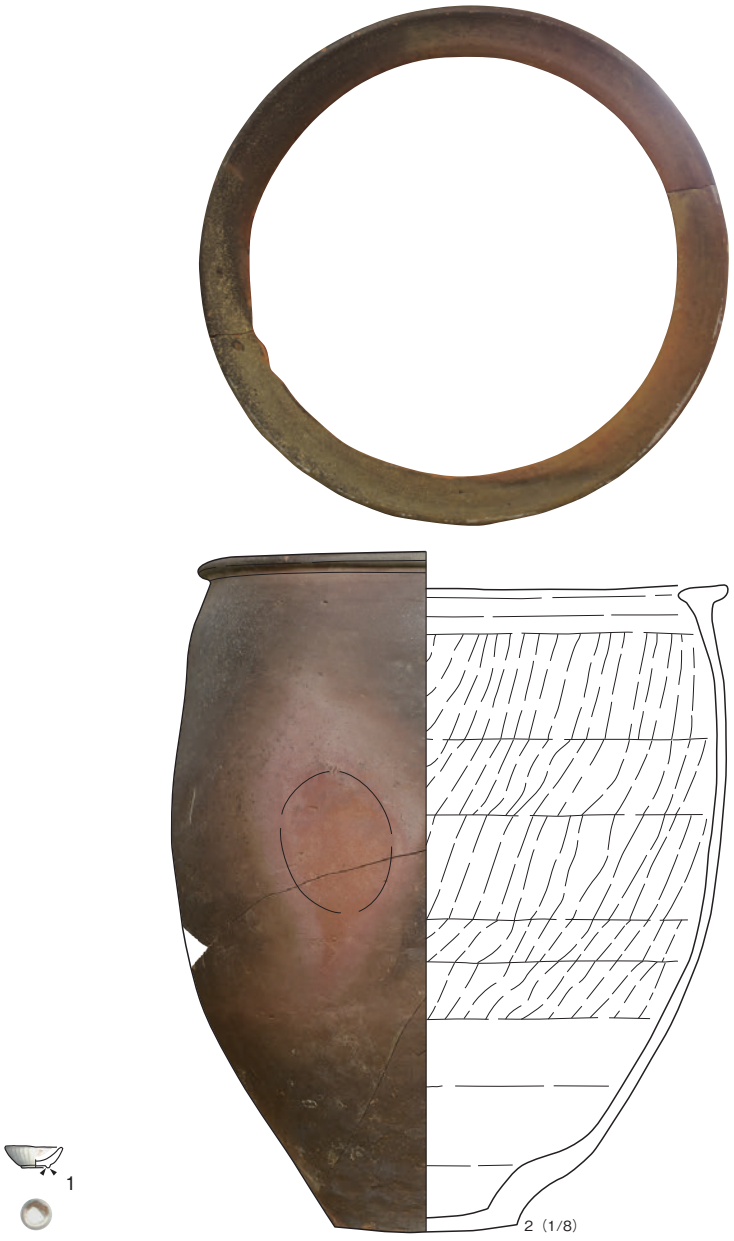

5


6


7

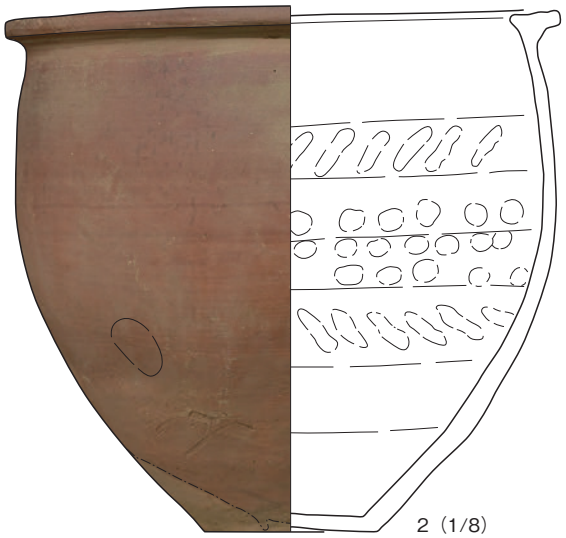

8

Ⅳ-74 図　ST282 出土遺物



Ⅳ-75 図　ST284 出土遺物

1


2 (1/8)

3

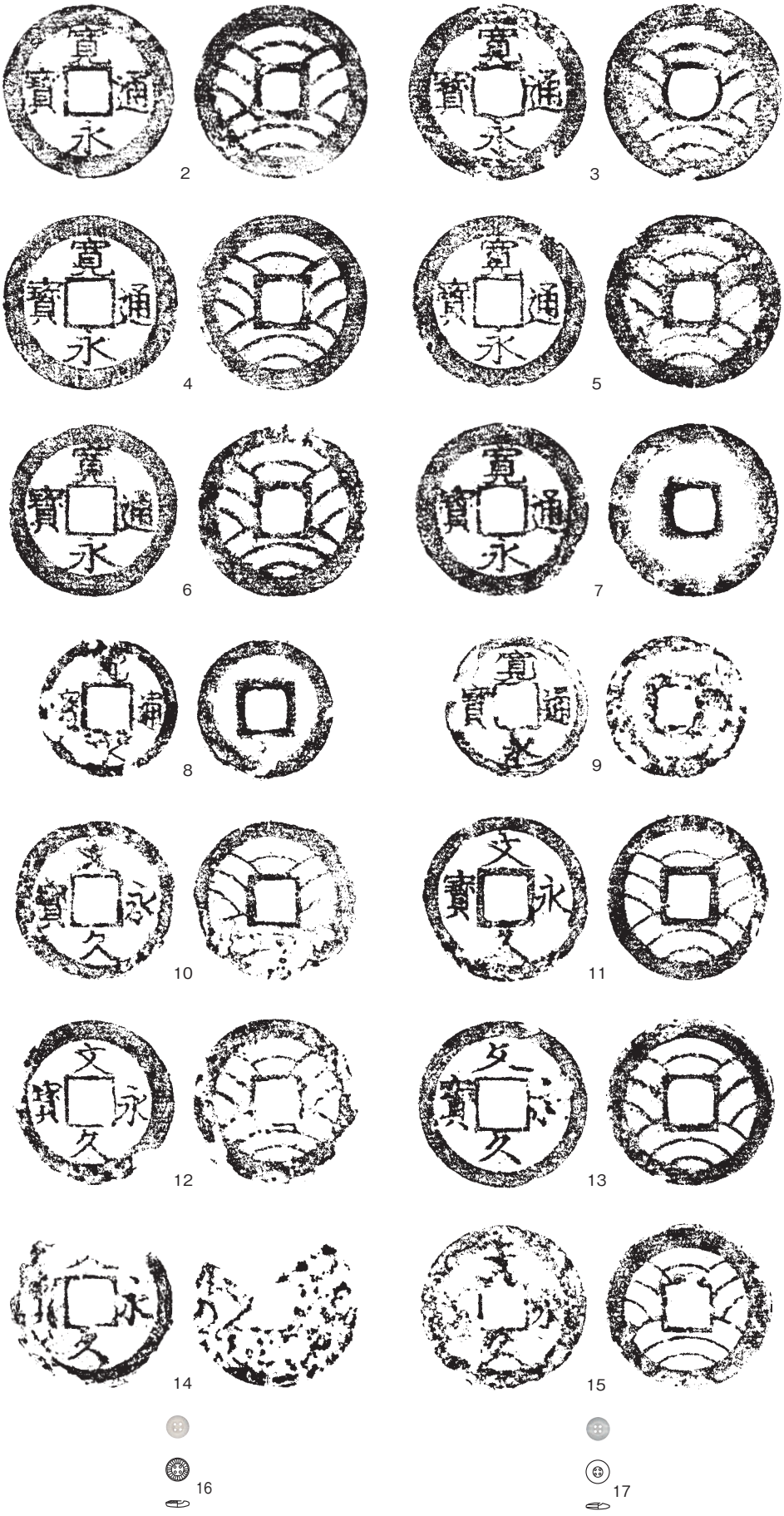
4

(1/1)

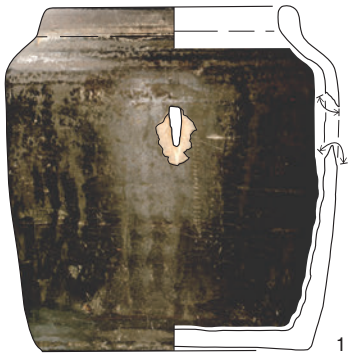
5

Ⅳ-76 図　ST286 出土遺物

1

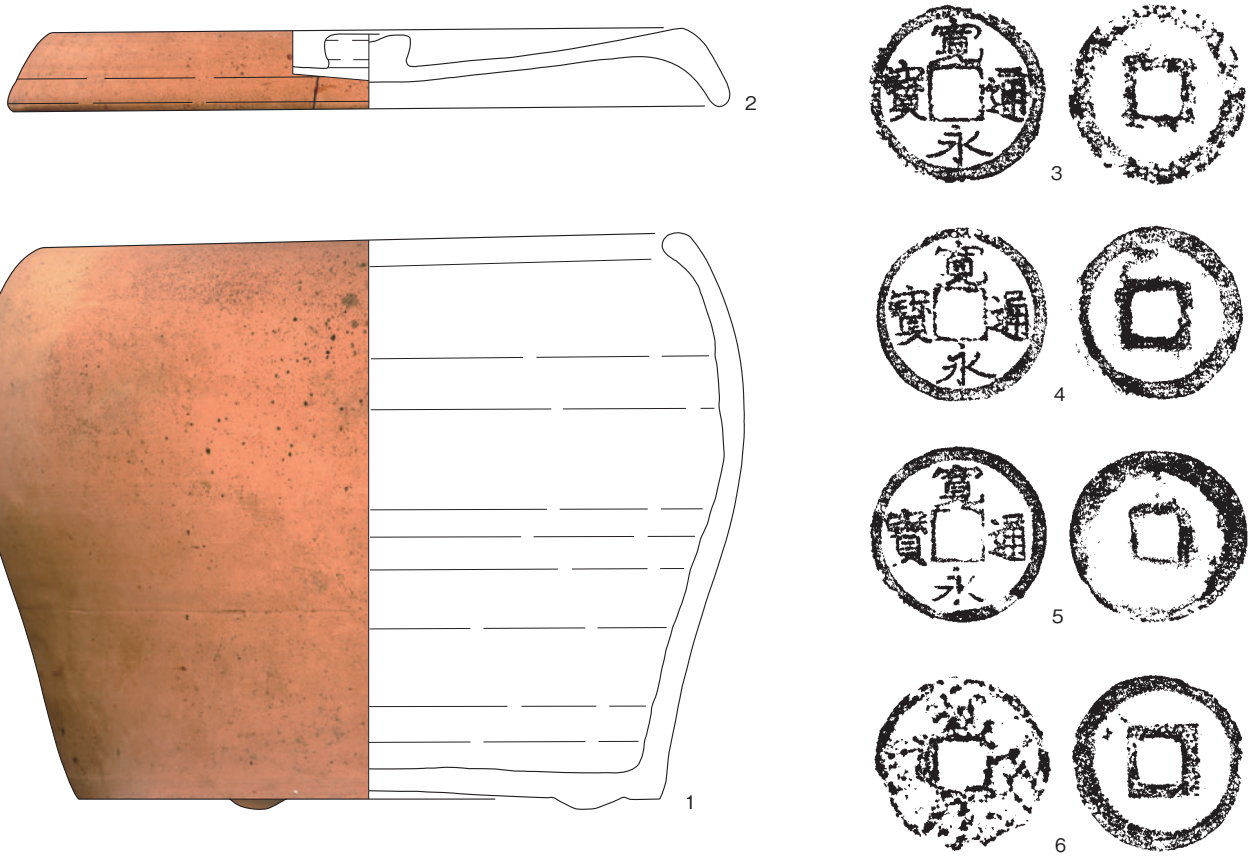


Ⅳ-77 図　ST291 出土遺物



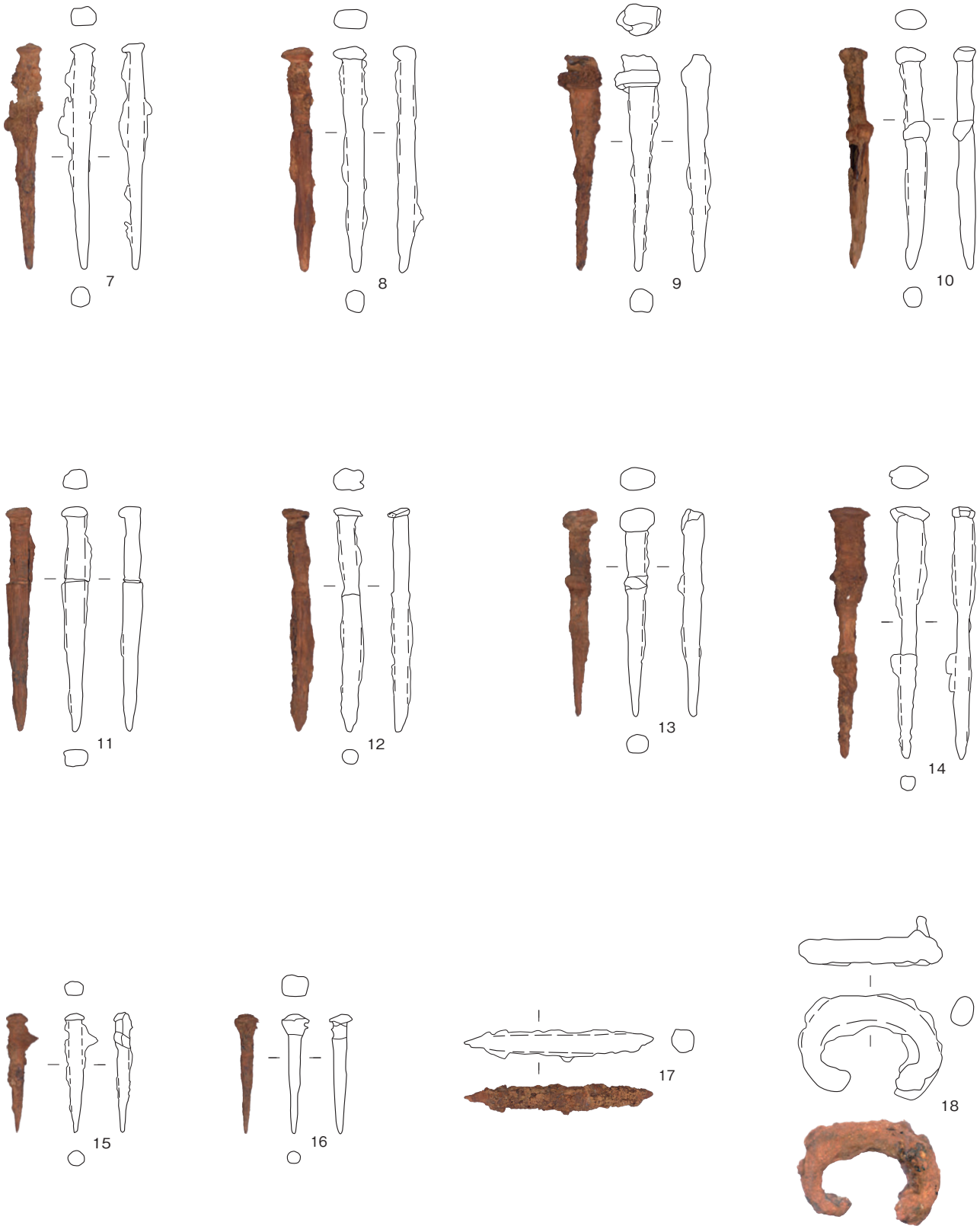
ST295

ST299



ST301（1）

Ⅳ-78 図　ST295、ST299、ST301（1）出土遺物



Ⅳ-79 図　ST301（2）出土遺物

補論　常滑焼大甕の刻印について

本地点からは、甕棺として使用された常滑系陶器大甕が出土しており実測可能な 28 点を図化した。法量は口径 48.6cm ～ 61.7cm、器高 50.0cm ～ 82.5cm である。未成人用と考えられる器高が 50cm 代の 3 点を除くとほぼ成人用の甕棺であろう。

常滑焼大甕は惟村忠志氏により A 類から G 類に分類されている（惟村 1997）。 本地点では E 類から G 類が出土している。E 類は頸部が「く」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっている。F 類は頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっている。G 類は胴上部にリンズが巡る。本地点ではほとんどが F 類で、E 類は南側の 1 点のみの出土である。 すでに報告されている医学部附属病院入院棟 A 地点 2 区（以下　HW2 区）の講安寺墓域からは D 類から G 類が出土している。当地点は本地点南側の講安寺墓地に想定されている地点と連続している墓域である。

刻印のあるものが 4 点確認された。すでに報告されている HW2 区で同様の刻印がもう 1 点確認されている。いずれも常滑焼大甕 F 類である。また、新宿区の連光寺跡でも同様の刻印の甕が出土している。（財団法人新宿区生涯学習財団 2004）

高部淑子「近世・近代初頭における常滑焼の窯と生産者」によると刻印には流通業者である仕切り人の記号と焼成グループの記号が合わせて付けられている。提示された資料では「〇」は森下定助、「ｶｷﾞ」は清水庄蔵など仕切り人の固有記号で、それに続く文字は取引をしていた焼成グループの文字としている。ここで揚げられた焼成記号は定助が 22 個、庄蔵が 18 個で共通するものが 6 個である（高部 2014）。

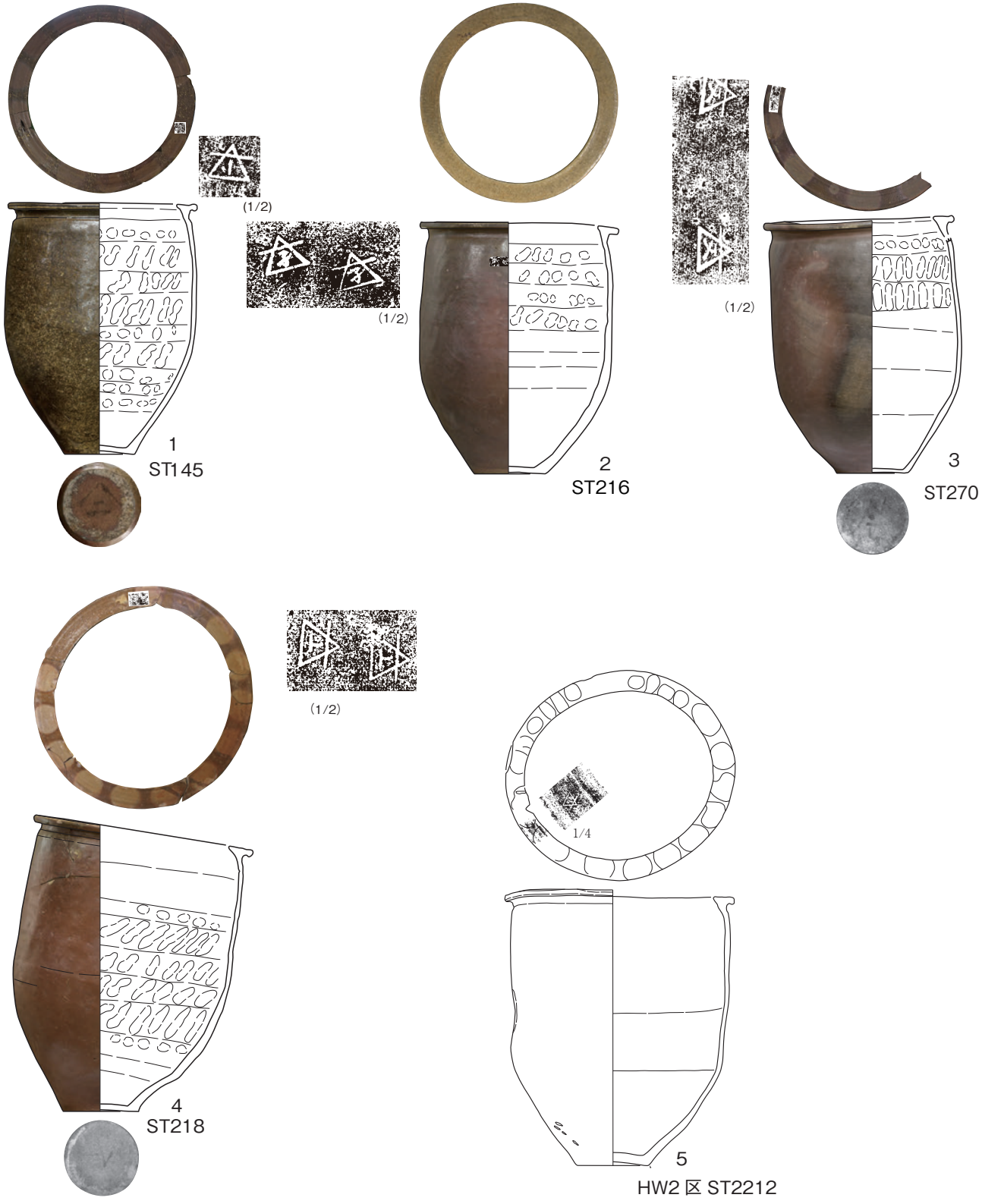
本地点では、共通する「△」「一」は仕切り人の記号 、それ以外の「二」「子」「文」逆「丁」は焼成グループの記号と考えられる。上記の焼成記号と本地点の焼成記号に共通するものは無かった。また、刻印のある 4 点のうち 3 点には底部に墨書が書かれていた。

「△」「一」の記号は常滑村丸山の松本久右衛門の窯印と推察されている（財団法人新宿区生涯学習財団 2004）。この窯印とされているものが仕切り人の印であろう。「△」「一」の刻印のあるものにはいずれも似た特徴が見受けられる。

1、底部に砂目が見られる。いずれも中央部には観られず周縁部に砂が観られる。焼成時に砂をまいたのであろう。
2、胴部から底部に掛けてすぼまり始めがやや上方にあるため緩やかにすぼまる。
3、外面の自然釉は厚みがあり光沢を持つ。
4、口縁部平坦面に環状痕がなく全面に自然釉のものが観られ（表 No.2）、刻印が胴部に押されていた。
5、刻印のある 4 点の甕のうち 3 点の底部に墨書で印が書かれていた。

（大貫）

No.	遺構番号	刻印	底部墨書			口縁環状痕	
1	ST145	二	有	∧二	底部砂目	有	
2	ST216	子	無		底部砂目	無	刻印胴部
3	ST270	文	有	∧文	底部砂目	有	
4	ST218	（逆）丁	有	ス？	底部砂目	有	大形
5	HW2 区 ST2212	二	無		底部砂目	有	



Ⅳ-80 図　常滑焼大甕刻印　S=1/16

※カウント基準を満たす個体資料はないが、破片資料が存在しているとき「0」で示した。

段階	胎質・産地	ＪA1（景徳鎮窯系）									ＪA2		ＪA3			ＪA4		ＪA6	ＪA8	ＪA9	他	JA合計	ＪB（肥前系磁器）								
	器種	1	2	3	5	6	9	10	13	15	2	3	1	2	6	3	他			18			1（碗）								
	小分類																						a	b	c	d	e	f	g	i	j
Ⅷd	SK173	1											1									2					4	1	1		0
	合計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	4	1	1	0	0

段階	胎質・産地	ＪB（肥前系磁器）															ＪB（肥前系磁器）														
	器種	1（碗）															2（皿・平鉢）														
	小分類	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n
Ⅷd	SK173		0	0	1	1		2				2	2				14					0	0								
	合計	0	0	0	1	1	0	2	0	0	0	2	2	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＪB（肥前系磁器）								ＪB（肥前系磁器）									4	5（鉢）										6（坏）			
	器種	2（皿・平鉢）								3（大皿・大平鉢）																							
	小分類	o	p	q	r	s	t	他	小計	a	b	c	d	e	f	他	小計		a	b	c	d	e	f	g	h	他	小計	a	b	c
Ⅷd	SK173			2					2		0			0			0	2					2				0	2	3	2	
	合計	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	3	2	0

段階	胎質・産地	ＪB（肥前系磁器）																														
	器種	6（坏）					7（猪口）				8（仏飯器）					9（香炉・火入れ）										10（瓶）				11（御神酒徳利）		
	小分類	d	e	f	他	小計	a	b	他	小計	a	b	c	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	e	他	小計	a	b	c
Ⅷd	SK173					5			0	0			2	1	3		1	1					0	2	1			1		2	
	合計	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	2	1	3	0	1	1	0	0	0	0	0	2	1	0	0	1	0	2	0

段階	胎質・産地	ＪB（肥前系磁器）																														
	器種	11		12	13（蓋物）						14	15	16	18（合子）				19	20	21	22	23	24	27（水注）			29	30	35	52	他		
	小分類	他	小計		a	b	c	d	他	小計				a	b	他	小計							a	他	小計							
Ⅷd	SK173		2	1	1		1		1	3							0	0		0						0						
	合計	0	2	1	1	0	1	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＪＢ	ＪＣ（瀬戸・美濃系磁器）																												
	器種	JB合計	1（碗）									2（皿・平鉢）								4	5	6（坏）									7
	小分類		a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	b	c	d	e	f	他	小計			a	b	c	d	e	f	g	他	小計	
Ⅷd	SK173	37	7	0		22	2				31		1					1	2	0	1	2	3		2	1				8	
	合計	37	7	0	0	22	2	0	0	0	31	0	1	0	0	0	0	1	2	0	1	2	3	0	2	1	0	0	0	8	0

段階	胎質・産地	ＪＣ（瀬戸・美濃系磁器）																				ＪＮ（九谷系磁器）					ＪＲ（三田系磁器）				
	器種	8	9	10	11（御神酒徳利）				12	13	15	16	18	19	20	21	22	34	36	他	JC合計	1	2	6	他	JN合計	2	5	13	21	他
	小分類				a	b	他	小計																							
Ⅷd	SK173							0				1		0							43					0					
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＪＲ	ＪＺ（産地不明）					磁器合計
	器種	JR合計	1	2	6	他	JZ合計	
	小分類							
Ⅷd	SK173	0					0	82
	合計	0	0	0	0	0	0	82

段階	胎質・産地	TA2	TA5	TA6	TA7	TA8	TA9	TA10	他	TA合計	ＴＢ（肥前系陶器）																				
	器種					5	15	3			1（碗）													2（皿・平鉢）								
	小分類										a	b	c	d	f	g	h	i	j	k	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i
Ⅷd	SK173									0	1	0					0			0		1								0	
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＴＢ（肥前系陶器）																													
	器種	2		3（大皿・大平鉢）						5（鉢）								6	8	9（香炉・火入れ）						10	13（蓋物）					15
	小分類	他	小計	a	b	c	d	他	小計	a	b	c	d	e	他	小計				a	b	c	d	他	小計		a	b	c	他	小計	a
Ⅷd	SK173			0					0					0			1					3					1				1	
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0

段階	胎質・産地	TB（肥前系陶器）																TC（瀬戸・美濃系陶器）													
	器種	15（壺・甕）			22	23（片口鉢）				27	29（擂鉢）				31	他	TB合計	1（碗）													
	小分類	b	他	小計		a	b	他	小計		a	b	他	小計				a	b	c	d	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o
Ⅷd	SK173			0					0					0			1				3					1				1	
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0

段階	胎質・産地	TC（瀬戸・美濃系陶器）																														
	器種	1（碗）																											2（皿・平鉢）			
	小分類	p	q	r	s	u	v	w	x	y	z	a a	a b	a c	a d	a e	a f	ag	ah	ai	aj	ak	al	am	an	他	小計	a	b	c	e
Ⅷd	SK173				10	1		13			3					1											33				
	合計	0	0	0	10	1	0	13	0	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33	0	0	0	0

段階	胎質・産地	TC（瀬戸・美濃系陶器）																														
	器種	2（皿・平鉢）																										3（大皿・大平鉢）				4
	小分類	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	他	小計	a	b	c	d	他	小計	
Ⅷd	SK173		1	0															0				0	1			0	0		0	
	合計	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	TC（瀬戸・美濃系陶器）																														
	器種	5（鉢）									6	8	9（香炉･火入れ）									10（瓶）									
	小分類	f	h	i	j	k	l	m	他	小計			a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	c	d	e	f	g	h	k	他	小計
Ⅷd	SK173						1			1			0							0	0	2	4	3	4	0	0				13
	合計	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	3	4	0	0	0	0	0	13

段階	胎質・産地	TC（瀬戸・美濃系陶器）																														
	器種	12	13	15（壺･甕）							18	19	21	22（花生）				23（片口鉢）					24（灰落し）				25	26	27（水注）			
	小分類			a	b	c	d	e	f	他	小計				a	b	他	小計	a	b	c	他	小計	a	b	他	小計			a	b	
Ⅷd	SK173			0	1	0	0	0	1	1	3			0				0		3			3				0					
	合計	0	0	0	1	0	0	0	1	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＴＣ（瀬戸・美濃系陶器）																												ＴＤ	
	器種	27（水注）				28	29	30	31（火鉢）				34	38	39	40（油受け皿）					40	41	44（ひょうそく）				64	67	他	TC合計	1（碗）	
	小分類	c	d	他	小計				a	b	他	小計				b	c	d	e	他	小計		a	他	小計					b	c
Ⅶd	SK173				0		0	0				0	1								0			0					55		1	
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	55		1	0

段階	胎質・産地	ＴＤ（京都・信楽系陶器）																													
	器種	1（碗）													2（皿・平鉢）						4	5	6	9（香炉･火入れ）					10	13（蓋物）		
	小分類	d	e	g	h	i	j	k	l	n	o	p	他	小計	a	b	c	他	小計				a	b	c	他	小計		a	b	c
Ⅶd	SK173	8		14										23	1				1			3					0				
	合計	8	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	1	0	0	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＴＤ（京都・信楽系陶器）																													
	器種	13（蓋物）			14	15（壺･甕）			18（合子）				19	21	22	23	24	25	26	27（水注）				32	34（土瓶）				36（ちろり）		
	小分類	d	他	小計		a	他	小計	a	b	他	小計								a	d	他	小計		a	b	他	小計	a	b	他
Ⅶd	SK173			0				0				0			0								0					0			
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＴＤ（京都・信楽系陶器）									ＴＥ（備前系陶器）																				ＴＦ
	器種	36	40（油受け皿）				42	46	他	TD合計	1	2（皿・平鉢）				5	10（瓶）				12	15	22	29	37	40	41	65	他	TE合計	1
	小分類	小計	a	b	他	小計						a	b	他	小計		a	b	他	小計										
Ⅶd	SK173	0	1			1				28					0					0			0						0	
	合計	0	1	0	0	1	0	0	0	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＴＦ（志戸呂系陶器）									ＴＧ（常滑系陶器）			ＴＨ（萩系陶器）						ＴＩ（万古系陶器）					ＴＪ（大堀･相馬形陶器）				ＴＫ（丹波系陶器）		
	器種	2	9	10	13	15	29	40	他	TF合計	15	他	TG合計	1（碗）				他	TH合計	1	16	34	他	TI合計	1	6	他	TJ合計	5	10	15
	小分類													a	b	他	小計														
Ⅶd	SK173	1		0						1	0		0	5	10		15		15		5			5	1			1	0		
	合計	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	5	10	0	15	0	15	0	5	0	0	5	1	0	0	1	0	0	0

段階	胎質・産地	ＴＫ（丹波系陶器）			ＴＬ（堺系陶器）			ＴＭ			ＴＮ（九谷系陶器）			ＴＯ（壷屋系陶器）				ＴＰ（淡路系陶器）						ＴＳ（飯能系陶器）			ＴＴ（薩摩系陶器）				ＴＺ
	器種	29	他	TK 合計	29	他	TL 合計	29	他	TM 合計	2	他	TN 合計	10	15	他	TO 合計	2	6	9	20	他	TP 合計	42	他	TS 合計	1	34	他	TT 合計	1
	小分類																														
Ⅷd	SK173			0	0		0			0			0				0						0			0				0	
	合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＴＺ（生産地不明）																													
	器種	2	4	5	6	9	10	15	16	17	19	20	21（軟質施釉）			22	25	27	29	31	33（鍋）				34（土瓶）						
	小分類												a	他	小計						a	b	他	小計	a	b	c	d	e	f	g
Ⅷd	SK173								2						0	2			0		0			0		0	2	0	0	0	0
	合計	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＴＺ（生産地不明）															陶器合計
	器種	34（土瓶）						39	42（行平鍋）					53	他	TZ 合計	
	小分類	i	k	l	n	他	小計		a	c	d	他	小計				
Ⅷd	SK173	0	3	0		16	21		2	0	0		2	1		28	134
	合計	0	3	0	0	16	21	0	2	0	0	0	2	1	0	28	134

段階	胎質・産地	DD（京都・信楽系土器）					ＤＺ（生産地不明）																								
	器種	16	49	50	他	DD 合計	2（皿・平鉢）												5（鉢）					9	15（壺・甕）			21（植木鉢）			
	小分類						a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	小計	a	d	他	小計		a	他	小計	a	b	他	小計
Ⅷd	SK173					0		7		1				0	4				12				0	13			0	1	3		4
	合計	0	0	0	0	0	0	7	0	1	0	0	0	0	4	0	0	0	12	0	0	0	0	13	0	0	0	1	3	0	4

段階	胎質・産地	ＤＺ（生産地不明）																													
	器種	22	31（火鉢）														38	40（油受け皿）								43	44（ひようそく）					
	小分類		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	他	小計		a	b	c	d	e	他	小計		a	b	c	d	e	f
Ⅷd	SK173	1				1					1					2			0				0	0				2			
	合計	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0

段階	胎質・産地	ＤＺ（生産地不明）																														
	器種	44（ひようそく）			45	46	47（ほうろく）				48（七輪）					49	51（塩壺）															
	小分類	g	他	小計			a	b	他	小計	a	b	e	他	小計		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o
Ⅷd	SK173			2			1		0	1					0																
	合計	0	0	2	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＤＺ（生産地不明）																														
	器種	51（塩壺）																						52（燭台）				54	63	OO（蓋）		
	小分類	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z	a a	a b	a c	a d	a e	a f	a g	a h	ai	他	小計	a	b	他	小計			a	b	
Ⅷd	SK173								1						1								2		2		2					
	合計	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2	0	2	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地	ＤＺ（生産地不明）											他	DZ合計	土器合計	総計	備考
	器種	OO（蓋）															
	小分類	c	d	e	f	g	j	k	l	o	他	小計					
Ⅷd	SK173	1	1					1			0	3		39	39	255	
	合計	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	3	0	39	39	255	

小 結

医学部附属病院基幹整備外構施設等地点（以下、本地点）は、明治末の全面改葬時及び大正初期の開発などの影響で調査区全面が立川ロームⅢ～Ⅳ層まで削平され、近世以前の整地層及び遺構面は遺存していなかった。よって全ての遺構が地山であるローム層上面で検出されている。確認された遺構、遺物は全て近世期に属し、それ以前の生活痕跡は認められなかった。

本地点の近世期における歴史的環境は、第Ⅰ章に記したとおり、元和２年（1616）より浄土宗講安寺境内に位置する。元禄３年（1690）に北隣する富山藩が本地点を含む境内の一部を借地し、天保年間末から弘化年間初頭頃に返却された。弘化５年（1848）には返却地の一部が本郷元町の浄土真宗興安寺、浄土真宗等正寺の墓地として貸地され、本地点は図面等との対比から３寺の墓地にまたがることが確認された。３寺の墓地は明治 43 年に全て巣鴨村庚申塚の共葬墓地へ改葬され、大正元年（1912）に墓地跡地の一部（三番地二号）を東京帝国大学が取得して現在に至る。

本地点で検出された主な遺構は、厩跡･建物跡･地下室･墓壙で構成され、遺構の新旧関係より厩跡→建物跡→地下室→墓壙の変遷が捉えられた。大名屋敷の構成要素として評価される厩跡・地下室が富山藩邸借地期間に、墓壙群が借地返却後の墓地期間に帰属すると考えられる。また元禄３年以前に比定される遺構・遺物は認められなかったことより、本地点検出遺構は全て富山藩借地段階または墓地段階に帰属するものである。それを踏まえて、元禄３年から弘化初頭頃までの富山藩借地期間をⅠ期、弘化５年から明治 43 年改葬までの墓地経営期間をⅡ期として、前者に比定される厩跡、建物跡、地下室と後者に比定される墓壙を各段階の帰属遺構として区分した。以下、各期の調査研究成果を列記する。

Ⅰ期の状況

Ⅰ期帰属遺構は、Ｂライン南 2m 付近を南限に分布することから、それ以南に富山藩借地と講安寺の境界が想定される。厩跡はＢライン付近を東西に伸び、便槽遺構数より７疋立以上が復元される。その北側には建物跡1、2とした柱穴列が展開する。厩便槽遺構（SK237-2）と建物跡２（SB157）が重複し、建物跡２が新しいことから、厩跡→建物跡２への変遷が確認される。また両遺構上に位置する SU151 からは、明和６年（1769）に鋳造された 11 波の寛永通宝四文銭が共伴しており、厩から地下室への変遷が確認される。

建物跡１の南東部に位置する SP162 は、17 世紀後葉の遺物が出土したSX163より新しく、北東部のSP169は、18 世紀初頭の遺物が出土した SK167 より旧いことから、比較的短期間の構造物と考えられる。また南北列が４間間隔で、確認された柱痕が径３～４寸程度の掘立柱であることから、比較的簡素な建物もしくは塀・柵列の可能性が考えられる。

地下室は調査区全域に分布し、特にＡライン周辺に集中する傾向が窺える。出土遺物から廃絶年代は概ね 18 世紀前葉、中葉、後葉の３段階に区分され、重複、近接して検出された SU156・SU201 や、SU219・SU280・SU229 は時間差を顕し、一定範囲内での造り替えを示している。これらの調査所見を総合すると、富山藩借地期の本地点は、厩（17 世紀末～ 18 世紀初頭）→建物（18 世紀前葉）（→）地下室（18 世紀前葉～後葉）と変遷するが、その後（19 世紀前葉～中葉）は明確な帰属遺構・遺物がなく、借地利用度が下がった可能性も推測される。

富山藩借地内の厩跡は、近接する医学部附属病院入院棟Ａ地点２区（以下、HW2 区）で、南北に延びる９疋立以上の遺構が検出された。本遺構は出土遺物より元禄年間後半の廃絶と考えられる SK3715 埋没後に構築され、地下室 SU3542 より旧い。本地点検出遺構とは約 94° の開きを有する。両遺構とも各馬房を囲む四辺の柱穴のうち片辺しか調査していないため詳細な構造は不詳であるが、本地点と HW2 区厩跡では柱穴規模に違いが認められ、それが時間差よるものか構造差によるものか概期の借地利用を考える課題である。富山藩邸内の厩に関して、研究編宮崎論考で取り上げられた寛政５年の火災記事が知られるが、既述した遺構変遷から研究編追川論考でも指摘されているように、借地内で厩の移動があったことが窺われる。一方、本地点厩跡北側柱穴列の延長は、大正元年に取得した大学敷地境界南辺軸とほぼ一致することが確認された。これはこの軸線方向が富山藩借地以前から機能し現在まで踏襲されていたことを示唆し、富山藩借地以前の講安寺境内の様相を考える上でも非常に興味深い結果である。

Ⅱ期の状況

B37・38 グリッドに位置する SK173 は、遺構形態、覆土堆積状況から採土坑と推定される。覆土中からは推

定最少個体数 255 個体の陶磁器・土器を含む廃棄資料が出土し、埋め戻しに合わせて廃棄場として利用されたことが窺われる（第Ⅳ章 陶磁器・土器類組成表参照）。出土磁器には木型打ち込み陰刻文を有す瀬戸・美濃系染付碗（Ⅲ -41 図 10、11、Ⅲ -49 図 5）が共伴し、酸化コバルト染付製品が認められないことから、東大編年Ⅷ d 期（1850 ～ 60 年代）の様相を示し、弘化 5 年以降明治初頭までの廃棄資料と考えられる。成瀬論考による弘化 5 年以降の区割りから、本遺構位置は講安寺墓地の最北部に該当する。本遺構出土資料には埋葬器と推定される鉄釉壺（Ⅲ -44 図 63）も認められるが、碗 47%、土瓶 8.6%、小坏 6.3%、急須 3.1% と約 2/3 を喫茶具が占めており、Ⅳ -42、43 図に示したように瀬戸・美濃、京都・信楽、萩など同一製品複数個体を誂えた状況から接客用と推定される。本遺構は南壁で ST248 ～ 250 と重複しそれらより新しい。南壁位置はおおよそ富山藩借地との境界推定線に対応し、ST248 ～ 250 は、借地返却以前の講安寺墓地の可能性が高い。本遺構より新しい重複遺構は認められないことから、埋め戻された明治初頭以降は、興安寺及び等正寺借地墓地への導線として確保されていたと考えられる。

検出された墓壙は木棺墓、甕棺墓、火消壺棺墓、火葬蔵骨器墓など各種の埋葬形態を呈し、それらがブロックを形成して分布する様相が看取された。図面、文献資料との対比から、弘化 5 年以降は興安寺、等正寺借地墓地と講安寺墓地に跨ることが確認され、HW2 区出土人骨分析近藤論考（研究編再録）で示された HW2 区と本地点の男女比、年齢比の被葬者構成の差異が、講安寺墓地と興安寺・等正寺墓地被葬者相の違いによることが確認された。

検出墓壙には明治 43 年の全面改葬などで人骨のみ改葬された甕棺や改葬後に廃棄された火葬蔵骨器などが多々認められたが、遺存状況の良好な火葬蔵骨器墓の観察から、火葬蔵骨器墓は土葬墓より新しいことが確認された。この結果は興安寺過去帳と矛盾がなく、宮崎論考で扱われた明治 6 ～ 8 年の火葬禁止令、明治 7 年の朱引線内埋葬禁止と翌年の火葬解禁政策と結び付く様相と考えられる。興安寺過去帳をみると朱引線内土葬禁止が厳守されていたとはいえないが、本地点の甕棺や、研究編小林論考で指摘されたように土葬墓出土副葬品が 19 世紀前中葉の様相を示すことからも、明治 8 年前後で土葬から火葬への転機があったと捉えられよう。また研究編大貫論考で示された三耳壺を転用した陶器火葬蔵骨器から火葬蔵骨器専用器の硬質瓦質蔵骨器への変遷と、明治 43 年改葬時の瓦質蔵骨器多量廃棄もそれを示唆していよう。

近代墓地の考古学的調査は、近代自体が調査対象とされないケースや現代子孫と直接結び付くデリケートな情報があるなどの理由から、表土扱いや調査結果が報告書に反映されない事例が少なくない。そのためこれまで硬質瓦質火葬蔵骨器に関する研究は皆無といっても過言ではない。硬質瓦質火葬蔵骨器は整形技法を始め、器面に回転施文具による連続押形文が施されるなど、硬質瓦質火鉢生産者が生産していたことは想像に難しくない。明治政府の埋葬法政策の中で、火鉢生産者が火葬蔵骨器専用器の生産に至る過程と動向を解明するためにも、近代墓地調査の分析が不可欠である。

墓壙一覧表（1）

種別	遺構名	埋葬施設		被葬者 最少個体数	性別	年令	備考	副葬品 数珠	銭貨	簪・笄	義歯	煙管	ミニチュア	人形	ぶら人形	その他	合計	備考
ST	7	灰釉壺蔵骨器															0	
ST	8	木棺		1	男性?	成人											0	上部に墓標台廃棄「川越屋」
ST	9	鉄釉甕蔵骨器															0	蓋に墨書「骨」
ST	10	火消壺棺															0	
ST	13	甕棺		1	不明	未成人≧6	11～12才										0	
ST	16	不明																
ST	21	円形木棺		2	男性	成人	老年										0	
					不明	成人												
ST	22	火消壺棺														碗1、かわらけ2	3	
ST	23	円形木棺		1	男性	成人											0	
ST	24	重層甕棺	a						1						1	硯1		甕c墨書「◎」 上部に墓標廃棄（正面「□□院釈□□□大姉／□□院釈□□□大姉」右面「天保八□酉年二月十八日卒／浄　広田□□妻」左面「嘉永[ ]／智[ ]妻」）
			b	1	不明	成人												
			c															
			d															
			e	1	不明	不明												
ST	25	灰釉壺蔵骨器											3	4	1	油受皿1	6	
ST	26	火消壺棺															0	炭混入
ST	27	火消壺棺												1			1	
ST	30	木棺？															0	
ST	31	木棺 三耳壺蔵骨器		3	男性	成人											0	
					不明	成人	ST31/32不分 一体は老年											
ST	32	木棺			不明	成人											0	
ST	34	木棺		2	男性？	成人			1								1	
					女性	成人												
ST	35	甕棺															0	
ST	36	火消壺棺															0	
ST	37	蔵骨器？															0	
ST	39	瓦質蔵骨器															0	
ST	40	瓦質蔵骨器															0	
ST	42	方形木棺		1	女性	成人											0	
ST	44	円形木棺															0	
ST	48	方形木棺		1	女性?	成人											0	
ST	49	方形木棺		1	女性	成人	焼骨混入		1							碧石1、皿1	3	
ST	50	瓦質蔵骨器															0	
ST	51	甕棺		1	女性	成人										蓋物1	1	
ST	52	方形木棺？							5								5	
ST	59	方形木棺															0	
ST	61	甕棺															0	
ST	65	円形木棺		1	不明	未成人											0	
ST	68	円形木棺															0	
ST	69	瓦質蔵骨器															0	
ST	72	甕棺							2								2	
ST	76	木棺		1	男性	成人	動物骨混入										2	
ST	83	灰釉壺蔵骨器															0	
ST	84	灰釉壺蔵骨器															0	
ST	85	円形木棺		2	不明	未成人≦5	3才程度									環1	1	
					男性	成人												
ST	87	木棺？											1				1	
ST	88	方形木棺		1	女性	成人			4						1		5	
ST	90	瓦質蔵骨器															0	
ST	96	円形木棺		1	男性	成人											0	

墓壙一覧表（2）

種別	遺構名	埋葬施設	被葬者				副葬品										備考
			最少個体数	性別	年令	備考	数珠	銭貨	簪・笄	義歯	煙管	ミニチュア	人形	ぶら人形	その他	合計	
ST	97	重層甕棺	1	不明	成人					1					碗1、皿1	3	上部に墓標廃棄（「嘉永七寅年／釈 教信童女／五月十三日」）
ST	98	灰釉壺蔵骨器														0	
ST	101	火消壺棺														0	
ST	104	木棺	3	女性	成人											0	
				男性	成人												
				不明	成人？												
ST	106	土師質蔵骨器														0	
ST	111	円形木棺	5	男性	成人											4	
				不明	成人												
				不明	成人							3			火打石1		
				不明	未成人≦5												
				不明	未成人≦5												
ST	112	円形木棺	2	男性	成人											0	
				男性？	成人												
ST	113	木棺	1	不明	未成人≦5	3,4才		1					1			2	
ST	115	木棺	2	不明	未成人≦5								3			3	
				不明	未成人≦5												
ST	116	木棺	7	不明	未成人≧6											3	
				不明	不明	焼骨4		2							砥石1		
				女性	成人												
				女性	成人												
ST	117	円形木棺	1	男性	成人											0	
ST	119	円形木棺	4	不明	未成人≦5											5	
				不明	未成人≦5												
				不明	未成人≦5							1	2		鳩笛2		
				男性	成人												
ST	120	円形木棺	4	不明	未成人≧6											0	
				不明	未成人≦5												
				不明	未成人≦5												
				不明	未成人≦5	胎児～新生児											
ST	121	方形木棺		女性	成人											0	
ST	125	円形木棺	2	女性	成人	老年										6	
				不明	成人			5					1				
ST	126	木棺	1	不明	未成人≦5											0	
ST	128	火消壺棺	1	不明	未成人≦5											0	
ST	129	甕棺	1	不明	成人										碗1、急須1、蓋1	3	
ST	130	甕棺														0	
ST	131	方形木棺	3	不明	成人											0	上部に墓標廃棄（正面「顕□／釈□□／妙□右面「妙□」）
				女性	成人												
				不明	未成人≧6	6～7才											
ST	133	甕棺						1								1	
ST	136	方形木棺	1	不明	7才前後											0	
ST	140	重層甕棺														0	
ST	144	木棺														0	
ST	145	甕棺	1	男性	成人											0	
ST	146	方形木棺	1	不明	不明	焼骨混入。					1					1	墨書「八」「二」
ST	147	火消壺棺											1	1		2	
ST	148	円形木棺	1	男性?	成人	幼児骨混入										0	
ST	149	甕棺	2	女性	成人			1			2				碗1	4	
				男性	成人												

墓壙一覧表（3）

種別	遺構名	埋葬施設		被葬者 最少個体数	性別	年令	備考	副葬品 数珠	銭貨	簪・笄	義歯	煙管	ミニチュア	人形	ぶら人形	その他	合計	備考
ST	153	方形木棺		4	不明	未成人≧6	7～8才						1			紅皿1、皿2	4	改葬廃棄火消壺棺 墨書「前」
					不明	未成人≦5	3才くらい											
					不明	未成人≦5	胎児～新生児											
					不明	不明												
ST	154	火消壺棺		1	不明	未成人≦5	胎児										0	内部墨書「〇」「六」
ST	155	火消壺棺											1				1	
ST	160	方形木棺		1	不明	未成人≧6	6～8才								1		1	
ST	174	灰釉壺蔵骨器														合子身・蓋	2	
ST	175	火消壺棺 灰釉壺蔵骨器 瓦質蔵骨器															0	
ST	176	円形木棺		1	女性	成人										徳利	1	
ST	177	円形木棺		1	女性	未成人≧6						1		1			2	
ST	178	鉄釉壺蔵骨器															0	
ST	180	円形木棺		1	不明	未成人										燗徳利	1	
ST	181	円形木棺							6								6	
ST	183	方形木棺？															0	
ST	184	方形木棺		1	男性	成人											0	
ST	186	方形木棺							1			1				箸2	4	
ST	187	甕棺＋直上に追葬（方形木棺か）		2	男性	成人							1				1	
					男性	成人												
ST	195	木棺？							3								3	
ST	196	円形木棺										1					1	
ST	198	円形木棺		1	男性	成人											0	
ST	199	方形木棺		1	不明	未成人≦5	4才程度						8				8	
ST	207	木棺		1	不明	未成人≦5							3			御神酒徳利1	4	
ST	213	甕棺内鉄釉甕蔵骨器															0	
ST	216	甕棺		1	女性	成人				1						泥面子1	2	
ST	218	甕棺		1	不明	成人						2					2	
ST	224	木棺			不明	未成人≦5	新生児								1		1	
ST	225	鉄釉壺蔵骨器															0	蓋墨書「大和田」
ST	230	？		1	不明	未成人≦5	胎児～新生児										0	
ST	245	火消壺棺											1				1	
ST	246	木棺？		1	不明	不明	焼骨										0	
ST	247	甕棺		1	女性	成人								1		瓶1	2	
ST	248	不明		1	不明	未成人≦5	248，249不分		6								6	
ST	249	不明															0	
ST	250	方形木棺？																
ST	258	円形木棺		1	男性	成人						1	4	1		笛3	9	
ST	259	方形木棺？															0	
ST	260	円形木棺		1	不明	未成人≦5	1.5才							2			2	
ST	263	不明															0	
ST	264	火消壺棺							3								3	
ST	265	木棺？		1	不明	未成人≦5	幼児								1	環1	2	
ST	267	甕棺？															0	
ST	268	方形木棺		1	女性	成人										環1	1	
ST	270	甕棺		1	不明	成人											0	墨書「八」「文」
ST	281	重層甕棺	a	1	男性	成人						2				摺鉢1	3	
			b	1	不明	成人												
ST	282	重層甕棺？							5							泥面子1	6	
ST	283	甕棺										1				笛1	2	
ST	284	甕棺														紅皿1	1	

墓壙一覧表（4）

種別	遺構名	埋葬施設		被葬者				副葬品										備考
				最少個体数	性別	年令	備考	数珠	銭貨	簪・笄	義歯	煙管	ミニチュア	人形	ぶら人形	その他	合計	
ST	285	不明		1	不明	成人											0	
ST	286	甕棺		1	女性	成人		1								徳利1	2	
ST	290	円形木棺		1	男性	成人											0	
ST	291	方形木棺		2	女性	成人			14							ボタン2	16	
					男性	成人												
ST	295	瓦質蔵骨器															0	
ST	298	円形木棺			?	?											0	
ST	299	重層甕棺？												1			1	
ST	301	火消壺棺＋甕棺？		2	男性	成人			4							釘11、引手1	16	
					女性	成人												
ST	303	木棺																

○胎質

J 磁器　　T 陶器　　D 土器

○生産地

A－輸入陶磁器

A1　景徳鎮窯系
A2　漳州窯系
A3　徳化窯系
A4　龍泉窯系
A5　宜興窯系
A6　朝鮮
A7　ベトナム
A8　ヨーロッパ
A9　福建・広東系
A10 西アジア

B－肥前系
C－瀬戸・美濃系
D－京都・信楽系
E－備前系
F－志戸呂系
G－常滑系
H－萩系
I－万古系
J－大堀・相馬系
K－丹波系
L－堺系
M－益子・笠間系
N－九谷系
O－壺屋系
P－淡路系
Q－江戸在地系 *
R－三田系
S－飯能系
T－薩摩系
Z－不明

○器種

1. 碗	2. 皿･平鉢	3. 大皿･大皿鉢	4. 燗徳利	5. 鉢
6. 坏	7. 猪口	8. 仏飯器	9. 香炉･火入れ	10. 瓶
11. 御神酒徳利	12. 油壺	13. 蓋物	14. 筆立て	15. 壺･甕
16. 急須	17. 燗鍋	18. 合子	19. 水滴	20. 蓮華
21. 植木鉢	22. 花生	23. 片口鉢	24. 灰落し	25. 鬢水入れ
26. 茶入れ	27. 水注	28. 漫瓶	29. 擂鉢	30. 餌入れ
31. 火鉢	32. 柄杓	33. 鍋	34. 土瓶	35. 戸車
36. ちろり	37. 薬研	38. 手焙り	39. おろし皿	40. 油受け皿
41. 油徳利	42. 行平鍋	43. 十能	44. ひょうそく	45. 瓦燈
46. カンテラ	47. ほうろく	48. 七輪	49. 涼炉	50. 五徳
51. 塩壺	52. 燭台	53. 蒸し器	54. 懐炉	
63. あんか	64. 煙硝擂鉢	65. 乳棒	66. 硯屏	67. 釜

* 本報告では人形・玩具のみで使用

東京大学構内の遺跡陶磁器・土器の分類

東大陶磁器・土器分類 Ver.4.1（■は新規、▲は Ver.4 で修正を加えたもの。各分類の詳細は年報 10 参照）

◎ＪＡ１－－景徳鎮窯系
◎ＪＡ２－－漳州窯系
◎ＪＡ３－－徳化窯系
◎ＪＡ４－－龍泉窯系
◎ＪＡ６－－朝鮮
◎ＪＡ８－－ヨーロッパ
■◎ＪＡ９－－福建・広東系

◎ＪＢ群－－肥前系磁器
○１－－碗
・ＪＢ－１－ａ（高台断面が幅広「Ｕ」字状、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｂ（底部無釉）
・　〃　ｃ（高台断面三角の製品、長吉谷窯指標）
・　〃　ｄ（高台断面シャープな「Ｕ」字状で高台高が高い、蓋付有、高尾窯Ⅳ～Ⅵ層指標）
・　〃　ｅ（高台断面シャープな「Ｕ」字状で高台高が低い、蓋付有）
・　〃　ｆ（高台径が小さい半球形の薄手碗）
・　〃　ｇ（絵付・作りの粗雑な碗）
・　〃　ｉ（高台高が高、慣用名：小広東碗）
・　〃　ｊ（高台径が小さい腰の張る碗、慣用名：小丸碗）
・　〃　ｋ（大振りの筒形碗、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｌ（筒形碗）
・　〃　ｍ（慣用名：広東碗、蓋付有）
・　〃　ｎ（端反形碗、蓋付有）
・　〃　ｏ（腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗）
・　〃　ｐ（高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有）
・　〃　ｑ（高台が「ハ」の字状に開く碗、大振りで腰が張る、蓋付有）
・　〃　ｒ（朝顔形、蓋付有）
▲　・　〃　ｓ（丸碗形、幅広高台）
・　〃　ｔ（体部が直線的に開く大振りの碗、内側に主文様、慣用名：うがい茶碗）
・　〃　ｕ（JB-1- ｄのやや小振りの碗形、コンニャク判が多い）
・　〃　ｖ（梅樹文が描かれた粗製の碗）
・　〃　ｗ（高台径が大きく腰の張る碗、コンニャク判が多い）
・　〃　ｘ（見込み蛇ノ目釉剥ぎ、粗製）
▲　○２－－皿・平鉢
・ＪＢ－２－ａ（高台断面が幅広「Ｕ」字状、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｂ（高台断面三角で高台径が小さい、ダンバギリ窯指標）
・　〃　ｃ（高台断面三角で高台径が大きい、柿右衛門Ｂ窯など指標）
・　〃　ｄ（高台断面がシャープな「Ｕ」字状で上質の製品、南川原窯ノ辻窯指標）
・　〃　ｅ（高台断面がシャープな「Ｕ」字状）
・　〃　ｆ（やや深く、腰が張る、多くは輪花に成形）
・　〃　ｇ（絵付・作りが粗雑な皿、扇面文様が多い）
・　〃　ｈ（蛇ノ目高台、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｉ（蛇ノ目凹形高台で高台高が高い）
・　〃　ｊ（蛇ノ目凹形高台で高台高が低い）
・　〃　ｋ（見込み蛇ノ目釉剥ぎで底部無釉）
▲　・　〃　ｌ（見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が小）
▲　・　〃　ｍ（見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台径が大）
・　〃　ｎ（鍋島）
・　〃　ｏ（器高が低く腰が張る皿）
・　〃　ｐ（浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標）
・　〃　ｑ（高台断面が「Ｕ」字状、輪花に成形、見込み全面に一枚絵）
・　〃　ｒ（糸切細工の貼付高台）
■　・　〃　ｓ（初期伊万里の系統で内山の影響を受けた外山で作られた粗製品、広瀬向窯など指標）
■　・　〃　ｔ（高台内蛇ノ目釉剥ぎ）
▲　○３－－大皿・大平鉢
▲　・ＪＢ－３－ａ（いわゆる初期伊万里）
▲　・　〃　ｂ（「Ｕ」字状の高台）
・　〃　ｃ（高台内蛇ノ目釉剥ぎ）
・　〃　ｄ（蛇ノ目凹形高台）
・　〃　ｅ（浅手で口縁部外反、輪花、墨弾き雲形文が多い、志田窯指標）
■　・　〃　ｆ（高台断面が三角形や逆台形）
○４－－燗徳利
▲　○５－－鉢
・ＪＢ－５－ａ（高台断面が幅広「Ｕ」字状、いわゆる初期伊万里）
・　〃　ｂ（高台断面がシャープな「Ｕ」字状）
・　〃　ｃ（高台内蛇ノ目釉剥ぎ、青磁に多い）
・　〃　ｄ（蛇ノ目凹形高台）
・　〃　ｅ（慣用名：八角鉢）
・　〃　ｆ（高台断面三角形）
■　・　〃　ｇ（鍋島）
■　・　〃　ｈ（見込み蛇ノ目釉剥ぎ）
○６－－坏
・ＪＢ－６－ａ（丸形）
・　〃　ｂ（端反形）
・　〃　ｃ（極めて薄手）
・　〃　ｄ（腰折れ直立形）
・　〃　ｅ（型作り、慣用名：紅皿）
・　〃　ｆ（高台径が小さい半球形の薄手坏）
○７－－猪口
・ＪＢ－７－ａ（底部蛇ノ目凹形高台状）
・　〃　ｂ（底部輪高台状）
○８－－仏飯器
・ＪＢ－８－ａ（脚部のえぐりが深い）
・　〃　ｂ（脚部のえぐりが浅い）
・　〃　ｃ（脚部のえぐりが浅く、畳付外周面取り）
○９－－香炉・火入れ
・ＪＢ－９－ａ（底裏に円盤状の露胎部）
・　〃　ｂ（底部蛇ノ目釉剥ぎ）
・　〃　ｃ（高台状の露胎部）
・　〃　ｄ（べた底）
■　・　〃　ｅ（蛇ノ目凹形高台）
■　・　〃　ｆ（蛇ノ目高台）
■　・　〃　ｇ（底部・高台内無釉）
○10－－瓶
・ＪＢ－10－ａ（大型長頸瓶）
・　〃　ｅ（いわゆる初期伊万里、口縁部が朝顔形に開く）
○11－－御神酒徳利
・ＪＢ－11－ａ（瓶子形）
・　〃　ｂ（鶴首形）
・　〃　ｃ（筒形）
○12－－油壺
○13－－蓋物
・ＪＢ－13－ａ（丸形）

・　〃　b（筒形）
・　〃　c（段重）
■　・　〃　d（型作）
○15－－壺・甕
○16－－急須
○18－－合子
・ＪＢ－18－a（扁平な球形）
・　〃　b（筒形）
○19－－水滴
○20－－蓮華
○21－－植木鉢
○22－－花生
■　○23－－片口鉢
○24－－灰落し
○27－－水注
・ＪＢ－27－a（銚子形、釣手）
○29－－擂鉢
■　○30－－餌入れ
○35－－戸車
■　○52－－燭台

◎ＪＣ群－－瀬戸・美濃系磁器
○1－－碗
・ＪＣ－1－a（丸碗、蓋付有）
・　〃　b（筒形碗）
・　〃　c（蓋付有、慣用名：広東碗）
・　〃　d（端反形碗、蓋付有）
・　〃　e（腰が張り、体部が直立する小振りの碗、慣用名：湯呑碗）
・　〃　f（高台から直線的に開く薄手の碗、蓋付有）
■　・　〃　g（慣用名：小丸碗）
▲　○2－－皿・平鉢
・ＪＣ－2－a（蛇ノ目凹形高台）
・　〃　b（輪高台）
・　〃　c（蛇ノ目高台）
・　〃　d（そり皿、木型打込など）
・　〃　e（陽刻）
・　〃　f（陰刻）
○4－－燗徳利
▲　○5－－鉢
○6－－坏
・ＪＣ－6－a（丸形）
・　〃　b（端反形）
・　〃　c（筒形）
・　〃　d（極めて薄手）
・　〃　e（寿文坏）
・　〃　f（体部が直線的に開く）
・　〃　g（型作り、慣用名：紅皿）
○7－－猪口
○8－－仏飯器
○9－－香炉・火入れ
○10－－瓶
○11－－御神酒徳利
・ＪＣ－11－a（瓶子形）
・　〃　b（鶴首形）
○12－－油壺
○13－－蓋物
○15－－壺・甕
○16－－急須
○18－－合子
○19－－水滴
○20－－蓮華
○21－－植木鉢
○22－－花生
○34－－土瓶
■　○36－－ちろり

◎ＪＮ群－－九谷系磁器
○1－－碗
▲　○2－－皿・平鉢
○6－－坏

■◎ＪＲ－－三田系磁器
■　○2－－皿・平鉢
■　○5－－鉢
■　○13－－蓋物
■◎ＪＺ群－－生産地不明
○1－－碗
○2－－皿・平鉢
○6－－坏

陶器分類
◎ＴＡ5－－宜興窯系
◎ＴＡ6－－朝鮮
◎ＴＡ7－－ベトナム
◎ＴＡ8－－ヨーロッパ
■◎ＴＡ9－－福建・広東系
■◎ＴＡ10－－西アジア

◎ＴＢ群－－肥前系陶器
○1－－碗
・ＴＢ－1－a（大振りの丸碗、慣用名：呉器手）
・　〃　b（外面主文様、慣用名：京焼風陶器）
・　〃　c（内面主文様、慣用名：京焼風陶器）
・　〃　d（刷毛目丸碗、渦巻状の刷毛目）
・　〃　f（陶胎染付）
・　〃　g（刷毛目丸碗、打・波状・鋸歯状の刷毛目）
・　〃　h（刷毛目端反形碗）
▲　・　〃　i（青緑・灰釉、丸形碗、内野山窯指標）
■　・　〃　j（卵手）
■　・　〃　k（象嵌の施された碗、慣用名：三島手）
▲　○2－－皿・平鉢
▲　・ＴＢ－2－a（青緑・灰釉、輪剥、内野山窯指標）
▲　・　〃　b（灰・青緑釉砂目）
・　〃　c（慣用名：京焼風陶器）
・　〃　d（透明釉砂目、内野山窯指標）
・　〃　e（胎土目）
・　〃　f（陶体染付）
■　・　〃　g（刷毛目）
■　・　〃　h（白土・鉄などで象嵌の施された皿・平鉢、慣用名：三島手）

■ ・ 〃 i（いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す）
■ ○3－－大皿・大平鉢
■ ・TB－3－a（刷毛目）
■ ・ 〃 b（白土･鉄などで象嵌の施された大皿･大平鉢、慣用名:三島手）
■ ・ 〃 c（慣用名：京焼風陶器）
■ ・ 〃 d（内野山窯指標）
▲ ○5－－鉢
・TB－5－a（刷毛目鉢）
・ 〃 b（白土・鉄などで象嵌の施された鉢、慣用名：三島手）
・ 〃 c（慣用名：京焼風陶器）
▲ ・ 〃 d（青緑・灰釉、内野山窯指標）
■ ・ 〃 e（いわゆる呉器手碗のような胎土、釉調を有す）
○6－－坏
■ ○8－－仏飯器
○9－－香炉・火入れ
・TB－9－a（陶胎染付）
・ 〃 b（慣用名：京焼風陶器）
・ 〃 c（刷毛目）
■ ・ 〃 d（青緑釉）
○10－－瓶
○13－－蓋物
・TB－13－a（陶胎染付）
・ 〃 b（刷毛目）
■ ・ 〃 c（慣用名：京焼風陶器）
○15－－壺・甕
■ ・TB－15－a（ロクロ成形）
■ ・ 〃 b（タタキ成形）
■ ○22－－花生
○23－－片口鉢
・TB－23－a（深いタイプ、刷毛目、底部鉄釉）
・ 〃 b（浅いタイプ、刷毛目、蛇ノ目釉剥ぎ）
■ ○27－－水注
○29－－擂鉢
・TB－29－a（内外面全釉）
・ 〃 b（口縁部のみ施釉）
■ ○31－－火鉢

◎TC群－－瀬戸・美濃系陶器
○1－－碗
・TC－1－a（天目碗）
・ 〃 b（白天目）
・ 〃 c（灰釉薄掛け丸碗）
・ 〃 d（灰釉に簡略な山水の呉須絵、慣用名：御室碗）
・ 〃 f（腰が張る二段の段を有する碗、渦巻高台、灰釉鉄釉流し）
・ 〃 g（灰釉、「ハ」の字状に開く、柳文の鉄絵が多い）
・ 〃 h（丸碗、慣用名：太白手）
・ 〃 i（筒形碗、慣用名：太白手）
・ 〃 j（慣用名：広東碗、太白手）
・ 〃 k（体部中位に大きな凹み有、灰釉）
・ 〃 l（半筒形碗、慣用名：せんじ）
・ 〃 m（半球形の小振りの碗、笹文など多い、京焼風）
・ 〃 n（平碗、見込みに文様、京焼風）
・ 〃 o（慣用名：尾呂茶碗）
・ 〃 p（漆黒釉に長石釉散らし、慣用名：拳骨茶碗）
・ 〃 q（錆釉斑状、横位や波状の沈線が多い）
・ 〃 r（トビガンナ状の押形文、掛分け、慣用名：鎧茶碗）
・ 〃 s（刷毛目）
・ 〃 u（内面・外面上半灰釉、外面下半錆釉、慣用名：腰錆碗）
・ 〃 v（半筒形碗、灰釉柿釉掛分け）
・ 〃 w（杉形碗、若松文、慣用名：小杉茶碗）
・ 〃 x（緑釉丸碗）
・ 〃 y（口縁部端反、蓋付有、白化粧に鉄絵など、慣用名:奈良茶碗）
▲ ・ 〃 z（端反形碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵）
・ 〃 aa（灰釉丸碗）
・ 〃 ab（慣用名：小丸碗、太白手）
・ 〃 ac（灰釉錆釉掛分け、長石釉散らし、体部に凹み有）
・ 〃 ad（筒形碗、漆黒釉錆釉掛分け）
・ 〃 ae（体部灰釉、口縁部緑釉・瑠璃釉などの掛分け）
▲ ・ 〃 af（慣用名：広東碗、内面白化粧、外面に白土鉄絵）
■ ・ 〃 ag（鉄釉丸碗）
■ ・ 〃 ah（鉄釉平碗）
■ ・ 〃 ai（鉄釉筒形碗）
■ ・ 〃 aj（長石釉丸碗）
■ ・ 〃 ak（長石釉平碗）
■ ・ 〃 al（長石釉筒形碗）
■ ・ 〃 am（高台高が高、高台断面は台形を呈す、窯ヶ根窯など指標）
■ ・ 〃 an（沓茶碗）
▲ ○2－－皿・平鉢
・TC－2－a（灰釉丸皿、ピン痕有）
・ 〃 b（灰釉丸皿、輪状直重ね痕有）
・ 〃 c（長石釉丸皿）
・ 〃 e（灰釉摺絵皿、鉄絵、白泥による施文、慣用名：御深井）
・ 〃 f（幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿）
・ 〃 g（内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿）
・ 〃 h（染付皿、輪高台、慣用名：太白手）
・ 〃 i（型皿、高台有）
▲ ・ 〃 j（鉄絵皿、ピン痕多）
・ 〃 k（菊皿、外面しのぎ有、黄瀬戸釉緑釉流し）
・ 〃 l（菊皿、外面しのぎ無、黄瀬戸釉緑釉流し）
▲ ・ 〃 m（輪禿皿）
▲ ・ 〃 n（口縁部または体部をひだ状成形、ヒダ皿）
▲ ・ 〃 o（油皿、直重ね）
・ 〃 p（把手付油皿、口縁部内側把手貼付）
・ 〃 q（灰釉丸皿、高台無）
・ 〃 r（見込み沈線･圏線文様、緑釉沈線文皿、ピン痕、慣用名:総織部）
・ 〃 s（鍔縁、口縁部施釉、鉄絵文様、直重ね、慣用名：志野織部）
・ 〃 t（染付皿、蛇ノ目凹形高台、慣用名：大白手）
■ ・ 〃 u（輪禿平鉢、口縁部折縁状多）
■ ・ 〃 v（鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢）
■ ・ 〃 w（灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名：黄瀬戸鉢）
■ ・ 〃 x（型皿、脚付）
■ ・ 〃 y（端反皿、ピン痕多）
■ ・ 〃 z（鉄釉丸皿、ピン痕多）
■ ○3－－大皿・大平鉢
■ ・TC－3－a（鉄絵、緑釉流し、口縁部外反、慣用名：笠原鉢）
■ ・ 〃 b（灰釉緑釉流し、中央印花、内側側面波状櫛描文、慣用名：黄瀬戸鉢）
■ ・ 〃 c（幅広高台、鉄・呉須による絵付多、慣用名：石皿）
■ ・ 〃 d（内側面鉄絵扁平渦巻き文、慣用名：馬ノ目皿）

○4 － －燭徳利
▲ ○5 － －鉢
▲ ・ 〃 f（水盤、灰釉、口縁部一箇所凹み）
・ 〃 h（手鉢）
・ 〃 j（長石釉）
・ 〃 k（緑釉、鉄絵、元屋敷窯、窯ヶ根窯など指標）
・ 〃 l（こね鉢）
■ ・ 〃 m（刷毛目）
○6 － －坏
○8 － －仏飯器
○9 － －香炉・火入れ
・ＴＣ－9－a（灰釉）
・ 〃 b（鉄釉）
・ 〃 c（灰釉、摺絵、慣用名：御深井）
・ 〃 d（褐釉、半菊状のしのぎ）
・ 〃 e（鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ）
▲ ・ 〃 f（袴腰）
・ 〃 g（筒形）
○10 － －瓶
・ＴＣ－10－a（二合半灰釉徳利、底部釉拭取り）
・ 〃 c（二合半灰釉徳利、つけ掛け）
・ 〃 d（五合徳利）
・ 〃 e（一升徳利）
・ 〃 f（舟徳利、漆黒釉または柿釉）
・ 〃 g（柿釉徳利、献上備前写し）
・ 〃 h（らっきょう形）
・ 〃 k（織部徳利）
○12 － －油壺
○13 － －蓋物
○15 － －壺・甕
・ＴＣ－15－a（柿釉、底部及び器面下端露胎、平縁、慣用名:赤津半胴･銭甕）
・ 〃 b（柿釉灰釉流し、底部及び器面下端露胎、口縁部外反）
・ 〃 c（水甕、灰釉に鉄釉や緑釉を流す、流水状の文様、斑状の刺突）
・ 〃 d（緑釉、貼付文）
■ ・ 〃 e（ベタ底）
■ ・ 〃 f（高台有、肩衝、有耳多し）
○18 － －合子
○19 － －水滴
○21 － －植木鉢
○22 － －花生
・ＴＣ－22－a（盤口形）
・ 〃 b（朝顔形）
○23 － －片口鉢
・ＴＣ－23－a（筒形）
・ 〃 b（丸碗形）
・ 〃 c（「ハ」の字状に開く）
○24 － －灰落し
・ＴＣ－24－a（鉄釉灰釉掛分け、横位の沈線に縦位のしのぎ）
・ 〃 b（長筒形）
○25 － －鬢水入れ
○26 － －茶入れ
○27 － －水注
・ＴＣ－27－a（褐釉、底部露胎、らっきょう形、橋状把手）
・ 〃 b（円筒形の体部に注口、取手、蓋付、慣用名：汁次）
・ 〃 c（灰釉、摺絵、慣用名：御深井）
■ ・ 〃 d（灰釉、らっきょう形、橋状把手）
○28 － －漫瓶
○29 － －擂鉢
○30 － －餌入れ
○31 － －火鉢
・ＴＣ－31－a（瓶掛）
・ 〃 b（風炉）
○34 － －土瓶
○38 － －手焙り
○39 － －おろし皿
○40 － －油受け皿
▲ ・ＴＣ－40－b（脚付）
・ 〃 c（脚無、錆釉）
・ 〃 d（脚無、灰釉）
・ 〃 e（高い受付）
○41 － －油徳利
○44 － －ひょうそく
・ＴＣ－44－a（脚付）
■ ○64 － －煙硝擂
■ ○67 － －釜

◎ＴＤ群 － －京都・信楽系陶器
○1 － －碗
・ＴＤ－1－b（高台径が小さい半球形の碗、薄手）
▲ ・ 〃 c（丸碗）
・ 〃 d（杉形碗、鉄または呉須で若杉文、慣用名：小杉茶碗）
・ 〃 e（端反形、口縁部緑釉体部灰釉の掛分け）
・ 〃 g（端反形、小振りで器面には細かい貫入）
・ 〃 h（平碗、多くは見込みに銹絵染付）
▲ ・ 〃 i（半筒形）
・ 〃 j（筒形、多くは鉄絵で文様）
・ 〃 k（体部中位に大きな凹み有、灰釉）
・ 〃 l（軟質施釉）
■ ・ 〃 n（胴締め、慣用名：大福）
■ ・ 〃 o（慣用名：小福）
■ ・ 〃 p（天目形）
▲ ○2 － －皿・平鉢
・ＴＤ－2－a（見込み櫛目有、灯明皿、多くは三箇所のピン痕）
・ 〃 b（見込み櫛目無、灯明皿、多くは三箇所のピン痕）
・ 〃 c（輪高台）
○4 － －燭徳利
▲ ○5 － －鉢
○6 － －坏
○9 － －香炉・火入れ
・ＴＤ－9－a（型作り）
・ 〃 b（蛇ノ目高台、灰釉、体部に強いロクロ目、口縁部内折）
・ 〃 c（筒形）
○10 － －瓶
○13 － －蓋物
・ＴＤ－13－a（丸碗形の身）
・ 〃 b（段重）
・ 〃 c（半筒形の身）
・ 〃 d（格子状のしのぎ、梅花文）
○14 － －筆立
○15 － －壺・甕

・ＴＤ－15－ａ（慣用名：腰白茶壺、三耳壺、鉄釉灰釉掛分け）
○18－－合子
・ＴＤ－18－ａ（扁平な球形）
・　〃　ｂ（筒形）
○19－－水滴
○22－－花生
■ ○23－－片口鉢
○24－－灰落し
○25－－鬢水入れ
■ ○26－－茶入れ
○27－－水注
・ＴＤ－27－ａ（銚子形、釣手）
・　〃　ｄ（筒形）
○32－－柄杓
▲ ○34－－土瓶
■ ・ＴＤ－34－ａ（鉄砲口）
■ ・　〃　ｂ（Ｓ字状注口）
○36－－ちろり
・ＴＤ－36－ａ（長筒形、横手）
・　〃　ｂ（段筒形、横手）
○40－－油受け皿
・ＴＤ－40－ａ（脚付、灰釉）
・　〃　ｂ（脚無、灰釉）
○46－－カンテラ

◎ＴＥ群－－備前系陶器
■ ○1－－碗
▲ ○2－－皿・平鉢
■ ・ＴＥ－２－ａ（ロクロ成形）
■ ・　〃　ｂ（型皿）
▲ ○5－－鉢
○10－－瓶
▲ ・ＴＥ－10－ａ（かま形、薄作、鶴首）
■ ・　〃　ｂ（底部付近に最大径を有す、体部三角形）
○12－－油壺
○15－－壺・甕
○22－－花生
○29－－擂鉢
○37－－薬研
○40－－油受け皿
○41－－油徳利
■ ○65－－乳棒

◎ＴＦ群－－志戸呂系陶器
○1－－碗
▲ ○2－－皿・平鉢
■ ○9－－香炉・火入れ
○10－－瓶
○13－－蓋物
○15－－壺・甕
○29－－擂鉢
○40－－油受け皿

◎ＴＧ群－－常滑系陶器
○15－－壺・甕

◎ＴＨ群－－萩系陶器
○1－－碗
・ＴＨ－１－ａ（藁灰釉開口碗、渦巻高台）
・　〃　ｂ（ビラ掛け、渦巻高台）

◎ＴＩ群－－万古系陶器
○1－－碗
○16－－急須
○34－－土瓶

◎ＴＪ群－－大堀・相馬系陶器
○1－－碗
○6－－坏

◎ＴＫ群－－丹波系陶器
■ ○5－－鉢
○15－－壺・甕
○29－－擂鉢

◎ＴＬ群－－堺系陶器
○29－－擂鉢

◎ＴＭ群－－笠間・益子系陶器
○29－－擂鉢

■◎ＴＮ群－－九谷系陶器
○2－－皿・平鉢

◎ＴＯ群－－壺屋系陶器
○10－－瓶
○15－－壺・甕

■◎ＴＰ群－－淡路系陶器
○2－－皿・平鉢
○6－－坏
○20－－蓮華

■◎ＴＳ群－－飯能系陶器
○42－－行平鍋

■◎ＴＴ群－－薩摩系陶器
○1－－碗
○34－－土瓶

◎ＴＺ群－－生産地不明
○1－－碗
▲ ○2－－皿・平鉢
■ ○4－－燗徳利
▲ ○5－－鉢
○6－－坏
○9－－香炉・火入れ
■ ○10－－瓶
■ ○15－－壺・甕
○16－－急須
○17－－燗鍋

○20 －－蓮華
○21 －－植木鉢
■ ・ＴＺ－21－ａ（軟質施釉）
■ ○22 －－花生
■ ○25 －－鬢水入れ
■ ○27 －－水注
■ ○31 －－火鉢
○29 －－擂鉢
○33 －－鍋
・ＴＺ－33－ａ（紐状把手貼付、柿釉）
■ ・ 〃 ｂ（軟質施釉）
○34 －－土瓶
・ＴＺ－34－ａ（青緑釉）
・ 〃 ｂ（白土染付）
・ 〃 ｃ（三彩）
・ 〃 ｄ（糸目）
・ 〃 ｅ（鉄釉）
・ 〃 ｆ（鮫釉）
・ 〃 ｇ（灰釉）
・ 〃 ｉ（イッチン）
・ 〃 ｋ（うのふ釉、やや紫色に発色する）
・ 〃 ｌ（しのぎ、鉄釉）
■ ・ 〃 ｎ（軟質施釉）
○42 －－行平鍋
・ＴＺ－42－ａ（灰釉）
・ 〃 ｃ（トビガンナ）
■ ・ 〃 ｄ（軟質施釉）
○53 －－蒸し器

土器分類

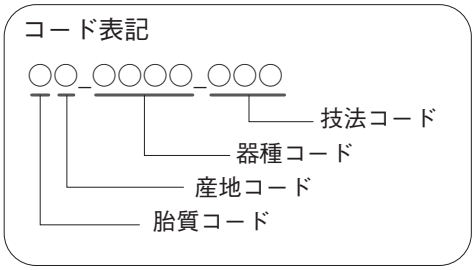
■◎ＤＤ群－－京都・信楽系土器
○16 －－急須
○49 －－涼炉
○50 －－五徳

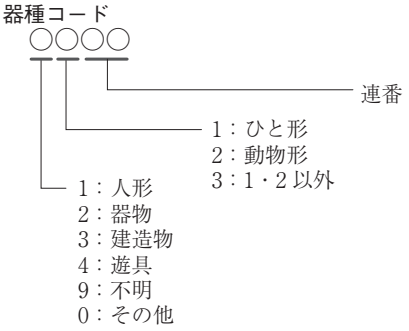
◎ＤＺ群－－生産地不明
▲ ○2 －－皿・平鉢
▲ ・ＤＺ－２－ａ（小林Ｃ類・Ｅ類、梶原Ⅱｂ群）
▲ ・ 〃 ｂ（小林Ｆ類、梶原Ⅱｃ群）
・ 〃 ｃ（磨きかわらけ、底部に渦巻状の沈線）
・ 〃 ｄ（磨きかわらけ、底部平滑）
・ 〃 ｅ（耳かわらけ）
・ 〃 ｆ（へそかわらけ）
・ 〃 ｇ（手づくね）
・ 〃 ｈ（透明釉）
・ 〃 ｉ（底部穿孔）
▲ ・ 〃 ｊ（見込みに浮文）
■ ・ 〃 ｋ（底径大、器壁厚、小林Ｂ類、梶原Ⅱａ群を含む）
▲ ○5 －－鉢
・ＤＺ－５－ａ（土師質、端反）
・ 〃 ｄ（えぐり）
○9 －－香炉・火入れ
○15 －－壺・甕
■ ・ＤＺ－15－ａ（硬質瓦質蓋付壺）
○21 －－植木鉢
・ＤＺ－21－ａ（土師質）
・ 〃 ｂ（瓦質）
■ ○24 －－灰落し
○31 －－火鉢
・ＤＺ－31－ａ（土師質丸火鉢）
・ 〃 ｂ（軟質瓦質丸火鉢）
・ 〃 ｃ（鍔付角火鉢、掘炬燵）
・ 〃 ｄ（硬質瓦質丸火鉢）
・ 〃 ｅ（土師質角火鉢）
・ 〃 ｆ（軟質瓦質角火鉢）
・ 〃 ｇ（硬質瓦質角火鉢）
・ 〃 ｈ（風炉）
・ 〃 ｉ（火消壺）
・ 〃 ｊ（硬質瓦質筒形火鉢）
・ 〃 ｋ（カマド）
・ 〃 ｌ（土師質筒形火鉢）
○38 －－手焙り
○40 －－油受け皿
・ＤＺ－40－ａ（透明釉、脚付）
・ 〃 ｂ（透明釉、脚無）
・ 〃 ｃ（無釉、脚付）
・ 〃 ｄ（無釉、脚無）
・ 〃 ｅ（透明釉、長脚付）
○43 －－十能
○44 －－ひょうそく
・ＤＺ－44－ａ（無釉、脚付）
・ 〃 ｂ（透明釉、脚無）
・ 〃 ｃ（無釉、脚無）
・ 〃 ｄ（ろうそく状）
・ 〃 ｅ（透明釉、そろばん玉形）
・ 〃 ｆ（施釉、脚付）
■ ・ 〃 ｇ（鉢形、蓋付、舌付。把手付もあり）
○45 －－瓦燈
○46 －－カンテラ
▲ ○47 －－ほうろく
・ＤＺ－47－ａ（丸底）
・ 〃 ｂ（平底）
○48 －－七輪
▲ ・ＤＺ－48－ａ（内部施設を持たない七輪）
▲ ・ 〃 ｂ（内部施設を持つ七輪）
■ ・ 〃 ｅ（内底部に壁状凸帯を有す。コンロ）
○49 －－涼炉
○51 －－塩壺
・ＤＺ－51－ａ（輪積成形、ミなと藤左衛門）
・ 〃 ｂ（ 〃 、一重枠天下一堺ミなと藤左衛門）
・ 〃 ｃ（ 〃 、二重枠天下一堺ミなと藤左衛門）
・ 〃 ｄ（ 〃 、天下一御壺塩師堺見なと伊織）
・ 〃 ｅ（ 〃 、御壺塩師堺湊伊織）
・ 〃 ｆ（板作成形、御壺塩師堺湊伊織）
・ 〃 ｇ（ 〃 、泉湊伊織）
・ 〃 ｈ（ 〃 、小枠　泉州麻生）
・ 〃 ｉ（ 〃 、大枠　 〃 ）
・ 〃 ｊ（ 〃 、泉州磨生）
・ 〃 ｋ（ 〃 、サカイ　泉州磨生　御塩所）

・　〃　l（〃　、泉州麻玉）
・　〃　m（〃　、泉川麻玉）
・　〃　n（〃　、御壺塩師難波浄因）
・　〃　o（〃　、難波浄因）
・　〃　p（〃　、摂州大坂）
・　〃　q（〃　、イ津ミ　つた　花塩屋）
・　〃　r（ロクロ成形、御壺塩）
・　〃　s（板作成形、大上々）
・　〃　t（ロクロ成形、三なと久左衛門）
・　〃　u（〃　、播磨大極上）
・　〃　v（〃　、大極上壺塩）
・　〃　w（〃　、筒形、無印）
・　〃　x（鉢形、内湾）
・　〃　y（〃、直立）
・　〃　z（〃、碁笥底）
・　〃　aa（輪積成形、無印）
・　〃　ab（板作成形、無印）
・　〃　ac（ロクロ成形、壺形、無印）
・　〃　ad（板作成形、いつミや　宗左衛門）
・　〃　ae（〃　、堺本湊吉右衛門）
・　〃　af（〃　、堺湊塩濱長佐衛門）
・　〃　ag（〃　、泉川麻生）
・　〃　ah（輪積成形、袋状）
■　・　〃　ai（ロクロ成形、三なと作左衛門）

○52－－燭台
・DZ－52－a（筒形）
・　〃　b（薄形、扁平）

○54－－懐炉
■　○63－－あんか
▲　○00－－蓋
・DZ－00－a（ドーム形、無印）
・　〃　b（凹形、御壺塩師難波浄因）
・　〃　c（〃、無印）
・　〃　d（断面逆台形、無印）
・　〃　e（断面長方形、イツミ　花焼塩　ツタ）
・　〃　f（〃　、深草砂川権兵衛）
・　〃　g（断面長方形、無印）
・　〃　j（ドーム形、いつミや　宗左衛門）
・　〃　k（凸形、無印）
・　〃　l（凸形、なんばん七度　本やき志本）



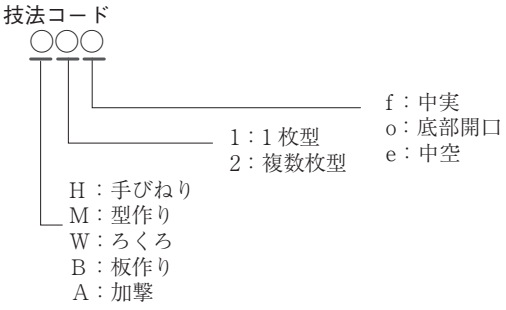


胎質コード

J：磁器（磁質）
T：陶器（陶質）
D：土器（土師質）
R：瓦　（瓦質）

産地コード

A：輸入陶磁
B：肥前系
C：瀬戸･美濃系
D：京都･信楽系
E：備前系
Q：江戸在地系
Z：不明



器種コード (詳細)

1000	人形								
1100	ひと形								
1101	天神	1102	恵比寿	1103	大黒	1104	福禄寿・寿老人	1105	布袋
1106	不動明王	1107	地蔵菩薩	1108	猩々	1109	西行	1110	衿人形
1111	力士	1112	朝鮮通信使	1113	蹴鞠人形	1114	坊主人形	1115	虚無僧
1116	猟師	1117	猿曳き	1118	福助	1119	笛吹き	1120	若衆
1121	姉様	1122	太夫（花魁）	1123	お多福	1124	三味線弾き	1125	裸婦
1126	おぼこ・禿	1127	唐子	1128	ぶら人形	1129	這子	1130	狆抱き童子
1131	亀乗り童子	1132	狆乗り童子	1133	面持ち童子	1134	金太郎	1135	桃持ち童子
1136	獅子舞	1137	鯛抱き童子						
1200	動物形								
1201	狛犬	1202	獅子	1203	猿	1204	犬	1205	馬
1206	狐	1207	牛	1208	猫	1209	兎	1210	鼠
1211	狸	1212	虎	1213	象	1214	鳩	1215	鶏
1216	鴛鴦	1217	木菟	1218	亀	1219	蛙	1220	鯉
1221	鯛・鯛車	1222	金魚	1223	蝉				
1300	その他（1100･1200以外）								
1301	達磨	1302	首人形	1303	獅子頭	1304	面	1305	陽物
2000	器物								
2001	碗	2002	皿	2003	鉢	2004	銚子	2005	瓶
2006	壺	2007	片口鉢	2008	急須	2009	土瓶	2010	鍋
2011	釜･茶釜	2012	擂鉢	2013	蓋	2014	七厘・焜炉	2015	石臼
2016	竈	2017	器台	2018	硯	2019	水滴	2020	銭貨
2021	五鈷鈴	2022	柚でんぼ	2023	香炉・風炉				
3000	建造物								
3001	祠	3002	塔	3003	城郭	3004	橋	3005	塀・袖垣・石段
3006	民家・庵	3007	灯籠	3008	鳥居	3009	御輿	3010	舟
3011	庭園・背景	3012	仕切り盤						
4000	遊具								
4001	土鈴	4002	独楽	4003	笛	4004	碁石状製品	4005	面模
4006	泥面子・芥子面	4007	土玉	4008	円盤状製品	4009	車輪状製品		
9000	不明								
0000	その他								

人形・玩具分類コード

【参考文献】

加藤　晃・金子　智　1990「第２章　御殿下記念館地点、山上会館地点検出の瓦について」『山上会館・御殿下記念館地点　第三分冊』

小松愛子　2015「文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9

惟村忠志　1997「近世常滑大甕の編年と窯業画期素描」『牟邪志』第８号

惟村忠志　2004「東叡山寛永寺護国院墓地跡の調査と成果」『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館

財団法人新宿区生涯学習財団　2004「連光寺跡遺跡」『新宿埋蔵文化財緊急調査報告集Ⅰ』

阪口　豊　1990「東京大学の土台－本郷キャンパスの地形と地質」『東京大学史紀要』第８号

鈴木正章　1999「第３章　遺跡の層序と地質学的調査･分析」『理学部７号館地点』東京大学遺跡調査室

大成エンジニアリング株式会社　2015『龍岡町遺跡第７地点』

台東区文化財調査会　2005『茅町二丁目遺跡池之端一丁目（本郷台遺跡群・湯島両門町遺跡湯島四丁目 12 番地点）』

高部淑子　2014「近世･近代初頭における常滑焼の窯と生産者」『知多半島の歴史と現在』18 日本福祉大学知多半島総合研究所

谷川章雄　2018「発掘された江戸･東京の墓　家と個人をめぐって」『現代日本の葬送と墓制』吉川弘文館

東京大学遺跡調査室　1990『医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2006『工学部 14 号館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2015『東京大学構内遺跡調査研究年報』9

東京大学埋蔵文化財調査室　2016『医学部附属病院入院棟Ａ地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2017『東京大学構内遺跡調査研究年報』10

東京大学埋蔵文化財調査室　2021a『医学部附属病院看護職員等宿舎１号棟地点　臨床試験棟地点　看護職員等宿舎３号棟地点（1）』

東京大学埋蔵文化財調査室　2021b『薬学部南館地点　薬学部資料館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2021c『東京大学構内遺跡調査研究年報』13

東京大学埋蔵文化財調査室　2024『医学部附属病院看護職員等宿舎５号棟地点　看護職員等宿舎３号棟地点（2）』

成瀬晃司　2001「市中墓にみられる大深度地下利用」『考古学ジャーナル』No.477

原　祐一　1997「湯島講安寺における墓域の空間利用－東京大学医学部附属病院病棟地点で検出した埋葬施設の検討－」『東京考古』15

文京区教育委員会　2020『文京区史料集　講安寺文書（改訂版）』

本郷仏教会寺院誌編纂委員会　1984『本郷の寺院－街と寺誌』

宮崎勝美　2016「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟Ａ地点」『医学部附属病院入院棟Ａ地点　研究編』

研　究　編

文献・絵図史料からみた湯島講安寺の土地利用

宮崎　勝美

はじめに

本調査地点は江戸時代初期から明治末年まで、浄土宗寺院湯島講安寺の境内の一部であった。本稿では文献および絵図史料によってその土地利用の変遷について検討する。

講安寺は慶長 11 年（1606）開山向蓮社廻誉重達によって湯島天神下に創建され、元和 2 年（1616）現在地（文京区湯島）に移転した。本郷台地の東端に位置し、門前の無縁坂を東に下った先には不忍池がある。当初の寺号は法界寺であったが、正保 2 年（1645）重達の隠居所を称仰院として分立した際に講安寺と改め、本山は幡随院と定められた [(1)]。文政 9 年（1826）の書上 [(2)] によれば、境内拝領地は表口 35 間・裏行 60 間で 2,100 坪、うち表門続き間口 32 間分（裏行不同、家数 6 軒）の門前町屋が公許されて地代収入を得ていた [(3)]。

1. 富山藩による借地

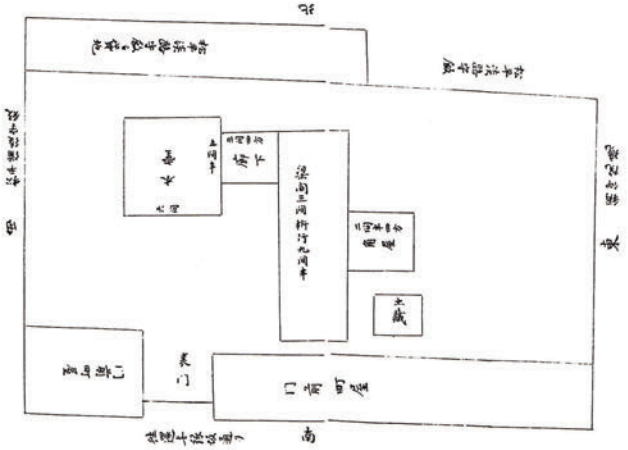
（1）借地の経緯

2,100 坪という境内面積は、江戸の浄土宗寺院としては最上位に属するといってよい。「御府内備考続編」を分析した日塔和彦の研究によれば、浄土宗寺院 231 か寺（宗派別で最多）のうち 2,000 坪以上の境内を有したのは 34 か寺だけであった（日塔 1998）。そのため敷地には余裕があり、北隣りに上屋敷を構える富山藩（加賀藩前田家の支藩、外様 10 万石）にその一部を貸し出していた。

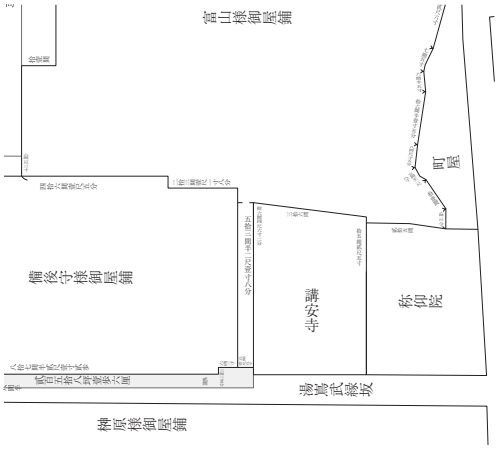
元禄 3 年（1690）、講安寺は境内のうち 637 坪 6 厘を 10 年間金 68 両 1 歩・銀 3 匁 5 分の一時払い地代で富山藩に貸し出し、同 12 年には坪数を 600 坪に、地代を 10 年間金 75 両 1 歩・銀 5 匁 6 分 7 厘に改めた [(4)]。富山藩上屋敷は天和 2 年（1682）末の大火（いわゆるお七火事）で全焼し、その後の再建工事が長期に及んでいた。この借地もその過程において不足する敷地を補う目的で行われたものと考えられる。

「御府内備考続編」所収の講安寺境内図（文政 12 年 [1829]、1 図）にはその北側（図の左上）に「松平淡路守殿（富山藩主前田利幹－カッコ内引用者注、以下同じ）江貸地」と記された部分がある。また天保 13 年（1842）8 月付の添書をもつ 2 枚の加賀藩邸測量図（2－A・B 図）には富山・大聖寺両支藩の上屋敷地も含まれているが、富山藩邸の敷地は 2 種類の地境線によって描き分けられている。2－ B図において講安寺の裏手で奥行十数間分広くなっている部分が富山藩の借地であったと推定される。

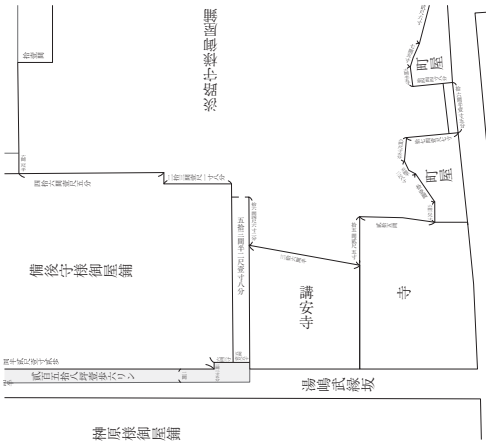
この貸借関係は元禄以降長期に及び、その間地代は 1 か年当たり金 20 両に改められたが、富山藩は天保期（1830 ～ 45）に至り倹約を理由に返却を申し出た [(5)]。講安寺側は地代収入の減少を憂慮して難色を示し、富山藩側でも担当役人の過失一件などがあってしばらく延引したものの、結局弘化 3 年（1846）頃までに返却されたと考えられる。この間富山藩では天保 14 年（1843）に定府の士分 37 人と足軽全員を帰国させ、勤番体制（国元・江戸の往復）に移行した。それに伴って藩士の長屋および諸施設が削減・縮小され、地代を負担してまで借地する必要性はなくなったのである（小松 2015）。



1図　文政12年（1829）講安寺境内図
「御府内備考続編」巻67（『御府内寺社備考』第3冊、名著出版1986年より）



2－A図　天保13年（1842）加賀藩邸測量図（A）
「上屋鋪御地面之図」（公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫所蔵）の一部をトレース、図中の「備後守」は大聖寺藩主、左方に加賀藩上屋敷、「湯嶌武縁坂」は無縁坂の別名



2－B図　天保13年（1842）加賀藩邸測量図（B）
「御上屋鋪御地面之絵図」（同左）の一部をトレース

（2）富山藩借地期間の土地利用

成瀬論考で検討されているように、本調査地点のうち北寄りの大半は富山藩の借地に含まれ、残る南端部分が講安寺の墓地として使用されていたと想定される。また以前調査が行われた附属病院入院棟A地点のうち2区も同様に、北寄りが富山藩の借地、南寄りが講安寺の墓地に当たっていたと考えられる。

このうち富山藩借地に比定されるエリアでは、本調査地点および入院棟A地点双方ともに厩の遺構が検出された。本調査地点では借地部分南端近くでほぼ東西方向に7正立以上、入院棟A地点では境内の西端に沿って南北方向に9正立以上の厩があったと推定される。富山藩借地期に関する文献史料はわずかしか残っていないが、この厩の存在が当時の状況を知るひとつの手がかりとなっている。そのことと最も密接な関係があるのは寛政5年（1893）10月の火事に関する史料である。

〔政隣記〕寛政５年10月25日条[6]

廿五日、暮時前、下谷茅町出火ト御櫓近板打候ニ付、火消壱番宮崎蔵人、二番大脇靭負御人数召連押出候処、火事所出雲守様（富山藩主前田利謙）御借地御囲之内、御長柄小者へ御貸長屋ヨリ出火ニ付為防候処、御長屋十三筋并御厩ハ焼失、其外ハ防留之、然処無縁坂町家へ火移、此所ニテモ講安寺本堂并町家三軒ハ防留候内、榊原式部大輔殿（高田藩主榊原政敦）御中屋敷へ飛火等ニテ焼付、本家ハ不残消失、門長屋・土蔵ハ防留之候内、北風烈く飛火等所々ニ有之、（中略）右火事日本橋河岸ニテ翌廿六日昼九時前及鎮火、（後略）

10月25日富山藩上屋敷内に発した火事は、日本橋付近にまで延焼する大火となった。上の史料は西隣する加賀藩上屋敷に詰めていた同藩士津田政隣の日記である。これによると火元は富山藩屋敷の「御借地御囲之内、御長柄小者へ御貸長屋」であり、長屋13棟と御厩が焼失、その他は防ぎ止め講安寺本堂なども被害を免れたが、無縁坂の町屋や南隣り高田藩榊原家の中屋敷に飛び火し、そこからさらに延焼していったという。「御借地御囲之内」は状況からみて富山藩が講安寺から借りていた部分を指すと判断される[7]。「御長柄小者」は元来は藩主の長柄槍を持つ小者（小人とも）の意であるが、富山藩の場合は藩邸内の役所等に配属されない小者を総称して長柄者と呼んでいた。長屋13棟すべてが講安寺借地内のものかどうかはこの記述だけでは判然としないが、多数の長屋が借地内に存在し、この火災によって焼失したことが窺える。

津田政隣は翌日続いて次のようにも書き記している。

〔政隣記〕寛政５年10月26日条[8]

一、出雲守様（富山藩主前田利謙）御厩焼失ニ付、昨夜ヨリ御馬十五疋、口添等四十人余、此方様（加賀藩）明き御厩へ来有之、尤人馬共御賄之事、

火事により御厩を失った富山藩は宗家本藩である加賀藩に助けを求め、加賀藩はそれに応じて屋敷内の明き御厩を貸し与え、被災した御馬15疋とその口添（馬の口取り）など40人余を受け入れた。加賀藩上屋敷は広大な敷地内に50疋立の御厩を有しており、藩士長屋にもそれらを受け入れるだけの余裕があった（宮崎1990、田中1995）。またこの記述からは、富山藩屋敷、具体的には講安寺から借りていた敷地内に少なくとも15疋以上の御馬を収容する厩があり、その世話をする厩方の者多数が同じ敷地内に長屋を与えられて集住していたことが推測される。

史料中の「口添等四十人余」はすべて厩方の者だったのであろうか。安永９年（1780）の富山藩分限帳には、厩方支配の小頭等８人（足軽）の下に計51人の小人が書き上げられている[9]。小人の内訳は御馬飼料方２人、爪髪役２人、御召御馬鋪５人、御馬鋪40人、釜屋者２人である[10]。御馬飼料方をはじめ各職の頭１人には江戸詰の際に役扶持が支給されたとの記載がある。それ以外の者たちが江戸詰をしたかどうかは不明であるが、これとは別に江戸で雇い入れられた者たちが多数いた可能性もある。いずれにしても分限帳に足軽８人と51人もの小人が登載されていることからすると、江戸藩邸の厩方に40人余が属していたとしても決して多すぎる数とはいえない。火事で焼け出された者たちは富山藩が所持する各屋敷内に仮住まいすることもできたはずであるから、わざわざ加賀藩邸に移ったのは御馬の側近くで世話をする者たちだったからなのであろう。

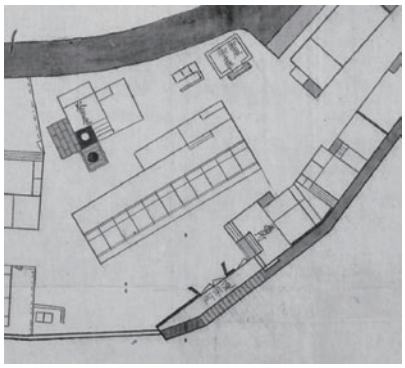
このあと見るように富山藩上屋敷の全体を描いた絵図は幕末・維新期のものだけが現存している。それらによるとその時期の御厩は敷地東端の通用門（裏門）を入ってすぐの場所に置かれていたこと

がわかる。講安寺に借地を返却した後の絵図であるから返地にともなって移設したとも考えられるが、そうではなく寛政５年の火事のあと程なくその位置に移されたと思わせる史料もある。

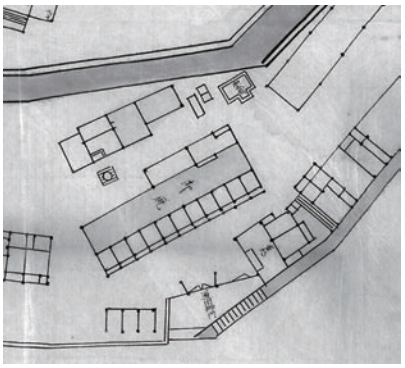
〔政隣記〕寛政 11 年 12 月晦日条 (11)
晦日、暁七時頃、下谷茅町出火ト近板打、無程池之端ト見直し触拍子木到来、各御殿へ出候処、暫有之鎮鐘打候ニ付退散、于時右火事所ハ出雲守様（富山藩主前田利謙）御上邸之内御馬飼料処ヨリ出火、三間四方計燃立候処、御手勢暨此方（加賀藩）御人数一番火消杉山新平、二番山口左次馬罷越防留、右ニ付出雲守様御指控御伺書御指出、（後略）
〔筆のまにまに〕(12)
一、当二日（寛政 12 年正月）江戸発足早飛脚歩、昨十日到着、来状之内、旧臘晦日暁七時前出雲守様御屋敷内より出火、無程火鎮り候、右に付出雲守様より御届等、且又聞番より伺之趣左之通、
今暁七時前、私居屋敷之内東之方長屋続馬建際、従物置出火仕、一間四方程焼抜候之処、早速鎮火仕、類焼無御座候、此段御届申上候、以上、

「政隣記」によると寛政 11 年（1799）の大晦日、富山藩上屋敷のうち「御馬飼料処」から出火し、3間四方を焼いたあと消し止められた。屋敷内から火事を出した場合、火元の大名はその事実を幕府に報告した上で差控伺（遠慮伺い）を提出しなければならなかったので、富山藩主前田利謙は次の「筆のまにまに」に引用されているように届書を提出したが、それには火元は上屋敷の東の方、長屋続きの馬建際の物置であり、焼失したのは１間四方だけと記されていた。馬建とは来訪者が馬を繋いでおく外繋（とつなぎ）のことであろう。２点の史料で出火状況の記載に異同があるが、火元は概ね上屋敷の東側（屋敷の奥寄り）であり、そこには御馬飼料処ないし長屋続きの馬建際の物置があったと考えられる。このうち御馬飼料処は御厩に付随する施設であり、その近くに御厩があった可能性が高い。講安寺借地にあった御厩およびそれに付随する施設が、寛政５年の火災のあと上屋敷内東寄りの場所に移設されたことを窺わせる史料といえる (13)。

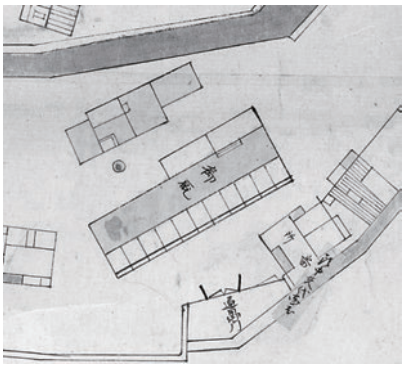
続いて幕末・維新期の絵図により、当該期における御厩関連施設の配置を確認しよう。3 ～ 5 図は上屋敷全体図のうち敷地東端に当たる通用門付近を抽出した画像である (14)。



3 図　「池之端東屋敷絵図」のうち「同所惣絵図」
（富山県立図書館所蔵）



4 図　「江戸御上屋敷図」
（同左所蔵）



5 図　「富山藩上屋敷全景図」
（同左所蔵、外題の「天保富山城本丸御殿絵図」は誤り）

〔3 図〕
通用門を入って正面に 11 正立の厩、その奥に「釜屋」と井戸、右手に「御厩御土蔵」がある。
〔4 図〕
前図と同じく通用門の内側に 11 正立の「御厩」、文字がなく前の絵図と形状が違っているが釜屋とみられる建物と井戸、および「御土蔵」が描かれている。
〔5 図〕
同じく通用門の内側に 11 正立の「御厩」、および釜屋とみられる建物と井戸。本絵図は幕末最終段階から明治初年撤去・明け渡しの時期のものと推定され、御厩周辺の施設も少なくなっている。

以上のように幕末・維新期には通用門の内側に 11 正立の御厩があり、時期によって多少異なるものの、釜屋や井戸、土蔵などの付属施設がその近くに配置されていた。他藩の事例を参照すると、御厩は裾場（すそば、馬の脚を洗う場所）、井戸、釜場（飼葉等の煮炊き）、飼料所などを付随するのが通例であった。上記の絵図類には明記されていないものの、富山藩の御厩にもそれらの施設が付設されていたはずである。また 5 図の絵図には長屋の居住者等を記した付箋が多数貼られているが、剥落して御殿内の部分に再付着した付箋に「御馬捕」の文字がある。通用門続きの外長屋には貼紙のない空白部があり、そこが馬捕たちの住居だった可能性がある。さらに言うとその外長屋の続きには「百人もの小人」「足軽固屋（小屋）」「割場役所」「押足軽等」の付箋が貼られている。割場は足軽や小人を統括し、藩邸内各役所等の必要に応じて派遣する役所であるから、その住居の近くに置かれていたのは職務内容からして必然性がある。この外長屋の配置から想像を逞しくすれば、かつて講安寺の借地内には、御厩とその付属施設、厩方の者を含む足軽・小者たちの住居、彼らを管轄する割場役所などが配置されており、それらが寛政 5 年の火事のあと上屋敷本体の東端、裏門付近に移設されたと考えることもできよう[15]。

2. 講安寺墓地および興安寺・等正寺の借地墓地

(1) 興安寺・等正寺による借地

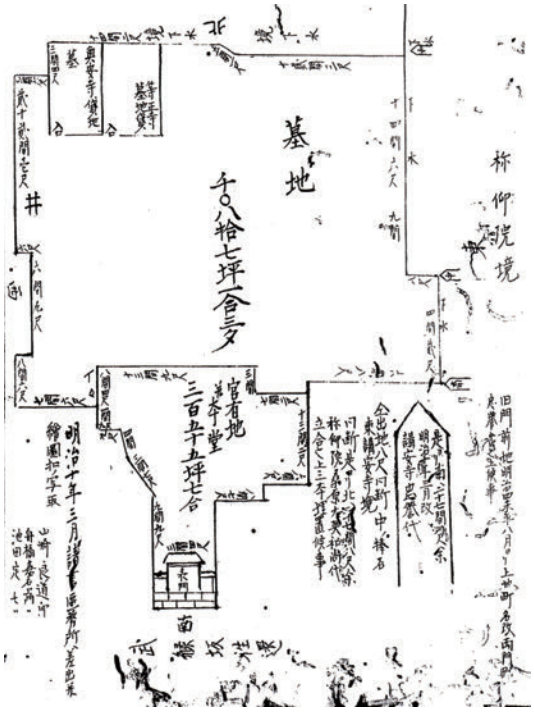
富山藩から講安寺に返却された 600 坪の借地は、その後しばらくの間明地になっていたが、弘化 5 年 (1848)2 月、講安寺は本郷元町の浄土真宗寺院興安寺と等正寺にその一部を墓地として貸し与えた[16]。それぞれ南北 16 間・東西 6 間 1 尺 5 寸で 100 坪ずつ、地代は 1 か年金 3 両 2 分であった。明治 10 年 (1877) 時点の境内図（次掲 6 図）には北西寄りの一角に両寺の借地が描かれており、富山藩から返却された敷地のうち西寄り部分を貸し出したことがわかる。そして成瀬論考で検討されているように、本調査地点のうち北側の過半は両寺の借地にまたがっており、残る南端部分が富山藩借地期を含め一貫して講安寺によって使用されていたと推定される。

(2) 講安寺墓地

講安寺には寛政 4 年 (1792)11 月から明治 5 年 (1872) 末まで、約 80 年間にわたる過去帳 6 冊が残されている。1 年当たりの記載者数は概ね 50 人前後であるが、コレラが大流行した文久 2 年 (1862) には 114 人に急増していたり、安政 2 年 (1855)10 月の大地震では約 20 人の死者が記録されているなど、流行病や災害の痕跡も色濃く残されている。明治維新前後の時期に 1 年当たり 30 ～ 40 人台に漸減していることも、変革期の特徴として指摘しておきたい。

過去帳の記載内容には一筆ごとに精粗があるが、詳しいものは被葬者の戒名･俗名（または施主名と続柄）のほか、その居所・職業や埋葬された墓域などが記入されており、檀家の身分構成などを窺わせる貴重な史料となっている[17]。1表は記載が比較的充実している嘉永元～5年（1847～51）の5年分について、A苗字のある者、B屋号を付けている者、C苗字・屋号のない者に分類した表である[18]。Aには町人の一部や町方居住の医者などが含まれているが、大半は武士身分の者と考えられる。Bは商人と職人の一部、Cは大工・鳶など裏店居住の職人や武家屋敷に雇われていた奉公人（中間・小者）などが含まれる。

表から読み取られるように、講安寺の檀家は武士身分の者が多かったと考えられる。大名の家中では寺の南向かいに中屋敷を構えていた高田藩榊原家（譜代15万石）の比率が高く、全体の1割台または2割前後にも及んでいたと推定される[19]。同藩は江戸定府の家中が比較的多く[20]、代々江戸居住を続けたそれらの家が屋敷近隣の講安寺を旦那寺に定めていたのであろう。中には本堂脇の内墓と呼ばれる特別な墓域に歴代葬られた家もある。藩主榊原家が講安寺と同じ浄土宗寺院を菩提寺としていたこともあるいは関係していよう。



6図　明治10年（1877）講安寺境内図
（講安寺所蔵）

1表　講安寺被葬者の身分構成

	A有姓	B屋号	C無姓	その他	計
嘉永元年（1847）	28	11	3	2	44
同　2年（1848）	36	20	6	−	62
同　3年（1849）	34	16	4	−	54
同　4年（1850）	32	19	1	1	53
同　5年（1851）	33	19	3	−	55
計	163（60.8%）	85（31.7%）	17（6.3%）	3（1.1%）	268（100%）

加賀・富山・大聖寺の前田家3藩も上屋敷が寺に隣接していたが､関係はさほど深くない。「加州」の家中、その家来、駕籠舁き等の奉公人、「御附」（藩主に輿入れした夫人に付き従った他藩士）などと記された被葬者は寛政4～文化4年（1792～1807）の16年間に33人いるが、その後は安政2年（1855）までの48年間で19人に減り、以後過去帳が残る明治5年（1872）までは皆無となっている。その中には火葬と記されていて遺骨が国元に送られたと判断される者も多い。加賀藩は江戸定府の比率が低く、藩士の大半が藩主の参勤交代に随行して1年程度で帰国していたため、その点で高田藩とは事情が異なっていたと考えられる。この「加州」には同じく加賀国内に領地をもつ大聖寺藩の家中が一部含まれている可能性があるが、富山藩の方はそれと確定できる事例が見出せない[21]。わずかに「ウラやしき」の飼い猫とみられる戒名「離畜猫性」の1例を見るのみである。過去帳にはそのほか大名屋敷関係として、宇都宮藩戸田家・岡崎藩本多家・秋田藩佐竹家など諸藩家中の名前が所々に記されている。

幕臣では旗本村上家（三系統）が古くからの大檀家で、同家も本堂近くの内墓に専用の墓域をもっていた。そのほかにも一柳家など旗本の檀家は少なくない。また湯島・本郷・下谷・駒込など周辺には与力・同心の組屋敷が多数配置されており、姓名だけでは特定困難であるものの居所を「御徒町」などとする者があり、有姓の檀家の中にはそれら御家人たちが多数含まれていたものと思われる。

幕末・維新期にはそれまで江戸の大名屋敷に詰めていた多数の藩士や従者たちが国元に立ち帰った。江戸屋敷からの退去は文久２年（1862）の参勤緩和令から始まっていたが、とくに譜代藩の家臣らはその後新政府に取り立てられることもなく、居住者の減少は急速に進行した。高田藩は戊辰戦争の際、当初その去就を明確にしなかっただけでなく、江戸定府家臣らの多くが彰義隊と行動を共にして上野戦争で新政府軍と戦ったりしたため、その傾向が顕著であった[(22)]。そのほか講安寺の檀家には譜代藩の家臣が比較的多く、旗本や御家人たちも大挙して徳川家の駿府移住に随行した。先に触れた幕末・維新期における被葬者の漸減傾向にもその影響があったとみられる。２表に示したように明治５年（1872）時点における講安寺檀家数は145軒、同10年に150軒であり、後にみる興安寺や等正寺と比べると半分または３分の１程度に過ぎない。江戸期の檀家数は不明であるが、これも維新をはさんで減少した結果と考えられよう。

明治６年（1873）以降については過去帳によって被葬者の推移を知ることができないが、同40年（1907）末に興安寺および等正寺の借地を含む講安寺墓地全体について、墓標１基ごとの碑銘をすべて書き上げた詳細な記録が残っている[(23)]。翌41年に郊外巣鴨村庚申塚の共葬墓地に一括移転するに際して東京市の実地検査を受けた時に作成されたものである。これにより講安寺墓地の移転前最終段階の状況を詳しく知ることができる。ここではまず墓地内の区域分けについて確認しておきたい。

３表は墓碑銘録の区域分類に従って、それぞれの数を集計したものである。同一家系で複数基の墓標を設けている場合があるので、その家系の数も別に表示した。次の戒名数（浄土真宗は法名）はすべての墓標に記されたその合計数である。家系の数は長年にわたる累計で、ある時点における檀家の数とは異なるが、講安寺の774家という数字と明治５年時点の檀家数145軒とを比べると、その点からも幕末・維新期に檀家が減少したことが想定される。

この墓碑銘録は南ノ部、西山下ノ部などといった墓域ごとに分類されているが、過去帳にはそれとは別に「本堂西　内墓」「井戸石垣キハ（際）」など、より詳しい位置関係がわかる注記が付けられており、双方を突き合わせることによって墓地内の配置がある程度まで推測できる。詳細な検討過程は省略するが、西一～十六号と東一～十五号が墓地の中央部分を占めていたことは間違いない。おそらく墓地のほぼ中央に南北方向の通路があり、その左右に15ないし16の墓列が配置されていたのであろう。この東と西のエリアだけで講安寺の墓標全体の約56.6％を占めている。当初は東西15列ずつであったが、幕末期、とくに文久２年（1862）のコレラ大流行時に墓域が足りなくなり、西十六号と呼ばれる列が新たに加わったとみられる。過去帳では「西北十六」などと記されており、西十五号までの列より少しずれた位置にあったとも考えられる[(24)]。

南ノ部、西山下ノ部、南山下ノ部は、西一～十六号より西側のエリアで、境内地の西端に接する部分に比定される。過去帳と対照すると南ノ部には上記のように「本堂西　内墓」などの注記があり、墓地の南西寄り、本堂のすぐ近くであったことがわかる。

２表　各寺院の檀家数

（各寺院明細帳および明細簿（東京都公文書館所蔵））

	講安寺	興安寺	等正寺
明治５年（1872）	145	315	450
同10年（1877）	150	280	（記載欠）

３表　講安寺の墓域構成

墓　域		墓標数	家数	戒名（法名）数
講安寺墓地				
	南ノ部	32	20	131
	西山下ノ部	63	46	233
	南山下ノ部	89	58	336
	西一～十六号	320	264	1,372
	東一～十五号	264	199	950
	新畑之部	63	49	229
	中畑之部	101	66	340
	畑垣根通リ	35	32	127
	畑之部	46	37	128
	畑之部（村上）	19	3	76
（講安寺計）		1,032	774	3,922
北ノ部壱号（興安寺借地）		250	232	636
北ノ部弐号（等正寺借地）		141	133	310

高田藩の江戸定府の家臣で古くから講安寺の大檀家であった帰山家の歴代墓もそこに配置されていた。

西山下ノ部と南山下ノ部は、その北側にあったとみられる。西山下ノ部には講安寺歴代住職の墓があり、南山下ノ部は過去帳では「井戸脇」「井戸一（～六）」のように記されている。その井戸は明治10年の境内図（前掲6図）にも描かれており、附属病院入院棟A地点ではそれに該当する遺構が検出された[25]。

新畑之部から畑之部（村上）までの五つの墓域は東一～十五号の東側、墓地全体の東端寄りに位置していたと想定される。このうち畑之部（村上）が最も南寄り本堂の近くで、これは旗本村上家一族専用の墓域であった。新畑之部から畑之部までの位置関係は不明であるが、過去帳では畑之部の被葬者に「村上横」などの注記が見える。新畑、中畑、畑垣根通りはその北側にあったのであろう。共通して畑の文字が付いていることからすると、ある時期までは畑として使用されていたか、あるいはその後も部分的には墓地と畑地とが混在していた可能性もある。

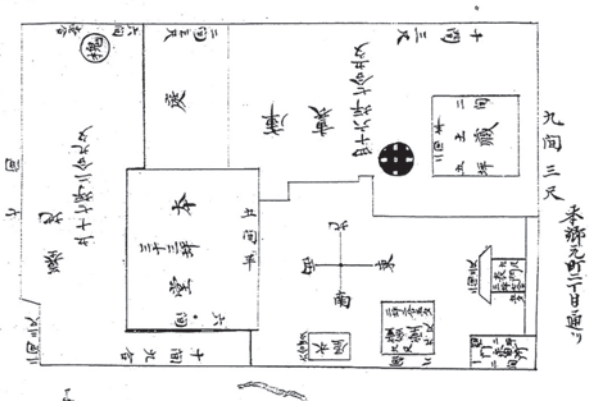
(3) 興安寺借地墓地

興安寺ははじめ駿河国内に起立し、徳川家康が江戸に入部したのち神田御仲間町の大岡金三郎組屋敷内に移った。所在地名は湯島とも近隣の町名を取って本郷元町ともいわれている。山号青柳山、開基は宗心、浄土真宗東本願寺末であり、宝永7年（1710）に拝領地183坪2合5勺（表間口9間半・裏行20間）を公許された[26]。

先に触れた「御府内備考続編」の分析によれば、江戸の浄土真宗寺院は他宗と比較すると境内規模が小さめであり、全124か寺の中央値は300坪ほどであったから、興安寺の境内がとくに小規模だったわけではない（日塔1998）。しかし明治10年（1877）の境内図によると183坪余のうち墓地面積は57坪2合9勺に過ぎず（7図）、一方檀家数は同5年に315軒、同10年時点で280軒であったことを考え合わせると（前掲2表）、墓域の不足は早くから深刻な問題になっていたと推察される。弘化5年（1848）に講安寺から墓地100坪を借り始めたのも、その不足を補うためだったのであろう。

興安寺には文化8年（1811）から明治18年（1885）まで4冊の過去帳が残されており、それ以前の年代については忌日ごとに整理して3冊にまとめられている（後者の記載年代上限は元和6年[1620]、多くは寛文期[1661～74]以降）。同寺の墓地には天明2年（1782）伊勢から江戸に向かう航海中に遭難してロシア領内に漂着し、エカチェリーナ2世に謁見するなどしたのち日本に帰国した大黒屋光太夫らが埋葬されており、それらの名前も過去帳に記されている（山下1995）。

過去帳に記載された被葬者数は年によって大きく変動しているが、平均的には1年当たり80～90人程度である。コレラが大流行した文久2年（1862）に224人に急増するなど、流行病や災害の影響を反映しているのは講安寺と同様である。講安寺過去帳の分析に合わせて、嘉永元年から5年までの5年間（1848～52）を選んでA有姓・B屋号・C無姓の別を集計すると4表のようになる。講安寺に比べると有姓の比



7図　明治10年（1877）興安寺境内図
「興安寺明細簿」（東京都公文書館所蔵）

率が低く、屋号をもつ者と無姓の者が多い。このことから興安寺の場合、武家身分の檀家が相対的に少なく、その分商職人の数が多かったと考えられる。浄土真宗は庶民的な性格を帯びており、江戸においても町人層の檀家が比較的多かったといわれているが、そのことの表れとみることができよう。

被葬者のうち大名屋敷関係では高松藩松平家・岡崎藩本多家・高崎藩松平家など近辺に屋敷を構える藩をはじめ、様々な藩の家中やその従者・奉公人らがいる。講安寺のようにある藩の比率が特に高いというようなことはない。幕臣では近隣の旗本石川家や寺の開創に関わった大岡家一族の名前が散見するほか、講安寺と同様に与力・同心組屋敷に居住する御家人らも多いとみられる。町人層の特徴は屋号等だけではつかみにくいが、職人は比較的少なく商人が多くを占めているように思われる。

4 表　興安寺被葬者の身分構成

	A 有姓	B 屋号	C 無姓	計
嘉永元年（1847）	25	52	12	89
同　2 年（1848）	24	76	24	124
同　3 年（1849）	14	47	10	71
同　4 年（1850）	17	44	9	70
同　5 年（1851）	25	25	25	75
計	105（24.5%）	244（56.9%）	80（18.6%）	429（100%）

過去帳 4 冊のうち弘化 3 年（1846）以降の 2 冊は、土葬・火葬別の注記が加わるなど記載内容がやや詳しくなっている。次掲 5 表はその期間を対象にして、まず葬地によって興安寺本体の境内墓地、弘化 5 年（嘉永元年改元）に始まる講安寺借地、その他寺院の借地や郊外の共葬墓地の三つに分け、それぞれについて土葬・火葬・不明の別をカッコ内に記入したものである。まず全体の合計数をみると、前後 40 年間の被葬者数が 3,000 人を超えていたことが注目される。手狭な境内墓地には収まり切らず、他所に借地を求めたのは必然的な帰結だったといえる。土葬と火葬の比率では、区別不明を除く 2,949 人のうち土葬が 1,103 人で約 37.4%、火葬が 1,846 人で約 62.6%であった。火葬が少なかった講安寺に比べると、その比率の高さが目立っている。一般的に浄土真宗では火葬が多かったことが知られており（久野 1969）、ここでもその特徴が表れている。ただし同宗の門徒が多い北陸や越後などではほとんどすべてが火葬されている地域もあり（林 2010 ほか）、そこまで際立った比率にはなっていないことも注意しておかなければならない。

興安寺が等正寺とともに講安寺から各 100 坪の墓地を借り始めたのは、弘化 5 年（嘉永元年）2 月のことであった。過去帳では同年 6 月 16 日が借地埋葬の初見となっている。その後は概ね年間数件から十数件で推移したが、安政 5 年（1858）や文久 2 年（1862）には 40 件を超えている。いずれもコレラが大流行した年であり、後者では興安寺境内でも 164 件に急増している[(27)]。安政 5 年には講安寺借地に加えて桐ヶ谷・落合など郊外の墓地への埋葬も始まっている[(28)]。内訳をみると全体的に境内では火葬の比率が高く、講安寺借地は主に土葬用として使われていたことがわかる。コレラ流行時には感染防止のため火葬が推奨されたものの火葬場の受入れが追い付かず、結果として土葬にされたとみられる事例も多い。

明治維新後は被葬者数がやや減少しているようにも見えるが、武家比率の高かった講安寺に比べると江戸退去の影響はそれほど大きくなかったと思われる。明治 5 年（1872）時点の興安寺の檀家数は 315 軒であり、講安寺 145 軒の 2 倍以上であった。

明治 6 年以降は国や東京府市の墓地行政が二転三転し、その影響が過去帳にも顕著に表れている。同 6 年 7 月国は太政官布告により全国的に火葬を禁止し、翌 8 月には東京府に対して朱引内埋葬禁止を通達した（西野 1991・飯塚 2012 ほか）。朱引内とは東京の市街地部分に設定された六大区の内部を指しており[(29)]、講安寺・興安寺・等正寺はともにその内側に位置していた。興安寺過去帳には同年 7 月 29 日の項に「火葬廃止」と記入されている。以後は基本的に土葬だけとなり、敷地不足のた

め講安寺借地への埋葬が増えていく。さらに翌明治７年８月には東京府墓地令により土葬を含め朱引内の埋葬自体が基本的に禁止され、郊外に９か所の共葬墓地が新設されることになった。夫婦のどちらかが既に朱引内の寺院に埋葬されている場合にのみ、例外措置として願い出によって合葬が認められた。過去帳の中にも「夫婦合葬」と注記した事例が散見する。

５表　興安寺過去帳分析

年	西暦	興安寺境内 （土葬，火葬，不明）	講安寺借地 （同左）	他寺院・共葬墓地 （同左）	合計 （同左）
弘化３年	1846	79(20,55,4)			79(20,55,4)
弘化４年	1847	81(29,51,1)			81(29,51,1)
嘉永元年	1848	87(19,64,4)	5(5,0,0)		92(24,64,4)
嘉永２年	1849	114(27,86,1)	12(10,1,1)		126(37,87,2)
嘉永３年	1850	63(20,42,1)	8(6,0,2)		71(26,42,3)
嘉永４年	1851	63(13,48,2)	8(6,0,2)		71(19,48,4)
嘉永５年	1852	80(24,54,2)	19(17,0,2)		99(41,54,4)
嘉永６年	1853	62(19,43,0)	13(12,0,1)		75(31,43,1)
安政元年	1854	112(33,75,4)	11(11,0,0)		123(44,75,4)
安政２年	1855	79(19,59,1)	18(12,1,5)		97(31,60,6)
安政３年	1856	74(21,48,5)	12(12,0,0)		86(33,48,5)
安政４年	1857	72(24,46,2)	11(8,2,1)		83(32,48,3)
安政５年	1858	85(21,59,5)	43(42,0,1)	5(0,5,0)	133(63,64,6)
安政６年	1859	95(27,65,3)	13(11,2,0)		108(38,67,3)
万延元年	1860	83(20,61,2)	24(21,3,0)	1(1,0,0)	108(42,64,2)
文久元年	1861	58(17,38,3)	5(5,0,0)		63(22,38,3)
文久２年	1862	164(34,128,2)	48(42,0,6)	12(1,11,0)	224(77,139,8)
文久３年	1863	61(12,49,0)	11(11,0,0)		72(23,49,0)
元治元年	1864	75(25,49,1)	11(11,0,0)		86(36,49,1)
慶応元年	1865	56(25,30,1)	9(9,0,0)		65(34,30,1)
慶応２年	1866	62(16,43,3)	13(13,0,0)		75(29,43,3)
慶応３年	1867	79(21,52,6)	9(9,0,0)		88(30,52,6)
明治元年	1868	45(11,33,1)	3(3,0,0)		48(14,33,1)
明治２年	1869	51(12,37,2)	3(3,0,0)		54(15,37,2)
明治３年	1870	84(30,51,3)	7(6,1,0)		91(36,52,3)
明治４年	1871	43(21,22,0)	9(9,0,0)	3(0,3,0)	55(30,25,0)
明治５年	1872	52(15,29,8)	14(14,0,0)		66(29,29,8)
明治６年	1873	45(31,13,1)	28(22,1,5)		73(53,14,6)
明治７年	1874	25(11,1,13)	11(1,0,10)	20(0,0,20)	56(12,1,43)
明治８年	1875	23(0,20,3)	5(1,1,3)	21(3,0,18)	49(4,21,24)
明治９年	1876	47(4,42,1)		10(6,2,2)	57(10,44,3)
明治10年	1877	34(3,29,2)	2(2,0,0)	8(7,1,0)	44(12,30,2)
明治11年	1878	42(5,35,2)		11(8,2,1)	53(13,37,3)
明治12年	1879	40(3,33,4)		12(8,4,0)	52(11,37,4)
明治13年	1880	31(1,27,3)	2(2,0,0)	16(11,4,1)	49(14,31,4)
明治14年	1881	44(4,36,4)		20(16,4,0)	64(20,40,4)
明治15年	1882	43(8,31,4)	2(0,2,0)	18(11,6,1)	63(19,39,5)
明治16年	1883	35(0,32,3)	1(1,0,0)	14(13,0,1)	50(14,32,4)
明治17年	1884	43(1,38,4)		18(17,1,0)	61(18,39,4)
明治18年	1885	39(2,35,2)		16(16,0,0)	55(18,35,2)
合計		2550(648,1789,113)	390(337,14,39)	205(118,43,44)	3145(1103,1846,196)

火葬禁止令は神仏分離・廃仏毀釈や神葬祭推進策の影響も受けていたが、禁止の主な要因は市街地における煤煙や臭気など火葬の難点にあった。これ以後は市街地改編の一環として墓地行政が進められ、郊外に新設された共葬墓地などへの埋葬に重点が置かれていった。東京府墓地令が発せられた明治７年８月以降、興安寺では天王寺（谷中）・三十三間堂（深川）・雑司ヶ谷・落合など郊外の共葬墓地や、寂円寺（白山）・善仁寺（小石川）・教元寺および吉祥寺（駒込）など朱引外の寺院に借地してそこを新たな埋葬先とする事例が増えている[30]。

しかし火葬禁止は埋葬法の急激な変更を強いる政策であり、また土葬に改めるにしても都市部ではその用地に余裕がなかったこともあって、仏教各派とくに浄土真宗側からの反発が強く、明治８年５月には発令からわずか２年で禁止が解除されることとなった。同年７月、東京では火葬に限り朱引内の埋葬も解禁された。興安寺境内でも再び埋葬数が増加に転じている。以前に比べると火葬が多くなっているが、例外として認められたのか年に数件は土葬も行われている。一方講安寺借地への埋葬はこの時期以降急減しており、明治９年以降過去帳が残る同18年までの10年間はわずか７件に過ぎない。それに対して郊外の寺院や共葬墓地への埋葬事例は増加し、同じ10年間の合計で143件に及んでいる。

前述した明治40年の講安寺墓碑銘録には、「北ノ部壱号」として興安寺借地部分の墓標250件も合わせて記録されている。同19年以降は被葬者数の年次推移を確認することができないが、この墓碑銘録にはその時期に新たに建碑されたとみられるものが数十件（50件以上か）含まれている。明治18年までの10年間で埋葬数わずか７件に減少した後、再びやや増加に転じているようにも見受けられるが、関係史料がないため詳しい事情は不明である。６表は、明治40年時点における３か寺の墓地面積（通路や明地等を含む）と墓標数を示したものである。単純計算であるが興安寺は墓標１基あたりの平均面積が0.4坪となっており、明治末年またはそれ以前から墓地面積に余裕が少なくなっていたと考えられる。

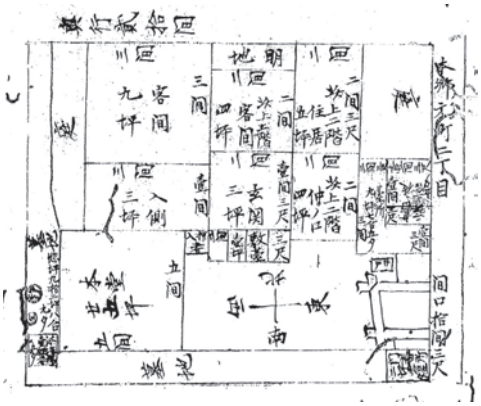
６表　明治40年（1907）各寺院の墓域比較

	講安寺墓地	興安寺借地	等正寺借地
墓地面積（坪）	767.09	100	73
墓標数	1,032	250	141
墓地面積／墓標数	0.74	0.4	0.52

（4）等正寺借地墓地

等正寺は山号応供山、元和８年（1622）開山不退院玄証により旗本大岡源右衛門の拝領屋敷内に起立したが、慶安４年（1651）慶安の変（由井正雪の乱）に関係して同家の屋敷が上り地となった後、別途拝領地として下付された。のち元禄16年（1703）類焼の翌年上り地となり、近隣地（興安寺の北隣り）に移された。所在地は興安寺と同じく湯島とも本郷元町ともいわれている。当初は東本願寺に属していたが、宝暦９年（1759）築地本願寺（西本願寺派）の末に転じた[31]。大正12年（1923）関東大震災に罹災したのち、昭和４年（1929）現在地（杉並区清水）に移転した。火災に数度遭ったため過去帳などの記録類は残っていない。

明治11年（1878）の「等正寺明細簿」（東京都公文書館所蔵）には境内面積208坪５合７勺、うち墓地は92坪８合９勺と記されている（８図）。檀家数は同５年時点で450軒と多く（前掲２表）、興安寺と同様に境内墓地は早くから不足が生じていたものと思われる。そのため弘化５年（1848）2月、興安寺とともに講安寺境内のうち100坪を墓地として借り受けた。



８図　明治11年（1878）等正寺境内図
「等正寺明細簿」（東京都公文書館所蔵）

等正寺に残っていた明治35年(1902)7月23日付契約証によると、同寺は同14年に100坪のうち31坪余を返地し、さらにその契約証の時点では借用坪数を73坪に改めていたという[32]。これには前注(30)で触れたように、同7年に駒込吉祥寺境内に200坪の借地を確保していたことが関係していよう。

同寺の講安寺借地内には代々江戸詰をした高田藩士の末裔で、漢詩で名を揚げ書家として多くの弟子を教えた中根半僊が葬られていた。その死去翌年の嘉永3年(1850)5月に弟子たちが不忍池畔に建てた顕彰碑(現存)には、「半僊先生衣幘之蔵　嘉永二年己酉秋八月初四日、遭疾捐館舎、享年五十三、先塋在本郷等正寺、寺地隘兆窖不堪蔵遺骸、乃仮寺北講安寺之地、為安措體魄之宅、(後略)」と刻まれている(磯ヶ谷1927a)。中根家歴代の墓地は本郷等正寺にあったが、寺地が狭く遺骸が納められなかったので仮にその北方にある講安寺の地に埋葬した、という事情がそこに端的に述べられている。明治40年の講安寺墓碑銘録では等正寺借地部分は「北ノ部弐号」として分類され、141基の墓標、法名数にして310人分が書き上げられており、そのうち「中根家歴代之墓」には「秋月院釈半僊居士」のほか、その後死去した家族とみられる5人の法名が記されている。ただし明治41年に等正寺・興安寺借地部分を含む講安寺墓地が巣鴨庚申塚に一括移転した際、半僊らの墓は等正寺境内に残っていた歴代墓と合わせて駒込吉祥寺内に移された(磯ヶ谷1927b)。庚申塚の移転先には両者を合葬するに十分な余地がなかったためであろうか、その理由は不明である。

なお講安寺墓碑銘録のうち等正寺借地部分には、明治35年(1902)7月初旬の日付をもつ総塔(合葬墓)のほか、明治中期以降に建てられたと思われる墓標も多く記録されている。しかし興安寺借地と同じく講安寺側で書き写したものと思われ、施主名等の注記が少ないため、被葬者の身分階層などは十分に読み取ることができない。

(5) 巣鴨庚申塚墓地への移転

明治中期以降も東京府市は市街地での埋葬を抑制し、郊外の共葬墓地への移行を推進する政策を取り続けたが、移転先の整備が十分進まなかったこともあり、事態はなかなかその構想通りに運ばなかった。講安寺の墓地でも興安寺・等正寺の借地部分を含め、新規の埋葬がある程度続いていた。その転機となったのが、明治36年(1903)の東京市告「元寺院境内共葬墓地移転方ノ件」である(千葉・戸沼1997)。それは寺院が所有する墓地を市外に移転改葬した場合、その跡地を無代下付(無償下付)するという墓地移転奨励策であった。地租改正以来、市街地の寺院境内墓地は寺の私有地ではなく公有地(東京市有地)の扱いとされていたため、この政策転換には多くの寺院が応ずることになった。

講安寺はまず同年、境内北西隅で明地となっていた45坪4合9勺の部分について墓地の地目廃止と無代下付の措置を受けた上で、隣接する東京帝国大学に売却した。東京市が下付を許可した文書には、従来埋葬なしと注記されている[33](以下敷地の変遷については後述)。ついで興安寺・等正寺とも協議を進め、一部の内墓部分を除く墓地全体の下付を受けることとして、明治41年(1908)から43年にかけて巣鴨庚申塚の新設墓地にそのすべてを移転した[34]。同43年12月には跡地の実測を経て、墓地767坪9勺の無代下付が決定された[35]。これまで引用してきた同40年の講安寺墓碑銘録は、同年12月移転に先立って東京市による現地検査を受けるため作成されたものである。興安寺に残る移転関係文書によると庚申塚における講安寺の墓地面積は577.01坪であり、興安寺と等正寺には従前の借地坪数にほぼ準じて104.89坪と71.77坪がそれぞれ割り当てられた。大正元年(1912)講安寺は無代下付を受けた墓地の跡地を東京帝国大学に売却し[36]、本堂・庫裡と一部の内墓部分だけをその所有地として残した。

3. 明治中後期における講安寺境内の敷地変遷

本稿の最後に、明治中後期における講安寺境内の敷地変遷についてまとめておく。

江戸時代の境内拝領地は 2,100 坪であったが、明治初年地租改正のための測量調査を経て、境内面積 1,522 坪 2 合 5 勺、ほか除地 429 坪 1 合 2 勺 5 才と定められた [37]。除地とされたのは境内南端の門前町屋の部分であり、これは寺地から分離されて市街地券が発行された（小南 2023）。残る境内のうち本堂・庫裡などを除く敷地は実際の用途にかかわらず地目は墓地とされ、その扱いは地域によって違いがあったが、東京市の場合は寺の私有地ではなく公有地（市有地）とされた [38]。地目を墓地と定められたその部分は、その後の郊外移転推進政策との兼ね合いの中で大きな変化を見せていくことになった。

(1) 境内北西隅部分を東京帝国大学に売却（次掲 10 図）

前述した通り、明治 36 年（1903）には境内北西隅の 45 坪 4 合 9 勺を東京帝国大学に売却した。墓地の地目を廃して講安寺に無代下付された上での措置であった。これは大学側からの要請による売却であり、学内に残された文書には「附属病院皮膚科病室は隣地寺院境界にごく近く、在院患者らが墓地を眼下に望んで常に不快の感を懐いている。また土地狭隘のため火事・地震の際の避難に不便である。そのため病院の敷地を拡張して樹木を植え、墻塀を設けてそれらの欠点を除きたい。」という趣旨が記されており、売却によって講安寺が得た費用は墓地を郊外に移転する準備に当てる旨が併記されている [39]。

(2) 境内北東部分を学校用地として貸与（11 図）

講安寺境内の北東隣りには東西方向の谷筋が通っており、維新後そこは学校用地となった。まず明治 9 年（1876）に忍岡学校（のち忍岡尋常小学校、現・台東区立忍岡小学校）が同地に移転する [40]。校地が狭かったため同 39 年に至り、講安寺境内の北東部分 288 坪 7 合をその用地として無償貸与することになった。もともと講安寺の敷地内であったが地目墓地として東京市有地の扱いになっていたため、市から下谷区に貸与する形で処理された。その時の文書には、それ以前より既に 98 坪余の部分が同校の運動場として使用されていたこと、および地目は墓地であるが従来より墳墓は 1 基もなかったことが付記されている [41]。この部分はかつて富山藩が借りていた敷地の東半部に当たるが、講安寺に返却された後も墓地として使用されなかったことになる。忍岡尋常小学校はその後大正 3 年（1914）に現在地（台東区池之端）に移り、跡地には同 5 年市立第一実科高等女学校（のち市立忍岡高等女学校、現・都立忍岡高等学校）が転入した。同校はさらに昭和 15 年（1940）現在地（台東区浅草向柳原町）に移転し [42]、この地はその後東京大学の敷地に含み込まれた。

(3) 墓地を巣鴨庚申塚に移転して跡地を東京帝国大学に売却（12 図）

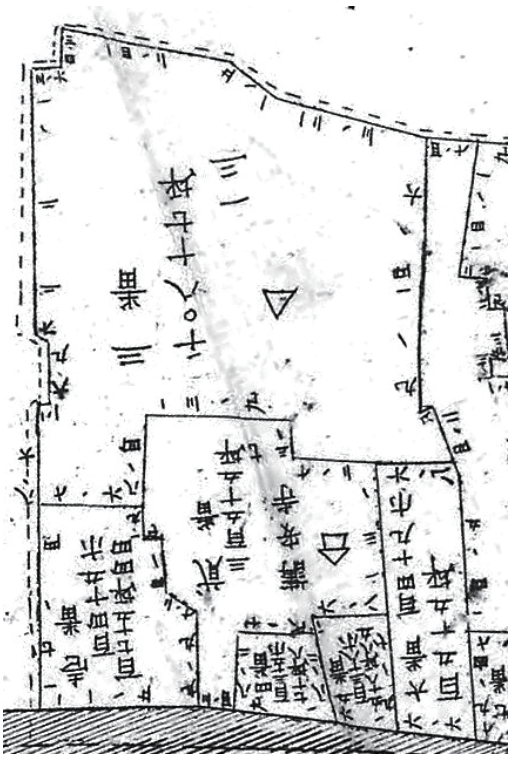
明治 36 年（1903）東京市の政策転換（墓地郊外移転奨励策）を受けた講安寺は、境内北西隅の一部を東京帝国大学に売却した後、興安寺・等正寺とも協議をしつつ、同 40 年に墓地部分の無代下付と巣鴨庚申塚の新設墓地への移転を願い出、全 1,423 基分の墓標書上を添えて現地検査を受けた上で、翌 41 年に東京市の許可を得た。その後 3 か寺の墓地移転は前述の通り同 43 年にかけて実施された。同 44 年、改葬済みが確認され墓地の地目が廃止された時点における実測面積は 767 坪 9 勺であった。翌大正元年この跡地は東京帝国大学に売り渡され、売却で得た費用は興安寺・等正寺の分を含め庚申

塚墓地への移転費用に充当された[43]。のち東京帝国大学はこの敷地に看護法講習生の寄宿舎を建設した[44]。

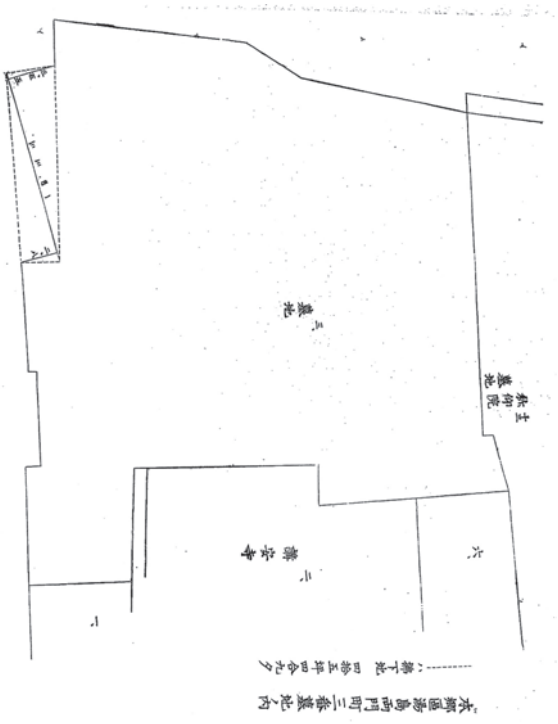
昭和7年（1932）の地籍台帳および地籍図には、以上の変遷を経た講安寺境内の最終的な形が掲載されている（7表、13図）。表のうち湯島両門町2番地の宅地323坪が講安寺の本堂・庫裡部分であり、3ノ4番地の宅地21.09坪は庚申塚移転後も残された内墓である。東京帝国大学に順次売却された敷地は、それぞれ学校用地の地目で所有者は文部省と記載されている。13図中の「忍岡女学校」は位置が違っていて正しくは3ノ3番地、東京市立学校であるのに地籍台帳に文部省所有と記載されている理由は不明である。1番地から6番地にかけての宅地6筆は、もと門前町屋だった私有地である。

おわりに

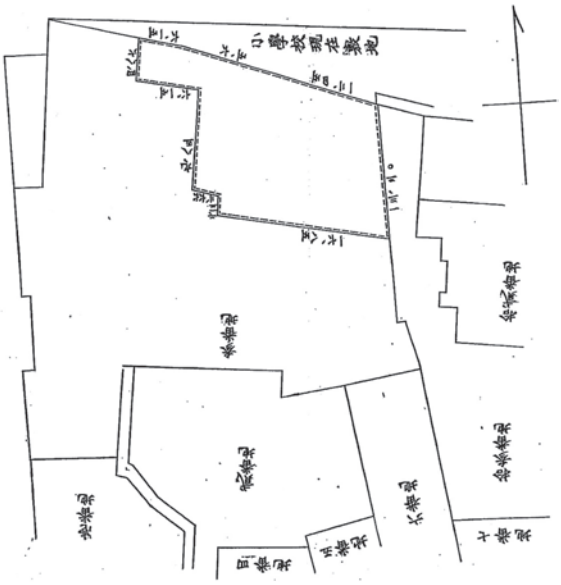
江戸時代以来講安寺の境内には富山藩借地、ついで興安寺・等正寺の借地が存在し、たまたま本調査地点がそのすべてに関係する位置にあったため、文献・絵図史料の調査・検討も多岐にわたることになった。全体として複合的な内容となったのでここでまとめることはむずかしく、それは省略することにする。しかしその一方で複合的であったが故に、単独寺院の境内では見ることができない様々な様相を窺い知ることができたともいえる。考古学的調査によって解明された成果と合わせて、今後さらに関連分野の研究が進展していくことを期待して本稿の結語としたい。



9図　明治11年（1878）「大日本東京全図 本郷区」
（文京区立図書館文の京デジタル文庫）

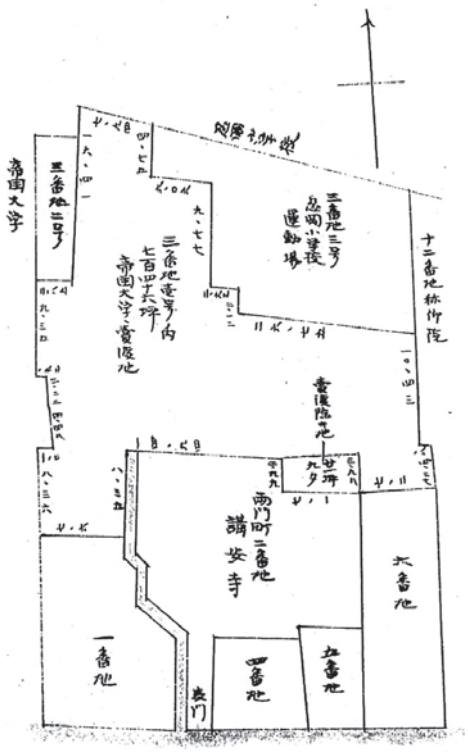


10図　明治36年（1903）境内北西隅を売却
同年「売却　浅草区栄久町、本郷区湯島両門町」
（東京都公文書館所蔵）



11 図　明治 39 年 (1906) 境内北東部分を貸与

明治 39 年「第 169 号 市有地特貸の件 本郷区湯島両門町」(東京都公文書館所蔵)



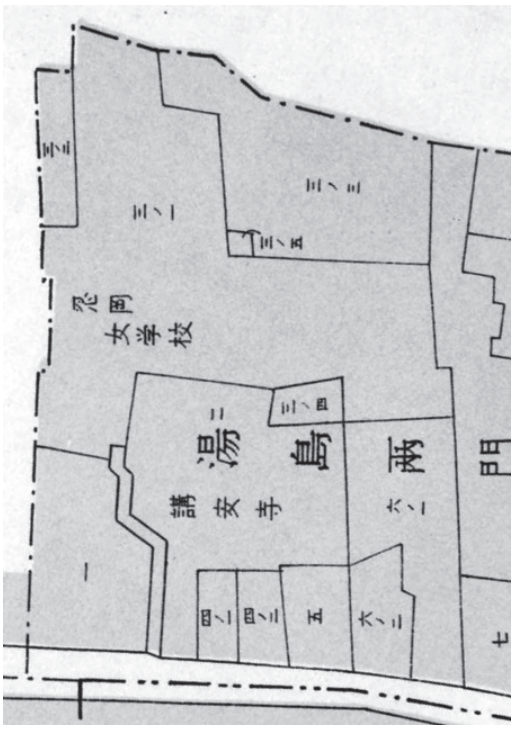
12 図　大正元年 (1912) 墓地跡地を売却

明治45年「土地売渡登記済届 本郷講安寺 講安寺」(東京都公文書館所蔵)

7 表　昭和 7 年地籍台帳 (湯島両門町部分)

『東京市本郷区地籍台帳 (昭和 7 年)』(1932 年、内山模型製図社出版部)

地番	地目	面積 (坪)	所有者
1	宅地	177.44	辻八五郎
2	宅地	323.00	講安寺
3 ノ 1	学校用地	746.00	文部省
3 ノ 2	学校用地	45.49	文部省
3 ノ 3	学校用地	288.70	文部省
3 ノ 4	宅地	21.09	講安寺
3 ノ 5	学校用地	5.56	文部省
4 ノ 1	宅地	30.75	宮内幾弥
4 ノ 2	宅地	40.05	宮内初之助
5	宅地	58.85	石渡英次郎
6 ノ 1	宅地	122.66	石渡英次郎
6 ノ 2	宅地	32.34	石渡英次郎



13 図　昭和 7 年地籍図 (湯島両門町部分)

『東京市本郷区地籍図 (昭和 7 年)』(1932 年、内山模型製図社出版部、国立国会図書館デジタルコレクション)

【注】

(1)「講安寺起立帳之写」(講安寺所蔵)。文京区教育委員会編『講安寺文書(改訂版)』(2020年)27頁。

(2)「寺社書上」巻68湯嶋寺院書上(国立国会図書館デジタルコレクション)。

(3)　このほか講安寺について詳しくは附属病院入院棟A地点の報告書を参照(宮崎2016)。

(4)「随筆」(別名吉川随筆)巻1および巻5(富山県立図書館所蔵)。

(5)　弘化5年(1848)12月「裏明地借地之事」(講安寺所蔵、日付は2月の誤)。前注(1)『講安寺文書(改訂版)』38頁。

(6) 金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵加越能文庫。高木喜美子他編『政隣記　耳目甄録　拾七』(桂書房、2019年)204頁。

(7)　富山藩上屋敷の敷地は拝領地ではなく本藩加賀藩からの借地であったため、入院棟A地点報告書の考察ではこの「御借地」はそれを意味していると考えたが(宮崎2016)、前後の状況からみて講安寺からの借地とみるのが自然であり、その見解を修正することにした。

(8)　前注(6)『政隣記　耳目甄録　拾七』206頁。

(9)「安永九年分限帳」(富山県立図書館所蔵)。高瀬保編『富山藩侍帳　越中資料集成1』(桂書房、1987年)139～140頁。

(10)　馬捕は加賀藩にも同名の職制があり、日置謙編『加能郷土辞彙』(金沢文化協会、1942年)では「ウマトリ　馬捕　(中略)御馬捕は藩侯の召馬及び藩の貸馬の取扱者で、御馬奉行の裁許に属し、御厩の御仲間とも称せられた。」と解説されている。分限帳にある御召馬と御馬の区別は判然としないが、御召馬は厳密な意味での藩主乗馬、御馬は藩の公用馬(上記の「藩の貸馬」)などを含むのであろうか。なお各種史料中の「御馬」は召馬や藩主乗馬などと言い換えると不正確になるおそれがあるので、その表記のままとしておく。

(11)　高木喜美子他編『政隣記　耳目甄録　拾九』(桂書房、2020年)315頁。

(12)　前田育徳会編『加賀藩史料』第拾編(1936年)934頁。

(13)　なお付言すると講安寺境内の富山藩借地部分に被害があったとみられる火事は、本文で言及した天和2年と寛政5年の2件のほかに、元禄16年(1703)11月のいわゆる水戸様火事や文政8年(1825)12月加賀藩上屋敷内に発した火事などがある。詳しくは隣地富山藩邸の火事被害に関する分析を参照(小松2015、森きく子1987)。

(14)　絵図の全体図および各図の解説は小松愛子論文を参照(小松2015)。

(15)　享保9年(1724)12月、富山藩江戸屋敷内である傷害事件が起きた。翌10年正月3日に国元でその知らせを受けた時の記事を引用する(「随筆」巻17、富山県立図書館前田文書)。

> 旧臘十六日之夜、江戸小人覚助と申者、与風夜中ニ起、側ニ臥居候江戸小人十助・与助両人を脇指ニ而切り、其身ハ御厩之後江参り致自害候処を、相小屋之者二三人追付、覚助を捕申候、尤与助・十助共ニ小疵ニ而死不申候、翌日御僉儀在之処、覚助儀中症之様ニ而言語不叶、意趣知れ不申候、右之通ニ而壱人も死不申由、

江戸小人の覚助という者が夜中にふと起き出して、側に寝ていた2人の江戸小人を脇差で斬り、その後御厩の後ろに行って自害しようとしていたところ、相小屋の者たちが追い付いて捕らえた、という事件である。江戸屋敷で起きた事件であるのは自明なのにわざわざ繰り返し「江戸小人」と断っているのは、国元からではなく江戸において人宿等を通して雇い入れられた奉公人であったためであろう。事件を起こした覚助が自害しようとしたのが「御厩」の背後であったこと、そこに追い付いたのが「相小屋之者」であったことから、かれら江戸小人たちが屋敷内の大部屋に集団居住し、おそらくその近くに御厩があったことが窺える。小人ら奉公人の住居と御厩の位置関係を推測させる記事といえる。またその2年後の享保11年には、富山藩が財政窮乏に陥った結果、江戸詰の家中らに対する扶持・給金の支払いが遅延し、足軽以下「五、六百人」が未払いの給金を渡さなければ屋敷を立ち退くと訴えた事件が起こっている(浦畑2010)。人数には多少誇張があるかも知れないが、その当時江戸藩邸には相当多数の足軽や中間・小人らが詰めていたとみられ、屋敷

を立ち退くというその主張は国元から連れられて来た者には似つかわしくないことからすると、中には江戸市中や周辺各地の村落等から雇い入れられた者たちが数多く含まれていたと考えられる。藩邸居住者の出自や身分構成を窺い知ることができる出来事として、合わせて注目しておきたい。

(16)　弘化 5 年 (1848)2 月「永代借地証文之事」2 通 (講安寺所蔵)。前注 (1)『講安寺文書 (改訂版)』38 ～ 39 頁。

(17)　この過去帳には旅先で客死して現地に葬られた者や大名屋敷の居住者で火葬したのち国元に遺骨が送られた者など、講安寺の墓地に埋葬されていない者も含まれているが、ここでは便宜上それらを合わせて被葬者と呼んでおく。なお過去帳全体を通して火葬と記載された事例は少なく、1 割に満たない。

(18)　被葬者が当主でなくその家族である場合は当主名の表記によって分類した。

(19)　この榊原家池之端屋敷は天正 18 年（1590）徳川家康が江戸に入部した時に、江戸北辺の守りのため徳川四天王の一人とされる榊原康政に与えたと伝えられている。榊原家ははじめ上野館林を居城とし、のち播磨姫路など各地を経て寛保元年（1741）越後高田に移封されたが、この屋敷は上屋敷となった一時期を除き、明治維新に至るまで同藩中屋敷として存続した（岩淵 2004)。

(20)　高田藩の江戸詰人数 (家数) は、明和 2 年 (1765) 時点で 196 人 (知行方 52 人、扶持方・切符方 120 人、足軽以下 24 人)、天保 15 年 (1844) で 200 人 (知行方 62 人、扶持方 138 人、足軽以下不明) であった (『上越市史』通史編 4 近世二 128 ～ 129 頁)。

(21)　富山藩の定府人数は安永期 (1772 ～ 81) 時点で 275 人 (家族を含む、男 140 人・女 135 人) であったが、旦那寺の宗派別調査では講安寺が属する浄土宗はそのうち 28 人に過ぎなかった。多かったのは日蓮宗 93 人、浄土真宗 92 人である (「諸芸雑志」巻 5、富山県立図書館所蔵前田文書)。

(22)　江戸定府の者を中心とした多くの高田藩士が神木隊と称して上野寛永寺で戦い、多数の死者を出した（山崎 1929、高田市史編集委員会 1958)。講安寺過去帳の慶応 4 年（1868）5 月 15 日条には、そのうち早期に戦死が確認できた 6 人の名前が記載されている。

(23)　東京都公文書館所蔵。同館の登録名（公開件名）では「本郷区湯島両門町 3 の 1 号　講安寺住職中村念道」のうち。本報告では仮に「講安寺墓碑銘録」と呼ぶことにする。同館ホームページの史料目録には「公開件名」と「内容」が掲載されているが、前者では内容が把握しにくく史料の特定もむずかしい場合があるので、以下の注では適宜後者を史料名として表示する。

(24)　本調査地点はその位置関係から、西十六号ないし十五号の一部にかかっていると推測される。成瀬論考 9 図の墓壙分布図のうち C7 ブロックは富山藩借地の返却後に形成された墓の遺構と推定されており、幕末期に新設された西十六号に当たる可能性が高い。C8 ブロックは西十五号の西端部分であろうか。

(25)　入院棟 A 地点で発掘された墓の遺構は、墓碑銘録の南山下ノ部、過去帳では「井戸…」と記されたものに当たると考えられる。

(26)「寺社書上」巻 71 本郷寺社書上（国立国会図書館デジタルコレクション)、「御府内備考続編」巻 136（東京都公文書館所蔵）ほか。

(27)　過去帳ではコレラ死の埋葬者には黒丸印や「暴」「痧」(暴痧病、コレラの意) などの注記が付けられている。

(28)　桐ヶ谷（霊源寺）は江戸の南郊、落合（法界寺）は西郊の火葬場とそれに付随する埋葬地。このほか江戸の郊外には小塚原・代々木・砂村新田などに火葬場が設けられていた。

(29)　東京の市街地および郊外縁辺部の地域編制は明治初年にたびたび変更され、明治 6 年（1873）から翌 7 年にかけては朱引内六大区・朱引外五大区の区画整理が行われた。この区画は同 11 年 11 月の郡区町村編制法の時点まで継続した（東京都 1958、中元 2002)。

(30)　東京都公文書館には明治 7 年（1874）から 8 年にかけて朱引内寺院が郊外寺院境内に借地することを願い出た願書およびそれが却下された際の請書が残っているが、興安寺に関する文書はそこに含まれていない。なお講安寺は駒込蓮光寺境内に借地を認められたが、ほか 1 件は却下（願先不明)、等正寺は駒込吉祥寺内に 200 坪の借地を認められ、ほか 1 件は却下されている（同上)。講安寺は明治 7 年 10 月「墓地借請願」、同 8 年 9 月 18 日「墓地続の場所借受埋葬願の義聞届難き旨指令に付請書」の 2 通、等正寺は明治 7 年 10 月

「埋葬地願書」、同 8 年 9 月 22 日「墓地続の場所借受願の義聞届難き旨指令に付請書」の 2 通。

(31)「寺社書上」巻 71 本郷寺社書上（国立国会図書館デジタルコレクション）、「御府内備考続編」巻 136（東京都公文書館所蔵）ほか。

(32) 昭和 45 年 (1970) 三か寺による覚書控 (興安寺所蔵)。

(33) 明治 36 年「市会議案提出の件　市有地売却の件　浅草区栄久町 71 番地墓地、本郷区湯島両門町 3 番地墓地元関係寺院へ売却」、同 37 年「寺有地売却許可　本所（郷の誤）区　講安寺」（東京都公文書館所蔵）。

(34) 興安寺所蔵墓地移転関係文書。

(35) 以上、明治 41 年「北豊島郡巣鴨村大字巣鴨字庚申塚 362 番の 2、364 番、366 番の 6 墓地となす件許可本郷区湯島両門町講安寺」、同 43 年「第 220 号　市有地無代下付の件（本郷区湯島両門町）」、同 44 年「本郷区湯島両門町 3 の 1 号　講安寺住職　中村念道」ほか（東京都公文書館所蔵）。

(36) 明治 45 年「墓地跡地無代下付登記済届　本郷　講安寺」ほか（東京都公文書館所蔵）。

(37) 明治 5 年「講安寺寺院明細帳」（東京都公文書館所蔵）。

(38) 明治 11 年「大日本東京全図　本郷区」（2400 分の 1）は、地租改正のための測量結果に基づいて作成された詳細な地図である（9 図）。前述した明治 5 年時点の坪数と違いがあるが、湯島両門町 2 番地の 355.7 坪が講安寺の本堂・庫裡部分、3 番地が墓地で 1087.13 坪、もと門前町屋は 1 および 4 ～ 6 番地の 4 筆に分かれて合計 460.09 坪となっている。なお講安寺所蔵の明治 10 年境内図（前掲 6 図）に記入されている「六間九尺」などという数字は、本図の「六・九」を間尺に読み替えたものと考えられる。

(39)「明治二十五年度以降四十四年ニ至ル土地関係書類」(東京大学文書館所蔵)。

(40) 台東区立忍岡小学校ホームページの学校沿革史参照。

(41) 明治 39 年「第 169 号　市有地特貸の件　本郷区湯島両門町 3 番地の内」ほか (東京都公文書館所蔵)。

(42)『都立学校要覧（沿革）昭和 34 年度』(東京都教育委員会、1959 年)。

(43) 興安寺所蔵墓地移転関係文書。

(44)『東京帝国大学一覧 (大正 2 ～ 3 年)』等所収の学内配置図参照。

【参考文献】

飯塚義博　2012「明治期東京における共葬墓地の成立過程と市区改正委員会案」『日本建築学会計画系論文集』77 巻 679 号

飯塚義博　2014「明治期東京における火葬場の立地・制度・絵図」『生活学論叢』25 号

石居人也　2007「明治初年の〈衛生〉言説－火葬禁止論争をめぐって－」『歴史学研究』828 号

磯ケ谷紫江　1927a「中根半僊先生碑」『墓碑史蹟研究』47 号

磯ケ谷紫江　1927b「中根半僊、半嶺先生墓域 」『墓碑史蹟研究』50 号

岩淵令治　2004「江戸藩邸と都市社会－高田藩榊原家池之端屋敷を素材に－」『江戸武家地の研究』塙書房

岩淵令治　2021「大名と大名家臣の菩提寺」『港区史』第 2 巻通史編近世上

浦畑奈津子　2010「享保年間　富山藩の危機－藩主前田利興隠居一件と一門・親族大名」『富山史壇』162 号

江戸遺跡研究会編　2004『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館

小野間良　2009「市街地における墓地の景観に関する研究－東京都新宿区を対象として－」（早稲田大学理工学部社会環境工学科景観・デザイン研究室 2008 年度卒業論文）

加藤元信　1999「榊原家池之端屋敷跡と旧岩崎家茅町邸」『日本庭園学会誌』7 号

亀田康範　1971「加賀藩武家奉公人の実態」『石川郷土史学会々誌』4 号

久野　昭　1969『葬送の倫理』紀伊國屋新書

栗三直隆　2008「富山藩の江戸屋敷」『富山市日本海文化研究所紀要』21 号

小松愛子　2015「文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9 号

小南弘季　2023「「祭典法用に必需の場所」としての神社境内－明治東京の神社における境内空間の近代化－」『日

本建築学会計画系論文集』88 巻 807 号
志村　洋　1995「榊原家と藩政の概要」『文京区埋蔵文化財調査報告第 7 集　龍岡町遺跡』
高田市史編集委員会　1958『高田市史』第 1 巻
田中政幸　1995「加賀藩上屋敷本郷邸における長屋類型と詰人空間構成」『東京大学史紀要』13 号
千葉一輝・戸沼幸市　1997「近代以降における寺院集積の変容について－東京の寺院集積地区（寺町）に関する研究　その 1」『日本建築学会計画系論文集』62 巻 491 号
東京大学埋蔵文化財調査室　2016『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』研究編・報告編
東京都　1958『区制沿革－名主制から区制への推移（都史紀要 5)』（鷹見安二郎執筆）
東京都　1999『江戸の葬送墓制（都史紀要 37)』（西木浩一執筆）
中嶋久人　2010「東京における「公共墓地」の成立」『首都東京の近代化と市民社会』吉川弘文館
中元幸二　2002「明治四年朱引内四十四区制について」『(東京都公文書館）研究紀要』4 号
西木浩一　1997「墓標なき墓地の光景－都市下層民衆の死と埋葬をめぐって」竹内誠編『近世都市江戸の構造』三省堂
西木浩一　2004「都市下層民衆の墓制をめぐって」江戸遺跡研究会編『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館
西野光一　1999「明治六年の火葬禁止令における火葬観について」『佛教文化学会紀要』8 号
西野光一　2000「熊沢蕃山の火葬容認論と近世の火葬論」『佛教文化学会紀要』9 号
西野光一　2002「明治 6 年の火葬禁止令とその背景－東京における埋葬習俗－」『アジア遊学 38(死をめぐる習俗)』勉誠社
日塔和彦　1998「『御府内寺社備考』からみた江戸の寺院」『年報都市史研究』6 号
林　英一　2010『近代火葬の民俗学』佛教大学
原　祐一　1997「湯島講安寺における墓域の空間利用－東京大学医学部附属病院病棟地点で検出した埋葬施設の検討－」『東京考古』15 号
前田俊一郎　2013「近代国家と墓制－死者の「共葬」をめぐる実践－」国立歴史民俗博物館・山田慎也編『近代化のなかの誕生と死』岩田書院
牧原憲夫　1990『明治七年の大論争－建白書から見た近代国家と民衆－』日本経済評論社
宮崎勝美　1990「加賀藩本郷邸とその周辺」『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』第 3 分冊考察編
宮崎勝美　2016「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟 A 地点」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』研究編
森きく子　1987「富山藩江戸屋敷の火災と再建－於前田正甫公の時代－」『富山史壇』93 号（のち『越中資料集成 3　吉川随筆・前田氏家乗』1988 年、桂書房に収録）
森　謙二　1993『墓と葬送の社会史』講談社現代新書
森下　徹　1995『日本近世雇用労働史の研究』東京大学出版会
山崎有信　1929『上野戦争　戊辰回顧』上野彰義隊事務所
山下恒夫　1995「東京における光太夫史跡・下－大黒屋光太夫調査ノート・7 －」『窓』92 号

東京大学構内遺跡講安寺墓域（2 区 /HWK－6）より出土した江戸時代人骨

近藤　修・佐宗亜衣子・石井理子・佐々木智彦・荒牧友美

医学部附属病院関連施設にともなう発掘調査地の一部は江戸時代には講安寺の敷地内であり、当該墓域より多数の墓壙が検出され江戸時代の人骨が多く出土した。以下、入院棟 A 地点 2 区（HW2 区）および外溝施設地点（HWK－6）から出土した人骨の整理結果を報告する。考古資料、文献資料の分析から、出土人骨の主体は江戸時代後半～明治期と考えられる。

整理方法、性別判定、年齢推定基準

確認･カタログ化された墓壙（遺構）のうち人骨調査の依頼をうけたのはおよそ 120 基である。甕棺、方形・円形の木棺などからなるが、上下に深い構造のものを含み、1 つの墓壙（遺構）No. に複数個体が含まれているものも多く見られた。したがって遺構 No. ごとに人骨標本を同定し、左右を考慮しつつ重複を判定し最少個体数（MNI）の確認を行った。保存状態の記載は、脳頭蓋（CRA）、顔面頭蓋（FAC）、下顎（MAN）、歯牙（DEN）、上肢骨（UPE）、下肢骨（LWE）、椎骨（VER）、肋骨（RIB）、骨盤（PEL）、手（HAN）、足（FOT）ごとに、ほぼ完全（○）、不完全（△）を示した。

性別判定については、主として骨盤形態、頭蓋・下顎の形態特徴をもとに判断し、場合によって、四肢骨の大きさ（大腿骨頭のサイズ）なども参考にした。判断基準としては一般的なテキスト（たとえば Uberlaker, 1978; Steckel et al., 2006 など）を参考にされたい。

年齢推定については、成人、未成人（6 歳以上）、未成人（5 歳以下）の 3 段階を記載した。成人・未成人の境界は後頭骨と蝶形骨の軟骨結合（spheno－occipital synchondrosis）の癒合、四肢長骨の骨端（とくに、鎖骨胸骨端、上腕骨近位端）癒合、を基準としたが、その他の加齢変化（歯牙の咬耗、歯槽の退縮、頭蓋縫合の閉鎖、椎骨の骨棘形成など）も適宜参考とした。未成人については、歯牙の萌出・形成シークエンスをもとに、主として第 1 大臼歯の完全萌出を基準として 6 歳以上・5 歳以下の判定を行った（Uberlaker, 1978）。

人骨資料の整理・同定結果は表 1（HWK－6）、表 2（HW2 区）にそれぞれまとめた。

古病理学的観察

HWK－6 出土人骨に関して、以下に示す古病理学的観察項目を系統的に記録し、結果を表 3 にまとめた。その他の特徴的な古病理所見は HW2 区人骨における観察結果も加えて、個体ごとに記載した。

観察項目として用いたのは、クリブラ・オルビタリア（cribra orbitalia）、四肢骨の骨膜炎（osteoperiostitis）、椎骨・四肢関節面の変形性骨関節症（osteoarthritis）であり、以下に示す基準でスコア付した。病態の観察基準はおよそ既出テキスト（Uberlaker, 1978; Steckel et al., 2006）に従った。

・クリブラ・オルビタリア　（cribra orbitalia）

0　病変なし
1　≦1平方センチにはっきりわかる孔群が存在する
2　＞1平方センチのエリアを小孔や大孔が占める

・骨膜炎　（osteoperiostitis）
病態スコア
0　骨膜炎なし
1　目立つ縦断線がある。
2　Reactive　area　がある。
3　肥大や変形を伴う。（＊ reactive area：縦断線や pitting を伴うかさぶた様の隆起が存在する場所）
スケールスコア
A　表面の 1/4 以下のエリアに見られる
B　表面の 1/4 ～ 1/2 のエリアに見られる。
C　表面の 1/2 以上のエリアに見られる。

・変形性骨関節症　（osteoarthritis）
椎骨
0　変形性変化なし
1　骨棘形成が少なくとも 1 つある。
2　過度な骨棘形成が少なくとも 1 つある。（シュモール結節含む）
椎骨以外の四肢骨関節面
0　病理学的変化の証拠がない
1　Marginal lipping（3㎜以下の骨棘）、変形性変化、増殖性変化のいずれかがある
2　Marginal lipping、変形性変化、増殖性変化、のいずれかに加えて eburnation（象牙質化）がある
3　完全 or それに近い破壊が関節面で起こっていて、ankylosis（強直）がある .
4　関節の癒合が見られる。
　四肢骨関節面の病態は上記グレードに加えて、lipping（L）、porosity（P）、eburnation（E）のあるなしを記載した。

人骨集計結果

　混入と思われる単独の断片骨を除いて集計した個体数は 181 個体。性別と年齢段階（成人、6 歳以上未成人、5 歳以下未成人）による内訳は以下のようになった。
　同定可能個体による性比は、HWK－6 では 27：21（= 1.3）、HW2 区では 20：8（= 2.5）となり、

	HWK6	HW2	講安寺全体
男性	27	20	47
女性	21	8	29
成人	62	66	128
未成人（>5)	11	2	16
未成人（<5)	27	4	31
最少個体数（注）	109	72	181

注：それぞれ、性別不明、年齢段階推定不能な個体を含むため、合計数と一致しない

２つの墓域で異なる傾向がある。全体では、47：29（= 1.6）となりやや男性個体がおおいがそれほど極端ではない。都立一橋高校遺跡出土の江戸時代人骨による性比は、62：27（= 2.3）で男性が倍以上多い（Nagaoka and Hirata, 2007）。一般的に発掘出土人骨にもとづく性比は、遺跡の立地やその性格により異なることが知られている。江戸時代寺院の場合は寺格によっても異なる。平本（2001）は江戸市中の遺跡出土人骨報告書より性比をまとめ、一橋高校遺跡の性比 2.9 から天徳寺の 1.4 までのばらつきを認めている。本遺跡（講安寺）の性比 1.6 は、江戸遺跡の中ではやや低い部類といえる。

これら大都市江戸市内の遺跡は、いずれも男性が多い傾向を示している。速水融（2001）は、主に農村地域の宗門改帳にもとづき、18 世紀の日本の性比を 1.8、すなわち女児 100 に対して男児 180 と推定している。ここからは、江戸時代にひろく行われていた女児に対する選択的な嬰児殺害（すなわち男児が選択されていた）という可能性が示唆される。一方で、江戸という大都市を考慮すると、男性が仕事を求めて集まったために男性人口が増加していた可能性もあり、これらのどちらか（あるいは両方）が考えられる。講安寺遺跡人骨と一橋高校遺跡人骨の性比が異なる理由は、一つには時代的な違いも考えられるが、他方には埋葬人骨の階級構成の違いも考えられるだろう。一橋高校遺跡は下町に位置し、人骨の主体は町民と考えられているので、本人骨の主体が武家・商人であるとすれば、この階層には性比に強い偏りがなく、講安寺墓地にはそれが反映されていると推測される。

年齢構成に関しては、成人：未成人の比を算出してみた。HWK－6 では 62：38 でおよそ 6：4、HW2 区では 66：6 で 10：1 となる。すなわち HWK－6 では全体のおよそ 4 割を未成人が占めているのに対し、HW2 区では未成人は 1 割にも満たない。合計して講安寺全体の比としてみると、128：47（=7.3：2.7）となり未成人の割合は 3 割弱となる。平本（2001）は若年者（およそ 22 歳以下としている）の死亡率を上記性比と同様の江戸市内遺跡出土人骨よりまとめているが、これもまったく若年個体の見つからなかった修行寺（0％）から一橋高校遺跡（61％）まで、寺院の性格によって異なることが示されている。

また、全体に占める 5 歳以下の個体の比率は本遺跡（HWK－6+HW2 区）では 18％、約 2 割となる。19 世紀初頭（1812 － 1815）の宗門改帳（信濃国伊奈郡虎岩村）を調べた小林（1956）は 5 歳以下の幼児死亡率を、男子 32.4％、女子 29.5％と報告している。したがって本人骨から得た約 2 割という 5 歳以下幼児比率は実際の死亡率よりやや低い。しかしながら、HWK－6 に限ると 5 歳以下の幼児比率は 27% であり、この場合は宗門改帳による幼児死亡率とさほど変わらないともいえる。先史時代から古代にかけては、新生児や幼少児の埋葬が成人とは異なる場所で行われることが多く、その場合、成人骨とともに幼児骨が発見されることは少ない。そのため、5 歳以下幼児比率は実際の死亡率をあらわさないことが知られているが、本ケース（HWK－6）ではそのような埋葬習慣によるバイアスはなかったと予想される。

いずれにせよ、講安寺遺跡では、２つの墓域から出土した人骨群は性比、年齢構成の両面において異なる可能性があり、注目すべきであろう。これらの数値が、２つの墓域に埋葬された人骨群の真の値を示すとすると、この２つの墓域の性格（埋葬集団の人口構成や埋葬様式の違い）が異なることを示すだろう。もう一つ考えるべきは、墓の作られ方の差異が影響している可能性である。他の多くの江戸市中の墓地も同様であると予想されるが、本遺跡では多くの墓壙がお互いに切りあった状態

にある。すなわち、それぞれの墓壙は1個体を示さない。これは多くの墓壙に複数個体の人骨が含まれることからも明らかである。このことは、新たな墓を作る場合に過去の墓を壊している、さらにはその際掘り出した人骨を別所に改葬している可能性を想起させるものである。HWK－6とHW2区の人骨の保存状態を比較してみると、HWK－6のほうが人骨の保存状態が良い（より多くの個体で、多くの部位が保存されている）。これをHW2区のほうがより改葬の頻度・程度が強かったとみると、HW2区では成人個体を過剰にカウントしている可能性が高い。すなわち異なる墓壙に同一個体の人骨が（改葬されて）紛れ込み、最少個体数（MNI）として複数カウントされているかもしれない。一方で、幼児・小児個体はそもそも体のサイズが小さいので改葬される可能性は低かったかもしれないし、小さな骨片は検出・回収される可能性も低い。そのためHW2区では未成人の割合が低く算出されたということも考えられよう。

古病理所見観察結果

まず最初に、HWK－6出土人骨における集計結果をしめし（表3）、そののちHW2区を含めた個体での、個別の古病理所見を記載する。

HWK－6人骨における古病理所見は以下のようにまとめられる。クリブラ・オルビタリアの罹患率は、左右側を合わせた個体別カウントで5/24、すなわち21％となる。1個体小児個体が含まれるのでこれを除く成人個体の集計は4/23で17.4％である。Hirata（1990）は、縄文、室町、江戸（一橋遺跡）、現代のそれぞれの成人古人骨から罹患率を報告している。これによると、縄文9.1％（4/44）、室町24.6％（14/57）、江戸36.3％（37/102）、現代13.2％（5/38）であり、本人骨の罹患率は、現代・縄文よりは高いが江戸（一橋高校遺跡）・室町ほどは高くない。クリブラ・オルビタリアは鉄欠乏性貧血との関連が示唆されているが、本人骨群は一橋高校遺跡人骨よりも生活環境がよかったことを示唆するのかもしれない。

骨膜炎は、一時的な細菌性感染により表出するようであるが、その表現型と、感染源の異同、その重篤性、あるいは全体の生活環境との関連性はわかっていない。表出部位としては脛骨が最頻出部位であることが知られている。本人骨では大腿骨と脛骨で頻度が高く、それぞれ右大腿骨58％（18/31）、左大腿骨59.4％（19/32）、右脛骨50 ％（16/32）、左脛骨50％（15/30）である。アメリカインディアン古人骨脛骨で21.6％、江戸時代人で12.3％の報告がある（鈴木, 1998）。これと比較すると、本人骨での観察結果は頻度が高すぎるので、観察基準の相異に加え、観察者間による誤差が含まれると考えられる。1例としてST198（成人男性）の右脛骨の骨膜炎を図版に示す（図版1a）。

椎骨に見られた変形性脊椎症は、頸椎で17.6％（3/17）、胸椎で16.7％（3/18）、腰椎で26.7％（4/15）であった。変形性脊椎症は、背骨にかかるストレス（荷重）をあらわすとともに加齢によって現れる形質である。一般に下部椎骨（腰椎）に高頻度で見られる傾向があり、本人骨群の観察結果もこれにあてはまる。一方で、この病変が加齢に伴い増加するため、成人以降でも年齢構成の違いにより比較群間の観察頻度が異なることになる。したがって、遺跡間での単純比較は難しい。1例としてST258個体（成人男性）の胸椎下面の軽度のリッピングとシュモール結節を図版に示す（図版1b）。

観察項目にはないが、ST112 b個体（成人男性）に骨梅毒らしき変形がみられた。左右脛骨の前縁

から外側面にかけて大きく骨膜炎の症状がみられ、かつ前縁を含む内外両側面に骨増殖を伴う膨隆が観察された。左右大腿骨の下半内側縁も軽度の骨増殖による膨隆がみられた。頭蓋表面には顕著な病変は見られないが、前頭骨と頭頂骨の内板には数か所の不定形の骨融解性の陥凹が見られる。骨梅毒の所見としては、病症が軽度であり断定はしかねるが、江戸時代人骨には比較的高頻度で骨梅毒が見られる（男性 6.1%、女性 3.8%）という報告もある（鈴木 1998）。この頻度を仮定すると、本人骨群でも２～４個体の梅毒患者が見られてもよい。

HW2 区人骨にも梅毒罹患の可能性を示す個体がある（ST3143－2, 成人男性）。この個体の前頭骨正中部には骨腫状の膨隆が見られる（図版 3a）。左右脛骨には骨膜炎の所見もある。この個体（ST3143－2）には歯牙にも特徴的な磨耗面が観察される。残存する下顎左小臼歯から第１大臼歯にかけて頬側面に連続した磨耗面がみられ、その磨耗中心は象牙質の露出がこれも連続して見られる（図版 3b）。

その他、ST2892（成人男性）の胸椎あるいは腰椎椎体には、前縦靭帯骨化による強直が見られ（図版 3c）、複数個体の骨片からなる SB2457－22 には、複数個所の刃物による傷跡（trauma）が左大腿骨 A、同 B に（図版 2a, b）、右大腿骨 H には骨膜炎が（図版 2c）、上腕骨片 I には骨髄炎の所見が見られた（図版 2d）。

まとめ

講安寺墓域（HW2 区 +HWK－6）から出土した人骨は、混入や断片資料を除いた個体数として 181 個体であった。男女の性比は 1.6 であり、やや男性が多いものの、他の江戸市中遺跡に比べると性比は小さく、女性の占める割合は比較的大きい。年齢構成は、HWK－6 では約４割が未成人、そのうち全体の約３割が５歳以下の幼児・新生児（一部胎児）で占められている。一方で、HW2 区では未成人の割合は１割に満たない。この違いは、墓の構造や改葬状況によるバイアスの可能性もあるが、一方で、２つの墓域に埋葬された集団の人口構成が違っていたか、あるいは埋葬行動（埋葬習慣）が異なっていた可能性を示唆するものである。江戸市中の遺跡では一橋高校遺跡が HWK－6 と同様の高い幼児割合の傾向を示す。これは、一般的に先史時代から古代にみられる幼少児の選択的埋葬行為が行われず、成人と同じ墓域に葬られていた可能性を示唆している。骨膜炎は高頻度で見られたが、クリブラ・オルビタリアは既報告の江戸時代人、室町時代人より頻度が低く、生活環境や階級との関連が示唆される。２個体の成人男性には、骨梅毒様の病態変形が観察された。保存程度は千差万別であるが、まとまった個体数の人骨資料であり、今後、江戸市中人骨標本としての資料価値は高い。

謝辞

本人骨の標本整理はクリーニングと接合に 2003 年から 2008 年まで費やし、その後、年齢推定の試行と古病理所見の観察を行い、最終的に近藤が個体同定を含め確認を行った。その間、多くの東京大学内外の方に標本整理を手伝っていただいた。ここにお礼申し上げる。

【参考・引用文献】

Hirata K　1990「Secular trend and age distribution of cribra orbitalia in Japanese」『Human evolution』 4, 375 − 385.

Nakaoka T, Hirata K　2007「Reconstruction of paleodemographic characteristics from skeletal age at death distributions:Perspectives from Hitotsubashi, Japan」『American Journal of Physical Anthropology』 134, 301–311.

Steckel RH, Larsen CS, Sciulli PW, Walker PL　2006　The global history of health project: Data collection codebook. http://global.sbs.ohio-state.edu/

Uberlaker DH　1978『Human Skeletal Remains: excavation, analysis, interpretation』Aldine USA.

小林和正　1956「江戸時代農村民の寿命」『人類学雑誌』 65, 32 − 43.

鈴木隆雄　1998『骨から見た日本人』 講談社選書メチエ

速水　融　2001『歴史人口学で見た日本』文春文庫

平本嘉助　2001「江戸時代人の形質と構成」『図説　江戸考古学研究事典』 柏書房　pp. 146 − 151.

a

b

図版 1　HWK-6 出土人骨に見られた古病理所見．a: 骨膜炎 (Osteoperiostitis), ST198 右脛骨
b: シュモール結節と椎体周囲に弱いリッピング , ST258 胸椎下面

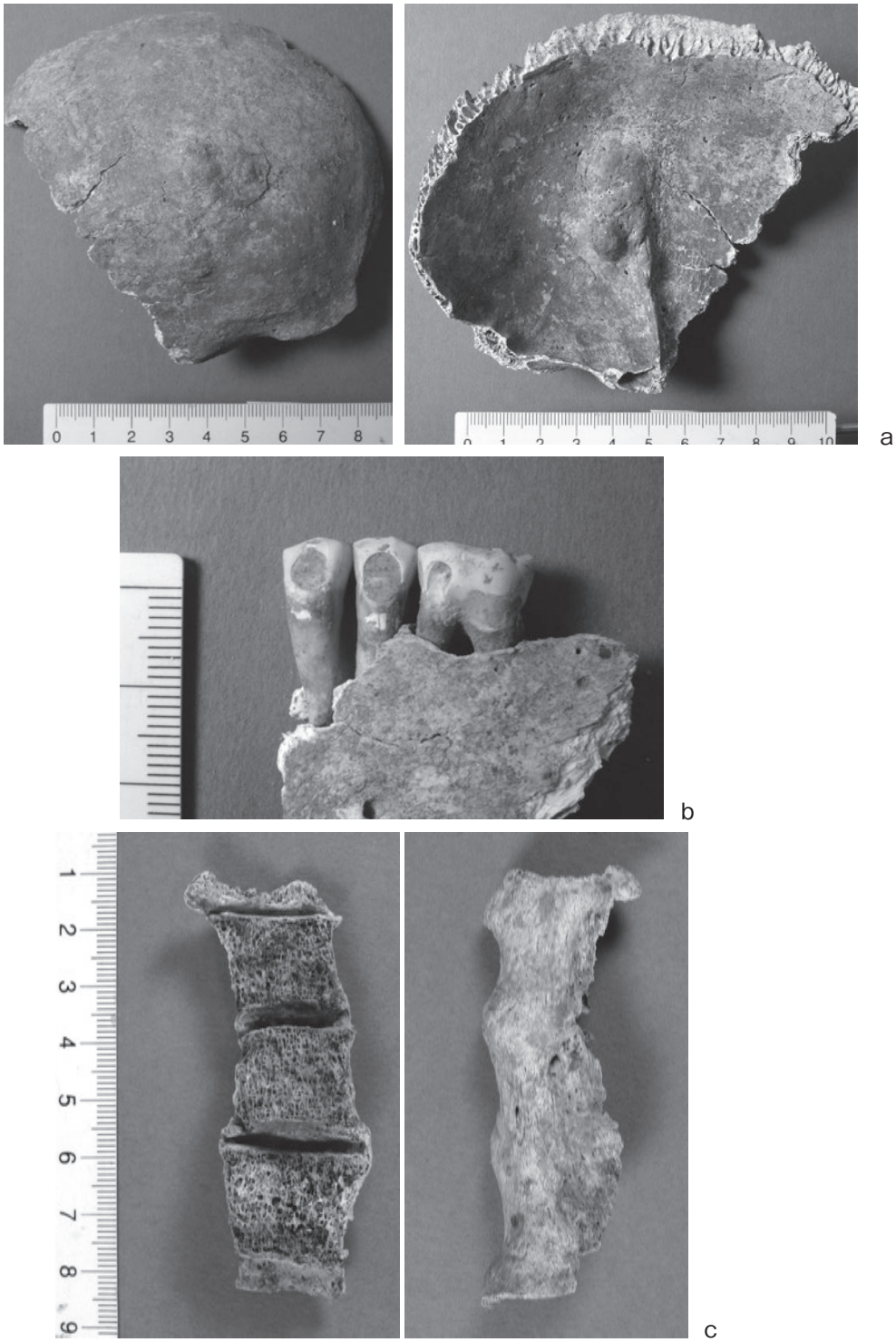
a

b

c

d

図版 2　HW2 区出土人骨に見られた古病理所見．a: 刃物によるキズ , SB2457-22 左大腿骨 A
b: 刃物によるキズ , SB2457-22 左大腿骨 B; c: 骨膜炎 , SB2457-22 右大腿骨 H
d: 骨髄炎（骨膜炎）, SB2457-22 上腕骨片 I



図版 3　HW2 区出土人骨に見られた古病理所見．a: 前頭骨正中部の骨腫 , ST3143-2
b: 左下顎 P-M 頬側面の特殊磨耗 , ST3143-2
c: 胸腰部？椎体間の強直 (前縦靭帯骨化による）ST2892

表1－1　講安寺墓域（HWK－6）出土人骨一覧

遺構、取り上げID	人骨 sub no.	MNI	保存状態				性判定部位	性別	年齢	備考
			全身	歯牙	恥骨結合面	耳状面				
SK-103	a	2	RIB△　PEL△		有		骨盤	男性	未成人>5	恥骨結合面は青年以下（juv-adと推定）、焼骨片１
	b		CRA△					?	未成人<5	左右岩様部
SK-105		1	DEN△	上顎M1 or M2 1本のみ				?		
SK-121		1	UPE△					?	?	左鎖骨遠位端のみ残存
SK-146		1	VER△					?	不明	焼骨混入
SK-171		1	CRA△　UPE△　LWE△　RIB△　HAN△					?	未成人<5	椎体混入か?
ST-08		1	CRA△　FAC△　MAN△　DEN△　UPE△　LWE△　PEL△　HAN△　FOT△	一部			頭蓋・四肢骨	男性?	成人	
ST-13		1	CRA△　FAC△　MAN△　DEN△　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	一部（上顎・下顎）	有（左のみ）	有（両側）		?	未成人>5	M1完全萌出, 11-12year
ST-21	a	2	CRA○　FAC△　MAN○　DEN△　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　PEL○　HAN△　FOT○	一部			頭蓋	男性	成人	old
	b		CRA○　FAC△　MAN△　DEN△　UPE△　LWE△　VER△　FOT△	一部				?	成人	右TMJ関節炎
ST-23		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN○　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT○	ほぼ完全（上顎・下顎）	有	有	骨盤	男性	成人	
ST-24	b	1	RIB△ HAN△ FOT△					?	成人	
	e		RIB△					?		
ST-31/32	a	3		一部（上顎）			四肢骨	男性	成人	最低個体数３（うち１体は老年）・側頭骨RL＊３・大腿骨L*3
	b							?	成人	
	c							?	成人	
ST-34	a	2	CRA△　FAC△　DEN△　UPE△	一部（３本）			四肢骨	男性?	成人	やや大型の個体、同定可能四肢骨は左右humerusのみ、歯牙3本は咬耗moderate
	b		CRA○　FAC△　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	ほぼ完全（上顎・下顎）	有	有	骨盤	女性	成人	やや小型、咬耗弱くyoung adult、体幹＋四肢骨の同一個体は確認できない
ST-42		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN△　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　FOT△	一部（上顎・下顎）		有	骨盤	女性	成人	
ST-48		1	CRA△　FAC○　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	ほぼ完全（上顎M2欠・下顎）		有	頭蓋	女性?	成人	
ST-49		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	ほぼ完全		有	骨盤・四肢骨	女性	成人	焼骨混入・釘＊２・木片＊１
ST51-2		1	CRA△　FAC○　MAN○　DEN○　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　PEL○　HAN○　FOT○	ほぼ完全	有	有	骨盤・四肢骨	女性	成人	young adult, 鎖骨胸骨端open
ST-65		1	UPE△　LWE△　VER△　RIB△					?	未成人	
ST-76		1	CRA○　FAC△　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　VER○　RIB△　PEL△　FOT△	ほぼ完全		有（一部あり）	骨盤・頭蓋	男性	成人	動物骨混入
ST-85	a	2	CRA△　MAN△　DEN△　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	一部（上顎・下顎）				?	未成人<5	a人骨は3歳程度の幼児、ST-85の上層
	b		MAN○　DEN△　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　PEL△　HAN○　FOT○	一部（上顎・下顎 ）		有	骨盤	男性	成人	skull なし　下顎有
ST-88		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN△　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	一部（上顎・下顎）			四肢骨	女性	成人	
ST-96		1	CRA△　DEN△　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT○	一部（上顎・下顎 ）			骨盤・四肢骨	男性	成人	
ST-97（カメカン西A）		1	FOT△					?	成人	MT１のみ
ST-97（カメカン東S－B）										動物骨x3、鉄釘x1
ST104	a	3	UPE△　LWE△　PEL○			有	骨盤	女性	成人	a, c は現場写真よりST104の上層、aはより大型で女性、cはより小型で若い
	b		CRA△　FAC△　MAN○　DEN△　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	一部（上顎・下顎）		有	四肢骨	男性	成人	ST104最下層の人骨、a-cでは一番大型で男性、おそらく最高齢
	c		FAC△　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　PEL△	ほぼ完全（上顎・下顎）				?	成人?	subadult ― young adult
ST111	a	5						男性?	成人	最低成人３体・未成人２体・焼骨、同定＋弁別は未確認
	b							?	成人	
	c							?	成人	
	d							?	未成人<5	
	e							?	未成人<5	
ST-112	a	2	CRA△　FAC△　MAN△　DEN△　UPE△　PEL△	一部（上顎・下顎）		有	骨盤	男性	成人	aはやや大型、重複はhumerus, pelvis, skull, face, dentition
	b		CRA○　FAC△　MAN△　DEN○　UPE○　LWE○　PEL△　HAN△　FOT○	ほぼ完全（上顎・下顎）		有	骨盤	男性?	成人	病変有、手足はa/b弁別不能だが1個体でも矛盾しない
ST-113		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　VER○　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	ほぼ完全		有		?	未成人<5	3-4歳
ST-115	a	2	CRA△　FAC△　MAN△　DEN○　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△	ほぼ完全				?	未成人<5	個体わけ不能、側頭骨岩様部2個体
	b							?	未成人<5	

表1－2　講安寺墓域（HWK－6）出土人骨一覧（つづき）

遺構、取り上げID	人骨 sub no.	MNI	保存状態				性判定部位	性別	年齢	備考
			全身	歯牙	恥骨結合面	耳状面				
ST-116	a	1	CRA△ MAN○ DEN○ UPE△ LWE△ VER△ RIB△ PEL△ HAN△ FOT△	ほぼ完全（下顎）				?	未成人>5	長骨骨端未癒合（juv-ad）
	b	4	焼骨							側頭骨岩様部よりMNI=4
	c	2	CRA△ FAC△ MAN△ DEN○ UPE△ LWE△ PEL△ FOT△	ほぼ完全		有	骨盤	女性	成人	c，dは大きさの違いがあるが、すべての骨について個体同定は未完
	d		CRA△ FAC△ MAN△ DEN○ UPE△ LWE△ PEL△ FOT△	ほぼ完全		有	骨盤	女性	成人	
ST-117		1	CRA○ FAC○ MAN○ DEN○ UPE○ LWE○ VER○ RIB△ PEL△ HAN△ FOT△	ほぼ完全（上顎・下顎）	有	有		男性	成人	young adult ほぼ完全
ST-119-1	a	3	CRA△ FAC△ MAN△ DEN○ UPE△ LWE△ VER○ RIB△	ほぼ完全				?	未成人<5	側頭骨3組・椎骨・肋骨・肩甲骨も3組、胎児x1，幼児~18months x2
	b							?	未成人<5	
	c							?	未成人<5	
ST-119-2		1	CRA○ FAC○ MAN○ DEN○ UPE○ LWE○ VER○ RIB△ PEL△ HAN△ FOT△	ほぼ完全（上顎・下顎）		有	骨盤・四肢骨	男性	成人	舌骨あり・獣骨混入
ST-120	a	4	CRA○ FAC○ MAN○ DEN○ UPE△ LWE△ VER△ RIB△ PEL△ FOT△	ほぼ完全（上顎・下顎）	有	有		?	未成人>5	M1完全萌出
	b		CRA△ MAN△ DEN○ UPE△ LWE△	ほぼ完全（上顎・下顎）				?	未成人<5	
	c		LWE△					?	未成人<5	
ST-120改葬人骨	d		CRA△ MAN△ DEN△ UPE△ LWE△ VER△ RIB△	一部				?	未成人<5	胎児or新生児
ST121		1	CRA△ FAC△ MAN△ DEN△ UPE△ LWE△ PEL△ FOT△	一部		有	頭蓋・四肢骨	女性	成人	歯槽閉鎖、３主縫合閉鎖
SK-126		1	DEN○	ほぼ完全（乳歯列）				?	未成人<5	
ST-128		1	CRA△					?	未成人<5	右岩様部
ST129		1	DEN△ UPE△ VER△ RIB△ HAN△ FOT△	上顎切歯1本				?	成人	甕棺、毛髪有
SK131	a	3	CRA△ FAC△ MAN○ DEN○ UPE△ LWE△ VER△ RIB△ PEL△ FOT△	下顎ほぼ完全（斜め咬耗）				?	成人	咬耗程度からaはｂより高齢
	b		DEN△ PEL△	一部		有	骨盤	女性	成人	前耳状面溝がある、歯の咬耗弱いのでyoung adult or juvenile の可能性もある
	c		FAC△ DEN△	一部					未成人>5	6-7歳と推定
ST-135	a①	2	CRA△ FAC△ MAN△ DEN△ UPE△ LWE△ VER△ RIB△ PEL△ HAN△ FOT△	一部（上顎・下顎 ）		有	骨盤・頭蓋	女性	成人（老年）	大坐骨切痕・妊娠痕・ST135は２個体が重複・未成年の左大腿骨混入
	b②		MAN△ UPE△ LWE△ PEL△					?	成人	
ST-136		1	CRA△ FAC△ MAN△ DEN○ RIB△	ほぼ完全（上顎・下顎）				?	未成人>5	M1完全萌出、７歳前後、受焼・焼骨混入・釘土器片混入
ST-145		1	CRA△ FAC△ MAN○ DEN△ UPE○ LWE○ VER△ RIB△ PEL△ HAN△ FOT△	一部（上顎・下顎 ）	有	有	骨盤	男性	成人	
ST-148		1	MAN○ DEN△ UPE△ LWE△ VER△ RIB△ PEL△ FOT△	一部（上顎・下顎 ）			骨盤・四肢骨	男性?	成人	幼児骨混入
ST-149	a	2	CRA△ FAC△ MAN○ DEN○ UPE△ LWE△ VER○ RIB○ PEL○ HAN△ FOT○	ほぼ完全（上顎・下顎）	有	有	骨盤	男性	成人	
	b		UPE△ LWE△ VER△ PEL△				骨盤	女性	成人	
ST-153	a	4	CRA△ FAC△ MAN△ DEN△ UPE△ PEL△	一部（上顎・下顎 ）		有（一部）		?	未成人>5	7-8歳
	b		CRA△ MAN△ DEN△ UPE△ LWE△	一部（上顎・下顎 ）				?	未成人<5	副葬品が外耳孔付近からでる・3歳くらい
	c		CRA△ FAC△ DEN△ UPE△ LWE△	一部				?	未成人<5	skullは胎児～新生児、四肢骨は2歳くらいか、別個体
	その他					有		?		ST-153-1～3のうち判定できなかったもの
ST-154		1	CRA△ FAC△ MAN△ UPE△ LWE△ VER△ RIB△						未成人<5	胎児
ST-160		1	CRA△ DEN△ UPE△ LWE△	一部（上顎・下顎 ）					未成人>5	6～8歳か
ST-167（改葬人骨）		1	CRA△ FAC△ MAN△ DEN△ LWE△	一部（上顎・下顎 ）				?	未成人<5	新生児
ST-176		1	CRA○ FAC○ MAN○ DEN○ UPE△ LWE○ VER△ RIB△ PEL○ HAN○ FOT○	ほぼ完全（上顎P2生前脱落・下顎）	有	有	骨盤	女性	成人	
ST-177		1	CRA△ FAC△ MAN○ DEN○ UPE△ LWE○ VER△ RIB△ PEL△ HAN△ FOT○	ほぼ完全（上顎・下顎）		有	骨盤	女性	未成人>5	M1完全萌出・大腿骨遠位端脛骨近位端未癒合
ST-180		1	DEN△ UPE△ LWE△ VER△ RIB△	一部（上顎・中切歯2本）				?	未成人	おそらくsubadult
ST-184		1	DEN△ UPE△ LWE○ VER△ RIB△ PEL△ HAN△ FOT△	一部		有	骨盤	男性	成人	
ST-187		1	CRA○ FAC○ MAN○ DEN○ UPE△ LWE△ VER△ RIB△ PEL○ HAN△ FOT△	ほぼ完全（上顎・下顎）		有	骨盤	男性	成人	
ST-187下		1	CRA○ FAC△ MAN○ DEN△ UPE○ LWE○ VER○ RIB△ PEL△ HAN△ FOT△	一部（上顎左I1～P1欠・下顎左右I1が先天的に欠？）		有	骨盤	男性	成人	
ST-198		1	CRA△ FAC○ MAN○ DEN△ UPE△ LWE○ VER△ RIB△ PEL△ HAN△ FOT△	一部（上顎）、ほぼ完全（下顎）		有	骨盤	男性	成人	
ST-199		1	CRA△ FAC△ DEN○ VER△ RIB△	ほぼ完全				?	未成人<5	4歳程度、大きさの異なる側頭骨は混入

表1－3　講安寺墓域（HWK－6）出土人骨一覧（つづき）

遺構、取り上げID	人骨 sub no.	MNI	保存状態				性判定部位	性別	年齢	備考
			全身	歯牙	恥骨結合面	耳状面				
ST-203		1	DEN△	一部（上顎右I1・下顎左M1orM2）				?	成人?	
SK-207		1	CRA△　MAN△　DEN△　LWE△　VER△	一部（上顎・下顎 ）				?	未成人<5	
ST-216		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN○　UPE○　LWE○　VER○　RIB○　PEL○　HAN△　FOT△	ほぼ完全（上顎・下顎切歯）	有（少し）	有	骨盤・頭蓋	女性	成人	妊娠痕
ST-218		1	UPE△　VER△　RIB△　HAN△　FOT△					?	成人	
ST-224		1	CRA△　MAN△　DEN△　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△	一部				?	未成人<5	新生児・搬入時はST-136と同じテン箱
ST-230		1	CRA△　MAN△　DEN△　UPE△　VER△　RIB△	一部（上顎・下顎 ）				?	未成人<5	胎児－新生児
ST-246		1	MAN△　VER△　RIB△　HAN△	（破片のみ）				?	?	すべて焼骨（白色化、収縮）
ST-247		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN△　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	一部（上顎・下顎 ）		有	骨盤・頭蓋	女性	成人	前耳状面溝，大型（5cm大）の骨腫がある
ST-248		1	CRA△　MAN△　DEN○	ほぼ完全（上顎・下顎）				?	未成人<5	M1CI1I2上下歯冠完成・乳歯ほぼ残存永久歯未萌出・3-4歳前後
ST-258		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN○　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	ほぼ完全（上顎・下顎右I1生前欠・左I2死後欠）	有	有	骨盤	男性	成人	下肢に炎症痕・指節骨間関節癒合有（pharange of finger）
ST-260		1	CRA△　FAC△　MAN△　DEN△　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL○　HAN△　FOT△	一部（上顎・下顎 ）	有	有		?	未成人<5	幼児（1.5 才）・dm2未萌出
ST-265		1	CRA△　FAC△　RIB△					?	未成人<5	幼児
ST-268		1	CRA△　FAC△　MAN○　DEN○　UPE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△	ほぼ完全（上顎右dm2が残存・下顎左右M1生前脱落?）		有	骨盤	女性	成人	
ST-270		1	VER△ HAN△ FOT△					?	成人	腰椎1＋胸骨
ST-281	a	1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN○　UPE○　LWE○　VER○　RIB○　PEL○　HAN○　FOT○	ほぼ完全（上顎・下顎）	有（左一部）	有	骨盤	男性	成人	
	b	1	DEN△　VER△　RIB△	一部（上顎）				?	成人	一部受焼
ST-285		1	MAN△　DEN△　UPE△　LWE△	一部（上顎右I2・下顎左C右P1P2）				?	成人	一部受焼
ST-286		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	ほぼ完全		有（一部）	骨盤	女性	成人	M1完全萌出・数珠1玉
ST-290		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN○　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　PEL○　HAN△　FOT△	ほぼ完全		一部	骨盤	男性	成人	M1完全萌出・頭蓋ブレグマ付近＆左歯槽＆左大腿骨幹遠位後面に病変痕らしきあり
ST-291	a	2	CRA○　FAC△　MAN○　DEN○	ほぼ完全（上顎左M1M2が欠・右I2が先天的に欠			頭蓋	女性	成人	出土状況写真より頭蓋と四肢骨は別個体
	b		UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△			有（右のみ）	骨盤	男性	成人	
ST-301	a	2	CRA△　FAC○　MAN△　DEN△　UPE△	一部（右I1I2M3左I1M3が死後脱落・下顎左右M2M3は歯槽閉鎖、歯列乱れている			頭蓋	男性	成人	ST-301は左側頭骨が3つ・主要個体はST-301-1&2で骨盤は2のもの?・その他の部位は判別不可
	b		CRA○　FAC△　DEN△　PEL△	一部（上顎左右M3形成途中）			骨盤・頭蓋	女性	成人	young adult，骨盤（大坐骨切痕・妊娠痕）?

表2－1　講安寺墓域（HW2区）出土人骨一覧

遺構、取り上げID	人骨 sub no.	MNI	保存状態				性判定部位	性別	年齢	備考
			全身	歯牙	恥骨結合面	耳状面				
SB-2457-22	a	6	CRA△　UPE△（humerus重複あり）　LWE△（femur, tibiaとも重複あり）	なし				?	成人	成人サイズの大腿骨片（右５、左４）より、成人のMNI=5、小児大腿骨片とあわせて MNI=6 と判定した。頭蓋片後頭骨と左大腿骨2個体（A, B）に刀など鋭利な刃物によるキズ有。右大腿骨（H）に骨膜炎。上腕骨片（I）に骨膜炎あるいは骨髄炎の所見あり。
	b							?	成人	
	c							?	成人	
	d							?	成人	
	e							?	成人	
	inf		LWE△　大腿骨片	なし				?	未成人?<5	
SE1734下層		1	CRA△　FAC△　LWE△	なし				?	成人	
SG1586		1	CRA△　HAN△	なし				?	成人	ほとんど動物骨
SK1783	a	2	CRA△　FAC△　MAN△　DEN△　UPE△　LWE△　PEL△	上顎大臼歯x2				?	成人	
	b			上顎Px1, 下顎Mx4, Px2				?	成人	
SK2083		1	UPE△　LWE△	なし				?	成人	四肢骨断片のみ
SK2519		1	CRA△	なし				?	未成人<5	胎児～新生児程度
SK3784	a	2	CRA○　FAC△　MAN△（重複）　DEN△　UPE△　LWE△	一部（咬耗強+chipping）				男性	成人	頭蓋、上顎、下顎が大型
	b			一部（咬耗弱い）				?	成人	下顎が小型
ST01（HWK4）	a	2	CRA△（重複）　FAC△　DEN△　UPE△　LWE△（大腿骨重複）	一部（咬耗弱い）			頭蓋・四肢骨	女性?	成人	
	b							女性?	成人	
ST1340		1	CRA△　FAC△　MAN△　DEN○　LWE△　PEL△　HAN△　FOT△	ほぼ完全（歯石沈着）				?	成人	
ST1904		1	CRA△　FAC△　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　VER△　PEL△　FOT△	ほぼ完全（咬耗強い）			頭蓋	男性	成人	
ST1934	a	2	CRA△　MAN△　DEN△　UPE△（鎖骨重複）　LWE△（膝蓋骨重複）	下顎（咬耗中～強）			頭蓋・四肢骨	男性	成人	
	b							?	未成人?>5	
ST1988	a	3	FAC△　UPE△　LWE△（femur重複）	なし			四肢骨	男性	成人	大腿骨6片の左右同定より、MNI=3とした
	b							?	成人	
	c							?	成人	
ST2905		1	CRA△　FAC○　MAN○　DEN○　LWE△　VER△	ほぼ完全（上顎・下顎）咬耗弱い				?	成人	左上顎＋下顎Pに重複（混入）あり
ST2905-1		1	CRA△　FAC△　MAN△	なし				?	成人?	
ST2905-3	a	2	CRA△　FAC△　MAN○（重複）　DEN△　UPE△　LWE△	一部（上顎・下顎）咬耗弱～中、カリエス			頭蓋・四肢骨	男性	成人	
	b			一部（下顎）咬耗中～強、カリエス			頭蓋	男性?	成人	
ST2211		1	FAC△　DEN△　LWE△　VER△　RIB△　HAN△　FOT△	一部（上顎Mx1）				?	成人	四肢骨は右patellaのみ
ST2212		1	VER△	なし				?	成人?	肋骨のみ
ST2584		1	CRA△　FAC△　MAN△　DEN△　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	一部（上顎Mx2, 下顎多）咬耗中、カリエス			頭蓋	男性	成人	カリエスは下顎M歯頸部、頭椎C1/C2に骨増殖病変有（歯突起）
ST2591	ab	4	CRA△（重複）　FAC△　MAN△　DEN△（重複）　UPE△（重複）　ＬＷＥ△（重複）　VER△　RIB△　HAN△	一部（少なくとも4個体分）				男性	成人	頭蓋と歯牙の重複から、MNI=4と判断した。下肢大腿骨にも重複があり、サイズの大小より男性1個体、女性1個体を含むとした。
	c							女性	成人	
	d							?	成人	
	e							?	成人	
ST2892		1	MAN○　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	なし			四肢骨	男性	成人	下顎は歯槽閉鎖、胸椎・腰椎の椎間に前縦靭帯の骨化による強直がみられる。
ST2952		1	DEN△　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　FOT△	一部（上顎Px1）カリエス			四肢骨	男性?	成人	
ST2970		1	CRA△	なし				?	成人	左側頭骨のみ
ST2980		1	DEN△	一部　咬耗弱い				?	成人	若年の成人と思われる

表2−2　講安寺墓域（HW2区）出土人骨一覧（つづき）

遺構、取り上げID	人骨 sub no.	MNI	保存状態				性判定部位	性別	年齢	備考
			全身	歯牙	恥骨結合面	耳状面				
ST3143		1	UPE△　LWE○　VER△　RIB△　PEL△　FOT△	なし		有	骨盤	女性	成人	
ST3143-2		1	CRA○　MAN△　DEN△　UPE△　LWE○　VER△　RIB△　PEL△　FOT△	下顎のみほぼ完全、P3-P4唇側に特殊摩耗		有	骨盤・四肢骨	男性	成人	前頭骨正中部に骨髄炎あるいは骨腫、左右tibialに骨膜炎の所見あり
ST3148		1	CRA△　DEN△	一部				?	成人	
ST3241-2	a	2	CRA△　MAN△　DEN△（未成人）	一部（上顎永久歯未完成）				?	未成人>5	頭骨と歯牙は未成人、四肢骨は成人段階で別個体とした
	b		LWE△　左大腿骨　FOT△					?	成人	
ST3243		1	PEL△	なし		有		?	成人	左寛骨の一部
ST3308		1	CRA△　UPE△　LWE△	なし				?	成人	
ST3310		1	CRA○　FAC○　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　VER△　RIB△　PEL△	ほぼ完全（上顎・下顎）混入有			頭蓋	男性	成人	
ST3310-1	a	3	CRA△　MAN△　DEN△　UPE△（上腕骨重複）　LWE△（右大腿、左脛骨重複）VER△　PEL△　FOT△	一部				?	成人	
	b							?	成人	
	c			乳歯有				?	未成人<5	
ST3310-2	a	3	CRA△（重複）　FAC△（重複）　MAN△　DEN○（重複）　UPE△（重複）　LWE△　FOT△	ほぼ完全、咬耗弱い				?	成人	上肢の重複に大小サイズの異なる上腕骨、歯牙の重複と咬耗程度より、MNI=3、1個体は男性
	b			上顎のみ、咬耗中程度、skull有			頭蓋・四肢骨	男性	成人	
	c			一部、咬耗弱い、skull無				?	成人	
ST3310-3	a	4	CRA○x2 CRA△x1 FAC○x1 FAC△x2 MAN○x3 DEN△　UPE△　LWE△（femur重複x4）VER△　PEL△			有x1	頭蓋・四肢骨	男性	成人	頭蓋、下顎、大腿骨の重複からMNI=4.　サイズの大きさ等から1個体は男性、1個体は女性と判断した下顎3個体中2個体は加齢による歯槽閉鎖があり、壮年から老齢とおもわれる
	b							女性	成人	
	c							?	成人	
	d							?	成人	
ST3310-4	a	2	CRA△（重複）　FAC△　MAN○（重複）　DEN△　LWE△	一部（上顎・下顎）咬耗強い			頭蓋	男性	成人	乳様突起x2、下顎x2よりMNI=2
	b			一部（下顎のみ）咬耗中、歯石沈着				?	成人	
ST3310-8		1	FAC△　MAN○　DEN○　UPE△　LWE△　RIB△　PEL△	ほぼ完全（上顎・下顎）咬耗中程度				?	成人	
ST3310-9		1	CRA△　DEN△　FOT△	一部（上顎・下顎）咬耗弱				?	成人?	
ST3310-10		1	CRA○　FAC△　MAN△　DEN△　UPE○　LWE○　VER△　RIB△　PEL○　HAN○　FOT○	一部（上顎・下顎）咬耗弱〜中、歯石沈着有	有	有	骨盤・頭蓋	女性	成人	恥骨結合面から壮年〜老年、下顎左P4-M歯槽閉鎖
ST3319		1	UPE△　LWE△	なし			四肢骨	男性	成人?	上肢・下肢とも太く、筋付着面発達
ST3320	a	2	CRA○　FAC△　MAN△　DEN△ UPE△　LWE△	一部（下顎）咬耗弱			頭蓋	男性	成人	
	b		CRA△　DEN△　UPE△　LWE△	一部（歯牙2本）			頭蓋・四肢骨	女性?	成人	左右乳様突起がaと重複。四肢骨小型
ST3348	a	2	MAN△　DEN△ UPE△（右肩甲骨）	一部（下顎のみMx3）咬耗弱			頭蓋	男性?	成人?	下顎大型
	b		UPE△　LWE△	なし				?	成人?	
ST3531		1	CRA△　MAN○　DEN△　UPE○　LWE○　VER○　RIB△　PEL△　HAN△　FOT△	一部（上顎x2, 下顎完全）咬耗弱	有	有	骨盤・頭蓋	男性	成人	young adult
ST3534	a	2	FAC△　DEN△　UPE△	一部（上顎x6, 下顎x3）咬耗弱				?	成人	young adult
	b		DEN△ RIB△	一部（乳歯歯胚）				?	未成人<5	胎児〜新生児程度
無番1	a	2	CRA△　FAC△　DEN△　LWE△	一部（上顎・下顎）咬耗弱〜中			頭蓋	男性	成人	頭蓋はa個体、下肢骨は小型でb個体とした
	b							?	成人	
無番2		1	CRA△　FAC△　UPE△　LWE△				頭蓋	女性	成人	頭蓋と下肢の同一個体は矛盾しないが不明。下顎Mx2（混入?）

表3－1　古病理学的観察結果一覧

人骨ＩＤ	性別	年齢	Cribra Orbitalia		Osteoperiostitis（骨膜炎）												Osteoarthritis (椎骨)				その他
			右眼窩	左眼窩	上腕骨 r	上腕骨 l	尺骨 r	尺骨 l	橈骨 r	橈骨 l	大腿骨 r	大腿骨 l	脛骨 r	脛骨 l	腓骨 r	腓骨 l	頸椎椎体	胸椎椎体	腰椎椎体	notes	
ST08	M	成人									0										
ST13	?	未成人																			
ST21 a	M	成人	0			0	0	0		0	1B	2B	2A	0	0		2	2		上下圧迫	
ST21 b	?	成人		0							3A	3A	0	0							右TMJ顎関節症
ST-23	M	成人			0	0	0	0		0	1B		0	0	0		1	0	2	C1上関節窩、歯突起窩 C2歯突起尖	
ST31/32 a	M	成人									3C	0	0								
ST31/32 b	?	成人									0		0								
ST31/32 c	?	成人									0	0	0	0							
ST34 b	F	成人		0	0	0				0	1B	1A	0	0	0						
ST42	F	成人	0									0		0							
ST48	F	成人			0		0	0	0	0	0	0	0			0					
ST49	F	成人	0	1	0	0	0	0	0	0											
ST51-2	F	成人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
ST76	M	成人	1	1	0	0	0	0			0	0	0	0	0	0					
ST85 b	M	成人			0	0	0	0	0	0	1C	1A	2A	0	0	0					右大腿骨にアレン頚窩
ST88	F	成人	0		0	0					1A	1A	2A	1A	0	0	0	0			
ST96	M	成人			0		0		0	0	2B	0	1A	1A							
ST104 b	M	成人			1A	1A	0	0	0	0	3C	3A	3B	3C	0	0		2	2	上下圧迫 シュモール結節	骨膜炎severe
ST104 a	F	成人				0					0	0	0	0							
ST111 a	M	成人			0		0	0	0	0	1A		0			0		0	0		
ST112 a	M	成人		0		0															
ST112 b	M	成人			0	0	3A	0	0	0	3C	3A	3B	3B	3A	0					
ST113	?	幼児			0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0				
ST116 a	?	未成人					0			0	0		0	1A	0		0	0	0		
ST116 c	F	成人			0	0						0	1		0						
ST116 d	F	成人		0	0	0		0		0	1A	1B	2B	2A	0						
ST117	M	成人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1A	0	0	0	0	0	0		
ST119-2	M	成人	0		0	0	0	0	0	0		3A	2A	3B	2A	2A	0	0	0		

表3−2　古病理学的観察結果一覧（つづき）

人骨ＩＤ	性別	年齢	Cribra Orbitalia		Osteoperiostitis（骨膜炎）												Osteoarthritis (椎骨)				その他
			右眼窩	左眼窩	上腕骨 r	上腕骨 l	尺骨 r	尺骨 l	橈骨 r	橈骨 l	大腿骨 r	大腿骨 l	脛骨 r	脛骨 l	腓骨 r	腓骨 l	頚椎椎体	胸椎椎体	腰椎椎体	notes	
ST120 a	?	小児		1		0	0	0			0	0		0							
ST120 b	?	幼児			0						0										
ST121	F	老人									1A										
ST129	?	成人															0	0	0		
ST131 a	?	成人						0						0							
ST131 b	F	成人					0			0											
ST135 a①	F	成人			0	0			0	1A	0	1A	0	1A							
ST135 b②	?	成人			0																
ST145	M	成人			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			2	2	仙椎癒合	
ST148	M?	成人										1B		1B							
ST149 a	M	成人															0	0	0		
ST153 b	?	幼児			0	0	0				0	0	0	0	0	0					
ST176	F	成人	0		0		0	0	0	0	0	1A	2B	1B	0	0	0				
ST177	F	未成人						0		0	0	0	0	0	0	0		0	0		
ST180	?	未成人										0									
ST184	M	成人										0									
ST187下	M	成人	0	0									1A	1A	0		0	0	1		
ST198	M	成人	0	0	0	0		0			3A	3A	3B	3A	0	0	0	0	0		
ST216	F	成人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1A	1A	1B	0	0					右脛骨近位に靭帯骨化
ST247	F	成人	1	0	0	0	0	0	0	0	1B	1B	1A	1A	0	0	1	0	1		
ST258	M	成人	0	0	0	0	0	0	0	0	1B	1B	1A	1B	0	0	0	2	0	シュモール結節	
ST260	?	未成人			0	0	0		0	0	0	0	0	0			0	0	0		
ST268	F	成人	0		0	0	0	0				1B		1B		0					
ST281 a	M	成人			0	0	0	0	0	0	1A	1A	0	0	0	0	0	2	2		
ST286	F	成人	0		0			0			3A				0		0				
ST290	M	成人	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			頭蓋のプレグマ付近、左歯槽に病変アリ
ST291 b	M	成人			0					0		1A	1A				0	1	1		
ST301 a	M	成人	0	1		0															
ST301 b	F	成人	0	0																	

表３－３　古病理学的観察結果一覧（変形性骨関節症）

Osteoarthritis（四肢骨関節面）

人骨ＩＤ	性別	年齢	上腕骨頭 r	上腕骨頭 l	肩甲骨関節窩 r	肩甲骨関節窩 l	上腕骨滑車 r	上腕骨滑車 l	上腕骨小頭 r	上腕骨小頭 l	尺骨滑車切痕 r	尺骨滑車切痕 l	橈骨頭 r	橈骨頭 l	橈骨遠位端 r	橈骨遠位端 l	大腿骨頭 r	大腿骨頭 l	大腿骨頭窩 r	大腿骨頭窩 l	寛骨臼 r	寛骨臼 l	大腿骨遠位端 r	大腿骨遠位端 l	脛骨近位端 r	脛骨近位端 l	脛骨遠位端 r	脛骨遠位端 l	腓骨遠位端 r	腓骨遠位端 l	距骨滑車 r	距骨滑車 l
ST08	M	成人			0																				0							
ST13	?	未成人																					1L		1L						0	
ST21 a	M	成人		0				0			1L			0		0		0		0			1L		1L		0		0		0	
ST21 b	?	成人	0		0		1LP																									
ST-23	M	成人			0	0								0		0	1L	0	1L		0		1L				0		0		0	
ST31/32 a	M	成人														0	1L										0					
ST31/32 b	?	成人																														
ST31/32 c	?	成人																														
ST34 b	F	成人	0				0					0		0		0		0		0			0				0		0		0	
ST42	F	成人						0		0																						
ST48	F	成人					1P	0		0	0										0		0									
ST49	F	成人												0								0										
ST51-2	F	成人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ST76	M	成人					0		0		0		0						0			0			0	0			0		0	
ST85 b	M	成人	0	0	0	0	0	1P	0		0	0	0	0	0	0	0	0	1L	0	1L				0	0					0	
ST88	F	成人	0	0	0	0	0														0	0	0	0	0	0						
ST96	M	成人									1L								1L		1L	0							0		0	
ST104 b	M	成人	0					0				0			0	0	0	0	1L		1LP		1LP		0	0			0		0	
ST104 a	F	成人																			0	0	1LP	0	0	0					0	
ST111 a	M	成人	0		0		0		0		0	0	0	0	0	0							0		0		0					
ST112 a	M	成人					0														0	0										
ST112 b	M	成人					0	0			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0	0	0	0	0	0	0	0
ST113	?	幼児			0				0				0																			
ST116 a	?	未成人	0				0				0							0		0					0							
ST116 c	F	成人	1P												0		0	0	0	0	0	0									0	
ST116 d	F	成人																1P	0	0		0							0			
ST117	M	成人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ST119-2	M	成人		0		0						0					0	0	0	0	0	0	1L	1L	0	0						

表３－４　古病理学的観察結果一覧（変形性骨関節症）（つづき）

人骨ＩＤ	性別	年齢	Osteoarthritis（四肢骨関節面）																													
			上腕骨頭 r	上腕骨頭 l	肩甲骨関節窩 r	肩甲骨関節窩 l	上腕骨滑車 r	上腕骨滑車 l	上腕骨小頭 r	上腕骨小頭 l	尺骨滑車切痕 r	尺骨滑車切痕 l	橈骨頭 r	橈骨頭 l	橈骨遠位端 r	橈骨遠位端 l	大腿骨頭 r	大腿骨頭 l	大腿骨頭窩 r	大腿骨頭窩 l	寛骨臼 r	寛骨臼 l	大腿骨遠位端 r	大腿骨遠位端 l	脛骨近位端 r	脛骨近位端 l	脛骨遠位端 r	脛骨遠位端 l	腓骨遠位端 r	腓骨遠位端 l	距骨滑車 r	距骨滑車 l
ST120 a	?	小児																														
ST120 b	?	幼児																														
ST121	F	老人					0					0						0			0	0										
ST129	?	成人			0																											
ST131 a	?	成人						0			0						0		0		0	0										
ST131 b	F	成人																				0										0
ST135 a①	F	成人	0									0	0				0		0	1L	0		2LPE	1P			0				0	0
ST135 b②	?	成人									0																					
ST145	M	成人			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1L	0	0	0	0	0	0	0					0		0	0	0	0
ST148	M?	成人															0		1L												0	0
ST149 a	M	成人	0	0			0	0	0	0	0	0		0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ST153 b	?	幼児																														
ST176	F	成人								0		0					0	0	0	0	0							0			0	0
ST177	F	未成人															0	0	0	0	0	0		0				0			0	0
ST180	?	未成人																														
ST184	M	成人																				0							0			
ST187下	M	成人	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
ST198	M	成人	0	0	1L	0	0	0				0					0	0	1	0	0	0	0	0	0	1L	0	0			0	0
ST216	F	成人			0	0	0	0	0	0	0			0		0	0	0	0	0	0	0	0	0			0	0	0	0	0	0
ST247	F	成人			0		0	0	2E	0	0		2E	0	0	0					0						0	0	0	0	0	
ST258	M	成人			0	0													0	0	0	1P					0	0				
ST260	?	未成人																														
ST268	F	成人																				0										
ST281 a	M	成人	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ST286	F	成人				0											0		0	0	0	0			0		0	0	0			
ST290	M	成人	0	0	0	0	0	0			0	0	0		0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ST291 b	M	成人	0		0					0		0						1L		0	0	0		1L			0					
ST301 a	M	成人																														
ST301 b	F	成人																			0											

富山藩邸における講安寺からの借地部分の空間利用

－医学部附属病院基幹整備外構施設等地点を中心に－

追川　吉生

1. 調査地点と富山藩邸内の借地

東京大学本郷構内の遺跡（以下､東大構内遺跡）では、医学部附属病院地区の北側一帯が富山藩邸跡となっている。富山藩邸を対象とした発掘調査は、1984 年に実施した中央診療棟地点に始まり、現在までに事前調査は 15 地点に及ぶ。考古学的な調査成果に基づく研究としては、台地縁辺の御殿空間にあたる看護職員等宿舎１号棟のあり方から成瀬晃司や大成可乃が言及しているほか（成瀬 2021、大成 2021）、堀内秀樹が台地上に設けられた庭園とその景観について考察している（堀内 2024）。詰人空間については追川吉生がクリニカル・リサーチセンター地点（以下、CRC 地点）で検出した、巨大廃棄土坑群が富山藩邸のゴミ処理だけでなく、宗藩である加賀藩のゴミも処理されていた可能性について言及しているほか（追川 2015）、同地点に含まれる加賀藩邸と富山藩邸それぞれの地下室の比較から、富山藩邸側の地下室の方が加賀藩邸に比べてより深い深度まで土地を利用している点を指摘している（追川 2016）。

富山藩邸に関する歴史学的研究では、藩邸の火災被害についてまとめた森きく子の研究が富山藩邸の考古学的な画期を捉える上で不可欠な情報を提供している（森 1987）ほか､藩邸の土地の利用状況に関する小松愛子（小松 2015）、宮崎勝美（宮崎 2016）の研究がある。

医学部附属病院基幹整備外構施設等地点（以下、HWK-6 地点）は、藩邸南側に隣接する講安寺の寺域のうち 637 坪６厘（後に 600 坪）を富山藩が借地して藩邸に組み込んだ場所にあたる。発掘調査では調査区全域が立川ロームⅣ層まで削平されていたため、層位的に文化層を把握することはできなかった。しかし富山藩邸から返地されて以降は講安寺（および興安寺・等正寺）の墓域となっていたことから､検出遺構によって前者をⅠ期、後者をⅡ期として把握した。本稿ではそのうち富山藩邸に組み込まれていた時期（Ⅰ期）の空間構成について考察する。

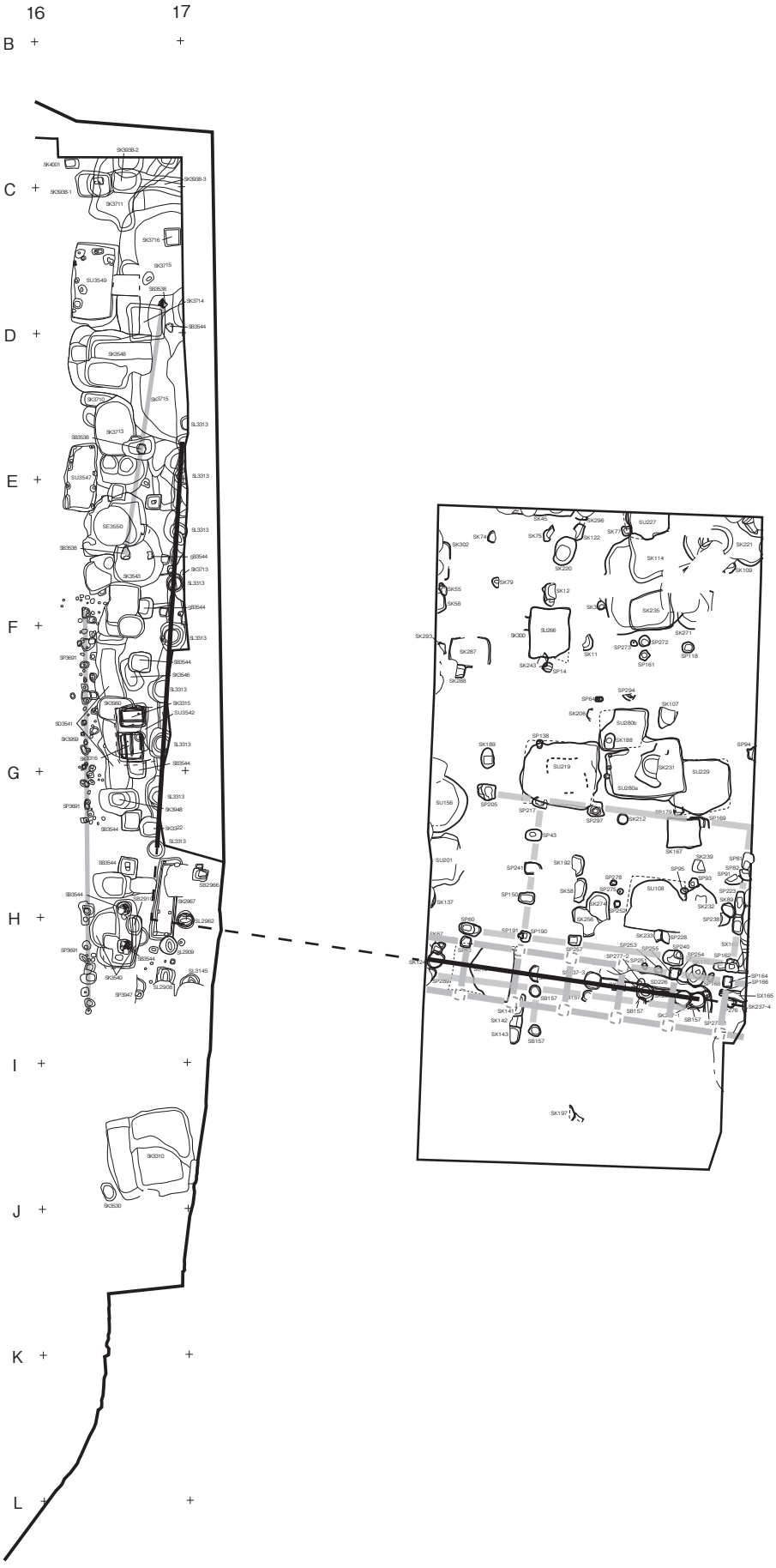
Ⅰ期の遺構は 87 基を数える。その大半は厩に関連する方形ピットと円形土坑（それぞれ馬房の柱穴と便槽、以下､厩遺構と記す）､建物跡１および２を構成する柱穴、そして 10 基の地下室（そのうち１基は時期不明）である。

遺構の詳細については本書第Ⅱ章・Ⅲ章の記述にゆずり、ここでは各遺構の特徴を概観した上で、借地によって藩邸に組み込まれた藩邸南側の外郭部の空間構成について考えたい。

2. 厩遺構

HWK-6 地点で検出した厩遺構はⅢ -7 図が示すように東西方向の基礎列が１条と、その南側に、基礎のほぼ中間に並ぶ便槽の列を検出したのみである。これらから東西方向７正立て以上の馬房からなる厩舎が存在したことが推測される。本地点の西側約８ｍに位置する医学部附属病院入院棟 A 地点（以後、HW-A 地点）でも､方形土坑（SB3544-1 ～ 10）と円形ピット（SL3313-1 ～ 9）からなる厩遺構を検出している（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）。この厩遺構は調査区東端からの検出だったため厩全体の規模は不明ながら、南北に９正立て以上だったことが推測される。HWK-6 地点の柱穴列が N-86.3° -W であるのに対して HW-A 地点の柱穴列の方向角は N-8° -E を示しており、厳密には直交する関係にはない。しかし両地点の遺構分布を合成した１図が示すように、厩遺構はＬ字状の配列となる。さらに便槽の坑底標高は両地点でほぼ同じであることから、これらは一体の厩と考えてよいだろう。

厩の構築時期は富山藩が講安寺から借地した 1690 年（元禄 3）以降である。HW-A 地点の厩が 1682 年（天和 2）の火災後の盛土造成によって構築されたＣ面で検出していることもそれを示している。しかし厩自体の設置に関する史料はない。HWK-6 地点の厩遺構からは 17 世紀代の陶磁器が少量出土している（SP255 と SK237）のみで構築時期を明確にするのは難しいが、HW-A 地点では柱穴 SB3544-9 が SK3715 の上に構築されていたことが考古学的に明らかとなっている（成瀬 2016）。SK3715 から出土した遺物の組成は、東大編年Ⅳｂ期に位置付けられる。本期の下限年代は 1703 年（元禄 16）の火災に求められるので、厩遺構が構築されたのは考古学的には富山藩の借地直後ではなく、18 世紀初頭以降である可能性が高い。



1 図　HWK-6 地点と HW-A 地点の厩（便槽遺構を結線）

3. 建物跡１・建物跡２

建物跡１は柱穴の一部は壊されているものの東西方向に延びる礎石列が南北２条と、南北方向に延びる礎石列が東西２条からなる（Ⅲ -2 図）。東西方向に関しては調査区の東側と西側に続く可能性もあり、その規模は東西 14m 以上、南北 7m となる。ただし HW-A 地点ではこれに続く建物遺構は未検出だった。柱穴のうち SP81 と SP162 の堆積土中には、幅 12cm 程度の柱痕が認められた。また何れの柱穴にも根石が残されている例がないことから、この建物の構造が簡易なものであったことがうかがえる。

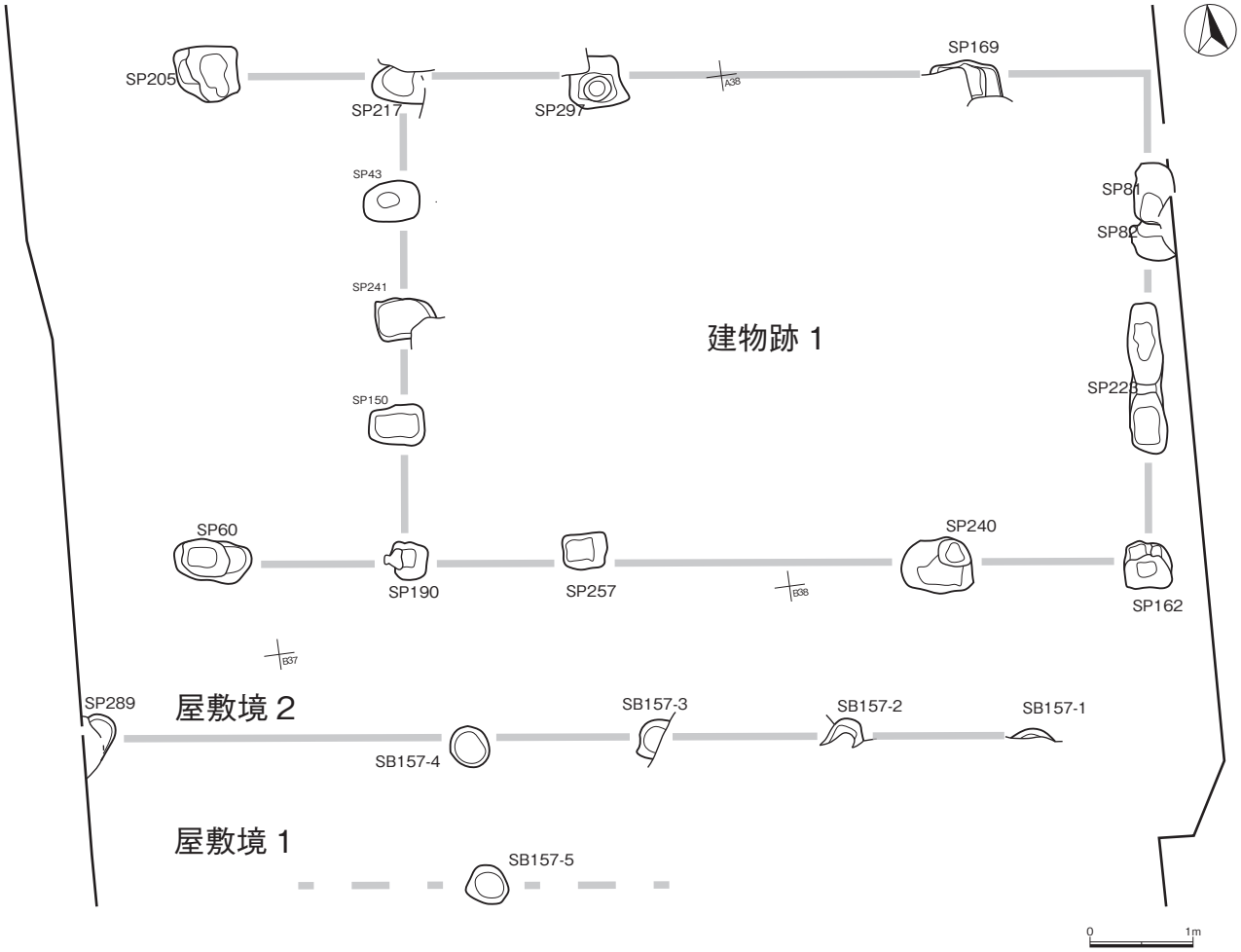
厩遺構と建物跡１には切り合い関係が認められているので、建物跡１は厩遺構に後続することが考古学的には明らかだが、建物跡１に関する史料はない。しかし柱穴のうち SP169 が 18 世紀前半の遺物を伴う SK167 に切られているので、建物跡１は 18 世紀前半までには建てられていたことになる。

建物跡１の 2.4m 南側で検出した５基の柱穴からなる東西方向の柱穴列と、その南側の１基の柱穴（以下、便宜上 SB157 に枝番を振り分け、東西方向の柱穴列を東側から SB157-1 ～ 4 と SP289、南側の柱穴を SB157-5 と呼称する）を、報告では建物跡２とした（Ⅲ -2 図）。

しかし SB157-1 ～ 4 － SP289 がなす軸が E-7.4° -S を示すのに対して、SB157-4 － SB157-5 はこれと直交せず 84° を示している。また SB157-1 ～ 4 － SP289 間が芯々距離を１間（約 1.9m）間隔とするのに対して、SB157-4 － SB157-5 間の距離は 1.4m である。こうした点から、これら６基の柱穴遺構を１棟の建物（建物跡 2）と捉えることは難しいと考える。

Ⅰ期の遺構分布をみてみよう（Ⅲ -1 図）。遺構分布は B ラインの南側約３m付近を境として、それ以南からはほぼ未検出となる。そしてこの遺構分布の境界にあるのが SB157-5 であることを考えると、これが富山藩邸（借地）と講安寺との屋敷境であった可能性が高い（2 図）。

大名屋敷跡遺跡で検出する屋敷境遺構には、下水溝を兼ねる間知石の石組を基礎として、その直上に長屋を設ける事例が多い（追川 2017）。しかし下水が敷設されていない部分では塀や柵が構築されており、それらは柱穴列、あるいは溝や土坑を伴う柱穴列となる（追川前掲）。



２図　建物遺構と屋敷境遺構

したがって建物跡２とした柱穴は２条の屋敷境としての柱穴列、即ち、SB157-1 ～ 4 および SP289 からなる柱穴列と、検出したのは SB157-5 のみであるが、これを含んで存在したと推察される柱穴列として捉えることができるだろう。前者を屋敷境 2、後者を屋敷境 1 と呼ぼう。加賀藩邸測量図（「上屋鋪御地面之図」1842 年、宮崎論考 2-A 図・2-B 図）では富山藩邸と講安寺との境界が、北西から南東方向に斜めに線引きされている。屋敷境 2 の主軸方向が E-7.4° -S であるのは、この状況を反映したものである可能性が高い。

屋敷境 1 と 2 からの出土遺物はなく、両者に切り合い関係もない。またローム層まで削平されている本地点では層位的な遺構の前後関係も詳らかではない。そのため屋敷境 1 と 2 が同時期に併存したものであるか、造り替えであるかは考古学的には不明である。歴史学的には富山藩の借地面積は 1699 年（元禄 12）に当初の 637 坪 6 厘から 600 坪に減じている。この借地変更に伴い、屋敷境 1 から 2 へと造り替えられたのだろうか。

「加賀藩邸測量図」を再度みてみよう。ここには講安寺の東西幅が 36 間と記されている。本図は 1842 年（天保 13）に作成されたものであるが、この 36 間を基準に 37 坪余りの敷地が減少したとすると、敷地は 1 間ほどセットバックしたことになる。しかし「講安寺境内図」（宮崎論考 1 図）をみると、富山藩の借地部分は講安寺の東西幅 36 間全てでないことがわかる。この図も 1829 年（文政 12）段階のものではあるが、富山藩邸の借地部分が講安寺境内の東西幅よりも狭ければ、37 坪余りの返地に伴うセットバックの幅は 1 間以上のものとなる。それに対して屋敷境 1 と 2 の距離は 1.4m である。借地の東西幅が 36 間であっても、それより短かったとしても、セットバックに必要とされる南北幅には不足する。したがって屋敷境としては 1699 年（元禄 12）の返地に伴う屋敷境の造り替えとは考えにくい。両者の距離が 1 間にも満たないという点から、両者は屋敷境 1 を主柱、屋敷境 2 を控え柱とした一体の屋敷境、おそらくは塀であると捉えたい。

屋敷境 2 と厩とは検出位置が重なっている。厩が存在した段階の屋敷境は、調査では未検出だったが、これとは別に構築されていたはずである。富山藩邸では 1690 年（元禄 3）に富山藩が借地してから 1846 年（弘化 3）に返地するまでに、幾度かの火災の被害を受けたことが記録にあることから、屋敷境の造り替えも数回に及んだものと推測される。本地点の調査では屋敷境遺構は屋敷境 1・2 によるもののみを検出したが、今後の調査に期待したい。

4. 地下室群

HWK-6 地点Ⅰ期では地下室を 9 基検出した（時期不明の地下室は除く）（3 図）。各遺構の特徴は本書第Ⅲ章に譲り、ここではその分布上の特徴をみていこう。地下室は出土遺物から、18 世紀前葉・中葉・後葉の 3 つのグループにわけられる。4 図はグループ毎の地下室の分布を模式化したものだ。18 世紀前葉は SU229、SU280a、SU280b である。SU280a は床面が黒褐色土とロームブロックによって敲き締めてられており、改修されていたことがうかがえる。また梯子を据えていた痕跡も見受けられ、継続しての使用が推測される。しかし天井が崩落したことで廃絶を余儀なくされ、SU280b や SU229 に造り替えられたのだろう。それ以外の地下室は切り合うことはなく、平面の規模が比較的大形の地下室が散在した状況がみてとれる。

地下室の分布でもう一つ特徴としてあげられるのが、地下室と共伴する建物遺構や便所、井戸といった居住空間の指標となるような遺構がみられない点である。もっとも便所や井戸に関しては、地下室が出現する 18 世紀前葉以降だけでなく、Ⅰ期を通じて未検出である。

東京大学本郷構内遺跡の地下室については成瀬晃司による分類がある（成瀬 1994）。成瀬による地下室分類は、加賀藩邸・大聖寺藩邸内の空間構成や、長屋の方向性を地下室から明らかにするものである。成瀬分類の要諦は室へのアプローチと室の高さにある。本地点は前述のように立川ロームⅣ層までが削平されているが、この点において成瀬の分類基準はそのまま適用できるものと考える。この分類によれば、Ⅰ期の地下室は検出状況から形態が不明な 3 基を除けば、1 類が 5 基、2 類が 1 基である。1 類と 2 類は地下室の断面形は異なるものの、いずれも天井高の低い形態である。したがってⅠ期に構築された地下室は、平面形態は大形ではあるが、室内空間としては必ずしも大きなものではない。

1 類及び 2 類の地下室は、詰人空間に多く認められる形態である（成瀬前掲）。理学部 7 号館地点や法学部 4 号館地点など詰人空間を対象とした調査地点では、地下室の配列は勤番長屋に対応した状況が認められる。本地点の場合は前述のとおり時期毎に地下室が散在しており、いずれの時期においても長屋建物や便所などは共伴しない。こうした遺構の検出状況は、講安寺からの借地であった当該エリア一帯が、詰人空間であっても藩士らの居住空間ではなかったことを推察させる。

それでは藩邸南側外郭部に設けられた地下室群はどのような役割を担っていたのだろうか。検出した地下室の

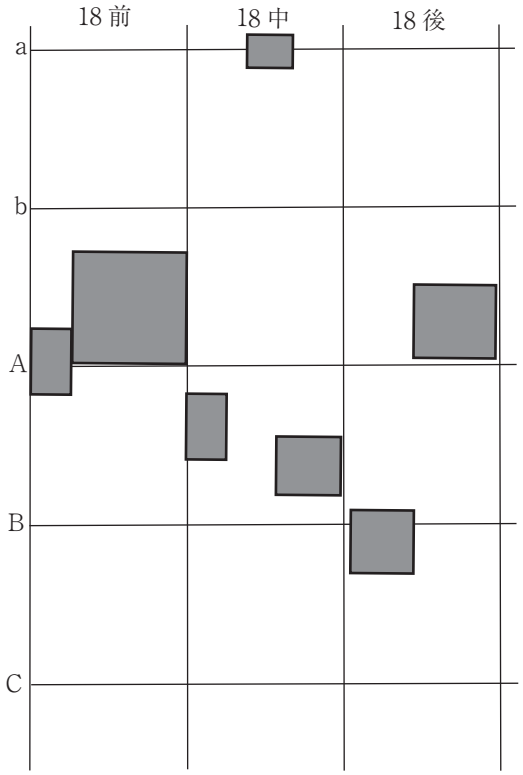
36
37
38
39
c
b
A
B
C
SU227
SU266
SU280b
SU219
SU229
SU280a
SU156
SU201
SU108
SU151
0
2m

3図　Ⅰ期検出の地下室

全ての覆土には、青灰色～灰色を呈した粘土層が認められる（エレベーションの記録のみで堆積状況を記録していないSU280b除く）。富山藩邸は東側が根津谷の低地を取り込んでいる。また龍岡町遺跡第7地点、東大構内遺跡第2中央診療棟地点、同中央診療棟地点内で検出した埋没谷が、屈曲して富山藩邸内を東西に横断する可能性が成瀬によって指摘されており（成瀬 2016）、藩邸内には水分含有に富んだ土壌が採取できる場所は複数存在したことがうかがえる。現段階ではこれらの地下室群を埋め戻した粘土の掘削場所は不明だが、こうした堆積状況は18世紀前葉から後葉にかけて、邸内の低地もしくは谷地が継続的に開発されていたことを反映したものだろう。

Ⅰ期で検出した地下室群は、出土遺物が少ないという点も特徴としてあげられる。地下室のうち遺物量が最も多いSU219でも、推定固体数は100個体に至らない。また食物残滓もほとんど認められなかった。

CRC地点は、富山藩邸内の詰人空間でありながら、長屋の地下室を壊して巨大なゴミ穴が南北40mにわたって切り合う状態で検出した。これは居住空間から藩邸内のゴミ処理施設へと用途替えされたものである（追川 2015）。その時期は今後の分析を待たねばならないが、おおよそ18世紀後半以降に位置付けられる（追川前掲）。一方、本地点の地下室群は、遺物の出土状況からゴミ穴として転用されたものではない。また覆土に焼土や炭化物といった火災を由来とする堆積土層がみられないことや、出土遺物に二次焼成の痕跡が認められないことから、地下室の廃絶が火災を契機としたものではないことがうかがえる。



4図　地下室群の時期別分布状況

長屋に伴うものでもなく、ゴミ処理施設として利用された空間でもないという状況から、本地点の18世紀前葉から後葉にかけて構築された地下室群は、富山藩邸南側の外郭部に設けられた倉庫ヤードとして利用されていた可能性が考えられる。

この地下室と空閑地からなる、藩邸内の倉庫ヤードとしての土地利用はいつまで継続するのだろうか。SU151の出土遺物をみてみよう。高台の断面がシャープな「U」字を呈する肥前系磁器鉢（JB-5-b・Ⅳ-34図1）や、いわゆる三島手と呼ばれる肥前系の陶器皿（TB-2-h、Ⅳ-35図5）がある。また同時期であるSU219には肥前系半球碗（JB-1―f・Ⅳ-58図1）、小広東碗（JB-1-i・同3）に加え、広東碗（JB-1-m・同4）がある。陶器では瀬戸・美濃系の灰釉丸碗（TC-1-c・同8）、外面に渦巻き状の刷毛目のある陶器碗（TC-1-s、同9）などが出土しており、広東碗を伴うことから遺物組成は本遺跡Ⅶ期に位置付けることができる。SU151は出土遺物が限定的だが、寛永通宝の四文銭（Ⅳ-37図11）が出土しているので、遺物組成を1770年代以降に位置付けることができる。Ⅶ期は広東碗の出現する1780年代から加賀藩邸で梅之御殿が造営される1802年（享和2）までを画期とする。どちらの地下室も遺構覆土に火災による廃絶をうかがわせる焼土や炭化物の堆積はみられず、出土遺物にも二次焼成の痕跡を有する遺物は認められない。このことから、倉庫ヤードとしての利用は1780年代には終えられていたものと考えられる。

まとめ

1690年（元禄3）に講安寺からの借地によって富山藩邸に組み込まれた本地点は、18世紀初頭に厩として利用が始まった。そしてほどなく発生した火災を契機に、簡易的な建物が配置される空間となり、18世紀前半から倉庫ヤードとして利用された。その状況は出土遺物の年代から18世紀第4四半期まで続いたものと考えられる。しかし富山藩が借地を講安寺に返却したのは1846年（弘化3）までのことだ。発掘調査からはこの間の空間利用については詳らかではない。

宮崎勝美による本地点の歴史学的考察（研究1）は、この間の空間利用を考える上で示唆に富むものである。特に注目されるのが1793年（寛政5）の火災に関する

『政隣記』の記述である。これによれば「御借地御囲之内、御長柄小者へ御貸長屋」で発生した火災によって、長屋 13 棟と厩が焼失したという。宮崎が指摘するようにここに記された「御借地御囲」が、本地点を含む講安寺からの借地だろう。宮崎はこの火災を契機に厩が裏門のすぐ内側へ移転したとする。先に紹介した全景図に描かれた厩がそれである。本地点の調査で検出した厩は、これまで述べてきたように 18 世紀初頭の火災で焼失している可能性が高く、18 世紀後半までは本地点は倉庫ヤードとして利用されていたので、1793 年（寛政 5）の火災で焼失した厩はこれとは別のものである。調査区からは 1780 年代初頭から講安寺へ返地される 1846 年（弘化 3）までの間の遺物や遺構が認められないことを踏まえれば、発掘調査では検出できなかったこの期間、本地点に長屋や厩が設けられていた可能性も否定できない。

もちろん本地点は講安寺からの借地の一部に過ぎないので、1793 年（寛政 5）の火災で焼失した長屋や厩が本地点以外の場所に存在した可能性もある。また本地点の発掘調査では、富山藩邸が借地した直後から厩として利用される 18 世紀初頭までの間の土地利用状況についても明確にすることができなかった。こうした点は富山藩邸内の発掘調査が更に進んでいく中で改めて明らかにしていきたい。

【参考文献】

大成可乃　2021「藩邸内斜面地における空間利用について」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院看護職員等宿舎 1 号棟地点･臨床試験棟地点･看護職員等宿舎 3 号棟地点 (1)』東京大学埋蔵文化財調査室編

追川吉生　2012「近世都市の考古学」『月刊考古学ジャーナル』623　ニューサイエンス社

追川吉生　2015「富山藩邸外郭部の土地利用状況－ CRC 地点の調査から－」『江戸富山藩邸の調査・研究報告会』東京大学埋蔵文化財調査室

追川吉生　2016「大名屋敷詰人空間の土地利用状況－加賀藩邸と富山藩邸の地下室を中心に－」『日本考古学協会第 84 回総会 研究発表要旨』

追川吉生　2017「大名屋敷の表長屋の出現について－屋敷境遺構と屋敷外郭部の土地利用状況を中心に－」『駿台史学』160　駿台史学会

小松愛子　2015「文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9

津田政隣［著］･高木喜美子校訂･編　2019『耳目甄録 17　政隣記』桂書房

成瀬晃司　1990「江戸藩邸内土地利用研究の一指針」『東京大学本郷構内の遺跡　法学部 4 号館地点・文学部 3 号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室編

成瀬晃司　1994「江戸藩邸の地下空間」『武家屋敷－空間と社会－』宮崎勝美・吉田伸之編　山川出版社

成瀬晃司　2016「加賀藩本郷邸における斜面地開発と変遷」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点研究編』東京大学埋蔵文化財調査室編

成瀬晃司　2021「看護職員等宿舎 1 号棟地点からみた富山藩上屋敷」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院看護職員等宿舎 1 号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎 3 号棟地点 (1)』東京大学埋蔵文化財調査室編

堀内秀樹　2024「医学部附属病院看護職員等宿舎 5 号棟地点の中世～近代の土地利用」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院看護職員等宿舎 5 号棟地点・看護職員等宿舎 3 号棟地点 (2)』東京大学埋蔵文化財調査室編

宮崎勝美　2016「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟 A 地点」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点　研究編』東京大学埋蔵文化財調査室編

森　きく子　1987「富山藩江戸屋敷の火災と再建 於前田正甫の時代」『富山史壇』93　越中史壇会

墓壙属性からみた墓地空間の諸相

成瀬 晃司

はじめに

本調査地点は元和 2 年（1616）から明治 43 年（1910）まで講安寺境内の北西部に位置することが絵図、近代地形図との対比から確認できる。講安寺は、慶長 11 年（1606）に湯島天神下に建立し、元和 2 年（1616）に現在の地（表間口 70 間、奥行 60 間）に移転した。その後、隠居所に端を発する称仰院と境内を二分し、間口 35 間となった。さらに元禄 3 年（1690）に富山藩が講安寺境内の一部（637 坪 6 厘）を借地した。元禄 12 年には借地面積が 600 坪に縮小されたことが確認されるが、その後、貸借地に関する記録はなく詳細は不明である（宮崎 2016）。また富山藩借地の具体的な場所を示す資料は確認されていないが、宮崎論考でも指摘されているように、天保 13 年（1842）、加賀藩作成の本郷邸敷地図「上屋鋪御地面之図」（1 図 A）と「御上屋鋪御地面之絵図」（1 図 B）を比較すると、富山藩邸敷地のうち B の講安寺裏手部分がコの字状に（東西 36 間半、西側 16 間 4 尺 6 寸 2 分、東側 15 間 2 尺 5 寸）張り出していることが判る。東西地境軸が平行と仮定して張出部の面積を算出すると約 578 坪になり、この場所が借地場所を示しているといえよう。また文政年間の講安寺境内図では（2 図）、北西張出部に「松平淡路守殿江貸地」[1] と書かれている。

医学部附属病院入院棟 A 地点 2 区（以下、HW2 区）は借地該当区に比定され、厩跡、地下室など藩邸施設に関する遺構が検出されたが、共伴する出土遺物の下限年代が 18 世紀中葉を示し概期以降の土地利用の変化もしくは講安寺への一部返却の可能性も示唆される（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）。

富山藩からの借地返却に関する記録が『講安寺文書』の「裏明地借地之事」に確認される（文京区教育委員会 2020）。それによると天保年間（1830 ～ 43）に富山藩から倹約を理由に返却の申し入れがあり、弘化 5 年（1848）に次の貸出先の本郷元町興安寺及び等正寺と借地契約が結ばれたとされる。小松愛子によれば富山藩では天保 14 年（1843）、江戸定府の士分及び足軽に対して、天保 14 年 5 月、翌 15 年（1844）（弘化元年）春、交代までの 3 段階に分けて国元への引っ越しを命じ、興安寺・等正寺への貸地が具体化する弘化 3 年までの間に更地にして返却したとされる（小松 2015）。

3 図は、嘉永 6 年（1853）の講安寺境内図で、表間口 35 間、奥行 60 間と記載され、本堂、庫裏の裏手は「墓所」と記されている。縦横比はかなりデフォルメされているが、北側には「松平出雲守殿境」[2] と書かれ貸地表記がないことから、富山藩貸地返却後の様相と考えられる。富山藩からの返却を受けて、弘化 5 年 2 月に裏空地 600 坪のうち、各々南北（奥行）16 間、東西（間口）6 間 1 尺 5 寸、総坪数 100 坪を本郷元町の興安寺と等正寺に永代借地した。5 図は明治 10 年（1877）の講安寺境内図で、北西部に「興安寺貸地墓」「等正寺墓地貸」と書かれた長方形区画が描かれ、この区画が弘化 5 年以降の貸地区域と判断される。

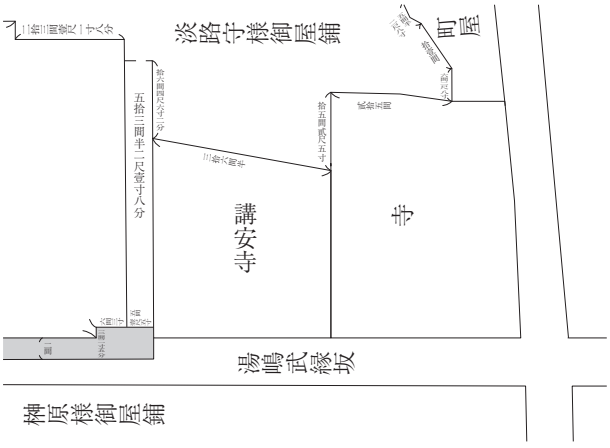
さて興安寺借地の西側にあたる講安寺北西角は二段角形状で表記されている（5 図 A、6 図 a）。1 図 A、2、3 図には認められないが、安政 5 年（1858）作成の「富山藩上屋鋪図」では、無縁坂から表門に続く道敷の北東端が石垣を築いた出隅状に表記されており（4 図 A）、このクランク部より東側が興安寺借地範囲に比定することができる。

その後、明治 36 年（1903）に興安寺墓地西側の講安寺北西角地 45 坪余を東京帝国大学に売却 [3]（6 図 b）、さらに明治 43 年に講安寺は興安寺・等正寺貸地を含む共葬墓地全域（旧本郷区湯島両門町三番地一号）を東京府北豊島郡巣鴨村字庚申塚墓地（現、東京都豊島区西巣鴨 4-8-42）へ改葬し無代下付を受けた [4]。そして大正元年（1912）に東京帝国大学が医科大学附属医院用地として取得し、現在に至る（6 図 c）。その間、等正寺は明治 14 年に 31 坪余を返却したとされるが、明治 35 年の契約書では間口 6 間 1 尺 5 寸、奥行 11 間 4 尺、総坪数 73 坪と記載されている [5]。

1. 検出墓壙の様相

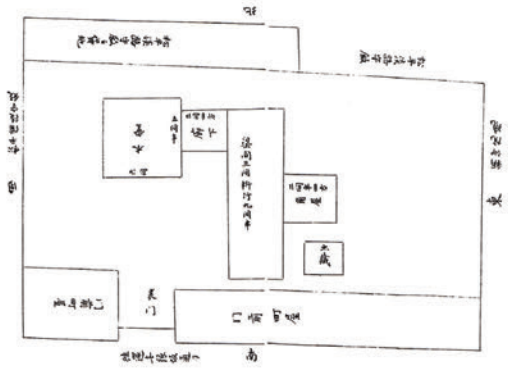
本地点検出遺構は、地下室、厩跡などの武家屋敷の構成要素と位置づけられる一群と、それより新しい墓壙群で構成される。即ちこの遺構変遷は、本地点が講安寺境内に位置し、富山藩貸地区域から墓域へ変遷した経過を示している。本稿では検出された墓壙分布、埋葬施設、被葬者相を通し、幕末から明治末にかけた 3 寺の墓地様態の復元を目的とする。富山藩貸地段階の様相は本編追

A「上屋敷御地面之図」（部分）

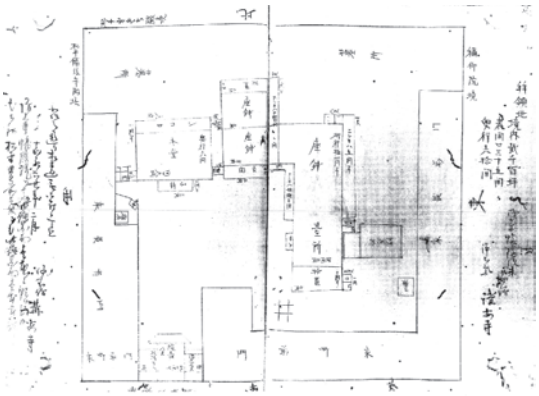


B「御上屋敷御地面之絵図」（部分）

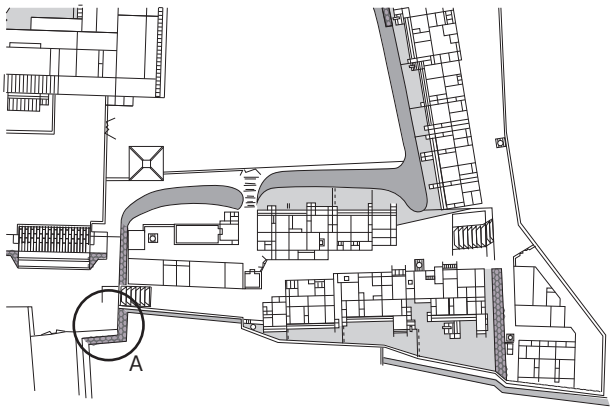
1 図　富山藩邸と講安寺の地境（宮崎 2016 より引用）



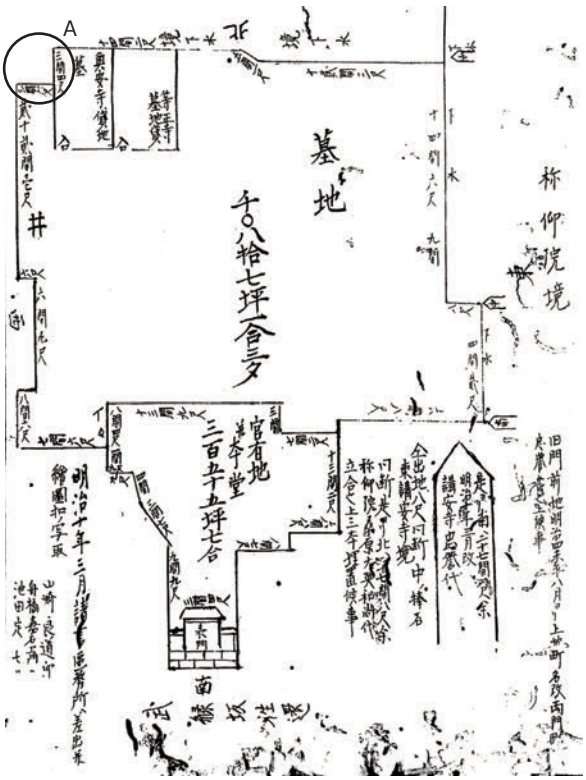
2 図　文政年間（1818 ～ 30）の講安寺境内図
（宮崎 2016 より引用）



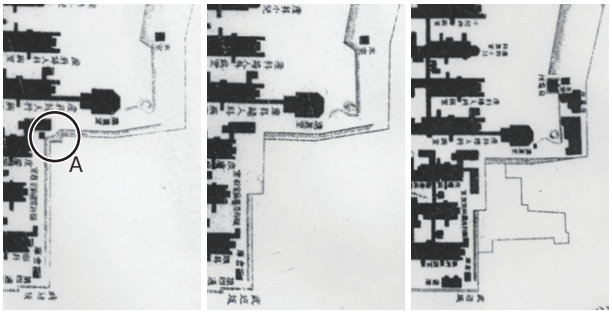
3 図　嘉永 6 年（1853）講安寺境内図
（講安寺所蔵）



4 図　「富山藩上屋敷図」（トレース図、部分）



5 図　明治 10 年（1877）の講安寺境内図
（宮崎 2016 より引用）



a 明治 37 年度　　b 明治 38 年度　　c 大正元年度

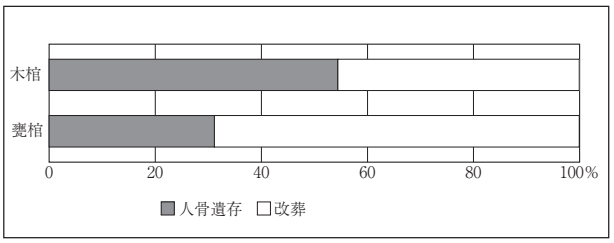
6 図　講安寺寺域取得変遷（「本郷構内建物配置図」部分）

川論考で詳細な考察が試みられているのでそれを参照されたい。

本地点で検出された墓壙は 132 基を数える。その中には甕棺複数基が重層的に埋葬された甕棺墓（以下、重層甕棺墓）や、一墓壙内に複数基の火葬蔵骨器が埋葬された事例が存在し、埋葬施設数は甕棺 33 基、木棺 66 基、火消壺棺 15 基、火葬蔵骨器 27 基、さらに改葬によって埋葬施設が特定できない墓壙 15 基を含め 156 基を数える。また土坑と分類した遺構中にも改葬墓壙が含まれていることが予想され、提示した遺構数は最小値を顕す。一例を示すと SK33（Ⅲ -22 図）、SK261（Ⅲ -33 図）は、確認面での平面形は不整形、壁面は不規則な階段状を呈するが、坑底は略円形ないし略方形の平坦部を形成しており、改葬時の再掘削によって墓壙原形が大きく失われた形状と推測される。

7 図に大正 2 年（1913）に建設された看護法講習科寄宿舎（後の看護婦寄宿舎）基礎掘方と改葬痕跡を有す墓壙分布を示した。看護法講習科寄宿舎は大正 5 年(1916) の医学部卒業アルバム掲載写真から二階建て瓦葺きの木造建物と確認できるが（東京大学医学部 2008)、検出された基礎は確認面からの深さ数 10cm の掘方内に破砕礫を充填し、その上に厚さ約 40cm の土台コンクリートを打設して切石を二段積み上げた形状を取っていた。用地取得後に施工された約 3m に及ぶ盛土造成土を考慮した構造と考えられる。そのため基礎内では火葬蔵骨器墓など掘削深度の浅い遺構は消失した可能性があるが、甕棺墓、木棺墓などの土葬墓は遺存状況の差はあるものの基礎内にも遺存し、おおよその分布状況を窺い知ることができる。また人骨･埋葬施設が掘り出された「改葬遺構」、一遺構内から形質的位置を止めていない人骨が確認された「再埋葬遺構」、改葬掘削跡地に埋葬容器などが廃棄された「埋葬容器廃棄遺構」に各々トーンを掛けて示した。延べ数で改葬遺構 48 基、再埋葬遺構 38 基、埋葬容器廃棄遺構 41 基を数え、過半数を超える墓壙が原位置を維持していないことが確認できる。これらの改葬等痕跡の大半は明治 41 ～ 43 年の墓地移転に関すると考えられ、甕棺墓では 33 基中 22 基（68.8％）、木棺では 66 基中 30 基（45.5％）で改葬痕跡が認められた（8 図)。埋葬容器廃棄行為は 41 基に認められ、蔵骨器が廃棄されたケースが大半を占める。廃棄された蔵骨器は後述するように火葬蔵骨器埋葬墓 27 基に対し 3 倍近い数値を示し、甕棺墓の改葬率に近似する。埋葬後の経年変化が少なく、改葬が容易な陶磁器・土器埋葬容器の改葬率が高いことを示していよう。

7図　改葬･埋葬容器等廃棄遺構分布



8図　土葬埋葬遺体遺存状況

2. 墓壙属性からみた空間復元

検出された墓壙分布を概観すると、複数基で構成されるブロックが看取される。各ブロックは東西方向列を基本とし、9 図に示したように 19 ブロックに区分することができる。各墓壙群を示す長方形枠は東西（南北）墓壙列の軸線及び方形墓壙壁面の方向角を基準として設定した。その結果 3 方向の軸線に集約することが確認され、主軸 A ～ C と付す。主軸 A は A グリッドライン付近北 2m 以北 38 グリッドライン以西の一群で、東西軸線の方向角は E-0° -S を示し、A1 ～ A5 の 5 ブロックが存在する。主軸 B は A グリッドライン南 1m 付近以北 38 グリッドライン以東の一群で、東西軸線の方向角

はE-2.7° -Sを示し、B1 ～ B6の6ブロックが存在する。主軸Cはb37グリッドの一部とAグリッドライン付近以南を中心にした一群で、東西軸線の方向角はE-9.3° -Sを示し、C1～C8の8ブロックが存在する。以下、各ブロックの埋葬施設、被葬者の概要、特徴を記す。

(1) 主軸A

A1ブロックは、木棺墓1基、火葬蔵骨器墓3基で構成される。陶器壺を用いた火葬蔵骨器が東西方向に分布し、東端に成人女性が埋葬された方形木棺墓ST121が位置する。周囲には墓壙の可能性を有す不整方形状の土坑が密に存在する。

A2ブロックは、甕棺墓4基、木棺墓9基、火消壺棺墓3基、火葬蔵骨器墓1基、不明2基で構成され、北側に甕棺墓、南側に木棺墓が集中して分布する。骨盤から判断した遺体埋葬方向は南北双方が確認され、北側の一群では南向きの甕棺墓2基に面して北向きの木棺墓ST148が位置する。南側の木棺墓列（ST48、ST49、ST298）は南向きで並んでいるが、ST298より新しいST291は北西方向を示す。ST291からは方形木棺と考えられる板材片と文久永宝（1863 ～ 67）6枚を含む14枚の銭貨が出土した。これらの状況より墓道を想定する顕著なスペースは認められないが、各々の東西列が単独で並んでいたと推定される。検出された人骨15体のうち11体が原位置を止めていた。内訳は成人女性6体、成人男性3体、5歳以下未成人1体、不明1体と成人女性が高い比率を示す。

A3ブロックは、重層甕棺墓1基、甕棺墓1基で構成され、A2ブロックと比較して密度は低い。ST187では成人男性を埋葬した甕棺上に成人男性が横臥屈葬で埋葬されていた。ST13では5歳以下未成人骨が検出されたが、甕棺に埋葬された乳幼児は本例のみである。

A4ブロックは、重層甕棺墓1基、甕棺墓1基、木棺墓1基、瓦質火葬蔵骨器墓1基で構成され、南北方向に展開する。ST126では6歳以上未成人骨が検出された。

A5ブロックはA1、A2ブロックに隣接して南北方向に延びる。木棺墓5基、火消壺棺墓2基で構成される。木棺墓ではST8から成人男性骨、ST34、ST42から成人女性骨、ST65から未成人骨が検出された。そのうちST34では成人男性骨（頭蓋骨、歯牙、上肢骨の一部）が密着して検出されている。また北端に位置する火消壺棺墓ST128、ST147周囲は、ST65、ST136の未成人墓が隣接し集中した様相を呈す。遺体埋葬方向が確認できたST34は西方向を示している。本ブロック東部にはSK110が位置し、重複するST65、ST34はそれより新しい。

A2 ～ C1ブロック間には60 ～ 80cmのスペースが認められ、東西方向の墓道を復元することができる。

(2) 主軸B

B1ブロックは、3基の木棺墓で構成され密度は低い。ST117には成人男性が、ST115には5歳以下乳幼児が埋葬されていた。さらにST115では上層より5歳以下乳幼児骨が、ST116では成人女性2体、6歳以上未成人骨1体を含む4体の人骨が確認された。検出状態からいずれも再埋葬と考えられる。本ブロックは、ST117の遺体埋葬方向が東、ST115が南を示していることから、L字状の区画の可能性もある。検出された3墓壙はいずれもSK110より旧い。

B2ブロックは、4基の木棺墓で構成される。木棺墓の遺体埋葬方向は西向きのST21を除き北を示しており、B1、A5ブロックとの距離から西側と北側に墓道を復元することができる。ST21は座葬の成人男性骨上に横臥屈葬の成人骨が埋葬されていた。ST104は座葬の成人男性骨上に成人女性骨1体、性別不明成人骨1体が再埋葬されていた。ST85は成人男性骨上に3歳程度の乳幼児骨が埋葬されていた。このように各墓壙は等間隔で分布しているが、一墓壙内で追葬、再埋葬が行われたことが確認される。またST21は重複するSK110より新しく、B1ブロックとの時間差が認められる。

B3ブロックは、重層甕棺墓(ST24)、火消壺棺墓(ST22)で構成される。ST24は本地点最大の重層甕棺墓で、下段に3基、上段に2基が確認された。上段は下段からずらして埋葬され、必要最低限の蓋石を外して全ての人骨が改葬されていた。隣接する墓壙はなく独立した墓域を形成していたと推定される。

B4ブロックは、木棺墓7基、火消壺棺墓1基、火葬蔵骨器墓11基（うち瓦質蔵骨器1基）で構成され、甕棺墓はない。ほぼ全ての遺構に重複が認められ、本地点で最も過密なエリアである。ST30、ST31、ST32では成人男性骨1体、性別不明成人骨2体の最低3個体の再埋葬が、南側東西列のST112では原位置を保つ成人男性骨1体と再埋葬された成人男性骨1体、ST111では成人男性骨1体、性別不明成人骨2体、5歳以下乳幼児骨2体と一墓壙内に複数体の再埋葬が確認される。南東部に集中する火葬蔵骨器墓のうちST83、ST84、ST175が円形木棺墓ST176と重複し、ST98、ST174が幼児埋葬木棺墓ST113と重複、いずれも火葬蔵骨器墓が新しく、土葬から火葬への変遷が窺われる。また瓦質蔵骨器2基が廃棄されていたSK171も本来は火葬蔵骨器墓の

可能性がある。南側の木棺墓群の遺体埋葬方向は全て南向きで、B5 ブロック間約 60cm が墓道と推定される。

B5 ブロックは、甕棺墓 1 基（ST35）、木棺墓 10 基、火消壺棺墓 3 基、火葬蔵骨器墓 6 基（うち瓦質蔵骨器 3 基）で構成される。甕棺墓とした ST35 は底部周辺破片が坑底付近（4 層上）より出土し 1 層中にも胴部片が確認された。底部レベルは重複する火消壺棺墓（ST36）とほぼ変わらないことから、改葬後廃棄など原位置を止めていない可能性も考えられる。土葬墓のうち ST177、ST180、ST224 は未成人骨、ST88 は成人女性骨、ST96、ST119 は成人男性骨、ST120 は 5 歳以下乳幼児骨とその直上から 6 歳以上未成人骨が重層的に検出された。さらに ST119 では 3 体の 5 歳以下乳幼児骨、ST120 では 2 体の 5 歳以下乳幼児骨が火消壺棺とともに再埋葬されており、隣接する火消壺棺墓 ST27、ST36 と合わせ未成人骨が集中して（再）埋葬された様相が窺われる。本ブロックのうち北側に位置する木棺墓の遺体埋葬方向は南北背合わせ、南側の一群は全て北向きで埋葬されており、墓壙掘方から観ると非常に狭小だが、南北間に墓道が存在した可能性がある。

B6 ブロックは B3、B4 ブロック西側の南北方向に重複する一群をまとめた。確認された埋葬施設は木棺 3 基、火消壺棺 1 基だが、北方向に続く土坑も墓壙の可能性が考えられる。遺存人骨は ST258、ST290 で成人男性骨、ST260 で 5 歳以下乳幼児骨が確認された。木棺墓の遺体埋葬方向は東西両方向が確認され、B4 ブロック ST112 の西向き埋葬方向と合わせ本ブロック両側に墓道の存在が推定される。

（3）主軸 C

C1 ブロックは、北側に甕棺墓（ST129）、方形木棺墓（ST186）、重層甕棺墓（ST218）が位置し、南側に甕棺墓（ST51）と未成人骨土葬墓（ST52、ST160）が位置する。A3 ブロック同様密度は低い。人骨検出事例は、甕棺墓のうち ST129、ST218 で性別不明人骨、ST51 で南向きに埋葬された成人女性骨がが確認された。また ST52 では改葬廃棄された瓦質蔵骨器直下で 6 歳以上未成人骨と銭貨 5 枚が、ST160 では 6 歳以上未成人骨が検出された。

C2 ブロックは、2 基で構成される。SK203 は前段階の地下室天井陥没の影響を受け西側壁面及び坑底が原形を止めていないが、残存する壁形態、規模から方形木棺ないし甕棺の掘方と推定される。ST207 は坑底より 5 歳以下乳幼児骨と副葬品と考えられるミニチュア土製品が出土している。両遺構の壁面軸線から主軸 C に位置づけた。

C3 ブロックは、甕棺墓 2 基、形状から方形木棺墓と考えられる土葬墓 3 基で構成され、東西方向一列で配置される。人骨が遺存した ST184、ST145、ST268 の遺体埋葬方向は ST184 が北向きそれ以外が南東方向を示し、周辺の墓壙分布と合わせて南北両側に墓道が備えられた可能性が高い。また被葬者は ST268 が成人女性、ST145、ST184 が成人男性である。ST183 には改葬後に瓦質蔵骨器が廃棄されていた。

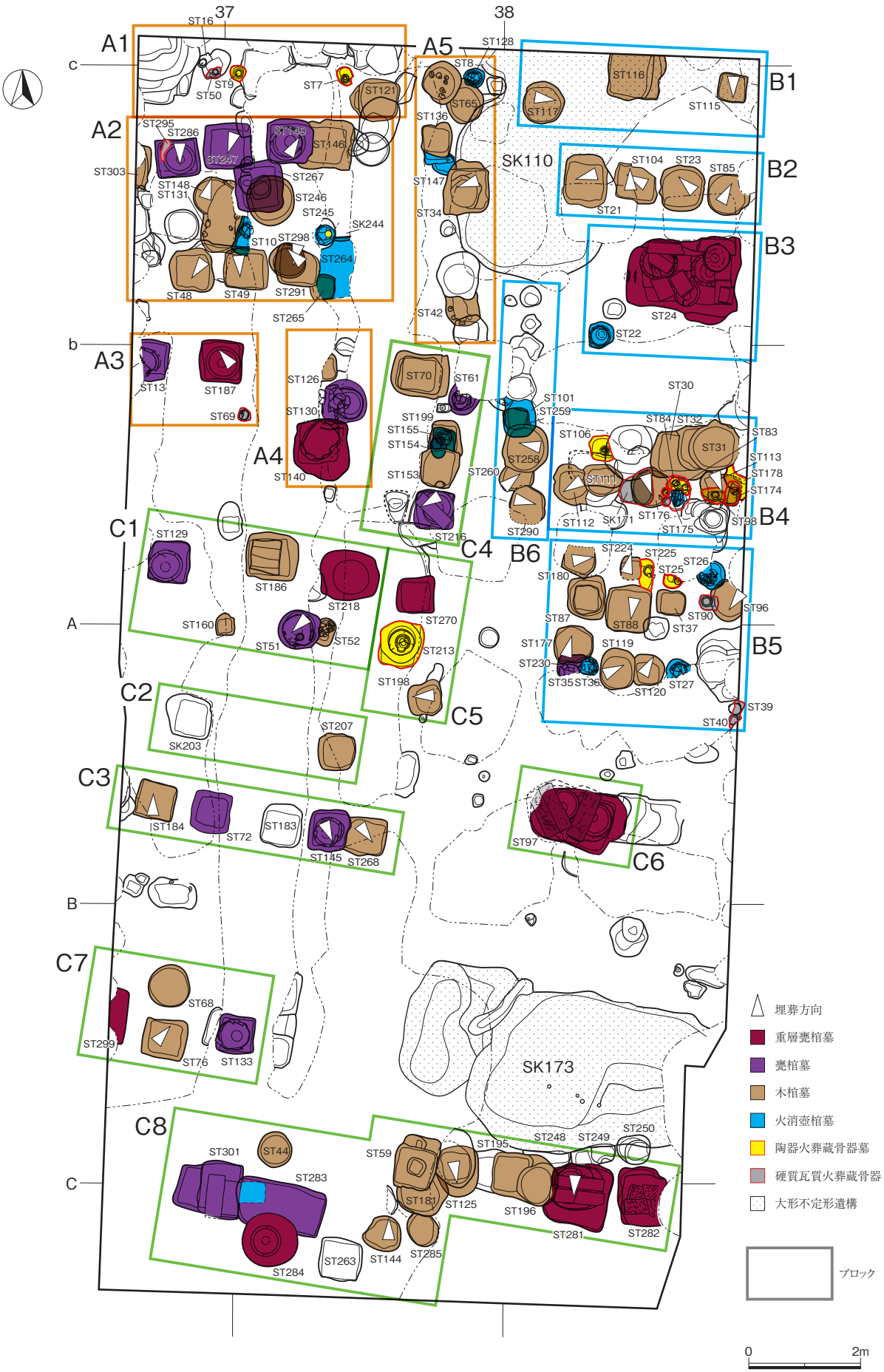
C4 ブロックは、A4、B6 ブロックに挟まれて位置する南北方向のブロックである。甕棺墓 2 基、木棺墓 3 基、火消壺棺墓 2 基、埋葬施設不明 2 基で構成される。甕棺墓のうち ST216 からは成人女性骨が検出された。木棺墓では ST153 から 5 歳以上未成人骨、ST199 から 5 歳未満未成人骨が検出された。ST199 では複数の側頭骨が密着して位置し、一次埋葬上に再埋葬が重なった状況を呈している。また火消壺棺が検出された ST154、ST155 と重複し、未成人墓が集中した様相が窺われる。遺体埋葬方向が確認できた ST216 は西方向を示している。

C5 ブロックは、C1 ブロック東側に隣接する南北方向のブロックである。甕棺墓 1 基、木棺墓 1 基、火葬蔵骨器墓 1 基で構成される。木棺墓では ST198 から成人男性骨が検出された。ST213 は甕棺内に鉄釉甕蔵骨器を埋葬した二重構造を呈している。蔵骨器には残存率約 2/3 の肥前系染付皿 2 枚（Ⅳ -55 図）が蓋として使用されていた。甕は惟村分類 G 類（惟村 1997）に分類される口縁下に箍状の短沈線が巡り、器高約 50cm と小振りな製品である。その様相から甕棺を槨として使用した可能性も考えられる。

C6 ブロックは、重層甕棺墓（ST97）1 基で構成される。隣接する墓壙はなく独立したエリアを形成している。ST97 からは 2 基の甕棺が検出された。確認面から坑底までの深さは最大 3m を測り、上部に 4 基の追葬が可能な規模を有す。東側に連続する長方形張出部は改葬時の掘削痕と考えられ、覆土中より「嘉永七寅年」（1854 年）銘の石製墓標が出土した。

C7 ブロックは、重層甕棺墓 1 基、甕棺墓 1 基、方形木棺墓 1 基、円形木棺墓 1 で構成される。重層甕棺墓 ST299 は確認面下 50cm で蓋石を伴う甕棺が検出されたが、調査区際に位置するため未調査である。覆土中に廃棄された切石はその甕棺に伴うと考えられる。人骨が遺存した ST76 では北向きの成人男性骨が検出された。

C8 ブロックは、重層甕棺墓 3 基、甕棺墓 2 基、木棺墓 11 基、火消壺棺墓 1 基、埋葬施設不明 4 基で構成される。重層甕棺墓のうち ST281 は上下 2 段でいずれも成人骨が遺存していた。そのうち上段は成人男性骨で南



9図　検出墓壙主軸別ブロック

向きに埋葬されていた。ST282 は確認面下約 180cm で蓋石が検出されたが調査区際に位置するため、それ以下は未調査である。ST284 は確認面下約 80cm から改葬甕棺が検出された。ST281 西側には重複する木棺墓が L 字状に分布する。原位置と推定される人骨は ST44、ST125、ST144、ST181、ST285 に止まる。そのうち埋葬方向が確認できる ST125 は南向きの成人骨、ST144 は北向きの未成人骨である。本ブロックで唯一の火消壺棺が出土した ST301 は西側に改葬時の掘削と推定されるテラスを有する墓壙である。覆土中位より蓋石のみが検出され、甕棺は改葬時に搬出されたと考えられる。火消壺棺は床直東壁を刳り抜いた横坑に埋葬されていた。

3. 調査地点と寺域の比定

各遺構主軸群に認められた様相差の要因を理解するため、文献、図面情報などを合わせ、本地点及び HW2 区の講安寺墓地内での位置を検討したい。

6 図の本郷構内建物配置図より、東京帝国大学は明治 36 年及び大正元年の二回に渉り、講安寺所有地を取得したことが確認される。明治 36 年取得地（6 図 b）の北東角は 5 図 A 入隅状位置に比定され、本調査地点の位置比定にとって重要な要素を示す。しかし A 部分は大正元年の用地再取得（6 図 c）によって大学敷地内に吸収され、現状ではその痕跡さえも観ることはできない。そこで明治 43 年「市有地無代下付ノ件」添付図（11 図、以下、明治 43 年図）に記載された下付敷地外周距離の精度を検証した上で、6 図 b 取得地、即ち 11 図の「三番地ノ二号」の位置を復元し、調査地点の比定を試みる。

講安寺と加賀藩邸の地境関連遺構は、これまで医学部附属病院入院棟 A 地点、茅町二丁目遺跡・湯島両門町遺跡（台東区文化財調査会 2015、以降、湯島両門町遺跡）[(6)] で確認されている（10 図 a）。入院棟 A 地点で検出された SD1、SG1586 は東向き緩斜面のひな壇造成に伴い構築された石組境界施設である。SD1 は天和 3 年（1683）の加賀藩邸内区画変更に伴う石組溝で、大聖寺藩邸の東辺境界の機能を有す。組石は全て抜き取られていたが、裏込めの状態などから遺構西壁に盛土に伴う石垣が築かれていたと判断できる。SG1586 は加賀藩邸と講安寺の地境施設で、盛土造成による比高差を擁護する石垣遺構である。検出された石組は中央の撹乱を挟み南北で大きく様相が異なった。北側の間知石は幅 40 ～ 50cm を測るが、南側は幅約 30cm と北側に対して小振りな間知石で構成され、石材も異なっていた。その様相差から報告では構築時期の違いが指摘されている。本遺構南端部は調査区が西方へ「く」の字状に折れる位置にあたり徐々に調査区外に収束していくが、検出範囲最南端で掘方の立ち上がり（南壁）が確認され（10 図 b ◀部分）、東方へ L 字状に折れる様相が窺えた。また調査区壁面には石組南端部で石尻を南側に向けた間知石が確認され、掘方の様相と合わせ石組が東側へほぼ直角に折れていることを示している（同図 c ○内間知石）。

加賀藩邸と講安寺の地境を記した「上屋鋪御地面之図」（1 図 A）などでは、地境ラインは直線で表現されているが、近代講安寺関連図では（5、11 ～ 13 図）、西側地境中央付近に講安寺側に張り出した鍬形表記が認められる。11 図は明治 43 年に講安寺が東京帝国大学への所有地売却に関連して墓地（市有地）内の全ての墓を庚申塚墓地へ改葬して墓地地目を廃し、『市有地無代下付ノ件』として市会議に提出した際の添付図面で、「三番地ノ一号」が該当地 767 坪 9 勺を示し、外周各辺には計測値（10 進法による間数）が記載されている。この登記変更に関し、大正元年 8 月 29 日付の『墓地跡地無代下付登記済届』には、「市街宅地七百六拾七坪九勺　墓地改葬跡地右ハ東京市庁告示第四十五号ニ基キ拙寺墓地全部ヲ府下豊島郡巣鴨村大字巣鴨字庚申塚講安寺墓地へ改葬済ノ上明治四十四年五月廿五日付ヲ以テ講安寺へ無代下付同年六月七日登記済相成候ニ付別紙図面相添へ此段御届申上候也」と経緯が記されている。その後、大正元年 10 月 14 日には 767 坪 9 勺のうち 746 坪を東京帝国大学へ売却する『土地売渡願』が認可され、11 月 8 日に売渡登記が完了した届が知事宛に出されている。12 図は前者、13 図は後者の届出書類添付図面で、13 図の「三番地壱号ノ内／七百四十六坪／帝国大学売渡地」が売却地にあたる。外周各辺には 11 図同様 10 進法による計測値（間数）が記載されており、これらを比較すると北西部では 11 図 7.16 間、12・13 図 7.94 間、三番地三号忍岡小学校運動場地境では 11・12 図 16.75 間、13 図 26.75 間と齟齬が認められる。13 図の売渡地形状は、「本郷構内建物配置図」を辿ると三番地ノ三号南西角のクランク部が大学敷地から外れる（昭和 2 年 3 月 31 日図）以外は、10 図 a の現況大学敷地境とほぼ一致し、現在の大学敷地境は 13 図取得地を継承していることが確認される。そこで現状敷地と 11 図の計測値を比較すると、三番地ノ三号との地境は南辺 16.75 間に南西入隅の 2.63 間を投影すると 19.38 間 ≒ 35.2m（現状計測値 35.26m）、西辺 9.77 間に入隅の 2.12 間を投影すると 11.89 間 ≒ 21.6m（現状計測値 21.94m）、北西張り出し部南辺 6.06 間 ≒ 11.0m（現状計測値 11.2m）と、ほぼ近似していることが確認される。また売渡地南東部東辺 10.43 間 ≒ 19.0m（現状計測値 18.55m）、南辺 7.2 間 ≒ 13.1m（現状計測値 12.81m）

など、総体的にみても 11 図の計測値は現状値に対し ± 2%の誤差範囲内で収まることが確認される。

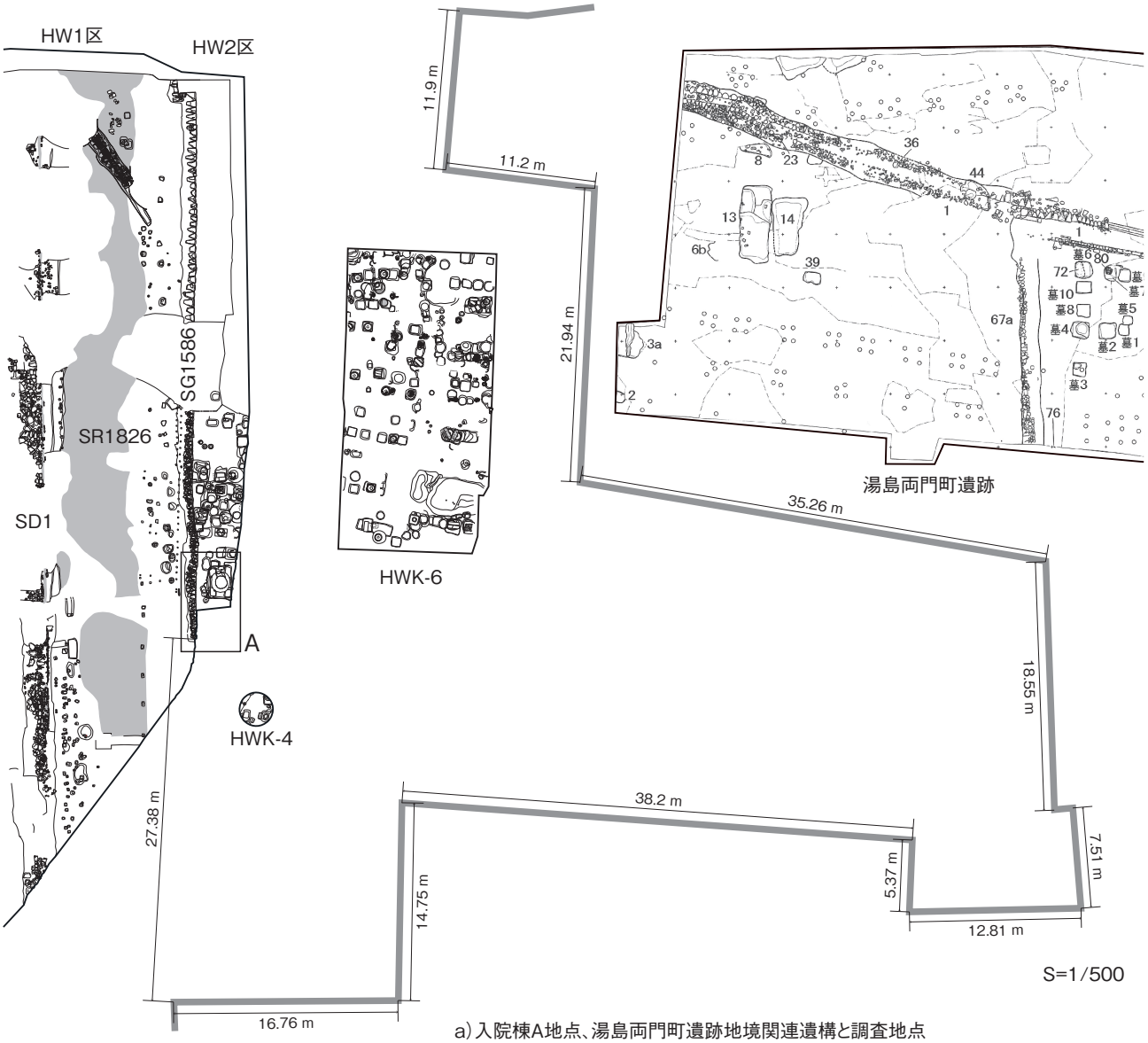
この結果を踏まえて、明治 36 年取得地位置を復元したい。15 図は 11 図の原図（部分）で 「三番地ノ一号」南西角から鋭形部北端までの距離は、南から 8.36 間、4.48 間、2.22 間で、合計 15.06 間≒ 27.4m を測る。鋭形部南北辺との角度によって値は前後するとはいえ、取得地南西角に該当する大学敷地角から SG1586 南端部までの距離とほぼ一致し（10 図 a、27.38m）、SG1586 南端クランク部は鋭形部北西角に比定することができる。15 図には鋭形部北西角から三番地ノ二号南西角が 9.35 間（≒ 17m）と記載されている。即ち、SG1586 南端部より北に 17m の位置が「三番地ノ二号」南西角に復元できる。

さて、明治 36 年取得地に関する資料のうち、16 図 a は「売却　浅草区栄久町、本郷区湯島両門町」と題する市有地払い下げに関する資料で、市有地としての墓地のうち、45 坪 4 合 9 勺を 163 円 76 銭 4 厘（坪単価 3 円 60 銭）で講安寺に売却したことが記されている（以下、a 図）。また同資料「説明」に「湯島両門町三番地ハ従来埋葬ナキ部分ナリ、孰レモ元関係寺院ヨリ払下出願アリシニ依り売却センモノトス」とあり、対象地は墓地として利用されていなかったことが判る。添付図面は地積測量図で、対象地形状と北西－南東方向の対角線及び南西角及び北東角から対角線に直交する線（即ち対角線を底辺とする三角形の高さ）が引かれ、各々測量値が記載されている。一方、16 図 b は、「560 湯島両門町土地購入済上申ノ件」『明治二十五年度以降四十四年ニ至ル土地関係書類』と題する明治 37 年 11 月に大学から文部大臣宛に送られた報告資料で、講安寺より宅地 45 坪 4 合 9 勺を 909 円 80 銭で購入したことが記載されている（以下、b 図）。添付図面には対象地形状と四辺の測量値（北辺 3.6 間、東辺 14.3 間、南辺 2.85 間、西辺 14.0 辺）が記載されている。そこで、両図の測量値より 16 図 c に示した手続きをとり取得地の形状復元を試みた。その結果、合成した四角形を a 図に重ね合わせたところほぼ一致し、a 図が正確な地積測量図であることが確認された。

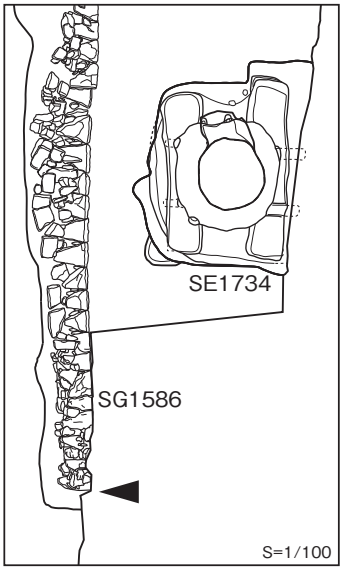
この成果に基づいて、「三番地ノ二号」範囲を現況図に対比させたい。15 図によると「三番地ノ二号」南西角は、鋭形凹地北西角、即ち SG1586 南端から 9.35 間≒ 17m にある。そこで SG1586 に沿って 17m を測り、「三番地ノ二号」区画を SG1586 と平行に重ね合わせた。そして「三番地ノ二号」区画東辺に記載された 16.41 間≒ 29.8m から講安寺北西角入隅状北端部を復元した（17 図①）。その結果、「三番地ノ二号」は HW2 区北半の空閑地に対比され、検出された墓壙群はそれ以南に分布することが確認された。即ち、明治 36 年取得関係資料に記載された「従来埋葬ナキ部分」が考古学的にも検証された。

続いて江戸時代の講安寺と富山藩邸地境の復元を試みる。14 図は明治 39 年に東京市から下谷区へ小学校敷地として貸渡された「市有地特貸ノ件」添付図面で、三番地ノ一号を対象にした 11 ～ 13 図では省略された三番地ノ三号北辺、東辺の計測値が記されている。共有する計測箇所を比較すると 11 図に対する誤差は +2% 以内で収まり、概ね正確な数値と捉えていいだろう。そこで旧富山藩邸との地境に対応する 14 図北辺について湯島両門町遺跡検出地境溝（1 号、67a 号）と対比を試みる。本地境ラインは 4 図から緩やかな屈曲点を交えて伸びていることが確認される。これは 5 図の描写や 14 図で計測値が 3 分割されていることからも窺い知ることができ、湯島両門町遺跡 1 号遺構が 8 号遺構付近で緩やかに屈曲している様相もそれを傍証しよう。そこで復元した北西角①を基準に 14 図計測値を湯島両門町遺跡地境遺構の方向角に合わせて対比させたところ、14 図「5.6 間」の東端が 1 号遺構の屈曲位置とほぼ整合し、67a 号遺構の交点までの全体距離も 14 図計測値にほぼ矛盾しないことが確認された（17 図赤線）。14 図の「第 169 号　市有地特貸ノ件　本郷湯島両門町」の「説明」には「本地ハ下谷区市立忍岡尋常高等小学校敷地接続地ニシテ墳墓一基モ無ク（後略）」と記載され、湯島両門町遺跡近代墓地遺構群が 67a 号遺構東側の称仰院区域に偏在していた結果とも一致する。

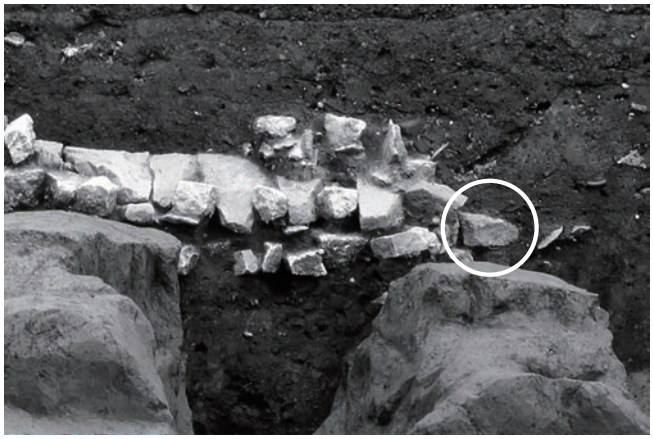
以上の手続きを踏まえて講安寺、興安寺、等正寺墓地と本地点の位置関係について検討したい。講安寺は弘化 5 年に興安寺、等正寺に各々間口 6 間 1 尺 5 寸、奥行 16 間の 100 坪を貸地した。そのうち等正寺は明治 14 年に 31 坪余を返却、さらに明治 35 年記録では間口 6 間 1 尺 5 寸、奥行 11 間 4 尺、総坪数 73 坪に改められている。明治 10 年の 5 図と明治 43 年の 11 図を比較すると、返却地は借地北部、即ち 14 図の北西張り出し部に該当すると考えられる。唯一借地範囲を表記した 5 図では南西部に入口を有する各々の借地が長方形に描かれているが、旧富山藩邸地境も東西方向に描かれるなど多くの角が直角表現にデフォルメされている。それに対して 14 図は現況図との対比からもほぼ正確な形状を示しているといえる。同図の北西張り出し部「6.15」辺とその東端に接続する「9.85」辺との内角は約 95° を測り、借地形状が長方形を呈していないことが確認される。また「6.15」辺軸は南辺の「16.85」辺とほぼ平行値を示すことから借地形状は平行四辺形を呈していたと推測でき



a）入院棟A地点、湯島両門町遺跡地境関連遺構と調査地点

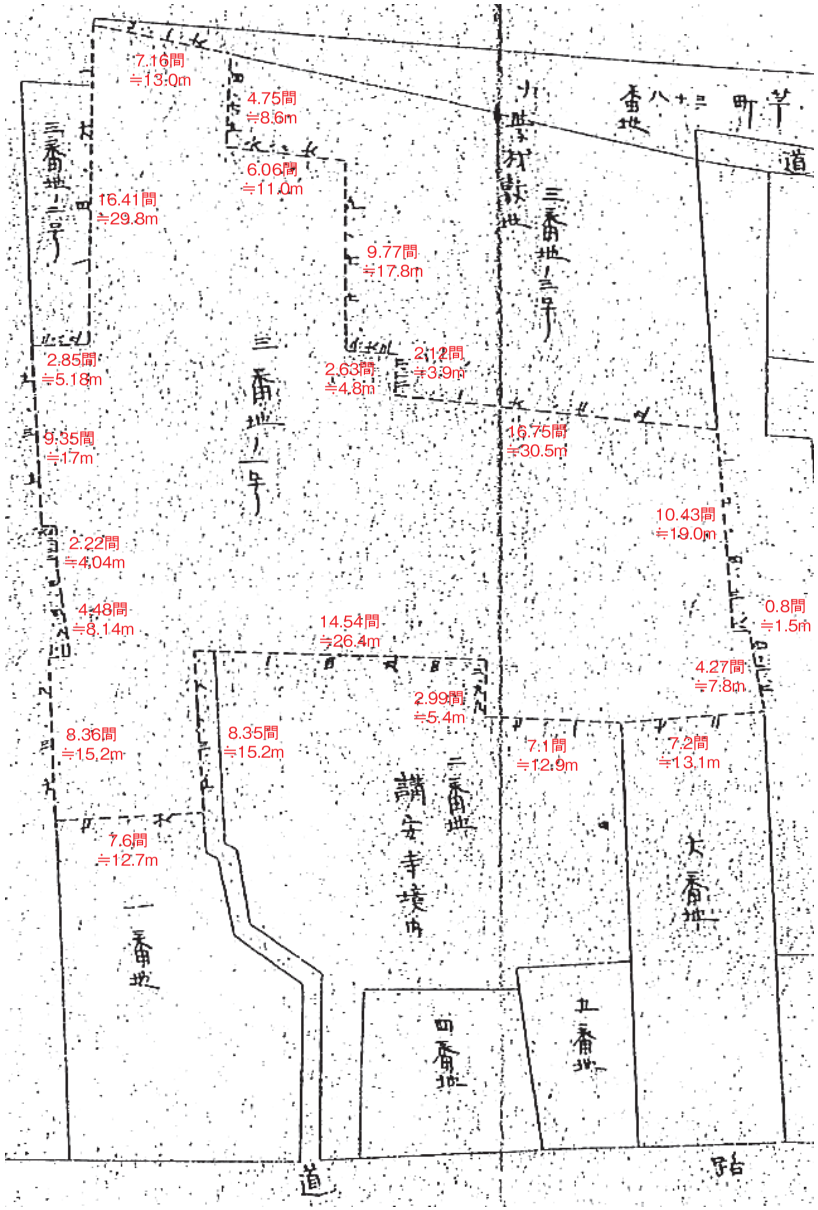


b）a 図 A 拡大図
入院棟A地点講安寺境石積み遺構（SG1586）
築石は◀が検出南限で、掘方も東へ折れる。

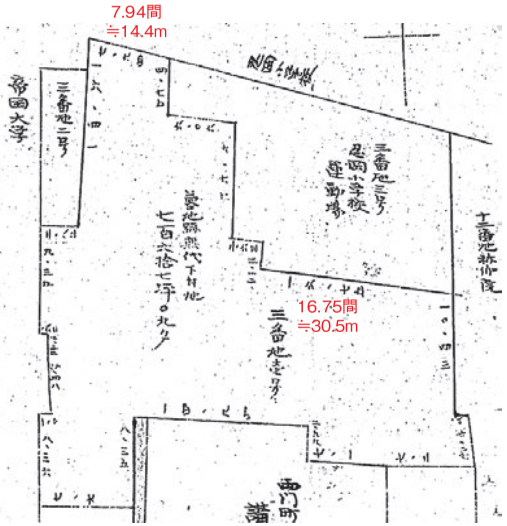


c）SG1586 南端部調査区壁面
A拡大図範囲を西からみた。右端の間知石（○印）が北（写真左）を向いている。

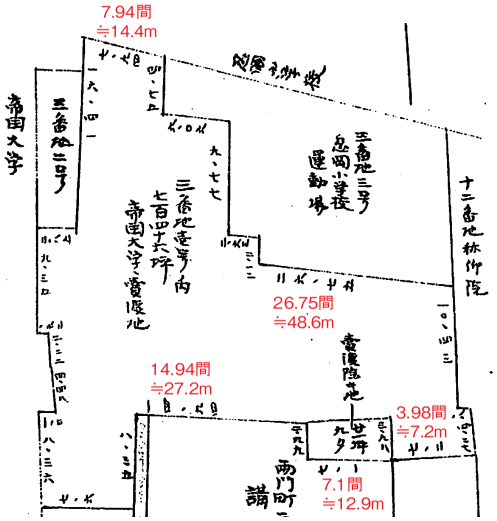
10図　大正元年取得地による位置比定



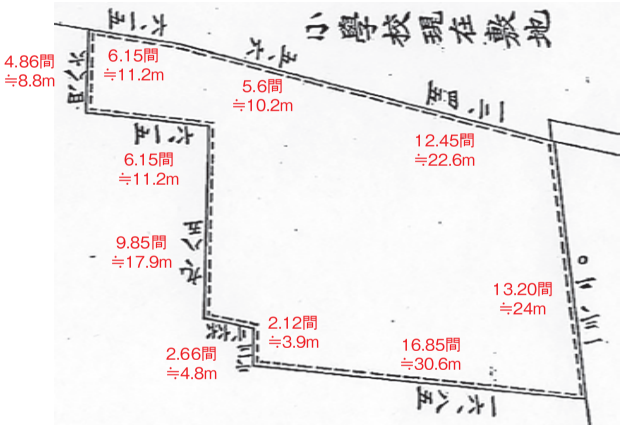
11図　明治43年「市有地無代下付ノ件」添付図(部分)に加筆
(東京都公文書館所蔵)



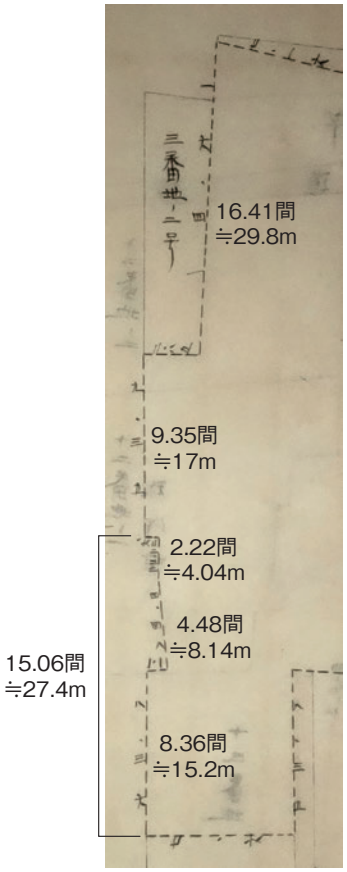
12図　大正元年「墓地跡地無代下付登記済届」
添付図(部分)に加筆
(東京都公文書館所蔵)



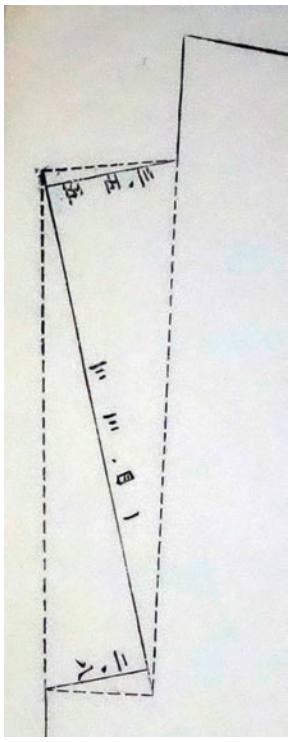
13図　大正元年「土地売渡登記済届」
添付図(部分)に加筆
(東京都公文書館所蔵)



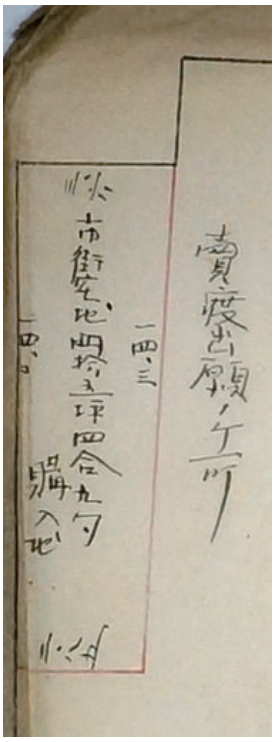
14図　明治39年「第169号 市有地特貸ノ件 本郷湯島両門町」添
付図(部分)に加筆　(東京都公文書館所蔵)



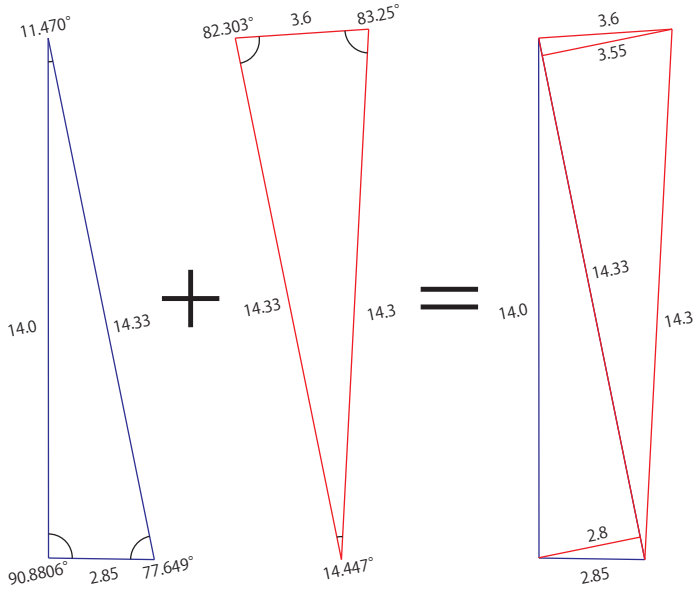
15図　11図（原図）の部分に加筆



a）明治36年
「売却　浅草区栄久町、本郷区湯島両門町」添付図面部分
（東京都公文書館所蔵）

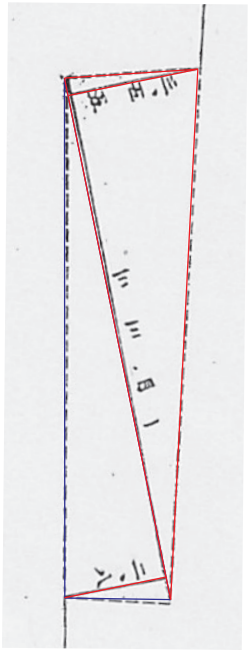


b）明治37年
「560 湯島両門町土地購入済上申ノ件」『明治二十五年度以降四十四年ニ至ル土地関係書類』添付図面部分（東京大学文書館所蔵）



a）の対角線とb）の二辺の三辺から角度を算出し、三角形を復元。

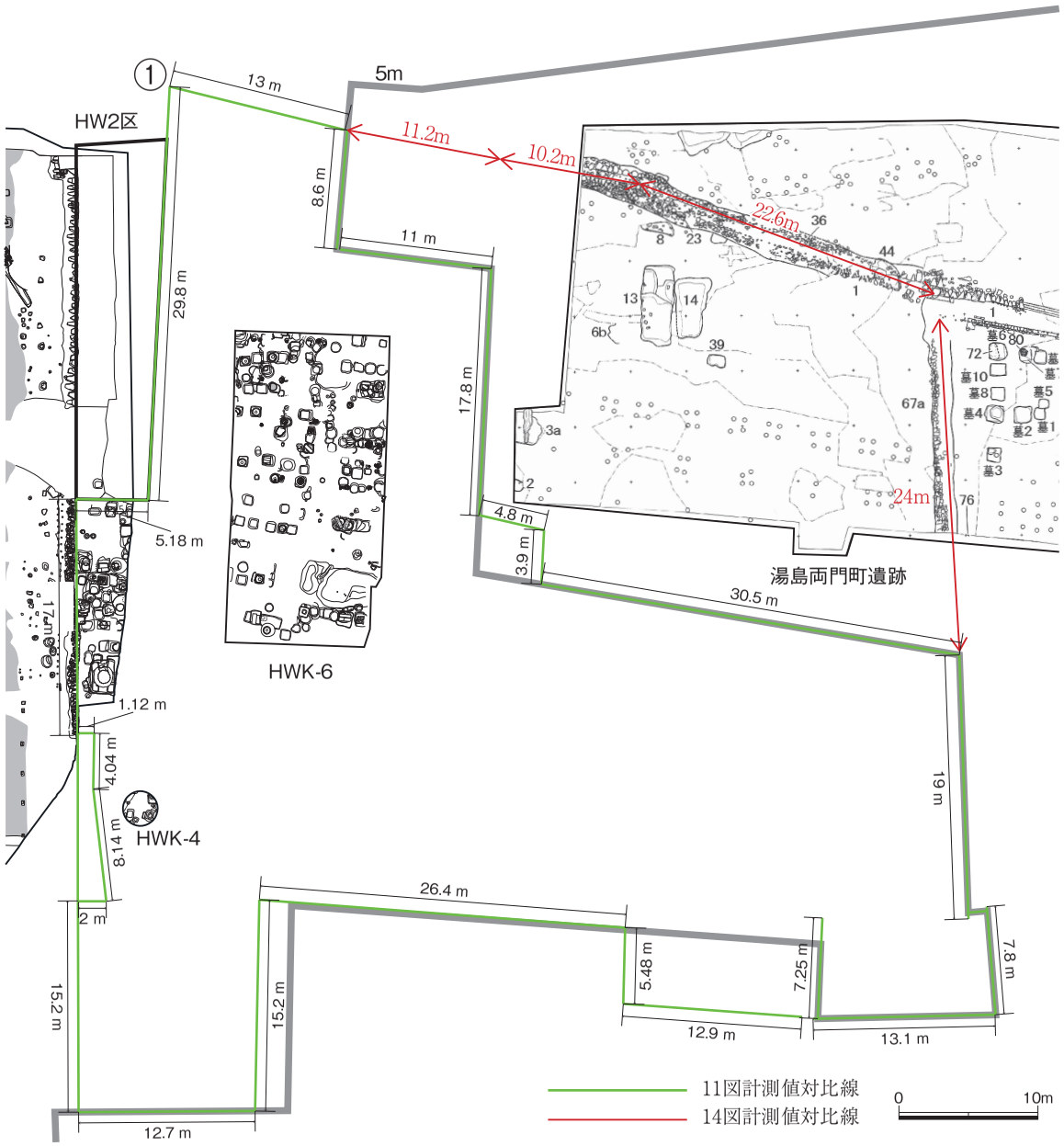
2つの三角形を合成したところ、a）の各三角形の高さと一致。



a）と重ね合わせたところ、ほぼ一致。a）の正確性が検証された。

c）取得地形状復元と図面との検証

16図　明治36年取得地の形状復元



17図　大正元年取得地による位置比定

18図　興安寺・等正寺借地範囲の復元

る。この東西軸は墓壙群主軸のうち調査区南域に分布する主軸 C とほぼ一致し、主軸 C は借地南地境軸に規制された主軸と考えられる。従ってそれを基準に間口幅を復元し、南北軸は「9.85」辺を軸に現況図と対比させた（18 図）。その結果、借地西辺は「三番地ノ一号」と平行し、明治中葉の返却地は 14 図張り出し部と面積がほぼ一致することが確認された。西側の興安寺借地北辺と西辺は 11 図計測値復元線より 1 ～ 2m 内側に位置するが、現在の大学敷地内と東側の台東区営アパート（湯島両門町遺跡）が約 4m の標高差を有していることから、擁壁形状の影響と推測される。また借地南辺の延長が「三番地ノ二号」南辺にあたることから、講安寺墓域との関係性が捉えられる。

4. 借地区画と検出遺構群との関係

復元した借地区画と墓壙群主軸を比較すると、主軸 B は興安寺・等正寺借地境軸、即ち三番地ノ三号西辺軸と、主軸 C は借地南辺東西軸、即ち三番地ノ三号南辺と、主軸 A は SG1586 南北軸、即ち富山藩邸・講安寺地境軸とほぼ一致し、各墓壙群主軸は近接する土地区画の影響を受けて設定されたと推測される（19 図）。そのうち主軸 C 墓壙群は 3 寺墓域全ての地境周辺に分布し、借地境に近接する墓地配置が東西軸を強く意識していたことが窺われる。以下、各墓域を興安寺区（左上）、等正寺区（右上）、講安寺区（下）と称し、埋葬施設、被葬者相から各区検出墓壙属性を分析し、さらに HW2 区との比較から本地点墓域の特徴を検討したい。

(1) 埋葬施設

19 図に各区ごとの埋葬施設比率を示した。なおこのグラフでは改葬などによる埋葬施設不明遺構は除外した。また重層甕棺は一墓壙内の甕棺数を示し遺構数とは一致しない。興安寺区では重層甕棺 3.1%、甕棺 24.6%、木棺 47.7%、火消壺棺 12.3%、火葬蔵骨器 12.3% を示し、木棺の比率が 5 割弱と最も多く、重層を含む甕棺が 3 割弱、火消壺棺、火葬蔵骨器が 1.2 割と続く。等正寺区では重層甕棺 10.8%、甕棺 1.5%、木棺 49.2%、火消壺棺 9.2%、火葬蔵骨器 29.2% を示し、興安寺区同様木棺比率が半数近くを占めるが、甕棺比率は 1 割強と低く、対して火葬蔵骨器は B4、B5 ブロックの様相を反映して 3 割弱と多い。講安寺区では重層甕棺 20.0%、甕棺 20.0%、木棺 56.0%、火消壺棺 4.0% を示し、木棺が 5 割強、重層を含む甕棺が 4 割を占め、火葬蔵骨器は検出されていない。また火消壺棺は 4% と興安寺、等正寺区の 1/2 以下の比率を示す。

木棺比率は各区とも最も多く全体の約 5 割を占めている。甕棺では講安寺区、興安寺区の比率が高いが、講安寺区には重層甕棺が複数基認められ、それが甕棺全体の比率を押し上げている。また等正寺区は重層甕棺墓（ST24、ST97）を除くと B5 ブロックの ST35 のみで、全体的に甕棺使用率が低いエリアといえよう。火消壺棺は興安寺、等正寺区で各々 1 割前後を占めるが、講安寺区は 4% と低い。火葬蔵骨器は等正寺区では約 3 割を占め、それに対し講安寺区では認められないなど各区で偏りが窺われる。

20 図では 7 図で示した埋葬容器廃棄、再埋葬、改葬、非改葬事例の比率を各区ごとに示した。埋葬容器廃棄事例では火葬蔵骨器が主体を占め、地境を越えた廃棄行為がないと仮定すれば講安寺区内にも火葬蔵骨器埋葬墓の存在が予想される。改葬事例は講安寺区が 52.4% と突出しているが、これは甕棺墓の比率を反映していると考えられる。その反面興安寺区では遺存状態の悪い事例を含めるとほぼ全ての甕棺に人骨が遺存し、講安寺区と対照的なあり方を示している。また等正寺区では再埋葬事例が他区より多く認められ、追葬、改葬時などの被葬者整理が頻繁に行われていたことを示している。

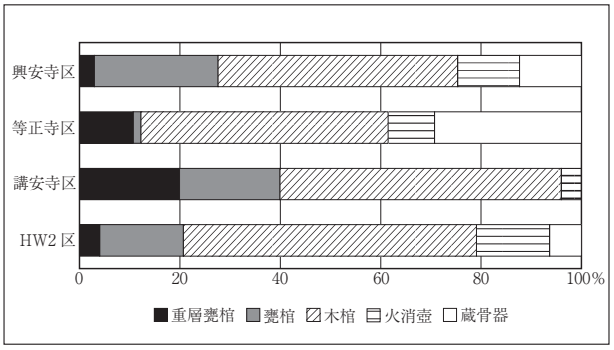
(2) 被葬者相

本地点で検出された人骨は、すでに HW2 区出土人骨資料と合わせて東京大学大学院理学系研究科の近藤修氏に分析を依頼し、同報告書研究編に玉稿を賜った（近藤他 2016）。また本書に対しても再録を承諾頂き本編に掲載した。近藤論考では、性別、年齢、病理学的観察の 3 視点から分析されているが、ここでは性別、年齢に着目して各区の様相を比較検討したい（21 図）。なお年齢不詳人骨は除外した。

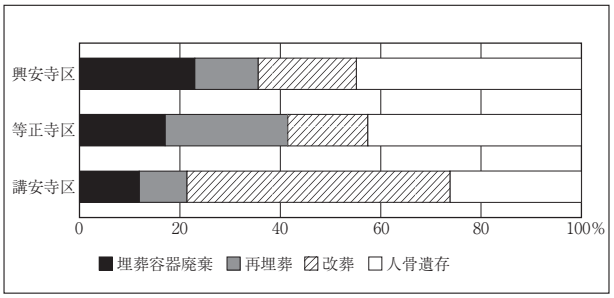
興安寺区では成人男性 23.8%、成人女性 31.0%、成人性別不明 11.9%、未成人（6 歳以上）14.3%、未成人（5 歳以下）19.0%、等正寺区では成人男性 29.5%、成人女性 11.4%、成人性別不明 13.6%、未成人（6 歳以上）9.1%、未成人（5 歳以下）36.4%、講安寺区では成人男性 30.0%、成人女性 20.0%、成人性別不明 40.0%、未成人（6 歳以上）0.0%、未成人（5 歳以下）10.0% を示した。

全体を概観すると、成人人骨では講安寺区が 9 割と最も高い比率を示すが、性別不明成人骨比率の高さが大いに影響していることが読み取れる。20 図に示した講安寺区の高い改葬、再埋葬率が、形質的位置を止めていない低遺存率の要因と指摘できる。一方未成人骨をみると興安寺区 3 割、等正寺区 5 割弱に対して講安寺区では約 1 割と少なく、特に 6 歳以上未成人が皆無である特徴が

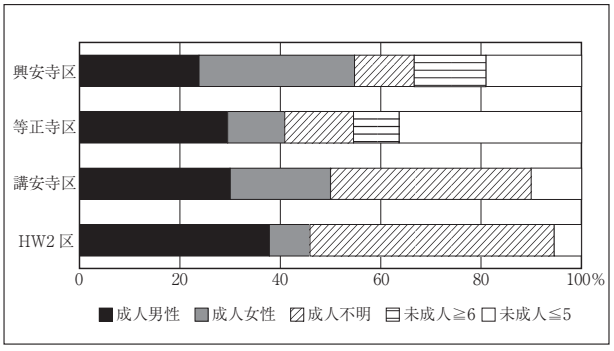
見出される。このような個別状況を踏まえて各区の全体相を比較すると、男性：女性比は調査地点全体では 1.3 であるが、興安寺区 0.77、等正寺区 2.5、講安寺区 1.5 と等正寺区男性比が最も高く、講安寺区がそれに続く。また成人：未成人比は全体では 1.5 であるが、興安寺区 3.5、等正寺区 0.9、講安寺区 5.5 と講安寺区の比率が高い。この比較から講安寺区被葬者は男性比、成人比ともに高い傾向が見出せる。分析対象には性別、年齢が特定不能な火葬人骨が含まれていないことを考慮する必要があるが、火葬対象が性別、年齢に左右されていないことを前提にすれば、おおよその傾向を表出しているといえよう。



19図　本地点各区とHW2区の埋葬施設



20図　各区の墓壙遺存状況



21図　本地点各区とHW2区の被葬者

5. 本地点と HW2 区の比較

2016 年時の近藤論考では HW2 区と本地点間に性別、年齢の様相差が指摘されているが、その時点で本地点の遺構整理は未着手で、遺構属性を反映させることができなかった。そこで各区と HW2 区の比較を踏まえて再検討したい。

22 図に本地点、HW2 区、HWK-4（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）の遺構配置を示した。HW2 区の墓域北限は本地点講安寺区北側境界の延長線上とほぼ一致する。墓壙分布は南北方向 3 ブロックに大別できるが、原が想定した墓域、墓道に基づいて 4 ブロックに分割した（原 1997）。確認された遺体埋葬方向はほぼ南北を示し、東西方向の墓道に面して埋葬されたことが確認できる。各ブロックの主軸方向角は東西方向を示し、西側の加賀藩邸地境ラインと直交する、即ち地境軸を基準に墓域が形成された結果といえよう。このブロック軸は本地点の主軸 A とほぼ等しく、主軸 C（E-8.5° -S）とは最もかけ離れている。

続いて埋葬施設（19 図）、被葬者相（21 図）を比較する。HW2 区の埋葬施設は甕棺 20.8％、木棺 58.3％、火消壺棺 14.6％、火葬蔵骨器 6.3％で、木棺墓が最も多く 6 割近い組成比を示す。このあり方は本地点と共通する。甕棺墓、火消壺棺墓を含めると土葬墓は 9 割以上を占め、火葬蔵骨器が検出されなかった講安寺区の様相と近い。

一方、HW2 区被葬者相は成人男性 37.8％、成人女性 8.1％、成人性別不明 48.6％、6 歳以上未成人 0.0％、5 歳以下未成人 5.4％と成人人骨が約 95％を占める。これは約 90％を占める講安寺区の様相と近似し、性別不明成人骨の割合が、成人骨比率を引き上げている要因として挙げられる。性別不明人骨組成率は遺存状態に帰因するところもあるが、ほぼ同一環境にありながら興安寺・等正寺区と大きくかけ離れている背景には改葬時の残置、再埋葬などの処理行為の影響があると考えられる。また 6 歳以上未成人骨の検出例がないことでも共通する。このように被葬者相視点では講安寺区と HW2 区に類似性が指摘でき、近藤論考で指摘された HW2 区と本地点の様相差は、興安寺・等正寺区の様相を反映した結果といえる。

6. 文献資料との比較にみる各区属性

これまで述べてきた遺構配置、遺構属性、被葬者について、HW2 区を含む各区の様相差を整理すると、以下の特徴にまとめられる。

22図　近隣調査地点と本地点の墓坑分布

【主軸】
・主軸Aは調査地点北西部、Bは北東部、Cは南半部とエリア的なまとまりを示すが、地境復元から借地墓地入口付近の墓壙群ブロックは、主軸Cによって配置され、興安寺区、等正寺区の墓壙群主軸は南北で二分されることが確認された。
・主軸AとHW2区の主軸方向角は近似し、西側の加賀藩邸との地境軸を意識していることが窺われる。
・講安寺区墓壙群は、富山藩邸借地段階の検出遺構（地下室、厩）との位置関係及び借地境推定線との対比から、C8ブロック及びHW2区検出墓壙群南半部は借地段階も講安寺墓域内に含まれ、厩位置と重複するC7ブロックは返却後の弘化5年頃以降に墓域形成が進められたと考えられる。

【埋葬施設】
・木棺墓を中心としながらも、その他の土葬埋葬施設には各区間で類似する組成比様相は認められない。
・改葬廃棄量に留意する必要はあるが、講安寺区、HW2区で火葬蔵骨器率が低い点で共通する。

【被葬者】
・講安寺区、HW2区では、成人比率が極めて高い傾向を示し、6歳以上未成人骨が皆無である点で共通する。成人比率は興安寺区でも約2/3を示すが、5割強を女性が占めている点で異なる。

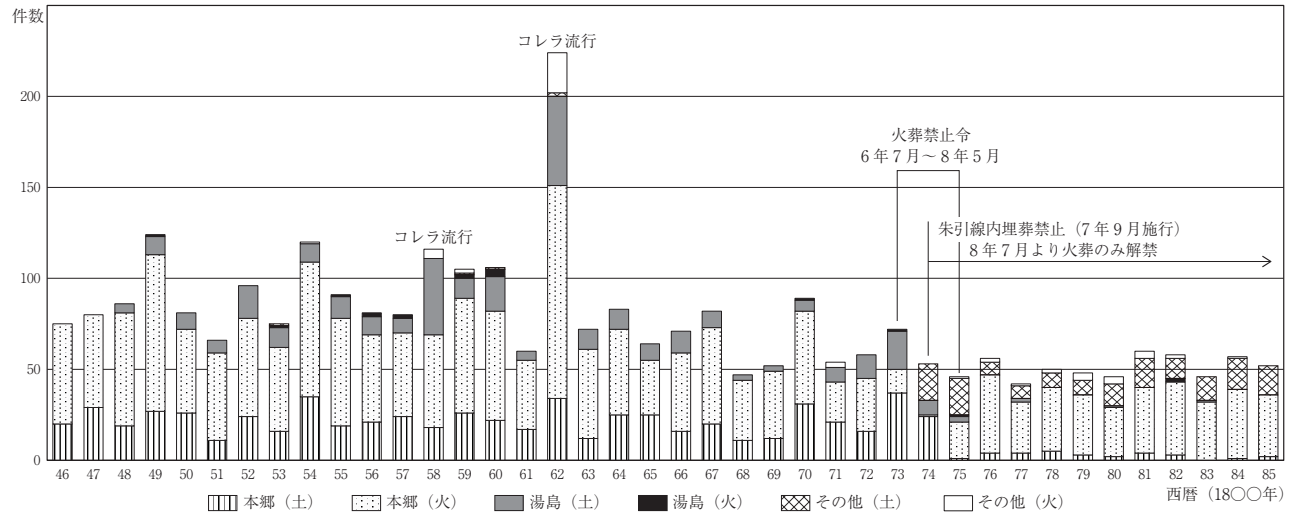
以上、考古学及び形質人類学的分析から得られた埋葬施設、被葬者相の諸特徴は、各種記録、図面類との対比から、各墓地を管理所有する寺との関わりが強いことが見出された。以下に、興安寺過去帳および明治40年（1907）の墓地移転に伴い実施された墓碑銘調査記録からみた本地点の様相を考えたい。

既述した様に本地点検出墓壙群を主軸及び図面類との対比から興安寺区、等正寺区、講安寺区の三区画を設定し、各区に認められた埋葬施設、被葬者相の様相差は、各墓地の特徴を反映した結果と捉えられた。男性比約3割を含む成人比率約9割を示した講安寺区とHW2区は、講安寺墓地に比定される。宮崎による講安寺過去帳調査では「加州」「向屋敷」「榊原」「本多」「戸田」「水戸」などの肩書きから講安寺周辺の大名屋敷関係者が一定数確認されており、こうした近隣大名屋敷との関わりが成人男性比率に反映されていると推定される。一方、興安寺、等正寺墓地は、宮崎論考でも指摘されているように両寺が所在する本郷元町の墓域が手狭になったことが借地要因と考えられる。

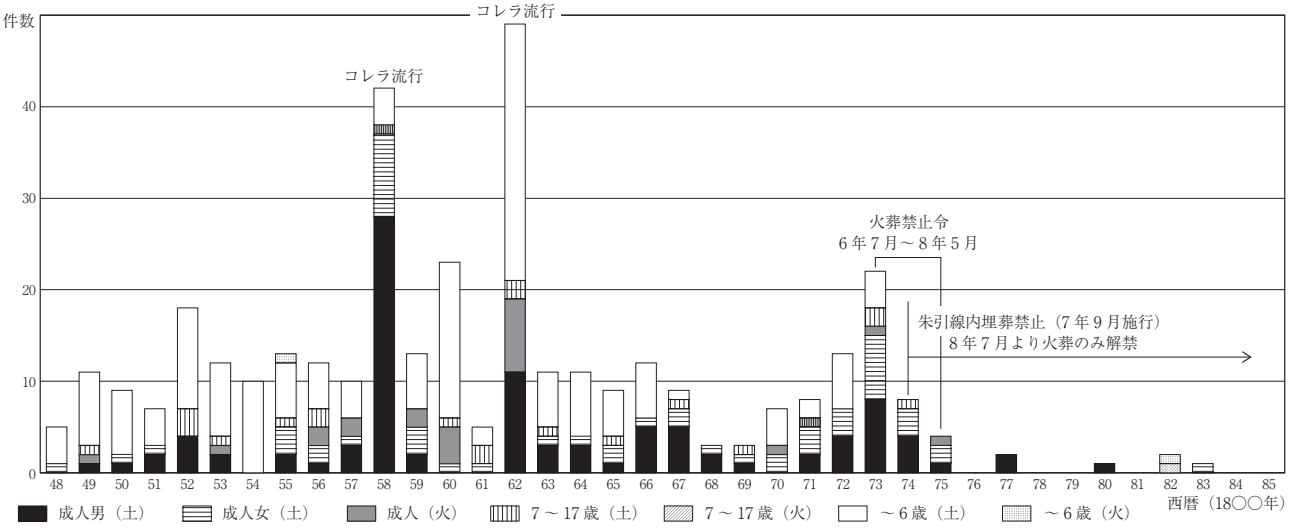
両寺のうち等正寺は江戸時代の火災や関東大震災被災などによって過去帳を含む記録類は全て焼失したとされるが、興安寺には元和6年（1620）～明治18年（1885）までの過去帳7冊が保管されている。そのうち講安寺墓地借地期間が含まれる「弘化3年（1846）～文久2年（1862）」、「文久3年（1863）～明治18年」の2冊には、それまでの法名、没年月（日）、住所、名前（俗名または家主名と血縁･主従関係）に加え、享年、埋葬方法（土葬、火葬）、埋葬墓所（本郷元町境内以外）が記載され、文久5年以降の講安寺借地墓地被葬者の性別、享年、埋葬方法、さらに興安寺関連墓地全体の中での講安寺借地墓地の動向を読み解くことができる資料である。23図に埋葬場所（興安寺境内墓地〔本郷〕、講安寺借地墓地〔湯島〕、その他共葬墓地・寺院墓地〔その他〕）と埋葬方法による1年単位の被葬者数推移を示した。講安寺借地墓地は借地契約を結んだ弘化5年に土葬5件が確認でき、その後はコレラが流行した安政5年（1858）、文久2年（1862）を除き数件から20件弱程度で推移する。明治以降は火葬禁止令が出された明治6年（1873）～8年（1875）年を除き一桁台で推移し、火葬禁止令解除後は数年に1件程度に減少する。火葬禁止令解除後の土葬件数減少は本郷墓地にも認められ、火葬禁止令発令後からその他の寺院墓地埋葬者数が増加していることから、明治7年（1874）の朱引線内埋葬禁止の影響が顕れていると推測される。一方火葬については数年に1件程度で明治18年までの38年間で18件と本郷元町境内と比較して顕著に少ない。この比率からも講安寺墓地借地が土葬場所確保を要因としたことを窺わせている。土葬総数は347件を数え、重層、改葬、墓道などの諸要素を無視して単純に借地面積100坪で割ると0.3坪＝約1㎡となり、ほぼ借地墓地全域に土葬墓が築かれ飽和状態になっていたと推定される。これを踏まえると本地点で検出された土葬墓は、朱引線内埋葬禁止令が施行された明治7年までの様相を示す可能性が高い。

興安寺過去帳に記載された被葬者情報のうち発掘調査情報（遺構形態、出土人骨分析）と比較可能な埋葬方法、性別、享年に着目し被葬者相の推移を24図に示した。死亡年齢については人骨分析の分類基準に則して成人、6歳までの未成人、7～17歳までの未成人に分類した[(7)]。既述した様に火葬は成人、未成人ともに非常に少なく、特に未成人は6歳以下が1855年、1882年に各1件、7～17歳までが1882年の1件認められるにすぎない。

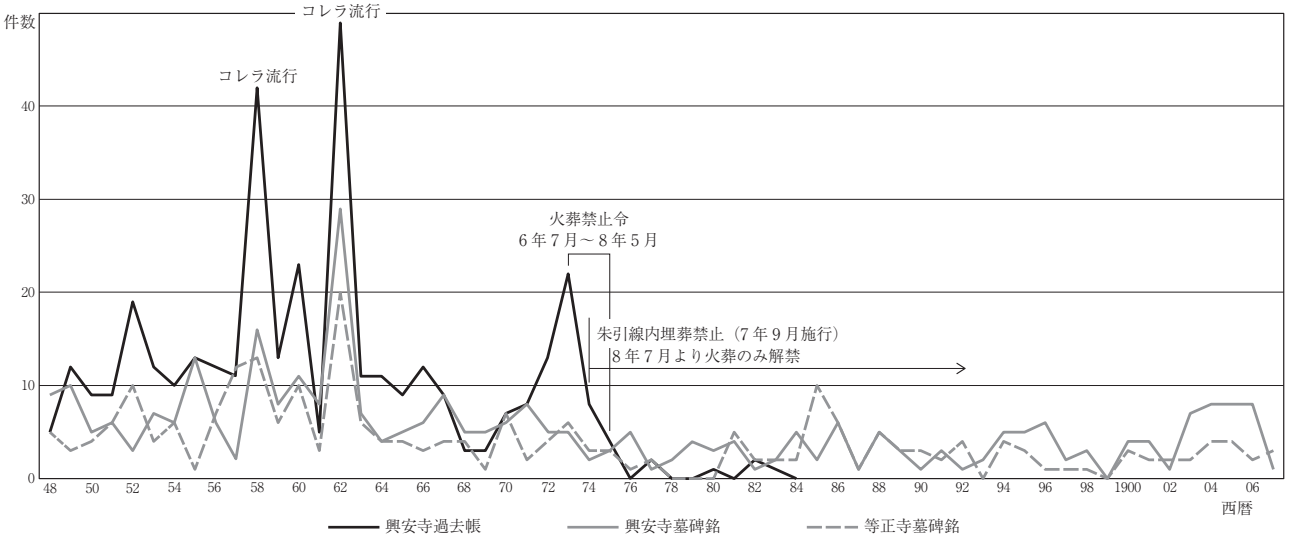
一方土葬事例を死亡年代別に概観すると、コレラが流行した1858、1862年などを除き、埋葬事例が連続して確認できる1875年までのほとんどの年で6歳以下が



23 図　興安寺過去帳にみる埋葬場所



24 図　興安寺過去帳にみる講安寺借地墓地被葬者相



25 図　興安寺過去帳・墓碑銘録にみる講安寺借地墓地被葬者没年

最も多く、全年代区分に対して半数以上を占めた年も多い。こうした状況は 21 図に示した被葬者年齢比率と比較すると、成人比率 2/3 を示した興安寺区の状況とは異なり、等正寺区に近い様相を示している。この様相差は興安寺区調査範囲が講安寺借地墓地面積の約 3 割に過ぎず、借地墓地内での墓地配置の偏りに帰因していると考えられ、等正寺区と比較して人形・玩具類の出土事例が少ないこともそれを傍証していよう。

25 図は明治 40 年に実施された墓碑銘調査と興安寺過去帳を比較したグラフで、全体的に過去帳記載数が墓碑銘調査数を上回っている傾向が認められるが、火葬禁止令解除後に件数の逆転が認められる。その要因については別途考える必要があるが、年単位の動向は類似した推移を示し、明治 7 年の朱引線内埋葬禁止を挟み、それ以降の没年が記載された墓標は年数件程度で推移する。この様相は等正寺墓碑銘録にも顕れ、明治 11 年（1878）以降は、明治 18 年を除き低い数値で推移する。この埋葬件数の減少が明治 14 年の借地墓地一部返却に繋がった可能性も推測される。

7. 火葬蔵骨器の出土率

7 図に示したように検出された墓壙は、改葬や埋め戻し時に火葬蔵骨器、火消壺棺など小形埋葬容器が廃棄された事例が多く認められ、埋葬時の状況を保っていた事例は 30 例に満たない。そこで比較的個体識別が容易な瓦質蔵骨器について廃棄状況と推定最少個体数を検討する。

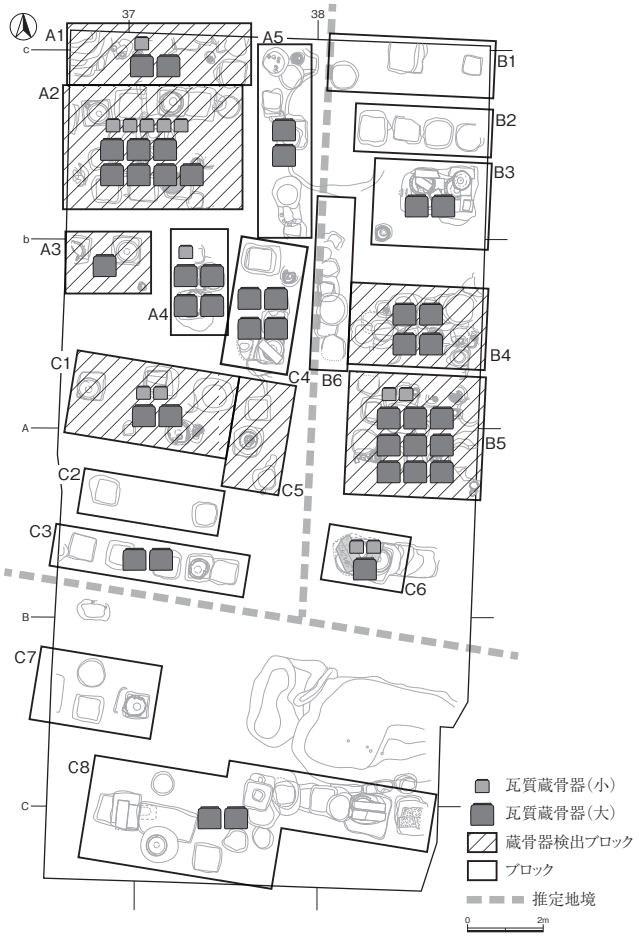
瓦質蔵骨器は口径 13 ～ 15cm、器高約 20cm、底径 15 ～ 19cm を測る大形製品（以下、瓦質蔵骨器大）と、口径 8 ～ 9cm、器高 10 ～ 13cm、底径約 10cm を測る小形製品（以下、瓦質蔵骨器小）に大別される。このうち瓦質蔵骨器大の完形品重量は概ね 2000g、瓦質蔵骨器小は概ね 600g を測る。この推定個体重量を元に各ブロック毎の廃棄資料総重量を推定個体重量で割り、小数点以下を切り上げて推定最少個体数を算出した（1 表、26 図）。

26 図では陶器、土師質製品を含む蔵骨器墓検出ブロックを斜線塗りで、廃棄資料を含む瓦質蔵骨器推定最少個体数を模式図で示した。蔵骨器検出ブロックは興安寺区、等正寺区に認められ、講安寺区では認められない。ブロック単位の推定最少個体数は、瓦質蔵骨器大 2 個体が認められた講安寺区 C8 ブロックを除き、興安寺区の北半部、等正寺区の中央部に集中し、ほぼ蔵骨器墓検出ブロック分布と重なる様相を示す。この分布傾向から改葬に伴う蔵骨器廃棄行為は、埋葬位置の近接範囲で行われていたことが読み取れる。また未成人用と推定される瓦質蔵骨器小は全て瓦質蔵骨器大出土ブロックに伴う様相も看取される。

明治 18 年下限の興安寺過去帳に記載された借地墓地火葬事例は 18 例（成人 15、未成人 3）に対し、興安寺区の瓦質蔵骨器推定総数は 33 個体と 2 倍弱を数える（1 表）。調査区は借地面積の約 3 割にあたり面積比から単純計算すると陶器蔵骨器を含めた火葬墓は 100 基以上存在したことが予想される。一方、墓碑銘録では明治 19 ～ 40 年までに 84 例の没年が確認される。明治 7 年 9 月に施行された朱引線内埋葬禁止令は、翌年 8 月に火葬のみが許可されたが、興安寺過去帳では本郷で毎年数件、湯島では明治 8 年に 3 件、明治 10 年に 2 件、明治 13、16 年に 1 件の土葬記載が認められ、法令が遵守されて

寺　　域	瓦質蔵骨器大	瓦質蔵骨器小	総　　数
興安寺区	24	9	33
等正寺区	16	4	20
講安寺区	2	0	2

1表　各区出土瓦質蔵骨器推定最少個体数



26図　蔵骨器墓及び瓦質蔵骨器の分布

いなかったことが窺われる（23、24 図）。よって明治 7 年以降の墓碑銘録被葬者が全て火葬とは断定できないが、出土瓦質蔵骨器推定個体数を重ねると、全面改葬された明治 43 年までの 20 数年間も年間数件の火葬埋葬が継続されていたと予測される。

おわりに－成果と展望－

本地点は 200㎡という狭小な調査区であったが、幕末から明治末まで 3 寺の墓地にまたがり、各墓地の様相差など多岐にわたる成果が認められた。よって以下に主な成果を列記し、まとめにかえたい。

東京帝国大学が大正元年度に取得した講安寺寺域は講安寺境内の北西部に位置し、文献、絵図との対比から元禄 3 年から弘化 3 年頃までの富山藩借地区域の西側、弘化 5 年から明治 43 年までの興安寺借地区域の全域、等正寺借地区域の南側を含む変遷を辿ることが確認された。検出された墓壙群には近接する土地区画に規制された 3 方向の主軸が認められ、図面等から復元した土地区画を対比させた結果、一寺院墓地内において複数の基準軸によって配置されていることが確認された。

興安寺区では、講安寺境の南辺方向角（主軸 C）を基準にした入口付近は比較的密度が低く整然と並んでいるが、加賀藩邸境南北軸（主軸 A）を基準にした北側 A1、A2、A5 ブロック周辺は、墓道復元が困難なほど密度が高い傾向が看取される。等正寺区でも敷地南端部に主軸 C が認められるが、それ以北は借地墓地南北軸（主軸 B）で配置されている。さらに重層甕棺主体ブロック（B3、C6）は四周に一定の空間が確保され独立した様相を呈しているのに対し、木棺・蔵骨器主体の B4 ～ B6 ブロックの密度は非常に高い。こうした墓群空間配置及び各ブロック内の墓壙密度の差は、階層、身分など被葬者相を反映した結果と捉えられる。一例を挙げると重層甕棺 5 基が検出された ST24（B3 ブロック）では、改葬時の廃棄と考えられる石製墓標（Ⅳ -7 図 13）に刻まれた法名が、墓碑銘録の広田家に対応することが確認された。墓碑銘録から成人 5 名、未成人 2 名全て院号を有し等正寺のなかでも最高位の檀家と位置づけられている[8]。本ブロックは周囲から独立して配置されていることもそれを裏付けよう。ST97（C6 ブロック）も同様な配置をとり、本地点内の等正寺墓域は、独立墓群と密集墓群が交互に配置された景観が復元される。

被葬者相からみた各区の様相は、講安寺寺域に該当する C7、C8 ブロック、HW2 区では成人男性比が高く、勤番武士を含む単身男性者比率が高い様相を示した。興安寺区では成人女性比が高く、未成人比が約 3 割を示した。さらに等正寺区では未成人比が約半数を示し、ともに家族単位の被葬者構成が窺われるなど、各区域毎の被葬者相に特徴が認められた。その一方で興安寺過去帳と興安寺区被葬者相には未成人比率に大きな隔たりがあり、墓域の部分的調査から全体相を捉える難しさを示した。

興安寺過去帳分析から借地墓地への埋葬行為は、火葬禁止令解除や朱引線内土葬禁止が出された明治 8 年頃に収束し、それ以降の土葬はほぼ朱引線外共葬墓地などへ、火葬は興安寺境内へ埋葬されたことが確認された。記録に従えば本地点で検出された土葬墓は借地した弘化 5 年（1848）から土葬禁止令が施行された明治 6 年（1873）までの四半世紀の所産と捉えられ、甕棺に使用された常滑焼大甕が惟村分類 F 類（惟村 1997）にあたること、明治期以降に比定される副葬品類がないこともそれを傍証しよう。一方既述した様に原位置を保った火葬墓は約 15％と少ないが、土葬墓と重複する事例の大半で火葬墓が新しいことが確認でき、朱引線内火葬解禁後の資料も一定量含まれていると考えられる。

最後になるが、墓壙群主軸のうち主軸 C について触れたい。既述した様に主軸 C は、借地墓地と講安寺境軸を基準にした軸線で、11 図で確認したように三番地が一号～三号に分筆された明治末頃でも借地墓地南辺延長が一号と三号の地境に設定されていた。その一方、この軸線方向は富山藩借地段階の厩遺構東西軸とほぼ一致することが確認された（22 図）。また 1 図 B の富山藩借地境も同様の方向角を示すことから、地境近傍に位置する厩は、それを基準に建設されたことが窺われ、主軸 C は富山藩借地段階から基準軸を担っていたことが判る。即ち主軸 C の東西方向角は、富山藩借地段階から明治末年頃まで連綿と継続されていると判断でき、富山藩の借地範囲設定時も講安寺境内の本軸線を基準にした空間利用に基づいて行われたことが推測される。

【註】

(1) 文政年間における松平淡路守は、9 代藩主利幹（享和元〔1801〕年～天保 6〔1835〕年）を指す。

(2) 松平出雲守は、11 代藩主利友（弘化 3〔1848〕年～嘉永 6〔1853〕年）を指す。

(3) 東京大学文書館所蔵「明治二十五年度以降四十四年ニ至ル土地関係書類」（S00400029）より

(4)「第 220 号　市有地無代下付の件」（東京都公文書館所蔵）より

(5) 興安寺所蔵墓地移転関連資料より

(6) 平成 15 年に台東区立忍岡住宅建て替えのために実施され

た調査範囲は、台東区と文京区に跨がる位置にあり、台東区側が「茅町二丁目遺跡」（台東区遺跡 No.75）、文京区側が「湯島両門町遺跡」（文京 No.53）に該当する。現在の区界は第 1 号遺構とほぼ対応し、北側が富山藩邸、南側のうち第 67 号遺構以西が講安寺、以東が称仰院に比定される。

(7) 過去帳では、数え年齢 17 歳までの被葬者に童子、童女の法名が用いられている。それに従い享年未記載事例は、法名から享年を判断したため未成人の下限を 17 歳とした。

(8) 宮崎氏のご教示による。

【引用・参考文献】

飯塚義博　2012「明治期東京における共葬墓地の成立過程と市区改正委員会案」『日本建築学会計画系論文集』第 77 巻第 679 号

江戸遺跡研究会編　2004『墓と埋葬と江戸時代』吉川弘文館

江戸遺跡研究会　2024『近世都市江戸の墓』江戸遺跡研究会第 36 回大会

小松愛子　2015「文献・絵図資料にみる富山藩江戸屋敷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』9　東京大学埋蔵文化財調査室

惟村忠志　1997「近世常滑大甕の編年と窯業画期素描」『牟邪志』第 8 号

近藤　修・左崇亜依子・石井理子・佐々木智彦・荒牧友美　2016「東京大学構内遺跡講安寺墓域（2 区／ HWK-6）より出土した江戸時代人骨」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』研究編

台東区文化財調査会　2005『茅町二丁目遺跡池之端一丁目 5 番地点（本郷台遺跡群・湯島両門町遺跡湯島四丁目 12 番地点）』

東京大学医学部・医学部附属病院創立 150 周年記念アルバム編集委員会編　2008『医学生とその時代　東京大学医学部卒業アルバムにみる日本近代医学の歩み』中央公論新社

東京大学埋蔵文化財調査室　2016『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』

東京大学埋蔵文化財調査室　2021『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院　看護職員等宿舎 1 号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎 3 号棟地点（1）』

東京大学埋蔵文化財調査室　2024『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院　看護職員等宿舎 5 号棟地点・看護職員等宿舎 3 号棟地点（2）』

成瀬晃司　2001「市中墓にみられる大深度地下利用」『考古学ジャーナル』No.477

成瀬晃司　2021「看護職員等宿舎 1 号棟地点からみた富山藩上屋敷」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院　看護職員等宿舎 1 号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舎 3 号棟地点（1）』

西野光一　1999「明治六年の火葬禁止令における火葬観について」『佛教文化学会紀要』8 号

原　祐一　1997「湯島講安寺における墓域の空間利用－東京大学医学部附属病院病棟地点で検出した埋葬施設の検討－」『東京考古』15

文京区教育委員会　2020『文京区史料集　講安寺文書（改訂版）』

本郷仏教会寺院誌編纂委員会編　1984『本郷の寺院　町と寺誌』

宮崎勝美　2016「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟 A 地点」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』研究編

医学部附属病院基幹整備外構施設等地点（HWK-6）の墓を蔵骨器を中心に考察する

大貫　浩子

はじめに

本地点の土地利用についてはすでに考察されている（宮崎 2016）。また本書研究編でさらに宮崎論考や成瀬論考により詳細に分析されている。本調査範囲北側は、元禄３年（1690）に講安寺から富山藩に貸し出された後に天保 14 年（1843）から弘化３年（1846）の間に返却され、弘化５年（1848）に興安寺と等正寺に分割して貸し出されたとされている。南側は講安寺墓域のままであった。明治 43 年（1910）に東京市用地として移転完了までは講安寺、興安寺、等正寺それぞれの墓域であった。移転に伴い改葬が行われているため改葬時に取り残されたものである。本地点の遺物は北側では富山藩邸の時期と興安寺墓域、等正寺墓域の時期に分けられ、南側は講安寺墓域のままであった。興安寺、等正寺の墓域であった時期はおおよそ 60 年間と限定されており、幕末から明治にかけての良好な資料と評価できる。本地点出土埋葬器の内、瀬戸・美濃系陶器壺や硬質瓦質蓋付壺を中心に幕末から明治期に掛けての様相を分類考察してみたい。また、既報告の医学部附属病院入院棟 A 地点の講安寺墓域とは地続きであったために、断りを入れ部分的に付け加えた（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）。

1. 火葬の背景について

本地点周辺の火葬場をみてみると、寛永年間（1624－1645年）、浅草下谷周辺に19箇所の火葬寺があったが、火葬の煙や臭いが将軍家菩提寺の寛永寺へ及ぶことを懸念し、将軍の命により小塚原に移転させたことが始まりとされる。明暦の大火（1657 年）以降、防災の観点から火葬場は江戸の郊外に移動集約されていった。その後、移転集約された火葬場は明治 10 年（1877）に小塚原共同火葬場となり、西洋式の火葬炉が導入されている。明治 19 年（1886）コレラの大流行で周辺住民からの異臭問題などによる火葬場移転嘆願により、明治 20 年（1887）4 月に日暮里に移っている。明治 20 年 6 月 旧東京博善株式会社創設。明治 26 年（1893）に火葬場５箇所が合併。「砂村」「亀戸」「代々木」「落合」「三河島村町屋」の火葬場が旧東京博善株式会社の傘下となり、旧東京博善株式会社が「日暮里火葬場」と合わせ６箇所の火葬場を経営することとなった。明治 37 年（1904）日暮里火葬場を廃止し町屋に合併されている（東京博善　Web サイト）。幕末から明治期にかけての火葬の歴史的背景を法令などからみていく。明治元年に明治政府が神仏分離令を出した。それにより仏教思想に基づく火葬が明治６年（1873）に禁止された。しかし、衛生面や墓地不足などから２年後に火葬禁止令は廃止される。成瀬論考では興安寺の過去帳の分析を行い年度ごとの土葬、火葬を数値化している。これによると調査範囲も含めた興安寺全体としては火葬は減っておらず、法令には従っていないことが分かった。２年後に撤回されたことが頷ける。また、火葬禁止令が廃止された時に伝染病で死亡した場合は火葬にすることを義務づけ、火葬後の遺骨をすべて持ち帰るように通達が出された。これ以降東京周辺では全部の骨を収骨する風習が定着したとされている。このことは骨壺の大きさにも関係すると考えられ、全身骨を納められるようなより大きな骨壺が必要とされた。今でも、関西方面は部分収骨で骨壺が小さく、東京周辺は全体収骨で骨壺が大きい。おそらく、明治政府の目の届く範囲にあった地域では全体収骨の通達が守られ、それ以外の地域ではそれまでのやり方が踏襲されたのではないだろうか。

2. 本地点について

本地点では、出土状況から火葬蔵骨器と推定される瀬戸・美濃系陶器べた底壺（TC-15-e）、壺（TC-15）、火葬蔵骨器の専用器と考えられる硬質瓦質蓋付壺（DZ-15-a）、硬質瓦質蓋付壺の器形に類似している陶器蓋付壺など合計 137 点出土している。この点数は表土や撹乱なども含む最大個体数である。また、甕棺として使用された常滑系陶器大甕。土器で土師質や瓦質の火消壺。柿釉に灰釉が流しかけられている瀬戸・美濃系陶器壺・甕（TC-15-b）なども出土している。本地点の墓は改葬されており取り残された物ではあるが、すでに出土人骨の分析鑑定は行われている。成人 62、未成人（＞５歳）11、未成人（＜５歳）27。男性：女性は 27：21。江戸市中の遺跡と比べると性比が小さく女性の比率が高いとされている。また分析が行われた人骨以外にも、分析できない火葬骨が蔵骨器の中から検出されている（近藤　他

2016)。類似資料はすでに江戸遺跡である崇源寺・正見寺跡（宗教法人明治神宮・大成エンジニアリング 2005）によって報告されており、それらも参考にしつつ本地点の遺物をみていきたい。

3. 蔵骨器

本地点の墓は改葬されており、内部のみを回収し蔵骨器自体は廃棄され投げ込まれたような状態で出土しているものも多い。層位的に押さえることができなかったため、形態のみから分類をした（1、3 ～ 5 図）。出土状況から火葬蔵骨器と推定される瀬戸・美濃系陶器鉄釉有耳べた底壺（TC-15-e）が 2 点、瀬戸・美濃系陶器灰釉有耳壺（TC-15）が 14 点。図化されていないものが 18 点。瀬戸・美濃系陶器鉄釉壺（TC-15）5 点。火葬蔵骨器の専用器と考えられる硬質瓦質蓋付壺（DZ-15-a）が 44 点。図化されていないものが大形 29 点、小形 22 点。出土状況から火葬蔵骨器と思われる壺が 6 点。図化されていないものも含めると約 140 点が出土している。

3.1 瀬戸・美濃系陶器 （TC-15-e）（TC-15）

瀬戸・美濃系陶器壺は鉄釉と灰釉の 2 種類に大きく分けられ、鉄釉は四耳壺と無耳壺の 2 種類、灰釉は二耳壺と三耳壺の 2 種類が出土した（1 図）。これらを、分類分析していきたい。実測図体部内面の数字は出土遺構番号である。

鉄釉壺四耳壺（1、2）は 2 点で。口縁部の折り返しが小さく、胴部最大径と底部径の差があまり無い。底部立ち上がり際や底部際にシャープなケズリが施される。底部には重ね焼痕がみられる。

灰釉壺（3 ～ 16）は 14 点で、3 点が二耳壺、11 点が三耳壺であった。いずれも口縁をしっかりと折り返している。二耳壺は三耳壺に比べ小振りで 3 は最大径が広く、底部立ち上がり際にケズリがみられる。4、5 は底部にかけて窄まるタイプで平底、調整により糸切り痕を消している。三耳壺は、6 は鉄釉の四耳壺の器形に近く胴部最大径と底部径の差があまり無い寸胴タイプである。内面から観察すると底部中央に穴が開いており外側から粘土を補強していることが解った。底部は外面からみると中央部分を指で押しており、窪んだようになっている。7、8 はわずかに高台がみられる。7 は最大径から底部までがやや丸みを帯びており、高台をわずかに削り出している。8 はわずかに高台を削り出し、中心部に糸切り痕を残す。この底部の作りは、美濃系陶器付け掛け灰釉徳利の肩の張るタイプに類似している。9 ～ 16 は最大径から底部にかけて窄まるタイプで平底である。9 は糸切り痕を指でなでるように消している為、平底ではあるが指痕が残る。10、11 は調整により消そうとしているが糸切り痕が全体に残る。12、13 は調整により糸切り痕を消しているが､中心部にはまだ糸切り痕が残っている。14 ～ 16 は調整により糸切り痕を消している。灰釉の二耳壺、三耳壺共に底部に重ね焼痕はみられない。これは口唇部の形態差や口縁部釉の拭き取り状態の違いによるものであろう。9、13、14、16 の内面には重ね焼き痕がみられ、丈の高い細いものを中に入れ焼いていたと思われる。

本地点で出土しているものはいずれも長胴形で、器形の類似性からも鉄釉の四耳壺 1、2 と灰釉の三耳壺 6 は近い時期と考えてよいであろう。灰釉の三耳壺が鉄釉の長胴形四耳壺を模倣しているようにみえる。鉄釉の長胴形四耳壺は底部のケズリや作りが精緻であるが、灰釉の長胴形三耳壺 6 は穴の開いた底部を補強するような粗雑な作りで歪んでいる。また、口縁部の釉の拭き取り方など技法の違いもみられ、胎土も異なる為、異なる窯で作られた物であろう。灰釉の長胴形三耳壺 8 の底部は瀬戸･美濃系陶器付け掛け灰釉徳利の肩の張るタイプに類似しており、13 ～ 16 の平底で糸切りを消しているものよりも先行していると考えられる。

下段は転用器と考えられる、耳の付かない鉄釉壺（17 ～ 20）である。口縁部上端を折り返しており、高台を削り出している。

次に蓋から年代観を推察してみたい。1 ～ 21 までの壺には遺存状態が良く、蓋をされたままの状態で確認されたものが 7 点ある。壺蓋が乗せられているものと皿が乗せられているものが確認された。6 の灰釉寸胴タイプには摘まみのある鉄泥壺蓋が、3、12 には無釉の摘まみが退化した壺蓋が、14、17、18 には灰釉が口縁部に 1 周し中央部に丸い点が付けられている輪禿皿を模したような皿が、4 には油受け皿が乗せられていた。壺蓋から摘まみの退化した壺蓋へ、次に簡略化し皿を代用するようになったのではないかと考えられる。乗せられた蓋から三耳壺をみてみると 6 → 12 → 14 となったのではないか。つまり下段の 17、19 は 14 と同時期であると考えてよいであろう。また、皿を蓋の転用器として使っていることから、4 も同時期と推定している。

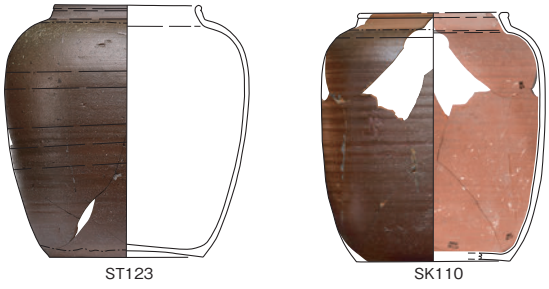
崇源寺・正見寺跡では、1、2 は鉄釉の長胴形四耳壺で E 類、3 ～ 16 は灰釉の長胴形三耳壺、双耳壺で F 類ともに年代は 19 世紀前半～後葉に比定されている。また、鉄釉・灰釉の壺については美濃地方笠原の稲荷窯・念仏窯、多治見市の白子窯・水神窯などから同様な製品

１図　瀬戸・美濃系陶器壺　S=1/6

が出土していることから美濃産ではと推定している。

灰釉の三耳壺は近世美濃窯編年の連房Ⅴ期 a 高田白粉窯式に記載されている。連房Ⅴ期 a は 1840 年頃から 1870 年頃とされている（瀬戸市教育委員会 1990）。灰釉の長胴形三耳壺､双耳壺は美濃産と考えて良いであろう。

鉄釉の四耳壺は今までの研究から口径が大きく背の低いタイプから変遷してきたことは知られている。今回出土した、長胴形の壺は瀬戸地方下半田川村かみた第 1・第 2 窯から 1，2 に類似の鉄釉四耳壺が採集されている（藤沢 1989）。また、蓋も糸切り痕未調整の平底で摘まみはロクロで挽き出されている同様の壺蓋が採集されている。実物を確認できず、採集品であるので想定にとどめておく。また、瀬戸地方尾呂でも飴釉や黄釉の平底で口縁端部が折り返されて玉縁状になる有耳壺が出土している（瀬戸市教育委員会 1990）。底部にかけてのへらケズリなど類似性が感じられるが、本地点出土の胴部最大径と底部径の差があまり無い三耳壺（3）の系譜は不明である。他にも出土状況から蔵骨器と考えられる陶器壺が出土している。瀬戸・美濃系陶器柿釉灰釉流壺や次に分類する硬質瓦質蓋付壺の器形に近い壺である（2 図）。



2 図　硬質瓦質蓋付壺の器形に近い陶器蔵骨器（S=1/6）

3.2 硬質瓦質蓋付壺（DZ-15-a）

硬質瓦質蓋付壺（DZ-15-a）は報告書掲載が 44 点、他に報告書未掲載が大形 29 点、小形 22 点確認できた（3 ～ 5 図）。全体総数は 95 点を超える。報告書未掲載資料のうち表土や撹乱など位置の確定できないものは、分析時の個数に含めていない。内部に焼骨、灰が残され鉄線で蓋を縛ったと思われる鉄錆が十字にこびりついている状態のものも何点か出土している。本地点の墓は改葬されているが、改葬時に中の焼骨や灰のみを回収し、容器である硬質瓦質蓋付壺の多くが投げ込まれたような状態で出土しており層位的に抑えることができなかった。そのため、形態のみから分類をした。また、蓋の形態差についても、明らかに蓋とセットである状態のものが少なく断念した。表面の成形は、ミガキのみのものが多いが地文が入るものがみられる。体部内面の数字は出土遺構番号である。

底部立ち上がり際に工具によるケズリについての有無に注目してみたところ、ミガキのみのものは底部のケズリが顕著であるが、回転押捺による縮れ文の地文様が入るものは､底部のケズリが顕著ではないものが多かった。恐らく地文様を入れる際に自然に滑らかになってしまったのではないか、意識して行っているわけではないので残っているものもあるのではないか。

3.2.1 分類

頸部立ち上がりのない器形を 3 とし、これらを除きグラフを作成し分類を行った。縦軸に胴部の最大径から最小径を引いたもの、横軸に最大径を入れグラフを作成した（6 図）。底部の面取りは外形の大きさ以上に小さい数値になってしまうため面取りの上部の数値とした。頸部の立ち上がりのあるものは大形、小形に分類できた。大形のものは 1 とし、a ～ c に分類した。また小形のものは 2 とした。図版の k 印は、医学部附属病院入院棟 A 地点の講安寺墓域出土資料を参考に載せたものである。

1a　頸部立ち上がりのあるもの。大形。最大径と最小径の差が大きく 最大径は上部に位置し、底部にかけてすぼまっている。この中でも径の大きいものと小さいものに分けられるが細かく分けると煩雑になるため同一グループとし 1a1、1a2 とした。最大径の大きいものは 21.0cm、小さいものは 16.9cm である。径差は 4.1cm である。外面に文様の付くものが多い。

1a1　最大径の小さいもの

1a2　最大径の大きいもの

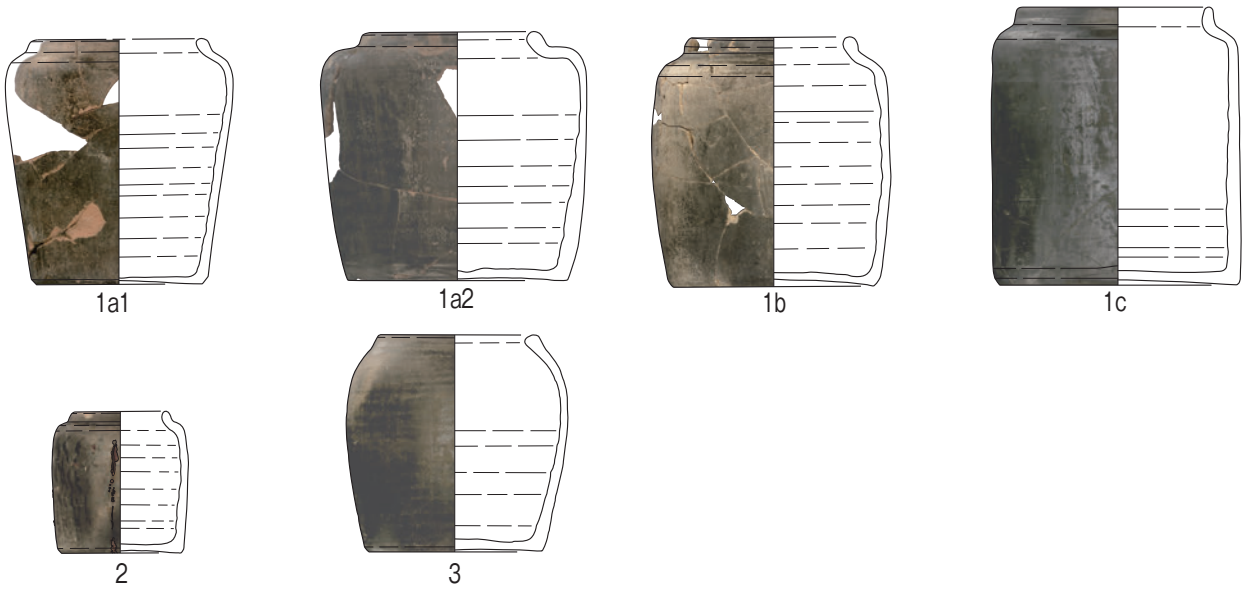
1b　頸部立ち上がりのあるもの。大形。a と c の中間に位置するもの。強くナデるように整形され丸みを帯びたようになっているものが多い。

1c　頸部立ち上がりのあるもの。大形。最大径と最小径の差が小さく寸胴なもの。径差は 1.6cm でかなり均一である。底部にケズリを持つものもある。

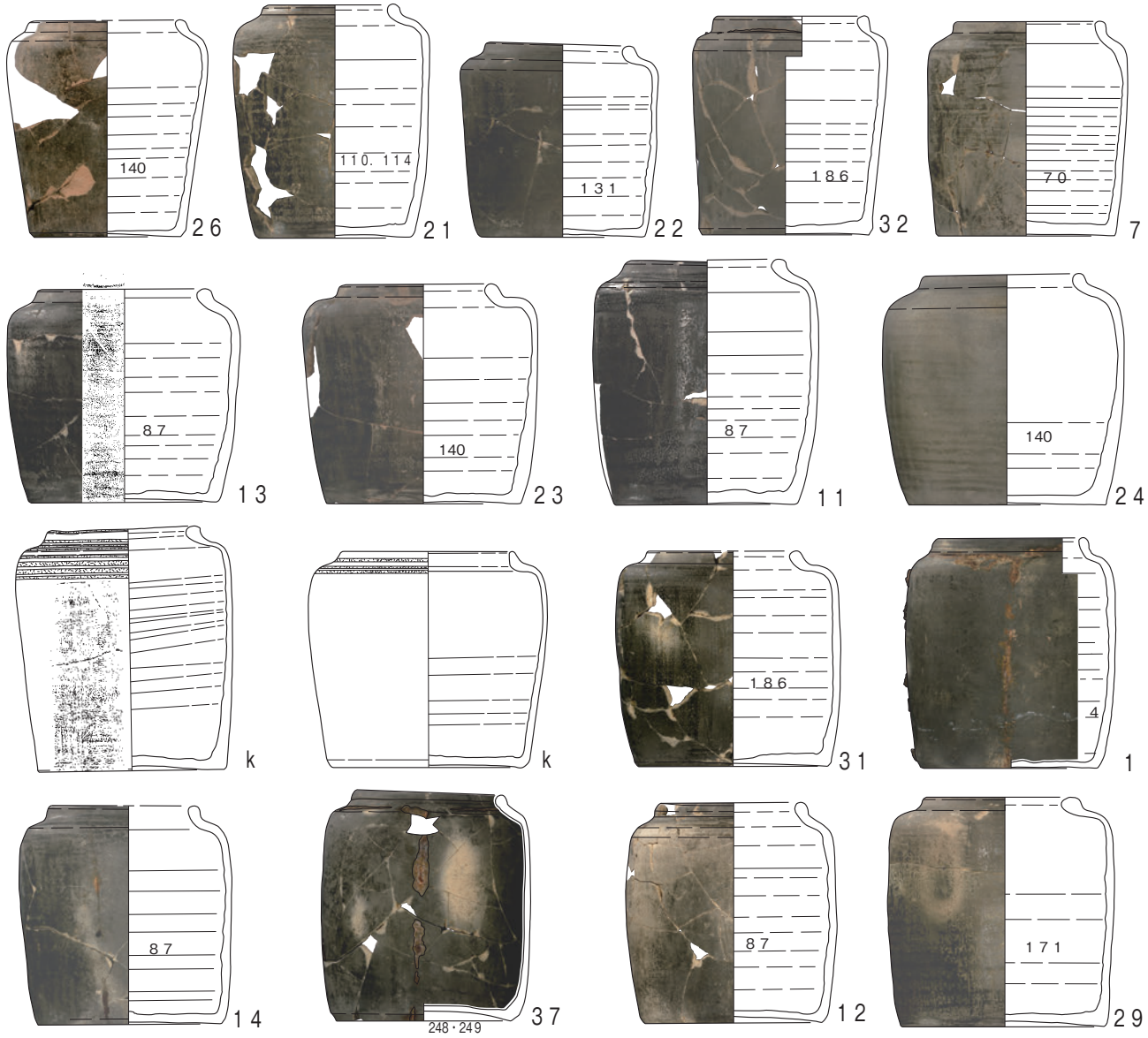
2　頸部立ち上がりのあるもの。小形。器形は b、c で a の小形のものはなかった。乳児骨用または分骨器などが想定されている。

3　頸部立ち上がりのないもの。

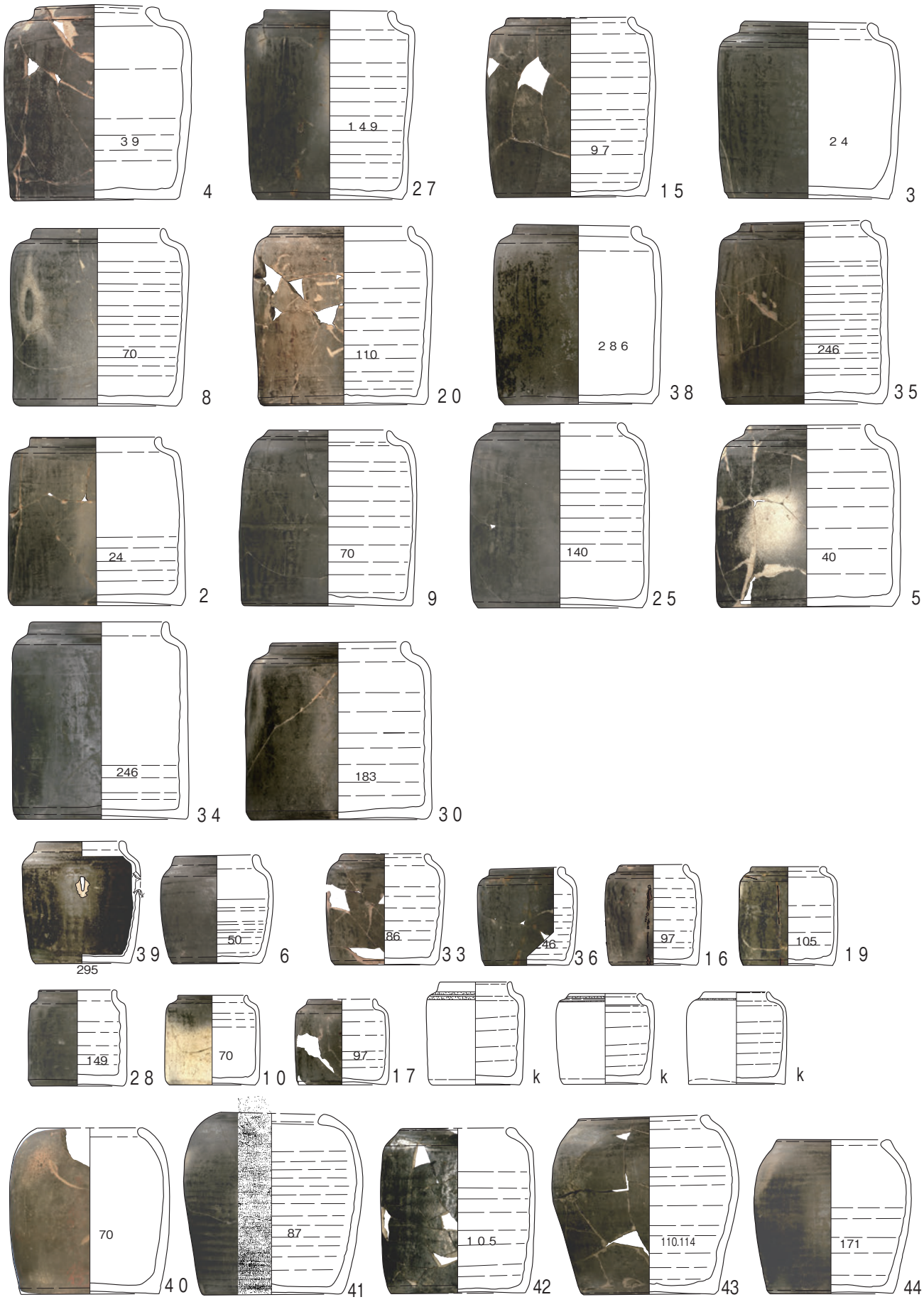
大形と小形に関しては小形がグラフ左側にまとまり明瞭に分けることができた。最大径と最小径の差が大きい 1a は、上部に多く右上に最大径の大きい 1a2 がまとまった。1c は寸胴形のものが右下方にまとまった。その中



３図　硬質瓦質蓋付壺の分類

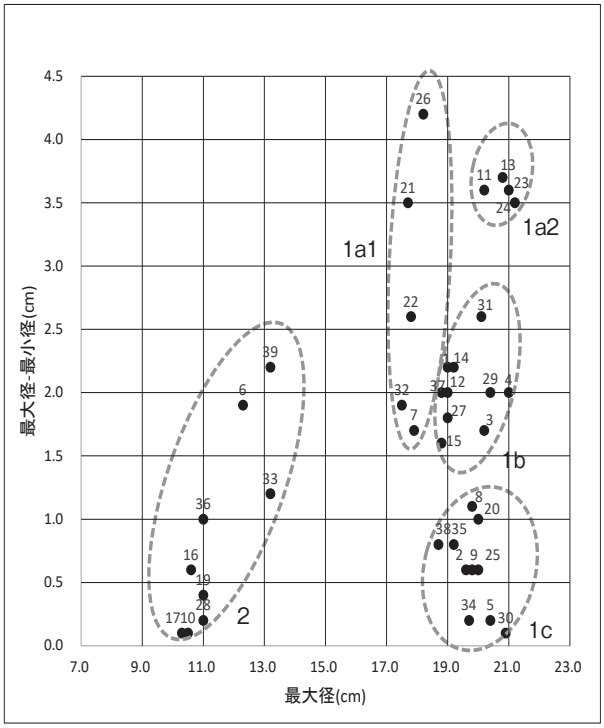


４図　硬質瓦質蓋付壺 (1)　S=1/6



5図　硬質瓦質蓋付壺 (2)　S=1/6

間のものを 1b とした。それぞれに傾向としてはまとまりはしたが、1 の abc に関しては漸移的に変化を遂げており明瞭に分けられてはいない。



６図　硬質瓦質蓋付壺器形分布図

これらの分類は形態のみの分類で層位的に確認することができなかったため、個別の手による差違なのか、年代的に変遷するものかは明らかにすることができなかった。また、今回分類した 1a、1b はそれぞれの寺域からの出土がみられるが 1c は講安寺では確認できなかった。これらから二つのことが考えられる。一つは、いずれの形態も同時期に作られ、製作集団の差である。もう一つは、それまで使用していた、瀬戸・美濃系陶器壺に近い形態の細身で底部径の小さいものから次第に寸胴形の大形のものになっていったとする考えである。明治 8 年（1875）の全体収骨の通知により寸胴で径のより大きいものに変化していったとの想定ができる。1c の器形は現代にも通ずる器形であると考えている。想定のように細身の底部径の小さい物からより寸胴で径の大きい物に変化していったと考えた場合、明治 8 年頃には最終段階まで変化していたことになる。そのように考えた場合、明治期以降と考えられている硬質瓦質の蔵骨器はもう少し早い段階から出現していたのではないか。器形が変化したとしても非常に短期間に変化をしたことが考えられる。瀬戸・美濃系陶器壺と硬質瓦質蓋付壺（DZ-15-a）はしばらくの間両方が使われ、明治 8 年頃には硬質瓦質蓋付壺（DZ-15-a）に集約されていったのであろう。層位的に出土している状況ではないため今後の調査の成果に期待したい。

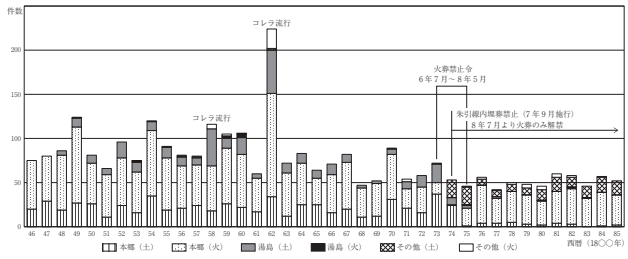
4、寺域からの分析

宮崎論考や成瀬論考で絵図や図面の分析により 3 つの寺の寺域が推定された。また、興安寺に残された過去帳元和 6 年（1620）から明治 18 年（1885）の分析検証も行っている。これらの推定された寺域や埋葬数を参考とした。

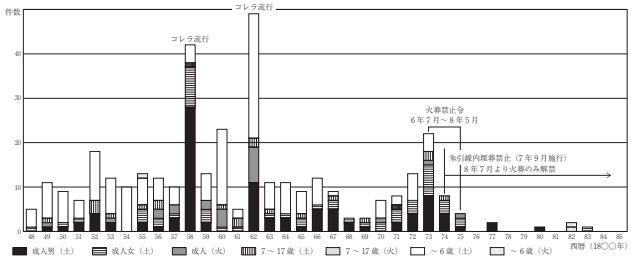
常滑系陶器大甕は惟村忠志氏により A 類から G 類に分類されている（惟村 1997）。本地点では E 類から G 類が出土している。E 類は頸部が「く」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっている。F 類は頸部が「コ」の字状にくびれ、口縁部が平坦になっている。G 類は胴上部にリンズが巡る。本地点北側では E 類は出土しておらずほとんどが F 類で、E 類は南側の 1 点のみの出土である。19 世紀前半頃までと考えられているが、南側には講安寺墓域があったとされており、早い段階から墓域として使用されていた南側のみで E 類が出土していることは、墓域の使用状況に合致している。また、本地点講安寺墓域と連続している医学部附属病院入院棟 A 地点の講安寺墓域からは一段階前の D 類から G 類が出土している。

成瀬論考では借地したと考えられている弘化 3 年（1846）以降の興安寺過去帳を基に、被葬者を埋葬された墓地ごとに興安寺と講安寺借地（本地点）として区別し、年ごとに土葬と火葬に分けグラフを作成している（7 図）。

過去帳からは、講安寺借地墓地では明治 8 年（1875）



23 図　興安寺過去帳にみる埋葬場所



24 図　興安寺過去帳にみる講安寺借地墓地被葬者相

７図　研究４成瀬論考より転載

頃を境に埋葬件数が減少し、その後十年間にわたり数件の埋葬が行われたのみであることが解った。明治 18 年以降の過去帳はなく、この後もこのような状態が続いたのではないかと想定されている。この間に記載されている埋葬は土葬 347 件、火葬 18 件である。今回の調査範囲は 3 寺の墓域の一部で、数値の直接活用は難しいが、推定された寺域ごとに瀬戸・美濃系陶器壺と硬質瓦質蓋付壺の数を検討した。大形土坑で寺域がまたがったものは 0.5 とした。講安寺借地興安寺墓地が瀬戸・美濃系陶器壺 7.5 点、硬質瓦質蓋付壺大形 24 点小形 9 点、合わせて 40.5 点。講安寺借地等正寺墓地が瀬戸・美濃系陶器壺 11.5 点、硬質瓦質蓋付壺大形 16 点小形 4 点、合わせて 31.5 点。講安寺墓地が瀬戸・美濃系陶器壺 1 点、硬質瓦質蓋付壺大形 2 点小形 0 点合わせて 3 点。講安寺借地興安寺墓地のうち本調査区域に含まれるのは全体の 1 ／ 3 ほどの面積と推定される。過去帳の火葬の記載は 18 件であるので大まかに 3 分の 1 だとすると 6 件ほどになってしまう。これに対して蔵骨器が 40.5 点出土している。過去帳に記載されていない火葬墓が数多くあったことが想定される。講安寺借地興安寺墓地と講安寺借地等正寺墓地の蔵骨器の数を比較してみると、瀬戸・美濃系陶器壺蔵骨器の数は講安寺借地等正寺墓地で 11.5 点、講安寺借地興安寺墓地では 7.5 点で面積比で比べると倍以上の火葬が行われていることがわかる。しかし、硬質瓦質蓋付壺では、あまり変わらなくなる。宗派的な理由か敷地に余裕があったためか講安寺墓域は火葬の比率が低い。

江戸時代には 3 度のコレラの大流行が確認されており、文政 5 年（1822）・安政 5 年（1858）・文久 2 年（1862）とされている。安政 5 年（1858）・文久 2 年（1862）ともに埋葬数は大幅に増えている。3 度目の流行である文久 2 年（1862）には麻疹の流行も加わりより多くの人が亡くなったとされ、安政 5 年（1858）と比べても多くの埋葬が行われていることがわかる（7 図）。疫病流行時には推奨された火葬が講安寺借地興安寺墓地において安政 5 年（1858）、文久 2 年（1862）ともに火葬が行われていない。一方で、興安寺においては安政 5 年（1858）には埋葬数 169 件の内 51 件、文久 2 年（1862）には埋葬数 151 件の内 117 件もの火葬が行われている。講安寺借地興安寺墓地と興安寺境内墓地の使い分けが行われていたことは想像できる。安政 5 年（1858）「安政頃痢流行期」には火葬場の混乱ぶりが記載されており、火葬場が不足していたことがわかっている。この状況はこれらを裏付けるものであろうか。すでに報告（惟村 1998）されているが、「荼毘室混雑の図」（8 図）の挿絵があり、そこに蔵骨器が描かれている。蔵骨器は耳が付き被せ蓋ではない蓋が乗せられている。長胴形の瀬戸・美濃産陶器壺であろう。黒い壺が鉄釉壺、灰色の壺が灰釉壺なのではないだろうか。この時期には、8 割ほどが灰釉有耳壺になっているのであろう。

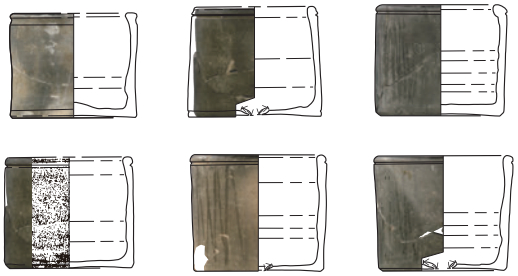
蔵骨器は元々様々な器が使われており、地域によっても使用されている蔵骨器は異なっている。コレラにより大幅に火葬が増えた際にもより様々なものが蔵骨器として使われている。春桃院跡遺跡からは瓦質と土師質の火入れを蔵骨器として転用しているものが出土している（国際文化財株式会社 2023）。その 1 つには底面に墨書で「コロリ」の記載があり、コレラ流行時に使用されたことがわかっている。本来蔵骨器として使用するならばやはり壺形のように口縁部が窄まっているものや蓋のできるものが使用し易いのであろう。本地点 SK173 からは同様の瓦質の火入れが 13 点まとまって出土し一部は植木鉢に転用されている（9 図）。東京大学本郷構内の遺跡の他地点からは、まとまってこのような火入れが出土したことはなく、特異な状況であった。この先は全くの推測であるが、コレラ流行時に蓋がなく小振りで本来ならば使用しづらい火入れを蔵骨器として使用する目的で購入していたのかもしれない。

まとめ

本地点の墓は改葬されており、改葬時に中の焼骨や灰のみを回収し、蔵骨器の多くが投げ込まれたような状態で出土している。そのため、層位的に押さえることができず、形態のみから分類をした。しかし、少しずつ共伴関係などから年代を確定できるものも出てきている。

本地点で蔵骨器として使用されている瀬戸・美濃系陶器灰釉有耳壺でほぼベタ底であるがわずかに高台がつけられているタイプが、情報学環・福武ホール地点の上限を安政 4 年（1857）としている SK10 遺構で、他の化粧関連道具とともに出土している（10 図）（成瀬 2017）。お歯黒の材料の鉄奨水の製造容器と推定されている。東京大学本郷構内の遺跡の他地点では、いままでも墓域以外の地点から瀬戸・美濃系陶器灰釉でほぼベタ底の有耳壺は数は多くないが出土は認められていた。しかし、用途を限定することはできなかった。この調査地点では明らかに蔵骨器以外の使用が認められ、専用器ではなく生活の中で使用されていたことが分かった。この壺は、本地点の 1 図 -8 に類似しており同様の年代に位置づけられる。このように、一つずつ年代を明らかにしていきたい。

８図　　天保五年「頃痢流行期」国立国会図書館デジタルコレクション部分



９図　瓦質火入れ (S=1/6)

10 図　情報学環・福武ホール地点出土化粧道具部分
「赤門展」(S=1/6)

硬質瓦質蓋付壺（DZ-15-a）はかぶせ蓋で、専用器ではないかと考えている。このため共伴関係などからの推定が難しい。他遺跡の墓の移転時期などから、年代が明らかになっていくことを期待したい。

長い間資料を抱えており、出すことができませんでした。報告書が出るこの機会に、中途半端ではありますが出させていただくことにしました。両角まり、成田涼子、惟村忠志、江戸遺跡研究会墓グループの皆様。ほか多くの方々に御教授いただきました。御礼申し上げます。

【参考文献】

国際文化財株式会社　2023『春桃院跡遺跡・善福寺寺域跡遺跡発掘調査報告書』

惟村忠志　1997「近世常滑大甕の編年と窯業画期素描」『牟邪志』第 8 号

惟村忠志　1998「江戸の火葬墓をめぐる諸問題」『東京考古』16 東京考古談話会

近藤　修・佐宗亜衣子・石井理子・佐々木智・荒牧友美　2016「東京大学構内遺跡講安寺墓域（2 区／ HWK-6）より出土した江戸時代人骨」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』研究編

瀬戸市教育委員会　1990『尾呂』

宗教法人明治神宮・大成エンジニアリング　2005 『崇源寺・正見寺跡』

東京大学埋蔵文化財調査室　2016『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』報告編（第 5 分冊）

東京博善　https://www.tokyohakuzen.co.jp/anniversary/history01/　（参照 2024-3-30）

成瀬晃司　2017「奥女中の暮らし」『赤門　溶姫御殿から東京大学へ』東京大学出版会

藤沢良祐　1989「本業焼の研究（3）」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ

宮崎勝美　2016「江戸時代の文献・絵図史料からみた入院棟 A 地点」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』研究編

副葬品としての人形・玩具

小林　照子

はじめに

本稿では、医学部附属病院基幹整備外構施設等地点（以下 HWK-6 地点）と、医学部附属病院入院棟 A 地点 2 区（以下 HW2 区）の埋葬遺構を対象とし、埋葬施設、被葬者、副葬品の様相を概観する。その上で、副葬品としての人形・玩具について、若干の考察を行いたい。

HWK-6 地点、HW2 区は、講安寺境内北西部に位置している。講安寺は慶長 11 年（1606）に湯島天神下に建立し、元和 2 年（1616）に現在地に移転した。その後明治 36 年（1903）に墓地郊外移転奨励策をうけ、明治 43 年（1910）に巣鴨庚申塚に移転する。ＨＷＫ -6 地点とＨＷ 2 区の南域は、この期間を通して講安寺境内の一部であったが、両地点の北側は、元禄 3 年（1690）に富山藩の借地となり、天保 14 年（1843）頃に富山藩から返却された後、ＨＷＫ -6 地点の北側は弘化 5 年（1848）に興安寺と等正寺の借地となっている（本誌研究 1 参照）。

1. HWK-6 地点の埋葬施設と被葬者

両地点から出土した人骨は、東京大学大学院理学系研究科の近藤修氏らによって、詳細な分析が行われている（近藤ほか 2016）。これらのデータを用いて、埋葬施設、被葬者、副葬品の関係をみていきたい。

HWK-6 地点では埋葬遺構 127 基、出土した人骨の最小個体数 103 体、HW2 区では埋葬遺構 55 基、出土した人骨の最小個体数 43 体が確認されている。

（1）埋葬施設の種類

HWK-6 地点、HW2 区で確認されている埋葬施設の種別と割合は下記の通りである。（1 図）

HWK-6 地点

木棺（円形木棺、方形木棺）：47％、甕棺：24％、蔵骨器（灰釉壺、鉄釉壺）：8％、瓦質蔵骨器：6％、火消壺棺：5％、土師質蔵骨器：6％

HW2 区

木棺：43％、甕棺：14％、蔵骨器（灰釉壺、鉄釉壺）：4％、火消壺棺：14％、瓦質蔵骨器：7％、不明：20％

両地点とも木棺の遺存状態は悪く、木質部はほぼ残存していない。火消壺棺、蔵骨器の多くと、瓦質蔵骨器の殆どは、覆土中に複数廃棄された状態で確認されている（本誌研究 5 参照）。

（2）被葬者の性別、年齢割合

被葬者の性別・年齢比を 2 図に示した。

性別割合は、HWK-6 地点は男性 25％、女性 21％、HW2 区は男性 28％、女性 22％で、HW2 区は HWK-6 地点に比べ、若干女性の比率が低い。

年齢比率は HWK-6 地点は成人 58％、未成人 33％、HW2 区は成人 93％、未成人 7％で、HW2 区の被葬者はほぼ成人である。

被葬者の年齢分布図（3 図）をみると、ＨＷＫ -6 地点の中でも、Ｂライン以北に未成人が多いことがみてとれる。

2. HWK-6 地点の埋葬施設、被葬者、副葬品の関係

（1）埋葬施設、被葬者、副葬品の関係

副葬品は①数珠、②銭貨、③簪・笄、④義歯、⑤煙管、⑥ミニチュア、⑦人形、⑧ぶら人形、⑨その他の 9 種類に分類した。その他に含めたのは、碗、徳利、瓶、摺鉢など陶磁器類、ボタンなどの着装品である。

両地点とも多くの埋葬遺構は改葬後の状態であるため、副葬品、埋葬施設、被葬者の対比は難しい。埋葬遺構 1 基につき被葬者が 1 名検出された遺構 65 基を対象とし、埋葬施設、被葬者、副葬品の出土割合を示したのが 4、5 図である。副葬品は主に甕棺墓、木棺墓から出土している。後述するが人骨が出土していないため、比較対象ではないが、火消壺棺からの副葬品出土例もみられる。

年齢別出土割合をみると、数珠、義歯、簪・笄は成人のみ出土、煙管は成人が多く、未成人の出土例があるが、6 才以上の未成人であり、5 才未満の乳幼児ではみられない。ミニチュア、人形は未成人がやや多く、ぶら人形は同数である。その他とした碗、徳利、瓶等はほぼ成人の被葬者の埋葬遺構から出土している。

文献、絵画資料などから、江戸時代は性別に関係なく喫煙率が高かったことは知られており、就労年齢が低

かった江戸時代では、比較的早いうちから喫煙の習慣を持つ者もいた。また六文銭が三途の川の渡し賃と考えられた事と相まり、銭、煙管は死出の旅路の旅支度との意義づけも考えられる。

(2) 副葬品の出土状況

次に、副葬品の出土状況をみてみたい。

ST176 は掘方の形態から円形木棺と推定される。被葬者は成人女性で、南を向き、両手を胸のあたりで合わせ、あぐらをかいたような姿勢で埋葬されている。足の間に「∧」「叶」の釘書がある五合徳利が確認されており、徳利を抱える状態で埋葬されたと考えられる（6 図左）

ST27 は火消壺棺である。人骨は確認できなかったため、上記の分析対象とならなかったが、内部から熊乗り金太郎の人形が出土している。火消壺棺は子供の棺とされており（中山 2017）、人形は被葬者と一緒に棺に納められたと思われる。(6 図中)。

ST2584 の被葬者は成人男性である。甕棺の掘方から猫の土人形が出土している（6 図右)。この猫の土人形は A-2 類で、18 c 後葉～ 19c 前葉の遺構から出土している（小林 2022)。

(3) 副葬品出土分布

副葬品の出土状況は、HWK-6 地点 B ライン付近北側で密度が高く、HWK-6 地点 B ライン以南及び HW2 区墓域では密度が低い。

前者は弘化 5 年（1848）に興安寺と等正寺に貸し出されてから、墓地としての使用が開始されている。後者は、一部は富山藩借地に含まれる可能性があるが、一貫して講安寺墓地として使用されてきた。5 才未満の未成人は、前者に集中しており、寺社による檀家層の差異および、墓地の使用年代に関わる様相を呈しているといえよう。

3. 副葬品としての人形・玩具

ここからは墓に伴う人形・玩具について、考察を行いたい。

江戸遺跡研究会では 2007 年以来、28 年ぶりに江戸時代の墓をテーマとする大会を行い、それに併せ、1967 年から 2020 年度までに刊行された報告書を対象とした、朱引き内における江戸の墓の集成を行った（江戸遺跡研究会 2024)。この資料を用い、ミニチュア、ぶら人形、ぶら人形以外の土人形（以後「人形」）の副葬品としての様相をみていきたい [(1)]。対象としたのは未改葬で被葬者が一人の単葬墓である。

(1)　時期的様相

まず、時期別に主な出土事例を列記し、その概要に触れる（7、8 図)。

17 世紀前～後葉

中央区八丁堀三丁目遺跡（八丁堀三丁目遺跡（第 2 次）調査会 2003）614 号遺構は円形木棺墓で、被葬者は乳児、埋葬年代は寛永 13 年（1636）～明暦 3 年（1657）頃とされる。副葬品は、数珠、人形（木製)、古寛永銭、ミニチュア碗（銅製)、瓶（磁器製）が出土している。人形は木製のものだけである。

17 世紀後葉～ 18 世紀中葉

墨田区法恩寺遺跡（ジェイレックス・コーポレーション 2019）550 号遺構は円形木棺墓で、被葬者は乳児、埋葬年代は 17 世紀末～ 18 世紀中葉とされる。副葬品はミニチュア碗（磁器製)、模造刀、人形－動物、人物、ミニチュア桶（木製)、鯛抱きエビス（土製）が出土している。鯛抱きエビスは京都系である。

大田区池上本門寺（池上本門寺奉賛会 2002）細川家清高院殿墓所は、石室墓で被葬者は熊本藩二代細川光尚の側室清高院殿妙秀日圓大姉、没年は宝永 7 年（1710）である。石室内に納められた脇息内から土製の人形類が 39 点確認されている。人形類は高さ 1 ～ 3cm 程度で衣装を着けた非常に精巧なもので、香道で用いる盤物と思われる。

18 世紀後葉～ 19 世紀前葉

新宿区正見寺跡（宗教法人明治神宮 2005）589 号墓は円形木棺墓で、被葬者は 3 才の幼児、埋葬年代は 18 世紀中葉～後葉とされる。木棺蓋上から折敷（木製)、人形（土製)、木棺蓋下からは数珠、直方体木製品、上面に「大御供　御直会　御師　椿叟太夫」の墨書がある曲物の蓋（木製)、人形（土製)、ポッペン（ガラス製）が出土している。

新宿区崇源寺跡（宗教法人明治神宮 2005）346 号墓は方形木棺墓で、被葬者は 2 才程度の幼児、埋葬年代は 18 世紀後半以降とされる。副葬品は秉燭（土製)、仏花瓶（磁器製）のほか、ミニチュアの碗、皿、風炉、土瓶、釜、狆抱き、ぶら人形、天神、牛（土製)、木刀、櫛、直方体木製品（木製）が出土している。

19 世紀前葉～幕末

新宿区宝泉寺跡（ハウジングトラスト株式会社 2019）117-2 号遺構は甕棺墓で、被葬者は壮年男性である。副葬品は棺内から人形 6 点、ミニチュアの摺鉢 1 点（土製）が出土している。

港区湖雲寺跡遺跡（株式会社パスコ他 2021）454 号

遺構は円形木棺墓で、被葬者は熟年男性、埋葬年代は位牌の記念銘から安政 2 年（1855）とされる。木簡内には榁が充填されており、副葬品は棺内から銭貨、直方体木製品、覆土内から呪符かわらけ、ミニチュアの鉢（土製）、位牌（木製）が出土している。

港区湖雲寺跡（同 2021）1566 号遺構は木槨甕棺墓で、被葬者は大岡 6 代藩主の嫡男で 6 才前後の大岡久弥、没年は文政 8 年（1825）である。副葬品は 407 点と多量で、木槨内からミニチュア、遊具（土製）、硯、碁石（石製）、櫛他（木製）、甕棺内から模造刀、人形、扇子、数珠等（木製）、人形、ミニチュア（土製）等が出土している。

人形・玩具を伴う墓が増加し始めるのも、おもに 18 世紀中葉以降であるが、それ以前にも、木製の人形、磁器製、金属製のミニチュア器物が、副葬品として用いられていることが、出土事例から確認することができる。

また、17 世紀代では、個人の持ち物が副葬品としてみられるのは、身分や階層が高い被葬者の墓が中心であったが、18 世紀以降では身分・階層に関わりなく、個人の持ち物がみられるようになり、身分や階層が高い被葬者は副葬品の量が多い傾向にある（谷川 2004）。

（2）年齢別出土割合

子どもの墓に多くみられるとされる人形・玩具だが、種別に年齢別出土割合をみると異なる結果がみえてくる（9 図）。

ミニチュアを伴う墓は成人 29％、未成人 56.5％で、未成人が成人の約 2 倍と優位であるが、人形を伴う墓は、成人 40.7％、未成人 46.5％と、未成人が成人を若干上回る程度で未成人の優位はさほど認められない。ぶら人形を伴う墓は、成人 59.6％、未成人 22.1％であり、成人が未成人の約 3 倍と、未成人を大きく上回っており、その半数は男性である（10 図）。

（3）　ぶら人形の出土状況

ぶら人形とは、前後型合わせの頭と胴部に、手捻りの手足を布等で胴部に貼り付け可動式にした手足をもつ、幼児の人形である。裸人形、またはただの人形と呼ばれた。裸で紙を巻いた状態で売られ、家庭で服を拵え着せて持ち遊ぶ愛玩人形である。

ぶら人形は墓から出土する例が多数みられるため、葬送習俗に関する人形として報告されたこともあったが、その後、町家や武家屋敷などからの出土例が増加し、埋葬専用の人形ではないとの理解が広まった。しかし墓から出土する人形の中で、ぶら人形が他の人形より出土頻度が高いことは、共通の認識となっている。

出土する被葬者階層

HWK-6 地点では ST88、ST147、ST160、ST224、ST265 から出土している。ST147、ST265 は調査区北西側に位置する遺構で、被葬者に商人層が多いとされる興安寺の墓所と推定されている。

長岡藩主牧野家墓所（東京都港区教育委員会 1986）15 号墓は牧野家の子女合葬墓である。基壇地下の埋葬施設は数重に配した板石の下部に、3 基の甕棺が配置されており、15-1、15-3 からぶら人形が出土している。15-1 の被葬者は乳幼児で、棺内から、土人形 3 点、鈴 3 点、数珠、漆塗りの方柱状木製品が出土している（11 図）。

ぶら人形は、粗製の三つ折れ人形との解釈があるが（加納 1989）、ぶら人形を伴う墓の被葬者階層に偏りはみられない。

人形の出土位置

人形類の出土位置は棺の中だけではない。

湖雲寺跡遺跡（パスコ他 2021）1089 号は方形木棺墓で、人骨は検出されていないため被葬者は不明である。副葬品は土人形、かわらけ、碗他 20 点で土人形は棺内と掘方の双方から出土している。出土位置による用途の違いは不明だが、掘方から出土しているぶら人形 2 点、童女、鶏各 1 点と共に、呪符かわらけが出土している点は興味深い。サイズ、墨書が近似する呪符かわらけは、前述の同遺跡 454 号のほか、1046-3 号、1132 号でも確認されている（12 図）。『江戸庶民のまじない集覧』（長友 2020）では、同様の呪符が「狐狸の類に化かされぬ伝」として紹介されている。

さまざまな年齢層の墓から出土しているぶら人形だが、成人男性の墓から出土するぶら人形が、被葬者の持ち物とは考えにくく、呪符かわらけと共に出土する例からも、葬送の習俗に関わる用途を持つと考えるのが自然であろう。

（4）人形の埋葬

では、人形を埋葬する習俗には、どのようなものがあるのだろうか。

まず浮かぶのは友引の日の葬儀である。友引は「友を引く」とされ、葬儀を避けることが多いが、やむを得ず葬儀を行う場合は、身代わりとして棺に人形を入れる風習が、現代の葬儀でも残っている（あんしん葬儀葬優社 web サイト）。

「友引」が葬儀の忌日と意識されるようになったのは幕末頃とされている [(2)]。

当時、墓に入れる人形は、人形屋で売られていたよう

だ。京都の人形店清水家次右衛門が嘉永 6 年（1853）に出版した人形カタログ「ひな人形の故実」（上編 2004）には、埋葬用と考えられる人形について、以下のような記載がある。

[幸立人形]
人相果候はば土肌入とかうめ物あり。住古は六體地蔵にたとへ六銭入しが、人形師孝右衛門より此人形作り納といふ

挿絵がないため形状はわからないが、幸立人形とは、焼き物の棺に入れる人形のようだ。人形師幸右衛門とは、伏見人形の粗とされる伝説上の人物 (3) であることから、この人形は伏見人形と考えられる (4)。

伏見人形には友引人形と呼ばれる人形がある。5 人の子どもが一列に連なったモチーフで「子をとろ子とろ」遊びをしている子ども達を模しているといわれている。「子をとろ子とろ」は文化年間頃に流行った鬼ごっこ遊びで (5)、古くは「比々丘女」とよばれた（13 図）。この遊びの始めは、室町時代の仏教説話集『三国伝記』にあり、冥土で地蔵が獄卒から罪人を救う様子を遊びにしたもので、地蔵信仰に由来する遊びである（五来 2009、寒川 2003）。

大阪の七墓の一つである梅田墓の調査（大阪市文化財協会 2022）では、墓域中央の礎石建物掘方 SX75 から友引人形が出土している。また 19 世紀中葉の遺構に比定される中之島蔵屋敷（大阪市教育委員会 2012）からも、友引人形が出土しており、どちらも京都系の人形である。また法性寺跡（京都市埋蔵文化財研究所 2011）土坑 63 からは、幕末から明治の遺物とともに、伏見人形の型が大量に出土しており、その中には友引人形の型が含まれている。京都系以外の友引人形としては、和歌山城跡第 37 次調査 6 土坑からの出土がある（14 図）。胎土は橙色で産地は不明、手捻り成形で素朴な造形である。

関西で友引人形が出土しはじめるのは、19 世紀中葉以降であり、「友引」が葬儀の忌日と意識されるようになった時期とも矛盾しない。しかし、墓から直接出土した例は確認されておらず、製作当初から埋葬用の人形として製作されたとするには疑問が残る。

江戸では、友引人形と呼ばれる人形は確認されていない。当時もっとも一般的な人形であったぶら人形が、その役割を担うこともあったのだろう。

このほか、人形を埋葬する民俗例としては、寅の日の葬儀 (6)、同じ家から続いて二人の死者が出た場合、妊婦と胎児が共に死んだ場合、水死者の仮埋葬の場合、などがあり、人形を死者と共に埋葬する風習は各地にみられる（神野 1978）。

埋葬する人形は、友引人形に限らなかったようだ。おもちゃ絵画家の川崎巨泉は友引人形について「友引の日に子供の葬式を出さねばならぬ時に、此人形を棺の中に入れると云う。友引の日は葬式少なく淋しき故友達を入れてやると云うが、別に此人形でなくとも昔から其子供の手にしていた伏見人形を入れてやったものであるが、気の毒なのは此人形である」(7) と語っている。なかには藁打ち棒、横槌などを埋葬する例もあり (8)、友引禁忌のまじないと解釈されている（五来 2009）。

4. おわりに

人形は「偶像」「明器」「形代」(9) の役割に「玩具」としての役割を加えて誕生した複雑な性格を持っている（木立 2008）。本稿では詳細に扱うことはしないが、ミニチュア器物も同様に、ままごと道具等の玩具としてだけではなく、「明器」としての系譜をみることができる (10)。

副葬品としての人形・玩具は、玩具としての役割だけではなく、葬送の習俗との関わりからも、その役割を理解する必要がある。今後は京都、大阪と江戸など、地域による違いなどにも留意しつつ、副葬品としての人形・玩具の役割について検討を進めていきたい。

【註】

(1) ここで分析の対象とするのは土製品の人形・玩具であり、遺跡の立地により遺存状態が異なる木製品の人形・玩具は対象としない。

(2) 精選版日本国語大辞典（小学館国語辞典編集部編 2005）の「友引」の項では「民間暦でいう六曜の 1 つ。本来は相打ち、引き分けで勝負無し、良くも悪くもない日の意。幕末頃、方位の友引と混同し、他人の死を誘うといってこの日に葬礼をさける習慣がうまれた」とある。

(3) 鵜幸右衛門、通称「人形屋幸右衛門」。伏見人形の創始者とされるが異説も多い。歌舞伎の演目「天下茶屋」の登場人物にもなり、幸右衛門の銘のある偽作が多数作られた。

(4) 江戸時代から続く伏見人形窯元「丹嘉」の八代目、大西貞行氏からは「現在でも友引人形は扱っている。人形の型は昔から使っているものだが、丹嘉で作った型なのか、周囲の人形屋が廃業するときに譲り受けたものかは不明」とご教示いただいた。戦前まで伏見稲荷通りで友引人形、三つ竈を専門として作っていた人形製作者として「柴幸」と記

載があるが(奥村1976)、「幸立人形」との関連は不明である。

(5)「今童遊びに子とろ子とろといふ事をすめり。これいと古き事也。古へは比比丘女（ひふくめ）といへり。その始原は恵心僧都経文の意をとり，地蔵菩薩罪人をうばひ取給ふを，獄卒取かへさんとする体をまなび，地蔵の法楽にせられしより始れりといへり」(「子をとろ子とろ」 古事類苑遊戯部　洋巻　第 1 巻 P.1238)

(6) 昔トラの日に葬式を行ったところ火車に死体を取られたことに由来している（蒲生 1941)。

(7)『伏見人形の原型』中に、昭和 15 年に発行された「上方誌」「続郷土玩具号」所載の文章が再掲されている。

(8)「友引や丑の日など葬式を忌む日に式をせざるをえない場合には棺に藁人形を入れたり、年内に二度目の葬式を出す家では藁や土の人形、藁打ちの槌などを三人目の死者が出ないように副葬するという習俗」とある（新谷・関沢 2005 ）

(9) 精選版日本国語大辞典（小学館国語辞典編集部編 2005）によると、

ぐうぞう【偶像】

① 木、石、土、金属などで作った像。② 神仏にかたどり信仰の対象とする像。③（ 比喩的に）あたかも神や仏のように崇拝の対象となっているもの。

めいき【明器】

①（「明」は死者を神明にするの意）中国で死者とともに埋葬した器物。死者が生前使用していた器具や動物などの模型を木・泥・陶器・金属などで特製し、墓中に副葬した。唐以降は次第に衰退。② 中国の殷周時代に諸侯が王室から受け、子孫に伝えたとされる宝器の一種。日本では天皇の位の象徴であった三種の神器。また、そのように尊い器物。③ すぐれた人物。

かたしろ【形代】

① 祭祀の時、神体の代わりとして据えるもの。中国では、祖先をまつる時、祖霊の代わりに立ってまつりを受ける者をいう。ひとがた。② 陰陽師、神主などが、禊（みそぎ）または祈祷の時に用いる人形。③ 本物になぞらえるもの、または、人。身がわり。④ 事実として存在する物事。

(10) 奈良県橿原市沼山古墳（奈良県立橿原考古学研究所　1985)、滋賀県穴太飼込古墳群（滋賀県教育委員会他 2006）13 号古墳の石室内から竈、鍋など炊飯具のミニチュア土器が出土しているほか、奈良県奈良市秋篠阿弥陀遺跡（奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター 2021）では、16 世紀末から 17 世紀前葉の、木櫃を納めた火葬墓から竈、鍋などのミニチュア土器と犬形土製品が出土している。墓から出土するミニチュア器物については稿を改めたい。

【参考文献】

あんしん葬儀葬優社　https://www.anshin-funeral.com/blog/friend-doll/ （参照 2024-1-19)

池上本門寺奉賛会　2002『池上本門寺　近世大名家墓所の調査』

岩田重則　2003『墓の民俗学』吉川弘文館

江戸遺跡研究会　2024『江戸遺跡研究会第 36 回大会　近世都市江戸の墓』 資料集

大阪市教育委員会　2012『平成 22 年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市文化財協会　2022『大深町遺跡発掘調査報告Ⅱ』

奥村寛純　1976「四　伏見人形の伝説－人魚洞生」『伏見人形の原型』伏偶舎、丹嘉

株式会社パスコ、Great Eagle TokyoTMK　2021『湖雲寺跡遺跡』

蒲生　明　1941「民俗雑記」『民間伝承』民間伝承の会

加納　梓　1989「裸人形について」『江戸遺跡研究会会報』19 江戸遺跡研究会

上笙一郎編　2004「ひな人形の故実」p.210『日本の児童遊戯』クレス出版

神野善治　1978「人形の葬式」『西郊民俗』第 83 号

木立雅朗　2008「考古学から見た土人形の出現と展開」『関西近世考古学研究』16　関西近世考古学研究会

京都市埋蔵文化財研究所　2011『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-19 法性寺跡』

小林照子　2022「近世江戸遺跡における猫の土人形について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』15　東京大学埋蔵文化財調査室

近藤　修・左崇亜依子・石井理子・佐々木智彦・荒牧友美 2016「東京大学構内遺跡講安寺墓域（2 区／ HWK-6）より出土した江戸時代人骨」『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』研究編

五来　重　2009『葬と供養（上)』五来茂著作集第 11 巻 （株）宝蔵館

寒川恒夫　2003「鬼ごっこ「比々丘女」の起源に関する民俗学的研究」『遊びの歴史民俗学』明和出版

ジェイレックス・コーポレーション株式会社 2019『報恩寺跡（No.10 遺跡）

滋賀県教育委員会他　2006『穴太飼込古墳群』

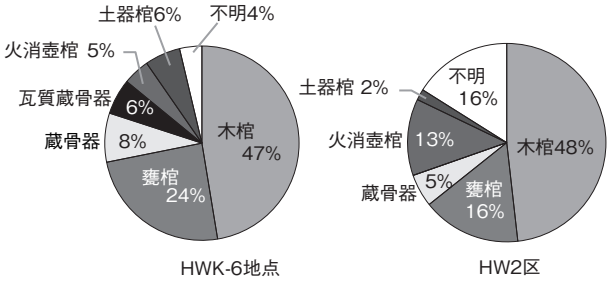
宗教法人明治神宮　2005『崇源寺・正見寺跡』

小学館国語辞典編集部編　2005『精選版日本国語大辞典』

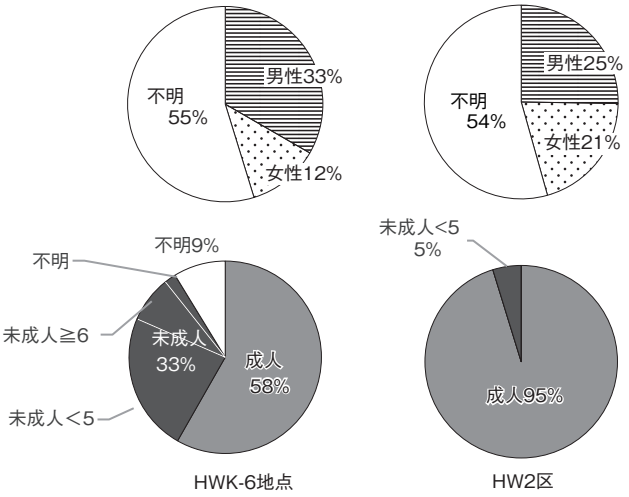
新谷尚紀・関沢まゆみ　2005『民俗小事典　死と葬送』

谷川章雄　2004「江戸の墓の埋葬施設と副葬品」『墓と埋葬と

江戸時代』吉川弘文館
東京大学埋蔵文化財調査室　2016『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院入院棟 A 地点』 報告編　第 5 分冊
東京都港区教育委員会　1986『港区三田済海寺　長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書』
長友千代治　2020『江戸庶民のまじない集覧』p.224 勉誠出版
中山なな　2017「近世墓にみる江戸の子どもの生と死」早稲田大学リポジトリ
奈良県立橿原考古学研究所　1985『沼山古墳増田池堤』奈良文化財調査報告書第 48 集
奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財調査センター　2021「奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料 68：ミニチュア品を副葬した墓見つかる」
ハウジングトラスト株式会社 2019『宝泉寺跡Ⅳ』
八丁堀三丁目遺跡（第 2 次）調査会　2003『八丁堀三丁目遺跡Ⅱ』
森　謙二　1993『墓と葬送の社会史』講談社
柳田国男　2021『葬送習俗辞典』河出書房
和歌山市文化スポーツ振興財団　2020『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報－平成 30 年度（2018 年度）』

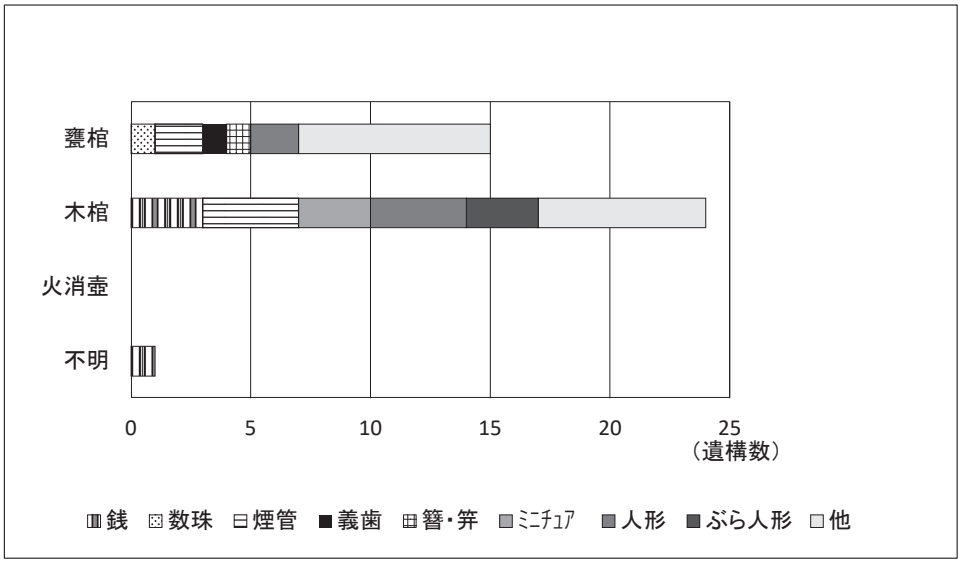


1図　埋葬施設割合

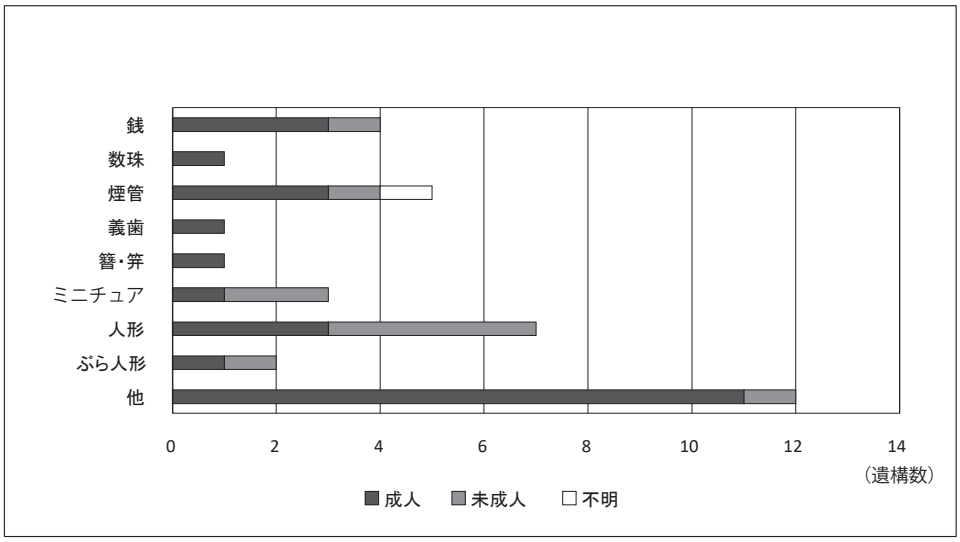


2図　被葬者年齢性別割合

3図　被葬者年齢分布

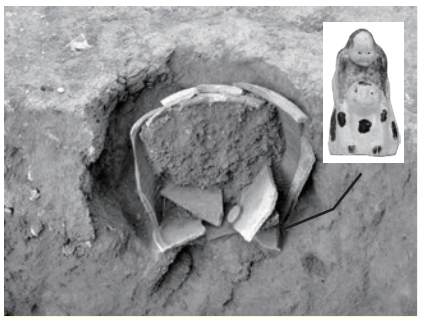


4図　HWK-6、HW2区埋葬施設別副葬品出土割合

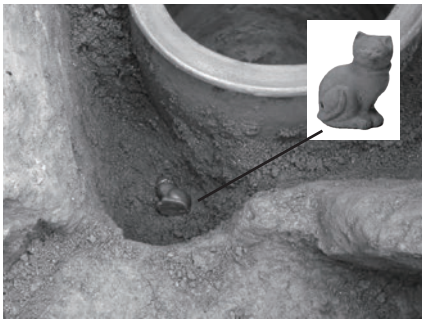


5図　HWK-6、HW2区年齢別副葬品出土割合

HWK-6地点　ST176



HWK-6地点　ST27



HW2区　ST2584

6図　副葬品出土状況

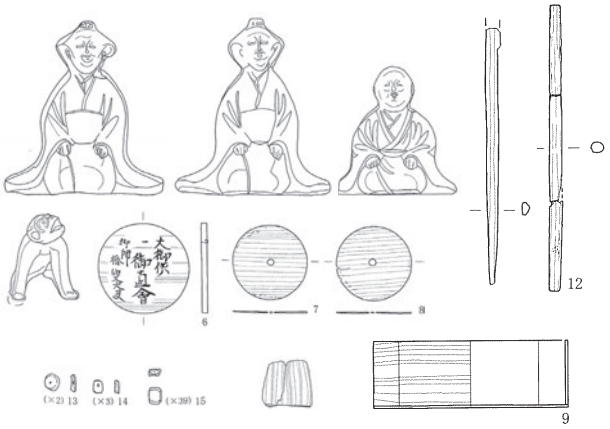
17 世紀前葉～後葉

八丁堀三丁目遺跡 614 号墓

18 世紀前葉

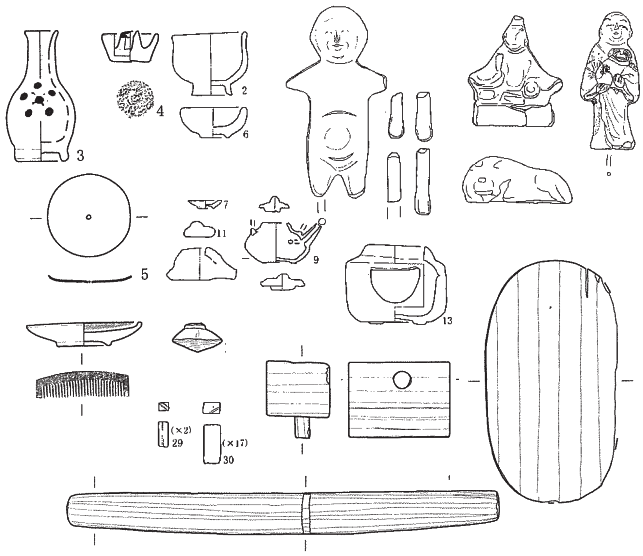
池上本門寺細川家清高院殿墓所

18 世紀中葉～後葉



正見寺 589 号

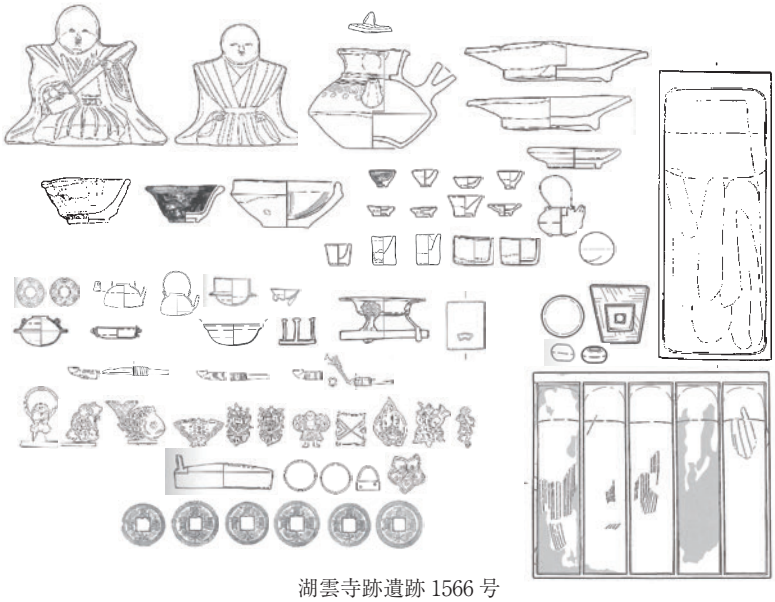
18 世紀後葉～ 19 世紀前葉



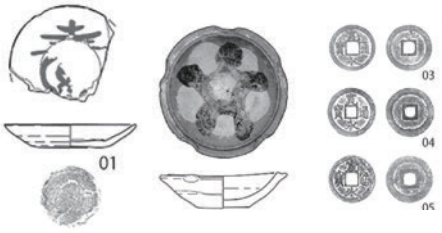
崇源寺 346 号

19 世紀前葉～幕末

宝泉寺 117-2 号

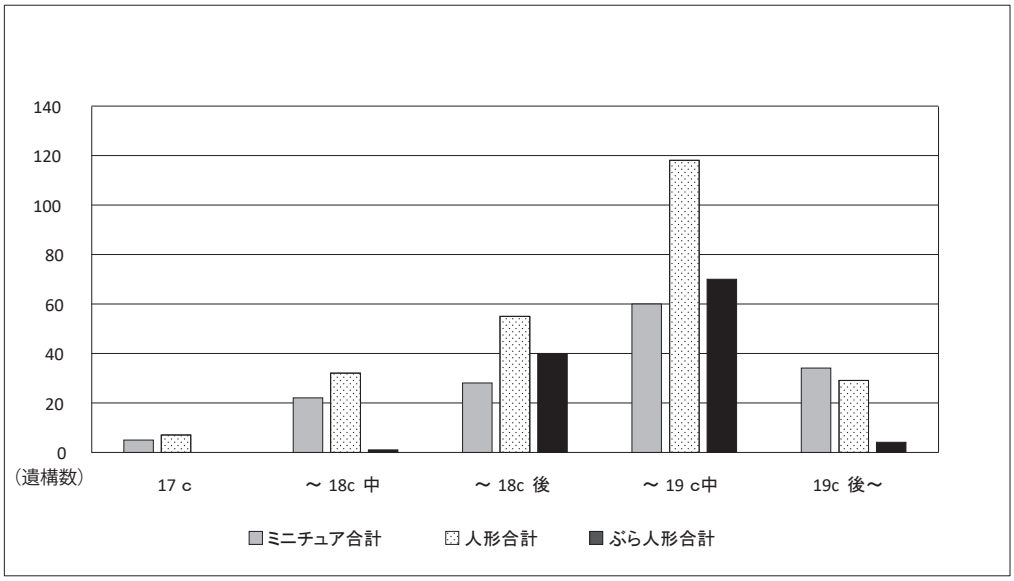


湖雲寺跡遺跡 1566 号

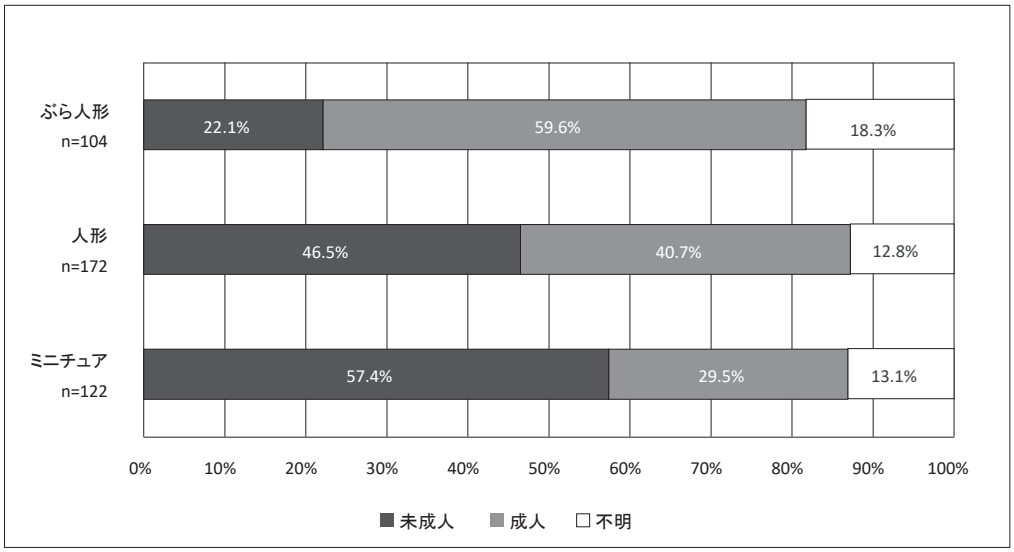


湖雲寺跡遺跡 454 号

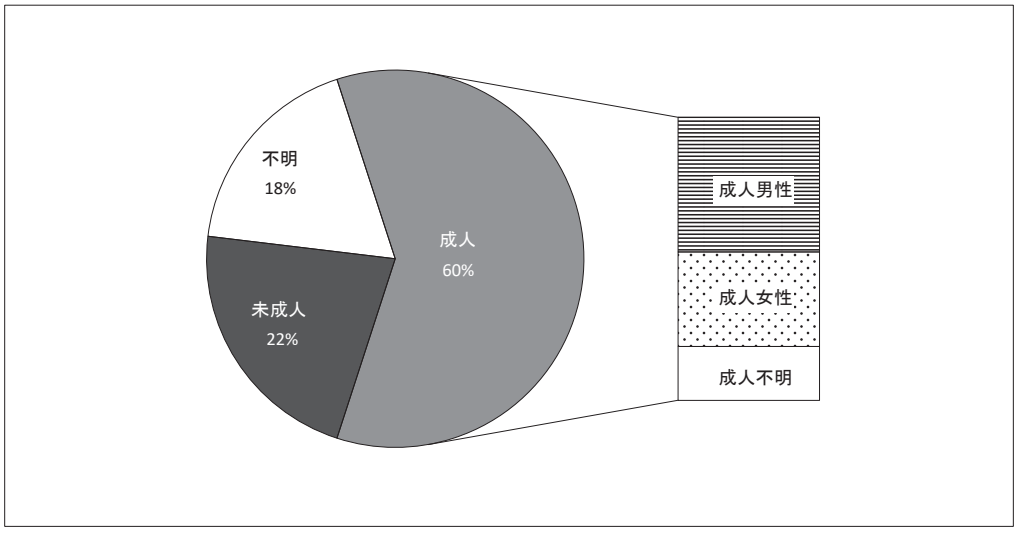
7 図　時期別副葬品出土例（S=1/4）



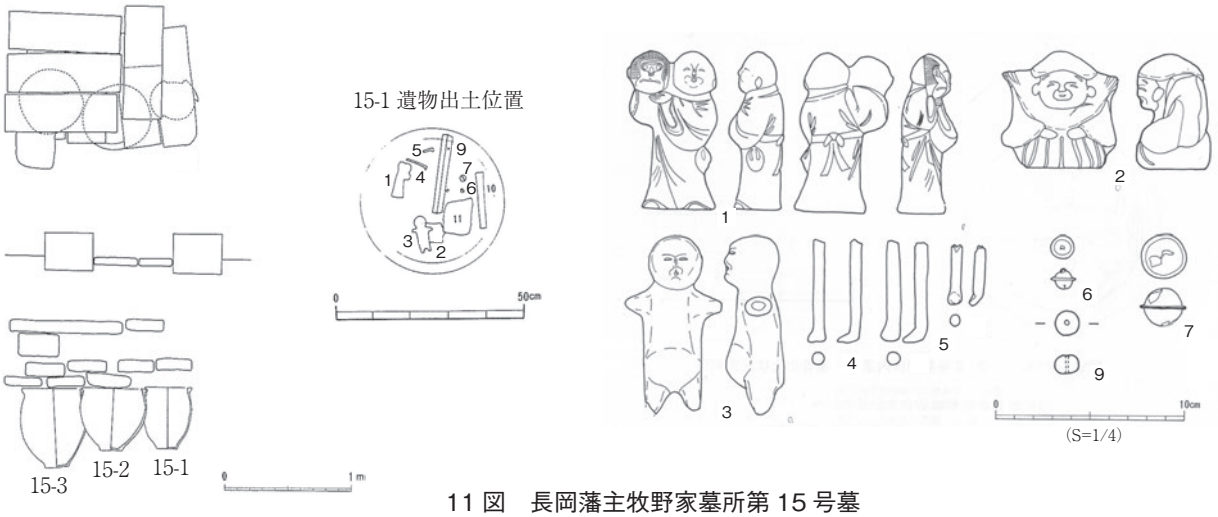
8図　時期別出土割合



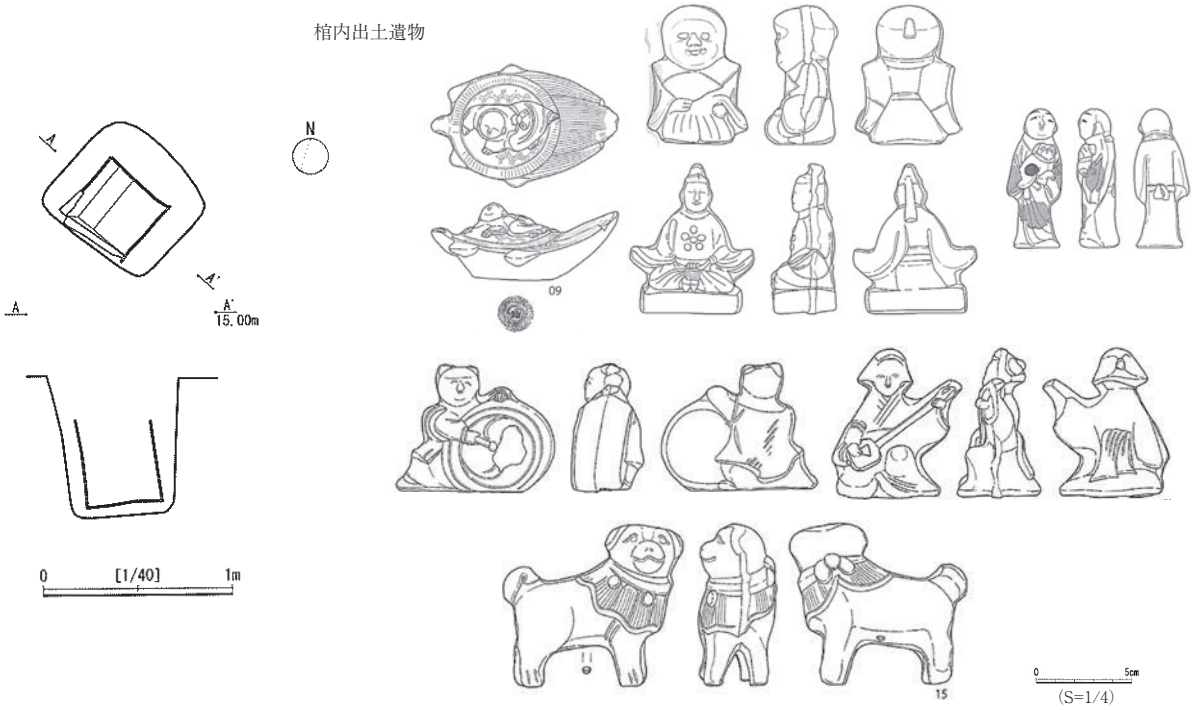
9図　年齢別人形、ぶら人形、ミニチュア出土割合

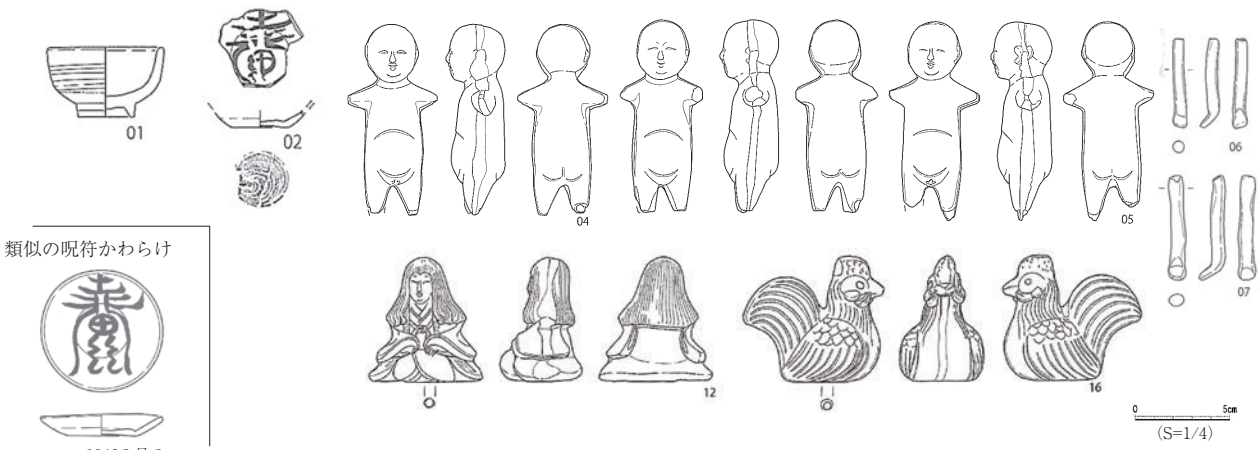


10図　ぶら人形　出土年齢比



11 図　長岡藩主牧野家墓所第 15 号墓





12図　湖雲寺跡遺跡1089号

山東京伝『骨董集』「比々丘女図」
京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

広重「幼童遊び子をとろ子をとろ」（1、2を連結）
国会図書館デジタルコレクション

13図　比々丘女（左）、子とろ子とろ（右）

大深町遺跡SX75（筆者撮影）

中之島蔵屋敷跡（筆者撮影）

法性寺跡土坑63（筆者撮影）

和歌山城跡第37次調査6土坑

14図　遺跡から出土した友引人形

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき　いがくぶふぞくびょういんきかんせいびがいこうしせつなどちてん
書　名	東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院基幹整備外構施設等 地点
副書名	
巻　次	
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書
シリーズ番号	20
編著者名	成瀬晃司(編)、追川吉生、大貫浩子、小林照子、宮崎勝美、近藤　修
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1　駒場リサーチキャンパス内 TEL：03-5452-5103
発行年月日	令和6年9月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	所在地	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
とうきょうだいがくほんごうこうないの 東京大学本郷構内の いせき　いがくぶふぞくびょういん 遺跡　医学部附属病院 きかんせいびがいこうしせつなどちてん 基幹整備外構施設等地点	とうきょうと　ぶんきょうく 東京都　文京区 ほんごう 本郷 7ちょうめ　3ばん　1ごう 7丁目 3 番 1 号	13105	47	35° 42′ 40″	139° 46′ 01″	2000/9/11 ～ 2000/11/14	200㎡	医学部附属病院基幹整備外構施設等新営に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東京大学本郷 構内の遺跡 医学部附属病院 基幹整備外構施 設等地点	屋敷 寺院	近世 近代	近世(屋敷地) 建物跡2基、厩跡1基、 溝1基、土坑46基、 地下室10基、 小穴26基 など 近世～近代(寺院) 土坑47基、 墓壙127基、 小穴6基 など	近世 陶磁器、土器、瓦、 金属製品、銭貨、石 製品、ガラス製品、 貝骨製品 近代 陶磁器、土器、金属 製品、石製品、木製 品、ガラス製品、貝骨 製品、石製墓標	講安寺から借地した富山藩邸詰人空間の土地利用変遷と、返却後の幕末から明治末にかけて講安寺から借地した興安寺及び等正寺墓地の被葬者相を含む墓地形態の様相差が確認された。

要　約	本地点は、江戸時代から明治末まで講安寺境内に比定されるが、元禄3年から弘化3年頃までは、富山藩が借地していた場所に該当する。その結果、富山藩邸に関する建物跡、厩跡、地下室が検出され、藩邸内で役所空間から勤番武士居住空間へ変遷していくことが確認された。地下室は約3m間隔で南北に分布する様相を示すことから、南北方向に延びる長屋の存在が推定される。 また弘化5年から富山藩借地場所の一部を興安寺・等正寺が墓地として明治43年まで借地した。それを反映する3種の主軸を有する墓域群が検出され、埋葬施設、人骨分析、文献調査より各々の墓地域の特性が看取された。

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 20

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院基幹整備外構施設等地点

2024 年 9 月 30 日発行

編集・発行　東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 － 6 － 1
https://www.aru.u-tokyo.ac.jp

印　刷　明誠企画株式会社